頭註 國譯本草綱目

第四册

春陽堂藏版

原著　明　李時珍

監修・校註　理學博士　白井光太郎

顧問　木村博昭

考定　理學博士　牧野富太郎

考定　理學博士　脇水鐵五郎

考定　岡田信利

考定　矢野宗幹

考定　木村康一

譯文　鈴木眞海

頭註國譯本草綱目第四册例

一、本册には本草綱目草部第十二卷山草類、第十三卷山草類、第十四卷芳草類までを收載した。

一、校訂並に病名・術語の註解は凡て監修白井光太郎博士親ら擔當執筆されたものである。

一、藥名標目下の和名・學名・科名の考定は牧野富太郎博士が擔當執筆されたものである。

一、和名・學名・科・屬の東西學說異同に關する考證に就ては、白井・牧野兩博士いづれも署名して鼇頭に執筆された。

一、氣味・主治、即ち成分・應用等生藥學に關する考定註解は凡て木村康一氏の執筆に成つたもので、亦一一署名してその責任を明にされてある。

同氏註解の引用文獻は左の略號に從つた。

藥誌……………藥學雜誌

慶醫…………慶應醫學
東醫…………東京醫學會雜誌
日本藥物……日本藥物學雜誌
臨床…………臨床醫學
朝醫…………朝鮮醫學會雜誌
京藥誌………京都藥學專門學校雜誌
京醫…………京都醫學雜誌
化誌…………日本化學會誌(東京化學會誌)
朝鮮試………朝鮮總督府中央試驗所報告
臺醫…………臺灣醫學會雜誌
日新醫………日新醫學
東京醫事……東京醫事新誌
千醫…………千葉醫學會雜誌
臺研…………臺灣總督府中央研究所報告

工化…………工業化學會誌

一、本册以下第五・六册草部、第七册穀部・菜部・第八册果部・木部・第九册木部に亙る植物部の校訂註解はすべて右の例に因る。

昭和四年九月二十五日

鈴木眞海記

頭註國譯本草綱目　第四册

目次

本草綱目草部第十三卷

本草綱目草部第十四卷

芳草類

本草綱目草部

第十二巻

本草綱目草部目錄第十二卷

李時珍曰く、天の創造と地の化育とに由つて草、木なるものがここに生ずるのであつて、剛が柔に交つて根と(一)荄との質が成立し、柔が剛に交つて枝と(二)幹との質が成立し、また葉と(三)萼とは陽の性に屬し、華と實とは陰の性に屬するものであるこれ等の關係がそのものに現るる差異、程度に從つて、自ら草の中にも木に近いものもあり、木の中にも草に近いものもあるのだが、そのいづれを問はず、そのものの本來の特質の中心たるべき天然に稟くる氣の最も純粹中正なものが良となり、その氣の純粹中正ならざるものが毒となるのである 而してそれ等良、毒の特異はそのものの有する如何なる條件に據つて現れてゐるかといへば、それは五形――金、木、水、火、土――となつて現れてゐる。五氣――香、臭、臊、腥、羶――となつて現れてゐる。五色――青、赤、黄、白、黑――となつて現れてゐる。五味――酸、苦、甘、辛、鹹――となつて現れてゐる。五性――寒、熱、温、涼、平――となつて現れてゐる。五用――升、降、浮、沈、中――となつて現れてゐるのである。炎帝神農氏は實驗の基礎に立つ

(一)荄ハ草根ヲ云フ。
(二)傍出ヲ枝ト云ヒ、本體ヲ幹ト云フ。
(三)萼ハ花瓣ノ外部ニアリ、數片輪生スルモノ。

て之を識別した。黃帝、岐伯はその基礎に據つて理論的に推究し宣揚した。更に漢、魏、唐、宋の各時代に輩出した博識明哲の良醫大家がそれぞれの識見と實驗とを之に加へたので、斯學の內容はますます開展し增大されて來たのである。けれどもそれだけに神農當時に設けた三品の區分は僅に形骸を遺すだけとなつて、品級は(四)淄澠交混し、記載の諸條項が重複するやうになつたために、事實は(五)涇渭分たざるの有樣となつてゐるのである。しかし苟もそのものの事實に就いての精緻を詳察し、善惡を審悉にするにあらずんば、いかで(六)七方、十劑の調制を的正にして、貴重なる生命を托することが出來やうぞ　この意味から、ここに繁冗なるものは剪り、重複せるものは除き、誤謬の點は正し、遺漏せるものは補ひ、族と類とを明に區別して綱と目とを整然と配列し、穀と菜とに屬するものは除外して、凡そ草に屬するものにして醫藥に供し得るもの六百十種を擧げ、これを山草、芳草、隰草、毒草、蔓草、水草石草、苔草、雜草、有名未用の十類に別けて記述することとした。(七)舊本には草部上、中、下三品共四百四十七種あるが、今はその三十一種をそれぞれの條下に併入して、二十三種は菜部に移入し、三種は穀部に、四種は果部に、二種は木部に入れ、また木部から十四種をこの部に併入し、蔓草の二十九種中に菜部から十三種を併入し、果部から四種を併入し、外類、有名未用共二百四十七種とした。

(四) 淄ハ淄水、山東省萊蕪縣ニ源ヲ發シテ清水泊ニ注グ。澠水ハ山東省臨淄縣ノ西北臨大湖ニ入リ、更ニ清水泊ニ通シテ終ニ海ニ入ル。二水味異ナレドモ合スレバ則チ辨ジ難シトイフ。

(五) 涇ハ涇水、渭ハ渭水、水部甘露蜜、金部金、諸鐵器ノ註ヲ見ヨ。涇ハ濁リ、渭ハ清ム。以テ清濁ノ喩トス。

(六) 七方十劑ノ解說、本書第一卷上ニ見ユ。

(七) 舊本ハ證類本草ヲ指ス。

此處ニ註スル移入併入ノ數字ヲ合計スルモ、草部六百十種ノ數ニ合セズ。頗ル疑フベシ。

神農本草經一百六十四種 梁の陶弘景註。
名醫別錄一百三十種 陶弘景註。七十八種は有名未用。
李氏藥錄一種 魏の李當之。　吳氏本草一種 魏の吳普。
唐本草三十四種 唐の蘇恭。　藥性本草一種 唐の甄權。
本草拾遺六十八種 唐の陳藏器。　食療本草二種 唐の孟詵。
海藥本草四種 唐の李珣。　四聲本草一種 唐の蕭炳。
開寶本草三十七種 宋の馬志。　嘉祐本草十七種 宋の掌禹錫。
圖經本草五十四種 宋の蘇頌。　日華本草七種 宋人大明。
用藥法象一種 元の李杲。　本草補遺一種 元の朱震亨。
本草會編一種 明の汪機。　本草綱目八十六種 明の李時珍。

附註

宋雷斅炮炙論　北齊徐之才藥對　唐楊損之刪繁　唐孫思邈千金
蜀韓保昇重註　南唐陳士良食性　宋寇宗奭衍義　唐愼微證類
陳承別說　金張元素珍珠囊　元王好古湯液　吳瑞日用

明汪頴食物　王綸集要　陳嘉謨蒙筌　憲王救荒
寗原食鑑

草の一　山草類上三十一種

甘草 本經　黃耆 本經　人參 本經　沙參 本經　薺苨 別錄
桔梗 本經　長松 拾遺　黃精 別錄　萎蕤 別錄 鹿薬、委蛇を附す。
知母 本經　肉蓯蓉 本經　列當 開寶　瑣陽 補遺　赤箭天麻 本經
朮 本經　狗脊 本經　貫衆 本經　巴戟天 本經 巴棘を附す。
遠志 本經　百脈根 唐本　淫羊藿 本經　仙茅 開寶　玄參 本經
地榆 本經　丹參 本經　紫參 本經　王孫 本經　紫草 本經
白頭翁 本經　白及 本經　三七 綱目

右附方　舊八十六　新二百六十

草の一　山草類三十一種

甘草（本經上品）

和名　かんざう、(一)南京かんざう
學名　Glycyrrhiza glabra, L. var glandulifera, Reg. et Herd.
和名　かんざう、福州かんざう
學名　Glycyrrhiza echinata, L.
和名　かんざう
學名　Glycyrrhiza uralensis, Fisch.
科名　まめ科（荳科）

釋名　**蜜甘**（別錄）　**蜜草**（別錄）　**美草**（別錄）　**遊草**（別錄）　**靈通**（記事珠）　**國老**（別錄）　弘景曰く、この草はあらゆる藥の中心となつて居るともいひ得るもので、凡そ(二)經方でこれを用ゐぬものは殆とない。恰も香の中に於ける沈香の地位のやうなものである。國老とは(三)帝王の師たるものの稱號で、君主そのものでこそないが、君主のために最も重ぜられ寄托せられるところであつて、それが恰もこの甘草の地位に相當するといふのである。よく草、石諸藥の力を安配し調和して諸種の毒を解するものである。甄權曰く、諸藥の中でも甘草は君の地位にあるもので、七

(一)甘草名ノ南京、福州ハ產地ノ意ニ非ズ、之ヲ本邦ニ輸齎セシ支那船ヲ意味スルモノナリ。

(二)經方トハ藥性處方ノ學。

(三)帝王ノ顧問。治ヲ治メシテ而モソノ功ヲ君主ニ歸ス。

十二種の(四)乳石の毒を治し、一千二百般の草木の毒を解し、はらゆる藥を調和するの功があるところから國老なる稱號を得たのである。

集解　別錄に曰く、甘草は(五)河西の川谷、(六)積沙山、及び(七)上郡に生ずる。二月、八月の末日に根を採收し、十日間曝乾して藥品となるのである。陶弘景曰く、河西、上郡は(八)現今では通商の途が絕えたので蜀、漢地方から出るが、それは悉く(九)汶山方面の諸蠻夷地方から來るものである。皮が赤く(一〇)斷理で一見堅く實してゐるものは枹罕草といふ、最佳品である。(一一)枹罕とは西羌中の地名である。曝乾したものばかりでなく火で炙り乾したものもあるが、それは理が多く虛して疎で實して居らぬ。又、鯉魚腸のやうなものもあるが、それは刀で截り破られてあるものだから好ましくない。(一二)靑州にもあるが西羌地方のものには及ばない。又、(一三)紫甘草といふがある。これは細かでよく實してゐるもので、甘草の手に入れ難い場合などにはこれを用ゐるもよし。

蘇頌曰く、今の陝西、(一四)河東の州郡のいづれにもある。春靑苗を生じ、高さは一二尺、葉は槐葉のやうだ。七月に(一五)柰に似た紫の花が咲き、冬に入つて(一六)角の

(四)乳石ノ乳ハ石鍾乳。石ハ石藥ノ總稱。
(五)河西、又ハ河右トモイフ。陝西省ノ北部、甘肅省東北部、蒙古ノ一部、賀蘭山以東、黃河以西ノ地ヲ指ス。
(六)積沙山トハ積石山ヲ指スカ。積石山ハ古ノ枹罕ノ地、即チ今ノ甘肅省蘭州ト西寧トノ中間黃河ノ北ニ在リ。
(七)上郡ハ陝西省北端今ノ楡林河ノ傍近ヲイフ。
(八)現今トアルハ陶氏ノ時代ナレバ凡西暦五〇〇年乃至五五〇年ノ當時ナリ。
(九)汶山ハ今ノ四川省茂縣ノ附近一帶ヲ指ス。石部光明鹽ノ註參照。
(一〇)斷理トハ木理ノ横ニ分離スルヲ云フ

(一一)枹罕ハ漢時代ノ縣名。今ノ甘粛省南隅、大夏河北岸ニ在リ。陶氏當時ハ羌族ノ領ニ屬シ洮水以西、積石山ニ至ル一帶ヲ枹罕ト總稱ス。枹ハ鐵ノ如クニモ讀ム。
(一二)青州ハ水部非泉非ノ註ヲ見ヨ。
(一三)紫甘草、福州甘草ヲ指スモノナラン。甘味南京甘草ニ劣ル。
(一四)河東ハ今ノ山西省ノ地ヲ指ス。
(一五)柰ハ林檎ノ類ナレバ荳科ノ花ニ似ズ。此文疑フ可シ。
(一六)角ハ莢(サヤ)。
(一七)畢豆ハ豌豆ノ別名。
(一八)木村(康)曰ク、横梁ハ横臥セル根莖ヲ指ス。
(一九)蘆頭ハ一般ニ根莖又ハ根ノ頭部莖葉

ある(一七)畢豆のやうな實を結ぶ。根は長さは三四尺もあり粗細一定せず、皮は赤色で上部に横梁があり、その(一八)梁の下が皆細根になつてゐる。採收したものは(一九)蘆頭と赤皮を取り去つて陰乾して用ゐる。現今の甘草には數種あるが、堅く實して(二〇)斷理のものが佳く、輕虛で縱理のものや細くして靭強なものは用ゐるに堪へない、これは(二一)貨湯家だけが用ゐて居る。謹て按ずるに、爾雅に『(二三)蘦は大苦なり』とあり、郭璞は『蘦は地黄に似たり』と註し、又『(二二)詩の唐風に、苓を采り苓を采る、首陽の巓とあるがこれだ』といふ。蘦と苓とは文字が通用する。その首陽の山の所在は河東の(二四)蒲坂縣だから今の甘草の產地と相近いのであるが、往時の學者がいふところの苗や葉は今のものと全然別である。これは或は甘草の種類にも同じからぬものがあるのかも知れない。

〔甘　草〕

李時珍曰く、按ずるに、沈括の筆談に『本草の註に、爾雅の蘦大苦の註を引用して甘草だとしてあるが、それは誤である。郭璞の註は、(二五)黄藥のことをいつたもので、黄藥は味が極めて苦いものだから大苦といふのである。甘草ではない。甘草は枝葉悉く槐のやうで高さは五六尺に達し、ただ葉の端が微に尖つて糙澁のやうな白毛があるかに見え、結實はさやになつて相思のさやのやうに一本に生り、熟すればそのさやが裂けて子が出る。その子は小豆のやうに扁平で極めて堅く、齒で嚙んでも破れない。現に河東の西部地方に産する』とある。寇氏の衍義はやはりこの沈括の説を採用したが、大苦は甘草のことでないとは斷言してない。しかし、これ等の諸説を事實の上から推斷するに、郭璞の説はその形狀に於て一向に類似點がない。沈括の説が正しい樣である。今は一般に大さ徑一寸ほどの堅く實して斷理のものの みが佳品とされ、粉草と呼ばれて居る。輕虚で細小なものはいづれもそれに及ばない。劉績の霏雪錄には『(二六)安南の甘草には柱のやうな大さのものがあつて、その地の人民はそれを用ゐて家屋を構築する』とあるが、果してそれが事實かどうか判らない。

ヲ生スル所ヲ云フ。
(二〇)木村（康）曰ク、斷理ハ質堅ク充實セル爲メ破折スレバ理ヲ斷ツ。即チ横斷シ易キヲ云ヒ、縱理トハ質粗、鬆ニシテ纖維性著シキタメ破折スレバ縱裂スルモノヲ云フノナラン。
(二一)貨湯家ハ湯ヲ貨ル家ナリ。本邦ノ水茶屋ノ如キモノ。
(二二)甘草ヲ苓ニ充ツルハ爾雅邢昺ノ説ナリ。
(二三)詩トハ五經ノ一詩經ヲ指ス。
(二四)蒲坂縣ハ今ノ山西省ノ南端永濟縣ナリ。首陽山ハ蒲坂縣ノ南方ニ在リ。
(二五)黄藥子、本書十八巻ニ説アリ。又植物名實圖考二十巻ニ圖説アリ。
(二六)傳聞ノ誤ナリ、

甘草ニ此ノ如キ巨大ノモノナシ。

(二七)牛羊ノ乳ヨリ製シタル油。

(二八)長流水、河水。

(二九)漿ハヤズノコト。

(三〇)中ヲ補フトハ內臟ヲ強クスルコト。

(三一)火ヲ瀉スルハ熱ヲ去ルコト。

(三二)木村(康)曰ク、成分ハグリチリチン酸(甘味質)蔗糖、葡萄糖、アンニツト、林檎酸、アスパラギン等ヲ含有ス。

根【修治】雷斅曰く、凡そこれを用ゐるには頭、尾の尖つた部分は取棄てねばならぬ。その頭、尾を服すれば吐くものだ。修治には先づ長さ三寸づつに切つて六七片に裂き、甆器に入れ酒に浸し午前十時から正午まで蒸し、取出して暴乾し、細かに剉んで用ゐるのである。また一法では、一斤づつに(二七)酥七兩を用ゐ、その酥が盡きるまで幾囘も塗つて炙る。また別法では、先づ內外共に赤黃になるまで炮いて用ゐる。時珍曰く、方書にある炙甘草は、いづれも(二八)長流水にひたし濕して炙り、熟してから赤皮を刮り去るか、或は(二九)漿水を用ゐて炙熱することになつて居る。酥で炙り、酒で蒸すといふはないことだ。大抵(三〇)中を補ふには炙つたものが適し、(三一)火を瀉するには生のものが適する。

(三二)【氣味】【甘し、平にして毒なし】寇宗奭曰く、生のものは微涼で味が佳くない。炙いたものは溫である。王好古曰く、氣は薄く、味は厚く、升にして浮であり、陽であつて足の太陰、厥陰の經に入る。時珍曰く、手、足の十二經のいづれにも入るものである。○徐之才曰く、朮、苦參、乾漆が使となる。遠志を惡み、大戟、芫花、甘遂、海藻と反す。權曰く、豬肉を忌む。時珍曰く、甘草と海藻、大戟、

(三三)胡洽ハ南朝宋ノ人、經驗方ヲ著ス。(三四)痰癖ハ病源候論ニ、飲水未ダ散セズ胃府ノ間ニアルニ寒熱ノ氣ニ遇フニ因テ相搏チ沈滯シテ痰ト成也。痰又停聚シテ脇肋ノ間ニ流移シテ時ニ痛アリ、卽チ之ヲ痰癖ト云フ。(三五)十棗湯ハ芫花、甘遂、大戟、大棗ト四物ノ合劑ナリ。(三六)古方上古ヨリ漢代迄ノ醫方。(三七)木村(康)曰ク、甘草ハ洋方ニテハ內用ニハ緩和藥、矯味藥、賦形藥トナシ、藥局方ニ於テハ複方甘草散、ゴム散、甘草越幾斯ヲ製スルニ用ウ。又本邦ニ於テハ醬油ニ甘味ヲ附スルニ消費セラル。(三八)金瘡ハキリキ

甘遂、芫花の四物とは相反するものであるが、しかし、(三三)胡洽居士の(三四)痰癖を治する(三五)十棗湯には甘草、大黃を加へてある。これは痰の膈上に在るものを通泄せしめてその病根を拔き去る目的なのである。東垣李杲の項下結核を治する消腫潰堅湯には海藻を加へ、丹溪朱震亨の勞瘵を治する蓮心飮には芫花を用ゐ、この二方も倶に甘草が加はつてゐる。これも皆胡居士と同一の目的に出でたものだ。故に陶弘景も『(三六)古方にも相惡、相反のものを用ゐていづれも害とならぬものがある』といつてある。藥に關して微妙の點まで研究し精通したものでなければ、この間の理致を知ることは不可能である。

(三七)**主治**　【五臟、六腑の寒熱、邪氣。筋骨を堅くし、肌肉を長じ、氣力を倍す。(三八)金瘡、尰の解毒。久しく服すれば身體を輕快にし、天年を延べる】(本經)尰の發音は時勇の切、腫(シユウ)である。【中を溫め、氣を下す。煩滿、短氣、臟を傷めた欬嗽。渴を止め、經脈を通じ、血氣を利し、あらゆる藥の毒を解す。(三九)九土の精であつて、七十二種の石、一千二百種の草を安配し調和する】(別錄)【腹中の冷痛に主效があり、驚癇を治し、腹脹滿を除き、五臟、腎氣の內傷を補益し、陰痿をなさしめず、

婦人の（四〇）血瀝腰痛に主效がある。一般に虛して熱多きものにこれを加へて用ゐる】（甄權）【魂を安んじ、魄を定め、五勞、七傷、一切の虛損、驚悸、煩悶、健忘を補し、九竅を通じ、（四一）百脈を利し、精を益し、氣を養ひ、筋骨を壯にする】（大明）【生を用ゐれば火熱を瀉し、熟を用ゐれば表寒を散じ、咽痛を去り、邪熱を除き、正氣を緩にし、陰の血を養ひ、脾、胃を補し、肺を潤す】（李杲）【肺痿の膿血を吐し、（四二）五發瘡疽を消す】（好古）【小兒の胎毒、驚癇を解し、火を降し、痛を止める】（時珍）

梢　主治　【生で用ゐれば胸中の積熱を治し、莖中の痛を去る。酒で煮た玄胡索、苦楝子を加へるが尤も妙である】（元素）

頭　主治　【生で用ゐればよく足の厥陰、陽明二經の汚濁の血を行り、腫を消し、毒を導く】（震亨）【癰腫に主效がある。吐藥に入るるに適する】（時珍）

發明　震亨曰く、甘草は味甘くして大に火の諸種の烈しき作用を緩にする（四三）黃中、通理、厚德、載物の君子である。この藥の功力を下焦に達せしめやうとするには（四四）梢子を用ゐるがよい。

杲曰く、甘草は氣が薄く味が厚く、升すにもよし降すにもよし、陰中の陽である。

ズ。癰ハ腫物。

（三九）九土ハ九州、即チ支那全國ヲ云フ。精ハ地產ノ精粹ナルヲ意味ス。

（四〇）血瀝腰痛ハ留血ノ腰間ニ滯ルモノ。

（四一）百脈トハ血管系統。

（四二）五發ハ發背、發腦、發髮、發眉、發頤、是ナリ。

（四三）黃ハ地ノ色。五行ニ配スル時ハ地ハ中央ナリ。故ニ黃中ト云フ。甘草ノ地下莖及ビ根ノ內部ガ黃色ナルヲ以テ斯ク云フ。通理ハ甘草ノ木理ノ通直ナルヨリ其藥性ヲ推察スルナリ。厚德、載物ハ地德ニ比例スルナリ。

（四四）梢子ハ地下莖ノ末端部。

陽の不足のものを補ふには甘を以てするものであつて、甘、溫は能く大熱を除くものである。故に、甘草を生で用ゐれば平なるその氣が脾胃の不足を補つて大に心火を瀉し、炙つて用ゐれば溫なるその氣が三焦の元氣を補つて表の寒を散じ、邪熱を除き、咽痛を去り、正氣を緩にし、陰血を養ふものである。凡そ心火が脾に乘じて腹中が急痛し、腹皮が急縮するには、甘草の量を倍にして用ゐるがよい。それは甘草の性は能く急を緩にし、且つ諸藥を協和して抗爭的な働(はたら)きを起させぬものだからである。かやうな次第で、熱藥は甘草と合すればその熱を緩にし、寒藥が甘草と合すればその寒を緩にし、寒、熱相雜(まじは)るものにこれを用うればその平衡(へいこう)を得せしむるものである。

○○好古曰く、五味の作用は、苦は泄し、辛は散じ、酸は收し、鹹は(四五)斂(れん)し、甘は(四六)上行して發するものである。而るに本草に『甘草は氣を下す』とあるは一見矛盾(むじゆん)したことのやうであるが、蓋し甘なる味は中庸を主るものであつて、自らその働には升もあり、降もあり、浮も沈もあつて、上ともなり、下ともなり、外にも內にもよく、調和する働きがあり、緩ならしむる働きがあり、補の作用もあり、泄の作用

(四五)斂ハ收斂スルコト。

(四六)上行ハ上部ニ運行スルコト。

（四七）上ヲ侵スハ胸隔以上ニ及フコト。
（四八）下ニ赴クハ大小腸ニ作用スルコト。
（四九）中滿ハ肥滿スルコトナラン。

もある。實に中庸の理致內容を完備して居る。故に張仲景が附子理中湯に甘草を用ゐたのは、藥力が竊に（四七）上を侵さんことを慮つたためであり、調胃承氣湯に甘草を用ゐたのは、藥力の急激に（四八）下に赴くことを慮つたためであつて、いづれもその目的は緩の作用の應用にある。小柴胡湯には柴胡、黃芩の寒なるものと人參、半夏の溫なるものを入れてあつて、それに甘草を加へ用ゐた目的は調和の作用の應用にある。建中湯に甘草を用ゐてあるのは、甘草の力で中を補ひ脾の急を緩にせんためである。鳳髓丹に甘草を用ゐてあるは、それで腎の急を緩にし、元氣を生ぜんがためであつて、甘を以て補はんとするが目的である。○又曰く、甘なるものは之を服すれば（四九）中滿せしめるものだ、故に中滿せるものは甘を食つてはならぬ。甘は緩にして氣を塞ぐものだから中滿のものには不適當なのであつて、一般に滿せぬものの場合に炙甘草を用ゐれば補を發揮し、中滿するものの場合に生甘草を用ゐれば瀉を發揮し、よく諸藥を導いて滿する箇所へ直接に效を及ばしめるものである。甘味が脾に入るはその性の喜ぶ所に歸するのであつて、以上は升、降、浮、沈の必然の關係である、經に『甘を以て之を補ひ、甘を以て之を瀉し、甘を以て之を緩にする』

（五〇）坤ト離ハ易ノ卦名。黄ハ坤ニ配シ、赤ハ離ニ配ス。

とあるはこの意味だ。

○時珍曰く、甘草の外赤く中黄なるは色に於て（五〇）坤と離との意味を兼ね、味濃く氣薄きは質に於て土の德を全備したもので、恰も君臣、上下のあらゆる機能を協調融和する國家の元老の偉功にも比すべく、普く百般の邪惡を處置し制御する王者の德化にも比すべきである。帝王の仁政を賛けて大功を樹てても人民の前にその顯動を誇らぬ輔弼の良相の如く、治療に神功を收めて而も己れ自身その榮譽に與らぬ、甘草はまことに藥中の輔弼の良相と謂ふべきである。しかし中滿、嘔吐、常に酒を飲む人の病にはこの甘が好ましくなく、大戟、芫花、甘遂、海藻とはまた相反するのであるが、やはり婉曲緩和の德政では頑迷不逞の徒をば救ふに由もなく、君子は常に小人の嫉妬陷穽に遭ふやうな關係のものと見える。

○頌曰く、按ずるに、孫思邈の千金方の論に『甘草があらゆる藥毒を解することは雪に湯を沃ぐやうである。ある者が烏頭、巴豆の毒に中つたとき、甘草を服して腹に入ると、掌を反すやうに的確な效驗があつた。方に大豆汁があらゆる藥毒を解することを稱揚してあるが、予の毎に試みるところでは效果がない。しかし甘草を

加へて甘豆湯にして用ゐると始めて效驗が現れる。その奏效がまことに著しい』といつてある。又、葛洪の肘後備急方には『席辯刺史から嘗て聞いたことだが、(五一)嶺南地方の土民間では蠱毒を解する藥を日常必要の物としてゐる。彼等はその法を他國人に知られることを警戒し、代價に積つて牛三百頭の藥だとか、或は銀三百兩の藥などの隱語の名稱を呼んで外間に判らぬやうにして居るが、久しい間に親密な交際をするやうになつてから、詳しい事實訊いて見ると、凡そ物を飲食するに方り、先づ炙熟した甘草一寸を嚼んでその汁を嚥む。若し毒に中れば直ちにその毒を吐出すといふのである。炙甘草三兩、生薑四兩、水六升を二升に煮て一日三回づつに服し、或は都淋藤、(五二)黄藤二物を酒で煎じて常に溫服すると、毒は大小便の排出に隨つて排出する。そこで彼等は甘草數寸を常に身に帶びて備急の用とする。若し甘草を含んでから、物を食つて吐かぬときはその食物は毒でなかつたといふことになつて居る』と書いてある。三百頭牛藥とは土常山のこと、三百兩銀藥とは馬兜鈴藤のことだ。その詳細はそれぞれの條下に記載する。

附方　舊十五、新二十。【傷寒心悸】脈の結代するには、甘草二兩、水三升をそ

(五一)嶺南トハ大庾嶺以南ノ地、今ノ廣東、廣西兩省ノ地、及ビソノ以南ヲ指ス。

(五二)本書十八卷ニ出ヅ。

の半量に煮取り、一日一回、七合づつを服す。（傷寒類要）【傷寒咽痛】（五三）少陰の症狀には、主として甘草湯を用ゐる。甘草二兩を蜜水で炙いて、水二升で一升半に煮取り、一日二回、五合づつ服す。（張仲景傷寒論）【肺熱喉痛】痰熱あるには、甘草を炒つて二兩、桔梗を米泔に一夜浸して一兩を用ゐ、毎服五錢を水一鍾半に阿膠半片を入れて煎じて服す。（錢乙直訣）【肺痿の涎多きもの】肺痿で涎沫を吐し、頭眩し、小便頻數で欬せぬものは肺中の冷である。甘草乾薑湯で溫める。卽ち甘草を炙いて四兩、乾薑を炮いて二兩を水三升で一升五合に煮て分服する。（張仲景金匱要略）【肺痿の久嗽】涕唾多く、骨節煩悶し、寒熱するには、甘草三兩を炙き搗いて末にし、毎日尿三合を取つてその甘草末一錢を調へて服す。（廣利方）【小兒の熱嗽】甘草二兩を豬膽汁に五日間浸し、炙つて研末し、蜜で綠豆大の丸にして食後に薄荷湯で十丸を飮下す。これを涼膈丸と名ける。（聖惠方）【初生兒の解毒】初生兒に直ちに（五四）硃砂蜜を與へてはならぬ。ただ甘草一指節の長さを取つて炙き碎き、水二合で煮て一合を取り、綿にしめして蜆殼に一ぱい程を生兒の口中に點ければ、胸中の惡汁を吐出するものである。後に生兒が飢渴を訴へるときまた與へて服ませれば、その生兒は智慧聰明

（五三）陰症ヲ分ツテ太陰、少陰、厥陰ノ三種ニ區別ス。

（五四）硃砂ト蜜トノ合劑。

(五五)發噤ハ口ヲ閉ヅルコト。

(五六)目澀ハ眼瞼炎。

(五七)一截ハ一指節ノ長サニ截リシモノナラン。

で無病になり、瘡を起すことが稀である。(王璆選方)【初生兒の便閉】甘草、枳殼を煨いて各一錢を水半盞で煎じて服す。(全幼心鑑)【小兒の撮口】(五五)發噤するには、生甘草二錢半を水一盞で十分の六に煎じて溫服し、痰涎を吐かせてから後、乳汁をその小兒の口中に點ける。(金匱玉函)【嬰兒の(五六)目澀】生後一ヶ月間目を閉ぢて開かず、或は腫れて光をまぶしがり、或は出血するは慢肝風と名けるものである。甘草(五七)一截を豬膽汁をつけて炙つて末にし、米泔で少量づつを調へて灌ぐ。(幼幼新書)【小兒の遺尿】大甘草頭の煎湯を每夜服す。(危氏得效方)【小兒の尿血】甘草一兩二錢を水六合で二合に煎じ、一歲の小兒には全部を一日に服ませる。(姚和衆至寶方)【小兒の羸瘦】甘草三兩を炙き焦して末にし、蜜で綠豆大の丸にし、一日二回、溫水で五丸づつを服す。(金匱玉函)【大人の羸瘦】甘草三兩を炙き、每早朝尿で煮て三四沸して頓服するが良し。(外臺祕要)【赤白下痢】崔宣州衍の所傳の方では、甘草一尺を炙いて裂き破つて淡漿水に蘸け、水一升半で八合に煎じて服すれば立つに效がある。

○梅師方では、甘草一兩を炙き、肉豆蔻七箇を煨き、剉んで水三升で一升に煎じて分服する。【舌腫で口塞がるもの】治療を加へねば死亡する。これには甘草を煎じ

（五八）大兩ハ唐六典ニ『凡權衡以二秬黍中者一。百黍之重爲レ銖。二十四銖爲レ兩。三兩爲二大兩一。十六兩爲レ斤』トアリ。

た濃き湯を熱くして漱ぎ頻に吐く。（聖濟總錄）【大陰口瘡】甘草二寸、白礬一粟大の量を共に嚼んで汁を嚥む。（保命集）【發背癰疽】崔元亮の海上集驗方に『李北海の言に依ればこの方は神授のもので極奇の祕方だといふ。即ち甘草三（五八）大兩を生で搗き篩つて末にし、大麥麪九兩とよく和して好き酥少量を入れ、それに沸湯を注ぎ入れてかき拌ぜて餅のやうにし、瘡よりも一分程大きく四角、又は圓形にして紬の布片、及び故紙を隔てて風を通じさすやうにして腫れた上に傅け、冷えればまた取換へる。かくすれば已に癰疽と成つたものは濃水を自ら排出し、まだ成らぬものは内消する。その際は黃芪粥を喫ふが妙だ』とある。○又ある法では、甘草一大兩を少し炙り、搗き碎いて水一升に浸し、その器の上へ一挺の小刀を橫へて一夜露し、翌早朝物を以て攪き廻して沫を出し、その沫を取り去つて服す。これはただ癰疽のみならず、發背の瘡腫にはいづれにも甚だ效がある。（蘇頌圖經）【諸種の癰疽】甘草三兩を微し炙つて切り、酒一斗と瓶に入れて浸し、その中へ黑鉛一片を溶して投入し、取出して又溶して投ずること九回にしてその酒を患者に飲ませる。醉ふて寢れば後に癒える。（經驗方）【一切の癰疽】諸種の癰疽の將に發せんとする豫備期に之を

(五九)大横文トハ横ニ皺紋アルヲ云フナラン。
(六〇)灰酒ハ直シ酒。無灰酒ハ醇酒。
(六一)癰ハ紫黑色ノ大ナル腫物。癤ハ有頭小瘡。
(六二)陰下懸癰ハ肛門ノ腫物。
(六三)穀道ノ前部ハ口腔。後部ハ肛門。

服すれば、よく腫を消し毒を逐ひ、毒をして內攻せしめぬ。その效用は一一枚擧に遑ない。卽ち(五九)大横文の粉草二斤を搥き碎いて河水に一夜浸し、揉み取つた濃汁を再度密絹で銀、石器の中へ濾過し込み、慢火で膏に熬つて甕罐に入れて貯へ、一二匙を(六〇)無灰酒、或は白湯で服す。嘗て丹藥を服したのが原因となつたものでもこれで解する。微し下痢することもあるが一向差支ない。これは國老膏と名けるものである。(外科精要方)【癰疽祕塞】生甘草二錢半を井水で煎じて服すれば、よく疎導して惡物を下す。(直指方)【乳癰の初期】炙甘草二錢を新水で煎じて服し、別人にその癰をすはせる。(直指方)【些小の(六一)癰癤】發熱した時に粉草節の晒し乾したものを末にし、熱酒で一二錢づつ續けざまに服すれば痛熱が悉く止る。(外科精要方)【痘瘡煩渴】粉甘草を炙き、栝蔞根と等分を水で煎じて服す。甘草はよく血脈を通じて瘡痘を發するものである。(直指方)【(六二)陰下懸癰】(六三)穀道の前後に生じ、初發時に松子大ほどのものが漸次に蓮子ほどになり、數十日の後には赤く桃、李のやうに腫れて遂に化膿して破れる。破れては治癒し難いものである。これには横文の甘草一兩を四寸に截斷し、谷間の長流水——河水、井水は用ゐない——一盌を用ゐ、文武火で緩や

かにその水に焠けて炙り、早朝から正午までその水全部を用ゐ盡すまで炙り、裂いて見て中心が水で潤ふてゐる程度にし、細かに剉んで好き無灰酒(六四)二小盌で一盌に煎じて溫服し、翌日また再服すれば危險の虞を免れる。この藥は急には病を消し得ぬが、二十日位で始めて消し盡すものである。(六五)興化府の太守康朝はこの病に罹つて癰が已に破れ、多くの醫師も手を拱くの外はなかつたが、この藥二劑を服するとその瘡口が合したのである。これは(六六)韶州の劉從周の方である。(李迅癰疽方)

【陰頭の瘡】蜜で煎じた甘草の末を頻に塗れば神效がある。(千金方)【陰下の濕痒】甘草の煎湯で一日三五回づつ洗ふ。(古今錄驗)【(六七)代指の腫痛】甘草の煎湯に漬ける。(千金方)【凍瘡の發裂】甘草の煎湯で洗ひ、次に黃連、黃蘗、黃芩末に輕粉を入れて麻油で調へて傅ける。(談埜翁方)【湯火の瘡灼】甘草を蜜で煎じて塗る。(李樓奇方)【蠱毒、藥毒】甘草節を(六八)眞麻油に浸し年久しく貯へたるものが效能愈々妙である。用ゐる每に嚙んで嚥み、或は水で煎じて服するが甚だ好結果を得る。(直指方)【小兒の(六九)中蠱】死せんとするには、甘草半兩を水一盞で十分の五に煎じて服すれば吐出する。(金匱玉函)【牛、馬肉の毒】甘草を煮た濃汁一二升を飲み、或は酒で煎じて服し、

(六四)盌ハ盂又椀ニ同ジ。

(六五)興化府ハ唐ニ置ク。宋ニ軍ニ改メ、元ニ路ニ改メ、明ニマタ府トナス、今ノ福建省莆田縣ハソノ舊治ナリ。

(六六)韶州ハ金部粉錫ノ註ヲ見ヨ。

(六七)代指ハ指ノヘウソ。

(六八)眞麻油ハ胡麻油。

(六九)中蠱ハ一種ノ中毒。

吐き或は下す。渇しても水を飲んではならぬ。水を飲めば死するものである。(千金方)【飲食物の中毒】何物の毒か判明せず、而も急速の場合、且つ他に藥の無い場合にはただ甘草、薺苨の煎湯を服す。口に入れば活きるものである。(金匱玉函方)【水莨菪の毒】蔬菜の中に水莨菪が雜ることがあるものだが、それは圓い葉で光りがあり、毒がある。誤つてこれを食へば狂亂して中風のやうな狀態となり、或は吐くものである。これには甘草の煮汁を服すれば直ちに解する。(金匱玉函妙方)

黄耆（本經上品）

和名　わうぎ、湖北わうぎ、
學名　Astragalus Henryi, Oliv.
和名　わうぎ、
學名　Astragalus Hoantchy, Franch.
和名　わうぎ、滿洲わうぎ、きばなわうぎ
學名　Astragalus membranaceus, Fisch.
科名　まめ科(荳科)

釋名　**黄芪**(綱目)　**戴糝**(本經)　**戴椹**(別錄)　また獨椹と名ける。**芰草**(別錄)　また蜀脂と名ける。**百本**(別錄)　**王孫**(藥性論)　時珍曰く、耆とは長(チサ)の意味であつて、黄耆は黄色のもので補藥としての長だからかく名けたものである。

今では文字を通用して黄芪とも書く。蓍と書くは誤だ。蓍の字は(一)蓍龜の蓍で音は尸(シ)である。王孫といふ名は牡蒙の王孫と同一であるが實物は異ふ。

【集解】別錄に曰く、黄耆は(二)蜀郡の山谷、(三)白水、(四)漢中に生ずる。二月に採取して陰乾する。弘景曰く、第一の佳品は(五)隴西、(六)洮陽に產し、色が黄白で甜美なものだが今は甚だ得難く、次位のものとして(七)黑水、(八)宕昌のものを用ゐる。これは色が白く肌理が粗く、新なるものはやはり味甘く、溫補するものである。又、(九)蠶陵、白水のものといふは色も理も蜀中のものに勝り、これは冷補するものである。又、赤色のものもあつて、これは膏にして貼用するによい。黄耆は一般の醫方に多く用うるもので、道家では用ゐない。

恭曰く、今は(一〇)原州、及び(一一)華原に產するものが最も良い。(一二)蜀、漢のものは採用せぬ。(一三)宜州、(一四)寧州のものも佳い。

頌曰く、今は(一五)河東、陝西の州郡に多くある。根の長さは二三尺ほどで獨莖のもの、或は叢生のものもある。枝は幹の地上二三寸のところから生え、その葉はふさふさと繁り、(一六)羊齒類の狀をなし、また(一七)蒺藜の苗のやうである。七月中に

(一)蓍龜ハト占ノ總稱。蓍ハト筮ニ用ヰル草。龜ハ龜トニ用ヰル龜甲ヲ指ス。
(二)蜀郡ハ金石部青琅玕ノ註ヲ見ヨ。
(三)白水ハ四川省松潘縣ノ東境ニ源ヲ發シテ白水河トイヒ、東流シテ甘肅省文縣ニ入リテ東川河ト云ヒ、東北ニ淸江ニ合シ、東南白水江ニ入ル。白水江卽チ羌水ナリ。又、漢ノ白水縣ハ今ノ四川省昭化縣ニ舊治アリ。
(四)漢中ハ石部理石ノ註ヲ見ヨ。
(五)隴西ハ石部鹵石類消石ノ註ヲ見ヨ。
(六)洮陽ハ晉ニ縣ヲ置ク。今ノ甘肅省臨潭縣ノ西南ニ故城アリ。
(七)黑水ハ卽チ禹貢ニ『導黑水至于三危。

入于南海」トアル黒水ニシテ、今ノ甘肅省安西縣ノ布隆吉爾河（即チ蘇賴河）ナリ。此ノ流ガ哈喇（黒ナリ）池ニ注グトコロヨリ黒水ト稱シタルガ如シ。然レドモ南海ニ入ルノ説古來諸説紛紛タレドモソノ歸ナ見ズ。

（一八）宕昌ハ石部雄黃ノ註ヲ見ヨ。

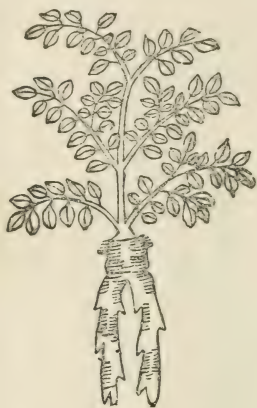
（一九）蠶陵ハ石部鹵石類消石ノ蠶陵縣ノ註參照。

（二〇）唐ノ原州ハ今ノ甘肅省固原縣ノ地ナリ。宋ノ原州ハ今ノ甘肅省鎭原縣ノ地ナリ。

（二一）華原、隋ノ縣名、元ニ廢ス。今ノ陝西省耀縣ノ地ナリ。

（二二）蜀漢ハ蜀ト漢中トヲ指ス。石部空青ノ蜀ノ註、及ビ石部

黃、紫の花を開き、その實は長さ一寸ばかりの莢子になる。八月にその根を採收するもので、その皮を裂けば綿のやうになる、これを綿黃耆といふのである。かやうに黃耆には白水耆、（一八）赤水耆、木耆などの數種あつて、功用はいづれも同じであるが、藥としての力はいづれも白水のものに及ばない。木耆は短くて（一九）理が橫である。今世間では多く苜蓿根を黃耆の擬ひ物にする。これも皮を裂けば綿のやうになるので頗る眞物と見擬ふが、しかし苜蓿根は堅く脆く、黃耆は至つて柔靭であり、皮が微黃褐色で肉の中が白色だ。そこに相異がある。

〔黃耆〕

○承曰く、黃耆は元來（二〇）綿上の產を良とするところから綿黃耆といふのであつて、その物が柔靭で綿のやうだからいふのではない。今の圖經に描寫したものは（二一）憲州のもので、その土地は綿上の隣接地である。

○○好古曰く、綿上なる土地は山西の

(三二)沁州に在る。白水なる土地は陝西の(三三)同州に在る。黄耆は味甘く柔軟で綿の如く、よく人を肥らすものであり、苜蓿根は味苦くして堅く脆く、俗に土黄耆と稱するもので、よく人を瘦せしむるものである。使用するには審な識別を要する。

嘉謨曰く、綿上は沁州管內の鄕名で、現に(三四)巡檢司が置かれてある。白水、赤水の二鄕は倶に隴西に屬する。

時珍曰く、黄耆は葉が槐葉に似て微し尖つて小さく、また蒺藜の葉に似てそれより微し濶く大きく靑白色である。黄紫色で槐花ほどの大さの花を開き、長さ一寸ばかりの小く尖つたさやの實を結ぶ。根は長さ二三尺のもので、(三五)箭簳のやうに堅く實したものを良とする。若い苗はゆでこぼして食ふ。その子を取つて十月に蒔き、菜を蒔く方法と同樣にするもよい。

修治　凡そ黄耆を使ふ場合に木耆草を用ゐてはならぬ。その草は如何にも似て居るが、木耆は地上に生えてゐる時は葉が短く、また根が横に生えるものである。黄耆を用ゐるには、先づ頭の皺皮を取去り、半日蒸して細かに裂き、(三六)槐砧の上で剉んで用ゐる。時珍曰く現今ではただ扁く槌いて幾度も蜜水を塗つて炙り、熟す

理石漢中ノ註ヲ見ヨ。
(二三)宜州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(二四)寧州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(二五)河東ハ石部丹砂ノ河東路ノ註參照。
(二六)羊齒類ハシダノルイ。
(二七)蒺藜、ハマビシ。
(二八)赤水ハ地名、唐ノ赤水軍ノ地ナリ。舊治ハ今ノ甘肅省武威縣ニアリ。元和郡縣志ニ依レバ、幅員五千一百八十一里ノ廣大ナル區域ヲ統ベタリトイフ。
(二九)木村(康)曰ク、横理ハ縱理ニ對スル語ニシテ、卽チ破折スレバ縱裂セズシテ横斷スル如キ性狀ヲ云フナラン。
(三〇)綿上ハ山西省沁

るを程度として用ゐる。また鹽湯を潤透して湯瓶に盛り、蒸熱して切つて用ゐることもある。

根　**氣味**　【甘し、微溫にして毒なし】(本經)【白水のものは冷補す】(別錄)　元素曰く、味は甘し、氣は溫、平なり。氣は薄く味は厚く、升にも降にもよく、陰中の陽なるもので、手、足の太陰の氣分に入り、また手の少陽、足の少陰、命門に入る。之才曰く、茯苓が使となる。龜甲、白鮮皮を惡む。

主治　【癰疽、久しく潰敗せる瘡の膿を排し、痛を止める。大風癩疾、五痔、鼠瘻には虛を補ふ。小兒のあらゆる疾病】(本經)【婦人の子臟の風邪氣、五臟の間の惡血を驅逐し、男子の虛損、五勞、羸瘦を補し、渴を止める。腹痛洩痢には氣を益し、陰氣を(二七)利す】(別錄)【虛喘、腎衰、耳聾に主効があり、寒熱を療じ、發背を治し、內補す】(甄權)【氣を助け、筋骨を壯にし、肉を長じ、血を補ひ、癥癖、瘰癧、(二八)癭贅を破る。腸風、血崩、帶下、赤白痢、產前後一切の病、月經不順、痰嗽、頭風、熱毒、赤目】(日華)【虛勞自汗を治し、肺氣を補し、肺火、心火を瀉し、皮毛を實し、胃氣を益し、肌熱、及び諸經の痛を去る】(元素)【(二九)太陰瘧疾、(三〇)陽維の疾と爲つ

源縣ノ北、沁水上流ノ地ナリ。
(二一)宋ノ憲州ハ今ノ山西省靜樂縣ソノ舊治ナリ。
(二二)沁州ハ隋ニ置ク今ノ山西省ノ沁縣ナリ。
(二三)同州ハ石部鹵石類凝水石ノ註ヲ見ヨ。
(二四)巡檢司ハ甲兵ヲ訓練シ、州邑ヲ巡維シ、盜賊ヲ擒捕スル事ヲ司ル役所。
(二五)餠辞ハヤガラ。
(二六)槐硝ハ槐木ニテ作リタル甕。和名キヌタ。
(二七)利トハ功アルヲ云フ。
(二八)癭贅ハ和名フスベ。俗ニ云フコブ。
(二九)太陰瘧疾ハ陰症ノオコリノ事。
(三〇)陽維ハ奇經八脈ノ一ナリ。

て寒熱に苦むもの、(三一)脊脈(せくみやく)の病と爲つて逆氣、裏急(りきふ)するものに主效がある】(好古)

【發明】弘景曰く、隴西に產するものは溫補し、白水に產するものは冷補する。また赤色のものがあつて、それは膏にして用ゐれば癰腫を消するものである。藏器曰く、虛して客熱するには白水の黃耆を用ゐ、虛して客冷するには隴西の黃耆を用ゐる。

大明曰く、黃耆は諸藥の中の補益の藥であつて、羊肉と呼ばれてゐる。白水耆は涼にして毒なく、膿を排し、血を活し、及び煩悶、熱毒、骨蒸勞を治するの功は黃耆に次ぐ。赤水耆は涼にして毒なく、血を活し、熱毒を退け、その他の功用はいづれも同樣である。木耆は涼にして毒なし。煩を治し、膿を排するの力は黃耆より微弱だから、黃耆の無い場合には倍量にしてこれを用ゐる。

元素曰く、黃耆は甘く溫にして純陽のものだ。その功用に五種ある。諸虛、不足を補ふがその一、元氣を益すがその二、脾、胃を壯にするがその三、肌熱を去るがその四、膿を排し、痛を止め、血を活し、血を生ずるがその五であつて、陰疽(いんそ)を(三二)內托(ないた)する瘡患者の聖藥だ。又曰く、五臟の諸虛を補し、(三三)脈弦(みやくけん)、自汗を治し、

(三一)脊脈ハ身體外部ノ中央線ニ當リ上下ニ貫徹スル經脈チ云フ。
(三二)內托ハ內消セシムルコト。
(三三)弦ハ緊張シテ力アルチ云フ。

（三四）中州ハ内臓ヲ指スナラン。

（三五）分肉ハ四肢ヲ指スカ。

陰火を瀉し、虚熱を去り、汗無きには發汗せしめ、汗あるには之を止める。

好古曰く、黄耆は氣虚、盜汗、竝に自汗、及び膚痛を治する點からいへば皮、表の薬である。喀血を治し、脾、胃を柔にする點からいへば（三四）中州の薬である。傷寒の尺脈至らざるを治し、腎臓の元氣を補する點からいへば裏の薬である。これを通じて上、中、下、内、外、三焦の薬なのである。

果曰く、靈樞經に『衞氣なるものは（三五）分肉を溫めて皮膚を充實し、腠理を肥して毛孔の開閉を支配することを本分とする』とあり、黄耆は三焦を補つてその衞氣を充實するものなのであつて、桂とその功力が同一であるが、桂と異る特殊の點は、甘く平にして辛く熱ならぬだけである。桂ならば血脈を通じよく血を破つて衞氣を充實するのであるが、耆は氣を益すのである。又、黄耆と人參と甘草とは躁熱、肌熱を除くの聖薬であつて、脾、胃が一たび虚して肺氣が先づ絶するには、必ず黄耆を用ゐて分肉を溫め、皮毛を益し、腠理を充實し、汗を出さしめずに元氣を益し、三焦を補ふ。

震亨曰く、黄耆で元氣を補ふには、肥えた色の白い人で汗多きものに用ゐるが適

(三六)三拗湯ハ麻黄甘草杏仁ノ合劑。

當である。顔色が黒く體格の實して痩せたものが服すれば胸滿を起すものだから、それには(三六)三拗湯を用ゐて瀉するがよい。

○宗奭曰く、防風と黄耆とは一般に多く相須つて用ゐることになつてゐる。唐の許胤宗は初め陳に仕へた人であるが、その當時新蔡王の外兵參軍に任ぜられてゐた頃のこと、陳の柳太后が風病に罹つて脈が沈み、口噤して言語不能に陷られた。胤宗はこれを診て『この容體では藥を下すことが出來なくなつて居る、湯氣で蒸すの外はない。その方法で藥が腠理に入れば一晝夜で痊えるだらう』といひ、黄耆防風湯數斛を造つてそれを牀下へ置き、煙霧の如く蒸氣を立たせると、太后はその夜のうちに言語を發せられるやうになつたといふことである。

○杲曰く、防風は能く黄耆を制し、黄耆は防風を得てその功いよいよ大に現れる。これは相畏れると同時に相使するものである。

○震亨曰く、人間の口は地に通じ、鼻は天に通ずるものであつて、口は陰を養ひ、鼻は陽を養ふ。天は淸を主るものだから、天に通ずる鼻は有形のものは受入れずして無形のものを受入れ、地は濁を主るものだから、地に通ずる口は有形も無形も共

に受入れる。右の柳太后の場合は、既に言語不能なのだから、有形の湯を用ゐたのでは作用が緩にして效果を奏するところに及ばない。そこで黄耆、防風二物の湯氣を利用して病室に充滿させたから、口からも鼻からも倶に受入れたわけである。かやうにして回生の效を擧げたといふは、醫としての智力よく幽玄の機微に通ずるに非ざれば能はぬことである。

○杲曰く、小兒が外界の事物に驚いたものには黄連安神丸の鎭心藥を用ゐるがよい。また脾、胃の寒濕で吐し、腹痛し、青、白を瀉痢する場合には益黄散の藥を用ゐるがよい。もし脾、胃の伏火、勞役に因る不足の症狀、及び巴豆の類を服したために胃が虚して慢驚となつたものの場合には、益黄理中の藥を用ゐては必ずその生命を傷るものだから、これは心の經中に對して甘、溫のもので土の源を補ふ方法を講じ、更に脾の土中に對して甘、寒のもので火を瀉し、酸、涼のもので金を補ひ、金を旺に、火を衰へしめ、風、木をして自ら平安ならしむべきものである。今ここに黄耆湯を中心として、火を瀉し、金を益ひ、土を益するに神效ある治方を示せば、炙黄耆二錢、人參一錢、炙甘草五分、白芍藥五分を水一大盞で半盞に煎じて溫服す

(三七)蕭山、明ノ縣名、今ノ浙江省紹興府ニ屬ス。

(三八)保元湯ノ解ハ次下ニアリ。

(三九)膿血、一本ニ膿水ニ作ル。

ることである。

○機曰く、(三七)蕭山の魏直に博愛心鑑三卷の著がある。それに依ると『小兒の痘瘡には主として順、逆、險の三種の症狀がある。順なるものは幸に經過の善いもので、藥を用ゐるまでもない。逆なるものは絶望である、藥を用うべき餘地がない。ただ險なるものだけが最も複雜な考慮を傾くべき現象のもので、これは藥功に賴つて危險狀態から安全な狀態に引戻すべきものである。この場合には(三八)保元湯に加減を施したものを主として用うるが最も適當である。この方は元來李東垣が創制した慢驚の土衰火旺を治する方法を基礎としたもので、痘を治するこの場合に利用するのは、內には營血を强固にし、外には衞氣を保護し、陰陽を滋助し、(三九)膿血を作爲するその作用を目的とするのであつて、慢驚と痘とその症狀に異はあるが、理論の點では同一なのである。これは黃耆湯から白芍藥を去り生薑を加へて保元湯と改稱したもので、炙黃耆三錢、人參二錢、炙甘草一錢、生薑一片を水で煎じて服するのである。右の險の症狀とは、初期に痘の周圍が圓く輪を描いて紅く乾き、潤ひの少いものである。發達するに隨つて光澤が生じ、頂點が低く陷つて起らぬもの

（四〇）神短ハ短氣ノコトニテ氣息ノ力ナキヲ云フナラン。

である。旣に出て起き上つても色がくすんで明ならぬものである。痘瘡中の漿水が代謝して灰色に見え、はつきりせぬものである。漿水が痘に固定して光が潤ひ、消散せぬものである。漿が古くなり、濕潤にして斂らぬものである。痂を結んで胃弱、內虛するものである。痂が落ちて口が渇し、食物を攝り得ぬものである。痂の痕へ癰腫を生ずるものである。その癰腫が潰れて斂りの遲いものである。凡そこれ等の諸症狀あるにはいづれもこの湯を用ゐ、或は芎藭を加へ、官桂を加へ、糯米を加へてその力を助けるがよい』とある。詳細は博愛心鑑その書に就いて觀るがよい。

嘉謨曰く、人參は中を補し、黃耆は表を實する。凡そ內に脾、胃を傷めて發熱し、惡寒し、吐泄し、倦怠し、脹滿し、痞塞し、（四〇）神短く、脈微なるものには、人參を君とし黃耆を臣として用ゐるがよい。もし表虛して自汗するもの、亡陽の潰瘍、痘疹の陰瘡の場合には、黃耆を君とし人參を臣として用ゐるがよい。必ずしも一定の方法を固執すべきものではない。

附方　舊五、新九。【小便不通】綿黃耆二錢を水二盞で一盞に煎じて溫服する。小兒には半減する。（總微論）【酒疸黃疾】心下が懊痛し、足脛が脹り、小便が黃にな

（四一）煩悸ハムナサワギ。焦渴ハノドガカハクコト。
（四二）萎黃ハ皮膚ガ黃色ニ變ズルコト。
（四三）瘡癤ノ癤ハ小瘡ナリ。
（四四）乳起、煎縮シテ沸騰スルトキ、乳頭狀ニ隆起スルヲ云フ。

り、酒を飲むと赤、黑、黃の斑を發する。これは大醉して風に當り水に入る等が原因で發るものだ。黃耆二兩、木蘭一兩を末にし、一日三回、酒で方寸匕づつを服す。（肘後方）【氣虛白濁】黃耆を鹽で炒つて半兩、茯苓一兩を末にし、白湯で一錢づつを服す。（經驗良方）【治渴、補虛】男子、婦人の諸虛、不足、（四一）煩悸し、焦渴し、顏色が（四二）萎黃して飲食物を攝取し得ぬもの、或は先づ渴して後に（四三）瘡癤を發するもの、或は先づ癰疽があつて後に渴するもの、いづれも左の藥を常に服するがよい。氣血を平補し、臟腑を安和し、終身癰疽の疾患を免れる。綿黃耆の箭幹のものを蘆を去つて六兩を用ゐ、一半は生で焙じ、一半は鹽水で潤濕し、飯の上へ載せて三回蒸して焙じ剉み、粉甘草一兩を一半は生で、一半は黃に炒つて共に末にし、二錢づつを白湯に點て、朝に一服、正午に一服する。また煎じて服してもよし。これを黃耆六一湯と名ける。（外科精要）【老人の閟塞】綿黃耆、陳皮の白を去り各半兩を末にして三錢づつを、大麻子一合を研り爛して水で濾した漿を（四四）乳起するまで煎じて白蜜一匙を入れ再び煎沸したもので調へて空心に服す。閟塞の甚しきものも二服に過ぎずして效がある。この藥は冷せず、熱せず、常に服すれば祕塞の患がなく

なる。その效神の如きものである。(和劑局方)【腸風瀉血】黃耆、黃連等分を末にし、麪糊で綠豆大の丸にして三十丸づつを米飮で服す。(孫用和祕寶方)【尿血(四五)沙淋】痛み忍び難きには、黃耆、人參等分を末にし、大蘿蔔一個を一指の厚さに切つて四五片を蜜二兩に漬けて幾回か炙り、蜜全部が盡くるまで焦げぬやうにして炙つて、それにつけて時に拘はらず食ひ、鹽湯で飮下す。(永類方)【吐血の止まぬもの】黃耆二錢半、(四六)紫背浮萍五錢を末にし、一錢づつを(四七)薑蜜水で服す。(聖濟總錄)【欬嗽膿血】咽の乾くは虛してゐて內部に熱があるのである。涼藥を服してはならぬ。好き黃耆四兩、甘草一兩を末にし、(四八)二錢づつを湯に點じて服す。(席延賞方)【肺癰を吐かす】黃耆二兩を末にし、(四九)二錢づつを水一中(五〇)盞で十の分六に煎じて一日三四回溫服する。(聖惠方)【甲疽瘡膿】足趾の爪の附近に生じて赤肉が突出し、殆ど連續的に發生するには、黃耆二兩、䕡茹一兩を醋に一夜浸し、豬脂五合で微火で二合に煎じて滓を絞り去り、一日二回づつその瘡口の上を封ずれば肉が自ら消く。(外臺祕要)【胎動不安】腹痛し、黃汁を下すには、黃耆、川芎藭各一兩、糯米一合を水一升に煎じて分服する。(婦人良方)【陰汗濕(五一)痒】綿黃耆を酒で炒つて末にし、(五二)熟豬心につけ

(四五)砂淋ハ石淋トモ云フ。今名尿石病、小便ヨリ石ノ出ヅル病。

(四六)紫背浮萍ハ山椒藻。

(四七)薑蜜水ハ乾薑末ト蜜トヲ混ジタル水。

(四八)大觀本草ニ二錢ヲ三錢ニ作ル。

(四九)大觀ニ二錢ヲ三錢ニ作ル。

(五〇)小杯ヲ盞ト云フ。

(五一)食物本草ニ陰囊出水ヲ痒ト云フトアリ。

(五二)熟豬心ハ煮熟シタモノ。

て喫ふが妙である（趙眞人濟急方）【痒疽內固】黃耆、人參各一兩を末にして眞龍腦一錢を入れ、生藕汁で和して綠豆大の丸にし、二十丸づつを溫水で日毎に服す。（本事方）

莖葉　【主治】【渴、及び筋攣、癰腫、疽瘡を療す】（別錄）

人參（本經上品）

和名　にんじん、おたねにんじん、てうせんにんじん
學名　Panax Schinseng, Nees. 又 Panax Gingsong, C. A. Mey.
科名　うこぎ科（五加科）

【釋名】（一）**人蓡**　音は參（シン）である。或は字劃を省略して蓡とも書く　**黃參**（吳普）　**血參**（別錄）　**人銜**（本經）　**鬼蓋**（本經）　**神草**（別錄）　**土精**（別錄）　**地精**（廣雅）　**海腴**　（一）**皺面還丹**（廣雅）

時珍曰く、人蓡は長年月の間に漸次に長成し、その根が人間の形體のやうで神秘なものだから人蓡、神草といふのであつて、蓡の文字は浸に從ふ、いづれも（二）浸、漸の意義である。浸、卽ち浸の字である。が、後世文字の劃が多過ぎるところから、遂に參宿星の參の字を當て字に用ゐて簡便にしたのである。正確ではないけれども

（一）木村（康）曰ク、今市場販賣ノ紅參ハ朝鮮ニテ人參ノ六年根ノ形態ノ優秀ナルモノノミヲ選ンデ蒸シ乾燥セルモノ。人參エキスハ此際偶出セルモノヲ濃縮シタルモノナリ。白參ハ朝鮮ニテ根ヲ採取後鬚根ヲ去リテ陰干セルモノニシテ紅參用トシテ合格セザルモノヲ用ウルモノナリト。鬚人參ハ紅參白參ヲ製スル時出ヅル鬚根及主根ノ細長ナルモノヲ集メ乾燥シタルモノニシテ、氣味含有成分ニ差別ナク藥用ニ堪ユ。洋參一名花旗參ト稱スルモノハ米國ヨリ輸入スルモノニシテ、Panax quinquefolia, L. 和名セイヤウニンジン

一名クワントンニンジンノ根ナリ。竹節人蔘ト稱スルモノハ和名トチバニンジン學名 Panax repens, Maxim. ノ根莖ニシテ、本邦ニ自生ス。氣味劣リ結節ヲ有スルヲ以テ區別スルコトヲ得。白井曰、直根人蔘ト云フハ竹節人蔘ノ畸形品ニシテ直下根ヲ有スルモノナリ。

(二)浸漸ハ徐徐ニ功力ヲ現ハスノ意。

(三)背陽ハ太陽ヲ避クルヲ云フ。向陰ハ日陰ヲ好ムヲ云フ。

(四)五參ハ人參、沙參、丹參、玄參、苦參。

(五)上黨ハ春秋ノ時名、漢之ニ依ル。戰國時代ノ韓ノ地ナリ。今ノ山西省冀寧道南部ノ地ニシテ、長子縣ハソノ舊郡治ナリ。

その誤のまま長き年代を經たのだから、今更改めるわけにも行かぬのである。ただ張仲景の傷寒論だけは、やはり蔘の字を書いてある。別錄には一名人微とあるが、微の字はやはり銜の字の訛誤である。人參はその成長するに階級をなして伸びるところから人銜といひ、その草が(三)陽に背き陰に向ふものだから鬼蓋といひ、そのものが(四)五參の內で色は黃に、土に屬し、脾、胃を補ひ、陰血を生ずるものだから黃參、血參の名稱があり、大地の靈妙な精氣を得て居るものだから、土精、地精の名稱がある。廣五行記に『隋の文帝の時、(五)上黨のある人家の屋後で每夜人の呼ぶ聲がする。その何者かを捜索したが姿を見ることは出來なかつた。ところがその家から一支里ばかり隔てた場所でふと枝葉の異常なる人參を發見し、地下五尺ばかり掘下げると、形狀さながら人體そのままの四肢完全に備つた人蔘が現れた。爾來その呼聲が跡を絕つた』とある。これ等の事柄が土精

〔人參〕

なる名稱の有力な根據であらう。禮斗威儀には『下に人參あれば上に紫氣あり』とあり、春秋運斗樞には『(六)搖光星の光の散じたものが人參となる。人君が山や河の神聖、利便を荒廢すると、搖光が光らなくなり、人參が生えない』とある。これ等の說に就いてもまた神草と稱した根據が窺ひ得るわけである。

集解　○別錄に曰く、人參は上黨の山谷、及び(七)遼東に生ずる。二月、四月、八月の上旬にその根を採收し、竹刀で刮つて曝乾する。風に當ててはならぬ。根が人の形に似たものは靈妙な力がある。○普曰く、或は(八)邯鄲に生ずる。三月に生え、その葉は小さく銳く、枝は黑く、莖に毛がある。三月、九月に根を採る。根に手足や目鼻があつて人間のやうなものが靈妙である。

○弘景曰く、上黨は(九)冀州の西南に在る。(一〇)今來のものは形が長く色が黃で防風のやうな形狀だ。潤ひ多く實してゐて甘い。俗間では(一一)百濟のものを重んじて居るが、それは形が細くして堅く白く、氣、味は上黨のものよりも薄い。百濟のものに次いでは(一二)高麗のものを用ゐる。高麗とは卽ち遼東であつて、その形は大きく虛軟で百濟のものに及ばない。百濟、高麗共に上黨のものには及ばぬのである。人參

(六)搖光ハ北斗七星ノ第七星。
(七)遼東ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。
(八)邯鄲ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。
(九)冀州トハ禹貢九州ノ冀州ヲイフ、水部井泉水ノ註參照。
(一〇)大觀ニ今來ノ二字ナク、今魏國所獻卽是ノ七字アリ。
(一一)百濟ハ朝鮮ノ古國名、漢時代ノ韓國ニシテ、東晉ノ頃新羅、任那二國ソノ東半ニ據リ、百濟西半ニ獨立シ日本ト最モ親シ。卽チ今ノ京畿道ノ南半、及ビ忠淸、全羅二道ヲ領ス。唐ノ時新羅ニ滅サル。
(一二)高麗ハ土部、墨ノ高麗國、金部金ノ高麗ノ註ヲ見ヨ。

なる草は、一本の莖が直立して伸び、四五本相對して生え、花の色は紫だ。高麗人の作つた人參讃に『三椏五葉、陽に背き陰に向ふ。來つて我を求めんと欲せば、(一三)椵樹を相尋ねよ』といつてある。椵は音賈(カ)である。その樹は桐に似て甚だ大きく、その木蔭が廣ければ廣いだけ多く(一四)生ずるものだ。この物の採收、修治にはなかなか六ヶ敷い方法がある。現に近い地方の山にもあるけれども、ただその製法が思ふやうに行かない。

恭曰く、人參は高麗、百濟のものが多く用ゐられてゐる。(一五)潞州の(一六)太行、紫團山から出るものをば紫團參といふ。保昇曰く、今は(一七)心州、(一八)遼州、(一九)澤州、(二〇)箕州、(二一)平州、(二二)易州、(二三)檀州、(二四)幽州、(二五)嬀州、(二六)幷州のいづれも人參を産する。蓋しこれ等諸州の山はいづれも太行山の山脈と連亙し相接して居るからだ。珣曰く、(二七)新羅國から貢納する人參は、手足があつて人體のやうな形狀の長さは一尺餘のもので、それを杉木で夾み紅い絲を纒つて飾つてある。又、(二八)沙州の參は短小で用うるに堪へない。

頌曰く、今は(二九)河東の諸州、及び(三〇)泰山のいづれにもあり、また(三一)河北地方

(一三)白井曰ク、椵樹ノ圖ハ救荒本草ニ出ヅ。小野職孝ハトチノキニ充ツレドモ其圖羽狀複葉ナレバ適合セズ、圖ニテハトネリコノ類ニ非ズヤト思ハル。朝鮮人ノ東醫寶鑑ニハ椵ハ檟也トセリ。然レドモ爾雅ニハ檟ハ苦茶トアリテ茶ノコトトシ、爾雅翼ニハ檟亦楸ナリトアリテ、キサヽギノコトヽセリ。キサヽギノ葉ハ稍桐ニ似タリトモ云フベシ。然レトモ羽狀複葉ノモノニ非ズ。

(一四)大觀本草ニハ、多生ノ下ニ陰地ノ二字アリ。

(一五)潞州ハ卽チ上黨ノ地ニシテ、上黨郡ノ舊治長子縣ノ東ニアリ。石部長石ノ註參照。

（一六）太行、紫團山、太行山ハ石部石硫黃ノ註ヲ見ヨ。紫團山ハ今ノ山西省潞安縣、卽チ潞州ノ南方壺關縣ノ東南ニ在リ。太行山脈中ノ一支脈ナリ。
（一七）心州ハ沁州ハ沁州ノ訛、山西省沁源縣ノ地ナリ。
（一八）遼州ハ今ノ山西省遼縣ノ地ナリ。
（一九）澤州ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。
（二〇）箕州ハ宋ニ置ク卽チ唐ノ遼州ナリ、此ニ重出セルハ解シ難シ。蓋シ誌ノ混入カ。
（二一）平州ハ今ノ直隸省盧龍縣ノ地ナリ。
（二二）易州ハ今ノ直隸省易縣ノ地ナリ。
（二三）檀州ハ今ノ直隸省密雲縣ノ地ナリ。
（二四）幽州ハ今ノ北平

の（三二）指定市場や（三三）閩中から內地へ來る新羅人參なるものもあるが、いづれも上黨の物の佳良なるには及ばない。この草は春苗を生ずるもので、深山の背の陰に當り、椵、漆の樹に近い濕潤の場所に多い。生え初めの小なるものは三四寸ばかりでただ（三四）一椏五葉である。四五年後には二椏五葉となるがまだ花・莖はなく、十年後に至つて三椏を生じ、永く歲月を經れば四椏となり、各椏いづれも五葉で中心に一本の莖が生える。これは俗に百尺杵と名けるものだ。三月、四月の頃に、粟のやうな細小な花を著ける。蕊は絲のやうで紫白色だ。秋季後に大豆ほどの子を七八個結び、生では青いが熟すれば紅くなつて自ら落ちる。根は人體のやうな形狀のものが神なるものだ。泰山に產するものは葉、幹は青く根が白く、甚だ異つて居る。（三五）江淮地方に產する一種の土人參なるものは、苗の長さ一二尺、葉の形は匙のやうで小さく、桔梗に似て相對して生え、五七節を生じて根も桔梗のやうだが柔く、味は極めて甘美である。秋紫の花を著け、靑色を帶びたのもある。春、秋に根を採る。その地方ではこれを用ゐることもある。言以傳へに、上黨の人參か否かを試すには、一人には人參を含ませ一人には含ませずして三五支里ばかり走らせて見ると、

清ノ北京ガソノ舊治ナリ。
(二五)嬀州ハ今ノ直隷省懷來縣ノ地ナリ。
(二六)并州ハ石部石髓ノ註ヲ見ヨ。
(二七)新羅國、蘇恭ノ當時ハ今ノ朝鮮ノ黄海道、江原道以南、舊百濟、任那ノ地ヲ併有ス。百濟ノ註參照。
(二八)沙州ハ金石部玉類馬腦ノ註ヲ見ヨ。
(二九)河東ハ草部甘草ノ註ヲ見ヨ。
(三〇)泰山ハ金石部雲母ノ太山ノ註參照。
(三一)河北ハ石部丹砂ノ河北路ノ註參照。
(三二)三才圖會ニハ河北榷場ヲ河北淮揚ニ作ル。
(三三)關中ハ金部銀、鐵ノ關ノ註參照。
(三四)椏ハ枝ニ同ジ。
(三五)江淮ハ今ノ江

人參を含まぬものは必ず喘ぎ、人參を含んだものは氣息平然たるものである。その人參ならば眞物だといふ。

宗奭曰く、上黨のものは根が頗る纖長で、根の下一尺餘も垂れたものもあり、或は十本に分れたものもある。その價格は銀と等しく、やや得難いものである。その地の者は一株のまま採つてそれを板上に載せ、新しい色絲や美しい染布などで裝飾する。

嘉謨曰く、紫團參は紫色でやや扁く、百濟參は白く堅く且つ圓く、白條參と名け、また俗に羊角參とも呼ぶ。遼東參は黄色に潤ひ、纖長で鬚があり、俗に黄參と呼ぶもので、特に他の物に勝れて居る。高麗參は紫團參に近いが體が虚してゐる。新羅參は黄參に亞ぐものだが味が薄い。人の形に似たものが神效があるので、その(三六)雞腿に類したものは力が甚だ大なるものた。

時珍曰く、上黨とは今の潞州の地であるが、その地方民は人參を地方の害として決して採取せぬ。今需用しつつあるものはいづれも遼參である。高麗、百濟、新羅なる三箇國は今は皆朝鮮の領域に屬し、その地の參は今も中國へ輸入して販賣して

ゐる。この草はやはり種子を取つて十月に種ゑ、菜の種を蒔く方法と同様にしてもよし。秋、冬に採つたものは堅く實し、春、夏に採つたものは虛して軟い。虛、實の相異は產地には因らぬものだ。遼參の皮付きのものは潤へる黃色で防風の如く、皮を取去つたものは堅く白く粉のやうだ。

僞物のことであるが、それはいづれも沙參、薺苨、桔梗の根を採つて擬はしく仕立て瞞着するものだ。しかし、沙參は體が虛で心がなく味が淡い。薺苨は體が虛で心がない。桔梗は體が堅く心があつて味が苦い。人參は體が實し心があり、味は甘くして微に苦を帶び、自ら(三七)餘味がある。俗に金井玉闌といふ。人體の形に似たものは所謂孩兒參といふもので、これが就中贋物が多いのだ。宋の蘇頌の圖經本草に、潞州のものとして繪いてある三椏五葉のものは眞の人參だが、(三八)滁州のものとしてあるは沙參の苗、葉だ。心州、(三九)兗州のものとしてあるはいづれも薺苨の苗、葉だ。又、所謂江淮の土人參なるものもやはり薺苨である。いづれも考定甚だ正確を得てゐない。現今では潞州のものでさへ眞物は手に入らぬ。それ以外の地の產などとあつては、なほさら信を置くに足るものでない。近頃はまた惡辣な奸商が

蘇、安徽兩省地方ノ概稱。

(三六)字書ニ腿ハモヽ又ハハギ。大腿ハ股、小腿ハ脛ヲ云フ。

(三七)餘味トハ藥氣ガ後マデ殘リ直ニ消滅セザルコト。

(三八)滁州ハ今ノ直隷省滁縣ノ地ナリ。

(三九)兗州ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。

あつて、人蔘からエキスを取つてその殘骸を晒し乾し、それを湯蔘などと稱へて二重に賣つて居る。全然用をなさぬものなのだから瞞着されてはならない。(四〇)月池翁は諱は言聞、字は子郁、太醫吏目の銜を奉職した。嘗て人蔘傳上下二卷を著して甚だ詳細に記述してある。此にはそれを悉く載錄するわけに行かないが、その肝要な部分だけを後文に抄出することにしよう。

［修治］ 弘景曰く、人蔘は(四一)蛀、蚛に害はれ易いものだが、新器中に入れて密封して置けば年を經ても壞れないものである。炳曰く、人蔘はしばしば風や日光に當てれば蛀がつき易いが、(四二)泡淨し焙乾して麻油を盛る瓦罐へ華陰の細辛と互に交へて入れて置けば何年經つてもそのままである。また一法では、淋汁を取つた竈の灰を用ゐ、晒乾して罐に收めて置くもよい。李言聞曰く、人蔘は地に生えた時は陽に背くものだ。故に風と日光とに當ることを喜ばない。凡そ生で用ゐるには㕮咀するがよく、熟して用ゐるには紙を隔てて焙じ、或は醇酒を潤透して、㕮咀し、焙じ熟して用ゐるがよい。いづれも鐵器を忌む。

根(四三)［氣味］【甘し、微寒にして毒なし】別錄に曰く、微溫なり。普曰く、

(四〇)月池翁ハ本書ノ原著者李時珍ノ父ナリ。

(四一)蛀、蚛ハキクヒムシ。

(四二)泡淨ハ水ニ漬テ洗フコト。

(四三)木村(康)曰ク、成分ハパナキロン及ビ一種ノ無晶形ノパナックスサポゲノールヲ含有ス。其二三ノ配糖體(動物ニ對スル制糖作用ヲ有スルモノアリ)フイトステリンノ類、ステアリン酸、パルミチン酸、リノール酸、及ビ人蔘特異ノ香氣ヲ發スルトイフパナクアエンヲ含有ス。

（四四）動ハ反動ノ意。

（四五）怒性ハ反對ノ性質。

神農は小寒なりといひ、桐君、雷公は苦しといひ、黄帝、岐伯は甘し、毒なしといふ。元素曰く、性は溫、味は甘く微し苦し、氣、味倶に薄く、浮にして升る。陽中の陽である。又曰く、陽中の微陰である。○之才曰く、茯苓、馬藺が使となる。洩疏、鹵鹹を惡み、藜蘆と反す。一には五靈脂を畏れ、皂莢、黑豆を惡み、紫石英を（四四）動ず。元素曰く、人參は升麻を得ればその作用を導いて上焦の元氣を補し、肺中の火を瀉す。茯苓を得ればその作用を導いて下焦の元氣を補し、腎中の火を瀉す。麥門冬を得れば脈を生じ、乾薑を得れば氣を補す。杲曰く、黄耆、甘草を得ればば乃ち甘、溫となつて大熱を除き、陰火を瀉し、元氣を補す。又、瘡患者の聖藥である。震亨曰く、人參は手の太陰に入る。藜蘆と相反するもので、參一兩に藜蘆一錢を入れて服すればその功力が盡く喪はれる。言聞曰く、李東垣氏の脾、胃を整へ陰火を瀉する交泰丸中には人參、皂莢を用ゐてあつて、これは惡むものでありながら惡まない。古方の月經閉止を療ずる四物湯には人參、五靈脂を加へてあつて、これは畏れるものでありながら畏れない。又、痰が胸膈に在るを療ずるには人參、藜蘆を同時に用ゐてその痰を涌出させる。これはその（四五）怒性を激せしめるの

(百六)木村(康)曰ク、「エーテル可溶成分ハ大腦ニ對シテ鎭靜作用ヲ有シ、延髓ノ諸中樞即チ血管運動神經及ビ呼吸中樞ニ對シテ少量ニテ興奮、大量ニテ痲痺作用ヲ有ス。又純アルコールニテ抽出サレ得可キ一種ノ配糖體成分ハ人工的過血糖及ビ尿糖ヲ抑制スル作用アリ。故ニ人蔘ハ動物體ノ含水炭素新陳代謝ト密接ナル關係ヲ有スルモノヽ如シ。又人蔘ハ人體ノ新陳代謝ヲ興奮セシメ、其他多少利尿作用アリ。應用ハ神經衰弱、ヒステリー、其他一般病弱者ニ應用シ、強壯藥利尿劑トナス。」尚竹節人蔘ハ祛痰藥トシテ用ヰラル。

(百七)逆滿ハ胸ガ充實

だ。以上はいづれも機微靈妙に屬することで、非常に精確な鑒識手腕があつて藥と病との實際に透徹したものでなければ窺知し得ないところである。

(百六)【主治】【五臟を補し、精神を安んじ、魂魄を定め、驚悸を止め、邪氣を除き、目を明にし、心を開き、智を益す。久しく服すれば身體を輕快にし、天年を延べる】(本經)【腸、胃中冷、心腹鼓痛、胸脇(百七)逆滿、霍亂吐逆を療じ、中を調へ、消渴を止め、血脈を通じ、堅積を補し、人をして忘れざらしめる】(別錄)【五勞七傷、虛損、痿弱に主效があり、嘔噦を止め、五臟、六腑を補し、中を保ち、神を守り、胸中の痰を消し、肺痿、及び癇疾、冷氣、逆上、傷寒で食物を攝取し能はぬを治す。凡そ虛して夢多く、紛悶するものにこれを加へる】(甄權)【煩躁を止め、(百八)酸水を變ずる】(李珣)【食物を消化し、胃を開き、中を調へ、氣を治し、金石の藥毒を殺す】(大明)【肺、胃の陽氣不足、肺氣の虛促、(百九)短氣、(百十)少氣を治し、中を補し、中を緩にし、心、肺、脾、胃中の火邪を瀉し、渴を止め、津液を生ずる】(元素)【男子、婦人一切の虛證、發熱、自汗、眩運、頭痛、反胃、吐食、痎瘧、滑瀉、久痢、小便の頻數、淋瀝、勞倦、內傷、中風、中暑、痿痺、吐血、嗽血、下血、血淋、血

崩、産前、産後の諸病を治す』（珍時）

（五一）**發明**　弘景曰く、人參は藥として切要なること甘草とその功を同じうするものである。

杲曰く、人參の甘、溫は能く肺中の元氣を補ふものであつて、肺氣が旺なれば他の四臟の氣いづれも旺になり、精自ら生じて形體自ら盛になる。肺は諸氣を主るものだからである。張仲景は『病人が發汗後に身熱し、（五〇）亡血して脈が沈、遲なる者、下痢して身涼し、脈微にして血虛する者にはいづれも人參を加へる』といつた。古人が血脫の者に對して氣を益する法を講じたのは、蓋し血はそれ自ら生ずるものではなく、陽氣を生ずるの藥を得てそれに因つて始めて生ずるからであつて、陽が生ずれば陰が長じ、そこで血が始めて旺になる。單に補血藥のみを用ゐて見たところが、それでは血が由つて生じやうがないのである。素問に『陽なければ陰が發生するに由なく、陰なければ陽の働を發揮するに由なし』とある。故に氣を補ふには人參を用ゐることが必用であり、血虛のものもやはりこれを用ゐるが必用である。（五二）本草の十劑に『補とは弱を去ることである。人參、羊肉の屬をいふ』といつてある。

シテ上ヘ込ミ上ゲル氣持。
（四八）胃中ノ酸液ヲ中和スルコト。
（四九）短氣ハ呼吸促迫ヲ云フ。
（五〇）少氣ハ臓氣ノ不足、一呼脈一動、一吸脈一動ヲ少氣ト云フ。
（五一）木村（康）曰ク、我邦ニ於ケル人參ニ關スル近時ノ研究文獻ニ左ノ如キモノアリ。
藤谷巧彦―京醫二（明、三八）一九一。
近藤平三郎、天野梅太郎―藥誌四六六（大、九）一〇二七。
近藤平三郎、田中儀一―藥誌四〇一（大、四）七七九。
朝比奈泰彥、田口文太―藥誌三三一（明、三九）五四九。
阿部勝馬、齋藤糸平―慶醫二（大、一一）

二六三。
近藤平三郎、山口誠太郎―藥誌四四〇(大、七)七四七〇。
酒井和太郎―東醫三一(大、六)藥誌四四五(大、八)二四四。
近藤治三郎―日本藥物五(昭、二)三八九。
吉光寺錫、吉田利一―臨床醫學二(大、三)一一。
福田進、高木功―朝醫五〇(大、一二)一三。
(註二)亡血、血虚、血脱、皆血液ノ缺乏スルコト。
(註三)本書第一冊序例上ニ十劑ノ解アリ。

蓋し人參は氣を補ひ、羊肉は形質を補ふものであつて、形質と氣とは有形と無形とを代表するものである。

好古曰く、潔古老人は『沙參を人參の代用にするのはその味の甘を取るのだ』といつてあるが、しかし、人參は五臟の陽を補し、沙參は五臟の陰を補するものである。そこに截然たる區別がなければならない。五臟を補ふとはいひながら、やはりそれぞれの臟器に適應する藥を佐使として藥力を導くことが必要だ。

言聞曰く、人參は生で用ゐればその氣が涼であり、熟して用ゐればその氣が溫である。味の甘は陽を補ひ、微苦は陰を補ふ。そもそも氣が物を發生するの根本的の力は天の大作用に本くものであり、味が物を成育するの根本的の力は地の大作用に本くものであつて、氣と味とは發生、成育を營む陰、陽の造化の働そのものである。涼は高秋淸肅の氣だ、天の陰であつてその性は降である。溫は陽春生發の氣だ、天の陽であつてその性は升である。甘は濕土化成の味だ、地の陽であつてその性は浮である。微苦は火土相生の味だ、地の陰であつてその性は沈である。人參は氣、味俱に薄い。その氣の薄きは生では降り熟では升る。味の薄きは生では升り熟では降る。

かやうな次第で、土虛、火旺の病には生參の涼、薄の氣が適應するもので、それに依り火を瀉して土を補ふ。これは純ら其の氣を用ゐるのである。脾虛、肺怯の病には熟參の甘、溫の味が適應するもので、それに依り土を補つて金を生ずる。これは純らその味を用ゐるのだ。李東垣は、相火が脾に乘じて身熱し、煩悶し、氣高く、喘し、頭痛し、渇し、脈洪にして大なるものに對し、黃蘗を用ゐて人參を佐としてある。孫眞人は、夏季に熱で元氣を傷め、大汗し、大泄し、(五四)痿厥とならんとするを治するに生脈散を用ゐてある。それは熱火を瀉して金、水を救つたので、君藥には人參の甘、寒を用ゐて火を瀉し、元氣を補ひ、臣藥には麥門冬の苦、甘、寒を用ゐて金を淸うし、水の源を滋くし、佐藥には五味子の酸、溫を用ゐて腎津を生じ、消耗しつつあるの氣を收め蓄へしめたのである。これはいづれも天元の眞氣を補つたのであつて、熱火を補つたものでは無い。白飛霞は『人參は膏に錬つて服すれば元氣を(五五)無何有の鄕に回復する。凡そ病後の氣虛、及び肺虛で嗽するにはいづれもこれが適當である。もし氣虛で火あるものの場合は、天門冬の膏を合せて相對して服する』といつてある。

(五四)痿厥ハコシヌケ。又ハアシナヘ。

(五五)無何有ノ鄕トハ此ノ鄕ガ無イ、卽チ人間ノ思念ノ外ノ境致ナリ。莊子ニ『何不樹之無何有之鄕。廣漠之野』トアリ。

正誤

戴曰く、夏季に人蔘を少し使へば心痃の病患を發する。

好古曰く、人蔘の甘、溫は肺の陽を補ひ、肺の陰を泄すのものである。肺が寒邪を受けた場合にはこれで補ふべきだが、肺が火邪を受けたものの場合には反つて肺を傷めるものだ。沙蔘を代用するがよい。

王綸曰く、凡そ酒色の過度のために肺、腎の眞陰を損傷して陰虛し、火動し、勞嗽し、吐血し、欬血する等の病證に用ゐてはならぬ。蓋し人蔘は手の太陰に入つて能く火を補ふものだから、肺が火邪を受けたものには忌むのである。若し誤つて人蔘、黃耆等の甘、溫の劑を服すれば病は日にますます重くなる。服量が過多なれば死亡する。治療不可能だ。蓋し甘、溫は氣を助けるものだからだ。氣は陽に屬するものだから、陽が旺なれば旺なるほど陰が微弱となるのである。ただこの場合には苦、甘、寒の藥で血を生じ、火を降すがよいのである。世人はこの理論を識らずして往往蔘、耆を補するものとして服し、却て死亡するものが多いのである。

〇言聞曰く、孫眞人は『夏季に、生脈散、腎瀝湯の二劑を服すればあらゆる病が作らぬ』といつてある。李東垣もやはり『生脈散、清暑益氣湯は、三伏の際に火を

（五六）臍旁ハ中腹ノ左右ヲ指ス。

瀉し、金を益するの聖藥だ』といつてある。而るに雷斅が反對に『心痃の病患を發する』といつたのは誤である。痃とは（五六）臍旁の積氣のことだ、心の病ではない。人參は能く正を養つて堅積を破るものだ、痃病を發すべき道理が何處にあらう。張仲景が、腹中の寒氣が上衝して頭、足、上、下に觸れ近けぬほどの痛があり、嘔して飮食不能なるを治するに大建中湯を用ゐたことに就いて觀ても明ではないか。

又、海藏王好古は、『人參は陽を補し、陰を泄するものだ。肺寒には用うべきものであつて、肺熱には用うべきものでない』といひ、節齋王綸は海藏のこの說に附和して『參、耆は能く肺火を補ふものだ。陰虛、火動、失血の諸病には多く服すれば必ず死ぬ』といつて居るが、二家の說はいづれも偏見だ。そもそも人參なるものは、よく元陽を補し、陰血を生じ、陰火を瀉するものだといふことに就いては東垣李氏の說に充分明確である。仲景張氏は『亡血、血虛の者にはいづれも人參を加へよ』といひ、又『肺寒には人參を去つて乾薑を加へ、氣を壅がしめぬやうにする』といつてある。丹溪朱氏もまた『虛火を補すべきは參、耆の屬、實火を瀉すべきは芩、連の屬』といつてある。海藏、節齋二家は右三氏の說の精微を審察せずして、

『人參は火を補す』と考へたのは如何にも謬ではあるまいか。一體火と元氣とは兩立しないものである。元氣が勝てば邪火は退くもので、人參は元氣を補ふものなる以上、また一方では邪火をも補ふといふのでは反覆常なき小人だ。甘草、苓、朮と共に四君子と稱揚さるべきいはれはあるまい。けれども、王好古、王綸二家の言ふ所も强ち全部が取るに足らぬといふのではない、ただその言葉に融通の利かぬ點があつたのだ。ために盲目的にその說を信ずるものは、ただその說の一方面を固執して、遂に人參を視ること蛇蝎の如くなるに至るのがよろしくないといふのである。
凡そ人の顏色の白きもの、黃なるもの、靑きもの、瘠せ黑みたるものは、いづれも脾、肺、腎の氣の不足である。人參を用うべきだ。顏色の赤きもの、黑きものは、氣壯に神强きものである。人參を用うべきでない。脈が浮し、芤濡、虛大、遲緩にして無力のもの、沈して遲濇、弱細、結代して無力のものは、いづれも虛して不足なるものである。人參を用うべきだ。弦長、緊實、滑數にして力有るものならばいづれも火鬱、內實である。人參を用うべきでない。潔古が所謂『喘嗽に用ゐてはならぬ』といふその喘は、痰が實し、氣が壅するための喘をいふのであつて、腎虛、

氣短の喘促ならば必ず用ゐる。仲景が所謂『肺寒して欬するに用ゐてはならぬ』とあるは欬は、寒が熱邪を束ね、壅鬱して肺に在るための欬をいふのであつて、自汗、惡寒して欬するものならば必ず用ゐる。東垣の所謂『久病の鬱熱が肺に在るに用ゐてはならぬ』といふは、火が内に鬱するものは發すべきもので、補すべきものではないからだ。肺が虚して火旺、氣短、自汗するものならば必ず用ゐる。丹溪が『諸痛に驟に用ゐてはならぬ』といふは、邪氣が方に銳い場合には散すべきもので、補すべきものでないからである。裏虚して吐、利するもの、及び久病の胃弱、虚痛で按摩を好むものには必ず用ゐるのだ。そこで節齋の所謂『陰虚、火旺に用ゐてはならぬ』とある說だが、それは血が虚して火が亢ぶり、よく飲食物を攝取し、脈が弦して數なるものの場合のことだ。これを凉するならば胃を傷め、これを溫するならば肺を傷める。もとより補の作用を受入れるものではない。しかし、自汗し、氣短し、四肢が寒し、脈が虚するの場合には必ず人參を用ゐるのである。かやうに詳細に審究して見れば、人參を用うべきか用うべからざるかは思ひ半に過ぐるわけだ。

○機曰く、節齋王綸の說は海藏王好古の說に本いて居るのだが、それが一層驕激に

過ぎて居る。丹溪は『虛火は補ふべきもので、參、芪を必要とする』といひ、又『陰虛の潮熱、喘嗽、吐血、盜汗等の病證には、四物に人參、黃蘗、知母を加へる』といひ、又『好色の人が肺、腎に傷を受けた欬嗽の癒えぬには瓊玉膏を主とする』といひ、又『肺、腎の極端に虛するには獨參膏を主とする』といふ。かやうに陰虛、勞瘵の病證にして人參を用ゐぬものは未だ甞てないのである。節齋は丹溪に私淑した人だ。然るにその說はかやうに相反する。節齋が一たびかかる主張を公にしてより、その後の者の腦裏に深い先入主を與へて了つたために、凡そ前記の諸證の病にさへ遭遇すれば、その病がこれを用うべきと用うべからざるとに頓着なく、一概にその說に藉口して、一廉の良醫さへこの說あるが故に人參を用うることを控へ目にし、または人參を用ゐなかつた場合、病家から受ける非難を拒ぐための口實に供せんとするやうになり、病家側でもこの說の先入主を抱くところから、苦、寒のものを甘んじ服して、上には嘔吐し、下には泄痢し、死を去ること遠からざるに至つても、尙ほその誤を悟らないといふ有樣だ。古今を通じ、勞を治するの名醫として葛可久以上の達人はないのである。その可久の獨參湯、保眞湯には、いづれも人參を除外し

て用ゐなかつたといふものはないのである。節齋の説はそれ等に關する研究が誠に精到を缺いてゐる。

楊起曰く、人參の功力は本草に記載され、世間一般に周知の事實である。然るに、近來の病家は金を吝んで醫者の報酬を薄くし、醫者はまた藥價計算の引合はぬために、治療に臨んで人參を用ふべき場合にも用ゐない。そのために輕きものは重く、重きものは危篤に陷らすといふ惡傾向に墮して居る。かやうな次第で、肺寒、肺熱、中滿、血虛の四證の場合には、ただ寒を散じ、熱を消し、脹を消し、營を補へば充分だ。人參を用ゐる必要はないといふものもある。その説は如何にも妥當に近い。しかしながら、それぞれの方中に人參を加へれば、元氣を保護し、持續し、諸種の藥品の力を助けて强力ならしめ、その功果を一層速に、且つ有效ならしむる事實をば甚だ閑却した淺見といはねばならぬ。氣に對しては補の法がないなどといふならば、それは非常な謬妄だ。古方には、肺寒を治するには溫肺湯を以てし、肺熱には清肺湯を以てし、中滿には分消湯を以てし、血虛には養營湯を以てして、いづれも人參をその中に入れてある。これは邪が輻輳すればその氣が必ず虛するが故である。

（五七）活水ハ長流水ノコト。

又曰く、正を養へば邪は自ら除き、陽が旺なれば陰血が生ずる。要は配合その宜しきを得るに在るのだ。庸醫はよく『人參は輕輕しく用ゐられぬ』といふが、それがまことに庸醫の庸醫たる所以なのだ。人生に敬虔なる有識者としては、生命を安價に扱つて醫師の報酬を値切らうとする態度はよくないし、醫師としてもまた、營利一點張で良藥を用ゐないといふ心術はよろしくない。此に著錄して切に忠言を進める。迂なりとして郤けられぬやうに願ひたい。

附方 舊九、新六十八。【人參膏】人參十兩を細切して（五七）活水二十盞を浸透し、銀、石器に入れて桑柴火で緩かに煎じ、十盞に煎じて汁を濾し、また再び水十盞で五盞に煎じ、嚢に濾した汁と合煎し膏にして瓶に取收め、治せんとするその病に隨つてそれを湯にして用ゐる。丹溪は次の如く言つて居る。『房事過度で腎氣が衰へ疲れ、欬嗽の止まぬのは、生薑、橘皮の煎湯でこの膏を溶して服す。浦江の鄭君は五月に痢を患ひ、また房室を犯した。すると忽ち昏運を發し、意識不明となり、手は撒開し、目は暗み、雨のやうに自汗を出し、喉中の痰は鋸を挽く聲のやうに鳴り、小便は遺失し、脈は非常に大となつた。これは陰虧陽絶の證である。その時予は

急に大料の人參膏を煎じさせ、先づ病人には(五八)氣海に十八壯を灸すると、右手がよく動くやうになり、更に再び三壯灸すると、口唇を微に動かすやうになつたので、そこで右の膏一盞を服ませ、夜半後にまた三盞を服ませると、眼球はよく動くやうになり、三斤まで完全に服ませると、始めて物を言ひ、「粥が欲い」と言出した。かくて五斤まで服んで痢が止り、十斤まで服んで全く平安を得たのであつた。これを若し風の病として治療を施したならば誤つてゐたに相違ない。またある背疽の患者は、(五七)內托十宣の藥を服して已に多く膿を出し、嘔を作し、發熱し、六脈が沈、數にして力があつた。これは潰瘍としての忌むべき症狀である。そこで大料の人參膏に竹瀝を入れて飲ませ、人參を飲盡すこと十六斤、竹を伐ること百餘本にして平安を得た。ところが十日餘を經過して後、木を拔くの大風に遇つて瘡が起り、化膿したその中に一筋の紅い線があつて肩胛から右肋にまで及んでゐたが、これを見た予は、急に參膏を作り、芎、歸、橘皮と湯にして竹瀝、薑汁を入れて飲ませると、三斤分まで飲んで瘡は潰れ、共後手當をして平安になつた。癰疽が潰れて後に氣、血俱に虛し、嘔逆し、食餌不能となり、病證が種種に變化して一定せぬものの場合

(五八)氣海ハ經穴ノ名。臍下一寸五分ニアリ。

(五九)和劑局方八卷ニ化毒排膿內補十宣散アリ。

(六〇)胸痺ハ肋膜、胸腔ノ病。
(六一)結胸ハ胃弱消化不良ニテ痛ミアルヲ云フ。
(六二)胸滿ハ胸痞ニ同ジ。胃弱ニテ痛マザルモノヲ云フ。

には、參、耆、歸、朮等分を膏に煎じて服するが最も妙である』【治中湯】頌曰く、張仲景は、(六〇)胸痺、心中の痞堅、留氣、(六一)結胸、(六二)胸滿、脇下の逆氣が心を搶くを治するに治中湯を主として用ゐた。卽ち理中湯である。人參、朮、乾薑、甘草各三兩の四味を水八升で三升に煮取り、每服一升を一日三回に服し、その病證に隨つて加減する。この方は晉、宋以後、唐に至るまでの名醫が心腹の病を治するに必要缺く可からざるものとなつてゐた。或は湯にし、或は蜜で丸にし、或は散にし、いづれも奇效がある。胡洽居士は霍亂を治するにこれを用ゐて溫中湯と呼んだ。陶隱居の百一方には『霍亂の場合、他の藥劑の得難いときは治中丸、四順湯、厚朴湯を用うるがよし。これは暫くも缺く可からざるものだから、豫め製劑して常備して置く必要がある』といひ、唐の石泉公王方慶は『この數方はただ霍亂の治療のみならず、諸種の病に施していづれも治效を擧げる』といつてある。四順湯とは、人參、甘草、乾薑、附子を炮いて各二兩、水六升を二升半に煎じ、四回に分服するのである。【四君子湯】脾、胃の氣虛で食思なきもの、諸病の氣虛を治するにはこの藥が主たるものだ。人參一錢、白朮二錢、白茯苓一錢、炙甘草五分、薑三片、棗一個、

水二鍾を一鍾に煎じて食前に溫服する。病證に隨つて加減を要す。(和劑局方)【胃を開き、痰を化す】食思なきには、大人、小兒に拘らず、人參を焙じて(六三)二兩、半夏を薑汁に浸して焙じて(六四)五錢を末にし、(六五)飛羅麪で作つた糊で綠豆大の丸にし、一日三回、食後に薑湯で三五十丸づつを服す。聖惠方では陳橘皮五錢を加へる。(經驗方)【胃寒の氣滿】傳化不能で飢ゑ易く、食物を攝取し能はぬには、人參末二錢、生附子末半錢、生薑二錢を水七合で二合に煎じ、雞子淸一箇を入れて攪き廻して空心に服す。(聖濟總錄)【脾、胃の虛弱】食思なきには、生薑半斤から取つた汁で白蜜十兩、人參末四兩を銀鍋で煎じて膏にし、米飮で一匙づつを調へて服す。(普濟方)【胃虛の惡心】或は嘔吐し、痰あるには、人參一兩を水二盞で一盞に煎じて竹瀝一盃、薑汁三匙を入れ、食事時間と遠く溫服し、奏效の自覺あるを程度とする。老人に用ゐて就中よし。(簡便方)【胃寒の嘔惡】固形物、流動物の消化惡く、食へば直ちに嘔吐するには、人參、丁香、藿香各二錢半、橘皮五錢、生薑三片を水二盞で一盞に煎じて溫服する。(拔萃方)【反胃嘔吐】飮食物が口に入れば直ちに吐き、衰弱して力なく、死に垂たるには、上黨の人參三大兩を打ち破つて水一大升で四合に煮取り、一日

(六三)大觀ニハ二ヲ四ニ作ル。
(六四)大觀ニハ五錢ヲ一兩ニ作ル。
(六五)飛羅麪ハウドンコ。

（六六）酸ハ苦痛不快ノ意。

二回に熱服して同時に人參汁に粟米、雞子白、薤白を入れて煮た粥を食はす。司勳の李直方が漢南でこの病を患つたときは、二箇月餘に亙りて諸種の方を用ゐても瘥えなかつたが、この方を與へると間もなく瘥えて、後十餘日にして上京した。絳は諸名醫に會ふ毎に、この藥の比類なき偉效を主張し推奬して居る。（李絳兵部手集）【食後直ちに吐くもの】人參半夏湯——人參一兩、半夏一兩五錢、生薑十片を、水一斗を杓で二百四十回揚げ落して三升を取り、白蜜三合を入れた中へ入れて一升半に煮取つて分服する。（張仲景金匱方）【霍亂嘔惡】人參二兩を水一盞半で一盞に煎じ、雞子白一箇を入れて再び煎じて溫服する。一には丁香を加へる。（衛生家寶方）【霍亂煩悶】人參五錢、桂心半錢を水二盞で煎じて服す。（聖惠方）【霍亂吐瀉】煩躁して止まぬには、人參二兩、橘皮三兩、生薑一兩を水六升で三升に煮て三回に分服する（聖濟總錄）【妊娠吐水】（六六）酸心、腹痛して飮食不能なるには、人參、乾薑を燒いて等分を末にし、生地黃汁で和して梧子大の丸にし、五十丸づつを米湯で服す。（和劑局方）【陽虛氣喘】自汗、盜汗、氣短、頭運するには、人參五錢、熟附子一兩を四帖に分け、一帖に就き生薑十片を入れて流水二盞で一盞に煎じ、食後時間を隔てて溫服する。（濟生方）

【喘急で絶息せんとするもの】上氣し、(六七)嗚息するには、人參末方寸匕を一日五六回湯で服すれば效がある。(肘後方)【產後の發喘】これは血が肺竅に入る危險症狀である。人參末一兩、蘇木二兩、水二盌の煮汁一盌で人參末を調へて服すれば神效がある。(聖惠方)【產後の血運】人參一兩、紫蘇半兩を童尿、酒、水(六八)三合で煎じて服す。(醫方摘要)【產後の言語不能】人參、石菖蒲、石蓮肉等分を五錢づつ水で煎じて服す。(婦人良方)【產後の諸虛】發熱、自汗するには、人參、當歸等分を末にし、(六九)豬腰子一個を膜を去り小片に切つて水三升、糯米半合、葱白二莖と共に煮て、米が熟したときその汁一盞を取り、それに末藥を入れて八分に煎じ、食前に溫服する。(永類方)【產後の祕塞】出血多きには、人參、麻子仁、枳殼を麸で炒り末にして煉蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつを米飲で服す。(濟生方)【橫產、逆產】人參末、乳香末各一錢、丹砂末五分をむらなく研り、雞子白一箇に生薑自然汁三匙を入れて攪ぜたもので冷服する。母子共に平安を得るの神效がある。これは施漢卿の方である。(婦人良方)【(七〇)開心、益智】人參末一(七一)兩を鍊成して(七二)豶豬の肥肪十(七三)兩と淳酒でよく和し、一日二回、一盃づつを服す。百日經てば耳目が聰明になり、骨髓が充實し、肌

(六七)嗚息ハ喘息ニ同ジ。大觀ニハ喘息ニ作ル。
(六八)三合ハ摘要ニハ三物ニ作リ、物字ノ下ニ同字アリ。
(六九)豬腰子ハ豬腎ナリ。喬木部ニ豬腰子アリ之トハ別ナリ。
(七〇)開心ハ心ヲ開クコト。
(七一)大觀ニ分ニ作ル
(七二)豶ハ豕ノ睾丸ヲ拔キタルモノ。
(七三)大觀ニ分ニ作ル

(七四)怔忡ハムナサワギ。

膚が潤澤になり、日毎に千言の書を記憶し、同時に風熱、痰病を去る。(千金方)【雷鳴を聞いて昏倒するもの】七歳位の小兒で雷を聞いて昏倒し、人事不省となるは氣怯である。人參、當歸、麥門冬各二兩、五味子五錢を水一斗で煎じて汁五升を取り、その滓に更に水五升を入れて二升の煮汁を取り、前の汁と合せ煎じて膏にし、三匙づつを白湯に溶して服す。一斤まで服すれば、その後は雷を聞いても驚かぬ。(楊起簡便方)【突然喘して悶絶するもの】方は大黃の條を見よ。【離魂病】寢ると自身以外に更に一個の身體あるを覺え、その幻身は實際の身體と毫も變らぬが物を言へぬだけの奇病である。蓋し人間は寢れば魂が肝に歸入するのであるが、この病は肝が虛し、邪惡が襲ふてその歸入を妨げるのであつて、これを離魂病といふ。人參、龍齒、赤茯苓各一錢を水一盞で半盞に煎じ、飛過した朱砂末一錢を調へて睡らんとする時に服す。一夜に一服し、三夜を經過すれば眞の身體の氣が爽になり、假の身體は消失する(夏子益怪證奇疾方)【(七四)怔忡自汗】心氣不足である。人參半兩、當歸半兩を用ゐ、豬腰子二個を水二盌で一盌半に煮て腰子を去つた汁の中に入れて八分に煎じ、汁から取去つた腰子を細に切つて空心にその汁で食ふ。汁の滓を焙乾して末にし、山

藥末で作つた糊で綠豆大の丸にし、五十丸づつを食後時間を隔てて棗湯で服す。兩服に過ぎずして癒える。これは崑山神濟大師の方である。一には乳香二錢を加へる。(王璆百一選方)【心下の結氣】凡そ心下硬く、按診するにその部位一定せずしてただ膨滿し、多食すれば吐し、(七五)氣を前後に引き、(七六)噫呃して癒えぬもの、これは過慮が原因で、氣が一定の時に順行せずしてために結滯するのである。これを結氣といふ。人參一兩、橘皮を白を去つて四兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にして五六十丸づつを米飮で服す。(聖惠方)【房後の困倦】人參七錢、陳皮一錢を水一盞半で八分に煎じ、一日二回、食前に溫服する。これは千金不傳の方である。(趙永菴方)【虛勞發熱】愚魯湯——上黨の人參、(七七)銀州の柴胡各三錢、大棗一箇、生薑(七八)三兩、水一鍾半を(七九)七分に煎じ、一日二回、食事時間に遠く溫服し、癒るを度とする。(奇效良方)【肺熱聲啞】人參二兩、訶子一兩を末にして噙み嚥む。(丹溪摘玄)【肺虛の久欬】人參末二兩、鹿角膠を炙り研つて一兩を、薄荷豉湯一盞、葱少量を銚子に入れて一二沸煎じた湯を用ゐ、その湯と盞に入れて溫めて欬の出る時三五口呷ふが甚だ佳し。(食療本草)【嗽を止め痰を化す】人參末一兩、明礬二兩を用ゐ、(八〇)釅酢二升で礬を熬めて膏に

(七五)此氣ハ腹ノ瓦斯ナラン。
(七六)噫呃ハオクビ。
(七七)銀州ハ北周ニ置キ唐コレニ因ル。今ノ陝西省米脂縣ノ東北ニ故城アリ。
(七八)奇效良方ニハ三兩ヲ三片ニ作ル。
(七九)良方ニハ七分ヲ六分ニ作ル。
(八〇)釅酢ハ醲厚ナル酢。

した中へ參末を入れ煉蜜を和して取收め、豌豆大の一丸づつを舌の下へ置けば嗽は止み、痰は自ら消す。(簡便方)【小兒の喘欬】發熱自汗して(八一)吐紅し、脈が虛して力なきには、人參、天花粉等分を半錢づつ蜜水で調へて服し、瘥えるを度とする。(經濟方)【喘欬嗽血】欬喘上氣、喘急嗽血、吐血して脈に力なきには、人參末三錢づつを雞子淸で調へて五更の初刻に服し、そのまま就寢して枕を取去つて仰臥すれば只一服で癒える。年深きものは再服、喀血するものは一兩を服し盡せば甚だ結果が好し。ある方では、烏雞子を水に千遍磨り、自然に化して水にしたもので藥を調へるのが就中妙である。醋きもの、鹹きもの、腥きもの、醬や、麪や、鮓や、醉ひ又は飽食することを忌む。適度に攝養するが佳し。(沈存中靈苑方)【欬嗽吐血】人參、黃耆、飛羅麪各一兩、百合五錢を末にして水で梧子大の丸にし、五十丸づつを食前に茅根湯で服す。○朱氏集驗方では、人參、乳香、辰砂等分を末にし、烏梅肉で和して彈丸大の丸にし、一日一回、一丸づつを白湯に化して服す。【虛勞吐血】甚しきには、先づ(八二)十灰散で之を止める。その患者は必ず困倦するものだから、陽を補ひ陰を生ぜしむるが法則であつて、獨參湯を主として用ゐる。好き人參一兩、肥えた棗五

(八一)吐紅ハ血痰ノコトナラン。

(八二)十灰散、金陵本ニ十液散ニ作ル。濟生全書ニ十灰圓ノ方アリ、考フ可シ。

(八三)寒食ハ冬至ヲ去ル一百五日ヲ云フ。支那ニテ上古此日火ヲ禁ジ寒物ヲ食スルノ風アリシナリ。

個、水二鍾を一鍾に煎じ服して熟睡する。覺めれば病は五六分まで減ずるから、繼いて調理の藥を服す。(葛可久十藥神書)【吐血、下血】七情に何等かの烈しき衝動を受け、又は酒色に因る内傷が原因で、氣血の運行が常軌を逸し、口、鼻から共に出血して心、肺の脈が破れ、血が泉の如く涌くものは、咄嗟にして救ひ難きに陷るものだ。人參を焙じ、側柏葉を蒸して焙じ、荊芥穗を燒いて性を存して各五錢を末にし、以上を二錢に對して飛羅麪二錢を入れ、新汲水で調へて稀糊のやうにして服す。少頃して再び一服を啜れば立ろに止る。(華陀中藏經)【衄血の止まぬもの】人參と(八三)寒食の日に採つた柳枝と等分を末にし、一日三回、一錢づつを東流水で服す。柳枝がなければ蓮子心を用ゐる。(聖濟總錄)【齒縫の出血】人參、赤茯苓、麥門冬各二錢、水一鍾を七分に煎じ、一日二回、食前に溫服する。蘇東坡はこれを實驗してその效果の著しいことを稱へてゐるが、予の子供がこの病に罹つたときも屢〻これを試みて、その都度東坡の言つた通りの效果があつた。(談埜翁試效方)【陰虛尿血】人參を焙じ、黄耆を鹽水を用ゐて炙いて等分を末にし、紅皮の大蘿蔔一個を四片に切つて蜜二兩に一片づつひたして炙乾し、また更に幾回も蜜が盡きるまで蘸して焦さぬやう

（八四）六脈トハ心、肝、腎、肺、脾、命門ノ六脈。

に炙き、その一片づつを末藥を蘸けて食ひ、鹽湯で飲下す。瘥えるを度とする。（王因方）【沙淋、石淋】方は上に同じ。【消渇引飲】人參を末にして雞子清で調へ、一日三四回、一錢づつを服す。○集驗では、人參、栝樓根等分を生で研つて末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、一日二回、百丸づつを食前に麥門冬湯で服す。癒えるを度とする。これを玉壺丸と名ける。酒や麪類や肉類の炙煿した物を忌む。○鄭氏家傳の消渇方では、人參一兩、粉草二兩を雄豬膽汁に浸して炙き、腦子半錢と末にして芡子大の丸にし、一丸づつを嚼んで冷水で服す。○聖濟總錄では、人參一兩、葛粉二兩を末にし、燖豬湯一升にその藥と蜜二兩とを入れて慢火で三合に熬り、黑餳のやうにして瓶に貯へ、發病したとき毎夜一匙づつを含んで嚥む。三服を過ぎずして效が現はれる。【虛瘧發熱】人參二錢二分、雄黃五錢を末にし、端午の日に糉尖を用ゐて搗いて梧子大の丸にし、發作の日の早朝に井華水で七丸を呑下し、發作の直前に再服する。すべての熱物を忌む。立ろに效がある。ある方では、神麴等分を加へる。（丹溪纂要）【冷痢厥逆】（八四）六脈の沈、細なのには、人參、大附子各一兩半を用ゐ毎服半兩を、生薑十片、丁香十五粒、粳米一撮、水二盞を七分に煎じたもので空心

に温服する（經驗方）【（八五）下痢禁口】人參、蓮肉各三錢を井華水二盞で一盞に煎じ、少量づつ吸ひ込む。或は薑汁、炒黃連三錢を加へる。（經驗良選方）【老人の虛痢】痢して止まず、飲食不能なるには、上黨の人參一兩、鹿角を皮を去つて炒り研つて五錢を末にし、一日三回、方寸匕づつを米湯で調へて服す。（十便良方）【傷寒の（八六）壞證】凡そ傷寒、時疫には、陰、陽、老、幼と妊婦とを問はず、また藥餌を誤服して重體に陷り、垂死の狀態で脈が沈、伏し、人事不省となり、已に七日を經過したものは皆左の方を服するがよい。百に一も過たぬ。この方は奪命散と名け、また復脈湯と名ける。人參一兩、水二鍾を緊火で一鍾に煎じ、井水に浸して冷して服す。少頃して鼻梁に汗を出し、脈が復して立ろに瘥える。侍郎の蘇韜光はこの方で數十人の人命を救つたといふ。予が淸流縣知事在職中、副知事申屠行輔の息の妻が時疫に罹り、三十餘日に及んで已に壞病となつて居つたが、この藥を服して平安を得た。（王璆百一選方）【傷寒（八七）厥逆】身體に微熱があつて煩燥し、六脈が沈、細、微、弱なるは、陰極つて躁を發したものである。無憂散——人參半兩、水一鍾を七分に煎じ、牛膽、南星末二錢を調へて熱服すれば立ろに甦る。（三因方）【陰を夾む傷寒】第一次

（八五）下痢禁口ハ下痢シテ食慾ナキモノ。

（八六）壞證トハ誤治ノ爲ニ惡變セル病。

（八七）厥逆ハ衝心ヲ云フ。

(八八)猳ハ牡豕。
(八九)金銀湯ハ即金錢薄荷湯ナリ。元ト薄荷ヲ省イテ金錢湯トナシタルニ後ニ誤ツテ金銀湯トナレリト云フ。金錢薄荷ハ薄荷ノ一名ト此書ニアレドモ、連錢草即カキトウシトナス方穩當ナラン。
(九〇)瞳斜トハ眼睛ガ不正ニナルコト。

には房事が原因で、第二次には寒邪を感じ、ために陽衰へ陰盛となり、六脈が沈伏し、小腹が絞痛し、四肢が逆冷し、清水を嘔吐する。この藥の力に賴る以外には陽の囘復は覺束ない。人參、乾薑を炮いて各一兩、生附子一箇を八片に破り、水四升半で一升に煎じて頓服する。脈が出て身體が溫り直ちに癒える。(吳綬傷寒蘊要)【筋骨の風痛】人參四兩を酒に三日間浸して晒し乾し、土伏苓一斤、山慈姑一兩と末にして煉蜜で梧子大の丸にし、一百丸づつを食前に米湯で服す。(經驗方)【小兒の風癇】瘛瘲するには、人參、蛤粉、辰砂等分を末にし、(八八)猳猪心の血で和して綠豆大の丸にし、一日二囘、五十丸づつを(八九)金銀湯で服すれば大いに神效がある。(衞生寶鑑)【脾虛の慢驚】黃耆湯——黃耆の發明の項を見よ。【痘疹の險證】保和湯——黃耆の發明の項を見よ。【驚後の(九〇)瞳斜】小兒が驚後に瞳の不正なるには、人參、阿膠、糯米を炒つて珠にし、一日二囘、各一錢を水一盞で七分に煎じて溫服する。癒えれば止める。(直指方)【小兒の脾風】衰弱甚きには、人參、冬瓜仁各半兩、南星一兩を漿水で煮てから末にし、一錢づつを水半盞で三分に煎じて溫服する。(本事方)【酒毒の目盲】ある患者は、平常體質が實し、好んで熱酒を飲み、それが突然病んで目盲とな

り、脈が濇るのであつた。これは熱酒で胃氣を傷害し、汚濁した血がその中で死するために起つたものである。蘇木煎湯で人參末一錢を調へて服せると、翌日鼻、及び兩手の掌が皆紫黑色になつた。これは滯血を行したのである。再び(九一)四物湯に蘇木、桃仁、紅花、陳皮を加へて人參末を調へて服ませると、數日にして癒えた。(丹溪纂要)【酒毒で生じた疽】ある婦人患者は、平常酒を嗜んで胸に一箇の疽を生じ、脈が緊くて濇るのであつたが、酒で炒つた人參、酒で炒つた大黃等分を末にし、薑湯で一錢を服んで睡らせると、汗を出して治效があつた。(丹溪醫案)【狗咬風傷】腫痛するには、人參を桑柴火上で燒いて性を存し、少時盌を覆ふて置いて末にし、それを摻れば立ろに痊える。(經驗(九二)方)【蜈蚣の咬傷】人參を嚼んで塗る。(醫學集成)【蜂蠆の螫傷】人參末を傅ける。(證治要訣)【脇を破つて腸の露出せるもの】急に油を抹して入れて人參、枸杞の汁を淋ぎ、內用として羊腎粥を食へば十日にして癒える。(危氏得效方)【(九三)氣奔怪疾】方は虎杖の條を見よ。

蘆

氣味　【苦し、溫にして毒なし】

主治　【虛勞の痰飲を吐す】(時珍)

發明　吳綬曰く、患者の體質の弱い場合には人參蘆を瓜蒂に代へて用ゐる。

(九一)四物湯ハ當歸、川芎、芍藥、熟地黃ノ四物。

(九二)大觀ニ方ノ上ニ後字アリ。

(九三)氣奔トハ全體ノ皮膚ガ急ニ痒クナリ之チ搔ケバ血出ヅルモノ。

震亨曰く、人參は手の太陰に入つて陽中の陰を補ふものだが、蘆は反つてよく太陰の陽を瀉す。これはやはり、麻黄が苗はよく汗を發し根は汗を止め、(九四)穀は金に屬しながら糠の性は熱であり、麥は陽に屬しながら麩の性は涼であるやうなものである。既往の先覺者は、物箇箇それぞれに宇宙の極致を具有して居るといつた。斯業の研究に從事するものは、その物類の眞實體に觸れてその推究を極致までに進めるといふ態度でなければなるまいと思ふ。ある婦人は性躁しく、食物が贅澤だつたが、暑季中に激怒したことが原因で(九五)呃を病み、發作するごとに全身跳躍し、昏冒して意識を失ふに至るのであつた。しかし形體と氣力とは倶に實してゐるのである。これは痰が怒のために鬱して氣が降り得ぬのである。治法としては吐かす以外に途がなかつたので、人參蘆半兩を逆流水一盞半で一大盌に煎じて飮ませると、大いに吐いて數盌ほどの頑痰を吐出し、大いに發汗し、一日昏睡して平安になつた。又、ある患者は勞症となつて瘧を發し、瘧の藥を服すると變じて熱病となり、(九六)舌短し、痰嗽し、六脈が洪、數となつて滑するのであつた。これは胸中の蓄痰であつて、吐かす以外に治法はない。そこで參蘆湯に竹瀝を加へて二服飮ませると

(九四)穀ハ米穀。

(九五)呃ハシヤクリ。

(九六)舌短ハ舌ガ縮ムコトナラン。

(九七)膠痰三塊を涌出し、次に人參、黄耆、當歸を煎じて服ませると半月にして平安を得た。

沙參（本經上品）

和名　しやじん、一名つりがねにんじん
學名　Adenophora polymorpha, Ledeb. var. latifolia, Herd.
科名　ききやう科（桔梗科）

校正　別錄有名未用の部の羊乳を併せ入る。

釋名　**白參**（吳普）**知母**（本經）(一)**羊乳**（別錄）**羊婆奶**（綱目）**鈴兒草**（別錄）**虎鬚**（別錄）**苦心**（別錄）また文希と名け、一名識美、一名志取ともいふ。弘景曰く、この物は人參、玄參、丹參、苦參と共に五參といふ。その形が全然相類するものではないが、主たる治效を有する對症が頗る同じいところから、いづれも參なる名稱を付したのである。又、紫參といふもあるが、それは牡蒙のことである。

時珍曰く、沙參は白色のもので、生育が沙地に適するところから斯く名けたのである。その根には白汁が多いので俚俗に羊婆奶などと呼ぶ。別錄の有名未用の部に羊乳とあるはこの物だ。この物には(二)心がなく、味は淡い。而るに別錄に一名苦心と

(九七)膠痰ハ粘痰。

(一)白井曰ク、小野蘭山曰ク、羊乳モト別錄ニハ別條ナリシヲ時珍沙參ノ條ニ併セテ一トスルハ非ナリト。松岡恕菴曰ク、「沙參一種蔓延スルモノ、莖葉頗ル異ナリ。貝原損軒翁此ヲ以テ羊乳根トナス、本草綱目藏器ノ說ト符合セリ。沙參ニ比スルニ但氣稍薄シ」ト。本邦蔓生ノモノ、つるにんじん、ばあそぶノ二種アリ。一種支那產ノモノニテ、Codonopsis Tangshen, Oliv.（黨參）ト稱スルモノアリ。藥トシテ人參ノ代用トスト云フ。

(二)心ハ根ノ中心ノ堅キ部分。

あり、また知母と同一名稱を呼ぶはその理由が判らない。鈴兒草と呼ぶはその花の姿態の形容である。

【集解】 別錄に曰く、沙參は(三)河內の川谷、及び(四)寃句、(五)般陽、(六)續山に生ずる。二月、八月に根を採取して暴乾する。又、羊乳、一名地黃と名けるは、三月採收する。立夏の後に母が枯れる。恭曰く、(七)華山に產するものが善い。普曰く、二月葵のやうな苗を生ずる。葉の色は靑く、(八)根は白く、實は芥のやうだ。根の太さは蕪菁ほどある。三月に採取する。弘景曰く、今は近き諸地方に產する。叢生するものだ。葉が枸杞に似て根の白く實したものが佳い。保昇曰く、その根は葵根のやうだ。その花は白色である。

〔沙參〕

頌曰く、今は(九)淄、齊、潞、(一〇)隨、(一一)江、淮、荆、湖の州郡にいづれも有る。苗の長さは一二尺ほどで崖壁の間に叢生し、葉は枸杞に似て(一二)叉丫があり、七月紫の花を開く。根は葵

(三)河內ハ石部鹵石類綠礬ノ註ヲ見ヨ。
(四)寃句ハ漢ノ縣名、金ニ廢ス。今ノ山東省荷澤縣ノ西南方、直隸、河南兩省境ノ地ナリ。
(五)般陽ハ今ノ山東省淄川縣ノ地ナリ。
(六)續山、未詳。
(七)華山ハ水部玉井水ノ註ヲ見ヨ。
(八)一本ニ根ヲ花ニ作ル。
(九)淄ハ石部代赭石ノ淄州ノ註、齊ハ石部附錄薑石ノ齊州ノ註、潞ハ人參ノ潞州ノ註參照。
(一〇)隨ハ春秋時代ノ隨國、劉宋ノ隨陽郡、蕭齊ノ隨郡ニシテ淸ノ隨州ノ地方ヲイフ。今ノ湖北省隨縣一帶ノ地ナリ。
(一一)江ハ江蘇、淮ハ安徽、荆ハ湖北、湖

ハ湖南地方ヲイフ。
(一二)大觀本草ニ叉有牙ニ作ル從フベシ。牙トハ鋸齒ノコトナリ。
(一三)大觀本草ニ筋許トアリ、筋ハハシノコトナリ。
(一四)牧野云フ、羊乳ハ蓋シ和名つるにんじん、學名Codonopsis lanceolata, Benth. et Hook. fil. ヲ指シタルモノナラン。
(一五)鈴鐸ハ風鈴狀ヲ云フ。
(一六)一虎口トハ拇指ト食指トニテ作ル環ノ太サヲ云フ。

根のやうなものだ。太さ(一三)指ほどある赤黄色のもので、中身が正白で實したものが佳い。二月、八月に根を採る。南方地方に生ずるものには葉の細いものも太いものもあり、花は白く瓣の表面に白粘のある點がやや異つてゐる。藏器曰く、(一四)羊乳の根は薺苨のやうで圓く、大さは拳ほどあつて上に角節があり、折れば白汁が出る。世間ではこの根を取つて薺苨だといつてゐる。苗は蔓になり、折れば白汁が出る。

時珍曰く、沙參は諸處の山や原にある。二月に苗を生じ、葉は初生の小葵の葉のやうで扁圓形で光らない。八、九月に莖が抽き出て高さ一二尺になり、莖の上の葉は尖つて長く、枸杞の葉を小さくしたやうで細齒があり、秋季に葉の間に小さき紫の花を開く、花の長さは二三分あり、(一五)鈴鐸のやうな形狀で五出の白蕊である。また花の白いものもある。いづれも冬青の實ほどの大さで中に細子のある實を結び、降霜後に苗が枯れる。その根は沙地に生じたものは長さ一尺餘、太さ(一六)一虎口ほどあり、黃土質の土地に生じたものは短く細い。根、莖共に白汁がある。八、九月に採つたものは白く實し、春季に採つたものは微黃で虛してゐる。狡猾な商人共はまた往往紮げて蒸し、壓し堅めて人參の贋物を作るが、但しその贋物は質が輕く柔か

く、味は淡くして短いものだ。

根【氣味】【苦し、微寒にして毒なし】別錄に曰く、羊乳は溫にして毒なし。普曰く、沙參は、岐伯は鹹しといひ、神農、黃帝、扁鵲は毒なしといひ、李當之は大寒なりといふ。好古曰く、甘くして微し苦し。之才曰く、防已を惡み、藜蘆と反す。

【主治】【(一七)血結、驚氣に寒熱を除き、中を補し、肺氣を益す】(本經)【(一八)胸痺、心腹痛、結熱、邪氣、頭痛、皮間の邪熱を療じ、五藏を安んず。久しく服すれば人體を利す。又曰く、羊乳は(一九)頭腫痛に主效があり、氣を益し、肌肉を長ず】(別錄)【皮肌の(二〇)浮風、疝氣(二一)下墜を去り、常に眠を欲するを治し、肝氣を養ひ、五臟の(二二)風氣を宣す】(甄權)【虛を補し、驚、煩を止め、心、肺を益し、幷に一切の惡瘡、疥癬、及び身痒に膿を排し、腫毒を消す】(大明)【肺火を淸くし、久欬、肺痿を治す】(時珍)

【發明】元素曰く、肺寒には人參を用ゐ、肺熱には沙參を代用する。それはその味の甘を取るのだ。好古曰く、沙參は味甘く微し苦く、(二三)厥陰本經の藥、又、脾

(一七)大觀本草ニ血積トアリ。
(一八)大觀本草ニ胃痺ニ作ル。
(一九)大觀本草ニ頭眩痛ニ作ル、即頭痛メマヒナリ。
(二〇)浮風ハ輕キ風邪カ。
(二一)下墜ハ脱腸ノコト。
(二二)風氣ハ邪氣。
(二三)厥陰ハ三陰經ノ一。

經の氣分の藥であつて、微苦は陰を補し、甘は陽を補す。それゆゑに潔古は沙參を用ゐて人參に代へたのである。蓋し人參は性が溫で五臟の陽を補し、沙參は性が寒で五臟の陰を補するのであつて、同樣に五臟を補すとはいひながら、やはり五臟それぞれ對する藥を以て佐、使とし、その適當に功力を誘導する所に隨つて互に功力の發揮を輔けるがよいのである。

時珍曰く、人參は甘く苦くして溫である。その體は重く實する。專ら脾、胃の元氣を補することに因つて肺と腎とを益するのである。故に內に元氣を傷めたものに適するのだ。沙參は甘く淡くして寒である。その體は輕く虛する。專ら肺氣を補することに因つて脾と腎とを益するのである。故に金が火の剋を受けたものに適するのだ。前者は陽を補して陰を生じ、後者は陰を補して陽を制するのである。この相異に就いて明な識別がなければならぬ。

附　方　舊一、新二。

【肺熱欬嗽】沙參半兩を水で煎じて服す。（衞生易簡方）

【突然に發した疝氣】小腹、及び陰中が牽き吊り、絞るやうに痛んで自汗し、死せんとするには、沙參を搗き篩つて末にし、酒で方寸匕を服すれば立ろに瘥える。（肘後方）

【婦人

（二四）下元ハ腎臟ヲ指ス。

（二五）大觀本草ニハ圖經本草ヲ引ク。

（一）白井曰ク、薺苨、杏葉沙參二種ナリ。時珍併セテ一トス、非ナリ。植物名實圖考ニ別種トス、從フベシ。杏葉沙參ハ和名きるばのしやじん。學名 Adenophora polymorpha, Miq.

の白帶】多くは七情の激動に原因する內傷、或は（二四）下元の虛冷が因となつて發するものである。沙參を末にして二錢づつを米飮で調へて服す。（二五）（證治要訣）

薺苨

音は齊尼、二字共上聲に發音する。（別錄中品）

和名 そばな
學名 Adenophora remotiflora, Miq.

【校正】圖經の杏參を併せ入る。

【釋名】**杏參**（圖經） （一）**杏葉沙參**（救荒） **菧苨** 菧の音は底（テイ）である。（爾雅） **甜桔梗**（綱目） **白麪根**（救荒） 苗は**隱忍**と名ける。時珍曰く、薺苨は汁が多く、濟泥たる狀態があるところから名けたものだ。濟泥とは露の濃やかなることの形容詞である。その根が沙參のやう、葉が杏のやうなところから、河南地方では杏葉沙參と呼ぶ。蘇頌の圖經に杏參とあるはこの物だ。俗にこれを甜桔梗と呼ぶ。爾雅には『苨は菧苨なり』とあり、郭璞の註に『卽ち薺苨なり』とある。隱忍なる名稱の說は下文に掲げる。

【集解】弘景曰く、薺苨は根も莖もすべて人參に似てゐるが葉が少し違ふ。根

は味甘く、非常によく毒を殺す。この物を毒藥と共に置けば毒藥の毒が皆自然に消滅するものだ。その目的からも方家に使用されてゐるのである。又曰く、魏の文帝が『薺苨人參を亂る』といつたのはこの物のことだ。薺苨は葉が桔梗によく似てゐるが、葉の裏面が滑澤で光があり、毛がない。それだけの相異がある。また人參が葉の相對してゐるのとも違ふ。

恭曰く、人參は苗が五加に似て潤く短く、莖は圓く、三四本の椏があつて椏の端に五葉がある。陶氏が『薺苨人參を亂る』の語を引用しての説明は誤つて居る。また薺苨にも桔梗にも葉の互ひ違ひのものもあり、三四枚向ひ合ふものもあつて、いづれも一莖直上するものだから、葉は既に相亂るとしても根に心が有る點で區別は付くのである。

頌曰く、今は(二)川蜀、江浙いづれにもあつて、春苗、莖が生え、すべて人參に似てゐるが(三)少し異ふ。根は桔梗に似てゐるが心の無い點だけが異ふ。(四)潤州、(五)陝州に就中多く、民家でこれを採つて菓子に作り、或は干物にして食ふが、味甚だ甘味なものだ。また遠方への贈物などにもなる。二月、八月に根を採つて暴乾する。

(二)川蜀ハ石部爐甘石ノ註ヲ見ヨ。江浙ハ江蘇、浙江地方ノ概稱。
(三)時珍ノ引用葉ノ字ヲ脱ス。此處ハ葉ガ少シ違ノナリ。大觀ニ葉字アリ。
(四)潤州ハ隋ニ置ク唐之ニ因ル。今ノ江蘇省丹徒縣ハソノ舊地ナリ。
(五)陝州ハ石部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。蘇頌ノ圖經ニハ陝州ノ二字ナシ。

白井曰ク、此圖非ナリ學者ノ信置ナシ。

○承曰く、今世間に蒸して扁平に壓した人參の擬物も多くあるが、味が淡いからすぐ判る。○宗奭曰く、陶弘景の說明は根を中心としたから薺苨人參を亂るといふのだ。蘇恭は苗を中心として說明したから陶氏の說を誤だといふことになつたのだ。○機曰く、薺苨は苗と莖が桔梗に似てゐて根が人參と紛はしいのである。今、苗も莖もすべて人參に似てゐるといふは誤のやうだ。人參、薺苨、桔梗それぞれの註解を參照すれば自ら明瞭な筈である。

○時珍曰く、薺苨は苗が桔梗、根が沙參に似てゐるので、姦商は往往沙參でも薺苨でも人參の贋物に使ふのだ。蘇頌の圖經の所謂杏參も、周憲王の救荒本草の所謂杏葉沙參も、いづれもこの薺苨のことである。圖經には『杏參は淄州の田野に生じ、根は小菜の根の如く、その地方民は五月に苗、葉を採

〔薺苨〕

つて欬嗽上氣を治す』とあり、救荒本草には『杏葉沙參、一名白麪根は苗の高さは一二尺、莖の色は(六)靑白で葉は杏葉に似て小さく、微し尖つて背が白く、邊に叉牙があり、杪の間に五瓣の(七)白盌子のやうな花を開く。根の形は(八)野胡蘿蔔のやうで頗る肥え、皮の色はくすんだ灰色で中間に白(九)毛があり、味は甜く、微寒である。また碧色の花を開くもあり、これは嫩苗をゆがいて水で淘り、油鹽を拌ぜて食へる。根もやはり度度煮こぼせば食へる。世間では蜜で煎じて菓子に作る』とある。

又、陶弘景の桔梗の條の註に『その(一〇)葉は隱忍と名け、煮て食へる。蠱毒を治するものだ』とあるが、謹んで按ずるに、爾雅に『蒡は隱忍なり』とあり、郭璞の註に『蘇に似て(一一)色あり。江東地方ではこれを採り收めて(一二)葅に作る。また瀹でも食へる』とある。葛洪の肘後方には『隱忍草の苗は桔梗に似たものだ。世間で皆食つてゐる。搗汁を飲めば蠱毒を治す』とある。これに據れば、隱忍は桔梗ではない、薺苨の苗のことだ。薺苨の苗は甘いから食物にもなるのだが、桔梗の苗は苦くて食へさうにない。これが何よりの證據である。神農本經には薺苨がなくてただ桔梗、一名薺苨とあり、別錄に至つて始めて薺苨が獨立の一條に掲げられたのだが、

(六)本書ニハ青ニ作ル。
(七)盌ハ椀ニ同ジ。
(八)野胡蘿蔔ハヤブニンジン。
(九)本書ニハ毛ヲ色ニ作ル。
(一〇)本書ニハ葉ヲ苗ニ作ル。
(一一)本書ニハ色ヲ毛ニ作ル。
(一二)葅ハ菹ニ同ジ。漬物ノコト。

蓋し薺苨、桔梗は一類中の甜いものと、苦いものとの二種なので、その苗はいづれも隱忍と呼んで差支ないであらう。

根 [氣味]【甘し、寒にして毒なし】[主治]【あらゆる藥毒を解す】(別錄)【蠱毒を殺し、蛇蟲に咬れたるもの、熱狂、溫疾を治す。毒箭の傷を罯ふ】(大明)【肺氣を利し、中を和し、目を明にし、痛を止める。蒸して切り、羹、粥にして食ふ。或は(一三)虀、葅にして食ふ】(昝殷)【これを食へば丹石の(一四)發動を壓する】(孟詵)【欬嗽、消渇、强中、瘡毒、丁腫に主效があり、沙蝨、(一五)短狐の毒を辟ける】(時珍)

[發明] 時珍曰く、薺苨は寒にして肺を利し、甘にして毒を解す。この點に於ての良品である。一般人のこれが使用を知らぬのは遺憾なことだ。按ずるに、葛洪の肘後方に『一藥で多くの毒を同時に解すものは薺苨汁のみである。濃汁二升を飲み、或は煮て嚼み、また散にして服するもよし。この藥を諸藥中に入れるとその藥の毒は皆自ら解すものだ』とある。又、張鷟の朝野僉載には『名醫の話に、虎が藥箭で射られると淸泥を食つてその毒を解し、野猪は藥箭で射られると薺苨を掘つて食ふ。動物でさへ毒を解す藥物を知つてゐるのに、人間にその知識が無いとは何たる

(一三)虀葅ハ漬物。
(一四)發動トハ丹石ヲ服スル爲ニ起ル身體ノ異常ノ變動。
(一五)短狐毒ハ一名溪病、又溪毒トモ云フ。一種傳染性風土病ニシテ、手足ノ指逆冷シテ肘膝ニ至リ、惡寒頭痛シ、腰背骨節皆强ハバリテ兩膝痛ミ、目ブタ疼ミ、心內煩懊シ、胃腸膿潰シ、八九日ニシテ死スルモノ。

ことかといつた」とある。又、孫思邈の千金方には、强中の病で陰莖が長じて興盛し、交らずして精出で、消渇となつて後、發して癰疽となるを治するに、薺苨丸、豬腎薺苨湯の方がある。これ等の事實はいづれも本草にはまだ推究されぬところだが、やはり解熱、解毒の功力を利用すものであつて、それ以外に特別の意義はない。

附方　舊四、新三。【强中消渇】豬腎薺苨湯――强中の病で陰莖が長じて興盛し、交らずして精液が自ら出で、消渇となつて後に癰疽を發するものを治す。これはいづれも放縱なる色慾の過度、そのために或は金石藥を服餌した結果として發るものである。左の方を用ゐて腎中の熱を制するが適當な療法である。豬腎一頭分、薺苨、石膏各三兩、人參、茯苓、磁石、知母、葛根、黄芩、栝樓根、甘草各二兩、黑大豆一升、水一斗半を用ゐ、先づ豬腎と大豆との煮汁一斗を取つて滓を取去り、薺苨以下の藥を入れて再び煮て三升にし、それを三回に分服する。後世ではこれを石子薺苨湯といふ。○又、薺苨丸は、薺苨、大豆、伏神、磁石、栝樓根、熟地黄、地骨皮、玄參、石斛、鹿茸各一兩、人參、沈香各半兩を末にし、豬肚を治淨し煮爛して杵き和し、梧子大の丸にして七十丸づつ空心に鹽湯で服す。(並に千金方)【丁瘡腫毒】生薺

苨根の搗汁一合を服し、滓を瘡に傅ける。二回に過ぎずして效がある。（千金翼）【顏面の(一六)皯皰】薺苨、肉桂各一兩を末にし、一日一回、方寸匕づつを酢漿で服す。また瘢や痣を滅する。（聖濟總錄）【諸種の蠱毒を解す】薺苨根を末に搗き、飲で方寸匕を服すれば立ろに瘥える。（陳延之小品方）【鉤吻の毒を解す】鉤吻の葉と芹の葉とはよく似てゐるが、誤つて鉤吻を食へば死亡する。その場合はただ薺苨八兩を水六升で煮て三升を取り、一日五回、五合づつを服す。（仲景金匱玉函）【(一七)五石の毒を解す】薺苨を生で搗き、その汁を多く服すれば立ろに瘥える。（蘇頌圖經）

隱忍葉　［氣味］【甘く苦し、寒にして毒なし】［主治］【蠱毒で腹痛し、顏色青黄となり、骨あらはに痩せ衰へて肉落ちたるには、煮汁一二升を飲む】（時珍）【腹臟の(一八)風壅、欬嗽上氣に主效がある】（蘇頌）

桔梗（本經下品）

和名　ききやう
學名　Platycodon grandiflorus, A. DC.
科名　ききやう科（桔梗科）

［釋名］ **白藥**（別錄） **梗草**（別錄） **薺苨**（本經） 時珍曰く、この草は根が結實

(一六)皯皰ハニキビ。

(一七)五石ハ丹砂、雄黄、白礬石、曾青、磁石。

(一八)風壅ハ排泄物ノ停滞ヲ云フモノナラン。

して梗直だからかく名けたものだ。吳普本草には、一名利如、一名符扈、一名房圖とあるが、方書にはいづれにもさる名稱は揭げてない。隱語の名稱らしい。桔梗、薺苨は一類中の甜きと苦きとの二種である。故に本經には、桔梗、一名薺苨とあり、今は俗に薺苨を甜桔梗と呼ぶ。別錄に至つて始めて薺苨の一條を獨立せしめて二物に區別されたのだ。しかし、性、味、功用の點で二者それぞれ異るのだから、別錄の取扱が正しいやうに思はれる。

【集解】別錄に曰く、桔梗は(一)嵩高の山谷、及び(二)寃句に生ずる。(三)二月根を採收して暴乾する。普曰く、葉は薺苨のやう、莖は筆の軸のやうで紫赤色だ。二月苗が生える。

弘景曰く、近道の諸處にあつて、二、三月に苗が生える。煮て食へるものだ。桔梗は蠱毒の治療に甚だ效驗があり、一般の醫方に用ゐるもので、薺苨と呼ぶものだ。しかし今は薺苨なるものが別にあつて、よく藥毒を解し、人參と紛はしいもので葉が甚だよく似てゐるが、薺苨の葉は裏が光り、滑に澤があつて毛のない點が異ふ。又、人參のやうに葉が相對しても居らぬものだ。恭曰く、薺苨にも桔梗にも葉の互

(一)嵩高ハ嵩山、石部五色石脂ノ嵩高山ノ註參照。
(二)寃句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。
(三)大觀ニ二ノ下ニ八ノ字アリ。

（四）大觀ニ指ノ上ニ小字アリ。

（五）關中ハ石部礜石ノ註參照。

ひ違ひのものがある。また三四枚向ひ合ふものもある。いづれも一莖直上するもので、葉だけではなるほど見別は付かないが、ただ根に心がある點で明瞭に區別される。

○頌曰く、現に處に依つて有るもので、根は（四）指ほどの太さで黄白色のものだ。春苗が生え、莖の高さは一尺餘りになり、葉は杏葉に似た長い隋形で、四葉相對して生え、嫩葉はやはり煮て食へる。夏小さい花を開き、紫碧色のいかにも牽牛の花に似たもので、晩秋に子を結ぶ。八月根を採るもので、その根には心がある。心が無ければ薺苨だ。（五）關中産の桔梗は根皮が黄色で蜀葵根に似たものだ。莖は細く青色で葉は小さく青く、菊の葉に似てゐる。

〔桔梗〕

根　修治　○斅曰く、凡そ桔梗を用ゐる場合に木梗を用ゐてはならぬ。さながら桔梗に似たものだが、ただ咬んで見ると腥く澀く、用ゐられない。凡そ桔梗を用ゐるには、頭上の尖硬の部分二三分

ほどと兩側にある枝根とを取去つて(六)槐砧の上で細かく剉み、生百合を混ぜて搗いて膏にし、一伏時の間水中に浸して濾出し、緩火で熬り乾して用ゐる。桔梗四兩に對し百合(七)二兩五錢の割合で用ゐる。時珍曰く、今はただ(八)浮皮を刮り去つて米泔水で一夜浸し、切片して微し炒つて用ゐる。

(九)【氣味】【辛し、微溫にして小毒あり】普曰く、神農、醫和は苦し、毒なしといひ、黃帝、扁鵲は辛く鹹しといひ、岐伯、雷公は甘し、毒なしといひ、李當之は大寒なりといふ。權曰く、苦く辛し。時珍曰く、苦く辛く平なりといふが正しいのである。之才曰く、節皮が使となる。(一〇)白及、龍膽草を畏れ、豬肉を忌む。牡礪、遠志と配合すれば(一一)恚怒を療じ、消石、石膏と配合すれば傷寒を療ず。白粥がそのえぐ味を解す。時珍曰く、砒を伏す。徐之才のいふ節皮とは何物か判らない。

【主治】【刀で刺すやうな胸脇痛、腹滿、腸がぐつぐつと鳴るもの、驚恐の悸氣】(本經)【五臟、腸、胃を利し、血氣を補ひ、寒熱風痺を除き、中を溫め、穀物を消化し、喉咽痛を療じ、蠱毒を下す】(別錄)【下痢を治し、血積氣を破り、痰涎の聚る

(六)槐砧ハ前ノ黃耆ノ修治ノ條ニ出ヅ。
(七)大觀ニ二兩五錢ヲ五分ニ作ル。
(八)浮皮ハコルク質ノ皮。
(九)木村(康)曰ク、成分ハ一種ノサポニンヲ含有ス。本邦ニ於ケル研究論文ハ梅辻年人―京藥誌二六(大、六)九。大鹿廣―京醫一五(大、七)七六。
(一〇)大觀ニ白及下ニ龍眼ノ二字アリ。
(一一)恚ハ恨ナリ、怒ナリトアリ。

（一二）嗌ハ咽喉。

を消し、肺熱の氣促、嗽逆を去り、腹中の冷痛を除き、中惡、及び小兒の驚癇に主效がある】（甄權）【一切の氣を下し、霍亂轉筋、心腹脹痛を止め、五勞を補ひ、氣を養ひ、邪を除き、瘟を辟け、癥瘕、肺癰を破つて血を養ひ、膿を排し、內漏、及び喉痺を補ふ】（大明）【竅を利し、肺部の風熱を除き、頭、目、咽（一二）嗌、胸膈の滯氣、及び痛を淸利し、鼻塞を除く】（元素）【寒嘔を治す】（李杲）【口舌に瘡を生ぜるもの、赤目腫痛に主效がある】（時珍）

【發明】　好古曰く、桔梗は氣は微溫、味は苦辛で、味が厚く氣が輕い、陽中の陰、升である。手の太陰、肺經の氣分、及び足の少陰、腎の經に入る。元素曰く、桔梗は肺氣を淸くし、咽喉を利し、その色は白い。故に肺部の引經の藥であつて、甘草と共に用うればその功力を行らすこと宛も舟楫の如き働をなす藥劑となる。大黃の如き苦、泄にして鋭く下に赴く藥を胸中、最高の部分へ導き達せしめて奏效さするに必要な手段は辛、甘、の劑を用ゐることであつて、譬へば鐵や石を大河中で運搬するには舟楫を用うる以外に方法はないと同樣だ。それ等の關係から諸種の藥の中にこの桔梗の一味が加はれば下部に沈む性のものも沈下し得ないのである。

時珍曰く、朱肱の活人書に、胸中痞滿の痛まぬを治するに桔梗、枳殼を用ゐたのは、そのものの肺を通じ、膈を利し、氣を下す功力を利用したのである。張仲景の傷寒論に、寒實結胸を治するに桔梗、貝母、巴豆を用ゐたのは、そのものの中を温め、穀物を消化し、積を破る功力を利用したのである。又、肺癰で唾に膿の出るを治するに桔梗、甘草を用ゐたのは、そのものの苦、辛が肺を清くし、甘、温が火を瀉し、またよく膿血を排し、(一三)内漏を補ふ力を利用したのである。少陰の證で二三日咽痛するを治するにも、やはり桔梗、甘草を用ゐる。それは苦、辛が寒を散じ、甘、平が熱を除くその二味の功力を併用して能く寒熱を調整するのである。後世では簡單に甘桔湯と呼んで咽喉、口舌の諸病を治するに用ゐ、宋の仁宗皇帝は荊芥、防風、連翹を加へて如聖湯と命名し、極めてその效驗を稱揚された。按ずるに、これに就ては王好古の醫壘元戎に頗る詳細に記載して『(一四)失音には訶子を加へ、聲の出ぬには半夏を加へ、上氣には陳皮を加へ、涎嗽には知母、貝母を加へ、欬渇には五味子を加へ、酒毒には葛根を加へ、(一五)少氣には人參を加へ、嘔には半夏、生薑を加へ、唾膿血には紫菀を加へ、肺痿には阿膠を加へ、胸膈不利には枳殼を加へ、心胸痞滿に

(一三)内漏ハ肺癰ノ竅穴ヲ穿ツ者ヲ云フ。

(一四)失音ハ聲ノ出デザル病。

(一五)少氣ノ解、人參ノ主治ニ出ヅ。

(一六)面腫ハ面ノ腫レルヤマヒ。
(一七)膚痛ハ皮膚ノ疼痛。
(一八)疫毒ハ傳染性熱病。
(一九)乾欬嗽ハ痰ノナキ欬嗽。
(二〇)振寒ハ戰慄スルコト。
(二一)大觀本草ニハ糯米粥ニ作ル。
(二二)大觀本草ニハ二升ニ作ル。

は枳實を加へ、目赤には巵子、大黄を加へ、(一六)面腫には茯苓を加へ、(一七)膚痛には黄耆を加へ、發斑には防風、荊芥を加へ、(一八)疫毒には鼠粘子、大黄を加へ、不眠症には巵子を加へる』とある。

震亨曰く、(一九)乾欬嗽は痰火の邪鬱が肺中に在る。苦梗を用ゐて之を開くがよい。痢疾腹痛は肺金の氣鬱が大腸に在る。やはり苦梗を用ゐて之を開いてから、痢藥を用ゐるがよい。この藥はよく氣血を開提するものだから氣藥の中にはこれを用ゐるがよいのである。

【附方】 舊十、新七、【胸滿の痛まぬもの】桔梗、枳殼等分を水二鍾で一鍾に煎じて溫服する。(南陽活人書)【傷寒の腹脹】陰陽不和である。桔梗半夏湯が主效がある。桔梗、半夏、陳皮各三錢、薑五片を水二鍾で一鍾に煎じて服す。(南陽活人書)【痰嗽喘急】桔梗一兩半を末にし、童尿半升で四合に煎じ、滓を去つて溫服する。(簡要濟衆方)【肺癰の欬嗽】胸滿(二〇)振寒し、脈は數にして咽が乾いても渴せず、適々腥臭き濁唾を出し、久しくして(二一)粳米粥のやうな膿を吐くには桔梗湯が主效がある。桔梗一兩、甘草二兩、水(二二)三升を一升に煮て二回に溫服する。朝夕膿血を吐いて瘥える。

(張仲景(二三)金匱玉函方)【(二四)喉痺毒氣】桔梗二兩、水三升を一升に煎じて頓服する。(千金方)【少陰の咽痛】少陰の證で二三日咽痛するには甘草湯を與へ、なほ瘥えぬには桔梗湯を與へるが主たる治法である。桔梗一兩、甘草二兩、水三升を一升に煮て分服する。(張仲景傷寒論)【口舌の瘡】方は上に同じ。【(二五)齒䘌の腫痛】桔梗、薏苡仁等分を末にして服す。(永類方)【(二六)骨槽風痛】牙根が腫痛する。桔梗を末にして(二七)棗瓤で和して皂子大の丸にし、綿で裹んで咬み、(二八)仍て荊芥湯で口を漱ぐ。(經驗後方)【(二九)牙疳の臭爛】桔梗、茴香等分を燒き研つて傅ける。(衞生易簡方)【肝風の(三〇)眼黑】瞳の痛むは肝風が盛なるためである。桔梗丸を主として用ゐる。桔梗一斤黑牽牛の頭末三兩を末にして蜜で梧子大の丸にし、一日二回、四十丸づつを服す。(保命集)【衄血】桔梗を末にし、一日四回、水で方寸ヒづつを服す。一には生犀角屑を加へる。(三一)(普濟方)【吐血、下血】方は上に同じ。【打撲の瘀血】腸の內部に在つて久しく消散せず、時に發動するには、桔梗を末にして米飲で(三二)一刀圭を服す。(肘後要方)【中蠱の下血】晝夜雞肝の如き血石を出し、四臟皆損じて心臟だけがまだ毀れず、或は鼻が破れて將に死せんとするには、苦桔梗を末にし、一日三回、酒で方寸ヒづつ

(二三)大觀本草ニハ集驗方トアリ。
(二四)大觀本草ニハ喉閉竝毒氣トアリ。
(二五)齒䘌ハムシクヒバ。
(二六)骨槽風ハ下顎骨ノ潰瘍。
(二七)棗瓤ハ棗肉。
(二八)仍以、大觀本草ニハ腫則ニ作ル。
(二九)牙疳ハハグキノ膿腫。
(三〇)黑風ハ黑內障ヲ云フ。眼黑亦此症ヲ指スカ。
(三一)大觀ニ千金方ニ作ル。
(三二)一刀圭ハ十分方寸ヒノ一ヲ云フ。

を服す。患者が藥を飲下し得ぬときは物で口をねぢ開けて灌ぎ込む。藥が入ると心中が煩するが、少頃で自ら定り七日にして止む。豬の肝肺を食つて補ふがよし。神效の良方である。ある方では犀角等分を加へる。(初虞世古今錄驗)【妊娠中惡】心腹疼痛するには、桔梗一兩を剉み、水一鍾、生薑三片と六分に煎じて溫服する。(聖惠方)

【小兒の客忤】(三三)死して言語不能なるには、桔梗を焼いて研り、(三四)三錢を米湯で服して麝香を豆ほど呑む。(三五)(張文仲備急方)

蘆頭 主治 【上膈の風熱、痰實を吐かす。生で研末して一錢を白湯で調へて服し、探り吐かす】(時珍)

長松(拾遺)

和名 未詳
學名 未詳
科名 未詳

釋名 仙茆。時珍曰く、葉が松のやうなもので、服すれば天年を長くし、その功力が松脂、及び仙茆の如きところからこの二名がある。

集解 藏器曰く、長松は(一)關内の山谷中に生ずる草で、松葉に似て上に脂が

(三三)死シテハ假死シテノ意ナラン。
(三四)大觀ニ錢ヲ兩ニ作ル。
(三五)大觀ニ外臺祕要ニ作ル。
(一)關内ハ唐十道ノ一、關内道ヲイフ。今ノ陝西省及ビ甘肅省ノ東北部ニ亙リ、雍、華、同、岐、隴、邠、涇、寧、坊、鄜、丹、延、慶、原、鹽、靈、會、夏、豐、勝、綏、銀ノ二十二州ヲ統ブ。

(二)五臺山ハ石部菩薩石ノ註ヲ見ヨ。
(三)大風ハ癩病。
(四)幷州ハ石部石髓ノ註ヲ見ヨ。
(五)代州ハ石部石麪ノ註ヲ見ヨ。
(六)太行山ハ石部鹵石類石硫黃ノ註ヲ見ヨ。

ある。山人の服するものだ。時珍曰く、長松は古松の下に生ずるもので、根の色は薺苨のやうで長さ三五寸あり、味は甘く微し苦くして人參に類し、愛すべき淸香がある。按ずるに、天覺居士張商英の文集に『僧普明が(二)五臺山に居た時(三)大風を患ひ、眉髮倶に墮ちて哀愁痛苦堪へ難かつたが、偶ゝ異人に遇つて長松を服することと、及びその長松なるものの形狀を敎へられ、それを採つて服すると十日餘りで毛髮倶に生じ、顏色が故の通りになつたといふ。現に(四)幷州、(五)代州地方の住民は多くは長松に甘草、山藥を雜へて湯に煎じて用ゐてゐるが、その效果が甚だ佳いものだ』とある。けれどもこの物は本草、方書のいづれにも記載されてなく。獨り釋慧祥の淸涼傳に始めてあるだけだ。また韓悉の醫通には『長松は(六)太行山の西北の諸山に産し、根は獨活に似て香しいも

〔長松〕

(七)風血ハ經水逆上シ頭目悶迷シテ人事ヲ省セザルニ至ルモノ。

(八)廬山ハ石部菩薩石匡廬山ノ註參照。

のだ』とある。

根【氣 味】【甘し、溫にして毒なし】【主 治】【(七)風血冷氣の宿疾。中を溫め、風を去る】(藏器)【大風惡疾で眉髮が落ち、全身の各部分が腐敗するには、一兩づつに甘草少量を入れて水で煎じて服すれば旬日で癒える。又、諸蟲の毒を解し、補益し、天年を長くする】(時珍)

【附 方】新一。【長松酒】一切の風虛を滋補する。これは(八)廬山の休休子が所傳の方で、諸種の藥酒中に於ける聖藥である。形狀の獨活に似て香しき長松一兩五錢、熟地黃八錢、生地黃、黃芪を蜜で炙き、陳皮と各七錢、當歸、厚朴、黃蘗各五錢、白芍藥を煨き、人參、枳殼と各四錢、蒼朮を米泔で制し、半夏を制し、天門冬、麥門冬、砂仁、黃連と各三錢、木香、蜀椒、胡桃仁各二錢、小き紅棗肉八個、古き米一撮、燈心五寸長さのもの百二十本、以上の諸材料を十劑に分けて絹袋に盛り、凡そ米五升で造つた酒一尊で一袋を煮て、久しい間穴倉の中にかこつてそれを飮むのである。(韓氏醫通)

黃精（別錄上品）

和名　なるこゆり
學名　Polygonatum ノ數種ヲ含ムト思フ。我日本ノなるこゆりハ P. falcatum, A. Gray. デアル。又輪生葉ノモノ數種アツテかぎくろまばなるこゆり P. sibiricum, Red. ナドガ之レニ屬スル。
科名　ゆり科（百合科）

校正　拾遺の救荒草を併せ入る。

釋名　**黃芝**（瑞草經）　**戊己芝**（五符經）　**菟竹**（別錄）　**鹿竹**（別錄）　**仙人餘糧**（弘景）　**救窮草**（別錄）　**米餔**（蒙筌）　**野生薑**（蒙筌）　**重樓**（別錄）　**雞格**（別錄）　**龍銜**（廣雅）　**垂珠**

頌曰く、隋時代の人羊公の黃精を服する法に『黃精なるものは芝草の精であつて、一名葳蕤、一名白及、一名仙人餘糧、一名苟格、一名馬箭、一名垂珠、一名菟竹といふ』とある。

時珍曰く、黃精は服食家に於ける要藥である。故に別錄では草部の首に列し、神仙家ではこれを芝草の類とし、坤土の精粹を得て居るものといふ意味で黃精といつたのだ。五符經に『黃精は天地の淳精を獲たものだ。故に(一)戊己芝と名ける』とあ

(一) 五運行大論曰、所謂戊己分者奎壁角軫、則天地之門戶也、次註曰、遁甲經曰、六戊爲天門、六己爲地戶。

(二)嫩薑ハ嫩キ生薑。

(三)概節ハ括約ナキノ謂ナラン。

(四)大節ハ括約アルヲ謂フナラン。

るはこの意味である。餘糧、救窮などの名稱はその功用に因んだもの、鹿竹、莵竹などの名稱は、葉が竹に似てゐて、鹿や兎がこれを食ふに因んだもの、垂珠はその子の形容である。陳氏の拾遺に救荒草と

〔黄精〕

あるはこの草のことだ。此には同一條に併入した。嘉謨曰く、根が(二)嫩薑のやうだから俗に野生薑といひ、九回蒸し九回曝せば代用食糧となるところからまた米餔ともいふ。

集解 別錄に曰く、黄精は山谷に生ずる。二月根を採つて陰乾する。弘景曰く、今は諸處にある。二月に始めて生えて一本の枝に多くの葉が著き、葉の形狀は竹に似て短い。根は萎蕤に似て居るが、萎蕤の根は荻根や菖蒲のやうに(三)概節で平直だ。黄精の根は鬼臼や黄連のやうに(四)大節で平でなく、燥しても柔で脂潤がある。

一般醫方には用ゐないが仙經では貴重なもので、根、葉、花、實、いづれも服餌する。酒に釀すもよし、散にするもよし。それ等神仙道の用方は(五)斷穀の方の中に詳細に載つてゐる。その葉は鉤吻に似て居るが、葉が紫でなく花が黄でない點が異ふだけだ。そのために一般人は多くの場合見誤るが、種類は全然相異して、生、死反對の結果を示す。不思議なものである。

斅曰く、鉤吻は眞に黄精に似たもので、鉤吻は葉の尖頭に二箇の毛鉤があるだけだ。若し誤つてこれを服めば命を害ふ。黄精は葉が竹に似たものだ。

恭曰く、黄精は肥えた土地に生えたものは拳ほどの大さになり、瘠せた土地に生えたものは栂指ほどである。萎蕤の根の肥えたものと同樣だが小いものだ。肌理や形態や色澤も大抵似たものである。此に鬼臼や黄連と似たもののやうにいふのが、一向似寄つたところはない。黄精の葉は柳や龍膽、徐長卿などに似て堅い。(六)鉤吻なるものは蔓生で葉は柿の葉のやうだ。一向黄精とは似寄つたところがない。

藏器曰く、黄精の葉が偏生で相對して生えぬものを偏精といふ。その功用は正精に及ばない。正精は葉が相對して生える。鉤吻といふは野葛の別名だ、黄精、鉤吻

(五)斷穀ハ穀食ヲ廢スルヲ云フ。

(六)白井曰ク、恭說ノ鉤吻ハツタウルシヲ指スニ似タリ。

（七）白井曰ク、野葛ノ葉、柹ニ似タリ。蘇氏ノ說怪ムニ足ラズ。黃精葉ニ似タルモノハ別ニ一種ノ鉤吻ナリ。
（八）大觀ニ靑上ニ細ノ字アリ。

の二物は全然似寄つたところがない。陶氏は何を根據にかかる說明をしたものか判らない。

保昇曰く、鉤吻は一名野葛といふ。陶氏の葉が黃精に似て居るといふその通りである。（七）蘇氏の葉が柹に似て居るといふのは別の一種の物らしい。

頌曰く、黃精は南方、北方いづれにもあるが嵩山、茅山のものが佳い。三月生え、苗の高さ一二尺、葉は竹葉のやうで短く、兩兩相對する。莖は柔で脆く、さながら桃の枝に似て本が黃で末が赤い。四月小豆の花のやうな（八）靑白い花を開いて黍粒のやうな白い子を結び、また子の無いものもある。根は嫩い生薑のやうで黃色だ。二月根を採り、蒸して暴乾して用ゐる。今では八月に入つてからも採る。山間の住民は九回蒸し九回暴して菓子に作つて賣つて居るが、色が黃黑で甚だ甘美である。苗の生えたばかりには世人が多く若芽を採つて副食の菜にし、畢菜と稱へる。極めて美味なものだ。江南地方の者の說では、黃精は苗も葉もやや鉤吻に類似して居るが、鉤吻は葉の端が極めて尖つて根が細いだけだといふ。ところが蘇恭は『鉤吻は蔓生だ』と主張する　恐らく南方と北方と產地の關係で異ふのだらう。

時珍曰く、(九)黄精は野生のものだが山中でも生える。根を長さ二寸ほどに劈いてまばらに植ゑると一年後には極めて多く繁茂する。子を蒔いてもよい。葉は竹に似てゐるが尖らぬもので、二枚、三枚乃至四枚づつ節に相對して生える。根は横に匐ひ、形狀は葳蕤のやうだ。俗間ではその苗を採りゆがいて苦味を淘り去て食ひ、それを筆管菜と呼ぶ。陳藏器の本草に青黏といふは葳蕤のことだ。葳蕤の發明の項に掲げてある。又、黄精と鉤吻に關する問題だが、陶弘景、雷斅、韓保昇はいづれも二物が似てゐるといひ、蘇恭、陳藏はいづれも似て居らぬといひ、蘇頌はまた兩說いづれでも差支ないやうなことをいつてゐるが、今諸種の典據と引合せて見るに、神農本草、吳普本草にはいづれも、鉤吻は野葛の蔓生したので、莖が箭のやうなものだといひ、蘇恭の說と合致する。張華の博物志には『昔、黄帝が天老に「天地の生ずる所のもので食へば不死を得るものがあるか」と問ふたに對し、天老は「黄精といふ太陽の草があつて、これを食へば長生し得る。鉤吻といふ太陰の草があつて、これは食つてはならないものだ。口に入れば立ろに死する」と答へた。世人は鉤吻が人を殺すことは信ずるが黄精が壽命を益すことをば信じない。考が甚だ違つてはゐま

(九)白井曰ク、時珍說ク所ノ黄精ハ、クルマバノワウセイニシテ、常品ト異ルモノナリ。

いか』とある。これ等の說に就いて考察するに、これはただ黃精と鉤吻とで良、毒を對抗さして示しただけのもので、形狀の類似を說明したことにはなつてゐない。ところが陶氏は直にこの言に因つて、この二物の形狀が一對のものだと考へたのだ。神農所說の鉤吻とは合致しない。恐らく蘇恭の說が正しいので、陶、雷二氏のいふそのものは別の一種の毒物なのであらう。鉤吻ではあるまい。歷代の本草中でも陳藏器だけは物の識別が最も精密正確で、就中信を置くに足る。なほこれに關する說明は鉤吻の條に記載する。

根　【修治】　斅曰く、凡そ黃精を採取したならば、谷水で洗淨して午前十時から翌午前一時まで蒸し、(一〇)薄く切つて暴乾して用ゐる。

頌曰く、羊公の黃精を服する法では、二月、三月に根を採り――八九寸地中に入つたものを上等品とする――細かに切つて一石を水二石五斗で煮て苦味を去り、漉し取つて囊に入れ、壓搾して取つた汁を澄淸して再び煎じ、膏のやうになつた程度で止めて黑く炒つた黃豆の末を和し、適度に捏ねて錢大の餠にし、最初二枚を服して日每にその數を益す。また焙乾して篩つた末を水で服してもよし。

(一〇)大觀ニ薄上ニ刀字アリ。

誂曰く、黄精を服餌する法は、甕の底を脱いて釜の(二)よく落付くやうに置き、その中に黄精を充滿して蓋を密にし、蒸して湯氣が溜滴する程度で取出して暴す。この方法を九回繰返して用ゐるのである。生で服すれば咽喉を刺すものだが、やはり生で服するならば、初にただ一寸半を用ゐるを程度として漸次に増加し、十日間は他の食物を食はずしてこれを服すること三尺五寸までを程度とする。三日間繼續すればその後は幽鬼神明の現象を見得るやうになり、久しくして必ず昇天する。根、葉、花、實いづれも食へる。但し葉の相對したものを正精とし、相對せぬものは偏精と名ける。

氣味 【甘し、平にして毒なし】 權曰く、寒なり。時珍曰く、梅實を忌む。

主治 【中を補ひ、氣を益し、風濕を除き、五臟を安んずる。久しく服すれば身體を輕くし、天年を延べ、飢を感ぜぬ】(別錄)【五勞、七傷を補し、筋骨を助け、寒、暑に耐へ、脾、胃を益し、心、肺を潤す。單服するには九回蒸し九回暴して用ゐる。これを食へば顏色の老衰を防ぎ、穀食を斷ち得る】(大明)【諸虛を補し、寒熱を止め、精髓を充實し、三尸の蟲を下す】(時珍)

(二)大觀ニ上ニ作ル。

（一二）黄宮ハ脾ヲ指ス。

（一三）三尸蟲ハ空想的病源蟲ナリ。巣氏病源候論二十三卷ニ解アリ。

（一四）大觀ニ十字ナシ。

【發明】時珍曰く、黄精は戊巳の淳氣を受けたものだ。故に（一二）黄宮を補するに勝れた藥品である。土は萬物の母であつて、母が充分なる養を得れば水、火が完全に整ひ、木、金がよく配合されて諸種の邪惡が自ら去り、あらゆる疾病は發生せぬ。神仙芝草經に『黄精は、中を寛にし、氣を益し、五臟の機能を整調ならしめ、肌肉を充盛にし、骨髓を堅强にし、體力を倍增し、天年を延べて老衰せず、顏色を鮮明にし、白髮を黑く更らせ、齒の落ちたるを生え更らせる。又、何よりも上、中、下の（一三）三尸蟲を下す功能がある。その三尸中の上尸は名を彭質といひ寶貨財物を好むものだ。これは（一四）百十日で下る。中尸は名を彭矯といひ五味を好むものだ。これは六十日で下る。下尸は名を彭居といひ五色を好むものだ。これは三十日で下る。いづれも爛れて出るものである。黄精は根を精氣といひ、花、實をば飛英といふ。いづれも服食し得る』とある。又按ずるに、雷氏炮炙論の序には『顏色を駐め天年を延ぶるには精にて神錦を煎ず』とあり、その註に『研細した神錦を黄精の自然汁で拌ぜ、柳木の甑に入れて七日間蒸し、木蜜で丸にして服するのだ』とある。木蜜とは枳椇のことだが神錦とは何物をいふのか判らない。或は朱砂のことだともい

ふ。

禹錫曰く、按ずるに、抱朴子に『黃精は花を服するが實を服するに勝り、實を服するが根を服するに勝るものだが、ただその花は得難いのだ。またその生花を十斛手に入れても乾せば纔に五六斗ほどになつて了ふ。餘程の大富豪でなければ滿足に買ひ調へることは覺束ない。日每に三合づつとして十年繼續して服すれば效果を得るが、しかし穀食を斷つて健康を保つには朮の力に及ばない。朮は餌食すれば身體が肥健になり、重荷を負ふて險道を跋涉し得る力はあるが、ただ黃精のやうに甘美にして食ひ易いわけには行かないのである。凶歲には老人、幼者の代用食にもなり、それを米脯と呼ぶ』とある。

愼微曰く、徐鉉の稽神錄に『(一五)臨川のある士人の家の下婢は屋敷を逃亡して山中に潛み隱れてゐたが、そのうちに枝葉の可愛らしい野草を見付け、その根を食糧にして長い間飢を凌いで生存した。するとある夜大きな樹木の下に休息して居ると、草原の中が頻に動搖する。婢は虎が來たものと魂を消し、咄嗟にその樹に攀ぢ上つて隱れてゐた。ところが夜もやがて明けはなれたので、安心して樹を降りよう

(一五)臨川ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

と身をかはすと、ふはりと全身が浮き上り、空中を翔ることさながら飛鳥のやうになつて了つた。後數年經つてから、婢の家の者が薪取りに往つて偶然その婢の姿を認め、捕へ歸らうと頻に犇いたがどうしても捉らない。そこで絕壁の下へ逐ひ詰めて網に掛けようと試みたが、やはり忽ち飛び揚り、はては山の絕頂へ翔け上つて往つて了つた。評判や臆說は俄に傳はる「あの婢に一向(一六)仙骨らしい瑞相があるわけはない、恐らく何かの靈藥を餌つて飛行の術を得たのだらう」との推測に一致した。そこで衆議の結果、美酒美肉を調へて婢の通路へ供へて置くと、果して婢は飛んで來て喜んでその美食を貪り食ひ、食ひ終ると忽ち飛行の力を失つたので、難なく擒にされて了つた。さて逃亡以來の顚末を訊ねると、婢は傍の草を指して「これを食つて生きて居た」といふ。その草を見ると黃精だつた』といふ物語が記載してある。

【附方】 舊一、新四。【服食法】聖惠方では、黃精の根、莖を多少に拘らず細かに剉み、陰乾して末に搗き、量の多少に拘らず每日その末を水で調へて服す。一箇年以內にして老者は少年の如く變じ、久しくして(一七)地仙となる。臞仙神隱書では、黃精を細かに切り、一石を水二石五斗で朝から夕まで煮て冷えるを俟つて手で揉み

(一六)仙骨ハ仙人トナリ得ル風貌。

(一七)地仙、仙人ノ人間界ニ居ルモノ。地上ノ仙人。

碎き、布袋で搾つてその汁を煎じ、滓は別に乾して末にし、嚢の汁と共に釜中に入れ、丸に作り得るまでに煎じて雞子大の丸にし、一日三回、一丸づつを服す。一切糧食を絶ち、身を輕くし、あらゆる病を除く。渇するときは水を飲めばよい。【肝を補ひ目を明にする】黄精二斤、蔓菁一升を淘つて共に和し、九回蒸し九回晒して末にし、一日一回、空心に米飲で二錢を服す。天年を延べ、壽命を益す。(聖惠方)

【大風癩瘡】營氣が淸からず、久しきに亙つて風が脈に入り、それが原因で癩となる。鼻が壞れ顏が腐るものだ。黄精の根を皮を去り溪水で洗淨して二斤を蒸し、粟米飯の中に納れて米が熟するまで蒸し、時時にそれを食ふ。(聖濟總錄)【精氣の虛を補ふ】黄精、枸杞子等分を搗いて餅にし、日光で乾して末にし、煉蜜で梧子大の丸にして湯で五十丸づつを服す。(奇效良方)

萎蕤 音は威綏である。(別錄上品)

和名　あまどころ
學名　Polygonatum officinale, All.
科名　ゆり科(百合科)

【釋名】女萎(本經)　葳蕤(呉普)　萎䕲　音は威移である。委萎(爾雅)　萎香

(一)木村(康)曰ク、玉竹ト稱シ、一藥舗ニ於テ販賣スルモノハ、寧ロくるまばなるこゆりノ根莖ニ近似ス。
(二)羽蓋ハ鳥羽デ蓋フタ車ノ屋根。
(三)旌旗ハハタ。
(四)纓緌ハ彩纓。

（綱目）　熒（爾雅）　音は行である。(一)**玉竹**（別錄）　**地節**（別錄）

時珍曰く、按ずるに、黃公紹の古今韻會に『葳蕤とは草木の葉の垂れた有様の形容であつて、この草は根が長く鬚が多く、冠に垂れる紐を束ねた飾のやうで一種嚴かな趣があるところから名けたのだ。凡そ(二)羽蓋、(三)旌旗の(四)纓緌は大抵葳蕤に象るものだ』とあるはその通りだ。張氏の瑞應圖には『王者禮備はるときは葳蕤殿前に生ず。一名萎香といふ』ともある。威儀の嚴かなる趣に意味を取つたといふことはこれでも判る。別錄に萎蕤を書いたのは字劃を省いたのだ。說文に䔢蕤と書いたのは音の近い文字で表はしたのだ。爾雅に委萎と書いたのは字の形の近いものを用ゐたのだ。葉に光瑩があり、竹のやうに根に節が多いところから、熒、玉竹、地節などいふ諸名がある。吳普本草には又、烏萎、蟲蟬などいふ名もある。宋本草に、一名馬薰とあるは烏

〔萎蕤〕

萎の文字の書き違ひだ。

【正誤】弘景曰く、本經には女萎があつて萎蕤がない。別錄には女萎がなくて萎蕤がある。しかし、功用は全然同一なのだから、女萎、即ち萎蕤であつて、ただ名を異にするだけらしい。

恭曰く、女萎は、功用、及び苗、蔓が全然萎蕤と別である。現に本經として(五)朱書してあるのは女萎の功用、別錄として墨書してあるのは萎蕤の功用だ。

藏器曰く、本草には女萎、萎蕤の說明を同條に記載してあつて、陶弘景は同一物だといひ、蘇恭は二種の物で同一でないといふ。それとは別にまた中品の部門にも女萎の一條を揭げてある。しかしその主效は霍亂、洩痢、腸鳴にあるのであつて、正に上品の部の女萎と合致する。これは別段に種類の異つた物ではないのである。

頌曰く、往古の方書に用ゐてあるものを參考するに、胡洽が時氣(六)洞下を治するものに女萎丸があり、傷寒(七)冷下を治する結腸丸の中にも女萎を用ゐ、虛勞下痢を治する小黃耆酒にも女萎を加へてあつて、この數方に用ゐた事實を詳細に研究して見るに、これは中品にある女萎のやうだ。何となれば、それは性溫にして霍亂、

(五)朱書トハ陶弘景ノ神農本經集註ニ、神農本經ノ文字ハ之ヲ朱書シ、別錄ノ文ハ之ヲ墨書セシヲ云フ。

(六)洞下ハ甚シキ下痢。

(七)冷下ハ下痢ノ熱ナキモノ。

（八）枯痺ハ痩セテシビレルコト。
（九）癧瘍ハアセナマヅ。
（一〇）斑駁ハナマヅ。
（一一）大觀ニ蕤字下丸字アリ。
（一二）溫毒ハ溫疫ノ毒。

洩痢に對して有する主たる效力を用ゐたものと見做し得るからだ。又、賊風の手足（八）枯痺、四肢拘攣を治する茵蕷酒の中にも女萎を用ゐ、初虞世にも身體の（九）癧瘍、（一〇）斑駁を治する女萎膏なるものがあるが。これは上品としてある本經朱書の女萎のやうだ。何となれば、それは中風の運動不能、及び皯を去り顏色を好くする主たる效力を用ゐたものと見做し得るからだ。又、傷寒で七八日經過して解せぬものを治する續命鼈甲湯、及び脚弱を治する鼈甲湯のいづれも萎蕤を用ゐてあり、また延年方には風熱の項急痛、四肢、骨肉の煩熱を治する萎蕤飲があり、又、虛風の發熱して頭痛するに主效ある（一一）萎蕤がある。これは上品としてある別錄墨書の萎蕤のやうだ。何となれば、それは虛熱、（一二）溫毒、腰痛に對する主效を用ゐたものと見做し得るからだ。かやうに三者それぞれ主效が別になつて居るのだから、同一物でないことは確實である。且つ萎蕤は甘くして平であり、女萎は甘くして溫である。一物となすべき理由はない。

○○
時珍曰く、本經にある女萎は爾雅の委萎の二字であつて、別錄にある萎蕤そのものである。上古にあつて謄寫の訛略から女萎となつただけのことだ。古方に傷寒、

風虚を治するに女萎を用ゐるとあるは、卽ち萎蕤のことである。で、いづれも本草の文字の誤そのままが名稱となつて來たに過ぎない。その後の諸家はそれに氣が付かなかつたところから、中品にも女萎なる名稱があり、且つ文字が同一なために、かやうに無益な議論を闘はすやうになつたのだ。今茲にその誤を正し、別錄に依つて萎蕤と書き、この條の標題として閲覽に便にした。所謂洩痢を治する女萎は蔓草類に屬するものだ。その本條に記載してある。

【集解】別錄に曰く、萎蕤は太山の山谷、及び丘陵に生ずる。立春後に採つて陰乾する。普曰く、葉は靑色で兩方に出て薑葉のやうだ。二月、七月に採收する。

弘景曰く、現に諸處にあるもので、根は黃精に似てゐるが少し異ふ。服食家でも用ゐる。

頌曰く、今は(一三)滁州、(一四)舒州、及び(一五)漢中、(一六)均州にいづれもある。莖幹は竹箭幹やうで强直で節があり、葉は狹くて長く、表は白く裏は靑い。やはり黃精に類似するが、(一七)鬚が多く、太さは指位、長さは一二尺ある。或は食へるものだともいふ。三月靑い花を開いて圓い實を結ぶ。

(一三)滁州ハ人參ノ註ヲ見ヨ。
(一四)舒州、蘇恭ノ指スハ唐ノ州名ニシテ宋ニ安慶府ト改メタル今ノ安徽省懷寧縣ノ地ナリ。又、今ノ山東省滕縣ハ古ノ徐州ニシテ亦舒州ニ作ル。
(一五)漢中ハ石部理石ノ註、特生礬石、梁州ノ註參照。
(一六)均州ハ石部長石ノ註ヲ見ヨ。
(一七)大觀ニ多鬚ノ上ニ根黃ノ二字アリ。

時珍曰く、諸處の山中にある。根は横に生えて黃精に似てゐるがやや小く、黃白色だ。性は柔くして鬚多く、なかなか燥し難いものである。葉は竹のやうで兩兩向合つてゐる。やはり根を採つて種植し得るもので、極めて繁茂し易い。嫩葉、及び根はいづれもゆでこぼして副食にもなる。

根【修治】斅曰く、凡そこれを用ゐるに黃精、幷に鉤吻を用ゐてはならぬ。この二物はよく似てゐるが、萎蕤は節の上に鬚毛があり、莖に斑があり、葉の尖る處に小さい黃點があつて、右の二物とは同じくない。採收したものは竹刀で節皮を刮去つて洗淨し、蜜水に一夜浸して蒸し、焙じ乾して用ゐる。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】普曰く、神農は苦しといひ、桐君、雷公、扁鵲は甘し、毒なしといひ、黃帝は辛しといふ。之才曰く、鹵鹹を畏る。

【主治】【女萎——中風の暴熱で運動不能なるもの、(二八)趺筋結肉、諸種の不足に主效がある。久しく服すれば顏面の黑䵟を去り、顏色を好くして潤澤にし、身體を輕くし、老衰せぬ】(本經)【萎蕤——心腹の結氣、虛熱、濕毒の腰痛、莖中の寒、及び目痛、眥爛の淚の出るに主效がある】(別錄)【時疾寒熱、不足の內補、虛勞、客熱

(二八)趺筋結肉トハ足ノ筋肉ノ障害ノコトナラン。

（一九）大觀ニ肺ヲ脚ニ作ルニヨルベシ。
（二〇）風溫ハ溫疫ノコトカ。
（二一）四末ハ四肢ヲ指スガ如シ。
（二二）瘧疾一名痁病。

で頭痛し不安なるを去るにこれを加へて用ゐるが良し】（甄權）【中を補し、氣を益す】（蕭炳）【煩悶を除き、消渇を止め、心、肺を潤ほし、五勞、七傷、虛損、腰(一九)脚疼痛を補し、天行熱狂に用ゐる。服食に忌むものなし】（大明）【諸種石藥を服した人の體中が調和せぬには煮汁を飲む】（弘景）【(二〇)風溫の自汗、灼熱、及び勞瘧の寒熱、脾、胃の虛乏、男子の小便頻數、失精、一切の虛損に主效がある】（時珍）

【發明】　杲曰く、萎蕤は能く升り能く降る、陽中の陰である。その功用には、主として風が(二一)四末に淫したもの、兩眼の淚爛、男子の濕注腰痛、婦人の顏面黑皯の四種に治效がある。

時珍曰く、萎蕤は性は平、味は甘く、柔潤なもので食ひ易い。故に朱肱の南陽活人書の、風溫で自汗し、身體重く、言語不如意なるを治するに用ゐる萎蕤湯はこれを君藥として用ゐてある。予は虛勞寒熱の(二二)痁瘧、及び一切の不足の病證に每にこれを人參、黃耆の代用としてゐるが、寒ならず燥ならず大いに殊功がある。ただ風熱、濕毒を去るだけのものではない。これは既往の人のまだ發見されない事實であつた。

藏器曰く、陳壽の魏志樊阿傳に『青黏、一名黃芝、一名地節』とあるは卽ち萎蕤のことである。偏精に酷似したものだ。本草に掲げた功力以外に、聰明ならしむる主效があり、血氣を調へ、身體を强壯ならしめる。漆葉と和し散にして服すれば、五臟を利し、精を益し、三蟲を去り、身を輕くし、老衰せず、髮の白きを黑く變じ、肌膚を潤ほし、腰脚を暖する主效がある。ただ熱あるものは服してはならぬ。晉の嵇紹は、胸中の寒疾があつて酒を飲む毎に後に苦い唾を出すのであつたが、これを服して癒えた。その草は竹に似たもので、根、花、葉を取つて陰乾して用ゐるのだ。昔し華佗が山に入つて仙人がこれを服してゐたのを見て樊阿に教へ、樊阿はそれを服して百歲の壽命を保つたといふ。頌曰く、陳藏器は青黏、卽ち萎蕤としてゐるが、世間にその事實を確めたものはない。その說が確實なるものとも信じられぬ。

時珍曰く、蘇頌は黃精の註に、青黏とは或は黃精のことかと疑問にしてあつて、ここの說とは同じくない。今、黃精と萎蕤との性味、功用を比較攷察するに、大體に於て相近いが萎蕤の功の方が更に勝つてゐる。それゆゑに青黏、一名黃芝といつて黃精の別名と同じく呼び、一名地節といつて萎蕤の別名と同じく呼ぶのである。

（二三）雞頭子ハ芡（ミヅブキ）ノ子實。

この二物はやはり通し用ゐても差閊はない。

【附方】 舊二、新六。【服食法】二月、九月に採つた萎蕤の根を切り碎いて一石を、水二石で朝から夕まで煮て手で揉み爛らし、布嚢で搾取した汁を粘り付くまで熬り、搾り滓を晒して末にし、汁と末と共に丸にし得るまでに固く熬つて（二三）雞頭子大の丸にし、一日三回、一丸づつを白湯で服す。氣脈を導き、筋骨を強くし、中風濕毒を治し、顏面の皺を去り、顏色を好くし、久しく服すれば天年を延べる。（臞仙神隱書）

【赤眼濇痛】萎蕤、赤芍藥、當歸、黃連等分を煎じた湯で薰じ洗ふ。（衛生家寶方）

【眼に黑花の見えるもの】赤痛して昏暗するには、甘露湯——萎蕤を焙じて四兩を用ゐ、二錢づつを水一盞に薄荷の葉二枚、生薑一片、蜜少量を入れて七分に煎じ、一日一回、就寢時に溫服する。（聖濟總錄）【小便の卒淋】萎蕤一兩、芭蕉根四兩、水二大盌を一盌半に煎じ、滑石二錢を入れて三回に分服する。（太平聖惠方）【發熱口乾】小便の濇るには、萎蕤五兩を煎じてその汁を飲む。（外臺祕要）【乳石の發熱】萎蕤三兩、炙甘草二兩、生犀角一兩、水四升を一升半に煮て三回に分服する。（聖惠方）【癇後の虛腫】小兒の癇病が瘥えて後、血氣が上に虛して熱が皮膚に在り、身體面部の

(二四)牧野云フ、鹿藥ハ未詳、小野蘭山ノ啓蒙ニハゆきざさニ充ツレド中ラナイト思フ、ゆきざさハゆり科ノ品デ學名ヲSmilacina japonica, A. Gray. トイフモノデアル。

(二五)姑臧ハ縣名、漢ニ置ク。今ノ甘肅省武威縣、卽チ涼州府ノ地ニシテ支那本部ト西域トノ要衝ノ地也。

(二六)牧野云フ、委蛇ハ未詳。

俱に腫れるには、萎蕤、葵子、龍膽、伏苓、前胡等分を末にし、一錢づつを水で煎じて服す。(聖濟總錄)

附錄 (二四)**鹿藥** (開寶) 志曰く、鹿藥は甘く、溫にして毒なし。風血に主效があり、諸冷を去る。老を益し陽を起すには酒に浸して服す。(二五)姑臧以西の地に生じ、苗、根はいづれも黃精に似たもので、鹿が好んでその根を食ふ。時珍曰く、胡治居士の言に【鹿が食ふ九種の解毒の草のうち、この草がその一種だ』といふ。或はこれは萎蕤だともいふ。諸種の點から見てやはり近いものである。姑らくここに附記して將來の研究に俟つ。

附錄 (二六)**委蛇** 音は威貽である。別錄に曰く、味甘し、平にして毒なし。消渴、少氣に主效があり、人をして寒に耐へしめる。宅地や畑の中に生えるもので、枝は太く鬚が長く、多數の葉が兩兩向合つて生え、子は芥子ほどである。時珍曰く、これもやはり萎蕤に似たものだ。また將來の研究に俟つ。

知母（本經中品）

和名　ちも、はなすげ
學名　Anemarrhena asphodeloides, Bunge.
科名　ゆり科（百合科）

釋名　**蚳母**（本經）　蚳の音は（一）遲である。說文には芪と書いてある。**連母**（本經）　**蝭母**　蝭の音は匙、又は提と發音する。或は莐にも書く。**貨母**（本經）　**地參**（本經）　**水參**　又、水須、水浚とも名ける。**蕁**（爾雅）　音は覃である。**莐藩**　音は沈煩である。**苦心**（別錄）　**兒草**（別錄。又、兒踵草、女雷、女理、鹿列、韭逢、東根、野蓼、昌支と名ける）

時珍曰く、宿い根の傍に初めて子が生える、その根の形狀が蚳蝱の形狀のやうなところから蚳母といふ。それを訛つて知母、蝭母と書いたのである。その他名稱は多くあるが詳かでない。

集解　別錄に曰く、知母は（二）河內の川谷に生ずる。二月、八月に根を採つて暴乾する、弘景曰く、今は（三）彭城に產する。形狀は菖蒲に似て柔潤である。葉は至つて枯死し難く、掘り出せばもまたその後から生えるもので、全然枯燥すれば始め

（一）大觀ニ岐ニ作ル。
（二）河內ハ石部鹵石鹹綠礬ノ註ヲ見ヨ。
（三）彭城ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。

て生えなくなる。禹錫曰く、按ずるに、范子に『提母は(四)三輔に產する。黄白のものが善い』とある。郭璞の爾雅の釋には『蕁は蝭母である。山上に生ずるもので、葉は韭のやうなものだ』とある。頌曰く、今は(五)灝河、(六)懷衞、(七)彰德の諸郡、及び(八)解州、(九)滁州に

〔知　母〕

もある、四月韭の花のやうな青い花を開き、八月實を結ぶ。

根【修治】斅曰く、凡そこれを使ふには、先づ槐砧上で細かに剉み、(一〇)燒き乾かして木の臼杵で擣く。鐵器に觸れてはならぬ。時珍曰く、凡そこれを用ゐるには、肥え潤ふた裏の白いものを揀り、毛を去つて切つて用ゐる。經に沿ふて上行せしむるには酒に浸して焙乾して用ゐ、下行せしめるには鹽水で潤して焙じて用ゐる。

【氣味】【苦し、寒にして毒なし】大明曰く、苦く甘し。權曰く、平なり。元素曰く、氣は寒、味は大いに辛くして苦い。氣、味倶に厚く、沈にして降る、陰であ

(四)三輔トハ漢ノ京兆、左馮翊、右扶風ノ地ヲ總稱ス。今ノ陝西省關中道ノ地ニシテ、洛水、涇水ノ中間ヲ左馮翊、涇水ヨリ西南渭水流域、及ビソノ以南終南山ノ附近マデヲ右扶風、河南省閿郷縣以西西安ノ周圍ニ及ブ渭水以南ノ一帶ヲ京兆トス。

(五)灝河ノ灝大觀ニ瀕ニ作ル黄河沿流地方ノ意カ。

(六)懷衞ハ衞州、懷州、卽チ今ノ河南省衞輝、懷慶地方一帶ヲ指ス。石部鹵石類消石ノ註參照。

(七)彰德ハ石部石炭ノ註ヲ見ヨ。

(八)解州ハ石部鹵石類凝水石ノ註ヲ見ヨ。

(九)滁州、大觀ニ徐

る。又曰く、陰中の微陽であつて、腎經の主たる藥である。足の陽明、手の太陰の經の氣分に入る。時珍曰く、黃蘗、及び酒と配合すれば結果が良い。よく鹽、及び蓬砂を伏す。

主治　【消渴、(一一)熱中、邪氣を除き、肢體浮腫に水を下し、不足を補ひ、氣を益す】(本經)　【傷寒、久瘧の煩熱、脇下の邪氣、膈中惡、及び(一二)風汗内疽を療ず。多く服すれば泄痢する】(別錄)　【心煩燥悶、(一三)骨熱勞の往來、產後の蓐勞、腎氣勞、憎寒虛(一四)煩】(甄權)　【(一五)熱勞の傳尸、(一六)疰痛、小腸を通じ、痰を消し、嗽を止め、心肺を潤ほし、心を安んじ、驚悸を止める】(大明)　【心を涼し、熱を去り、陽明の火熱を治し、膀胱、腎の經の火を瀉す。熱厥頭痛、下痢、腰痛、喉中の腥臭】(元素)　【肺火を瀉し、腎水を滋し、命門相火の有餘を治す】(好古)　【胎を安んじ、子煩を止め、射工、溪毒を辟ける】(時珍)

發明　權曰く、知母は諸熱勞の病患で虛して口の乾くものを治するにこれを加へて用ゐる。

杲曰く、知母は(一七)足の陽明、手の太陰に入るもので、その應用には、無根の腎

ニ作ル。滁州ハ人參ノ註ヲ、徐州ハ石部慈石ノ註ヲ見ヨ。

(一〇)大觀ニ焙ニ作ル。

(一一)熱中ハ心熱シ恐懼スルヲ云フ。

(一二)風汗ハ汗毒ノ一名、癰疽ノ一種耳後一寸三分至命ノ處ニ生ズルモノヲ云フ。

(一三)骨熱勞ハ肺勞ナドニテ熱ノサシヒキアルヲ云ナラン。

(一四)大觀ニ損ニ作ル。

(一五)熱勞ノ傳尸、肺結核歟。

(一六)疰痛ハ心痛ノ一種、ニハカニ物ニ驚キ心痛スルモノ。

(一七)足ノ陽明ハ胃ノ經、手ノ太陰ハ肺ノ經、腎ハ水臟ナル故無根ノ火ト云フ。

火を瀉し、汗ある骨蒸を療じ、虚勞の熱を止め、(一八)化源の陰を滋くするの四途がある。張仲景はこれを白虎湯に入れて不眠症患者の煩躁を治するに用ゐたが、それは煩は肺から起り、躁は腎から起るので、石膏を君とし、知母の苦寒を佐として腎の源を淸くし、甘草、粳米を緩和のために用ゐて速かに下らしめぬやうにしたものである。又、凡そ小便閟塞して渴する病は、熱が上焦の氣分に在つて肺中に伏熱し、水を生ずることと不能ならしめるために膀胱がその化源を絶たれるのである。これは氣薄く味薄き淡滲の藥を用ゐて肺火を瀉し、肺金を淸くし、水の化源を滋からしむべきものである。また熱が下焦の血分に在つて渴せぬならば、それは(一九)眞水の不足で膀胱が乾涸するのであつて、陰がなければ陽がその働をなし得ないのである。これに對する療治としては、黃蘗、知母の大苦寒の藥を用ゐて腎と膀胱とを補ひ、陰氣を行らして陽をして自から働かしめ、小便を自から通ぜしむべきものである。その方法の詳細は木部黃蘗の條に記載する。

時珍曰く、腎は燥に苦む、辛を食して之を潤ほすべきものだ。肺は逆に苦む、(二〇)辛を食して之を瀉すべきものだ。知母は辛、苦、寒、涼であつて、その氣味は

(一八)化源ハ肺臟ヲ指ス、金生水ノ意ヨリ云フ。

(一九)眞水ハ眞實ノ水。此處ニテハ尿ヲ指スナラン。

(二〇)藏氣法論ニ據レバ、辛ハ苦ノ誤。

下部に作用しては腎の燥を潤ほして陰を滋くし、上部に作用しては肺の金を淸くして火を瀉する。乃ち二經の氣分の藥である。黃蘗は腎經の血分の藥だから、この二藥は必ず相須つてその效果を現はすもので、昔はこれを蝦と水母との相關的狀態に譬へたものだ。補陰の說に就ては黃蘗の條に詳述する。

【附方】舊二、新五。【痰嗽の久患、新患】胸膈から下方に塞つて停飮し、臟腑に及ぼすに至つたものには、知母、貝母各一兩を末にし、巴豆三十箇を油を去つて共に研勻し、薑を三片に切つてその兩面に、この藥一字づつを蘸け、細かに嚼み嚥下してそのまま睡る。翌早朝必ず一回瀉痢して嗽は立ろに止まる。ただこれを用ゐるは壯年の患者に限る。ある方では巴豆を用ゐない。(醫學集成)【久嗽の氣急】知母を毛を去り、切つて五錢を紙を隔て炒り、杏仁を薑水に漬けて皮尖を去つて焙じて五錢、これを水一鍾半で一鍾に煎じ、食事と時間を隔て溫服し、次に蘿蔔子、杏仁等分を末にして米糊で丸にし、五十丸を薑湯で服すれば病根を絕つ。(鄧筆峯雜興方)【妊婦の子煩】服藥が原因で胎氣不安を發し、煩悶して橫臥し得ぬには、知母一兩を洗ひ焙じて末にし、棗肉で彈子大の丸にして一丸づつを人參湯で服す。醫者がこの病

を識らずして虚煩として治療を施せば反つて胎氣を損ずるものである　産科の鄭宗文がこの方を陳藏器の本草拾遺の中から得たものであるが、之を用ゐて良好の效果を擧げた。(楊歸厚産乳集驗方)【妊娠腹痛】月が足らずして臨産の如き痛を發するには、知母二兩を末にして蜜で梧子大の丸にし、二十丸づつを粥飲で服す。(二)(陳延之小品方)【溪毒、射工】凡そ溪毒に中つたときは、知母を根、葉の付いたまま搗いて散にして服し、また水に入れて搗いてその絞汁一二升を飲むもよし。夏季の旅行には多くその屑を取つて携帶するがよい。河水に入るときは、先づ少量を水の上流に投じて入れば危險の虞がなく、また同時に射工の毒を辟けるが、それにはやはり湯に煮て浴するが甚だ佳い。(肘後百方)【紫癜風疾】知母を醋に磨つて日毎に三回づつ搽擦する。(衛生易簡方)【(三)嵌甲腫痛】知母を燒いて性を存し、研つて摻る。(多能方)

(一)肉蓯蓉　(本經上品)

和名　ほんおにく(新稱)
學名　Cistanche salsa, Benth. et Hook. F.
科名　はまうつぼ科(列當科)

釋名　肉松容(吳普)　黑司命(吳普)　時珍曰く、この物は補の功用があつて

(二)大觀ニ聖惠方ニ作ル。

(三)嵌甲疽又甲疽ト云フ靴鞋ナドノ窄小ナル爲ニ瓜ノ甲ヲ傷メ、腫痛スルヲ云フ。

(一)牧野云フ、我邦ノ本草家從來肉蓯蓉ヲおにく一名きむらたけニ充テシハ誤デアツテ、此品ハ科ハ同ジコトデアルガ學名ハ Boschniakia glabra, C. A. Mey. ト稱スルモノデアル。

而もそれが峻烈でないところから從容なる名稱がある。從容とは和らぎ緩やかなるの形容である。

【集解】　別錄に曰く、肉蓯蓉は(一)河西の山谷、及び(二)代郡、雁門に生ずる。五月五日に採つて陰乾する。普曰く、河西の山の陰地に生ずる。叢生するものだ。二月から八月までの間に採る。

弘景曰く、代郡、雁門は(四)幷州の管轄である。これは馬の多い處にあるもので、野馬の精液が地に落ちてそれから生ずるものだといふ。生の時は肉に似たものだ。羊肉羹にして用ゐれば虛乏を補ふに極めて佳い。生でも噉へる。(五)河南地方に至つて多いが、今第一は隴西に產するもので、形は(六)扁黃で柔かに潤ひ、花が多く、味は甘い。次には北國に產するもので、形は短く、花が少い。(七)巴東、(八)建平地方にもあるが良くない。

恭曰く、これは草蓯蓉の說明だ。陶氏は肉蓯蓉をまだ見なかつたと見える。今世間で用ゐてゐるものもやはり草蓯蓉だ。これは花を刮り去つて肉蓯蓉の代用にするが、功力はやや劣る。

(一)河西ハ鹵石類石硫黃ノ註ヲ見ヨ。
(二)代郡、雁門ハ石部代赭石ノ註ヲ見ヨ。
(四)幷州ハ石部石膽ノ註ヲ見ヨ。
(五)河南ハ今ノ河南省一帶ノ地ヲ指ス。
(六)大觀ニ廣ニ作ル。
(七)巴東ハ石部鹵石類戎鹽ノ註ヲ見ヨ。
(八)建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

○○○
保昇曰く、(九)肅州(一〇)福祿縣の沙漠の中に產する。三月、四月に根を掘ると、長さ一尺餘あつて、中央の好き部分三四寸を切り取り、繩を穿つて陰乾すること八个月にして始めて用ゐるに適するやうになる。皮には松子のやうな鱗甲があるものだ。草蓯蓉なるものは四月中旬に採るもので、長さは五六寸から約一尺位あり、莖は圓く、紫色だ。

〔肉　蓯　蓉〕

○○
大明曰く、(一一)孛落樹の下や土塹の上に生ずるもので、馬の交尾し得る處ではない。陶氏の說は誤つてゐる。又、花蓯蓉といふは暮春に苗が抽出るもので、力はやや微弱なものだ。

○
頌曰く、現に(一二)陝西に州郡に多くあるが、(一三)西羌地方から來る肉の厚い力の緊しいものには及ばない。舊說に、野馬の遺して精滴から生ずるものだといふが、現に西方の者の話では、大木の間、及び土塹や垣の中に多く生ずるといふのだから、

(九)肅州ハ今ノ甘肅省酒泉縣ノ地ナリ。
(一〇)福祿縣ハ鹵石類戎鹽ノ註ヲ見ヨ。
(一一)孛落樹ハ一名枹コナラ。
(一二)陝西ハ今ノ陝西省ノ地ヲ指ス。
(一三)西羌ハ鹵石類消石ノ註ヲ見ヨ。

これはやはりさうした別の一種類の植物があるものと見える。或はそのものの發生の初期は馬の精瀝から生じ、その後植物として繁殖したものか、茜根が人血から生じたといふやうなことかも知れぬ。五月に採取するのだが、老境に入つては役に立つまいといふところから多くは三月に採つて居る。

震亨曰く、河西の地方が中國の版圖に統一されてからは、現にその實物に接し得るが、所謂鱗甲の著いたものなどの一向に有つたためしはない。蓋し蓯蓉は手に入れることの甚だ稀なもので、世間では多く(一四)金蓮根を鹽盆の中で加工して擬物を作り、又、草蓯蓉をこの物と擬稱する場合が多いから、使用するには餘程愼重な吟味を要する。

嘉謨曰く、今世間では松の若芽を鹽で潤して贋物を作つてゐる。

修治　斆曰く、凡そこれを使ふには、先づ淸酒に一夜浸して翌日たはしで沙土や浮甲を刷き取り、中心を裂き破つて(一五)竹絲草のやうな一重の白膜を取り去る。これが附著してゐては心臟の前を隔て氣を散せず、ために上氣せしめるものである。かくて甑に入れて正午から午後六時まで蒸して取り出す。又、酥をつけて適當に炙

(一四)金蓮根未詳。

(一五)白井曰ク、竹絲草恐クハ竹絲布ノ誤。竹絲布本書竹ノ集解ニ出ヅ。

（二六）斅ヲ大觀ニ藏器ニ作ル。

く。

【氣味】【甘く、微温にして毒なし】別錄に曰く、酸く鹹し。普曰く、神農、黄帝は鹹しといひ、雷公は酸しといひ、李當之は小溫なりといふ。【主治】【五勞、七傷、中を補し、莖中の寒熱痛を除き、五臟を養ひ、陰を强くし、精氣を益し、子多からしめる。婦人の癥瘕。久しく服すれば身體を輕くする】（本經）【膀胱の邪氣、腰痛を除き、痢を止める】（別錄）【髓を益し、顏色を快活にし、天年を延べ、大いに補して陽を壯にし、日に女を御すること倍に過ぐる。婦人の血崩を治す】（甄權）【男子の絶陽で興奮せぬもの、婦人の絶陰で妊娠せぬもの。五臟を潤ほし、肌肉を長じ、腰膝を暖める。男子の洩精、血遺瀝、婦人の帶下、陰痛】（大明）

【發明】好古曰く、命門の相火の不足にはこれを以て補ふ。乃ち腎の經の血分の藥である。凡そ蓯蓉を服して腎を治すれば必ず心を妨げるものである。震亨曰く、峻烈に精血を補するもので、屢ゝ用ゐれば反動として大便が滑するものである。（二六）斅曰く、筋を强くし、骨を健にするには、蓯蓉、鱓魚の二味を末にし、黄精汁で丸にして服すれば力が十倍するといふ說が乾寧記に掲げてある。頌曰く、西邊地

方では多くこれを食膳の材料とし、鱗甲を刮り去つて酒に浸し、黑汁を洗ひ去つて薄く切り、山芋、羊肉と合はせて羹にするが、極めて美味で健康を益し、補藥を服するに勝るものだといふ。宗奭曰く、黑汁を洗ひ去つては氣味が盡く無くなつて了ふ。けれども嫩いものは確に羹にもなる。老いたものは味が苦い。藥に入れるには少ければ效がない。

附方　舊一、新四。【勞傷の補益】精敗で顏色黑きには、蓯蓉四兩を水で煮爛して薄く細切し、研つた精羊肉とを四回分に分け、五味を入れて米で粥に煮て空心に食ふ。（藥性論）【腎虛白濁】肉蓯蓉、鹿茸、山藥、白伏苓等分を末にし、米糊で梧子大の丸にして三十丸づつを棗湯で服す。（聖濟總錄）【汗多き便閟】老人、虛せる者いづれも用ゐるがよい。肉蓯蓉を酒に浸し焙じて二兩を沈香の研末一兩と末にし、麻子仁汁で作つた糊で梧子大の丸にし、七八丸づつを白湯で服す。（濟生方）【(一七)消中で飢易きもの】肉蓯蓉、山茱萸、五味子を末にし、蜜で梧子大の丸にして二十丸づつを鹽酒で服す。（醫學指南）【破傷風病】口噤し、身體强ばるには、肉蓯蓉を切片して晒し乾し、一箇の小盞の底へ孔を明けそれに盛り、烟に燒いて瘡の上から

(一七)消中トハ多食數溲ナ云フ、消渴ノ一種。

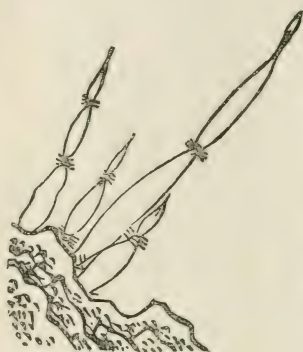
熏ずる。屢〻效驗を得て居る。（衞生總錄）

（一）列　當（宋開寶）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

【釋名】　栗當（開寶）　草蓯蓉（開寶）　花蓯蓉（日華）

【集解】　志曰く、列當は（二）山南の巖石上に生ずる。藕根のやうなもので、初めて生じたばかりのものを掘り取つて陰乾して用ゐる。保昇曰く、（三）原州、（四）秦州、（五）渭州、（六）靈州にいづれもある。暮春に苗が地上へ抽け出るもので、四月中旬に採取する。長さは五六寸から約一尺位まであり、莖は圓く、色は（七）白い。採收したものは壓しひしげて日光に當て乾かす。頌曰く、草蓯蓉の根は肉蓯蓉と極めて酷似したもので、花を刮り

〔列當〕

（一）牧野云フ、從來ノ學者列當ヲはまうつぼ卽チ Orobanche coerulescens, Steph. var. typica, G. Beck. (O. ammophila, C. A. Mey.) ニ充ツレドモ中ラズ、ソシテ列當ハ今其正體ガ分明デナイノデ其科サヘ判然セズ。

（二）山南ハ唐十道ノ一、山南道ノ地ヲイフ。今ノ湖北省ノ揚子江以北、漢水ノ沿流地方ニシテ北ハ陝西省終南山以南、河南省北嶺以南、西ハ四川省劍閣以東、三十三州ヲ統ブ。

（三）原州ハ後魏ニ置ク、今ノ甘肅省固原縣ノ地ナリ。

（四）秦州ハ石部水銀、石膽ノ註ヲ見ヨ。

（五）渭州ハ石部土殷孽ノ註ヲ見ヨ。

去り壓しひしげて肉蓯蓉の代用物にするが、功力は如何にも劣る。それが卽ち列當である。

根【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【男子の五勞、七傷、腰、腎を補し、子を儲けしめ、風血を去る。(八)酒で煮、酒で浸して服す】(開寶)

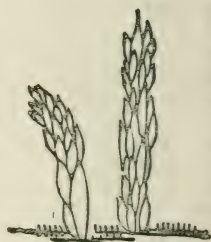
【附方】舊一。【陽事不興】栗當の好きもの二斤――卽ち列當――を擣き篩ひ、好酒一斗に浸して一夜置いて取り出し、(九)男、女に拘はらず日毎に飲む。(昝殷食醫心鏡)

鎖陽（補遺）

和名　おしやぐじたけ(新稱)
學名　Cynomorium coccineum, L.
科名　おしやぐじたけ(鎖陽科)

【集解】時珍曰く、鎖陽は(一)肅州に產する。按ずるに、陶九成の輟耕錄に『鎖陽は(二)韃靼の田地に生ずる。野馬が蛟龍と交る際に地上に落した精が、久しく經つて筍のやうに地上に發生したもので、上部がふくらむで下部が細く、鱗甲が密に纏つて筋脈が連絡し、宛ら男陽のやうなものだ。卽ち肉蓯蓉の種類である。或は蠻里の淫婦がこれを自瀆に用ゐるが、陰氣に遭へば怒長するといふ。その地の者は掘

(六)靈州ハ石部代赭石ノ註ヲ見ヨ。
(七)本草彙言ニ紫ニ作ル。
(八)大觀ニ煮酒ヲ煮及ニ作ル。
(九)本草原始ニ隨性ヲ隨意ニ作ル。
(一)肅州ハ肉蓯蓉ノ註ヲ見ヨ。
(二)韃靼ハ蒙古族ノタタールノ音譯ニシテ、陶九成ノ頃ハ今ノ內外蒙古地方ヲ韃靼ト稱ス元ノ順帝蒙古ニ遁レテヨリ、外蒙古土拉河ノ沿流喀

喇和林ニ據リテ外蒙古ヲ統ベ、明季ニ至リ内蒙ヲ侵シテ今ノ伊克昭盟、阿拉善額魯特ノ地ニ及ブ。
(三) 本草彙言ニ百ヲ十ニ作ル。

取つて洗滌して皮を去り、薄く切つて晒し乾かし、賣藥として賣つて居るが、その功力は蓯蓉に(三)百倍する』とある。余の考では、これも肉蓯蓉や列當のやうな自然に生じた一種の植物であらうと思ふ。やはり必ずしも遺精から化生するに限つたものではあるまい。

〔鎖陽〕

氣味 【甘し、溫にして毒なし】 主治 【大いに陰氣を補し、精血を益し、大便を利す。虛せる者が大便燥結するには之を啖ふ。蓯蓉の代りに粥に煮て食ふが更に佳し。燥結せぬものは用ゐてはならぬ】(震亨) 【燥を潤ほし、筋を養ひ、痿弱を治す】(時珍)

赤箭(本經上品) 天麻(宋開寶)

和名 おにのやがら、ぬすびとのあし
學名 (Gastrodia elata, Blume.)
科名 らん科(蘭科)

校正 天麻を宋本草に重出してあるが、今は一條下に併入した。

【釋名】　赤箭芝（藥性）　獨搖芝（抱朴子）　定風草（藥性）　離母（本經）　合離草（抱朴子）　神草（吳普）　鬼督郵（本經）　弘景曰く、赤箭はやはり芝の類である。莖は箭簳のやうで色赤く、端に葉が生える。根は(一)大魁のやうである。又、芋のやうで十二の子が周圍を衞るやう著き、風が吹いても動かず風無くして自ら搖ぐといふが、さやうな物は俗間では一向に見受けない。また徐長卿にも鬼督郵の稱がある。又、鬼箭といふ莖に羽のあるものもあつて、それ等の物の治病上の主效はいづれも相似てゐるが、赤箭とは甚だしく異ふものだ。いづれもこの赤箭ではない。

頌曰く、按ずるに、抱朴子に『仙方に合離草、一名獨搖草、一名離母なるものがある』とある。合離、離母とは、この草の根が親芋のやうに周圍に十二箇の子があつて、天の十二星の列なつたやうに見えるのと、その親芋のやうなものから數尺の間に白髮のやうな細根あつて、それが連絡して居るやうで實は連なつて居らず、ただ同氣を以て相聚つて居るところから謂つたものだ。兎絲といふ草の下には伏苓の根があるもので、これが無ければ兎絲は上へ伸び得ないけれども、やはり兎絲と伏苓とは同體に連なつて居るわけでもないといふ。赤箭もやはり同樣に不思議なとこ

(一)大觀本草大魁チ人足ニ作ル。

〔赤箭天麻〕

ろがあると見える。陶隱居は已に『俗間には見られぬものだ』といつてゐる。兎絲の下に伏菟があるものもやはり遂に見たといふことを聞かないが、そのものの種類に依つては或は稀にさやうな奇怪な事實があるのかも知れない。

時珍曰く、赤箭は形を形容した名稱、獨搖、定風はその性の特異を表徴した名稱、離母、合離は根の特異に因んだ名稱、神草、鬼督郵は功用に因んだ名稱であつて、天麻は卽ち赤箭の根である。開寶本草には別に一个條として重複してあるが、詳細は次の集解に揭げる。

集解　別錄に曰く、赤箭は(二)陳倉の川谷、(三)雍州、及び(四)太山、(五)少室に生ずる。三月、四月、八月に根を採つて(六)暴乾する。弘景曰く、陳倉は今の雍州(七)扶風郡の管轄である。

志曰く、天麻は(八)鄆州、(九)利州、太山、(一〇)嶗山の諸處に生じ、五月根を採つて

(二)陳倉ハ秦ノ縣名今ノ陝西省寶雞縣ノ東ニ故城アリ。春秋ノ時秦ノ文公ノ築ク所トイフ。
(三)雍州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。
(四)太山ハ金石部玉類雲母ノ註ヲ見ヨ。
(五)少室ハ嵩山ノ一峯、石部五色石脂嵩高山ノ註參照。
(六)大觀ニ陰ニ作ル
(七)扶風郡ハ前漢ノ右扶風、後漢ニ郡トナス。今ノ陝西省鳳翔等ノ地方ナリ。知母三輔ノ註參照。
(八)鄆州ハ唐ニ置ク今ノ山東省鄆城縣ノ地ナリ。
(九)利州ハ金部鉛ノ註ヲ見ヨ。
(一〇)嶗山ハ石部附錄諸石黑石華ノ註ヲ見ヨ。

暴乾する。葉は芍藥のやうで小く、その中央から一本の莖が箭簳のやうに眞直に上へ抽き出で、その莖の端に續隨子のやうな實を結び、その子は葉が枯れる頃に黃色に熟する。根は天門冬などの類のやうで、十二箇が連り合ひ、形は黃瓜のやうでもあり、また蘆菔のやうでもあり、大小一定せぬ。產地の者は多くこれを生で噉ひ、或は蒸煮して食ふ。今は多く鄆州產を佳品として用ゐる。

恭曰く、赤箭は芝の類である。莖は色赤く箭簳のやうでその端に花があり、葉の色も赤い。遠く看れば羽の著いた箭のやうに見える。四月に花を開いて（一）枯苦楝子のやうな實を結び、核は五六角の稜をなして中に麪のやうな肉があり、日に乾せば枯れ萎える。根は、皮、肉、汁共に甚だ天門冬に似てゐるが、ただ心の脈がないだけだ。根から五六寸のところに十餘箇の子があつて、中央のものを周つて居る有樣は芋に似てゐる。生で噉へるものだ、乾服の方法はない。

頌曰く、赤箭は現に江西、湖南の地方にもあるが藥用にはならない。苗は蘇恭の說明の通りである。但し本經には『三月、四月、八月に根を採る』とあつて苗を用ゐるとは言つてないが、今の方家では三月、四月に苗を採り、七月、八月、九月に

（一）大觀本草ニ枯ノ字ナシ。

根を採つてゐる。本經とは齟齬してゐて合致點を採り難いから、ここにはただ現今の方法に從ふ。又曰く、天麻は現に（一二）汴京の東西、湖南、（一三）淮南の州郡にいづれもある。春苗が生え、芽が初て出たばかりには芍藥のやうで、只一本の莖が抽け出て直上に伸び、高さ三四尺になる。箭簳のやうな形狀で色が青赤なところから赤箭芝と名けたのだ。莖の中は空で、半以上の部分に微に尖つて小い莖に貼り付いた葉があり、梢の端に花が穗となつて開き、豆粒大の子を結ぶ。その子は夏になつても落ないで、いつの間にか莖の中を潛つて行つて土の中から生えて來る。根は（一四）黃瓜のやうで十箇乃至二十箇が連つて生え、大なるは重さ半斤、或は五六兩ある。その皮は黃白色だ。名けて龍皮といふ。肉は天麻と名ける。二月、三月、五月、八月の內に採收し、まだ潤のあるうちに皮を刮り去り、沸湯で略ぼ煮てから暴乾して貯へる。（一五）嵩山、（一六）衡山附近では生えたのを取つて蜜で煎じて菓子にして食ふ、甚だ珍奇なものである。

宗奭曰く、赤箭は天麻の苗である。天麻とは治療上の功用が同一でないところから、後世二條に分けたのだ。

（一二）汴京ハ今ノ河南省開封府。北宋ノ國都ナリ。汴京ノ東西トハ當時ノ京東、京西兩路ノ地ヲ指ス。今ノ山東、河南兩省ノ地ナリ。

（一三）淮南ハ淮水以南、揚子江以北ノ地、即チ當時ノ淮南路ナリ。

（一四）本草彙言ニ黃ヲ王ニ作ル。

（一五）嵩山ハ五色石脂嵩高山ノ註ヲ見ヨ。

（一六）衡山ハ石部砒石ノ註ヲ見ヨ。

(一七)齊ハ水部阿井泉ノ註ヲ見ヨ。

(一八)大觀本草ニ成熟ヲ黄熟ニ作ル。

○承曰く、醫家で現に用ゐてゐる天麻は赤箭の根だ。開寶本草には中品の藥に天麻の一條を掲げて鄆州から出るとしてあるが、今の赤箭は根も苗もいづれも(一七)齊、鄆地方から來るものが上等品となつて居る。蘇頌の圖經に掲げてある天麻の形狀は、あれは赤箭の苗のまだ大きく成長せぬものである。赤箭は苗を用ゐて表から裏に入る功果があり、天麻は根を用ゐて內から外に達するの性質がある。根はそれから苗が抽き出て上に昇り、苗は結子が(一八)成熟して返つて幹の中を降り地中に入つて生ずる。かやうにその物の成立狀態からしても、內外に及ぼす主たる治效の現れる關係が推究し得るであらう。現に最も博識なる翰林沈括は、嘗て『古方に天麻を用ゐるとあるときは赤箭を用ゐない。赤箭を用ゐるとあるときは天麻は用ゐない。して見れば、天麻と赤箭とその物全體としては同一物なることが明かだ』といはれてゐる。

○機曰く、赤箭と天麻とは一物である。經に二としたのは根と苗とを分けたのであつて、主治の功用は同一でない。產地が異ればそれぞれに特長があるのだ。

○○時珍曰く、本經にあるは赤箭のみで、天麻とは後世の者が稱したのだ。甄權の藥性

論に『赤箭芝、一名天麻』とあるに依つても自ら明白である。宋時代の馬志が重修本草に天麻として二重に掲げたために、かかる同異の論辯が起つたのだ。沈括の筆談には『神農本草には明かに「赤箭は根を採る」とある。後世の者が、莖の形が箭のやうなのを見て、「赤箭といふ以上、莖を用ゐるものだらう」といふやうなことを考へ出したのだ。蓋しそれは間違である。譬へば鳶尾、牛膝などいふはその莖、葉が似てゐるからの名稱だが、實際用ゐるものはその根である。毫も疑ふの餘地はない筈だ。而して上品の五芝以外で補益の上藥は赤箭が第一のものだ。然るに世人は天麻の異說に惑ふて、ただ風を治すだけに用途を限つてゐる如何にも遺憾な次第だ』とある。沈氏のこの說は正論だが、但しこの物は根も莖もいづれも用ゐ得るものである。天麻の子は莖の內部を通つて地中に潛下するもので、俗に還筒子といふ。根は暴乾すると肉の色が堅白で羊角の色のやうになるところから羊角天麻とも呼び、蒸したものは黃に皺があつて乾瓜のやうなところから俗に醬瓜天麻とも呼ぶ。いづれも藥として用ゐ得る。一種の形が尖つて空薄で玄參のやうな形狀のものは藥用にならない。抱朴子には『獨搖芝は高山、深谷の處に生えるもので、この芝の生

じた左右には草が生えない。その莖の太さは手の指ほどあつて丹のやうに赤く、葉は無色で小莧に似てゐる。根は大塊のものは(一九)斗ほどあり、雞子ほどの小いものも十二箇がそれを繞つてゐる。その大なるものを採り得て服すれば天年を延べる』とある。按ずるに、これは天麻のうちの極めて神異なる一種をいふので、恰も人參のうちの神參などいふもののやうなわけであらう。

○斆曰く、凡そ天麻を用ゐる場合に御風草を用ゐてはならぬ。この二物はよく似てゐるがただ葉と莖が違ふ。御風草は根と莖に斑があり、葉の背は白くして青點がある。また御風草を用ゐる場合に天麻を用ゐてもならない。この二草を同時に用ゐると(二〇)腸結の疾患を起すものだ。

正誤

○○藏器曰く、天麻は(二一)平澤に生ずる。馬鞭草に似て節節に紫色の花を著け、その花の中に(二二)箱子のやうな子を持つ。子の性は寒であつて、飲にして用ゐれば熱氣を去る。莖、葉は搗いて癰腫に傅ける。

○承曰く、藏器の說のものは赤箭とは無關係だ。これは別種の一植物である。

○○時珍曰く、陳氏の說は一種の天麻草で、これは益母草の種類といふ方が當つてゐる

(一九)斗ハ酒器ノ名。

(二〇)腸結便祕ノコトナラン。

(二一)箱子大觀本草ニ青箱子ニ作ル。

る。嘉祐本草に誤つて天麻の條下に引用したまでのことだ。今その誤を正して置く。

修治　斅曰く、これを修治するには、天麻十兩を剉んで瓶の中に置き、蒺藜子一鎰を緩火で熬り焦してその天麻の上を蓋ひ、紙で三重に封じ括つて午前十時から午後二時まで置き、蒺藜を取り出してまた炒つて前のやうに蓋ひ封じ、かく七回繰返してから天麻に著いた氣汗を布で拭ひ、刀で裂いて焙乾してから天麻のみを搗いて用ゐる。御風草を用ゐる場合にもこの方法と同樣である。時珍曰く、これは(二二)風痺を治する藥としての修治法だから此くするのだ。肝經の風虛を治する場合の修治は、ただ洗淨し濕紙に包んで糠火の中で煨熟し、それを取り出して切片し、酒に一夜浸して焙乾して用ゐる。

赤箭　**氣味**　【辛し、溫にして毒なし】志曰く、天麻は辛し、平にして毒なし。大明曰く、甘し、暖なり。權曰く、赤箭芝、一名天麻は味甘し、平にして毒なし。好古曰く、苦し、平にして陰中の陽である。**主治**　【(二三)鬼、精の物、蠱毒の惡氣を殺す。久く服すれば氣力を益し、陰を長じて肥健にし、身體を輕くし、天年を增す】(本經)【癰腫を消し、(二四)支滿を下す。寒疝の下血】(別錄)【天麻は諸風濕痺

(二二)風痺ハ中風ノ一種、筋痺、脈痺、肌痺、皮痺、骨痺ノ別アリ。

(二三)鬼精物ハ幽冥怪物等ヲ云フ。

(二四)支滿ハ兩脇熱甚シクシテ滿ツルヲ云フ。

で四肢の拘攣するもの、小兒の風癇驚氣に主效があり、腰膝を利し、筋力を强くする。久く服すれば氣を益し、身體を輕くし、天年を長くする】(開寶)【冷氣(二五)痛痺、(二六)癱緩不隨、恍惚狀態で言語多く、よく驚いて意識を失ふものを治す】(甄權)【陽氣を助け、五勞、七傷を補す。鬼疰。血脈を通じ、竅を開く。服食に忌むものはない】(大明)【風虛の眩暈頭痛を治す】(元素)

發明　杲曰く、肝虛不足は天麻、芎藭で補するがよし。その用途には、大人の(二七)風熱頭痛、小兒の風癇驚悸、諸風の痲痺不仁、風熱の言語不遂を療ずるの四種ある。

時珍曰く、天麻は肝經の氣分の藥である。素問に『諸風掉眩は皆木に屬す』とあるかち、天麻は厥陰の經に入つて諸病を治するものである。按ずるに、羅天益は『眼黑、頭旋は風虛が內に作つたのだ、天麻を用ゐる以外に治術はない。天麻は定風草と呼ぶ位で、風を治するの神藥である。現に久く天麻の藥を服すれば全身に(二八)紅丹を發出するもので、それは天麻が風を祛るの實證だ』といつてゐる。

宗奭曰く、天麻は他の藥を佐使として用ゐることを條件として始めて效果を擧げ

(二五)痛痺ハ食物本草ニ痿痺トアリ。
(二六)癱緩ハ半身不遂。
(二七)風熱ハ急ニ發熱煩悶スルヲ云フ。
(二八)紅丹ハ血氣ノ旺盛ナル色ヲ云フ。

(二九)心怯ハムナサワギ。
(三〇)偏正ノ頭痛ノ偏ハ一方、正ハ左右倶ニ痛ムモノ。
(三一)鼻齆ハハナタケ。

るものだから、用ゐるには必ず他の藥にこれに加へる必要がある。世間では或は蜜で漬けて菓子にし、或は蒸煮して食ふてゐるが、熟考すれば其理由が分かる。

附方　新二。【天麻丸】風を消し、痰を化し、頭、目を清利し、胸を寛にし、膈を利す。(二九)心怯、煩悶、頭運で倒れんとするもの、頸筋が急し、肩から背に吊つてだるきもの、精神昏然として多く睡るもの、肢節の煩痛、皮膚の瘙痒、(三〇)偏、正頭痛、(三一)鼻齆、顔面のむくむものを治するには、いづれもこれを服するがよい。天麻半兩、芎藭二兩を末にして煉蜜で芡子大の丸にし、食後に一丸づつを嚼んで茶、酒で飲下す。(普濟方)【腰脚の疼痛】天麻、半夏、細辛各二兩を二箇の絹袋に等分に分けて盛り、蒸熱して交互に痛所を慰す。汗が出れば癒えるが、更に數日にして再び慰す。(衞生易簡方)

還筒子　主治　【風を定め、虛を補ふ。功力は天麻に同じ】(時珍)

附方　新一。【益氣、固精】血を補し、髮を黑くし、壽命を益すの奇效がある。還筒子半兩、芡實半兩、金銀花二兩、破故紙を春三日、夏一日、秋二日、冬五日間酒に浸して焙じ研つた末二兩、以上を各〻研末して蜜糊で梧子大の丸にし、五

十九づつを空心に鹽湯、溫酒の任意のもので服す。これは鄭西泉が所傳の方である。(鄧才雜興方)

(一)**朮** 直律の切(ヂツと發音する)　(本經上品)

和名　おけら
學名　Atractylis ovata, Thunb
科名　きく科(菊科)

釋名　**山薊**(本經)　**楊枹**　枹の音は孚(フ)である。**枹薊**　**馬蘇**(綱目)　**山薑**(別錄)　**山連**(別錄)　**吃力伽**(日華)　時珍曰く、按ずるに、六書本義には、朮の字の篆書は根、幹、枝、葉の形を象徴したものとしてある。吳普本草に『一名山芥、一名天薊』とあるは、その葉が薊に似てゐるのと、味が薑、芥に似てゐるからである。また(二)西域では之を吃力伽といふところから、外臺祕要には吃力伽散なる藥名がある。(三)揚州の管內に多く白朮が種植され、その形狀が枹のやうなところから揚枹、及び枹薊なる名稱がある。今一般に吳朮と稱するものがそれで、枹とは太鼓のバチの稱呼である。古方では二朮を通用したもので、後世になつてから蒼と白とに區別したのだ。詳細は下文に掲げる。

(一)木村(康一)曰ク、從來オケラヲ以テ、朮ニ充テ來ルト雖モ、多少ノ疑問ナキヲ得ズ、殊ニ朮ト稱スルモノヲ支那漢藥商ニ求ムルニ、白朮、蒼朮ノ他、於朮、關朮、毛朮等甚ダ種類多ク、何レモ全ク別種ニシテ目下原植物ヲ決スルヲ得ズ。

(二)西域ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(三)揚州ハ古ノ九州ノ一、今ノ江蘇、安徽、江西、浙江、福建ノ地ヲ包ヌ。外臺祕要ニ指ス揚州ハ唐代ノ一州ヲ指ス即チ今ノ江蘇省江都縣附近一帶ノ地ナリ。江都縣即チ當時ノ揚州治ナリ。

(四)鄭山ハ鄭ノ山ノ意ナランカ。次句ノ漢中、南鄭トアルハソノ註ノ文ニシテ後ニ本文ニ混入セルモノニアラズヤト思ハル。果シテ然リトスレバ、コノ鄭ハ陶弘景ノ斷定ノ如ク南鄭ヲ指スモノナラン。單ニ鄭トイフトキハ周宣王ガソノ弟友ヲ封シタル鄭國ノ地卽チ漢ノ鄭縣、今ノ河南省新鄭縣一帶ノ地ヲ指スコトトナル。
(五)漢中ハ石部理石礬石ノ註ヲ見ヨ。
(六)南鄭ハ漢ノ漢中郡治、今ノ陝西省南鄭縣ノ地也。
(七)蔣山、卽チ鍾山ニシテ、今ノ江蘇省江寧縣ノ東北ニ在リ。俗ニ紫金山ト稱ス。呉ノ孫權ソノ祖ノ諱ヲ避ケテ蔣山ト

集解　別錄に曰く、朮は(四)鄭山の山谷、(五)漢中、(六)南鄭に生ずる。二月、三月、八月、九月に根を採つて暴乾する。弘景曰く、鄭山、卽ち南鄭である。今は諸處にあるが(七)蔣山、(八)白山、(九)茅山のものが勝れてゐる。十一月、十二月に採つたものがよく、脂膏が多くて甘い。その苗は飮を作るによく、甚だ香美なものだ。朮には白、赤の二種類あつて、白朮は葉が大きくして毛があり、椏があり、根は甜くして膏が少く、丸、散にして用ゐるによい。赤朮は葉が細狹で椏がなく、根は少し苦くして膏多く、煎湯にして用ゐるによい。東方地方の朮は形は大きいが烈しい氣がなく、藥に用ゐるに堪へない。當今商人の賣るものはいづれも米粉で白く塗るので自然に白いのでない。用ゐる時にはそれを削り去る必要がある。

頌曰く、朮は現に處處にあるが、

〔蒼　朮〕

茅山、(一〇)嵩山のものが佳い。春青色の苗を生じ、椏がなく、莖の形狀が蒿の幹のやうで色は青赤く、長さは約二三尺である。夏紫碧色の花を開き、(一一)刺薊花に似たものもあり、或は黄白のものもある。(一二)伏の節に入つて子を結び、秋に至つて苗が枯れる。根は薑に似て旁に細根があり、皮は黒く心は黄白色で中に紫色の膏液がある。その根は乾、濕共に通用する。陶隱居がいふ朮の二種とは、爾雅の所謂枹薊、卽ち白朮とあるそのもので、現に白朮は(一三)杭、(一四)越、(一五)舒、(一六)宣の諸州の高山の崗上に生ずる、葉は相對して上に毛があり、莖は四角で莖の端に淡、紫、碧、紅等數色の花が咲き、根は枝をさして生える。二月、三月、八月、九月に採つて暴乾して用ゐるのだが、紫花の咲く大塊のものが勝れてゐる。古方に用ゐた朮は皆白朮だ。

宗奭曰く、蒼朮は長さは大(一七)小の指ほどあり肥え實したもので、皮は褐色である。その氣味は辛烈なものだから米泔に浸し洗つて皮を去つて用ゐる。白朮は粗くしまつて微褐色である。その(一八)氣はやはり微し辛く苦いが烈しくはない。古方、及び本經にはただ朮とのみあつて蒼、白二種の區別はないが、二種の別に就ても充

稱ストイフ。宋ニマタ鍾山ニ復ス。

(八)白山、卽チ長白山。朝鮮。滿洲ノ境ニ在リ、圖們、鴨綠、松花三江ノ水源ナリ略シテ白山ト呼ブ。又、枹朴子ニ所謂長白泰山之副嶽トアル山ハ今ノ山東省長山縣ニアリ。或ハ弘景ノイフ白山ハ此ノ山ノ略稱ニアラズヤトモ思ハル。

(九)茅山ハ石部石腦ノ註ヲ見ヨ。

(一〇)嵩山ハ石部五色石脂嵩高山參照。

(一一)刺薊花ハアザミ。

(一二)三伏ノ節アリ、夏至ヨリ第三ノ庚日ヲ初伏トシ、第四庚ヲ中伏、立秋後初庚ヲ後伏トス、伏トハ隱伏シテ盛暑ヲ避クルノ意ナリ。

分に識別を要する。

時珍曰く、蒼朮は山薊で、諸處の山中にあるものだ。苗は高さ二三尺、その葉は莖を抱いて生じ、梢の間の葉は棠梨の葉に似て脚下の葉は三叉、五叉をなし、いづれも鋸齒、小刺がある。根は(一九)老薑のやうな形で色は蒼黑く、肉は白色で油膏がある。白朮は枹薊で、(二〇)吳、越地方にある。その地方民は多くは根を取つて栽ゑるが、一年で茂生する。その若芽は食料になる。葉は稍大くして毛があり、根は太さ指ほどで形狀は太鼓のバチのやうなものだ。拳ほどの大さのものもある。彼地では裂き開いて暴乾したものを削朮と稱へ、また片朮ともいふ。陳自良の言に『白くして肥えたものは(二一)浙の朮だ。瘦せて黃なるものは(二二)幕阜山に產したもので、力は劣る。昔の人は朮を用ゐるに赤、白の區別がなかつたが、宋代以來始めて「蒼朮は苦く辛く、氣が烈しい。白朮は苦く甘く、氣は和らかだ」と言ひ出したもので、そのそれ

〔白朮〕

(一三)杭ハ杭州唐ニ置ク、今ノ浙江省餘杭縣ソノ舊治ナリ。
(一四)越ハ越州、石部蛇黃ノ註ヲ見ヨ。
(一五)舒ハ舒州、萎蕤ノ註ヲ見ヨ。
(一六)宣ハ宣州、石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(一七)本草衍義ニハ捆指トアリ、小ノ字ハ衍。
(一八)大觀ニ氣下ニ味字アリ。
(一九)老薑ハひねしやうが。
(二〇)吳越ハ江蘇省ノ楊子江以南ノ地ヲ吳トイヒ、浙江省ノ地ヲ越トイフ。
(二一)浙ハ今ノ浙江省地方也。
(二二)幕阜山ノ江西省修水縣ノ西百九十支里ニ在リ。湖南、湖北ト界ヲナス。

ぞれの用途の上から考へて相當に理由のあることだ。いづれも秋採つたものが佳く、春採つたものは虚軟で壞れ易い』とある。嵇含の南方草木狀には『藥に乞力伽なるものがある。即ち朮のことだ。(二三)瀕海地方に產するもので、一箇の根で數斤の重さのものもある。採つて餌ふに尤も良し』とある。

嘉謨曰く、浙朮は俗に雲頭朮といふ。平坦な土地に種ゑるもので、頗る肥大なのは糞肥料の力に由る。油に潤ひ易い。歙朮は俗に狗頭朮といふ。瘦せて小さいが土の氣を十分に得てゐる。甚だ燥白なもので、浙朮に勝る。(二四)寧國、(二五)昌化、(二六)池州のものはいづれも歙朮に同じ。境域が接近してゐるためだ。

朮、白朮である。

【氣味】

【(二七)甘し、溫にして毒なし】別錄に曰く、甘し。權曰く、甘く辛し。杲曰く、味は苦くして甘く、性は溫である。味厚く氣薄く、陽中の陰であつて升によく降によし。好古曰く、手の太陽、少陰、足の太陰、陽明、少陰、厥陰の六經に入る。之才曰く、防風、地楡が使となる。權曰く、桃、李、菘菜、雀肉、青魚を忌む。嘉謨曰く、咀んで後人乳汁で潤せばその性を制する。脾病には陳壁土を用ゐて炒つて用ゐれば(二八)土の氣を竊んで脾を助けるものである。

(二三)瀕海地方ハ南方海濱ノ地ヲ指ス。
(二四)寧國ハ縣名、晉ニ置ク。今ノ安徽省寧國縣南ニ故城アリ。
(二五)昌化ハ縣名、隋ニ置ク。今ノ廣東省昌江縣ノ東南ニ故城アリ。宋ニ治ヲ縣ノ南十支里ニ徙ス。
(二六)池州ハ石部南石析綠條ノ註ヲ見ヨ。
(二七)本經ニハ苦ニ作ル。白井曰ク、白朮、蒼朮ノ區別ニ就テハ植物學雜誌第二十五卷三五二頁以下ニ松田定久氏ノ説アリ、莖ノ上部ニ單葉ヲ着クルモノヲ蒼朮トシ、分岐葉ヲ着クルモノヲ白朮トシ、此等ハ同一種ノ異形ニ過ギズトスルノ説ナリ、花ニ紅白アリ、雄蕊ニ變異アレドモ、以

【主治】【風寒濕痺、死肌、(二九)痓、疸、汗を止め、熱を除き、食物を消化するには湯に煎じて服す。久く服すれば身體を輕くし、天年を延べ、飢ゑぬ】(本經)【大風の身體、面部に在るもの、風眩、頭痛、目に涙あるものに主效があり、痰水を消し、皮間の(三〇)風水結腫を逐ひ、心下の急滿を除き、霍亂吐下の止まぬもの、腰、臍間の血を利し、津液を益し、胃を暖め、穀物を消化し、食慾を增進する】(別錄)心腹脹滿、腹中冷痛、胃虛下痢、多年の氣痢を治し、寒熱を除き、嘔逆を止める】(甄權)【反胃、小便を利し、五勞、七傷に主效があり、腰、膝を補し、肌肉を長じ、冷氣、(三一)痃癖、氣塊、婦人の冷癥瘕を治す】(大明)【濕を除き、氣を益し、中を和し、陽を補し、痰を消し、水を逐ひ、津を生じ、渴を止め、瀉痢を止め、足脛の濕腫を消し、胃中の熱、肌熱を除く。枳實と配合すれば痞滿の氣分を消す。黄芩を佐とすれば胎を安んじ、熱を淸す】(元素)【胃を整へ、脾を益し、肝風虛を補す、舌の根が强ばつて物を食へば嘔吐するもの、胃脘が痛み、身體重きもの、心下の急痛、心下の(三二)水痞、衝脈の病となつたもの、逆氣、裏急して臍腹の痛むものに主效がある】(好古)

テ蒼白ヲ區別スルニ足ラズトセリ。

(二八)土氣ヲ竊ムト云フハ、土氣ニ感ズルコトカ、漢説ニテハ脾ハ五行中ノ土ニ屬スル臓ナリ。

(二九)痓疸ハ二病ノ名、痓ハ痙攣、疸ハ黄病。

(三〇)風水病ハ身體ノ浮腫スルモノニシテ、腫上ヲ按セバ凹ニシテ起ラズ、骨節疼痛シテ風ヲ惡ムモノ、病源候論ニ解アリ。

(三一)痃癖ハ項肩ノ强急スルモノ、俗ニハネヂカタ。又臍ヤ腹ニモアリ。氣塊ハ氣腫ノコトカ、其狀癰ノ如ク頭ナクシテ皮膚腫シ、色變ゼズシテ皮上急痛スルモノ。

(三二)水痞ハ溜飲。

(三三)草ハ經ノ誤、本草洞玄ニ經ニ作ル。
(三四)湯液本草ニ出ヲ止ニ作リ、痰ヲ痞ニ作ル。

【發明】好古曰く、本(三三)草には蒼、白朮の別ちはないが、近世では多く白朮を用ゐて皮間の風を治し、汗を(三四)出し、痰を消し、胃を補ひ、中を和し、腰、臍間の血を利し、水道を通ずる。上では皮、毛、中では心、胃、下では腰、臍、氣に在ては氣に作用し、血に在ては血に作用し、汗無きには發汗し、汗有るには汗を止める。黄耆と功力が同じものだ。

元素曰く、白朮は濕を除き、燥を益し、中を和し、氣を補す。その應用に九種あつて、中を溫むるが一、脾、胃中の濕を去るが二、胃中の熱を除くが三、脾、胃を強くして飲食を進むるが四、胃を和して津液を生ずるが五、肌熱を止むるが六、四肢困倦して横臥を好み、目を開くさへ懶く、食思なきを治するが七、渇を止むるが八、胎を安ずるが九である。凡そ中焦に濕を受けて下に利する能はぬには、必ず白朮を用ゐて水を逐ひ、脾を益すべきである。白朮以外では濕を去ることが不可能だ。枳實以外では痞を消することが不可能だ。それゆゑに枳朮丸には之を君としてある。

機曰く、脾は濕を惡む。濕が勝てば氣が順調なるその働を發揮し得なくなるから、

(三五)津の生じやうが無いことになる。膀胱は津液の府であつて、氣が完全に働けば尿の排泄が順調になるものだ。故に白朮を用ゐてその濕を除けば、氣が周ねく順調に行つて津液が生ずるのである。

附方　舊七、新二十四。【枳朮丸】痞を消し、胃を強くし、久く服すれば食物が自から停滯せなくなる。白朮一兩を黃壁土を用ゐて炒つてからその土を去り、枳實を麩を用ゐて炒つてからその麩を去つて一兩を末にし、(三六)荷葉包飯を燒き熟して搗き和し、梧子大の丸にして五十丸づつを白湯で服す。氣滯には橘皮一兩を加へ、火あるには黃連一兩を加へ、痰あるには半夏一兩を加へ、寒あるには乾薑五錢、木香三錢を加へ、(三七)食あるには神麴、麥蘖各五錢を加へる。(潔古家珍)【枳朮湯】心下が堅大して盤を當て盃を覆せたやうに覺えるは溜飲が原因であつて、寒氣不足であれば手足が厥逆し、腹が滿して脇が鳴り、變調は順を逐ふて現はれ、陽氣が通ぜずして身冷となり、陰氣が通せずして骨疼となり、陽が前通するときは惡寒し、陰が前通するときは痺して不仁となる。陰、陽が互に正しきを得ればその氣は行り、(三八)大氣が一轉すればその氣は散ずる。實するときは(三九)失氣し、虛するときは遺尿する

(三五)津ハ尿水ヲ指ス。
(三六)荷葉包飯ハ和名ハスノイヒ。
(三七)食アルト云フハ食慾アルヲ云フ。
(三八)大氣ガ一轉スルトハ正氣ガ回復スルヲ云フ。
(三九)失氣ハ放屁ノコト。

(四〇)五飮、留飮、癖飮、痰飮、溢飮、流飮。

ものだ。これを名けて氣分といふ。左の方を以て主效を取るがよい。白朮一兩、枳實七箇、水五升、これを三升に煮て三回に分服する。胸中が軟かになつて直ちに散ずるものである。(仲景金匱玉函)【白朮膏】服食すれば滋補し、久き泄痢を止める。良質の精好なる白朮十斤を切片して瓦鍋に入れ、水を二寸の深さに淹け濡へ、文武火で半分までに煎じてからその汁を器に移し入れ、殘つた滓を更に三回まで同樣に煎じて前の汁と後の汁と共に膏に熬り、器中に入れて一夜置いて上部に澄む水を棄て去つて取收め、二三匙づつを蜜湯で調へて服す。(千金良方)【參朮膏】一切の脾胃虛損を治し、元氣を益す。白朮一斤、人參四兩を切片し、流水十五碗に一夜浸して桑柴の文武火で煎じて濃汁を取り、熬膏して煉蜜を入れて取收め、毎に白湯に點てて服す。(集簡方)【胸膈の煩悶】白朮末方寸匕を水で服す。(千金方)【心下に水あるもの】白朮三兩、澤瀉五兩、水三升を一升半に煎じて三回に分服する。(梅師方)【(四〇)五飮酒癖】一は留飮で水の心下に停るもの、二は癖飮で水の兩脇下にあるもの、三は痰飮で水の胃中に在るもの、四は溢飮で水の五臟の間に在るもの、五は流飮で水の腸間に在るもの、いづれも飲食のために胃が寒し、或は茶を過多に飲むが原因で

發るものだ。倍朮丸――白朮(一一)一斤、乾薑を炮き、桂心と各半斤を末にし、蜜で梧子大の丸にして二三十丸づつを溫水で服す。(惠民和劑局方)【四肢の腫滿】白朮三兩を㕮咀してその半兩づつを、水一盞半、大棗三箇と九分に煎じて一日三回溫服する。時候に拘はらぬ。(本事方)【中風口噤】人事不省なるには、白朮四兩、酒三升を一升に煮て頓服する。(千金方)【産後の中寒】全身冷えて强直し、口噤し、人事不省なるには、白朮(一二)一兩、澤瀉一兩、生薑五錢を水一升で煎じて服す。(至寶)【突然の頭の眩運】一夜經つて瘥えずして四體が漸次に弱り、飲食物に味無く、好んで黃土を食ふものには、朮三斤、麴三斤を搗いて篩ひ、酒で和して梧子大の丸にし、一日三回、飲で二十丸づつを服す。(一三)菘菜、桃、李、青魚を忌む。(外臺祕要)【濕氣痛】白朮を切片して煎じた汁を熬膏し、白湯に點てて服す。(集簡方)【中濕骨痛】朮一兩を酒三盞で一盞に煎じて頓服する。酒を飲めぬものには水で煎じる。(三因其方)【婦人の肌熱】血虛には、吃力伽散――白朮、白伏苓、白芍藥各一兩、甘草半兩を散にし、薑棗煎で服す。(王燾外臺祕要)【小兒の蒸熱】脾虛で瘦せ衰へ飲食を攝取し得ぬには、方は上に同じ。【(一四)風瘙癮疹】白朮を末にし、一日二回、酒で方

(一一)綱目ニハ一兩トアレドモ、局方ニヨリ訂正ス。

(一二)大觀ニハ四兩トアリ、煎方ハ以酒三升煎酒一升頓服ストアリ。

(一三)大觀ニハ桃李、雀蛤トアリ。

(一四)風瘙癮疹ハカザホロシ。

寸匕づつを服す。(千金方)【顏面に䵟黯の多きもの】顏が雀の卵のやうなるには、朮を苦酒に漬けて日毎に拭へば效がある。(肘後方)【白汗の止まぬもの】白朮末を一日二回飮で方寸匕づつ服す。(千金方)【脾虛の盜汗】白朮四兩を切片し、一兩は牡蠣と共に炒り、一兩は石斛と共に炒り、一兩は麥麩と共に炒つて朮だけを揀り出してその全部を末にし、一日三回、三錢づつを食事と時を隔てて粟米湯で服す。(丹溪方)【老人、小兒の虛汗】白朮五錢、小麥一撮を水で煮乾し、麥を去つて朮を末にし、黃耆湯で一錢を服す。(全幼心鑑)【產後の嘔逆】別に他の疾病なきには、白朮一兩二錢、生薑一兩五錢、酒、水各二升を一升に煎じて三回に分服する。(婦人良方)【脾虛脹滿】脾氣が整和せずして冷氣が中に客し、壅塞して通ぜぬものは脹滿である。寬中丸——白朮二兩、橘皮四兩を末にして酒糊で梧子大の丸にし、每食前に木香湯で三十丸を服すれば效がある。(指迷方)【脾虛の泄瀉】白朮五錢、白芍藥一兩——冬季には肉豆蔻を用ゐる——を煨いて末にし、米飯で梧子大の丸にし、一日二回、五十丸づつを米飮で服す。(丹溪心法)【濕瀉、暑瀉】白朮、車前子等分を炒つて末にし、白湯で二三錢を服す。(簡便方)【久瀉滑腸】白朮を炒り、伏苓と各一兩、糯米を炒つて二兩を末

(四五)半夏麹ノ製法、半夏集解ニ出ヅ。

(四六)束胎ハ過度ノ成長ヲ止メル事。

にして棗肉で拌ぜて食ふ。或は丸にして服す。(簡便方)【老人、小兒の滑瀉】白朮半斤を黄土で炒り、山藥四兩を炒り、末にして飯で丸にし、大人、小兒それぞれ量を計つて米湯で服す。或は人參三錢を加へる。(瀕湖集簡方)【老人の常習瀉】白朮二兩を黄土に拌ぜて蒸し、焙じ乾して土を取り去り、蒼朮五錢を泔に浸して炒り、伏苓一兩と共に末にして米糊で梧子大の丸にし、七八十丸づつを米湯で服す。(簡便方)。【小兒の久瀉】脾虚で米穀類が消化せず、飲食の進まぬには、溫白丸——白朮を炒つて二錢半、(四五)半夏麹一錢半、丁香半錢を末にして薑汁麪糊で黍米大の丸にし、年齡、體格の大小に隨ひ米飲で服す。(全幼心鑑)【瀉血萎黄】腸風痔漏、脱肛瀉血で顏色が萎黄し、積年瘥えぬには、白朮一斤を黄土で炒つて研末し、乾地黄半斤を飯の上で蒸熟して搗き和し、乾いたとき少量の酒を入れて梧子大の丸にし、一日三回、十五丸づつを米飲で服す。(普濟方)【妊婦の(四六)束胎】白朮、枳殼を麩で炒つて等分を末にし、燒飯で梧子大の丸にして十个月目に毎日食前に三十丸づつを溫水で服す。胎が瘦せて分娩が容易になる。(保命集)【牙齒の日毎に長くなる病】遂に食事困難となるを髓溢病と名ける。白朮の煎湯で漱ぎ、服してその效を取れば癒える。(張鋭雞峯備急良方)

蒼朮【釋名】赤朮（別錄）山精（抱朴）仙朮（綱目）山薊　時珍曰く、典術に『朮は山の精である。服すれば長生し、穀食を辟け、神仙となり得る』とある。それで山精、仙朮と稱するのだ。朮には赤、白の二種あつて、主治の功用は近似したものであるが、性、味に止めると發するとの同じからぬ點がある。本草には蒼、白を區別してないのだからそれに根據を求めることは出來ないが、今ここには本經、并に別錄、甄權、大明四家の功用に關する所說を參考し識別してそれぞれの方を附記する。使用する人人の據るべき參考資料となれば結構だ。

【修治】大明曰く、朮を用ゐるには米泔に一夜浸してから藥に入れる。宗奭曰く、蒼朮は辛烈なものだから必ず米泔に浸して洗ひ、再び泔を換へて二日浸し、上の粗皮を取去つて用ゐねばならぬ。時珍曰く、蒼朮は性の燥なるものだから糯米泔に浸してその油を去り、切片して焙じ乾して用ゐる。また脂麻と共に炒つてもその燥を制する。

【氣味】【苦し、溫にして毒なし】別錄に曰く、甘し。權曰く、甘く辛し。時珍曰く、白朮は甘くして微し苦し、性は溫にして和かだ。赤朮は甘くして辛烈だ。

（百七）沴ハ陰陽ノ氣亂ルルヲ云フ、健康ノ變調ヲ云フ。

（百八）深山幽谷ノ傳染性熱病。

（百九）脾濕下流ハ脾經ノ濕氣ガ下部ニ流レテ足ガ腫ルルヲ云フ。

性は溫にして燥く。陰中の陽であつて升によく降によし。足の太陰、陽明、手の太陰、陽明、太陽の經に入る。○忌むものは白朮と同じ。［主治］【風寒濕痺、死肌、痙、疸に煎にして服す。久く服すれば身體を輕くし、天年を延べ、飢ゑぬ】（本經）【頭痛を治し、痰水を消し、皮間の風水結腫を逐ひ、心下の急滿、及び霍亂吐下の止まざるを除き、胃を暖め、穀類を消化し、食慾を增進する】（別錄）【惡氣を除き、灾（百七）沴を弭める】（弘景）【大風𤺋痺、心腹脹痛、水腫脹滿に主效があり、寒熱を除き、嘔逆、下泄、冷痢を止める】（甄權）【筋骨軟弱、痃癖氣塊、婦人の冷氣癥瘕、（百八）山嵐瘴氣、溫疾を治す】（大明）【目を明にし、水臟を暖める】（劉完素）【濕を除き、汗を發し、胃を健にし、脾を安んじ、痿を治するの要藥である】（李杲）【風を散じ、氣を益し、すべて諸鬱を解す】（震亨）【濕痰、留飮、或は瘀血を挾んで窠囊と成るもの、及び（百九）脾濕下流、濁瀝帶下、滑瀉腸風を治す】（時珍）

［發明］宗奭曰く、蒼朮は氣味が辛烈だが、白朮は微辛苦で烈しくない。古方、及び本經にはただ朮とのみあつて蒼、白をば區別してないが、ただ陶隱居が『朮に兩種ある』といつてから後、一般人が多く白いもののみを貴ぶやうになり、往往に

して蒼朮は置いて用ゐないやうになつたのだ。しかし、古方の平胃散の類の如きには蒼朮が最も重要な藥となつてゐて、功力、效果も非常に速かなものである。世間は一向に詳悉な注意をせぬやうだが、本草には元來白朮と特に名指してはないのである。嵇康の言葉にも『道人の遺言を聞くに、朮、黄精を餌へば人として久壽ならしめるといふ』とあつて、やはり白なる文字は用ゐてない。用ゐるには兩ながら審詳を要する。

○杲曰く、本草にはただ朮といふだけで蒼、白を分たないが、蒼朮は雄壯にして上行するの氣を有つ特異點があつて、よく濕下を除き、太陰を安んじ、邪氣をして脾に傳入せしめない。これは泔に浸し火で炒つて用ゐるからよく汗を出すのであつて、白朮の汗を止めるに對し特に異る點である。使用するには互に代用してはならない。しかし「止」と「發」の相違點はあるが、その他の主たる治功用は同一だ。

○元素曰く、蒼朮は白朮と主治は同じだが、しかし白朮に比すれば氣が重くして體は沈む。上部の濕を除き、發汗せしむるには最も大なる功果があるが、中焦を補し、脾、胃の濕を除くには力がやや白朮に及ばない。腹中の窄狹するものにはこれを用

(五〇)六鬱ハ氣鬱、濕鬱、熱鬱、痰鬱、血鬱、食鬱是ナリ。
(五一)傳化ハ生理作用。
(五二)陰中ハ陰鬱ノ症ヲ指スカ。

ゐるがよい。

震亨曰く、蒼朮は、濕を治するには上、中、下共に用うべきところがある。又、よく諸鬱の總てを解すものだ。痰、火、濕、食、氣、血の(五〇)六鬱は、いづれも(五一)傳化が常態を失して升、降し得ぬために病が中焦に在るものだから、藥には必ず升と降とを兼ねねばならぬもので、之を升さんとするには必ず先づ之を降し、之を降さんとするには必ず先づ之を升すべきものだ。故に足の陽明の經の藥で辛烈なる氣味を有ち、胃を強くし、脾を強くし、穀類の氣を發し、直接に諸經に入つて陽明の濕を導き洩し、斂濇するものを通じ行らす働のある蒼朮と、(五二)陰中の快氣の藥で最も速かに氣を下す香附子を用ゐれば、一升一沈の作用を現はすところから、鬱が散じて平安を得るのである。

楊士瀛曰く、脾精が禁ぜず、小便に濁淋を漏して止まず、腰、背が酸疼するには、蒼朮を用ゐて脾精を斂めるがよい。精は穀に由つて生ずるものだからである。

弘景曰く、白朮は膏が少いから丸、散にするによく、赤朮は膏が多いから煎じて用ゐるによい。昔し劉涓子はその精を採み取つて丸にし、守中金丸と名けて長生の

薬とした。

○頌曰く、服食には多くは單に朮のみを餌ひ、或は白伏苓を合せ、或は石菖蒲を合せていづれも末に擣き、朝水で服し晩に再服して久しきに亙れば漸次に良好の結果を得る。生朮を切り取り、土を去つて水に浸し、再三煎じて飴糖のやうにして酒で調へて飲むが更に善い。現に(五三)茅山で造る朮煎はこの法で作るのだが、陶隱居は『その精を取つて丸にする』といつて居るのだから、今の膏煎は恐らく眞を得たものであるまい。

○○愼微曰く、梁の庾肩吾の陶隱居が朮煎を賚はりたるに答ふる啓に『綠葉條を抽き、紫花色を標す。百邪を外に禦ぎ、六府を內に充つ。(五四)山精は書に見はれ、(五五)華神は錄に在り。(五六)木榮え火謝し、采擷の難を盡す。啓旦より中に移り、(五七)淋漉の劑を窮む』とあり、又、朮蒸を謝する啓に『味は金漿より重く、芳は玉液に踰え、坐がら延生を致さしむるに至る。伏て深く銘感す』とある。又、葛洪の抱朴子內篇には『(五八)南陽の文氏は漢代の末期に(五九)壺山中に難を逃れ、飢ゑ疲れてまさに死せんとしたとき、ある人に朮を食ふことを敎へられて飢を免れた。數十年の後その鄕

(五三)茅山、前ニ出ヅ。
(五四)山精ハ蒼朮ノ一名。
(五五)華神モ朮ノ一名ナラン。
(五六)木ハ肝臟、火ハ心臟、木榮火謝ハ朮煎ノ功能ヲ述ブ。
(五七)淋漉劑ハ製法ノ手數ノカカル事ヲ述ブ。
(五八)南陽ハ秦ノ郡名、今ノ湖北省襄陽以北、河南省ノ西南部ニ亙リ、宛、即チ今ノ南陽ニ郡治ヲ置ク。
(五九)壺山ハ河南省泌陽縣ノ東北ニ在リ。

（六〇）五嶽トハ東嶽泰山、西嶽華山、南嶽衡山、北嶽恒山ヲイフ。
（六一）疲病ハ老衰病。

里へ還つて來たが、顏色は更に若く、氣力も却つて勝れてゐた。故に朮を一名山精といふのであつて、神農の藥經に所謂「必ず長生せんと欲せば常に山精を服せよ」とあるはこれをいふのだ』とある。

時珍曰く、按ずるに、吐納經の紫微夫人の朮の序には『草木の勝れたものを考察するに、我が身に速かな益あること何物も朮ほどに效驗の多いものはない。これは壽命を長くして久しく現世に在らしめ、年久しきに亙るほど更に靈妙な效果を擧げる。山林に隱遁して自適の生活中に朮を服すれば（六〇）五嶽と比肩するの長壽を得る』とある。又、神仙傳には『陳子皇は朮を餌ふの要方を得た人で、その妻の姜氏が（六一）疲病に罹つたとき、これを服ませると病は自から癒え、顏色、氣力が二十歲頃のやうに若くなつた』とある。時珍謹んで按ずるに、以上の諸說の物はいづれも蒼朮をいふのであつて、ただ白朮のみをいふのではないらしく、今の服食家もやはり蒼朮を仙朮と呼んでゐる。故に諸說は單に朮とあるが、ここには皆蒼朮の後に列記した。又、張仲景は一切の惡氣を辟けるに赤朮と豬蹄甲とを共に烟に燒いて用ゐ、陶隱居も『朮は能く惡氣を除き、災沴を弭む』といふ。現に惡疫に罹つた場合、及

び正月民家で往往蒼朮を燒いて邪氣を辟けるのもそれ等の說が根據である。類編には『越の地方民高氏なるものの妻が病んで恍惚として譫語し、亡夫の幽鬼が憑いてゐた。そこで家人が蒼朮を烟に燒くと、幽鬼は忽ち去らしてくれと言ひだした』とあり、夷堅志には『江西のある士分の者は女妖と同棲してゐたが、その妖鬼が別れる際に「貴郞には陰氣が浸みたから、私の去つた後では必ず劇しい泄痢を始めるが、平胃散さへ多く服すれば危險がない」といつた。その藥は中に蒼朮があるから能く邪氣を除くのだ』とある。許叔微の本事方には『余は三十年間に亘つて(六三)飲癖を患つたが、始めは年少の頃で、夜間書籍の筆寫に必ず机の左側へ軀を伏せて凭りかかる習慣があつて、そのために飲食物も多くは腹の左方へ落ち入つた。夜中必ず數盃の酒を飮んで寢に就くが、やはり左向に臥すのである。强壯なうちは氣も付かなかつたが、三五年經つて氣が付いてから酒は止めた。すると今度は腹の左方に當つて音が聞え、脇が痛み、食量が減つて胸がやける。その時半盃ほど酒を飮めば止むのだが、十數日經つと、必ず酸き水を數升ほど嘔吐することが例であつた。暑季に入ると汗は右側だけに出て左側には少しも出ない。これがために各地の名醫の

(六三)飲癖ハ巢氏ノ說ニ冷氣ニ相フレテ痛ミ、其狀脇下弦急ニシテ、時ニ水聲アリト云フ。

(六三)澼囊ハ水ノ瀦留スル囊。
(六四)科臼ノ科ハ坎ノ意。
(六五)五十箇本事方ニ十五箇ニ作ル。

手當も受け、海外の處方までも用ゐて見たが、病に觸れたかと思はれて一旦止まることも間にはあるが、一个月も經てばまた發る。その間、補藥では天雄、附子、礜石などのもの、下劑では牽牛、甘遂、大戟のやうなもの、大抵のものは試みた。そこで自ら考へて見るに、これは必ず(六三)澼囊が出來てゐるに相違ない。それは恰も水を送るに置いてある(六四)科臼のやうなもので、水はその科まで盈さねば先へ通らないと同様であらう。それで淸んだ部分は直ちに體内に順行するが、濁つた部分は停滯して遂に出る路が無くなるのだ。その關係で五七日積れば必ず上に嘔出すに相違ない。然らば脾土は濕を惡み、水は濕に向つて流れるのだから、脾を燥し土を增高すれば今の所謂科臼の底が塡まるわけだと考へた。そこで悉く諸藥を卻けて、ただ蒼朮一斤を皮を去つて切片して末にし、油麻半兩、水二錢で研つて汁を濾し、大棗(六五)五十箇を煮て皮と核を去つたものと搗きまぜ、梧子大の丸にして毎日空腹に五十丸づつを溫服し、一二百丸まで漸次增加して桃、李、雀肉を忌み、三个月間續服すると、病はそれで癒えたのである。爾來それを常服して居るが、嘔せず、痛まず、胸膈は寬利し、飲食も舊に復し、暑季には汗が全身から平均して發出し、燈下

で細字を書くにも差支ない。これは皆朮の力であつた。初めて服した當座は必ず微燥を覺えるが、山梔子末を沸湯に點てて服すれば直ちに解し、それ以後は久しく服しても燥せぬやうになる』とある。

附方　舊三、新三十。【朮を服する法】髭髮を黑くし、顏色の老衰を防ぎ、筋骨を壯にし、耳目を明かにし、風氣を除き、肌膚を潤澤にし、久しく服すれば身體を輕健ならしめる。蒼朮を量の多少に拘はらず米泔水に三日間浸して逐日水を換へ、取出して黑皮を刮去り、切片して曝乾し、慢火で黃に炒つて細に擣いて末にし、每一斤に對して蒸した白茯苓末半斤を入れ、煉蜜で和して梧子大の丸にし、空心にして就寢時に十五丸を熱水で服す。別に朮末六兩、甘草末一兩を拌ぜ合せて湯に點て、それで前の丸を呑むが尤も妙である。桃、李、雀、蛤、及び(六六)三白、諸血を忌む。(經驗方)【蒼朮膏】鄧才筆峯雜興方では、風濕を除き、脾、胃を健にし、白髮を黑く變じ、顏色の老るを防ぎ、虛損を補ふに大效がある。新しい蒼朮を皮を刮去つて薄く切り、米泔水に二日間浸して一日一回水を換へて取出し、井華水で春、秋は五日間、夏は三日間、冬は七日間藥の上二寸までの深さに浸し、漉出して生絹の袋に

(六六)丹溪纂要ニ三白ハ葱、蒜、蘿蔔トアリ。

(六七)砂鍋ハスヤキノナベ。
(六八)水澄トハ水中ニ沈澱セシメテ洗フコト。
(六九)稀粥ハ水ノ多イ粥。

盛り、その原の水半分を分けてその中に入れて揉み洗ひ、津液を出してから紬乾し、渣を取つて又搗爛らして袋に入れ、殘り半分の原の水の中に入れて汁が盡るまで揉み、その前後の汁を大(六七)砂鍋に入れて慢火で熬膏し、その一斤に對し白蜜四兩を入れて二炷香の間熬り、その膏一斤に對し(六八)水澄白伏苓末半斤を入れ、むらなく攪きまぜて瓶に取收め、三匙づつを早朝と就寢時とに各一回溫酒で服す。醋、及び酸きもの、桃、李、雀、蛤、菘菜、雞、魚等の物を忌む。○吳球の活人心統では、蒼朮膏——脾經の濕氣で食少く、足腫れて力なきもの、傷食、酒色、過度の勞逸から傷を生じて骨熱するものを治す。鮮白の蒼朮二十斤を浸して粗皮を刮去り、晒し切つて米泔で一夜浸して取出し、溪水一石を入れて大砂鍋で煎じて半ば乾いたとき渣を去り、再び石南葉三斤、紅衣を刷き去つた楮實子一斤、川當歸半斤、甘草四兩を切つて入れ、共に黃色に煎じて滓を濾し去り、更にまた煎じて(六九)稀粥のやうになつたところへ白蜜三斤を入れて熬膏し、三五錢づつを空心に好き酒で調へて服す。

【蒼朮丸】薩謙齋の瑞竹堂方では、上を淸くし、下を實し、兼ねて眼の內外障を治す。茅山の蒼朮を洗ひ刮り淨めて一斤を四分し、その四分の一づつを酒、醋、糯泔、

童尿で各別に浸し、一日一回づつそれぞれ新しきものに換へて三日間浸して取出し、洗ひ搗き晒し焙じて黑脂麻と共に香しく炒り、その四種に作つたものと共に末にして酒で煮た麪糊で梧子大の丸にし、空心に白湯で五十丸づつを服す。○李仲南の永類方では、八制蒼朮丸——風を導き通じ、氣を順調にし、腎を養ひ、腰、脚の濕氣痺痛を治す。蒼朮一斤を洗ひ刮り淨めて四分し、酒、醋、米泔、鹽水それぞれのもので三日間浸して晒し乾かし、それを一旦混ぜてまた更に四分し、川椒紅、茴香、補骨脂、黑牽牛各一兩をその四分の一づつのものと共に香しく炒り、その混ぜた諸藥は揀り去つて用ゐず、朮のみを取つて研末して醋糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に鹽酒で服す。五十歲以後の患者には、沈香末一兩を加へる。【蒼朮散】風濕を治す。常に服すれば筋骨を壯にし、目を明かにする。蒼朮一斤を粟米泔に浸して竹刀で皮を刮去り、その半斤を（七〇）無灰酒に、半斤を童尿に浸し、春は五日、夏は三日、秋は七日、冬は十日經つてから各〻取り出し、清淨な地上に一箇の穴を掘つて中を火で赤く煅き、その炭を取去つて藥を浸した酒を入れ、それに右の朮を投じ、瓦器で蓋ふて隙を泥で封じ、そのまま一夜置いて取出して末にし、一錢づつを

（七〇）無灰酒ハ灰ヲ入レザル醇酒。

空心に溫酒、或は鹽湯で服す。○萬表積善堂方の六制蒼朮散――（七一）下元の虛損、（七二）偏墜、莖痛を治す。茅山の蒼朮を淨め刮つて六斤を六分し、一斤は（七三）倉米泔に二日浸して炒り、一斤は酒に二日浸して炒り、一斤は青鹽半斤と黃に炒つて鹽を去り、一斤は小茴香四兩と黃に炒つて茴香を去り、一斤は大茴香四兩と黃に炒つてその茴香を去り、一斤は桑椹汁に二日浸して炒り、その朮を末にして三錢づつを空心に溫酒で服す。【固眞丹】瑞竹堂方の固眞丹――濕を燥し、脾を養ひ、胃を助け、（七四）眞を固くする。茅山の蒼朮を刮り淨めて一斤を四分し、一分は青鹽一兩と、一分は川椒一兩と、一分は川楝子一兩と、一斤は小茴香、破故紙各一兩と炒り、その朮を揀出し研末して酒煮の麪糊で梧子大の丸にし、空心に米飲で五十丸づつを服す。○乾坤生意の平補固眞丹――元臟の久虛、遺精、白濁、婦人の赤白帶下、崩漏を治す。（七五）金州の蒼朮を刮り淨めて一斤を四分し、一分は川椒一兩で、一分は破故紙一兩で、一分は茴香、食鹽各一兩で、一分は川楝肉一兩で炒り、その朮を取り淨め末にして白茯苓末二兩、酒で洗つた當歸末二兩を入れ、酒で煮た麪糊で梧子大の丸にし、空心に鹽酒で五十丸づつを服す。【固元丹】元臟の久虛、遺精、白濁、

（七一）下元ハ腎臟。
（七二）偏墜ハ脫腸。
（七三）倉米泔ハ米ノ磨ギ汁。
（七四）眞ハ人體ノ眞氣精力。
（七五）金州ト稱スル舊名三アリ、一ハ今ノ陝西省安康縣ノ地ニシテ、西魏ニ置キ、明ニ興安州ニ改ム。一ハ今ノ甘肅省ノ金縣ニシテ、元ニ州ヲ置キ、明ニ縣ニ降ス。一ハ今ノ奉天省ノ金州ニシテ、唐ニ金州ヲ置キ、遼ニ蘇州ニ改メ、明ニ金州衛トシ、淸ニ廳ヲ置キ奉天府ニ屬ス。此ニハ奉天ノ金州ヲイフモノノ如シ。

五淋、及び小腸、膀胱の疝氣、婦人の赤白帶下、血崩、便血等の疾病を治す。小便が頻數になるが效驗の微である。好き蒼朮を刮り淨めて一斤を四分にし、一分は小茴香、食鹽各一兩と共に炒り、一分は川椒、補骨脂各一兩と共に炒り、一分は川烏頭、川楝子肉各一兩と共に炒り、一分は醇醋、老酒各半升で煮乾かして焙じ、炒つた藥と共に全部を末にして酒で煮た糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを男子は溫酒、婦人は醋湯で空心に服す。これは高司法の方である。（王璆百一選方）【少陽丹】蒼朮を米泔で半日浸して皮を刮り、晒し乾かし末にして一斤、地骨皮を溫水で洗淨して心を去り晒し研つて一斤、熟桑椹二十斤を瓷盆に入れて揉み爛らし、絹袋で汁を壓搾し、右の二末藥をその汁で糊のやうに和して盤に傾け入れ、晝は日光に夜は夜氣に暴晒して日精、月華をそれに採り入れ、乾くを待ち研末して煉蜜で和して赤小豆大の丸にし、一日三回、二十丸づつを無灰酒で服す。一年繼續すれば白髮が黑くなり、三年で顏が少年のやうになる。（劉松石保壽堂方）【交感丹】虛損を補し、精氣を固くし、髭髮を黑くする。これは鐵甕城の申先生の方であつて、久しく服すれば子を產ませる。茅山の蒼朮を刮り淨めて一斤を四分にし、一分每に酒、醋、米泔、鹽

湯に七日間浸して晒し研り、川椒紅、小茴香各四兩を炒つて研り、共に陳米糊で和して梧子大の丸にし、四十丸づつを空心に溫酒で服す。（聖濟總錄）【交加丸】水を升し、火を降し、あらゆる病を除く。蒼朮を刮り淨めて一斤を四分し、一分は米泔に浸して炒り、一分は鹽水に浸して炒り、一分は川椒と炒り、一分は破故紙と炒り、又、黃蘗皮を刮り淨めて一斤を四分し、一分は酒で炒り、一分は童尿に浸して炒り、一分は小茴香と炒り、一分は生で用ゐ、各藥を揀り去つて朮と黃蘗とのみを取つて末にし、煉蜜で梧子大の丸にして六十丸づつを空心に鹽湯で服す。（鄧才筆峯雜興方）

【坎離丸】陰を滋くし、火を降し、胃を開き、食慾を進め、筋骨を强くし、濕熱を去る。白、蒼朮を刮り淨めて一斤を四分し、一分は川椒一兩と炒り、一分は破故紙一兩と炒り、一分は五味子一兩と炒り、一分は川芎藭一兩と炒つていづれもその朮のみを取つて研末し、又、川蘗皮四斤を四分して、一斤は酥で炙り、一斤は人乳汁で炙り、一斤は童尿で炙り、一斤は米泔で炙り、いづれも十二回づつ炙つて研末し、その朮と蘗とをよく和して煉蜜で梧子大の丸にし、毎服三十丸を朝は酒、正午は茶、夕は白湯で服す。（積善堂方）【不老丹】脾を補し、腎を益す。これを服すれば七十歲

に及んでも白髮が生えぬ。茅山の蒼朮を刮り淨め米泔に浸して軟かにし、切片して四斤を用ゐ、一斤は酒に浸して焙じ、一斤は醋に浸して焙じ、一斤は鹽四兩と炒り、一斤は椒四兩と炒り、又、赤白何首烏各二斤を泔に浸し竹刀で刮つて切り、黑豆、紅棗各五升と共に、豆が爛れるまで蒸して取出して曝乾し、又、地骨皮を骨を去つて一斤、以上を各淨き末にして桑椹汁で和して劑にし、それを盆内に汁の高さ三指に鋪き、晝は日光に夜は月光に露晒して日月の精華を藥に採り入れ、乾くを待つて石臼で搗いて末にし、煉蜜で和して梧子大の丸にし、空心に酒で一百丸づつを服す。これは皇甫敬の方である。（王海藏醫壘元戎）【靈芝丸】脾、腎の氣虛を治し、精、髓を添補し、耳目を通利する。蒼朮一斤を春、夏は五日間、秋冬は七日間米泔水で逐日水を換へて浸して竹刀で皮を刮り、切つて晒して石臼で末にし、蒸した棗肉で和して梧子大の丸にし、三五十丸づつを棗湯で空心に服す。（奇效良方）【補脾、滋腎】精を生じ、骨を強くする眞仙の方である。蒼朮を皮を去つて五斤を末にし、米泔水で漂澄して底に沈澱したものを取り、脂麻二升半を殼を去り研り爛らして絹袋で滓を濾し去つた澄漿でその朮末を拌ぜて暴乾し、每服三錢を米湯、或は酒で調へて空心に

（七六）癖疾ハ腹中ニ塊物アルヲ云フ。

（七七）益昌ハ四川省西川道安縣ノ東十里ノ地卽チ古ノ益昌縣ノ治ナリ。

服す。（孫氏集效方）【顏色黃に食慾少きもの】男、女の顏に血色なく、食慾少く、横臥を好むには、蒼朮一斤、熟地黃半斤、乾薑を炮いて冬は一兩、春、秋は七錢、夏は五錢を用ゐ、末にして糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを溫水で服す。（濟生拔萃方）【小兒の（七六）癖疾】蒼朮四兩を末にし、羊肝一頭分を竹刀で批開してその中に撒き、絲で縛つて砂鍋に入れて煮熟し、搗いて丸にして服す。（生生編）【好んで生米を食ふもの】男子、婦人共に生熟の物を食つてそれが腸、胃に停滯し、そのために遂に蟲が生じ、久きに亙れば好んで生米を食ひたがり、食はねば終日不愉快に感じ、憔悴し萎黃して食思が無くなり、ために生命を害することがある。蒼朮を米泔水に一夜浸して剉み焙じて末にし、蒸餅で梧子大の丸にし、一日三回、五十丸づつを食前に米飮で服す。（七七）益昌の伶人劉淸嘯一團中の花翠といふ歌妓は破瓜を過ぎる年頃にこの疾に罹つたが、惠民局監の趙尹がこの方で治療を加へると二十日ばかりで癒えた。蓋し生米が腸、胃に留滯するのと、濕を受けてその穀が消化しなくなるのとのためにこの病を發すのである。蒼朮はよく濕を去り、胃を暖め、穀物を消化するものである。（楊氏家藏經驗方）【腸中の虛冷】飮食不能となり、食つても消化せず、瘦せ衰へ

て病を生じたるには、朮一斤、麴一斤を炒つて末にして蜜で梧子大の丸にし、一日三回、三十丸づつを米湯で服す。甚だしき冷には乾薑三兩を加へ、腹痛するには當歸三兩を加へ、瘦せ衰へるには甘草二兩を加へる（肘後方）【脾濕水瀉】注ぎ下り、衰弱疲勞して力なく、固形物も流動物も消化せずして甚しく腹痛するには、蒼朮二兩、白芍藥一兩、黃芩半兩、（七八）淡桂二錢を用ゐ、一兩づつを水一盞半で一盞に煎じて溫服する。脈が弦して頭が微し痛むときは芍藥を去つて防風二兩を加へる。（保命集）【暑季の暴瀉】脾を壯にし、胃を溫める。飲食物に傷めたるに用ゐる麴朮丸——神麴を炒り、蒼朮を米泔で一夜浸して焙じ、等分を末にして糊で梧子大の丸にし、三五十丸づつを米飲で服す。（和劑局方）【（七九）飧瀉、久痢】椒朮丸——蒼朮二兩、川椒一兩を末にして醋糊で梧子大の丸にし、二十丸づつを食前に溫水で服す。久しき惡痢には桂を加へる。（保命集）【脾濕下血】蒼朮二兩、地楡一兩を二服に分け、水二盞で一盞に煎じて食前に溫服する。久痢、虛滑にはこの湯で桃花丸を服す。（保命集）【腸風下血】蒼朮を多少に拘はらず皂角を揉んだ濃汁に一夜浸して煮乾かし、焙じて研末して麪糊で梧子大の丸にし、一日三回、五十丸づつを空心に米飲で服す。（婦

（七八）淡桂ハ牡桂ヲ指ス。

（七九）飧瀉食物ガ消化セズシテ下ルモノ。

人良方）【濕氣身痛】蒼朮を泔に浸して切り、煎じて濃汁を取つて熬膏し、白湯に點てて服す。（簡便方）【補虛、明目】骨を健にし、血を和す。蒼朮を泔に浸して四兩、熟地黃を焙じて二兩を末にして酒糊で梧子大の丸にし、一日三回溫酒で三五十丸づつを服す。（普濟方）【（八〇）青盲、雀目】聖惠方では、蒼朮四兩を一夜泔に浸して切り焙じて研末し、三錢づつを猪肝三兩を批開した中に摻り、それを抱き合せて粟米一合、水一碗を入れて砂鍋で煮熟して眼を熏じ、就寢時にその肝を食ひ汁を飲む。大人、小兒に拘はらず皆治癒する。〇又、別方では、發病後經過時日の長短に拘はらず、蒼朮二兩を泔に浸して焙じ搗いて末にし、一錢づつを好き羊子肝一斤を竹刀で切り破つた中へ摻り、麻で括つて粟米泔で煮熟し、冷めるを待つて食ふ。癒るを以て度とする。【眼目の昏濇】蒼朮半斤を泔に七日間浸して皮を去り切つて焙じ、木賊と各二兩を末にし、一錢づつを茶、酒の隨意のもので服す。（聖惠方）【嬰兒の目濇】開かぬもの、或は出血するものには、蒼朮二錢を猪膽の中に入れて括り、煮てその藥氣で眼を熏じ、後にそれを嚼んで汁を與へて服ませるが妙である。（幼幼新書）【（八一）風牙腫痛】蒼朮を鹽水に浸してから燒いて性を存して研末し、牙に揩れば風熱を去

（八〇）青盲ハ綠內翳、俗ニアキメクラ、又アチソコヒト云フモノ。

（八一）風牙ハ齒神經痛俗ニハイタミ。

る。(普濟方)【臍蟲の怪病】腹中が鐵石のやうになつて臍中から水を出し、變じて蟲になり、全身を這り囓つて痒きこと忍び難く、掻き拂つても盡きぬには、蒼朮を濃煎した湯で浴してから、蒼朮に麝香少量を入れて水で調へて服す。(夏子益奇疾方)

苗 [主治]【飮にすれば甚だ香しく、水を去る】(弘景)【また自汗を止める】

狗脊 (本經中品)

和名 おほかぐま
學名 Woodwardia japonica, Sw.
うらぼし科(金星草科)

(1)金黃毛ノ狗脊ハ和名たかわらび。學名 Dicksonia Barometz, Link (Cibotium Barometz, J. Sm.)デアル。

[釋名] **強膂**(別錄) **扶筋**(別錄) **百枝**(本經) **狗靑**(吳普) 恭曰く、この藥は、苗が貫衆に似て根は長く、またが多い。形狀が狗の脊骨のやうで肉が靑綠色を呈してゐる。故にかく名けたものだ。時珍曰く、強膂、扶筋は功力に名けたものだ。別錄に又の名を扶蓋としてあるは扶筋の誤である。本經に狗脊、一名百枝とあり、別錄に草薢、一名赤節とあり、吳普本草に百枝を草薢、赤節を狗脊としてあるはい

(一)木村(康)曰ク、上海及橫濱支那藥舖ヨリ得タル金毛狗脊ト、緖方正規氏寄贈琉球産たかわらびノ根莖トヲ比較解剖シテ、其原植物ハたかわらびナル事ヲ決定スル事ヲ得タリ。

(二)常山ハ石部鹵石類凝水石ノ註ヲ見ヨ。

(三)太行山ハ鹵石類石硫黄ノ註ヲ見ヨ。
(四)淄州ハ石類代赭石ノ註ヲ見ヨ。
(五)溫州ハ鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。
(六)眉州ハ唐ニ置ク今ノ四川省眉山縣ノ地ナリ。

づれも誤らしい。

集解 別錄に曰く、狗脊は(二)常山の川谷に生ずる。二月、八月に根を採つて曝乾する。普曰く、狗脊は萆薢のやうなもので、莖の節は竹のやうで刺があり、葉は圓くして赤く、根は黄白でやはり竹の根毛のやうで刺がある。岐伯の經には『莖に節が無く、葉は端が圓くして青赤く、皮は白くして赤脈がある』とある。

弘景曰く、今は山野諸處にある。菝葜に似て少し異ふ。その莖、葉は少し肥り、節はまばらに、莖は太く眞直に上に伸びて刺があり、葉は圓く赤脈がある。根は凸凹が山のやうに起伏し、羊角のやうに強く細いものがそれである。

〔狗　脊〕

頌曰く、今は(三)太行山、(四)淄、(五)溫、(六)眉州にもある。苗は尖つて細に裂け、青色で高さ一尺ばかり、花はない。その莖、葉は貫衆に似てゐるが細く、その根

（七）江左トハ大江以東ノ地、江蘇省一帯ヲ指ス。
（八）透山藤詳ナラズ本書十七巻透山根アリ同物ナリヤ否ヤ。

は黒色で長さ三四寸、またが多く、狗の脊骨に似て太さは兩指ほど、その肉は青緑色である。春、秋に根を採つて曝乾する。今の方でもやはり金毛のものを用ゐることもあるが、陶氏のいふ刺のあるものは萆薢であつて狗脊ではない。けれども今でも（七）江左地方の俗間ではそれを用ゐてゐる。

斆曰く、凡そこれを使ふ場合に（八）透山藤の根を用ゐてはならぬ。形狀はさながら狗脊そのままだが、これは項に入る。苦くして餌へぬものである。

時珍曰く、狗脊に二種ある。一種は根が黒色で狗の脊骨のやうなもの、一種は金のやうな黄毛があつて狗の形のやうなものだ。いづれも藥に入れ得る。その莖は細く、葉、花は兩兩相對して生じ、さながら大葉蕨に似て居り、貫衆の葉のやうでもあるが、葉に齒があつて表、裏共に光る。根は太さ拇指ほどで硬い黒鬚が簇がつてゐる。吳普、陶弘景のいふ根、苗はいづれも菝葜そのものだ。蘇恭、蘇頌のいふものが眞の狗脊である。按ずるに、張揖の廣雅には『菝葜は狗脊なり』とあり、張華の博物志には『菝葜と萆薢とは互に紛らはしい。一名狗脊といふ』とある。これで見ると、昔の人は菝葜を狗脊といひ傳へて久しい間誤つて來たのである。しかし、

菝葜、萆薢、狗脊の三者は、形狀は異ふが功用はさほど甚しい相違のないものだ。

根【修治】斅曰く、凡そ修治するには、焚き火にかざして鬚を取去り、細かに剉んでから酒に一夜浸し、午前十時から午後四時まで蒸して取出し、晒し乾して用ゐる。時珍曰く、今一般にはただ剉み炒つて毛鬚を去つて用ゐる。

【氣味】【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、甘し、微溫なり。普曰く、神農は苦しといひ、桐君、黃帝、岐伯、雷公、扁鵲は甘し、毒なしといひ、李當之は小溫なりといふ。權曰く、苦く辛し、微熱なり。之才曰く、萆薢が使となる。敗醬、莎草を惡む。

【主治】【腰、(九)背强、(一〇)關機の緩急、(一一)周痺、寒濕、濕痛、老人に頗る利あり】(本經)【節度なく尿を失するもの、男女の脚弱、腰痛、風邪、(一二)淋露、少氣、目闇を療じ、脊を堅くして俛仰を利し、婦人の傷中で關節の重きを治す】(別錄)【男子、婦人の軟脚、腎氣虛弱。筋骨を續ぎ男子に補益がある】(甄權)【肝、腎を强くし、骨を健にし、風虛を治す】(時珍)

【附方】新四。【男子の諸風】四寶丹——金毛狗脊を鹽泥で固濟して紅く煆いて毛を去り、蘇木、萆薢、川烏頭を生で用ゐ、等分と末にして米醋で和して梧子大の

(九)本經ニハ背ヲ脊ニ作ル。
(一〇)關節が拘痛スルコト。
(一一)周痺ハ全身麻痺。
(一二)淋露ハ寒熱。

丸にし、二十丸づつを溫酒、鹽湯で服す。(普濟方)【處女の白帶】(一三)衝任虛寒には、鹿茸丸――金毛狗脊を焚火にかざして毛を去り、白斂と各一兩、鹿茸を酒で蒸し焙じて二兩を末にし、艾を醋で煎じた汁で作つた糯米糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に溫酒で服す。(濟生方)【固精、强骨】毛金狗脊、遠志肉、白茯神、當歸身等分を末にし、煉蜜で梧子大の丸にして五十丸づつを酒で服す。(集簡方)【病後の足腫】ただ食物を節して胃氣を養ひ、外用として狗脊の煎湯に漬けて洗ふ。(吳綬蘊要)

貫衆(本經下品)

和名　やぶそてつ
學名　Polystichum Fortunei, (J. Sm.)
科名　うらぼし科(金星草)

【釋名】貫節(本經)　貫渠(本經)　百頭(本經。又、虎卷、扁(一)府と名ける)　草鴟頭(別錄)　黑狗脊(綱目)　鳳尾草(圖經)　時珍曰く、この草は葉、莖が鳳の尾のやうで、根が一本に衆くの枝を貫いてゐる。それで草を鳳尾といひ、根を貫衆、貫節、貫渠といふのであつて、渠とは魁のことである。吳普本草に貫中と書き、俗に貫仲、管仲などと呼ぶが、いづれも呼稱の誤りだ。爾雅に『濼、音は灼(ヤク)

(一三)衝任ニ共ニ子宮ノ邊ニ起ル脈ノ名。

(一)大觀ニハ苻ニ作ル。

貫衆のことだ』とあるがこの物のことだ。別錄に、一名伯萍、一名藥藻などとあるはいづれも字の訛誤である。金星草を一名鳳尾草といつてこの草の別名と同じだが、兩者互に參考して見る必要がある。弘景曰く、近き地方に皆ある。葉は大蕨のやうで、根の形狀、色澤、毛芒は全く老鴟の頭に似たところから草鴟頭と呼ばれるのだ。

〔貫　衆〕

【集解】別錄に曰く、貫衆は(二)玄山の山谷、及び(三)宛句、(四)少室山に生ずる。二月、八月に根を採つて陰乾する。普曰く、葉は青黃色で兩兩相對し、莖に黑毛がある。叢生するもので、冬も夏も枯れない。四月白い花を開き、七月黑い實を結ぶ、一所に聚り相連つて卷いて幾本も傍らに生ずる。三月、八月に根を採り、五月葉を採る。

保昇曰く、苗は狗脊に似て形狀が雉子の尾のやうだ。根は直くして枝多く、皮は

(二)玄山、未考。
(三)宛句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。
(四)少室山ハ嵩山ノ一峯ナリ。

黒く肉は赤い。曲がつたものは草鵰頭と呼び、所在の山谷の陰處にはあるものだ。頌曰く、今は(五)陝西、(六)河東の州郡、及び(七)荊襄の地方に多くあるが、花のあるものは少い。春赤い苗を生じ、葉の大さは蕨のやうで莖幹に三稜があり、葉の色は綠で雞の翎に似てゐるところから、又、鳳尾草と名ける。その根は紫黑色で形は大(八)瓜のやうだ。下部に(九)黑鬚毛があつてまた老鵰に似てゐる。郭璞の爾雅の註に『葉は圓く銳どく、莖の毛は黑く、地に布いて生え、冬も枯れぬ』とあり、廣雅に貫節といつてあるがこの物である。

時珍曰く、多くは山の陰の水に近い處に生じ、數本の根が叢生して一本の根に數本の莖が生え、莖の太さは箸ほどのもので、涎が滑かだ。葉は兩兩相對して生え、狗脊の葉のやうだが鋸齒がなく、色は靑黃で表面が色濃く裏面が淡い。その根は曲つて尖觜があり、黑鬚が簇生し、やはり狗脊の根に似て大きい。伏鵰のやうな形狀だ。

根 【氣味】【苦し、微寒にして毒あり】之才曰く、雚菌、赤小豆が使となる。石鍾乳を伏す。【主治】【腹中邪熱の氣、諸毒。三蟲を殺す】(本經)【(一〇)寸白を

(五)陝西ハ今ノ陝西省ノ地ヲ指ス。
(六)河東ハ今ノ山西省地ヲ指ス。
(七)荊襄ハ湖北省ノ荊州、襄州、卽チ楊子江ト漢水トノ中間ノ地方ナイフ。
(八)瓜字大觀本草ニ形爪ニ作ル。
(九)黑上ニ一字アレドモ大觀本草ニナキ故之ヲ刪ル。
(一〇)寸白ハ絛蟲。

去り、癥瘕を破り、頭風を除き、金瘡を止める】(別錄)【末にして水で一錢を服すれば鼻血を止むる效がある】(蘇頌)【下血、崩中、帶下、產後の血氣、脹痛、斑疹の毒、漆毒、骨哽を治し、(一一)豬病を解す】(時珍)

【發明】時珍曰く、貫衆は大いに婦人の血氣を治するもので、根汁はよく三黃を制し、五金を化し、鍾乳、結砂を伏し、汞を制し、且つ能く毒を解し、堅きを軟かにする。王海藏は、夏月(一二)豆が出て不快なるを治する快斑散に之を用ゐて『貫衆は有毒だが能く腹中邪熱の毒を解するものだ。病が內感に原因して外部に發したものに多く效がある。しかしこれは(一三)古法の分經ではない』といつてゐる。又、黃山谷の煮豆帖には『饑饉年には、黑豆一升を水中で挼み淨め、貫衆一斤を骰ほどに剉み、共に水で煮て火の强弱を加減し、豆が熟したとき出して日光で乾し、覆ふて餘汁を出し盡させてから貫衆を簸ひ去り、每日空心にその豆五六粒を食ふと、あらゆる草木の枝葉を食つて味があり、十分に飢を凌ぎ得るものだ』とある。又、王璆の百一選方には『(一四)滁州の蔣教授は鯉魚玉蟬羹を食つてその魚の肋肉が咽に哽ひ、あらゆる藥を用ゐても奏效しなかつたが、ある人が貫衆の濃煎汁一盞を三服に別け

(一一)豬病詳ナラズ、家豬ノ病患ヲ指スナラン。

(一二)豆金陵本ニモ豆トアレドモ痘ノ誤ナラン。

(一三)古法ノ分經ハ古法ノ遺方ト云フコトカ。

(一四)滁州ハ人參註ヲ見ヨ。

(一五)鼠痔ハ鼠奶痔ノ略イボヂノ一種。

(一六)蝟、一名刺蝟、和名ハリネズミ。

て續けざまに飲ませると、その夜一回に咯出した。末にして水で一錢を服してもよし」とある。これで見ると、この物の功力は堅きを軟かにするもので、ただ血を治し、瘡を治するだけのものでないことが認められる。

附方　新十五。【鼻衄の止まらぬもの】貫衆根末一錢を水で服す。（普濟方）【諸般の下血】腸風、酒痢、血痔、(一五)鼠痔の下血には、黑狗脊——黃なるものは用ゐない。內肉の赤色のものに限る。卽ち本草の貫衆である——を皮毛を去つて剉み、焙じて末にし、二錢づつを空心に米飲で服す。或は醋糊で梧子大の丸にして米飲で三四十丸づつを服す。或は燒いて性を存して火毒を出し、末にして麝香少量を入れ、米飲で二錢を服す。（普濟方）【婦人の血崩】貫衆半兩を酒で煎じて服すれば立ろに止まる。（集簡方）【產後の亡血】亡血過多で心腹に徹して痛むには、(一六)刺蝟のやうな形の貫衆一個を形の全きまま剉まずにただ揉んで毛と花蕚とを去り、好き醋に蘸け浸して慢火で香しく炙熟し、冷るを待つて末にし、米飲で空心に二錢づつを服すれば甚だ效がある。（婦人良方）【赤白帶下】年久くして諸藥も治效を奏せぬには、上記の方を用ゐればやはり效驗がある。これを獨聖湯と名ける。（方は同上）【年久しき欬嗽】

膿血の出るには、貫衆、蘇方木等分を、三錢づつ水一盞、生薑三片と煎じて一日二回に服す。○久欬から漸次に勞瘵となりたるには、鳳尾草を末にして魚鮓に蘸けて食ふ。(聖惠方)【豆瘡の不快】快斑散——貫衆、赤芍藥各一錢、升麻、甘草各五分に淡竹葉三枚を入れ、水一盞半で七分に煎じて溫服する。(王海藏方)【頭瘡白禿】貫衆、白芷を末にして油で調へて塗る。○又別方では、貫衆を燒き、末にして油で調へて塗る。(聖惠方)【漆瘡の痒きもの】油で貫衆末を調へて塗る。(千金方)【雞、魚の骨哽】貫衆、縮砂、甘草等分を粗き末にして綿に包み、少量を含んで汁を嚥む。久しく經てば痰と共に自から出る。(普濟方)【輕粉の毒を解す】齒縫から出血し、臭腫するには、貫衆、黃連各半兩を水で煎じ、氷片少量を入れて折折漱ぐ。(陸氏積德堂方)【血痢の止まらぬもの】鳳尾草根、卽ち貫衆五錢を酒で煎じて服す。解元陳吉言の所傳である。(集簡方)【便毒の腫痛】貫衆二錢を酒で服するが良し。(多能鄙事)

花　主治　【惡瘡に用ゐて洩し下さす】(別錄)

(一)巴戟天（本經上品）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

釋名　不凋草（日華）　三蔓草　時珍曰く、名稱の意義は一向明でない。

集解　別錄に曰く、巴戟天は(二)巴郡、及び(三)下邳の山谷に生ずる二月、八月に根を採つて陰乾する。弘景曰く、今は(四)建平、(五)宜都のものも用ゐる。根の形狀は牡丹のやうだが細く、外は赤く、内は黑い。用ゐるには打つて心を取り去る。恭曰く、苗を俗に三蔓草と呼ぶ。葉は茗に似て冬を經ても枯れず、根は珠を連ねたやうだ。古い根は青く若い根は白紫だが用途はやはり同一だ。その連珠のやうな肉多く厚いものが勝れてゐる。大明曰く、紫色の小さい珠數のやうで小孔があり、堅硬で擣き難いものだ。宗奭曰く、巴戟天はもと心があるのだが、乾き縮む時に偶ゝ自から落ちるか或は抽き取るかするので心の處が空になるのだ。元來小孔があるのではない。今一般に中間の紫色のものを求めたがるが、大豆汁を沃ぎかけて僞色をつけた物が多いから注意を要する。

(一)牧野云フ、ごまのはぐさ科ノ Herpestis Monniera Benth. ヲ巴戟天トスルハ穩カナラズモノト思フ。
(二)巴郡ハ石部丹砂ノ説ヲ見ヨ。
(三)下邳ハ秦ノ縣名、今ノ江蘇省邳縣ノ東ニ故城アリ。金ノ時今ノ邳縣ニ治ヲ移ス。
(四)建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(五)宜都ハ三國時代蜀ニ郡ヲ置ク、今ノ湖北省宜都縣ノ地ナリ。

○頌曰く、今は(六)江淮、(七)河東の州郡にもあるが、やはり(八)蜀州の佳きものには及ばない。多く(九)山林の中に生ずるもので、内地に生ずるものは葉が麥門冬に似て厚く大きく、秋になつて實を結ぶ。今の方家は多く紫色のものを良しとするが、蜀の者の話に依ると、

〔巴戟天〕

『紫色のものは全然あるもので無い。採收した時その色を紫にするために黒豆と煮るが、却つてそのために氣味を失ふものだから、特に辨別に注意を要する』といふ。又、『一種のものがある。それは山葎の根が巴戟そのままで色が白いだけなところから、産地ではそれを採つて醋水で煮たものを巴戟に雜へて僞るので、一見判別が付かないが、ただ擊ち破つて見て中が紫で鮮潔ならば贋物だ。中は紫でも微し白粉のやうな色のつぶがあつて理が少し暗色のものならば眞物だ。眞の巴戟は嫩い時はやはり白いのだが、乾かす時紫色に煮つくろふので、ために力が劣弱になる』といふ。

(六)江淮ハ江蘇安徽地方ヲ指ス。
(七)河東ノ甘草ノ註ヲ見ヨ。
(八)蜀州、州ヲ大觀ニ川ニ作ル、今ノ四川省ノ地ヲ指ス。
(九)山大觀ニ竹ニ作ル。
白井曰ク、巴戟天じゆずねのきニ似タリ。

根 ［修治］ 斅曰く、凡そこれを用ゐるには、枸杞子湯に一夜浸して稍軟かになるを待つて漉出し、再び一伏時酒に浸して漉出し、菊花と共に熬り焦して黃色になつたとき菊花を去り、布で拭つて乾かして用ゐる。時珍曰く、今の修治法は、ただ酒に一夜浸して剉り、焙じて藥に入れる。また急の場合にはただ溫水に浸し、軟かにして心を去つて用ゐる。

［氣味］ 【辛く甘し、微溫にして毒なし】 大明曰く、苦し、之才曰く、覆盆子が使となる。雷丸、丹參、(一〇)朝生を惡む。［主治］ 【大風邪氣、陰痿不起。筋骨を強くし、五臟を安んじ、中を補ひ、志を增し、氣を益す】(本經)【頭部、面部の遊風、小腹から陰中まで相引いて痛むものを療じ、五勞を補ひ、精を益し、男性に利あり】(別錄)【男子が夜間夢に幽鬼と交つて精を洩すを治し、陰を強くし、氣を下し、(一一)風癩を治す】(甄權)【一切の風を治し、(一二)水脹を療ず】(日華)【脚氣を治し、風疾を去り、(一三)血海を補す】(時珍) 仙經に記載してある。

［發明］ 好古曰く、巴戟天は腎の經の血分の藥である。權曰く、患者の虛損するものにはこれを加へて用ゐる。宗奭曰く、ある人は酒好きで每日五七盃づつ飲み、

(一〇)朝生ハ鬼蓋ノ一名二十八卷土菌部ニ出ヅ。
(一一)大觀ニ風癩ヲ大風血癩ニ作ル。
(一二)水脹ハ水腫。
(一三)血海ハ子宮。

後に脚氣を患つて甚だ危氣に陷つたが、或る者に敎へられて、巴戟半兩を糯米と共に炒り、米が微し變色した程度で米を去り——米は用ゐない——大黃一兩を剉んで炒り、共に末にして熟蜜で丸にし、溫水で五七十丸を服して同時に酒を禁ずるとそれで癒えた。

【附錄】 (一四)**巴棘** 別錄に曰く、味苦し、毒あり。惡疥瘡の蟲の出るものに主效がある。高地に生ずるもので、葉は白くして刺があり、根は數十箇連つてゐる。一名女本といふ。

(一)遠　志（本經上品）

和　名　いとひめはぎ
學　名　Polygala tenuifolia, Willd.
科　名　ひめはぎ科（遠志科）

【釋　名】 苗を**小草**と名ける。（本經） **細草**（本經） **棘菀**（本經） **葽繞**（本經）

時珍曰く、この草は服すれば能く智を益し、志を强くする。それで遠志なる名稱があるのだ。世說に『謝安は、處ては遠志となり、出れば小草となるといつた』とある。記事珠にはこれを醒心杖と呼んでである。

(一四)牧野云フ、巴棘ハ其正體ガ能ク明カデナイ。

(一)牧野云フ、我邦ノ本草學者從來遠志ヲ我ガひめはぎ即チPolygala japonica, Houtt. ニ充テ居リシガ之レハ誤リデアツタ。白井曰ク、文政年中尾張本草家水谷助六舶來麻黃ノ櫃ヲ檢シテ、雜草混入ノ内ヨリ遠志根ヲ見出テ、

集解　別錄に曰く、遠志は（二）太山、及び（三）宛句の川谷に生ずる。四月に根、葉を採つて陰乾する。弘景曰く、宛句は兗州（四）濟陰郡の管下だが、今でもこの藥は（五）彭城の北の（六）蘭陵から移入される　これを用ゐるに、心と皮を取り去ると一斤から僅に三兩だけしか用ゐられる部分が得られぬものだ。やはり仙方でも用ゐるが、それは苗の小草で、形狀は麻黃に似て靑い。

志曰く、莖、葉は大靑に似てゐるが小い。これを麻黃に比するのは陶氏が實物を識らないからだ。禹錫曰く、按ずるに、爾雅に『葽繞は棘菀なり』とあり、郭璞の註に『今の遠志である。麻黃に似て華は赤く、葉は銳くして黃色だ。その上部を小草と謂ふ』とある。

頌曰く、今は（七）河陝、（八）洛西の州郡にもある。根の形は蒿の根のやうで黃色だ。苗は麻黃に似て靑い。また畢豆の葉のやうでもあり、大靑に似て小さいものもあつて、三月白い花を開く。根は一尺ほどの長さになる。（九）泗州に產するものは花が紅く、根、葉共に他の地の產よりも大きい。（一〇）商州に產するものは根が黑い。俗間では（一一）夷門に產する物が最も佳いと云ひ傳へて居る。四月根を採つて晒乾する。

其莖葉ヲ連ヌルモノヲ得テ、眞品遠志ナルコトヲ鑑識シ、之ヲ圖說セシコトアリ、其圖ハいとひめはぎニ他ナラズ。

（二）太山ハ今ノ山東省ノ泰山ヲイフ。太山トハ漢ノ泰山郡ノ地方ヲ指ス場合多シ、泰山郡ハ泰山ノ附近一帶、今ノ山東省泰安、長淸、肥城、博山、萊蕪、蒙陰、新泰等ノ地ヲ統ベ、泰安ノ東方ニ河ノ東岸ニ郡治ヲ置キタリ。

（三）宛句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。兗州トハ此ニハ禹貢兗州ヲ指スガ如シ。水部井泉水ノ註參照。

（四）濟陰郡ハ漢ニ置ク。今ノ山東省定陶、曹州、及ビ直隸省ノ新黃河以南ノ地ニ亙ル。

(五)彭城ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。
(六)蘭陵ハ戰國ノ楚ノ邑ニシテ今ノ山東省嶧縣ノ東ニ故城アリ。漢ニ縣ヲ置キ、晉ニ郡ヲ置ク。
(七)河陝ハ山西、陝西兩省地方ヲ指ス。
(八)洛西ハ石部五色石脂ノ註ヲ見ヨ。
(九)泗州ハ唐ニ置ク今ノ安徽省泗縣ノ地ナリ。故城ハ清ノ康熙ノ時洪澤湖中ニ沒入ス。
(一〇)商州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(一一)夷門ハ山名、今ノ河南省開封府城内ノ東北隅ニ在リ、所謂大梁ノ夷門ナリ。

古方には遠志も小草も通じて用ゐたが、今の醫家では遠志は用ゐるが小草は用ゐることが稀だ。

時珍曰く、遠志には大葉、小葉の二種類ある。陶弘景のいふものは小葉のものだ。馬志のいふものは大葉のものだ。大葉のものは花が紅い。

〔遠志〕

根【修治】斅曰く、凡そこれを用ゐるには心を取去らねばならぬ。取去ずに服すれば煩悶を發す。そこで心を去つて甘草湯で一夜浸して暴乾し、或は焙乾して用ゐる。

【氣味】【苦し、溫にして毒なし】之才曰く、遠志、小草は茯苓、冬葵子、龍骨と配合すれば結果が良い。珍珠、藜蘆、蜚蠊、齊蛤を畏る。弘景曰く、藥に齊蛤といふ物はない。恐らく百合をいふのであらう。權曰く、蛴螬のことだ。恭曰く、藥錄の下卷に齊蛤なるものがある。陶氏の說は誤りだ。

【主治】【欬逆、傷中。

（一二）大觀ニ此下ニ好顏色延年ノ五字アリ。

（一三）血噤ハ痙攣。

（一四）強志トハ意志ヲ強固ニスルコト。

不足を補ひ、邪氣を除き、九竅を利し、智慧を益し、耳目を聰明にし、物を忘れず、志を強くし、力を倍す。久く服すれば身體を輕くし、老衰せぬ】（本經）【男性を利し、心氣を定め、驚悸を止め、精を益し、心下の膈氣、皮膚の中熱、及び顏色と眼の黃なるを（一二）去る】（別錄）【天雄、附子、烏頭の毒を殺すに煎汁を飲む】（之才）【健忘を治し、魂魄を安んじ、物に迷はざらしめ、陽道を堅く壯んにする】（甄權）【肌肉を長じ、筋骨を助ける。婦人の（一三）血噤失音。小兒の客忤】（日華）【腎積、奔豚】（好古）【一切の癰疽を治す】（時珍）

葉　【主治】　【精を益し、陰氣を補し、虛損夢洩を止める】（別錄）

【發明】　好古曰く、遠志は腎の經の氣分の藥である。時珍曰く、遠志は足の少陰、腎の經に入るもので、心の經の藥ではない。その功力も專ら（一四）志を強くし、精を益し、健忘を治するに在るのである。蓋し精と志とは皆腎の經に藏するものであつて、腎の精が不足であれば志氣が衰へて上に心に通じ得なくなる、故に精神が惑ひ迷つてよく物を忘れるのだ。靈樞經に『腎は精を藏し、精は志を宿するものだ。腎盛にして怒つて止まぬときは志を傷め、志が傷めば前に言つたことをよく忘れ、

腰、脊が俛仰、屈伸し得なくなり、毛に澤がなく、顔色に光を失ふ』とあり、又『よく物を忘れるは上氣の不足、下氣の有餘で、腸、胃が實し、心、肺が虚するのだ。そこで營、衞が下に留り、久くして適當の時に上へ行かぬところからよく忘れるのだ』とある。陳言の三因方の遠志酒は癰疽を治するに奇功を奏すといふも、やはり補腎の力に依るわけである。葛洪の抱朴子には『(一五)陵陽の子仲は二十年間遠志を服して三十七人の子を儲け、(一六)坐在立亡を能くした』とある。

附方　舊三、新四。【心孔の惛塞】多く物を忘れ、よく事を誤るには、丁酉の日に密かに自ら藥種屋で遠志を買つて手下げ袋に入れて持ち歸り、末にして人に知られぬやうに服す。(肘後方)【胸痺心痛】膈中に逆氣して飲食物の落ち付かぬには、小草丸――小草、桂心、乾薑、細辛、(一七)汗を出した蜀椒各三兩、附子二分を炮き、この六物を搗き篩つて蜜で和して梧子大の丸にし、一日三回、食後に米汁で三丸づつを服す。效果を覺えぬときは少しづつ量を增して效果を覺えるを度とする。猪肉、冷水、生の葱、菜を忌む。(范汪東陽方)【喉痺の痛み】遠志肉を末にして吹く。涎の出るを度とする。(直指方)【腦風頭痛】忍び難きには、遠志末を鼻に嗜ぐ。(宣明方)【吹

(一五)陵陽、抱朴子ヲ見ルニ六陽仲子ニ作ル。陵陽ハ漢ノ縣名、晉ニ廣陽ニ改ム、今ノ安徽省石埭縣ノ東ニ故城アリ。

(一六)佛家ニ坐脫立亡ナル語アリ。坐シタルママ現身ヲ脫却シ、起立ノママ逝去スルコト、生死自在ヲ得ルノ意也。

(一七)大觀ニ出汗ヲ去汗ニ作ル。

乳腫痛】遠志を焙じ研つて酒で二錢を服し、滓を傅ける。（袖珍方）【一切の癰疽】遠志酒――一切の癰疽發背、癤毒の惡候が漸次に發展して（一八）死血あるを治す。陰毒の內部に在るは痛まぬものだが、これを傅ければ直ちに痛む。憂怒等の氣積があれば怒が攻めると忍び難く痛むものだが、これを傅ければ直ちに痛まなくなる。或は蘊熱が內部に在れば熱が迫つて手もつけられぬが、これを傅ければ直ちに淸涼になる。或は氣虛すれば冷潰して斂まらぬが、これを傅ければ直ちに收斂する。これはもと韓大夫の屋敷で一種の社會救濟の意味で用ゐた方で、極めて功驗のあつたものである。七情の內鬱せる場合などには、虛實、寒熱を問はずこれを用ゐれば皆癒える。遠志を多少に拘はらず米泔に浸して洗ひ、槌いて心を去つて末にし、三錢づつを溫酒一盞で調へて少頃の間澄し、その淸んだところを飮んで滓を患部へ傅ける。（三因方）【小便赤濁】遠志を甘草水で煮て半斤、茯神、益知仁各二兩を末にして酒糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に棗湯で服す。（普濟）

（一八）死血ハ濃水。

(一)百脈根（唐本草）

和名　みやこぐさ(?)
學名　Lotus corniculatus, L. (?)
科名　まめ科(荳科)

【集解】恭曰く、(二)肅州、(三)巴西に產する。葉は苜蓿に似て花は黃に、根は遠志のやうである。二月、八月に根を採つて日光で乾かす。時珍曰く、按ずるに、唐書には栢脈根と書き、肅州から每年貢納したとある。千金、外臺の(四)大方中にも時に之を用ゐてあるが、現今では一向これを用ゐるといふことを聞かない。或は名稱が變つて居るのかも知れぬ。

根　【氣味】【(五)苦し、微寒にして毒なし】【主治】【氣を下し、渴を止め、熱を去り、虛勞を除き、不足を補す。酒に浸し、或は水で煮て丸、散に兼用する】（唐本）

(一)牧野云フ、從來百脈根ヲみやこぐさニ充テテハアルガ覺束ナイ感ジガスル、今日支那デハみやこぐさハ之レヲ牛角花ト稱スル。
(二)肅州ハ漢ノ酒泉郡、今ノ甘肅省酒泉縣ノ地ナリ。
(三)巴西ハ水部甘露蜜ノ註ヲ見ヨ。
(四)大方ハ多味ノ方劑。
(五)大觀ニ苦下ニ甘字アリ。

(一)淫羊藿（本經中品）

和名　ほざきのいかりさう
學名　Epimedium sagittatum, Baker.
科名　めぎ科（小蘗科）
和名　いかりさう

(一)白井曰ク、いかりさうノ一種、Ep. Davidi, Franch. モ支那ニ於テ藥材ニ用ウト云フ、ザイルス氏(中央支那植物誌)

學名　Epimedium macranthum, Morr. et Decne.
科名　同上

【釋名】　仙靈脾（唐本）　放杖草（日華）　棄杖草（日華）　千兩金（日華）　乾雞筋（日華）　黄蓮祖（日華）　三枝九葉草（圖經）　剛前（本經）　弘景曰く、人が之を服すれば好んで(一)陰陽を爲すものである。(二)西川の北部に淫羊といふ動物があつて一日に百回交合する。それはこの藿を食ふためだといふことだ。故に淫羊藿と名けたのである。時珍曰く、豆葉を藿といふ。このものも葉が似てゐるから藿と名けたのだ。仙靈脾、千兩金、放杖、剛前などいふは、いづれもその功力を言ひ表はしたものである。雞筋、黄連祖などいふは、いづれもその根を形容したものである。柳子厚の文には仙靈毗と書いてあるが、人の臍を毗といふ、この物が下を補ふものだから、その意味からいへばなかなか穿つた名稱だ。

【集解】　別錄に曰く、淫羊藿は(四)上郡の(五)陽山の山谷に生ずる。恭曰く、所在いづれにもある。葉の形は小豆に似て圓く薄く、莖は細く堅い。俗に仙靈脾といふはこれである。

頌曰く、(六)江東、陝西、泰山、(七)漢中、(八)湖湘の地方にある。莖は粟稈のやう、

(一) 陰陽トハ生殖作用。

(二) 西川ハ今ノ四川省西部ノ地ヲ指ス。

(四) 上郡ハ漢ノ郡名也、今ノ陝西省北部ノ地、洛水ノ上流ヨリ楡林、長城ヲ越エテ哈柳圖河、烏蘭木倫河ノ上流、鄂爾多斯ノ地ニ及ブ。唐ノ

鄜州、延州ノ地ナリ。

(五)陽山、未詳。楊氏前漢地理圖ニ據レバ今ノ陝西省綏德ノ西、安定ノ北、懷寧河ノ上源ニ陽周ナル漢ノ縣名アリ、橋山モソノ南ニ當ルト指摘ス。陽山或ハ此ノ附近ニ在ラン。又、漢ノ陽山縣ハ今ノ廣東省陽山縣ノ地ナリトイフモ、此ニイフ陽山ニアラザルヤ必セリ。

(六)江東トハ鄱陽ヨリ下流ノ揚子江東方ノ地一帶ヲ指ス。陝西ハ今ノ陝西省ノ地、泰山ハ山東省ノ泰山ヲ中心トスル一帶ノ地ヲ指ス。

(七)漢中ハ石部礜石ノ註ヲ見ヨ。

(八)湖湘ハ湖南省湘水、沅水沿流ノ地ヲ指ス。

〔淫羊藿〕

葉は青く、杏葉(きやうえふ)に似て上に刺(とげ)がある。根は紫色で鬚がある。四月白い花を開き、また紫の花のものもあつて、碎小な獨頭子がある。五月葉を採つて晒乾する。湖湘地方に産するものは葉が小豆のやうで、枝、莖は緊(しま)つて細く、冬を經ても凋(しぼ)まない。根は黃連に似たものだ。(九)關中ではこれを三枝九葉草と呼ぶ。苗は高さ一二尺ほどのものだ。根、葉倶に用ゐ得る。蜀本草には『水聲を聞かぬ處に生じたものが良い』とある。

時珍曰く、太山中に生ずる。一本の根に數本の莖が生え、その莖は粗(あら)い絲のやうで高さは一二尺あり、一本の莖に三本の椏をさし、一本の椏に三枚の葉が著き、葉の長さは二三寸で杏葉や豆藿(とうくわく)のやうだ。表面は光るが裏面は淡(あは)く、甚だ薄くして細歯があり、微かな刺がある。

根葉【修治】斅曰く、凡そ使用する時には、仙靈脾を採つて鋏(はさみ)で葉の四圍

（九）關中トハ東函谷關ヨリ西隴關南武關北蕭關ニ至ル中間ノ地ヲ指ス。即チ今ノ陝西省ノ地ナリ。

の刺を鋏み去り、一斤毎に羊脂四兩を拌ぜて炒る。脂が盡きるを度とする。

【氣味】【辛し、寒にして毒なし】普曰く、神農、雷公は辛しといひ、李當之は小寒なりといふ。權曰く、甘し、平なり。そのもののみ單用し得る。保昇曰く、性は溫なり。時珍曰く、甘くして香しく、微し辛し、溫なり。之才曰く、薯蕷、紫芝が使となる。酒と配合すれば結果が良し。【主治】【陰痿、絶陽、莖中痛。小便を利し、氣力を益し、志を強くする】（本經）【筋骨を堅くし、瘰癧、赤癰を消し、下部の瘡には蟲を洗ひ出す。男子が久く服すれば子無からしめる】（別錄）機曰く、無子の字は誤で、有子と書くべきだ。【男子の絶陽で子無きもの、婦人の絶陰で子無きもの、老人の昏耄、中年の人の健忘、一切の冷風、勞氣、筋骨の攣急、四肢の不仁、腰膝を補し、心力を強くする】（大明）

【發明】時珍曰く、淫羊藿は味甘く、氣香しく、性溫にして寒ならず、能く精氣を益すものだから、手、足の陽明、三焦、命門の藥であつて、眞陽不足の者に適する。

【附方】舊三、新五。【仙靈脾酒】男性を益し、陽を興し、腰、膝の冷を治す。淫

（一〇）不津器トハ酒ノ外面ニ滲出セザル器物。
（一一）大觀ニハ二升ヲ二斗ニ作ル。
（一二）青盲ハアキメクラ。

羊藿一斤を酒一斗に三日間浸して逐時に飲む。（食醫心鏡）【偏風不遂】皮膚の不仁には仙靈脾酒を服するがよし。仙靈脾一斤を細かに剉み、生絹の袋に盛り（一〇）不津器に入れて無灰酒（一一）二升で浸し、幾重にも封じて春、夏は三日、秋、冬は五日の後に毎日暖めて飲む。その間常にほろ酔の狀態にあらしめる。大いに酔ひ過ぎてはならぬ。酒が盡きたときは再び合はせて用ゐる。必ず效驗がある。この酒を合はせる時は絶對に雞、犬、婦人に見られてはならぬ。（聖惠方）【三焦欬嗽】腹が滿して飲食不能となり、氣の順ならぬには、仙靈脾、覆盆子、五味子を炒り、各一兩を末にして煉蜜で梧子大の丸にし、二十丸づつを薑茶で服す。（聖濟錄）【目昏くして翳の生ぜるもの】仙靈脾、生王瓜、卽ち小括樓の紅色なるもの等分を末にし、一日二回、一錢づつを茶で服す。（聖濟總錄）【病後の（一二）青盲】發病日淺きものは治し得る。仙靈脾一兩、淡豆豉一百粒、水一盌半を一盌に煎じて頓服すれば癒える。（百一選方）【小兒の雀目】仙靈脾根、晚蠶蛾各半兩、炙甘草、射干各二錢半を末にし、羊子肝一箇を切開いてその末二錢を摻り、抱き合はせて括り付け、それを黑豆一合、米泔一盞で煮熟し、二回に分けて食ひその汁で送下する。（普濟方）【痘疹の目に入つたもの】仙靈

脾、威靈仙等分を末にして五分づつを米湯で服す。(一三)(痘疹便覽)【牙齒の虚痛】仙靈脾を粗き末にし、湯に煎じて頻りに漱げば大いに效がある。(奇效方)

仙茅（宋開寶）

和名　きんばいざさ
學名　Curculigo orchioides, Gaertn.
科名　ひがんばな科（石蒜科）

【釋名】獨茅(開寶)　茅瓜子(開寶)　婆羅門參　珣曰く、葉が茅に似て、久服すれば身體を輕くするものだから仙茅と名けたのだ。梵音では(一)河輪勒陀と呼ぶ。頌曰く、その根はただ一本獨生する。(二)西域の婆羅門僧が唐の玄宗皇帝にこれを用ゐる方を獻じたのがこのものの中國にある始めだといふので、今も江南地方では婆羅門參と呼んでゐる。その補の功力が人參のやうだといふ意味である。

【集解】珣曰く、仙茅は西域に生ずる。葉は茅に似て根が粗く細く(三)節がある。或は節のある筆管のやうな形で文理があり、黃色で涎が多い。(四)武城方面から輸入されて來る。(五)蜀中の諸州にもやはり皆ある。(六)頌曰く、今は(七)大庾嶺、蜀川、江湖、兩浙の諸州にもある。葉は青く茅のやうで軟かく、(八)且つ略廣く、表面

(一三)大觀ニハ經驗方ニ作ル。

(一)大觀ニハ阿輪乾陀トアリ。

(二)西域ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(三)大觀ニ節ヲ筋ニ作ル。

(四)武城ハ縣名、四箇所アリ、イヅレモ漢ニ置ク。一ハ今ノ山東省ノ武城縣。一ハ今ノ山東省費縣ノ地。一ハ今ノ陝西省華縣ノ東北ニ故城アリ。一ハ今ノ山西省平魯縣ノ西北ニ故城

〔仙茅〕

に縦の文がある。又、初生の椶櫚の嫩苗にも似たもので、高さは一尺許り、冬になれば盡く枯れて春の初に生える。三月梔子の花のやうな黄色の花を開き、實は結ばない。根はただ一本で直下に伸び、太さは指ほどで下に短く細い肉根が附き、外皮はやや粗く褐色で內肉は黄白色だ。二月、八月に根を採つて暴乾して用ゐる。(九)衡山に産するものは花が碧で五月に黒い子を結ぶ。

時珍曰く、蘇頌の説明は詳細を盡し得てゐるが、しかし、これは四五月中に莖が抽き出て四五寸になり、六出で深黄色の小さい花が開くものだから巵子には似てゐない。諸處の大山中にあるものだ。一般にはただ梅嶺のもののみを使用するとしてあるが、會典には、『(一〇)成都の歳貢は仙茅二十一斤』とある。

根【修治】斅曰く、採收して清水で洗ひ、刮つて皮を去り、槐砧上で銅刀

アリ。此ニハ陝西ノ武城ヲイフカ。

(五)蜀中ハ今ノ四川省ノ地ヲ指ス。

(六)綱目頌曰クノ二字ヲ脱ス、引ク所ハ蘇頌圖經本草ノ文ナリ故ニ之ヲ補フ。

(七)大庾嶺ハ石部雄黄ノ註ヲ見ヨ。

(八)大觀ニ且略ノ二字ヲ復稍ノ二字ニ作ル。

(九)衡山ハ石部砒石ノ註ヲ見ヨ。

(一〇)成都ハ今ノ四川省ノ首都ナリ。

で豆ほどの大さに切つて(一一)生稀布袋に盛り、烏豆水に一夜浸して取り出し、酒を拌ぜ濕して午前十時から午後十時まで蒸して取出して暴乾する。鐵器、及び牛乳に觸れてはならぬ。觸れば人の鬢鬚を斑らにするものだ。大明曰く、彭祖の單服法には『竹刀で刮つて切り、糯米泔に浸して赤汁を取去り、毒を出して後に用ゐれば害をなさぬ』とある。

【氣味】【辛く、溫にして毒あり】珣曰く、甘く、微溫にして小毒あり。又曰く、辛し、平なり。宜しまた補す。大毒はないが小熱で小毒がある。

【主治】【心腹の冷氣で食事不能なるもの、腰脚風冷で攣痺し、歩行不能のもの、男子の虛勞、老人の失尿。子無きものには陽道を益す。久く服すれば(一二)神に通じ、記憶力を強くし、筋骨を助け、肌膚を益し、精神を長じ、目を明かにする】(開寶)【一切の風氣を治し、腰、脚を補暖し、五臟を清安する。久く服すれば身體を輕くし、顏色を益す。男子の五勞、七傷。耳、目を明かにし、骨髓を充塡する】(李珣)胃を開き、食物を消化し、氣を下し、房事を益し、倦怠せぬ】(大明)

【發明】頌曰く、五代後唐の(一三)筠州(一四)刺史王顏は續傳信方を著し、國書編

(一一)生稀布ハ新ラシキ疏布ノコト。

(一二)通神ハ靈能ヲ發揮スルコト。

(一三)筠州ハ唐ニ置キ宋ニ瑞州ニ改ム。今ノ江西省高安縣ノ地也。

(一四)刺史ハ今日ノ縣知事。

に因つて西域の婆羅門僧の服する仙茅の方を載錄した。それから當時盛に行はれ、五勞、七傷を治し、目を明かにし、筋力を益すといふ。その續傳信方には更にそれを敷衍し補足して『十斤の乳石も一斤の仙茅に及ばぬとはよくその功力を言ひ表し得てゐる。本は西域から傳はつたもので、(一五)開元元年に婆羅門僧がこの藥を玄宗明皇帝に進め、それを服して效驗があつてから、禁方とされて當時一般には傳へなかつた。その後(一六)天寶の亂に朝廷に在つた方書も大方散佚したが、(一七)上都の僧不空三藏が始めて現行の方を得て、司徒李勉、尙書路嗣恭、給事齊杭、僕射張建封に傳授し、いづれもこれを服して功驗を得た。路尙書は久く金石を服して效がなかつたが、この藥を得て百倍するの效果を擧げた。齊給事は縉雲の地方長官在任の頃、氣力少く、絕えず風痃が發したが、これを服して遂に癒えた。方は、八九月に採收して竹刀で黑皮を刮り去り、豆粒ほどに切つて米泔で二晝夜浸して陰乾し、搗き篩つて熟蜜で梧子大の丸にし、早朝空心に酒なり飮なり任意のもので二十丸づつを服す。鐵器を忌み、牛乳、及び黑牛肉を食ふことを禁ずる。それ等の物は大いに藥力を減ずるからだ』といつてある。

(一五)西曆紀元七百十三年。
(一六)天寶元年西曆紀元七百四十二年。
(一七)上都トハ京都ノコトナリ。唐ニハ今ノ陝西省長安縣ヲ上都ト稱ス。此ニハ即チ長安ノコトナリ。

〇機曰く、(一八)五臺山に仙茅がある。大風患者はこれを服すれば多くは癒える。

〇〇時珍曰く、按ずるに、許眞君の書に『仙茅は、久く服すれば長生する。その味の甘は能く肉を養ひ、辛は能く肺を養ひ、苦は能く氣を養ひ、鹹は能く骨を養ひ、滑は能く膚を養ひ、酸は能く筋を養ふ。苦酒に和して服するがよい、必ず效がある』とある。又、范大成の虞衡志に『廣西の(一九)英州に仙茅が多い。その地の羊はこれを食つて全身悉く化して筋となり、血も肉も無くなつてしまふ。それを食へば人體を補するものだ。乳羊と呼んで居る』とある。沈括の筆談には『夏文莊公は體質の天稟が通常人と異つて、睡れば身體が冷えて死んだ者のやうになり、目が覺めても少時は他人に温めさせて漸く動けるといふ有様だつた。然るに仙茅、鍾乳、硫黄を常服してからは性力絶倫だつた』とある。これで見ると、仙茅なるものもやはり性は熱であつて、三焦、命門を補ふの藥なのだ。ただしかし陽弱くして精寒する天稟怯弱の者には適するが、體力が壯で相火の熾盛なものが服しては、反つてその火を煽動することとなる。按ずるに、張杲の醫說には『ある者は仙茅の中毒で舌が腫れ、口から外へ漸次に膨大して肩と竝ぶほどになり、小刀で切開したが幾度切つても直

(一八)五臺山ハ石部菩薩石ノ註ヲ見ヨ。

(一九)英州ハ石部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。

(三〇)西暦紀元千四百八十八年。

ちに合する。百回餘も切るとやうやく一點ばかりの血が始めて出た。これで救ひ得ると確信を得て、大黄、朴消を與へ服ませ、その舌に藥を摻ると、やがて腫れが引いてその舌が縮まつた』といつてある。これは皆火盛にして性淫なる人が仙茅を過度に服したための害毒である。(三〇)弘治年間東海の人、張弼の梅嶺仙茅の詩に『君をして昨日纔かに持去らしむ、今日人來つて墓銘を乞ふ』といふ句がある。いづれも服食に關する理法を知らずして、ただ藥の力を藉りて淫逸放縱を極めるためにその生涯を縮めるのだ。仙茅に何の罪があらう。

【附方】 新二。【仙茅丸】筋骨を壯にし、精神を益し、目を明かにし、髭鬚を黑くする。仙茅二斤を糯米泔に五日――夏季は三日――浸して赤き水を棄て去り、銅刀で刮り剉み陰乾して一斤を取り、蒼朮二斤を米泔に五日浸して皮を刮り焙じ乾かして一斤を取り、枸杞子一斤、車前子十二兩、白茯苓を皮を去り、茴香を炒り、柏子仁を殼を去つて各八兩、生地黄を焙じ、熟地黄を焙じて各四兩、以上の諸藥を末にして酒で煮た糊で梧子大の丸にし、一日二回、五十九づつを食前に溫酒で服す。(聖濟總錄)【喘を鎭め、氣を下す】補心腎神祕散――白仙茅半兩を米泔に二晝夜浸し

晒して炒り、團參二錢半、阿膠一兩半を炒り、雞䏶胵一兩を燒き、これを末にし、一日二回、二錢づつを糯米飮で空心に服す。（三因方）

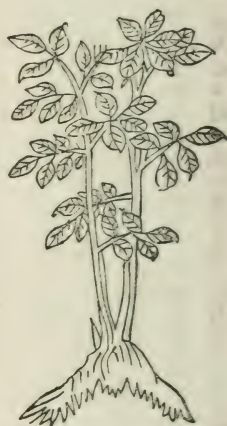
玄參（本經中品）

和名　ごまのはぐさ
學名　Scrophularia Oldhami, Oliv.
科名　ごまのはぐさ科（玄參科）

【釋名】黑參（綱目）玄臺（吳普）重臺（本經）鹿腸（吳普）正馬（別錄）逐馬（藥性）馥草（開寶）野脂麻（綱目）鬼藏（吳普）時珍曰く、玄とは黑色のことである。別錄に一名端、一名咸とあるが甚だ詳でない。弘景曰く、莖が微し人參に似てゐるから參なる名があるのだ。志曰く、香を製造するに用ゐる。故に俗に馥草と呼ぶのだ。

【集解】別錄に曰く、玄參は（一）河間の川谷、及び（二）寃句に生ずる。三月、四月に根を採つて暴乾する。普曰く、寃句の山の陽に生ずるので、三月苗が生え、葉は毛があつて兩兩相對し、芍藥に似て莖が黑く、その莖は四角で高さ四五尺ある。葉はやはり枝の間に生える。四月黑い實を結ぶ。

（一）河間ハ石部鹵石頮凝水石ノ註ヲ見ヨ。
（二）寃句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。

〔玄參〕

弘景曰く、今は近道の諸處にある。莖は人參に似て長く太く、根は甚だ黑い。やはり微香のあるもので、道家では時にこれを用ゐる。香を合せるにも用ゐる。恭曰く、玄參は根も苗もみな臭く、莖は一向に人參には似てゐない。香に合はせる事は見たことがない。志曰く、莖は四角で太く、高さは四五尺あり、紫赤色で細毛がある。葉は掌ほどの大さで尖長だ。根は生では青白く、乾けば紫黑色となり、新しいものは潤があつて滑かだ。陶氏は『莖が人參に似てゐる』といひ、蘇氏は『根も苗もみな臭い』といつてゐるが、まだ研究が淺薄なやうだ。

頌曰く、二月苗が生え、葉は脂麻に似て對して生える。また槐、柳のやうに尖長で鋸齒があり、莖は細く青紫色だ。七月青碧色の花を開き、八月黑色の子を結ぶ。又、花が白く、莖は四角で太く、紫赤色で細毛があり、竹のやうに節があつて五六

尺の高さとなり、その根の一株に五七本附いてゐるものもある。三月、八月に採つて暴乾する。或は蒸してから日光で乾かすともいふ。時珍曰く、今用ゐる玄參は正に蘇頌のいふ通りのものだ。その根には腥氣があるところから蘇恭は臭いといつたのであらう。古い根は多く(三)地蠶が食ふのでその中が空になつてゐる。花には紫と白の二種がある。

根【修治】斅曰く、凡そこれを採取したならば、蒲草を一枚毎に隔てて敷き甑に入れて二伏時の間蒸し、晒乾して用うべきものだ。銅器に觸れてはならぬ。咽喉を噎し、視力を喪ふものである。

【氣味】【苦く、微寒にして毒なし】別錄に曰く、鹹し。普曰く、神農、桐君、黃帝、雷公は苦し、毒なしといひ、岐伯は寒なりといふ。元素曰く、足の少陰、腎の經の君藥であつて、(四)本經を治するに必用のものである。之才曰く、黃耆、乾薑、大棗、山茱萸を惡み、黎蘆と反す。【主治】【腹中の寒熱、積聚、婦人の產乳の餘疾。腎氣を補し、目を明かならしめる】本經)【突然の中風、傷寒身熱、支滿、狂邪で恍惚として意識不明瞭のもの、溫瘧で慄ひ上るほど寒きもの、血瘕で寒血を下

(三)地蠶ハネキリムシ。

(四)本經ハ腎經ヲ指ス。

(五)樞機ハ肝要ノ意。

(六)氤氳ハ天地氣ヲ合スヲ云ソ、陰陽ノ和合ヲ指ス。

すものに主效があり、胸中の氣を除き、水を下し、煩渴を止め、頸下の核、癰腫、心腹痛、堅癥を散じ、五臟を安定せしめる。久く服すれば虛を補し、目を明かにし、陰を强くし、精を益す】(別錄)【熱風の頭痛、傷寒の勞復。暴結熱を治し、瘤癭、瘰癧を散ず】(甄權)【遊風を治し、勞損を補す。心驚煩躁、骨蒸傳尸、邪氣。健忘を止め、腫毒を消す】(大明)【陰を滋くし、火を降し、斑毒を解し、咽喉を利し、小便、血滯を通ず】(時珍)

【發明】 元素曰く、玄參なるものは(五)樞機の劑であつて、諸氣を支配し、上、下を淸肅して濁らしめぬものだ。風藥中に多く用ゐる。故に活人書に、傷寒陽毒で汗下の後毒の散ぜぬもの、及び心下懊惱し、煩して睡眠不能のもの、心神顚倒して絕命せんとするを治するにいづれも玄參を用ゐてある。この關係から推して、胸中の(六)氤氳の氣、無根の火を治するには玄參を最高の劑とするわけだ。時珍曰く、腎水に傷を受けて眞陰が安定を失し、陽が孤獨となつて據無く、發して火病となつたものには、水を壯にし火を制するが法則だから、この場合に於ける玄參の功力は地黃と同一なわけである。瘰癧を消するもやはり火を散ずる結果であつて、劉守眞

（七）發斑ハ斑毒トモ云フ、熱病ノ爲メニ發スルモノ。

は『結核は火病だ』といつてある。

附方　舊二、新七。【諸毒鼠瘻】玄參を酒に漬けて日毎に飲む。（開寶本草）【年久しき瘰癧】生の玄參を搗いて傅け、一日二回換へる。（廣利方）【赤脈が瞳を貫くもの】玄參末を米泔で煮た猪肝につけて日毎に食ふ。（濟急仙方）【（七）發斑咽痛】玄參升麻湯――玄參、升麻、甘草各半兩を水三盞で一盞半に煎じて温服する。（南陽活人書）【急喉痺風】大人、小兒に拘はらず、玄參、鼠粘子を半は生、半は炒つて各一兩を末にし、新水で一盞を服すれば立ろに瘥える。（聖惠方）【鼻中の瘡】玄參末を塗る。或は水に浸して軟くして塞ぐ。（衛生易簡方）【三焦の積熱】玄參、黄連、大黄各一兩を末にして煉蜜で梧子大の丸にし、三四十丸づつを白湯で服す。小兒には粟米大の丸にする。（丹溪方）【小腸の疝氣】黑參を㕮咀して炒つて丸にし、一錢半づつを空心に酒で服す。發汗すれば效がある。（孫天仁集效方）【香に燒いて痨を治す】經驗方では、玄參一斤、甘松六兩を末にして煉蜜一斤で和匀し、瓶中に入れ密封して十日間地中に埋めて取出し、更に灰末六兩、煉蜜六兩と共に和し、瓶に入れて再び五日間埋めて取出し、それを常に燒いてその香を聞けば痨は自から瘥える。頌曰く、初めに瓶中に入れ固

封して一伏時の間煮てから瓶を破つて取出し、搗いて蜜を入れ、別の瓶に盛つて地中に埋めて置いて用ゐる。衣類を熏ずるにもよし。

地楡（本經中品）

和名　われもかう
學名　Sanguisorba officinalis, L.
科名　いばら科（薔薇科）

校正　別錄の有名未用の酸赭を併せ入る。

〔地楡〕

釋名　玉豉　酸赭　弘景曰く、葉が楡に似て長く、生えたばかりには地に匐ひ布くものだからかく名けたのだ。その花、子が紫黑色で豉のやうなところから、また玉豉と名ける。時珍曰く、按ずるに、外丹方には「地楡、一名酸赭」とある。その味が酸く、その色が赭いからだ。現に（一）蘄州地方の民間でも地楡を酸赭と呼び、又、

（一）蘄州ハ北周ニ置ク。元ニ路トナシ、明初ニ府トナシ、後ニ州ニ復シテ黃州府ニ屬ス。本書ノ原著

赭を棗と訛つてゐる。地楡、酸赭の一物なことは明瞭だ。その主たる治功もやはり同一だから、別錄の有名未用の酸赭もここに併せ記載する。

【集解】 別錄に曰く、地楡は（二）桐伯、及び宛句の山谷に生ずる。二月、八月根を採つて暴乾する。又曰く、酸赭は（三）昌陽山に生ずる。採收に一定の時期なし。

頌曰く、今は諸處の平原、川澤にいづれもある。舊い根から三月の内に苗が生え、生えたばかりには地上に匐ひ布いてその中から一本の莖が眞直に三四尺高く伸び、向合ひに分れて葉が生える。その葉は楡の葉に似てやや狹く細長く、鋸齒のやうで色は青い。七月花を開き（四）椹のやうな子で紫黑色だ。根は外面が黑く内部は紅く、柳の根に似てゐる。

弘景曰く、その根は酒を釀すにも入れる。道家の方では、燒いた灰がよく石を爛すところから石を煮る方にこれを用ゐる。山間の住民は茗が乏しいときその葉を採つて飲にするが、なかなか好いものだ。またゆでても食へる。

根 【氣味】 【苦し、微寒にして毒なし】 別錄に曰く、甘く酸し、權曰く、苦し、平なり。元素曰く、氣は微寒、味は微苦、氣、味共に薄く、その體は沈にして

者李時珍ノ出身地ナリ。今ノ湖北省蘄春縣ソノ治ナリ。

（二）桐伯ノ伯ハ柏ノ訛。丹參ノ陶弘景註ニ『桐柏在義陽。是淮水發源之山。非江東臨海之桐柏也』トアリ。書經ニ『導淮自桐柏』トアリ。隋ニ桐柏縣ヲ置ク、即チ今ノ河南省南陽府桐柏縣ナリ。淮河水源ノ桐柏山ハ桐柏縣ノ西南ニ在リ、東南湖北省隨縣ノ界ニ接シ、西湖北省棗陽ノ界ニ接ス。宛句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。

（三）昌陽山、或ハ昌陵ノ訛カ。昌陵ハ漢ノ成ノ時霸陵ノ北ニ起シタル陵ニシテ、今陝西省臨潼縣ノ東ニ在リ。ナホ考フベシ。

（四）椹ハ桑ノ實。

降る。陰中の陽であつて專ら下焦の血に主效がある。杲曰く、味は苦酸、性は微寒、沈であり陰である。之才曰く、髮と配合すれば良し。麥門冬を惡み、丹砂、雄黃、硫黃を伏す。

主治

【婦人の(五)乳產痓痛、七傷、帶下、五漏。痛を止め、汗を止め、惡肉を除き、金瘡を療ず】(本經)【膿血を止める。諸瘻、惡瘡、熱瘡。絕陽、產後の(六)內塞に補す。金瘡膏に作るもよし。酒を消し、渴を除き、目を明にする】(別錄)【冷熱痢、疳(七)痢を止めるに極めて效がある】(開寶)【吐血、鼻衄、腸風、月經不止、血崩、產前後の諸血の疾、幷に水瀉を止める】(大明)【膽氣の不足を治す】(李杲)【汁で釀した酒は風痺を治し、腦を補す。擣汁を虎、犬、蛇、蟲の咬傷に塗る】(時珍)【酸赭は味酸し。內漏に主效があり、血の不足を止める】(別錄)

(八)發明

頌曰く、古代には(九)斷下に多くこれを用ゐた。炳曰く、樗皮と共に用ゐれば赤白痢を治す。宗奭曰く、その性は沈み、寒であつて下焦に入る。熱血痢の場合などにはこれを用ゐるがよし。虛寒の人、及び水瀉、白痢の場合には輕輕に用ゐるわけに行かない。時珍曰く、地楡は下焦の熱を除き、大小便血の證を治す。血止めには上部を切り取り切片して炒つて用ゐる。しかしその梢は反對によく血を

(五)大觀乳下ニ產ノ字ナシ。
(六)內塞ハ經閉ヲ指スカ。
(七)大觀ニ痢下ニ熱ノ字アリ。
(八)木村(康)曰ク、本邦ニ於ケル研究論文。藤田直市—藥誌(大、一二)附錄。
(九)下痢ヲ止メルコト。

行らすものだから心得て置かねばならぬ。楊士瀛は「諸瘡の痛むには地楡を加へ、痒きには黃芩を加へる」といつてある。

附方　舊八、新六。【男、女の吐血】地楡三兩を米醋一升で煮て十餘回沸騰させて滓を去り、食前に一合を熱くして少しづつ服す。(聖惠方)【婦人の漏下】赤、白漏下止まずして黃瘦するには、方は上に同じ。【血痢の止まぬもの】地楡を晒して研り、二錢づつを羊肉の上へ摻つて炙熟して食ひ、(一〇)捻頭の煎湯で飮下す。ある方では、地楡の煮汁を飮にして三合づつ服す。(聖濟)【赤、白下痢】骨あらはに瘦せるには、地楡一斤を水三升で一升半に煮て滓を去り、再び煎じて稠餳のやうにして絞り濾し、一日二回、空腹に三合を服す。(崔元亮海上方)【久病の腸風】痛痒止まぬには、地楡五錢、蒼朮一兩を水二鍾で一鍾に煎じ、一日一回、空心に服す。(活法機要)【下血の止まらぬもの】二十年の長きには、地楡、鼠尾草各二兩を水二升で一升に煮て頓服する。なほ止まぬときは屋塵を水に漬けて一小盃を投じて飮ませる。(肘後方)【(一一)結陰下血】腹痛して已まぬには、地楡四兩、炙甘草三兩を用ゐ、五錢づつを水(一二)一盞に縮砂二十八箇を入れて一盞半に煎じ、二回に分服する。(宣明方)【小兒の

(一〇)捻頭トハ地楡ノ花穗ヲ指スカ。

(一一)結陰トハ無熱ノコトナラン。

(一二)諸本皆一ニ作ル然レドモ二ノ誤ナラン。

疳痢】地楡の煮汁を飴糖のやうに熬つて服すれば止まる。（肘後方）【毒蛇の螫傷】新しき地楡根の擣汁を飲み、同時に瘡を漬ける。（肘後方）【虎、犬の咬傷】地楡の煮汁を飲み、幷に末にして傅ける。また末を一日三回白湯で服するもよし。酒を忌む。（梅師方）【代指の腫痛】地楡の煮汁に漬ければ半日で癒える。（千金（一三）方）【小兒の濕瘡】地楡の濃き煮汁で日毎に二回洗ふ。（千金方）【小兒の面瘡】火傷で赤く腫れて痛むには、地楡八兩を水一斗で五升に煎じ、溫めて洗ふ。（衞生總微方）【白石を煮る法】七月七日に地楡根を取り、多少に拘らず百日間陰乾して燒いて灰にし、また生のものを取つてその灰と合はせて一萬杵搗く。その割合は灰三分、生末一分にする。石は二三斗を限度として水に浸し、水は石の表面から三寸上に滿つるやうにし、その中へ右の藥を入れて攪きまぜて煮る。石が食へるまでに煮爛れるを程度として止める。（臞仙神隱書）

葉　主治　【飲にして茶の代用にすれば甚だよく熱を解す】（蘇恭）

（一三）大觀ニ翼ニ作ル。

丹參（本經上品）

和名　たんじん
學名　Salvia miltiorrhiza, Bunge.
科名　唇形科（唇形科）

【釋名】 赤參（別錄）　山參（日華）　郗蟬草（本經）　木羊乳（吳普）　逐馬（弘景）

奔馬草　時珍曰く、五參はその五色がそれぞれ五臟に配するものだ。故に人參は脾に入るから黃參といひ、沙參は肺に入るから白參といひ、玄參は腎に入るから黑參といひ、牡蒙は肝に入るから紫參といひ、丹參は心に入るから赤參といふ。また苦參なるものは右腎、命門の藥である。古人が紫參を捨て苦參のみを稱用したのはこの意義に達しなかつたのだ。炳曰く、丹參は風の軟脚を治して奔馬を逐ふほどに强健ならしめるといふところから奔馬草と名けたのだ。曾て實驗上その有效が認められてゐる。

【集解】 別錄に曰く、丹參は(一)桐柏の川谷、及び太山に生ずる。五月に根を採つて暴乾する。弘景曰く、此にいふ桐柏は(二)義陽に在る、(三)淮河の源を發する山だ。江東の(四)臨海地方に在る桐柏ではない。この草は今は近道の諸處にある。莖は四角

(一)大觀ニ柏ノ下ニ山ノ字アリ、地楡ノ桐柏ノ註參照。
(二)義陽ハ魏ニ郡ヲ置ク故城ハ河南省桐柏縣ノ東ニアリ、東晉以後信陽縣ノ南ニ治ヲ移ス。
(三)淮河ハ源ヲ河南省桐柏山ニ發シ、東流シテ安徽省ニ入リ、江蘇省、安徽省間ノ洪澤湖ニ入ル。ソノ下流ハモト江蘇省漣水縣ヨリ海ニ注グ。
(四)臨海ノ桐柏、臨海トハ三國吳ノ臨海郡ノ地ヲイフ。舊治ハ今ノ浙江省臨海縣ナリ。桐柏山ハ太平寰宇記越州剡縣ノ條ニ『南嶽眞人云。越有桐柏之金庭。吳有勾曲之金陵。夏侯曾先志云。縣有桐柏山。與四明天臺相連』ト

アリ。剡縣ハ今ノ浙江省嵊縣ソノ舊治ナリ。桐柏山ハ北四明山、南天臺山ノ中間ニアルカ。當時ノ臨海郡ハ今民國ノ會稽道ノ地ニ當ル。

(五)宋ノ隨州ハ漢ノ隨縣、劉宋ニ隨陽郡ヲ置キ、蕭齊ニ隨郡ニ改メ、西魏ニ隨州ニ改ム。今ノ湖北省隨縣ノ地ナリ。

で毛があり、花は紫だ。今　間で逐馬と呼ぶがそれである。○普曰く、莖、葉は小い房で荏のやうで毛があり、根の色は赤く、四月紫の花を開く。二月、五月に根を採つて陰乾する。

〔丹參〕

○頌曰く、今は陝西、河東の州郡、及び(五)隨州にいづれもある。二月苗が生え、高さ一尺ばかり、莖は稜のある四角で色青く、葉は相對し、薄荷のやうで毛があり、三月から九月までの間に花を開く。その花は穗になり、紅紫色で蘇の花に似てゐる。根は色赤く、太いものは指ほどあつて長さは一尺餘ある。一本の苗に數本の根が生えるものだ。○恭曰く、冬採つたものが良い。夏採つたものは虚してゐて惡い。○○時珍曰く、諸處の山中にある。一枝五葉で野蘇の葉のやうで尖り、色青く皺毛がある。花は小くして穗になり、蛾のやうな形でその中に細い子がある。その根は皮が丹色で肉は紫だ。

根　氣味　【苦し、微寒にして毒なし】普曰く、神農、桐君、黃帝、雷公は苦し、毒なしといひ、岐伯は鹹しといひ、李當之は大寒なりといふ。弘景曰く、久しく服すれば多くは眼が赤くなる、故に性は熱でなければならぬ筈だ。此に微寒とあるは恐らく謬だらう。權曰く、平なり。之才曰く、鹽水を畏れ、藜蘆と反す。

主治　【心腹邪氣、腸がぐづぐづと鳴つて水が走るやうなもの、寒熱積聚。癥を破り、瘕を除き、煩滿を止め、氣を益す】(本經)【血を養ひ、心腹の痼疾、結氣の腰脊强、脚痺を去り、風邪の留熱を除く。久しく服すれば健康を利す】(別錄)【酒に漬けて飮めば風痺足軟を療ず】(弘景)【中惡、及びあらゆる邪物鬼魅、腹痛で氣が吼え鳴くやうな聲音をなすものに主效があり、よく精を定める】(甄權)【神を養ひ、志を定め、關脈を通利し、冷熱勞、骨節疼痛、四肢不遂、頭痛、赤眼、熱溫狂悶を治し、宿血を破り、新血を生じ、生胎を安んじ、死胎を落し、血崩、帶下を止め、婦人の經脈不整なる血邪、心煩を整調し、惡瘡、疥癬、癭贅、腫毒、丹毒に膿を排し、痛を止め、肌を生じ、肉を長ず】(大明)【血を活し、心、包絡を通じ、疝痛を治す】(時珍)

（六）大觀ニ白ニ作ル。
（七）大觀ニ錢下匕ノ字アリ。

【發明】　○○時珍曰く、丹參は色赤く、味苦く、氣は平にして降る。陰中の陽であつて、手の少陰、厥陰の經に入る心と包絡との血分の藥である。按ずるに、婦人明理論に『四物湯は婦人の病を治すもので、產前、產後、經水多少のいづれを問はずすべて通用するものだが、ただ一味の丹參散の主治はその四物湯と同一だ。蓋し丹參は能く宿血を破り、新血を補ひ、生胎を安んじ、死胎を落し、崩中、帶下を止め、經脈を調へる功力が大いに當歸、地黃、芎藭、芍藥に類似するものだからである』とある。

【附方】　舊三、新四。【丹參散】婦人の經脈不調で或は期日より早く、或は後れ、或は多く、或は少きもの、產前の胎中不安、產後の惡血不下を治し、兼ねて冷熱勞、腰脊痛、骨節煩疼を治す。丹參を洗淨し晒し切つて末にし、二錢づつを溫酒で調へて服す。（婦人明理方）【墮胎下血】丹參十二兩を酒五升で三升に煮取り、一日三回、一升づつを溫服する。また水で煮てもよし。（千金方）【寒疝の腹痛】小腹と陰中が引いて痛み、（六）自汗が出て死せんとするには、丹參一兩を末にして二（七）錢づつを熱酒で調へて服す。（聖惠方）【小兒の身熱】汗が出て拘急するは中風に因つて起る。丹參半

兩、鼠屎を炒つて三十箇を末にし、三錢づつを漿水で服す。(聖濟總錄)【驚癇發熱】丹參摩膏——丹參、雷丸各半兩、猪膏二兩を共に煎じて七回煎じ七回下し、滓を濾し去つて器に盛り取り、一日三回、病兒の身體にそれをつけて摩擦する。(千金方)【婦人の乳癰】丹參、白芷、芍藥各二兩を㕮咀して一夜醋に漬け、猪脂半斤を入れて微火で煎膏し、滓を去つて傅ける。(孟詵必效方)【熱油の火傷】痛を除き、肌を生ずる。丹參八兩を剉んで水で微し調へ、羊脂二斤を入れて三回煎じ三回下し、それを瘡上に塗る。(肘後方)

(一)紫參 (本經中品)

和名　あきのたむらさう
學名　Salvia chinensis, Benth.
科名　脣形科(脣形科)

【釋名】 **牡蒙**(本經)　**童腸**(別錄)　**馬行**(別錄)　**衆戎**(別錄)　**五鳥花**(綱目)

○時珍曰く、紫參、王孫いづれも牡蒙なる名があるが、古方に用ゐてある牡蒙は多くは紫參である。按ずるに、錢起の詩集に『紫參は幽芳なり。五葩連萼の狀、飛禽の羽を擧げたるが如し』とある。故に俗に五鳥花と呼んだのだ。

(一)白井曰ク紹興本草圖ニヨレバ紫參あきのたむらさうナルニ似タリ。

(二) 河西ハ甘草ノ註ヲ見ヨ。
(三) 宛句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。
(四) 商山ハ今ノ陝西省商縣ノ東ニ在リ。漢ノ四皓ノ隱棲ノ地ナリ。
(五) 蒲州ハ石部石膽ノ註ヲ見ヨ。
(六) 河中ハ河中府、石部石中黃子ノ註ヲ見ヨ、晉ハ晉州、石部鹵石類礬石ノ註ヲ見ヨ。解ハ解州、同上玄精石ノ註ヲ見ヨ。齊ハ齊州、石部附錄諸石龍涎石ノ註ヲ見ヨ。
(七) 淮ハ沙參ノ註參照、蜀ハ石部空青ノ註ヲ見ヨ。

集解 別錄に曰く、紫參は(二)河西、及び(三)宛句の山谷に生ずる。三月に根を採り、火で炙つて紫色にする。普曰く、紫參、一名牡蒙は河西、或は(四)商山に生ずる。圓く聚つて生じ、根は黃赤で文があり、皮が黑く中が紫である。五月紫赤の花を開き、實は黑く豆ほどの大さである。弘景曰く、今方家ではいづれも牡蒙と呼んでゐるが、用ゐることはやはり稀だ。

恭曰く、紫參は、葉は羊蹄に似て紫色、花は青色で穗になる。その根は皮が紫黑色で肉は紅白だ。肉が淺く皮が深い。所在にあるものだが、長安で用ゐられてゐるものは(五)蒲州に產する牡蒙で王孫そのものだ。葉は及已に似て大きく、根は長さ一尺餘ある。皮や肉はやはり紫だが、根も苗も紫參とは似て居らぬ。

〔紫參〕

頌曰く、今は(六)河中、晉、解、齊、及び(七)淮、蜀の州郡にいづれもある。

苗の長さは一二尺で莖は靑く細い。葉は靑くして槐葉に似たものだが、また羊蹄に似たものもある。五月白色で葱花に似た花を開くが、また紅紫で水葒に似たものもある。(八)根は淡紫黑色で形狀は地黃のやうだ。肉は紅白色である。肉は淺く皮が深い。三月に根を採る。火で炙くと紫色になる。又、六月に採つて晒乾して用ゐるともいふ。

時珍曰く、紫參の根は乾けば紫黑色だが肉は紅白色を帶び、形狀は小紫草のやうである。范子計然には『紫參は(九)三輔に產する。三色あるが靑、赤色のものが善い』とある。

根　氣味　【(一〇)苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、微寒なり。普曰く、牡蒙は神農、黃帝は苦しといひ、李當之は小寒なりといふ。之才曰く、辛夷を畏る。

主治　【心腹積聚、寒熱邪氣。九竅を通じ、大小便を利す】(本經)【腸、胃の大熱、唾血、衄血、腸中の聚血、癰腫、諸瘡を療じ、渴を止め、精を益す】(別錄)【心、腹の堅脹を治し、瘀血を散じ、婦人の血閉不通を治す】(甄權)【狂瘧、溫瘧で(一一)鼽血し汗の出るに主效がある】(好古)【血痢を治す】(好古)【牡蒙は金瘡を治し、

(八)大觀ニ根下ニ皮ノ字アリ。
(九)三輔ハ知母ノ註ヲ見ヨ。
(一〇)大觀ニ苦ノ下ニ辛アリ。
(一一)鼽ハ鼻塞。

血を破り、肌肉を生じ、痛を止める。赤白痢。虚を補し、氣を益し、脚腫を除き、(一二)陰、陽を發す】(蘇恭)

【發明】時珍曰く、紫參は色が紫黑で氣、味共に厚い。陰であり沈であつて、足の厥陰の經に入る。肝臟の血分の藥である。故に諸血病、及び寒熱瘧痢、癰腫、積塊など厥陰に屬する病を治するので、古方に婦人の(一三)腸覃病を治する烏喙丸に用ゐてある牡蒙はこのものだ。唐の蘇恭は王孫の註に陳延之小品方の牡蒙の主たる病證を引用したが、それは正に紫參そのものだ。王孫ならばただ風濕痺の病證を治するに止まるので、血病を治するものでない。故に本書は此の條に移した。

【附方】舊一、新二、【紫參湯】下痢を治す。紫參半斤、水五升を二升に煎じ、更に甘草二兩を入れて半升に煎じ、三回に分服する。(張仲景金匱玉函)【吐血の止まぬもの】紫參、人參、阿膠を炒つて等分を末にし、烏梅湯で一錢を服す。ある方では、人參を去つて甘草を加へ、糯米湯で服す。(聖惠方)【顏面の(一四)酒刺】五參丸——紫參、丹參、人參、苦參、沙參各一兩を末にし、胡桃仁と杵き和して梧子大の丸にし、三十丸づつを茶で服す。(普濟)

(一二)陰陽ヲ發ストハ生殖作用、卽陽道ヲ益スルナリ。

(一三)腸覃病ハ卵巢水腫。

(一四)酒刺ハニキビノ類。

（一）王孫（本經中品）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

［校正］拾遺の旱藕を併せ入る。

［釋名］**牡蒙**（弘景）**黃孫**（別錄）**黃昏**（別錄）**旱藕**　普曰く、（二）楚の地方では王孫と呼び、（三）齊の地方では長孫、又は海孫と呼び、（四）吳の地方では白功草、又は蔓延と呼ぶ。時珍曰く、紫參も一名牡蒙といひ、木部の合歡も一名黃昏といふ。いづれも同名だが實物は異ふ。

［集解］別錄に曰く、王孫は（五）海西の川谷、及び（六）汝南の城郭の垣の下に生ずる。普曰く、蔓延して赤い文があり、整然と延びて相對してゐる。弘景曰く、今の方家は皆黃昏と呼んでゐる。牡蒙といつては商人仲間でさへ判らない。
恭曰く、按ずるに、陳延之小品方に『本草の牡蒙は一名王孫だ』と記述しあり、徐之才の藥對には牡蒙があつて王孫がない。このものが同一物なることは明かだ。（七）牡蒙は葉が及已に似て大きく、根の長さは一尺餘あり、皮、肉共に紫色である。

（一）牧野云フ、從來王孫ヲゆり科ノParis tetraphylla, A. Gray. ニ充テテアルノハ誤デアル、植物名實圖考ニ王孫ノ圖ガ出テ居ルガタダ葉ノミデアツテ今其種類ヲ確定スル事ガ出來ナイガ何トナクこせう科（胡椒科）ノモノデモアリハシナイカト想ハルル姿ヲシテヰル。
（二）楚ハ石部石炭ノ註ヲ見ヨ。
（三）齊ハ水部阿井泉ノ註ヲ見ヨ。
（四）吳ハ土部甘鍋ノ註ヲ見ヨ。
（五）海西ハ漢ノ縣名、晉ニ廢ス。故城ハ今ノ江蘇省東海縣ノ南ニ在リ。
（六）汝南ハ漢ノ汝南郡、河南省ノ汝寧陳州ノ二府、及ビ安徽

藏器曰く、旱藕は(八)太行山中に生ずる。形狀は藕のやうだ。

時珍曰く、王孫は葉が最上部の頂點にあつて紫河車の葉に似てゐる。按ずるに、神農、及び呉普本草には『紫參、一名牡蒙』とあり、陶弘景もまた『今方家では紫參を牡蒙と呼ぶ』といひ、王孫にはいづれも牡蒙なる名稱はないのであつて、陶氏は王孫の條へ來て又『牡蒙と名ける』とはいつたものの、やはり明かに形狀をばいつてなかつた。唐の蘇恭が始めて紫參、牡蒙を二物とし『紫參は葉が羊蹄に似て居り、王孫は葉が及已に似て居る』といつたのだが、しかし、古方に用ゐた牡蒙は皆紫參であつて、後世に用ゐる牡蒙は王孫だ、紫參ではない。この區別を誤まつてはならぬ。唐の玄宗の時、姜撫といふ隱氏が、(九)終南山にある旱藕といふ草を餌へ、ば天年を延べる 形狀は葛粉に類するものだといふことを奏上したので、帝はそれを取らせて湯餅にして大臣に下賜された。その時、右驍騎將軍甘守誠は『この旱藕

〔王孫——牡蒙〕

省ノ潁州府等ノ地ヲ統ブ。舊治ハ平輿、即チ今ノ河南省汝南縣ノ東南ニ置ク。所謂城郭トハ平輿ノ城郭ナリ。

(七)以下蜀本註ニシテ保昇ノ言ニカカル。

(八)太行山ハ石部鹵石類石硫黃ノ註ヲ見ヨ。

(九)終南山ハ清會典ノ陝西西安府圖說ニ『終南山在府治南』トアリ。即チ終南山脈中ノ主山ヲ指ス。所謂南山ナリ。終南山脈ハ今ノ甘粛省ヨリ陝西省ヲ過ギ河南省陝縣以南ノ諸山ニ連亙ス。

なるものは牡蒙だ。方家では久しく用ゐない。姜撫がただ名稱を易へて勿體らしくしただけだ』といつたといふ。これに據れば牡蒙は王孫といふことになる。蓋し紫參はただ血證の積聚、瘧痢を治するに止まるが、王孫は五臟の邪氣、痺痛に主效がある。別錄の『あらゆる病を療ず』なる文に依つてもその特長の相違は自から推知すべきだ。蘇恭が引用した小品方の牡蒙はその主治の病證から見て、紫參である王孫ではない。故に今は移して紫參の條下に附記した。

根 氣味 【苦く、平にして毒なし】普曰く、神農、雷公は苦し、毒なしといひ、黄帝は甘しといふ。藏器曰く、旱藕は甘し、平にして毒なし。

主治 【五臟の邪氣、(一〇)寒濕痺、四肢の疼酸、膝の冷痛】(本經)【あらゆる病を療じ、氣を益す】(別錄)【旱藕は長生の主效があり、飢ゑしめず、毛髮を黑くする】(藏器)

(一)紫　草　(本經中品)

和名　むらさき(?)
學名　Lithospermum officinale, L. var. erythrorhizon, Maxim. (?)
科名　むらさき科(紫草科)

(一〇)濕痺ハ脚氣。

(一)牧野云フ、植物名實圖考ニヨルト其書ニ圖シアル紫草ハ吾人ノ今日呼ンデヰ

ル我邦ノむらさきトハ全然別ノモノデアル、科ハ固ヨリ同ジデハアルガ其學名ハ今遽カニ之レヲツキ止メル事ガ出來ヌ。
(二)猺獞ハ蠻族ノ名稱。今ノ湖南省ノ南部ヨリ雲南、廣東、廣西ノ地ニ亙ツテ棲息ス。猺蠻ノ大部ハ廣西省平南縣ノ東北ニ在リ、獞蠻ハモト湖南ノ溪洞ヨリ出ヅ。石部滑石ノ註參照。
(三)碭山ハ秦ノ碭郡ノ地ノ山ヲ指ス。碭郡ハ今ノ山東省濟寧、東平二縣、江蘇省碭山縣、安徽省亳縣、河南省歸德府ノ地ヲ包ス。隋ニ碭山縣ヲ置ク、今ノ江蘇省碭山縣ノ地ナリ。
(四)襄陽ハ石部握雪礜石ノ註ヲ見ヨ。

【釋名】 **紫丹**（本經） **紫芺**（本經） 芺の音は襖（アウ）である。**茈莀**（廣雅）音は紫戻（シレイ）である。**藐**（爾雅）音は邈（バク）である。**地血**（呉普） **鴉銜草** 時珍曰く、この草は花も紫、根も紫で紫染の染料になるところから名けたのだ。爾雅には茈草と書いてある。(二)猺獞の蠻民間では鴉銜草と呼んでゐる。

【集解】 別錄に曰く、紫草は(三)碭山の山谷、及び楚の地に生ずる。三月に根を採つて陰乾する。弘景曰く、今は(四)襄陽に產し、多く(五)南陽、(六)新野から來るが、彼の地に栽培するところを見ると今の紫染の染料にするものだ。方藥には全然用ゐない。博物志には『(七)平氏、(八)陽山の紫草が甚だ好い。(九)魏國のものは染色が殊に黑く、近頃(一〇)東山でも栽培して居るが、色は少し(一一)北のものよりも淺い』とある。

恭曰く、所在いづれにもあり、民家でも栽培するものがある。苗は蘭

〔紫草〕

（五）南陽ハ金石部玉ノ註ヲ見ヨ。（六）新野ハ漢ノ縣名今ノ河南省南陽府新野縣ハソノ地ナリ。（七）平氏ハ漢ノ縣名石、紫石英ノ註ニ未詳トセルモ、陽氏前漢地理圖ニ據レバ平氏縣ハ今ノ河南省桐柏縣ノ西北、灃水西岸ノ地ナリト指摘セリ、然レドモ、此ニイフ平氏トハ同ジカラザルガ如シ。（八）陽山ハ石部紫石英ノ註ヲ見ヨ。（九）魏國ハ漢ノ魏郡ノ地ヲ指スナラン。今ノ直隷省大名府以西、河南省ノ內黃、臨漳、武安、涉、林等諸縣ノ地ヲ包ヌ。（一〇）東山ハ今ノ浙江省上虞縣ノ西南四十五支里ニ在リ。（一一）大觀ニ北ヲ此ニ

香に似て莖が赤く節が青い。二月紫白色の花を開き、結實は白色で秋季に熟する。

時珍曰く、紫草を栽培するには、三月耕してうねを續けて種を卸し、九月子が熟したときに草を刈り、（一二）春社の前後に根を採つて陰乾するのである。その根は頭に白毛があつて茸のやうだ　まだ花の咲かぬ時に採れば根の色が鮮明だが、花が過ぎてから採れば根の色が黯んで惡い。採つた時には石で扁平に壓して曝乾する。貯藏中は人尿、及び驢、馬糞、幷に烟氣を忌むもので、觸れるとその草が皆黃色になるものだ。

根

修治　斅曰く、凡そこれを用ゐるには、一斤每に蠟（一三）二兩を水に溶して拌ぜ、蒸して水の乾くを待つて頭、幷に兩邊の鬚を取り去り、細かに剉んで用ゐる。

（一四）氣味　【苦く、寒にして毒なし】權曰く、甘し、平なり。元素曰く、苦し、溫なり、時珍曰く、甘く鹹し、寒である。手、足の厥陰の經に入る。

主治　【心腹の邪氣、五疳。中を補し、氣を益し、九竅を利し、水道を通ず】（本經）【（一五）腫脹滿痛を療ず。（一六）膏に合せて用ゐれば小兒の瘡、及び（一七）面皶を療ず】

（別錄）【惡瘡、（一八）瘑癬を治す】（甄權）【斑疹、痘毒を治し、血を活し、血を涼し、大腸を利す】（時珍）

【發明】 頌曰く、紫草は古方では用ゐたことが稀だが、今は醫家で多く用ゐて傷寒時疾を治し、瘡疹の出ぬものを發出さすにこれを藥として發出させる。韋宙の獨行方では、豌豆瘡を治するに紫草湯を煮て飲ませたが、後世一般に相傳へて用ゐてゐる。その效力尤も速かだ。

時珍曰く、紫草は、味は甘く鹹くして氣は寒である。心、包絡、及び肝經の血分に入り、その功力は血を涼し、血を活し、大小腸を利するに特長がある。故に痘疹の發出せんとしてなほ發出せず、血熱の毒が盛で大便が閉濇するものにはこれを用ゐるがよく、已に發出して紫黑になり、便の通ぜぬにも用ゐてよし。しかし、已に發出してその痘が紅く活き、又は白く陷つて大便の利するものには絶對に忌まねばならぬ。故に楊士瀛の直指方には『紫草を痘の治療に用ゐればよく大便を導き、發出せしめ、發出してもやはり輕い。木香、白朮を佐として用ゐれば一層有效だ』とあり、又、曾世榮の活幼心書には『紫草は性寒である。小兒の脾氣の實するもの

作ル。

（二二）春社ハ立春ノ後五度目ノ戊ノ日。

（二三）大觀ニ二ヲ三ニ作ル。

（二四）木村(康)曰ク、むらさき根ハアセチルシコニント云フ結晶性紫色素ヲ含有ス。文獻ハ黒田チカ子—化誌三九（大、七）一〇五一。上田嘉助—朝鮮試（大、六）三月。

（二五）大觀ニ腫上腹字アリ。

（二六）木村(康)曰ク、紫根ノ越幾斯ハ皮膚病ニ軟膏トシテ用ウ、火傷、凍傷、濕疹、水泡等ニ奏效アリ、其最簡單ナル用法ハ紫根細末ヲオレイフ油又ハ胡麻油ニ和ジテ用ユ、文獻ハ澤田玄弘—東北醫二九（明、三六）。

(一七)面皰ハニキビ。
(一八)癌瘡ハ惡瘡ノ深ク膿窠ヲ作ルモノ。
(一九)卒淋ハニハカニ小便ガシブルコト。
(二〇)大觀ニ聖惠方。

には用ゐてもよいのであるが、脾氣の虚するものには反つて能く瀉せしむるものだ』とある。古方に茸のみを用ゐたのは、そのものが初めて陽氣を得てゐるからであつて、類を以て類に觸れるの意味だ。その意味で痘瘡を發出さすに用ゐるのである。然るに當今ではこの意味の理解に徹底せずして一概に盲目的にこの物を用ゐてゐるが、それは誤つてゐる。

附方　舊三、新六。【痘毒の消解】紫草一錢、陳皮五分、葱白三寸を新汲水で煎じて服す。(直指方)【幼兒の疹痘】三四日間如何にも發出しさうに見えて發出せず、顏色赤く便通なきには、紫草二兩を剉み、百沸湯一盞に泡けて氣の泄れぬやうに封じ、適溫になるを待つて半合を服す。その瘡は出ても輕いものである。但し大便の利するものには用ゐてはならぬ。服するには煎じて服してもよし。(經驗後方)【痘毒の黑疔】紫草三錢、雄黃一錢を末にして胭脂汁で調へ、銀簪で疔をつき破つて點けるが極めて妙である。(集簡方)【癰疽の便閉】紫草、瓜蔞實等分を新水で煎じて服す。(直指方)【小兒の白禿】紫草の煎汁を塗る。(聖惠方)【小便の(一九)卒淋】紫草一兩を末にし、毎食前に井華水で二錢を服す。(二〇)(千金翼)【產後の淋瀝】方は上に同じ。(產寶)

【惡蟲の咬傷】紫草を油で煎じて塗る。(聖惠方)【(二)火黃身熱】午後には却つて涼く、身體に赤點、或は黑點があつて治療困難なるには、手足の心、背の心、(二)百會、(三)下廉に烙し、紫草湯を內服するがよし。卽ち紫草、吳藍一兩、木香、川黃連一兩を水で煎じて服す。(三十六黃方)

(一)白頭翁（本經下品）

和名　ひろはおきなぐさ
學名　*Anemono chinensis*, Bunge.
科名　うまのあしがた科(毛茛科)

［釋名］　**野丈人**(本經)　**胡王使者**(本經)　**奈何草**(別錄)　弘景曰く、諸處にあるものだ。根に近い部分は白茸があつて狀貌が白頭老翁のやうだからかく名けたものである。時珍曰く、丈人といひ、胡使といひ、奈何といふ、いづれも老翁のやうな姿からさまざまの意味が加つたのだ。

［集解］　別錄に曰く、白頭翁は嵩山の山谷、及び田野に生ずる。四月に採取する。恭曰く、葉は芍藥に似て大きく、一本の莖が抽き出てその莖の頭に木槿花のやうな紫色の花が一箇開く。實は大なるものは雞子ほどあり、一寸餘の白毛があつて

(二)熱病ノ爲メニ發スル黃病。

(二)百會ノ穴ハ頭頂ニアリ。

(三)下廉ノ穴ハ手ノ陽明大腸經ニノ腕ノ處ニアリ。

(一)牧野云フ、植物名實圖考ニ圖ノ出テヰル白頭翁ハ、全ク別ノ草デおきなぐさ科ニ屬シ、其莖高ク枝ヲ分ツテ多花ヲ著ケ、葉ハ披針形ヲナシテ莖ニ互生セルモノデアル。

木村(康)曰ク、本邦ニ於テおきなぐさノ根ヲ秦艽トシテ販賣スルハ非ナリ。

(二)纛ハハタボコ。

(三)太常ハ宮廷ノ物品ヲ取扱フ官ナリ。

(四)洛陽卽チ今ノ河南省洛陽縣ノ地ナリ。

(五)新安ハ水部溫湯ノ註ヲ見ヨ。

それが一揃に下つた有樣は(二)纛のやうに見え、正に白頭の老翁のやうだからかく名けたのだ。陶氏は『根の近くに白茸がある』といふが、その實物を見たことがないらしい。(三)太常の倉庫に貯藏してある蔓生のものは女萎である。白頭翁そのものの根は續斷に似て扁いものだ。

○○保昇曰く、所在にある。細毛があつて滑澤がない。花蕊は黄色だ。二月花を採り、四月實を採り、八月根を採る。いづれも日光で乾かすものだ。

○頌曰く、諸處にあるもので、正月苗が生えて叢生する。形狀は白微に似て柔かく細くやや長い。葉は莖の頭に生え、杏葉のやうで表面に細い白毛があつて滑澤でなく、根の近くに白茸がある。根は深い紫色で蔓菁のやうだ。その苗は赤箭、獨活などと同じく風あるときは靜で風の無い時は搖ぐ。陶氏の註には莖、葉を說明してないが、蘇氏の註に『葉は芍藥に似て實は雉子ほどあり、一寸餘の白毛がある』といふは悉く誤である。

○○宗奭曰く、白頭翁は河南、(四)洛陽の附近に生ずるもので、嘗て(五)新安の山野中で屢〻見たことがあるが、正に蘇恭の說の通りであつた。產地の山中の住民共や、ま

た世間でも白頭翁の丸薬を賣つて長命を保つ薬と稱して居るが、古人の命名の意義が保存されてゐるわけだ。陶氏の説はあまりに實物を知らなさ過ぎて問題にならない。

〔白頭翁〕

機曰く、寇宗奭は蘇恭の説を是とし、蘇頌は陶氏の説を是としてゐるが、一體この物は根を用ゐるものであつて、命名の意義がその形狀に據つたものとすれば蘇頌圖經の物を標準とすべきである。蘇恭の説の物は恐らく別の一種であらう。

根【氣味】【苦し、溫にして毒なし】別錄に曰く、毒あり。吳綬曰く、苦く辛し、寒なり。權曰く、甘く苦し、小毒あり。(六)豚實が使となる。大明曰く、酒と相得れば良好である。花、子、莖、葉も同じ。

【主治】【溫瘧狂(七)猲、寒熱癥瘕、積聚、癭氣。血を逐ひ、(八)腹痛を止め、金瘡を療ず】(本經)【鼻衄】(別錄)【毒痢を止める】(弘景)【赤痢、腹痛、齒痛、あらゆる關節の骨痛、項下の瘤癧】(甄權)【一切の風氣、腰、膝を暖め、目を明かにし、贅を消す】(大明)

【發明】頌曰く、俗間の醫者は補下の藥に合せて甚だ效驗を擧げてゐるが、や

(六)豚ハ蠡ノ誤。
(七)猲音摘、犬ガ耳ヲ張ル貌。
(八)大觀ニハ腹字ナシ。

はり人に衝るものだ。杲曰く、氣は厚く味は薄く、升によく、降によく、陰中の陽である。張仲景は熱痢(九)下重を治するに白頭翁湯を用ゐて主效を取つた。蓋し腎の堅きを欲するには急に苦なるものを食つて堅からしめるもので、痢するは下焦の虛だから純苦の劑を用ゐて堅くするのである。男子の陰疝、偏墜、小兒の禿頭、腥臭い鼻衄にはこの物がなければ奏效しない。毒痢にはこれさへあれば功を收める。吳綬曰く、熱毒下痢の紫血、鮮血を下すものに適する。

附方　舊二、新三。【白頭翁湯】熱痢下重を治す。白頭翁二兩、黃連、黃蘗、秦皮各三兩を水七升で二升に煮て一升づつを服す。なほ癒えぬときは更に服す。婦人產後の痢で極端に虛するには、甘草、阿膠各二兩を加へる。(仲景金匱玉函方)【下痢咽腫】春、夏に發つたこの病には、白頭翁、黃連各一兩、木香二兩を水五升で一升半に煎じて三回に分服する。(聖惠方)【陰癩偏腫】白頭翁根を多少に拘はらず生で搗いて腫處に傅ければ一夜で瘡となり、二十日で癒える。(外臺祕要)【外痔腫痛】白頭翁草、一名野丈人の根を搗いて塗れば血を逐ひ痛を止める。(衞生易簡方)【小兒の禿瘡】白頭翁根を搗いて傅ければ一夜で瘡となり、(一〇)半月で癒える。(肘後方)

(九)下重ハ後重ト同ジ。

(一〇)大觀ニハ二十日ニ作ル。

花 【主治】【瘧疾寒熱、白禿頭瘡】(時珍)

白及(本經下品)

和名 しらん
學名 Bletilla striata, Reichb. F.
科名 らん科(蘭科)

【校正】別錄の白給を併せ入る。

【釋名】**連及草**(本經) **甘根**(本經) **白給** 時珍曰く、その根の色が白く、連及して生ずるから白及といふ。その味の苦いのを甘根といふは反語である。呉普は臼根と書いたが、根に臼があるからやはり意味は通ずる。金光明經には罔達羅喝悉多といつてある。又、別錄の有名未用の部に白給とあるは白及のことで、性、味、功用皆同樣である。重複したものだから本書にはここに一條に併記する。

【集解】別錄に曰く、白及は(一)北山の川谷、及び(二)宛句、及び(三)越山に生ずる。又曰く、白給は山谷に生ずる。葉は藜蘆の如く、根は白くして相連る。九月に採收する。普曰く、莖、葉は生薑、藜蘆の如く、(四)十月眞直に伸びて上に紫赤色の花を開く、根は白くして連つてゐる。二月、八月、九月に採收する。弘景曰く、

(一)北山、北方地方ノ山ノ意カ。未考。
(二)宛句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。
(三)越山トハ越ノ山ヲイフナラン。越トハ揚子江南ノ江蘇、浙江ノ地ヲ指ス。今ハ浙江ノ地ヲ越ト稱ス。
(四)大觀ニハ三ニ作ル。

近道の諸處にある。葉は杜若に似て居り、根の形は菱米に似て節の間に毛がある。方に用ゐるは一向に稀だが糊になるものだ。

○保昇曰く、現に(五)申州に產する。葉は初生の椶の苗、葉、及び藜蘆に似てゐる。三四月に一本の莖が抽き出て紫色の花を開き、七月黃黑色の實が熟し、冬凋む、根は菱に似て三角があり、色白く、その稜角の先から芽が生える。八月に根を採つて用ゐる。

○頌曰く、今は(六)江淮、河陝、(七)漢黔各郡の諸州に皆ある。石山の上に生ずるもので、春苗を生じて長さ一尺ほどになり、葉は栟櫚に似て太さ兩指ほどあり、色は青い。夏紫の花を開く。二月、七月に根を採る。

白]

[及

○時珍曰く、韓保昇のいふ物は形狀から見て正にその通りだ

(五)申州ハ石部桃花石ノ註ヲ見ヨ。

(六)江淮ハ人參ノ註ヲ見ヨ。河陝ハ遠志ノ註ヲ見ヨ。

(七)漢黔ハ漢中、黔中ノ地ヲイフ。漢中ハ石部理石、礜石ノ註、黔中ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

が、但し一科からただ一本の莖が抽き出て花を開き、その花は長さ一寸ばかりの紅紫色のもので、中心は舌のやうだ。根は菱米のやうで(八)鳧茈の臍のやうな臍があり、また扁螺に似て螺旋の紋がある。乾き難い性質のものだ。

根

〔氣味〕【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、辛し、微寒なり。白給は辛し、平にして毒なし。普曰く、神農は苦しといひ、黃帝は辛しといひ、李當之は大寒なりといひ、雷公は辛し、毒なしといふ。大明曰く、甘く辛し。杲曰く、苦く甘し、微寒なり。性は濇る。陽中の陰である。之才曰く、紫石英が使となる。理石を惡み、李核、杏仁を畏れ、烏頭と反す。〔主治〕【癰腫惡瘡、敗疽、傷陰、死肌、胃中の邪氣、(九)賊風、鬼擊、(一〇)痱緩の收まらぬもの】(本經)【白癬疥蟲を除く】(別錄)【結熱不消、陰下の痿、顏面の(一一)皯皰、人の肌を滑にする】(甄權)【驚邪、血邪、血痢、癇疾、風痺、赤眼、癥結、溫熱瘧疾を止め、發背、瘰癧、(一二)腸風痔瘻、撲損、刀箭瘡、湯火瘡に肌を生じ痛を止める】(大明)【肺血を止める】(李杲)
【白給は(一三)伏蟲、(一四)白癬の腫痛に良效がある】(別錄)

〔發明〕恭曰く、山野に住む者は手足の(一五)皸拆にこれを嚼んで塗るが有效だ。

(八)鳧茈ハ即烏芋和名クロクワヰ。
(九)賊風ハ冬期ノ惡風。
(一〇)痱緩ハ類中風、俗ニ中風又ハ中氣。
(一一)皯皰ハ雀斑、俗ニソバカス。
(一二)腸風ハ便血。
(一三)伏蟲ハ伏尸ノコトカ。
(一四)白癬ノ癬ハ癬ニ通ズ。
(一五)皸拆ハアカギレ。

その性が粘るためである。頌曰く、今の醫家は金瘡の瘥えぬもの、及び癰疽を治するの方に多くこれを用ゐる。震亨曰く、凡そ吐血の止まらぬには白及を加へるがよい。

時珍曰く、白及は性が濇つて收斂する。(一六)秋の金の自然を體したものだ。故によく肺に入り、血を止め、肌を生じ、瘡を治するのである。按ずるに、洪邁の夷堅志に『(一七)台州のある獄吏は一人の重罪犯人に憫れをかけてゐたが、その囚人も深く感じ、あるとき謝恩の意味で「自分は死邢の罪を七回も犯してその都度拷問を受け、肺が悉く損傷して血を嘔くやうになつたのだが、ある人に、ただ白及末を米飮で日毎に服む方を傳授されて神效を擧げてゐる。お禮にお傳へ申す」といつた。後にその囚人はいよいよ八ツ裂の刑に行はれたが、刀を執つて五體を斷つた者が胸を剖いて見ると、肺全面に數十の竅穴があつて、それを白及が悉く塡補してあつた。色さへ變らなかつたといふ。この話を洪貫之が聞いてゐて、(一八)洋州へ赴任した際一人の從卒が突然喀血して甚だ危篤に陷つたとき、此の方を用ゐて救つてやつた。その病はただ一日で癒えたさうだ』といふ物語を載せてある。摘玄には『血を試み

(一六)秋金ノ冷氣ヲ受クルヲ指ス。
(一七)台州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。
(一八)洋州、後魏ノ洋州ハ今ノ陝西省西鄕縣ノ地、唐ノ洋州ハ今ノ陝西省洋縣ノ地ナリ。

（一九）黄豆ハ黄大豆。

るの法は、盌に水を盛つてそれに血を吐かせて見る。浮べば肺の血、沈めば肝の血、半ば浮き半ば沈めば心の血である。その血の出所を確め、羊肺、羊肝、羊血のそれぞれのものを煮熟して白及末をつけて日毎に食ふがよし』とある。

附方　舊一、新八。【鼻衄の止まらぬもの】唾液で白及末を調へて鼻柱の上に塗り、同時に末一錢を水で服すれば立に止まる。（經驗方）【心氣疼痛】白及、石榴皮各二錢を末にして煉蜜で（一九）黄豆大の丸にし、三丸づつを艾醋湯で服す。（生生編）【重舌鵞口】白及末を乳汁で調へて足の心に塗る。（聖惠方）【婦人の陰脫】白及、川烏頭等分を末にし、絹に一錢を裹んで陰中三寸のところへ納れる。腹の內が熱して直ちに止む。一日に一回用ゐる。（廣濟方）【疔瘡腫毒】白及末半錢を水に入れて澄し、水を取去つて厚紙に攤して貼る。（袖珍方）【打撲、跌躓の骨折】酒で白及末二錢を調へて服す。その功力は自然銅、古銖錢に劣らない。（永類方）【刀斧の傷損】白及、石膏を煆き、等分を末にして摻る。やはり瘡口を收合するものだ。（濟急方）【手足のあかぎれ】白及末を水で調へて塞ぐ、水に觸れぬやうにする。（濟急方）【湯火傷】白及末を油で調へて傅ける。（趙眞人方）

(一)三　七（綱　目）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

釋名　山漆（綱目）金不換　時珍曰く、彼の地の者は、葉が左に三枚、右に四枚あるから三七と名けるのだといふが、恐らくはさうではあるまい。或は本名は山漆といふので、そのものが能く金瘡を合することが漆の物を粘著するやうだといふ意味だともいふ。この説の方が首肯すべきに近い。金不換といふのは貴重なるものといふ名稱である。

集解　時珍曰く、(二)廣西、(三)南丹諸州の番峒の深山中に生じ、根を採つて暴乾する。黄黑色のかたまり付いたもので、形狀はほぼ白及に似て、長きものは舊い乾地黄のやうで節があり、味は微し甘く苦く、頗る人參の味に似てゐる。或は末を猪血の中へ摻つて見て、血が化して水となるものならば眞物だともいふ。近頃中國に傳はつた一種の草に、春苗が生えて夏三四尺の高さになり、葉は菊艾に似て勁く厚く、岐尖があり、莖には赤い稜角があり、夏、秋に黄色の花を開いて、蘂は金絲

(一)牧野云フ、今さんしちト稱シテ民間ニ栽エアルモノハきく科ノ(Gynura japonica, Makino. (G. pinnatifida, DC.) デ、集解ニ時珍ガ近傳一種草云々ト書イタモノハ即チ此品ヲ指シタモノデアル、此レハ固ヨリ眞正ノ三七デハナイ。

(二)廣西ハ今ノ廣西省ノ地ナリ。

(三)南丹ハ明ノ南丹土州、モトノ蠻地ナリ。今ノ廣西省慶遠府ノ地ナリ。

(四)苦蕒卷二十七苦菜下ニ見ユ。白井曰ク、下圖ハ今云フ三七ニ似タリ。

の盤紐のやうで可愛く、香氣はない。乾けば(四)苦蕒の絮のやうな絮を吐き、根、葉の味は甘く、金瘡、折傷の出血、及び上、下の血病を治するに甚だ有效なものがある。これを三七だのいふのだが、しかしこの草は根の太さが牛蒡の根ほどあつて南

〔三七〕

方から來るのとは類似してゐない。恐らくは劉寄奴の屬のものらしい。甚だ繁殖し易いものだ。

根 氣味【甘く微し苦く、溫にして毒なし】主治【血を止め、血を散じ。痛を鎭める。金屬の刃物、箭の傷、跌撲、杖瘡の出血の止まぬには、嚼み爛して塗り、或は末にして摻ればその血は直ちに止まる。また吐血、衄血、下血、血痢、崩中、經水不止、產後の惡血不下、血運、血痛、赤目、癰腫、虎咬、蛇傷の諸病にも主效がある】(時珍)

發明　時珍曰く、この藥は近頃始めて世に現はれたもので、南方番地の者は戰場で金瘡の要藥として用ゐ、奇效があるといふ。又、凡そ杖刑で撲たれた傷損の瘀血が淋漓と流れるには、その場で嚼み爛して罨へば直ちに止り、靑く腫れたものは直ちに消散する。杖刑を受ける前に豫め一二錢を服すれば血が衝心しない。杖を受けた後には必ず服ますべきものだ。産後に服しても好果を擧げるといふ。一體この藥は氣は溫であり、味は甘く微し苦いもので、陽明、厥陰の血分の藥なのだから、能く一切の血病を治することは騏驎竭、紫鉚と同樣である。

附方　新八。【吐血、衄血】山漆一錢を自ら嚼んで米湯で送下する。或は五分を八核湯に加へる。（瀕湖集簡方）【赤痢、血痢】三七三錢を研末して米泔水で調へて服すれば直ちに癒える。（同上）【大腸下血】三七を研末して一二錢を淡白酒で調へて服す。三服位で癒える。五分を四物湯に入れて用ゐるもよし。（同上）【婦人の血崩】方は上に同じ。【産後の多血】山漆を研末して一錢を米湯で服す。（同上）【男子、婦人の赤眼】十分重きものには、山漆根の磨汁を四圍に塗るが甚だ妙である。（同上）【無名癰腫】疼痛の止まぬには、山漆を磨つて米醋で調へて塗れば直ちに散ずる。

已に破れたものには、研末を乾して塗る。【虎、蛇の咬傷】山漆を研末して三錢を米飲で服し、同時に嚙んで塗る。(いづれも同上)

葉 主治 【折傷、跌撲の出血に傅ければ直ちに止まる。靑腫は一夜經過すれば散る。その他の功用は根と同樣である。】時珍)

本草綱目草部

第十三卷

本草綱目草部目錄第十三卷

草の二　山草類下三十九種

右附方　舊七十一　新二百十四

草の二　山草類下四十種

(一)黃連（本經上品）

和名　しなわうれん（新稱）
學名　Coptis chinensis, Franch.
科名　うまのあしがた科（毛茛科）

釋名　王連（本經）　支連（藥性）　時珍曰く、その根が珠を連ねたやうで色が黃だからかく名づけたのである。

集解　別錄に曰く、黃連は(二)巫陽の川谷、及び(三)蜀郡、太山の陽に生ずる。二月、八月に根を採る。弘景曰く、巫陽は(四)建平に在る。現在では西部諸地のものは色淺くして虛だ。(五)東陽、(六)新安諸縣の產の最も勝れたるには及ばない。臨海諸縣のものも佳くない。これを用ゐるには布で裹んで毛を揉み去り、連珠のやうにして用ゐる。

保昇曰く、苗は茶に似て叢生し、一莖に三葉を生じて高さ一尺ばかりになり、冬を凌いで凋まない。花は黃色である。(七)江左のものは節が高くて連珠のやうだが、(八)蜀都のものは節が低くて連珠になつてゐない。今は(九)秦地方、及び(一〇)杭州、

(一)牧野云フ、和產ノ黃連ニ數品ガアルガ、みつばわうれん、ごかえふわうれんノ二種ヲ除イタ外ノきくばわうれん、せりばわうれんナドノ品ハ、其葉形ハ種種アレドモ、實ハタダ一種ニ屬スルモノデアル、葉ノ分裂ニ疏密ガアレドモ其花ノ樣子ハ皆一樣デアル、學名ヲ Coptis japonica, Makino. ト稱スル。
(二)巫陽ハ巫山ノ陽ヲイフ。巫山ハ今ノ四川省巫山縣ニ在リ湖北省境ニ接スル所謂巫山十二峯ナリ。
(三)蜀郡ハ金石部玉類靑琅玕ノ註ヲ見ヨ。
(四)建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(五)東陽ハ石部禹餘

(一一)柳州のものが佳い。

○頌曰く、今は(一二)江湖、(一三)荊夔の州郡にもあるが、(一四)宣城に産する九節では堅く重く撃合せると音のするものが勝れてゐる。(一五)施、黔の産は次位にあり、東陽、(一六)歙州、(一七)處州のものは更にその次位にある。苗は高さ約一尺ほど、葉は甘菊に似て四月黄色の花を開き、六月實を結ぶ。實は芹子に似て色はやはり黄である。江左のものは、根が黄色の連珠になつてゐる。その苗は冬を經ても凋まず、葉は小さく雉尾草のやうで、正月淡白微黄色の細い穗になつた花を開く。六七月になれば根が緊つて始めて採收に適するやうになる。

○恭曰く、(一八)蜀道のものは粗く大きく、味は極めて濃苦で渇を療するに最上のものだ。江東のものは節が連珠のやうで痢を療するに大いに善し。(一九)澧州のものは更に勝れてゐる。

○○時珍曰く、黄連は、漢末の李當之の本草では、蜀郡産の黄色で肥えて堅いもののみが善いと指定してあり、唐時代には澧州産が勝れたものとなつてゐた。今では(二〇)吳、蜀いづれにもあるが、(二一)雅州、(二二)眉州の産を良しとする。薬物にも時代

糧ノ註ヲ見ヨ。

(六)新安ハ水部温湯ノ註ヲ見ヨ。

(七)江左ハ狗脊ノ註ヲ見ヨ。

(八)蜀都ハ蜀郡ノ訛カ。蜀郡ハ今ノ四川省ノ地ナリ。蜀部トイヘバ四川ノ省都成都附近一帶ノ地ヲイフカ。

(九)秦ハ金部鐵ノ註ヲ見ヨ。

(一〇)杭州ハ朮ノ註ヲ見ヨ。

(一一)柳州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

(一二)江湖ハ江西、湖南兩省ノ地ヲイフ。

(一三)荊夔ハ荊州、夔州。荊州ハ今ノ湖北省江陵縣ノ舊治ナリ。夔州ハ今ノ四川省奉節縣ソノ舊治ナリ。故ニ此ニハ湖北四川兩省ニ跨ル長江ノ北岸一帶ノ地ヲ指ス。

(一四)宣城ハ漢ニ縣ヲ置キ、後漢ニ廢ス。今ノ安徽省南陵縣ノ東四十支里ニ故城アリ。又、晉ニ宣城郡ヲ宛陵縣ニ置ク。隋ニ宛陵ヲ宣城トナス。今ノ安徽省宣城縣ソノ地也。

(一五)施黔ハ施州、黔州。皆唐ニ置ク。施州ハ今ノ湖北省施南府、民國ノ恩施縣ソノ舊治ナリ。故ニ此ニハ湖北省ノ長江以南、及ビ黔中ニ亙ル涪陵河ノ東北一帶ノ地ヲ指ス。

(一六)歙州ハ石部金星石ノ註ヲ見ヨ。

(一七)處州ハ土部白瓷器ノ註ヲ見ヨ。

(一八)蜀道卽チ蜀郡ノ地ナリ。

(一九)紹興圖ヲ按ズルニ澧州黄連ハ別屬ノ品ト見ユ。澧州ハ石

に依つてかやうに興廢があるのだ。大體黄連には二種あつて、一種は根が粗く、毛が無くて珠が有り、鷹や雞の爪の形のやうで堅く實し、色は深黄である。一種は珠が無くて毛が多く、中が虛で黄色が稍や淡い。それぞれに使用上の特長がある。

〔黄連〕

根【修治】斅曰く、凡そこれを用ゐるには、布で(二〇)肉毛を拭ひ去り、漿水に二伏時浸して漉出し、柳木火上で焙じ乾して用ゐる。

時珍曰く、五臟、六腑にはいづれも火があつて、その火が平なときは健康狀態であり、動くときは疾病となる。故に君火、相火の說があるのだが、その實は一氣の問題に歸するのだ。そこで黄連は手の少陰、心の經に入つて火を治するの主たる藥であつて、本臟、卽ち心臟の火を治すのには生で用ゐる。肝、膽の實火を治すのには豬膽汁に浸して炒る。肝、膽の虛火を治するには醋に浸して炒る。上焦の火を治

するには酒で炒る、中焦の火を治すのには薑汁で炒る。下焦の火を治すのには鹽水、或は朴硝で炒る 氣分の濕熱の火を治するには茱萸湯に浸して炒る。血分塊中の伏火を治するには乾漆(二四)水で炒る。食積の火を治するには黃土で炒るのである。これ等の諸法は獨り藥の力を引き導びくのみの目的ではない。蓋し辛、熱で能くその苦、寒を制し、鹹、寒で能くその燥性を制する作用をも加味されるのだ。これを用ゐる者に在つては、その應用の的正に就て精到な理解と斟酌を要する。

(二五)【氣味】【苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、微寒なり。普曰く、神農、岐伯、黃帝、雷公は苦し、毒なしといひ、李當之は小寒なりといふ。之才曰く、黃芩、龍骨、理石が使となる。菊花、玄參、白鮮皮、芫花、白殭蠶を惡み、款冬、牛膝を畏れ、烏頭に勝ち、巴豆の毒を解す。權曰く、豬肉を忌み、冷水を惡む。斅曰く。この藥を十兩まで服したならば豬肉を食つてはならぬ。若し繼續して三年服するならば一生食つてはならぬ。時珍曰く、道書に『黃連を服して豬肉の禁を犯せば泄瀉を發する』と言つてあるが、しかし方家には豬肚黃連丸豬臟黃連丸といふがある。肉だけは忌むが臟腑は忌まぬといふ道理があらうか。【主治】【熱氣の目痛で眥

部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。

(二〇)吳蜀、吳ハ浙江、江蘇等長江以南ヲ指ス。蜀ハ今ノ四川省ノ地ナリ。

(二一)雅州ハ水部甘露ノ註ヲ見ヨ。

(二二)眉州ハ狗脊ノ註ヲ見ヨ。

(二三)肉毛本草原始鬚毛ニ作ル。

(二四)本草蒙筌水ヲ米ニ作ル從フベシ。

(二五)木村(康)曰ク、本邦産黃連ノ主成分ハベルベリン七%其他パルマチン〇・四%及一種ノフェノール性鹽基コプチシンワウレニン等ノアルカロイドヲモ含有ス。文獻ハ村山義溫、篠崎好三―藥誌五三〇(大、二五)二九九。北里善次郎―Proc Impe Acad Japan

が傷み涙の出るには目を明かにする。(二六)腸澼、腹痛、下痢。婦人の陰中腫痛。久しく服すれば物を忘れざらしめる】(本經)【五臟の冷熱、久しく下る洩澼、(二七)膿血に主效があり、消渴、大驚を止め、水を除き、骨を利し、胃を調へ、腸を厚くし、膽を益し、口瘡を療ず】(別錄)【五勞、七傷に氣を益す。心腹痛、驚悸、煩燥を止め、心、肺を潤ほし、肉を長じ、血を止める。天行熱疾。盜汗を治し、並に瘡疥を治す、猪(二八)肚で蒸し丸にして小兒の疳氣を治し、蟲を殺す】(大明)【羸瘦、氣急】(藏器)

【鬱熱が中に在つて煩燥し、惡心し、絕えず衝き上げるやうで吐きけがあり、心下の痞滿するを治す】(元素)【心病の逆して盛なる(二九)心積伏梁に主效がある】(好古)【心竅の惡血を去り、服藥過量の煩悶、及び巴豆、輕粉の毒を解す】(時珍)

發明　元素曰く、黃連は性は寒、味は苦、氣、味共に厚くして升によく降によく、陰中の陽であつて手の少陰の經に入る。その應用に六種ある。心臟の火を瀉するが一、中焦の濕熱を去るが二、諸瘡に必ず用ゐるが三、(三〇)風濕を去るが四、暴かに發した赤眼に用ゐるが五、(三一)中部に血を見るを止るが六である。張仲景は九種の心下痞を治する五種の瀉心湯にいづれもこれを用ゐてある。

---

2 (1926) 124.
北里喜次郎—藥誌五四二(昭、二)三一五。
(二六)腸澼利シテ利セザルヲ云フ。
(二七)膿、大觀ニハ濃ニ作ル。
(二八)大觀ニハ肝ニ作ル。
(二九)心積伏梁、百病主治ニ見ユ。
(三〇)風濕ハ筋肉及關節リウマチス等ヲ云フ。
(三一)中部ハ胃腸。

成無已曰く、苦は心に入り、寒は熱に勝つもので、黄連、大黄の苦、寒はこれを用ゐれば心下の虚熱を導くものだ。蚘は甘を得れば動き、苦を得れば安まるもので、黄連、黄蘗の苦はこれを用ゐれば蚘を安めるものだ。

好古曰く、黄連は苦く燥くものだ。苦は心に入り、火は燥に就くものであつて、心を瀉するはその實は脾を瀉することになる。所謂實するときはその子を瀉すの意味である。

震亨曰く、黄連は中焦の濕熱を去つて心の火を瀉す。脾、胃が氣虚して機能が鈍り、營養配給の作用を完全にし得なくなつたものの場合には、伏苓、黄芩を黄連に代へ、猪膽汁を拌ぜて炒り、それに龍膽草を佐として用ゐれば大いに肝、膽の火を瀉すものである。下痢で胃、口が熱して禁口するには、黄連、人參の煎湯を終日呷ひ、吐くやうならば再び強ひて飲ませ、一口咽へ通ればそれで好果がある。

劉完素曰く、古方では黄連を痢を治する最上のものとしてある。蓋し痢を治するに適するものは、辛、苦、寒の藥のみで、辛はよく發散して鬱結を開通し、苦はよく濕を燥し、寒はよく熱に勝ち、氣の狀態を順調圓滑にするからである。諸種の苦、

寒の藥は多くは泄するが、黃連、黃蘗のみは性が冷であつて燥し、よく火を降し濕を去つて瀉痢を止める。故に痢を治するに君藥として用ゐるのだ。

○○宗奭曰く、今は一般に黃連を痢を治するに多く用ゐるが、蓋し黃連を苦、燥のものといふ考へだけで、無知な徒輩は腸虛で滲泄し、微し血便でもあるのを見れば直ちにこれを用ゐ、寒熱の多少には一向注意を拂はずに、ただ量を十分に服しさへすればよいもののやうに心得てゐる。ために却つて患者を弱らせて危篤に陷らす場合が多い。氣が實し、病の初期であり、熱多く、血痢する患者ならばこれを服すれば直ちに止るのだが、それとても必ずしも一定量までの劑を期し盡さねばならぬものではない。殊に患者が虛し、熱が無く、下痢する場合には非常に愼重な注意を要する、輕輕しく用うべきものではない。

○杲曰く、諸種の痛痒や瘡瘍は皆心の火に屬する。凡そ諸瘡には黃連、當歸を君とし、甘草、黃芩を佐として用ゐるがよい。凡そ眼に暴かに赤腫を發して忍び難く痛むには、黃連、當歸を酒に浸して煎じたものがよい。宿食の不消化で心下が痞滿するものには黃連、枳實を用ゐねばならぬ。

○頌曰く、黄連は目を治する方に多く用ゐるもので、就中羊肝丸は奇異なる奏效がある。現に醫家で洗眼藥として黄連、當歸、芍藥等分を雪水、或は（三二）甜水で煎じた湯を用ゐ、熱して洗ひ、冷えれば再び溫めて用ゐてゐるが、眼目に對して甚だ益するところがある。風毒の赤目、花翳ならば必ずこれを用ゐて神效を奏せぬといふことはない。蓋し眼目の病は皆血脈の凝滯から發るのである。故に血を行らす藥に黄連を合せて用ゐれば治癒するのであつて、血は熱を得れば行るものだから熱に乘じて洗ふのだ。

○○韓悉曰く、（三三）火分の病には黄連が主たるものである。ただ心火を瀉する點でだけで黄芩、黄蘗などの苦藥と同列に稱すやうなたぐひのものではない。近頃の實驗の例を擧ぐれば、目疾の患者に人乳で浸し蒸して或は點け、或は服す。生で君として用ゐ、官桂少量を使とし、煎じて百沸して蜜を入れて空心に服すればよく心、腎相互の機能をして極めて短時間に調和を得せしめる。（三四）五苓、滑石を入れれば大いに夢遺を治す。黄土、薑汁、酒、蜜の四品で炒つて君とし、使君子を臣とし、酒で煮た白芍藥を佐とし、（三五）廣木香を使とすれば小兒の五疳を治す。茱萸で炒つたも

（三二）甜水詳ナラズ、疑ラクハ甘泉ヲ指ス。甘泉ハ卽醴泉ナリ一說ニ甜ハ甛ノ訛。

（三三）火分ノ病ハ熱ノアル病。

（三四）五苓ハ五苓散ヲ指ス。

（三五）廣木香、學名 Inula racemosa, H.K. fil.

のに木香等分、生大黄を倍にして加へて水で丸にすれば(三六)五痢を治す。これ等はいづれも方劑調制の的正を得たものだ。

○○時珍曰く、黄連は目、及び痢を治する要藥であつて、古方に、痢を治する香連丸には黄連、木香を用ゐ、薑連散には乾薑、黄連を用ゐ、變通丸には黄連、茱萸を用ゐ、薑黄散には黄連、生薑を用ゐ、消渴を治するには酒で蒸した黄連を用ゐ、伏暑を治するには酒で煮た黄連を用ゐ、下血を治するには黄連、大蒜を用ゐ、肝火を治すのには黄連、茱萸を用ゐ、口瘡を治すのには黄連、細辛を用ゐてある。これはいづれも一冷一熱、一陰一陽、寒因熱用、熱因寒用、君臣相佐け、陰陽相濟ふの法則に合し、最も制方の妙を得たものだ。十分に效果を收め得て、而も偏勝の害を起さぬ所以である。

○○弘景曰く、一般醫方では黄連を痢、及び渴を治すのに多く用ゐるが、道方では長生のために服食する。

○○愼微曰く、劉宋の王微の黄連の讃には『黄連は味苦く、(三七)左右相因り、涼を斷ち暑を滌ひ、命を闡き身を輕くす。(三八)縉雲昔し(三九)御し、飛んで(四〇)上旻に躍り、行

(三六)五痢詳ナラズ。八痢ハ冷痢、熱痢、赤白痢、疳痢、驚痢、休息痢、蠱毒痢ヲ云フ。

(三七)左右相因リトハ條根叢生スル狀ヲ云フ。

(三八)縉雲ハ人名。

(三九)御飛トハ雲ニ乘ルコト。

(四〇)上旻トハ旻天ノコト旻天ハ秋天ヲ云フ又天ノ汎稱。

かずして至ると、吾共人に聞く』とある。又、梁の江淹の黄連の頌には『黄連は(四一)上草、丹砂の次なり。(四二)孽を禦ぎ妖を辟け、(四三)長靈久視す。龍を(四四)驂して天に行き、馬を馴して地を匝る。鴻飛んで以て(四五)儀あり、道に順ふて則ち利す』とある。

時珍曰く、本經にも別錄にも黃連は久服して長生するといふ說が無い。ただ陶弘景が『道家の方では久服して長生する』といひ、神仙傳に『封君達、黑穴公は共に黃連を服すること五十年にして仙人になつた』とあるだけだ。竊かに謂ふに、黃連は大苦、大寒の藥であつて、これを用ゐれば火を降し、濕を燥するものである。功力が病に的中すればそれで服用は止むべきものだ。これを久しく服して肅殺の令を常に行はしめ、生發冲和の氣を伐ふも差支ないといふわけがあらうか。素問には『岐伯言く、五味は胃に入つて各喜び攻むる所に歸し、久しきに亙れば氣を增す。これは物の働きの自然であつて、氣を增すことが更に久しきに亙れば(四六)夭死の原因となるものだ』と記載してあつて、王冰の註には『酸は肝に入つて溫となり、苦は心に入つて熱となり。辛は肺に入つて淸となり、鹹は腎に入つて寒となり、甘は脾に入つて至陰となる。而して四氣を兼ねるからいづれもその味を增し、隨つてその氣が

(四一)上草ハ上藥ニ同ジ。

(四二)孽ヲ禦ギ妖ヲ辟ケトハ邪惡ノ氣ヲ防グコト。

(四三)長靈久視トハ不老長生。

(四四)驂トハ車ヲ引カスルコト。

(四五)儀ハハネツクロフト訓ム。

(四六)夭ハ短折ノコト又災ナリトアリ。

(四七)偏勝ハ極度ニ増加シテ平均ヲ失フコト。
(四八)偏絶ハ極度ニ減ズルコト。
(四九)絶粒服餌ハ仙人ノ生活ヲ指スカ。

益す。故に各〻その歸する所の本臟の氣に從つて功用を發揮するのである。故に久しく黄連、苦參を服すれば反つて熱が出る。それは火化の勢ひに從ふものであつて、他の四味も皆同樣である。それが久しきに亙れば臟氣が(四七)偏勝し、隨つて(四八)偏絶すれば突然急死することがある。(四九)絶粒、服餌するものの急死せぬといふはその故であつて、それは五味の偏助がないからである』といつてある。秦觀が喬希聖に與へて黄連を論ずる書には『貴下は眼疾で黄連を十數兩服餌され、なほそれを繼續して居られるといふことだが、それは甚だ感心しない。醫經にも「久しく黄連、苦參を服すれば反つて熱する」といふ説がある。この物は大寒なるものには相違ないが、その味は至つて苦いものだ。胃に入れば先づ心に吸收される。それを久しく繼續されては心火が偏勝し、隨つて熱することは當然だ。況んや眼疾は肝熱に原因するもので、肝は心と子、母の關係にあるものだ。心の火は同時に肝の火でもあるわけで、水なる腎は臟として孤立するのだから、一の水が二の火に對抗し得ぬ狀態は健康上甚だ患ふべきことである。久しく苦藥を服してはますます心に偏勝を起させるわけだ。火を以て火を救はうと企てるものではあるまいか、それは良き結果を得べ

き道理があるまい』とある。秦公（觀）のこの書は蓋し王公（冰）の說を根據とし、更に詳細に推し進めたものである。我が明朝の荊端王は生來火病が多かつたので、侍醫は金花丸を進めてゐた。金花丸とは乃ち芩、連、梔、蘗の四味である。これを數年繼續して服用されたので、その火はいよいよ熾んになり、遂に內障を起して失明されたのであつた。これに據つて觀れば、寒、苦の藥はただ人をして長生せしめるものでないばかりか、久しく服すれば氣が增大して偏勝となり、夭死の禍を招く因である。これは素問の言を法則として據るべきであつて、陶氏の道書の說は全然謬妄の談である。

楊士瀛曰く、黃連は能く、心竅の惡血を去る。

【附方】　舊二十二、新五十。【心の經の實熱】瀉心湯——黃連七錢を水一盞半で一盞に煎じ、食事と時間を隔てて溫服する。小兒には量を減ずる。（和劑局方）【卒熱心痛】黃蓮八錢を㕮咀して水で煎じて熱服する。（外臺祕要）【肝火の痛み】黃連を薑汁で炒つて末にし、粥糊で梧子大の丸にして三十丸づつを白湯で服す。○左金丸——黃連六兩、茱萸一兩を共に炙つて末にし、神麴糊で梧子大の丸にして三四十丸づつ

を白湯で服す。（丹溪方）【伏暑の發熱】渇して嘔惡するもの、及び赤白痢、消渇、（五〇）腸風、酒毒、泄瀉の諸病には、いづれも酒煮黄龍丸を主として用ゐる。（五一）川黄連一斤を切つて好き酒二升半で煮乾かし、焙じ研つて糊で梧子大の丸にし、一日三回、五十丸づつを熟水で服す。（和劑局方）【陽毒發狂】走り狂ふて靜まらぬには、（五二）宣黄連、寒水石等分を末にし、三錢づつを濃く煎じた甘草湯で服す。（易簡方）【骨節の積熱】漸次に皮膚が黄色になつて瘦せるには、黄連四分を切つて童尿五大合に一夜浸し、微に煎じて四五回沸騰させ、滓を去つて二回に分服する。（廣利方）【小兒の疳熱】全身の皮膚に流注して瘡蝕し、或は潮熱し、肚が脹つて渇するには、猪肚黄連丸——猪肚一箇を洗淨し、中へ宣黄連五兩を切り碎いて水に和して納れ、縫合せて粳米五升の上へ置いて蒸し爛らし、石臼で千杵搗き、或は少量の飯を入れて共に杵いて綠豆大の丸にし、二十丸づつを米飲で服し、然る後に調血、清心の藥を佐として服す。蓋し小兒の病は疳に出ぬときは熱に出るものだから、常に心得て置くべきことである。（直指方）【（五三）三消骨蒸】黄連末を冬瓜の自然汁に一夜浸して晒し乾し、またその通りに七回繰返して末にし、冬瓜汁で和して梧子大の丸にし、三

（五〇）腸風ハ便血。
（五一）川黄連ハ四川産ノモノ。
（五二）宣黄連ハ宣城産ノモノ。
（五三）三消ハ消脾、消中、消腎チ云フ、飲食、色慾過度ナルモ意ニ滿タザルモノ。

四十丸づつを大麥湯で服す。普通の渴には只一服で奏效する。（易簡方）【消渴で尿多きもの】肘後方では、黃連末を蜜で梧子大の丸にし、三十丸づつを白湯で服す。○寶鑑では、黃連半斤、酒一升に浸して重湯の內で一伏時煮て取り出し、晒し末にして梧子大の丸にし、五十丸づつを溫水で服す。○崔氏の消渴で尿が滑し頻數となり、油のやうな尿を出すを治する方は、黃連五兩、栝樓根五兩を末にして生地黃汁で梧子大の丸にし、一日二回、牛乳で五十丸づつを服す。冷水、猪肉を忌む。○總錄では、黃連末を猪肚內に入れて蒸爛し、搗いて梧子大の丸にして飯飮で服す。【濕熱水病】黃連末を蜜で梧子大の丸にし、一日三四回、二丸乃至四五丸づつを飮で服す。（范汪方）【破傷風病】黃連五錢を酒二盞で七分に煎じ、黃蠟三錢を入れ溶化して熱服する。（高文虎蓼花洲閒錄）【小便の（五四）白淫】心、腎の氣の不足であつて、極端な戀想の過度から發るものである。黃連、白伏苓等分を末にして酒糊で梧子大の丸にし、一日三回、三十丸づつを補骨脂の煎湯で服す。（普濟方）【熱毒血痢】宣黃連一兩を水二升で半升に煮取り、一夜露して空腹に熱服し、少時安靜に横臥すれば一兩日で止む。（千金方）【久きに亙る赤痢】頻に治療を加へても痊えぬには、黃連一

（五四）白淫ハ精液白カラ漏出スル病。

(五五)閩トハ今ノ福建省ノ地ナリ。

(五六)穀滯痢ハ水穀痢ノ別名ナラン、食物ガ消化セズシテ下ルモノ。

(五七)休息痢ハ治シテマタ起ルモノ。

(五八)大觀ニ四分ニ作ル。

兩を雞子白で和して餅にし、紫色に炙つて末にし、漿水三升で緩火で膏に煎じ、半合づつを溫米飮で服す。ある方ではただ雞子白で和して丸にして服す。(勝金方)【熱毒赤痢】黄連二兩を切つて瓦で焙じ焦し、當歸一兩を焙じて共に末にし、麝香少量を入れて二錢づつを陳米飮で服す。佛智和尙が(五五)閩に居た頃、この方で一般病者を救療した。(本事方)【久きに亙る赤白痢】いづれも寒熱せずして只久い間止ぬには、黄連四十九箇、鹽梅七箇を新瓶に入れて烟が盡きるまで燒き熱して硏り、二錢づつを鹽米湯で服す。(楊子建護命方)【赤白暴痢】鵞鴨肝の如きを下して痛み忍び難きには、黄連、黄芩各一兩を水二升で一升に煎じ、三回に分けて熱服する。(經驗方)【冷熱諸痢】胡洽の九盞湯——下痢ならば冷熱、赤白、(五六)穀滯、(五七)休息、久下のいづれを問はず悉く主效がある。黄連を長さ三寸にして三十箇、重さ一兩半、龍骨を棊子大にして四箇、重さ(五八)一兩、大附子一箇、乾薑一兩半を用ゐ、膠一兩半を細に切り、銅器に水五合を入れて火から三寸離して煎沸し、一旦地上に取卸して沸を止め、また水五合を入れて前の如く煎じ、此の如く九回繰返してからその中へ前記の諸藥を入れて更にまた九回煎じ九回取卸して一升に煎じ、それを頓服すれば諸痢は直ち

に止まる。(圖經本草)【下痢腹痛】赤白下痢で下部が疼重するを重下と名ける。晝夜數十回下つて臍腹が絞痛するものである。黃連一斤、酒五升を一升半に煮て二回に分服すれば絞痛が止まる。(肘後方)【治痢香連丸】李絳兵部手集の赤白諸痢で裏急後重し腹痛するを治する方である。宣黃連、青木香等分を擣き篩つて白蜜で梧子大の丸にし、一日二回、二三十丸づつを空腹に飲で服すれば神效がある。久冷には煨蒜と擣き和して丸にする。大人、小兒に拘らずいづれも效がある。○易簡方では、黃連、茱萸を炒つて四兩、木香を麪で煨いて一兩を粟米飯で丸にする。○錢仲陽の香連丸――小兒の冷熱痢を治す。煨熟した訶子肉を加へる。○又、小兒の瀉痢を治するには、煨熟した肉豆蔻を加へる。○又、小兒の氣虛の瀉痢腹痛を治すには、白附子尖を加へる。○劉河間は、久痢を治するに龍骨を加へた。○朱丹溪は、禁口痢を治するに石蓮骨を加へた。王氏は痢、渴を治するに烏梅肉を加へ、阿膠に溶和して丸にした。

【(五九)五疳(六〇)八痢】四治黃連丸――連珠の黃連一斤を四分し、一分は酒に浸して炒り、一分は自然薑汁を用ゐて炒り、一分は吳茱萸湯に浸して炒り、一分は益智仁と共に炒つて益智を取去つて研末し、白芍藥を酒で煮て切り焙じて四兩、使君子仁

(五九)五疳ハ食疳、驚疳、風疳、氣疳、急疳。

(六〇)八痢ハ冷痢、熱痢、赤白痢、疳痢、驚痢、休息痢、膿痢、蠱毒痢。

を焙じて四兩、廣木香二兩と、共に末にして蒸餅で和して綠豆大の丸にし、一日三回、三十丸づつを食前に米飮で服す。猪肉、冷水を忌む。（韓氏醫通）【傷寒下痢】食事不能なるには、黃連一斤、烏梅二十箇を核を去つて炙き燥して共に末にし、蠟を碁子一箇ほどと蜜一升の合煎で和して梧子大の丸にし、一日三回、二十丸づつを服す。○又ある方では、黃連二兩、熟艾を鴨子一箇ほどの一團を水三升で一升に煮詰めて頓服すれば立ろに止まる。（いづれも肘後方）【氣痢後重】裏急し、或は下泄するには、杜壬方の薑連散――宣黃連一兩、乾薑半兩を各〻末にし、連二錢、薑半錢づつを和匀して空心に溫酒で服す。或は米飮で飮下すが神妙である。○濟生方の祕傳香連丸――黃連四兩、木香二兩、生薑四兩を用ゐ、先づ砂鍋の底へ薑を鋪いてその上へ連を鋪き、更にその上へ香を鋪いて新汲水三盌で煮て焙じ研り、醋で調へた倉米糊で丸にし、普通のものと同樣に一日五回づつ服す。【小兒の下痢】赤、白を多く下し、衰弱して體力の堪へぬには、宣黃連を水で濃煎して蜜を和し、日每に五六回服す。（子母祕錄）【諸痢脾泄】（六二）臟毒下血には、雅州の黃連半斤を毛を去り切り整へて肥猪の大腸中に入れ、括つて砂鍋へ入れて水、酒で煮爛し、その連を取出して焙じて研末し、

（六二）臟毒下血ハ便後ニ下血スルモノヲ云フ。

腸と搗き和して梧子大の丸にし、百丸づつを米湯で服すれば極めて效がある。(直指)【濕痢、腸風】百一選方の晝夜度なき赤、白下痢、及び腸風下血を治する變通丸——川黃連を毛を去り、吳茱萸を湯に漬けて各二兩を共に香しく炒り、各揀り別けて末にし、粟米飯に和して各別に梧子大の丸にし、三十丸づつを、赤痢には甘草湯で黃連の丸を服し、白痢には薑湯で茱萸の丸を服し、赤、白痢には各十五丸づつを米湯で服す。此れは浙西の河山純老の方である。多くの人命を救治して效を舉げたものだ。○局方の脾胃が濕を受けて下痢し腹痛し、米穀の不消化を治する戊巳丸——前記の二味に白芍藥を加へて共に炒つて研り、蒸餅で和して丸にして服す。【積熱下血】聚金丸——腸胃の積熱、或は酒毒に因する下血で腹痛し、渴して脈の弦數なるを治す。黃連四兩を四分し、一分は生で、一分は切つて炒り、一分は炮いて切り、一分は水に浸し晒して研末し、(六二)條黃芩一兩、防風一兩と共に末にして麪糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを米泔に枳殼を浸した水で食前に服す。冬季には酒で蒸した大黃一兩を加へる。(楊氏家藏方)【臟毒下血】黃連を末にして獨頭蒜を煨いて研り和ぜ、梧子大の丸にして空心に陳米飲で四十丸づつを服す。(濟生方)【酒痔の下血】黃

(六二)條黃芩ハ黃芩ノ集解ニ出ヅ。

(六三)脾積食泄ハ腸加多兒。
(六四)大蒜ハ一名葫、和名ニンニク。
(六五)大觀ニハ此上ニ小兒ノ二字アリ。
(六六)大觀ニハ量兒大小加減進トアリ。
(六七)重湯ハ湯煎裝置。

連を酒に浸し煮熟して末にし、酒糊で梧子大の丸にして三四十丸づつを白湯で服す。ある方では、自然薑汁に浸して焙じ炒る。(醫學集成)【雞冠痔疾】黄連末を傅ける。赤小豆末を加へるが尤もよし。(斗門方)【痔の祕結】これを用ゐれば腸を寛にする。黄連、枳殼等分を末にして糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に米飲で服す。(醫方大成)【痢痔脫肛】冷水で黄連末を調へて塗るがよし。(經驗良方)【(六三)脾積の食泄】川黄連二兩を末にし、(六四)大蒜と搗き和して梧子大の丸にし、五十丸づつを白湯で服す。(活人心統)【水泄、脾泄】神聖香黄散——宣連一兩、生薑四兩を共に緩火で炒り、薑が脆くなつた頃各揀り別けて末にし、水泄には薑末を、脾泄には連末を、それぞれ二錢づつ空心に白湯で服す。(六五)甚しきものも二服に過ぎずして治す。又痢疾を治す。(博濟方)【吐血の止まらぬもの】黄連一兩を搗いて散にし、一錢づつに水七分を入れ豉二十粒を入れて五分に煎じ、滓を去つて溫服する。(六六)大人、小兒皆治效がある。(簡要濟衆方)【眼の諸病】勝金黄連丸——宣連を多少に限らず搥き碎いて新汲水一大盌で六十日間浸し、綿で濾して汁を取り、その汁を前の盌に入れて(六七)重湯で手を休めず攪ぜながら熬り、連が盌內に乾き付くを俟ち、一尺深さの地坑

を掘つて瓦を底に鋪き、熟艾四兩を載せて火をつけ、その上へ連の乾き付いたまま盌を覆せて四邊を泥で封じ、孔を開けて烟を出し、烟の盡きたときその盌を取つて藥を刮り下し、それを小豆大の丸にして十丸づつを甜竹葉湯で服す。○劉禹錫傳信方の羊肝丸――男女の肝經の不足で風熱が上攻し、頭、目が昏暗し(六八)羞明するもの、及び障翳、靑盲を治す。黃連末一兩を用ゐ、羊子肝一頭分を膜を去り擂り爛して和して梧子大の丸にし、毎食後に暖漿水で十四丸を呑む。續けざまに五劑を服すれば瘥える。昔、崔承元が一死刑囚の命を助けてやつたことがあつて、その囚人も病死して後のことである。たまたま崔は一年餘に亙る內障を病んでゐたが、ある夜深更獨坐してゐると、緣先の切石の隅に蟋蟀が鳴いてゐる。聲をかけて見ると、『私は先年助けられた囚人です。御恩返しに來ました』といつて右の方を敎へ、そのまま何方へか消え失せた。崔はその藥を服して、數月ならずして舊の視力を囘復した。爾來世間へ傳はつたものだといふ。「俄に劇しき赤眼痛」宣黃連を剉んで雞子淸に浸し、一夜地下に置いて翌朝濾過し、雞の羽に蘸けて目の內へ滴らす。○又ある方では、苦竹を兩端に節を付けて切り、一方の節へ小孔を開けて黃連の片を內

(六八)羞明ハ疳眼タダレメ。

（六九）爛弦風眼ハタダレメ。
（七〇）文ハ錢ト同ジ。
（七一）大觀ニ濃汁漬綿乾拭日ニ作ル。
（七二）走馬疳ハ頰部塞壞疽俗ニハクサト云フ。
（七三）鼻䘌ハ疳病ノ一種赤鼻又疳鼻トモ云フ。

へ詰め、油紙で封じて一夜井中に浸し、翌朝その竹節中の水を飲み、またその水に片腦少量を加へて外部を洗ふ。○海上方では、黄連、冬青葉の煎湯で洗ふ。○選寄方では、黄連、乾薑、杏仁等分を末にし、綿に包んで湯に浸し、目を閉ぢて熱に乘じて淋し洗ふ。【小兒の赤眼】水で黄連末を調へて足の心に貼るが甚だ妙である。（全幼心鑑）【（六九）爛弦風眼】黄連十（七〇）文、槐花、輕粉少量を末にし、男兒を產んだ婦人の乳汁で和して飯の上で蒸し、帛に裹んで三四囘眼の上を熨すれば卽效がある。屢實驗を經たものだ。（仁存方）【目の俄かに痒痛するもの】黄連を乳汁に浸して頻りに眥中に點ける。抱朴子に日中の百病を治すとある。（外臺祕要）【淚の止まらぬもの】黄連を浸した（七一）濃汁に漬けて拭ふ。（肘後方）【牙痛惡熱】黄連末を摻れば立ろに止まる。（李樓奇方）【口舌の瘡】肘後では、黄連を酒で煎じて時時に含み呷ふ。○赴筵散——、黄連、乾薑等分を末にして摻る。【小兒の口疳】黄連、蘆薈等分を末にして五分づつを蜜湯で服す。（七二）走馬疳には、蟾灰等分、靑黛半量、麝香少量を入れる。（簡便方）【小兒の（七三）鼻䘌】鼻下兩道の赤きは疳あるためである。米汁で洗淨し、一日三四囘黄連末を傅ける。（張傑子母祕錄）【小兒の月蝕】耳の後に生じたるには黄連

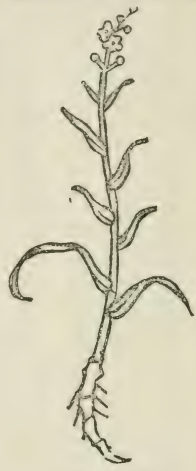
末を傳ける。(同上)【小兒の土を食ふもの】好き黄土に黄連汁をまぜて曬し乾し、それを與へて食はす。(姚和衆童子秘訣)【胎毒發生の豫防】初生兒を黄連の煎湯で浴すれば、瘡、及び丹毒を生ぜぬ。○又ある方では、産兒がまだ聲を出さぬ先に黄連の煎汁一匙を灌ぎ飲ます。終身斑を出さぬやうになる。已に聲を出してからでも灌ぎ飲ますれば斑を發しても輕い。これは祖傳の方である。(王海藏湯液本草)【腹中の兒哭】その母に常に黄連の濃煎汁を呷はす。(熊氏補遺)【驚に因する胎動】出血するには、一日三回、黄連末方寸匕づつを酒で服す。(子母秘錄)【妊娠子煩】口が乾いて臥寢し得ぬには、黄連末一錢づつを粥飲で服す。或は酒蒸黄連丸も妙である。(婦人良方)【癰疽腫毒】已潰、未潰いづれも用ゐる。黄連、檳榔等分を末にして雞子淸で調へて搽る。(王氏簡易方)【巴豆の中毒】下痢して止まぬには、黄連、乾薑等分を末にして水で方寸匕を服す。(肘後方)

(一)黄胡連(宋開寶)

和名　こわうれん
學名　Picrorhiza Kurroa Royl.
科名　ごまのはぐさ科(玄參科)

(一)牧野云フ、胡黄連ハ多年生ノ小草デ印度ヒマラヤ山中ニ産スル、其根ヲ西藏デハふーりんト稱スル、非常ニ苦キ味ヲ有スルモノデ土人ハ之レヲ解熱藥ニ用ツル、ソレカラ其レヲベンガルノ市場ヘTeeta(黄連ノ一種)ノ名デ賣リニ出ル、此草ハ高サ約五六寸許アルガ然シ葉ガ殆ンドナク長橢圓形ノ葉ガ太イ根ノ頭部カラ叢生シ全邊デハアルガ上部ニハ圓イ鋸齒ガアル花莖ハ葉ト凡ソ同長デ花ハ密ナ穗狀ヲナシ小形デ淡藍色ヲ呈シテ居ル、花冠ハ四裂シ四雄蘂ハソレヨリハズツト長ク花中カラ突キ出テ居ル。木村(康)曰ク、我邦

【釋名】割孤露澤　時珍曰く、その性、味、功用が黄連に似てゐるところから名けたのだ。割孤露澤は外國語である。

【集解】恭曰く、胡黄連は(二)波斯國に産する。海岸の陸地に生じ、苗は夏枯草のやう、根は頭が烏嘴のやうで折つて見ると(三)内が鸜鵒眼のやうなものが良し。八月上旬に採收する。頌曰く、今は南海、及び(四)秦隴地方にもある。生では蘆に似てゐるが乾けば楊柳の枯枝のやうで心が黒く外部は黄色だ。季節に拘はらず採收する。折ると煙のやうに塵の出るものならば眞物である。

〔胡黄連〕

根(五)【氣味】【苦し、平にして毒なし】恭曰く、大寒なり。菊花、玄參、白鮮皮を惡み、巴豆の毒を解し、豬肉を忌む。之を犯せば人をして漏精せしめる。

【主治】【肝、膽を補し、目を明かにし、骨蒸、勞熱、(六)三消、五種の心煩熱、

ニテハ朝鮮及滿洲ニ自生スルたつたさうヲ以テ、胡黄連ニ充ツル説アレドモ其據ル所ヲ知ラズ。

(二)波斯國ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(三)大觀ニ內ニ作ル。

(四)秦隴ハ戰國以來ノ秦ノ地、隴山山脈一帶ヲイフ。隴山ハソノ首峯今ノ陝西省ニアリ、西北ニ同省靜寧、鎭原、淸水諸縣ニ跨ル。秦州記ニ『隴山東西百八十里。登山巔東望。秦川四五百里。極目泯然』トアリ。

(五)木村(康)曰ク、成分ベクロレチン一五%カメノール九、三三%及ベルベリンニ類似セルアルカロイドヲ含有ス。文獻ハ

婦人の胎蒸、虚驚、冷熱洩痢、五痔を治し、腸、胃を厚くし、顏色を益す。人乳汁に浸して目に點けるが甚だ良し】(蘇恭)【久痢から疳となつたもの、小兒の驚癇、寒熱で食物の落付かぬもの、霍亂、下痢、傷寒、欬嗽、温瘧を治し、腰腎を整へ、陰(七)汁を去る】(開寶)【(八)果子積を去る】(震亨)

附方　舊二、新十三。【傷寒の勞復】身熱して大小便が血の如く赤きには、胡黄連一兩、山梔子二兩を殼を去り、蜜半兩を入れ拌ぜ和して炒り、微し焦がして末にし、豬膽汁に和して梧子大の丸にし、十丸づつを、生薑二片、烏梅一箇を童尿三合に半日浸し、滓を去つて暖めたもので呑み、就寢時に再服するが甚だ效がある。(蘇頌圖經本草)【小兒の潮熱】往來盜汗には、(九)南番の胡黄連、柴胡等分を末にして煉蜜で芡子大の丸にし、一丸乃至(一〇)五丸づつを器に入れて少量の酒で溶化し、更に水五分を入れて重湯で煮て二三沸し、滓と共に服す。(孫兆祕寶方)【小兒の疳熱】肚が張り、潮熱し、髮の焦枯するには、大黄、黄芩等の胃を傷める藥を用ゐてはならぬ。他の病證を惹起する虞がある。胡黄連五錢、靈脂一兩を末にして雄豬膽汁で和して綠豆大の丸にし、一二十丸づつを米飮で服す。(全幼心鑑)【(一一)肥熱疳疾】胡黄連丸―

朝比奈泰彥、前田仙太郎藥誌四三三(大七)一七一。

(六)三消ハ消中、腎消、脾消。

(七)大觀ニ汁ヲ汗ニ作ル之ヲ正トス。

(八)果子積ハ果子瘠ノ誤カ、果子瘠ハ楊梅瘠ノ一名。

(九)南番ハ土部烏爹泥ノ註ヲ見ヨ。

(一〇)大觀ニ三ニ作ル。

(一一)肥ハ脾ノ誤。

(二二)瓤ハナカゴ。

胡黄連、黄連各半兩、硃砂二錢半を末にして豬膽中に入れて括り、小さき竿に付けて砂鍋中に吊り下げ、漿水で一炊煮してしばらくして取出して研り爛らし、蘆薈、麝香各一分を入れて飯で和して麻子大の丸にし、五七乃至一二十丸づつを米飲で服す。(錢乙小兒直訣)【五心煩熱】胡黄連一錢を米飲で服す。(易簡方)【小兒の疳瀉】冷熱不調には、胡黄連半兩、綿黄一兩を炮いて末にし、半錢づつを甘草節湯で服す。(衛生總微論)【小兒の自汗】盜汗し、潮熱往來するには、胡黄連、柴胡等分を末にして蜜で芡子大の丸にし、一二丸づつを水に溶かして酒少量を入れ、重湯で煮て一二十沸して溫服する。(保幼大全)【小兒の黄疸】胡黄連、川黄連各一兩を末にして、黄瓜一箇を(二二)瓤を去つて蓋をし得るやうに切つて中に入れ、その蓋を合せ麪で裹んで煨熟し、麪を去つて搗いて菉豆大の丸にし、年齡、體格の大小に隨つて量を計り、溫水で服す。(總微論)【吐血、衄血】胡黄連、生地黄等分を末にして豬膽汁で梧子大の丸にし、就寢時に茅花湯で五十丸を服す。(普濟方)【血痢の止まらぬもの】胡黄連、烏梅肉、竈下土等分を末にして臘茶清で服す。(普濟方)【熱痢腹痛】胡黄連末を飯で梧子大の丸にし、三十丸づつを米湯で服す。(鮮于樞鉤玄)【嬰兒の赤目】胡黄連末を茶で調へて手、

足の心に塗れば直ちに癒える。（濟急仙方）【癰疽瘡腫】潰れたものにもまだ潰れぬものにも用ゐるがよし。胡黄連、穿山甲を燒いて性を存し、等分を末にして茶或は雞子清で調へて塗る。（簡易方）【痔瘡の疼腫】忍び難きには、胡黄連末を鵞膽汁で調へて搽る。（孫氏集效方）【怪病血餘】方は木部の茯苓の條を見よ。

黄芩（本經中品）

和名　こがねやなぎ
學名　Scutellaria baicalensis, Georgi.
科名　唇形科（唇形科）

釋名　**腐腸**（本經）　**空腸**（別錄）　**內虛**（別錄）　**妒婦**（吳普）　**經芩**（別錄）　**黄文**（別錄）　**印頭**（吳普）　**苦督郵**（記事）　內の實するものを**子芩**と名ける。（弘景）　**條芩**（綱目）　**㹠尾芩**（唐本）　**鼠尾芩**　弘景曰く、圓いものを子芩といひ、破れたものを宿芩といふ、その腹中が皆爛れてゐるところから腐腸と名けたのだ。時珍曰く、芩の字は說文には菳と書いてあつて、その意味は色の黄なることをいふのである。或は芩は黔であるといふが、黔ならば黄黑の色のことになる。宿芩とは舊根のことで、多くは中が空洞で外が黄に肉が黑い、今の所謂片芩のことである。故に

又、腐腸、妬婦などの名稱もある。妬婦は心が黯いといふところからそれに擬へたのだ。子芩とは新根のことで、多くは內が實してゐる。今の所謂條芩のことである。或は、(一)西芩は多く中が空洞で色黯く、北芩は多く內が實して深黃だともいふ。

〔黃芩〕

集解　別錄に曰く、黃芩は(二)秭歸の川谷、及び(三)寃句に生ずる。三月三日に根を採收して陰乾する。弘景曰く、秭歸は(四)建平郡に屬する。今は第一位のものは(五)彭城に產し、(六)鬱州にもある。色深くして堅く實したものを好しとする。一般醫方には役に立つが、道家には無用のものだ。恭曰く、今は(七)宜州、(八)鄜州、(九)涇州の產が佳い。(一〇)兗州の大いに實してゐるものもやはり好い。これは豘尾芩と名ける。

(一)牧野云フ、白井博士ノ考定スル所デハ西芩ハ Scutellaria viscidula, Bunge. デアルトノ事デアル。
(二)秭歸ハ漢ニ縣ヲ置ク、今ノ湖北省秭歸縣南ニ故城アリ。
(三)寃句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。
(四)建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(五)彭城ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。
(六)鬱州ハ鬱林州ノ誤カ。石部滑石鬱林郡ノ註參照。
(七)宜州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(八)鄜州ハ土部礬ノ註ヲ見ヨ。
(九)涇州ハ今ノ甘肅省涇川縣ノ地ナリ。
(一〇)兗州ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。

頌曰く、今は川蜀、河東、陝西地方の州郡にいづれもある。苗の長さは一尺餘、幹は粗く箸のやうだ。葉は地から直接に出て四面に叢生する。紫草の高さ一尺ほどのものに類似したもので、やはり獨莖のものもあり、葉は細長く靑く、兩兩相對して居る。六月紫の花を開く。根は知母のやうで粗く細く、長さ四五寸ある。二月、八月に根を採つて暴乾する。吳普本草には『二月赤黃色の葉が生えて二枚づつ四面に相對し、莖は高さ三四尺、中が空で四角なものも圓いものもあり、四月に紫、紅、赤色の花を開き、五月黑い實を結び、根は黃色のものだ。二月から九月までに採取する』とあつて、今いふ黃芩そのものとはやや相異がある。

根

〔二〕氣味　【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、大寒なり。普曰く、神農、桐君、雷公は苦し、毒なしといひ、李當之は小溫なりといふ。杲曰く、升るべく降るべく、陰である。好古曰く、氣は寒、味は微苦にして甘、陰中の微陽であつて手の太陰の血分に入る。元素曰く、氣は涼、味は苦甘、氣は厚く味は薄く、浮にして升る、陽中の陰であつて手の少陽、陽明の經に入る。酒で炒つて用ゐれば上行する。之才曰く、山茱萸、龍骨が使となる。葱實を惡み、丹砂、牡丹、藜蘆を畏れ、

〔二〕木村(康)曰ク、成分ハ二種ノフラボン誘導體ワウゴニン及バイカリンヲ含有ス。文獻ハ柴田桂太 Acta Phytochimica (1923) 105.

（一二）大觀ニハ牡蠣ノ上ニ牡蒙ノ二字アリ。

厚朴、黄連と配合すれば腹痛を止め、五味子、（一二）牡蠣と配合すれば人をして子を産ましめ、黄芪、白斂、赤小豆と配合すれば鼠瘻を療ず。時珍曰く、酒と配合すれば上行し、豬膽汁と配合すれば肝、膽の火を除き、柴胡と配合すれば寒熱を退け、芍藥と配合すれば下痢を治し、桑白皮と配合すれば肺火を瀉し、白朮と配合すれば胎を安かにする。

【主治】【諸熱、黄疸、腸澼、洩痢。水を逐ひ、血閉を下す。惡瘡、疽蝕、火傷】（本經）【痰熱、胃中の熱、小腹絞痛を療じ、穀物を消化し、小腸を利す。婦人の血閉、淋露、下血、小兒の腹痛】（別錄）【熱毒骨蒸、寒熱往來、腸胃不利を治し、癰氣を破り、五淋を治し、全體の生理狀態を順調にし、關節の煩悶を去り、熱渴を解す】（甄權）【氣を下し、天行熱疾、丁瘡に主效があり、膿を排し、乳癰、發背を治す】（大明）【心を涼し、肺中の濕熱を治し、肺火の上逆を瀉し、上熱、目中の腫赤、瘀血壅盛、上部積血を療じ、膀胱の寒水を補し、胎を安かにし、陰を養ひ、陽を退ける】（元素）【風熱、濕熱、頭痛、奔豚、熱痛、火欬、肺痿、喉腥、諸種の失血を治す】（時珍）

發明　杲曰く、黄芩の中が枯れて輕く浮くものは肺火を瀉し、氣を利し、痰を消し、風熱を除き、肌表の熱を淸くする。細かに實して堅いものは大腸の火を瀉し、陰を養ひ、陽を退け、膀胱の寒水を補してその化源を滋くする。上、下の分に反應する作用範圍は枳實、枳殼と同例である。

元素曰く、黄芩の應用に九種ある。肺熱を瀉するが一、上焦、皮膚の風熱、風濕に用ゐるが二、諸熱を去るが三、胸中の氣を利するが四、痰膈を消するが五、脾經の諸濕を除くが六、夏季に用ゐるが七、婦人の產後に陰を養ひ陽を退けるが八、胎を安かにするが九である。酒で炒れば上行するもので、主として上部の積血を除くにはこれ以外にない。下痢膿血、腹痛後重、身熱の久しく止まぬものには芍藥、甘草と共に用ゐる。あらゆる瘡痛の忍び難きものには芩、連の苦、寒の藥を用ゐるがよく、その病の上、下を詳にして、其用ゐる藥材の本體と末梢とを區別し、同時にそれに對する引經の藥としていづれを用うべきかを區別して用うべきものである。

震亨曰く、黄芩が痰を降すはその火を降す作用の反映であつて、凡そ上焦の濕熱を去るには酒で洗つて用ゐねばならぬ。片芩で肺火を瀉するには桑白皮を佐として

（一三）痲木ハシビレルコト。
（一四）五臭ハ五葷ヲ指スナラン道家ノ五葷ハ韭、蒜、芸薹、胡荽、薤ヲ云フ。

用ゐねばならぬ。肺虚の者に多く用ゐれば肺を傷めるものだから、必ず先づ天門冬で肺氣を安全にしてから後に用ゐるやうにせねばならぬ。黄芩、白朮は胎を安ずる聖藥なのだが、俗間では寒なるものといふところからこれを殊更に用ゐない。それは胎孕には熱を清くし血を涼じて血を妄行せぬやうにし、よく胎を養はねばならぬものだといふことを知らないのと。また黄芩は上、中二焦の藥として能く火を降して下行するもの、白朮は能く脾を補するものといふことを知らないからだ。

羅天益曰く、肺は氣を主るものであつて、熱が氣を傷ればために身體は（一三）痲木し、又、（一四）五臭が肺に入れば腥となるのであるが、黄芩は苦、寒なものだからよく火を瀉し氣を補ひ肺を利して喉中の腥臭を治す。

頌曰く、張仲景の傷寒、心下痞滿を治する瀉心湯には凡そ四種あるが、いづれも黄芩を用ゐてあるのは、諸熱に主效があつて小腸を利するものだからである。又、太陽の病に下劑を施してその痢が止まず、喘して汗の出るものに葛根黄芩黄連湯があり、また妊娠を主とする安胎散といふもあつて、やはり多くこれを用ゐてある。

時珍曰く、潔古張氏は『黄芩は肺火を瀉し脾濕を治す』といひ、東垣李氏は『片

芩は肺火を治し、條芩は大腸の火を治す』といひ、丹溪朱氏は『黄芩は上、中二焦の火を治す』といつてあるが、張仲景の少陽の證を治する小柴胡湯、太陽、少陽の合併症の下利に用ゐる黄芩湯、少陽の證で下つて後心下の滿して痛まぬに用ゐる半夏瀉心湯にはいづれもこれを用ゐてあつて、成無己は『黄芩は苦くして心に入り痞熱を泄す』といふ。かやうな次第であれば、黄芩は能く手の少陰、陽明、手、足の大陰、少陽（一五）六經に入るものだ。蓋し黄芩は氣は寒、味は苦、色は黄に綠を帶びるもので、その苦が心に入り、その寒が熱に勝つて心火を瀉し、脾の濕熱を治するのだ。一面には金がそのために（一六）刑を受けることなく、一面には胃火が脾に流入せぬ。そこで間接に肺が救はれる結果となるのである。肺虛に不適當だといふわけは、苦、寒は脾、胃を傷める、つまりその母を損することになるからだ。

少陽の證なるものは、寒熱して胸脇が痞滿し、默默として食慾なく、心煩して嘔し、或は渴し、或は否し、或は小便不利となるものだ。病は半ば表、半ば裏に在るとはいひ、その胸脇の痞滿するは、事實上心、肺、上焦の邪が作つてゐるからだ。心煩して嘔氣を催し、默默として食慾なきは、これ又、脾、胃、中焦の證を作つて

（一五）原本六ノ字ハ之ノ字ノ訛カ。六經トスレバ太陽、厥陰ノ二經ヲ缺ク。
（一六）刑ヲ受クルトハ不利ノ作用ヲ受クル意。

（一七）標本ノ解ハ序例下ノ處ニアリ。

ゐるからだ。故に黄芩を用ゐるは、それに因つて手、足の少陽の相火を治するのであつて、やはり黄芩は少陽本經の藥なのだ。成無己は傷寒論に注して、ただ『柴胡、黄芩の苦は以て傳邪の熱を發し、芍藥、黄金の苦は以て腸、胃の氣を堅斂す』といつただけで、火を治するの妙に對する研究は存外徹底してゐなかつた。楊士瀛は直指方に『柴胡は熱を退ける點で黄芩に及ばぬ』といつてあるが、やはりこれも柴胡の熱を退けるは、苦の發する作用が火の（一七）標を散するに在り、黄芩の熱を退けるは、寒がよく熱に勝つて火の本を折くに在る相違點を看過してゐる。

仲景は又『少陽の證で腹中の痛むものには黄芩を去つて芍藥を加へ、心下が悸して小便不利のものには黄芩を去つて伏苓を加へる』といひ、別錄に『小腹絞痛を治し、小腸を利す』とある記述と矛盾するところがあるやうに見える。これを成氏は『黄芩は寒にして苦く、よく腎を堅くするものだから去るのだ』と說明してあるが、やはりこれもさうではない。かやうなる關係に至つては、部分的なる現れに囚れず、專ら全體の經過、結果に著眼すべきもので、脈證に據る診斷が最も妥當を得るものだ。玆に、寒なるものを飮み、その寒を受けて腹中が痛むとか、水を飮んで心下が

悸し、小便が利せず、而して脈が數ならざるものがありとすれば、それに裏に熱證がないならばそれは黄芩は用うべきものでない。しかし、(一八)熱厥で腹痛し、肺熱し、小便不利なるものがありとすれば、それは何としても黄芩を用ゐぬわけに行かないのである。かやうな次第だから、書を觀るものはその意義を捉へることが大切だ。徒に記述の文字のみに拘泥すべきものではない。ある患者は、平素非常に酒を飲む者で、小腹の絞痛忍び難く、小便が淋のやうになり、あらゆる藥も效がなかったが、たまたま黄芩、木通、甘草三味を煎じ服して遂に止んだといふ例もある。王海藏は『ある患者は、虛したところから附子の藥を多く服し、ために小便閟を病んだが、芩、連の藥を服してそれで癒えた』といふ。これ等の例は、いづれも熱厥の痛である。醫學に從ふものは決して單なる一途に拘泥してはならぬものだ。

予が二十歳の時、感冒が原因で久しい間欬嗽が續き、それに禁を犯したために遂に骨蒸發熱を病んで皮膚は燒くやうに熱し、毎に盌に一箇ほどの痰を吐き、暑季には煩渴し、食事も安眠も共に不能で、(一九)六脈は浮洪となった。柴胡、麥門冬、荊瀝などあらゆる藥を服したが、病は一个月餘にしてますます劇くなり、何人も最

(一八)熱厥ハ手足冷ルト雖モ指甲却テ煖カナルモノ。

(一九)六脈ハ心脈、肝脈、脾脈、肺脈、腎脈、命門ヲ云フ。

(二〇)巴郡ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

(二一)大觀ニ三ヲ二ニ作ル。

早絶望と信じてゐた。その時予の父が、たまたま李東垣の說に『肺熱で燒くやうに熱して煩躁し、引飲し、特にその熱が晝間に於て盛なるは氣分の熱である。これを治するには一味黃芩湯を用ゐて肺經の氣分の火を瀉するがよい』とあるのに氣が付き、それから方を調べて、片芩一兩を水二鍾で一鍾に煎じて頓服した。すると翌日は身熱が盡く退いて、痰嗽もすつかり癒えたのであつた。藥が肯綮に中ること太鼓の撥に應ずるやうで、醫術の妙を發揮し得た事實として誠に珍しいことであつた。

附方　舊三、新十四。

【三黃丸】孫思邈の千金方に『(二〇)巴郡の太守から朝廷に奏した加減三黃丸は、男子の五勞、七傷、消渴で肌肉の生ぜざるもの、婦人の帶下、手、足の寒熱を療じ、五臟の火を瀉す。その方は、春季三个月は、黃芩四兩、大黃三兩、黃連四兩、夏季三个月は、黃芩六兩、大黃一兩、黃連七兩。秋季三个月は、黃芩六兩、大黃(二一)三兩、黃連三兩。冬季三个月は、黃芩三兩、大黃五兩、黃連二兩。右の三物をそれぞれ時季に隨つて合せ、擣き篩つて蜜で烏豆大の丸にし、一日三回、米飲で五丸づつを服す。反應のない時は七丸まで增して、一个月繼續すれば病が癒える。久しく服すれば奔馬にも追ひ付くほど强健になる。一般にも用ゐて效

(二二)眉眶ハマブタ。

驗を擧げてゐる。猪肉を食ふことを禁ずる』とある。(圖經本草)【三補丸】上焦の積熱を治し、五臟の火を瀉す。黄芩、黄連、黄蘗等分を末にして蒸餅で梧子大の丸にし、二三十丸づつを白湯で服す。(丹溪纂要)【肺中に火あるもの】淸金丸――片芩を炒つて末にして水で梧子大の丸にし、二三十丸づつを白湯で服す。(同上)【膚熱の燎くが如きもの】方は發明の項を見よ。【小兒の驚啼】黄芩、人參等分を末にして一字づつを水で服す。(普濟方)【肝熱で翳を生ずるもの】大人、小兒に拘らず、黄芩一兩、淡豉三兩を末にし、一日二回、三錢づつを熟猪肝に包んで食ひ、溫湯で送下する。酒、麪を忌む。(衞生家寶方)【少陽の頭痛】また偏、正に拘はらず、太陽の頭痛を治す。小淸空膏――片黄芩に酒を浸透して晒し乾して末にし、一錢づつを茶、酒の任意のもので服す。(東垣蘭室祕藏)【(二二)眉眶の痛み】風熱で痰あるには、黄芩を酒に浸し、白芷と等分を末にして二錢づつを茶で服す。(潔古家珍)【吐血、衄血】出たり止んだりするは積熱のためである。黄芩一兩を中心の黒く朽ちた部分を去つて末にし、三錢づつを水一盞で六分に煎じ、滓のまま溫服する。(聖惠方)【吐血、衄血、下血】黄芩三兩を水三升で一升半に煎じて一盞づつを服す。また婦人の漏下血をも治

す。(龐安常卒病論)【血淋熱痛】黄芩一兩を水で煎じて熱服する。(千金方)【經水不斷】芩心丸——婦人は四十九歳以後は月經の止むが當然だが、なは却つて繼續し、或は過多で止まぬものを治す。條芩の心二兩を七日間米醋に浸して炙り乾かし、また七日間浸してまた炙乾かすこと七回繰返して末にし、醋糊で梧子大の丸にし、一日二回、七十丸づつを空心に溫酒で服す。(瑞竹堂方)【崩中下血】黄芩を細末にして一錢づつを霹靂酒で服す。霹靂酒とは、秤錘を赤く焼いて淬したものである。許學士は『崩中には多く血を止めまた血を補ふ藥を用ゐるので、この方は、陽が陰に乘じて所謂天暑地熱し、經水が沸溢するものを治するのだ』といつてある。(本事方)【安胎、淸熱】條芩、白朮等分を炒り、末にして米飲で和して梧子大の丸にし、五十丸づつを白湯で服す。或は神麴を加へる。凡そ妊婦の健康を調整するには、(三)四物から地黄を去つて白朮、黄芩を加へ、末にして常に服すが甚だ良い。(丹溪纂要)【産後の血渴】水を飲んでやまぬには、黄芩、麥門冬等分を水で煎じて時に拘はらず溫服する。(楊氏家藏方)【炙瘡の出血】ある患者は、五壯まで炙すると出血が尿のやうに出て止まらず、手足が冷えて絕命せんとする狀態に陷つたが、酒で炒つた黄芩二錢を末

(三)四物ハ當歸、川芎、地黄、芍藥ヲ云フ。

にして酒で服すると止つた。(李樓怪證奇方)【老人、小兒の(二四)火丹】黃芩末を水で調へて塗る。(梅師)

子

主治　【(二五)腸澼膿血】(別錄)

(一)秦　艽　艽の音は交(ケウ)である。(本經中品)

和名　しんげう
學名　Gentiana tibetica, King.
科名　りんだう科(龍膽科)

釋名　秦糺(唐本)　秦瓜(蕭炳)　恭曰く、秦艽は俗に秦膠と書く。もとは秦糺といつたもので、糺は糾と同字である。時珍曰く、秦艽は秦地方から出るもので、その根は羅紋の交糾したものを良品とするところから秦艽、秦糺と名けたのだ。

集解　別錄に曰く、(二)秦艽は(三)飛烏の山谷に生ずる。二月、八月に根を採つて暴乾する。弘景曰く、今は(四)邯鄲、(五)龍洞、(六)蠶陵から出る。根に羅紋があつて交錯し、長大で黃白色のものを佳しとする。中に多くは土が入つてゐるものだから用ゐるときには破つてその土を取去らねばならぬ。恭曰く、今は(七)涇州、鄜州、(八)岐州に產するものが良い。

(二四)火丹、大觀ニ水丹ニ作ル、水丹ハ丹毒ノ一種兩脇ヨリ虛腫スモノヲ云フ。
(二五)腸澼ハ痢病ノ一名。
(一)牧野云フ、秦艽ヲ昔はかりぐさ或ハつかりぐさト稱シタノハ如何ナル譯ニ基キシカ、朝鮮カラノれいじんさうノ一種(Aconitum 屬ノ一種)ハ私ハ眞ノ秦艽デハナイト思フ。又Justicia Gendarussa, L.(きつねのまご科)モ無論秦艽デハアルマイ。木村(康)曰ク、今日ノ支那市場品ハGentiana 類ノ根ノ構造ヲ有ス滿鮮市場ノモノハ烏頭屬ノ根ナリト云フ。
(二)秦ハ金部鐵ノ註

頌曰く、今は(九)河陝の州郡に多くある。その根は土黄色で相交糾し、長さは一尺位で粗細一定せぬ。枝、幹の高さは五六寸で葉は婆娑として莖梗に連なり、みな青くして苣蒿の葉のやうだ。六月中に葛の花のやうな紫の花を開き、その月の内に子を結ぶ。每春、秋に根を採つて陰乾する。

〔秦艽〕

根　【修治】　斅曰く、秦艽は、脚文の處に左文の列なるを認むるものが病を治するに用ゐられて秦といふ。右文の列るものは艽といひ、これは服すれば脚氣を發するものである。凡そ秦を用ゐるには布で黄白の毛を拭ひ去つてから(一〇)還元湯に一夜浸して日光で乾かして用ゐる。時珍曰く、秦艽はただ左文のものだけを良しとするものだ。秦と艽との二名に分つは謬である。

【氣味】　【苦し、平にして毒なし】　別錄に曰く、辛し、微溫なり。大明曰く、

ヲ見ヨ。

(三)飛鳥之山、未考。山海經西山經ニ罷父之山アリ、音ヤヤ近シ。罷父之山ハ畢沅ノ考證ニ據レバ今ノ陝西ノ安定、安塞二縣ノ界ニ在リトイヒ、玉篇ノ『耳出罷谷山』ノ文ヲ引イテ父谷字形近シトイフ。罷谷トセバ音甚ダ近カラズ。ナホ考フベシ。

(四)邯鄲ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。

(五)龍洞、未詳。或ハ龍淵ノ訛ニハ非ズヤト思ハル。龍淵ハ北魏ノ雁門郡ノ地、桑乾河ト滹沱河ノ中間、今ノ山西省代縣ト雁門關トノ中間ニ在リトイフ。

(六)蠶陵ハ石部鹵石類消石ノ註ヲ見ヨ。

(七)涇州ハ黄芩ノ註

苦し、冷なり。元素曰く、氣は微溫、味は苦、辛。陰中の微陽であつて升によく降によく、手の陽明の經に入る。之才曰く、菖蒲が使となる。牛乳を畏る。

【主治】【寒熱邪氣、寒濕風痺、肢節の痛み。水を下し、小便を利す】(本經)【風には新久を問はず通身攣急するを療ず】(別錄)【傳尸骨蒸、疳、及び時氣を治す】(大明)【牛乳に點てて服すれば大小便を利す。酒黃、黃疸を療じ、酒毒を解し、頭風を去る】(甄權)【陽明の風濕、及び手足の不遂、口噤、牙痛、口瘡、腸風瀉血を除き、血を養ひ、筋を榮にする】(元素)【熱を泄し、膽氣を益す】(好古)【胃熱、虛勞の發熱を治す】(時珍)

【發明】時珍曰く、秦艽は手、足の陽明の經の藥であつて、兼て肝、膽に入る。故に手、足不遂、黃疸、煩渴の病に用ゐるのは陽明の濕熱を去るが主たる目的である。陽明に濕があれば身體が酸疼し煩熱し、熱があれば日哺に潮熱し骨蒸するものだ。聖惠方の、急勞の熱、身體酸疼を治するに、秦艽、柴胡各一兩、甘草五錢を末にして三錢づつを白湯で調へて服し、小兒の骨蒸潮熱、食減、瘦弱を治するに、秦艽、炙甘草各一兩を用ゐ、一二錢づつを水で煎じて服ませる意味はそこに在る。

ヲ見ヨ。鄜州ハ土部墨ノ註ヲ見ヨ。
(八)岐州ハ後魏ニ置ク、岐山ニ因ツテ名ケタルモノナリ。唐ニ鳳翔府ニ改ム、今ノ陝西省鳳翔縣ノ地ナリ。
(九)河陝ハ山西、陝西兩省地方ヲ指ス。
(一〇)還元湯ハ人尿ノ一名。

錢乙の方では薄荷葉五錢を加へる。

附方　舊三、新六。【五種の黃疸】崔元亮の海上方に『凡そ黃には數種あつて、酒で傷めて黃を發するものを（一一）酒黃といひ、誤つて鼠糞を食つても黃を發し、勞が原因でも黃を發する、痰涕が多く出て目に赤脈があり、ますます憔悴するもの、或は顏が赤く惡心するもの等である。秦艽一大兩を剉んで二（一二）帖にし、一帖每に酒半升に浸し、絞つた汁を取つて空服に服す。或は利して黃が止む。就中飮酒家の發黃が治し易いもので、屢〻效驗を擧げてゐる』とある。○貞元廣利方では、黃病で內外悉く黃になり、小便赤く、心煩し、口乾くものを治す。秦艽（一三）三兩こ牛乳一大升を七合に煮て二回に溫服する。この方は許仁則から傳はつたものだ。又、孫眞人の方では芒消六錢を加へる。【暴瀉、引飮】秦艽二兩、甘草を炙つて半兩を三錢づつ水で煎じて服す。（聖惠方）【傷寒の煩渴】心神躁熱するには、秦艽一兩、牛乳一大盞を六分に煎じて二回に分服する。（太平聖惠方）【急勞の煩熱】方は發明の項を見よ。【小兒の骨蒸】（同上）【排尿困難】或は（一四）轉胞で腹が滿悶するものは急に治療せねば死亡する。秦艽一兩。水一盞を（一五）六分に煎じて二回に分服する。○又ある方で

（一一）大觀ニヨリ補入ス。
（一二）大觀ニ帖ヲ貼ニ作ル。
（一三）三兩、大觀ニ十二分ニ作ル。
（一四）轉胞ハ產後小便閉。
（一五）大觀ニハ七ニ作ル。

は、冬葵子等分を加へて末にし、酒で一匕を服す。(聖惠方)【胎動不安】秦艽、甘草を炙り、鹿角膠を炒り、各半兩を末にして三錢づつを水一大盞糯米五十粒を煎じた湯で服す。○又ある方では、秦艽、阿膠、炒艾葉等分を上記の煎湯で服す。(聖惠方)

【發背の初期】疑似のものには、秦艽、(一六)牛乳を煎じて服す。三五回快よく便通があつて直ちに癒える。(崔元亮海上集驗方)【瘡口の合はぬもの】秦艽を末にして摻れば一切みな治す。(直指方)

(一)茈胡(本經上品)

和名　さいこ、みしまさいこ
學名　Bupleurum falcatum. L.
科名　繖形科(繖形科)

釋名　地薫(本經)　芸蒿(別錄)　山菜(吳普)　茹草(吳普)　恭曰く、茈は古の紫の字で、上林賦には茈薑といひ、爾雅には茈草といひ、いづれも此の茈の字に書いてある。これはこの草の根が紫色だからで、今の太常で用ゐる茈胡がそれである。又、その紫の字の糸を木に書き代へて柴胡と呼び慣はしてゐる。諸本草を調べたところでは茈と名けたものはない。時珍曰く、茈の字には柴(サイ)と紫(シ)との

(一六)牛乳、大觀ニハ牛膝ニ作ル。

(一)木村(康)曰ク、ほそばみしまさいこモ亦市場ニ藥品トシテ販賣スルヲ見ル。

二音があるので、茈薑、茈草の茈の字の音は紫、茈胡の茈の字の音は柴である。茈胡は山中に生ずるもので、嫩いときは茹でて食へ、老ゆれば採つて柴にする。故に苗には芸蒿、山菜、茹草などの名稱があり、根には柴胡の名があるのだ。蘇恭の說は甚だ古本草に就いての明を缺くものだ。古本の張仲景傷寒論にはやはり茈の字が書いてある。

集解 別錄に曰く、茈胡は葉を芸蒿といふ。辛く香しくして食し得るものである。(二)弘農の川谷、及び(三)寃句に生ずる。二月、八月に根を採つて暴乾する。弘景曰く、今は近道にも產する。形狀は前胡のやうでこはいものだ。博物志には『芸蒿は葉が邪蒿に似て春、秋に(四)白蒻が出る。長さ四五寸、香氣が美く、食し得るものだ。(五)長安、及び(六)河內のいづれにもある』とある。

〔韭葉柴胡〕

(二)弘農ハ石部白青ノ註ヲ見ヨ。
(三)寃句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。
(四)白蒻ハ新芽。
(五)長安ハ水部溫湯ノ註ヲ見ヨ。
(六)河內ハ石部鹵石類綠礬ノ註ヲ見ヨ。淫羊藿ノ關中ノ註參照。

○恭曰く、傷寒の大、小柴胡湯は痰氣に對して切要なものだ。若しこれに芸蒿の根を用ゐては大なる謬だ。

○頌曰く、今は(七)關陝、(八)江湖の地方、竝にその近接地にはいづれもあるが、(九)銀州の產が勝れてゐる。二月苗が生えて甚だ香しく、莖は青紫色で堅く硬く、微かに細線がある。葉は竹葉に似て稍しまつて小い。また斜蒿に似たものもあり、麥門冬の葉に似て短いものもあり、七月に黃色の花を開く。根は淡赤色で前胡に似てゐるが強い。(一〇)丹州に生ずるものは青い子を結び、他の土地のものと類が異ひ、根は蘆に似て頭に赤毛があり、形が鼠の尾のやうだ。(一一)獨窠で長いものが好い。

○○雷斅曰く、茈葫の產地を平州平縣といふは今の銀州(一二)銀縣のことであつて、その西部の茈胡の生える處は上空に多くの白鶴、綠鶴が飛翔してゐる。これは茈胡の香が直ちに雲間に昇騰するらしい。途を誤つてその近傍を通過すると必ずその香を聞き、氣力の爽かなるを覺える。

○承曰く、柴胡は(一三)銀、夏の產が最も良く、根は鼠尾のやうで長さ一二尺あり、香味が甚だ佳い。今圖經所載のものは一般にはその眞物が識られてゐない。商人は

(七)關陝トハ關中陝西、卽チ今ノ陝西省一帶ノ地ヲ指ス。
(八)江湖ハ江西、湖南地方ヲ指ス。
(九)銀州ハ今ノ陝西省米脂縣ノ西ニ在リ。人參ノ註ヲ見ヨ。又、下文時珍ノ說ニ詳ナリ。
(一〇)丹州ハ今ノ陝西省宜川縣ノ地ナリ。
(一一)獨窠ハ叢生セザルヲイフ。
(一二)銀縣ハ今ノ陝西省米脂縣ノ北、今ノ神木縣ノ南、銀城ノ地ヲ指スナルベシ。
(一三)銀夏トハ銀州、及ビ當時ノ夏州、卽チ長城以北哈柳圖河西岸今ノオルトス右翼前旗ノ地方ヲ指ス。

(一四)同州、(一五)華州のものをこれに代へてゐるが、やはりその他の土地の產には勝つてゐる。蓋し銀、夏地方の地質は沙が多く、同、華地方もやはり沙原にこれが生えるのだ。

〔竹葉柴胡〕

機曰く、解し散ずるには北柴胡を用ゐ、虛熱には(一六)海陽の軟柴胡を用ゐるが良い。

時珍曰く、銀州とは即ち今の(一七)延安府治下の(一八)神木縣、(一九)五原城の地がその廢州の管轄區域である。その地に產する柴胡は長さ一尺餘あつて微し白く且つ軟い。得易からぬものである。北地にも產するもやはり前胡のやうで軟かい。今一般に北柴胡と稱するものがそれで、藥用としてやはり良いものだ。南方地方に產するものは前胡には似てゐない。正に蒿根のやうで堅くこはく、藥用としては役に立たぬ。その苗には韮葉の如きものと竹葉の如きものとあるが、竹葉の如きものが勝れてゐる。邪蒿のやうなものは最下のものだ。

(一四)同州ハ石部鹵石類凝水石ノ註ヲ見ヨ。
(一五)華州ハ石部花乳石ノ註ヲ見ヨ。
(一六)海陽ハ今ノ廣東省潮州府治、今ノ潮安縣ノ地ナリ。
(一七)延安府ハ今ノ陝西省膚施縣ソノ舊治ナリ。
(一八)神木縣ハ今ノ陝西省ノ北境、黃河支流屈野河ニ臨ミ長城ニ接ス。
(一九)五原城ハ今ノ陝西省靖邊縣ノ南方白於山麓ノ地ナリ。石部鹵石類光明鹽ノ註參照。

按ずるに、夏小正月令に『仲春に芸が始めて生ずる』とあり、倉頡解詁には『芸は蒿である。邪蒿に似たものだ。食し得る』とあるが、やはり柴胡の種類のもので、藥用には甚だ良くない。故に蘇恭は柴胡に非ずと否定したのだ。近頃はまた根の桔梗、沙參に似て白色で太い一種類があつて、商人はそれを銀柴胡と僞つて賣つてゐるが、一向に氣味のないものだ。辨別に注意を要する。

根【修治】斅曰く、凡そ銀州柴胡を採收したならば、鬚と頭とを去つて銀刀で赤い薄皮少許を削り去り、粗布で拭ひ淨めて剉んで用ゐる。火氣に觸れてはならぬ。立ろに效力が無くなるものだ。

【氣味】【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、微寒なり。普曰く、神農、岐伯、雷公は苦し、毒なしといふ。大明曰く、甘し。元素曰く、氣、味共に輕い。陽であり升である。少陽の經の藥であつて、胃の氣を引いて上升し、苦、寒は表の熱を發散する。杲曰く、升である。陰中の陽であつて、手、足の少陽、厥陰の四經の引經の藥である。臟に在つては血を主り、經に在つては氣を主る。上升せんとするには根を酒に浸して用ゐる、中、及び下降せんとするには梢を用ゐる。之才曰く、

(二〇)木村(康)曰ク、みしまさいこノ成分ハ、未ダ精査セルモノナキモ、一種ノサポニン揮發油、樹脂及澱粉粒ヲ含ム。文獻ハ惠澤貞次郎―(藥研)五(大、五)一七九―

半夏が使となる。皂莢を惡み、女菀、藜蘆を畏る。時珍曰く、手、足の少陽に行らすには黄芩を佐とする。手、足の厥陰に行らすには黄連を佐とする。

(二一)主治　【心腹、腸、胃中の結氣、飮食積聚、寒熱邪氣。新陳代謝を盛にし、久しく服すれば身を輕くし、目を明かにし、精を益す】(本經)【傷寒、心下煩熱、諸種の痰熱結實、胸中の邪氣、五臟の間の遊氣、大腸の停積、水脹、及び濕痺拘攣を除く。湯にして浴するもよし】(別錄)【熱勞の骨節煩疼、熱氣の肩、背疼痛、勞乏羸瘦を治し、氣を下し、食物を消化し、氣血を宣暢し、時疾内外熱の解せざるものに主效がある。單獨に煮て服するがよし】(甄權)【五勞、七傷を補し、(二二)煩を除き、驚を止め、氣力を益し、痰を消し、嗽を止め、心、肺を潤ほし、(二三)精髓を添へる。健忘】(大明)【虛勞を除き、肌熱を散じ、早朝の潮熱、寒熱往來、(二四)膽癉、婦人產前產後の諸熱、心下の痞、胸脇痛を去る】(元素)【陽氣下陷を治し、肝、膽、三焦、包絡の相火を平にし、また頭痛、眩運、目昏、赤痛、障翳、耳の聾鳴、諸瘧、及び肥氣寒熱、婦人の熱が血室に入つて經水不調のもの、小兒の痘疹の餘熱、五疳の羸熱を治す】(時珍)

(二一)木村(康)曰ク、柴胡ハ漢方ニ於テ陽明少陽等ノ寒熱ヲ治スル要藥ナルガ、マラリヤ及黒水病ニ柴胡煎ヲ與ヘテ好結果ヲ得タリト、後者ノ場合ハ柴胡ヲ單獨ニ一日量五〇瓦ヲ煎用セルニ反シ、漢方ニ用ウル場合ハ成人量七乃至一〇瓦ヲ普通トス。文獻ハ周木朝―臺醫一五〇(大、四)三三四。黄發雲―臺醫一五〇(大、四)三四六。

(二二)大觀ニハ實ニ作ル。

(二三)大觀ニハ添精補髓治健忘ニ作ル。

(二四)膽癉ハ口苦キコトヲ病ムヲ云フ。

發明

之才曰く、花胡は桔梗、大黄、石膏、麻子仁、甘草、桂と配合して水一斗で煮て四升を取り、消石三方寸匕を入れて用ゐれば、傷寒寒熱、頭痛、心下の煩滿を療ず。

頌曰く、張仲景の傷寒を治するものに、大、小柴胡湯、及び柴胡加龍骨湯、柴胡加芒消湯等があるところから、後世では寒熱を治する最重要の藥となつてゐる。

杲曰く、能く清氣を引いて陽道を行らすもので、傷寒以外でも諸證の熱あるには之を加へ、熱なきにはこれを加へない。又、能く胃の氣を引いて上行するものだから、升騰して春令を行ふにはこれを加へるがよい。又、凡そ諸種の瘧には柴胡を君とし、それぞれ所發の時、所在の經分に隨つて引經の藥を佐とする。十二經の瘡疽の藥の中には柴胡を用ゐて諸經の血結、氣聚を散ずべきもので、その功は連翹と同樣である。

好古曰く、柴胡は能く臟腑内外の倶に乏しきを去る。既にこの物は能く清氣を引いて上行するものであつて、陽道を順にし、又、足の少陽に入る。經に在つては氣を主り、臟に在つては血を主り、前行すれば惡熱し、却退すれば惡寒する。これは

氣の微寒で味の薄きが特長である。故に經に行るのであつて、三稜、廣茂、巴豆の類を佐とすれば能く堅積を消する如きは、主として血に働くがためである。婦人の經水が適ま來り適ま斷えるもの、傷寒の雜病、老衰し易きものには、倶に小柴胡湯を用ゐ、これに四物の類、幷に秦艽、牡丹皮などを加へれば調經の劑となる。又曰く、婦人産後の血熱には必ず用ゐねばならぬ藥である。

宗奭曰く、柴胡に就いて、本經には勞を治するといふことは一字も說いてない。ところが今は一般に治勞の方中にこれを用ゐぬものは殆どないのである。世間にはかやうな誤が甚だ多い。これに就いて、勞病の原由を推究するに、その臟が虛損し、また更に邪熱を受ける一種がある。これは虛が原因で惹起した勞である。所謂『勞は牢なり』といふがそれである。これには必ず斟酌してこれを用うべきものであつて、經驗方中の勞熱を治する青蒿煎に柴胡を用ゐた如きがそれである。確かに合理的なもので、これを服すれば確實に奏效する。しかし熱が去れば直ちに急に服用を止めねばならぬ。若し熱なきにこれを服用すれば、ますます病狀を惡化する。然るに世間では、ために死に至る場合があつても、一向その措置の誤を怨まぬとい

ふ馬鹿氣た事實を往往にして目擊する。日華子はまた『五勞、七傷を補ふ』といひ、藥性論にもやはり『勞乏の羸瘦を治す』といつてあるが、若し此等の病にして苟も實熱なきものに對し、醫師が飽まで盲信に囚はれてこれを用ゐるならば、それは死を待つ以外に何ものもない。本草の註釋は一字と雖も忽せにはならないことだ。やがてはそれが無限の將來に向つて誤を傳へる結果ともなるのである。飽まで愼重を要することだ。張仲景が、寒熱往來する瘧の如き症狀に對して柴胡湯を用ゐたのは、まことに妥當を得たものだ。

時珍曰く、勞の所謂五勞は病の五臟に在るものであつて、もし勞が肝、膽、心、及び包絡に在つて熱があり、或は少陽の經の寒熱の患者ならば、柴胡は手、足の厥陰、少陽の藥だから必ず用ふべき藥である。勞が脾、胃に在つて熱があり、或は陽氣が下陷するならば、柴胡は淸氣を引き熱を退けるものだから必ず用ふべき藥である。けれども勞が肺、腎に在るものだけは用ゐずともよいのである。されば東垣李氏は『諸證の熱あるにはこれを加へるがよく、熱なきには加へない』といひ、又『諸經の瘧にはいづれも柴胡を君とする。十二經の瘡疽には必ず柴胡を用ゐて結聚を散

ぜねばならぬ』といつてある。かかる次第で、肺癆、腎癆、十二經の癆の熱のあるにはいづれも用うべきものであつて、ただ藥を使用するものが最も精確に病原を推究し、加減、佐使を誤らなければよいのである。寇氏のやうに臟腑にも經絡にも、熱あるにも熱なきにも拘らずして『柴胡は勞を治せず』と一概に斥けて了ふのは決して穩當な見方とはいはれない。和劑局方に、上下諸血を治する龍腦雞蘇丸に銀柴胡を用ゐ、その浸した汁を熬膏した方法の如きに至つては、一般にその意義を理解するものが少いやうだ。按ずるに、龐元英の談藪には左の事例を記載してある。

『張知閤は久しく瘧を病み、熱の甚しい時は火の如く、一年餘にして骨立の狀態に瘦せ衰へ、醫師が(二五)茸、附などの諸藥を進めると、熱はますます甚だしくなるのであつた。その時醫官孫琳の診療を乞ふと、琳は診て小柴胡一帖を投じた、熱はそれで十分の九まで減じ、三服にして脫然として病が去つた。琳のいふには「この病は勞瘧といふもので、熱は髓から出るものだ。これに剛劑を加へてはますます氣血が耗消する。瘦せぬわけに行くものでない。一體、熱には皮膚に在るものと臟腑に在るものと骨髓に在るものとあつて、柴胡以外には藥がないものだ。そこで(二六)銀

(二五) 茸ハ鹿茸、附ハ附子。

(二六) 白井曰ク、佛人 Em. Perrot 及 Paul Hurries 合著ノ支那及安南藥村篇ニ、Bupleurum octoradiatum, Bunge ノ漢名ナ銀柴胡トセリ。

柴胡があれば只一服でよいのだが、南方の產は力が劣るから三服で始めて效を奏したのだ」といつた』

孫琳の右の投藥は誠に妙處に的中したものといふべきである。寇氏の說はそのままを盡く信ずるわけにはゆかない。

附方　舊一、新五。【傷寒の餘熱】傷寒の後に邪が經絡に入つて體瘦せ肌熱するには新陳代謝を促し、傷寒、時氣、伏暑を解利する。急遽の場合の治藥として患者の長幼を論ぜぬものだ。柴胡四兩、甘草一兩を用ゐ、三錢づつを水一盞で煎じて服す。(許學士本事方)【小兒の骨蒸】十五歲以下の者、全身火の如く、日に日に黃瘦し、盜汗、欬嗽、煩渴するには、柴胡四兩、丹砂三兩を末にして豶猪膽汁で拌ぜ合せ、飯の上で蒸熟して綠豆大の丸にし、一日三回、一丸づつを桃仁烏梅湯で服す。(聖濟總錄)【虛勞發熱】柴胡、人參等分を三錢づつ薑と棗と共に水で煎じた湯で服す。(澹寮方)【濕熱黃疸】柴胡一兩、甘草(二七)二錢半を一劑とし、水一盌で白茅根一握を七分に煎じた湯で任意に時時に服し盡す。(孫尙藥祕寶方)【眼目の昏暗】柴胡六銖、決明子十八銖を修治して篩ひ、人乳に和して目の上に傅ける。久して夜間にも完全

(二七)二錢半ヲ大觀ニ一分ニ作ル。

に五色を見得るやうになる。(千金方)【積熱下痢】柴胡、黃芩(わうごん)等分を半酒、半水で七分に煎じたものに浸し、冷やして空心に服す。(濟急方)

苗【主治】【俄かの耳聾(じろう)には擣汁を頻に滴らす】(千金)

(一)前胡 (別錄中品)

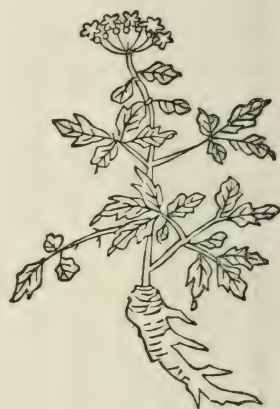
和名 缺く
學名 Angelica ? sp.
科名 繖形科(繖形科)

【釋名】時珍曰く、按ずるに、孫愐の唐韻には湔胡と書いてある。名稱の意義は判然せぬ。

【集解】別錄に曰く、前胡は二月、八月に根を採つて曝乾する。弘景曰く、近道いづれにもあつて、下濕の地に生ずるものだ。(二)吳興(ごこう)に產するものが勝れてゐる。根は柴胡に似て柔軟だ。治療上には殆んどこれと同じものと思ふが、本經には中品に茈胡があつてこの前胡がない。最近は醫師がこれを用ゐてゐる。大明曰く、(三)越(ゑつ)、(四)衢(く)、(五)婺(ぼう)、(六)睦(ぼく)等諸州の產はいづれも好し。七、八月に採收する。外部が黑く內部は白い。

(一)牧野云フ、從來ノ我邦ノ本草學者ハ前胡ヲのだけ即チPeucedanum decursivum, Maxim.ニ充ツレド其レハ誤リデアルト私ハ思フ、救荒本草並ニ植物名實圖考ノ圖ヲ見テモ其レガ我邦ノのだけデナイ事ガ分カル、按ズルニ或ハ我邦ニモ支那ニモアルやまぜり即チAngelica Miquelina, Maxim.デハナイカトモ思フガ能ク判然セヌ。
(二)吳興ハ火部艾火ノ註ヲ見ヨ。
(三)越州ハ石部蛇黃ノ註ヲ見ヨ。
(四)衢州ハ唐ニ置ク、今ノ浙江省衢縣ソノ舊治ナリ。
(五)婺州ハ、隋ニ置ク。今ノ浙江省金華縣ノ地ナリ。

（六）隰州ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。
（七）陝西ハ當時ノ陝西路、石部丹砂ノ註參照。
（八）相州ハ今ノ河南省安陽縣ソノ舊治ナリ。
（九）孟州ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。
（一〇）鄜延ハ土部墨ノ註ヲ見ヨ。
（一一）汴京ハ赤箭天麻ノ註ヲ見ヨ。
（一二）吳中、今ノ江蘇省吳縣ノ地ヲ古ニハ吳中ト稱シタリ。即チ戰國吳ノ都ナリ。
（一三）壽春ハ戰國ノ楚ノ邑、今ノ安徽省壽縣ノ地ナリ。明ニ壽春府ヲ置ク。

○頌曰く、今は（七）陝西、梁漢、江淮、荊襄の諸州郡、及び（八）相州、（九）孟州にいづれもある。春青白色の斜蒿に似た苗を生ずる。生えた初めには白い芽で、長さ三四寸になる。味は甚だ香美なものだ。また芸蒿にも似てゐる。七月中に葱の花に類した白い花を開き、八月實を結ぶ。根は青紫色である。當今（一〇）鄜延地方から來るものは如何にもよく柴胡に似てゐるが、柴胡は赤色で脆く、前胡は黃色で柔軟なだけの相異がある。一説には、今諸方に用ゐる前胡はそれぞれ差異がある。（一一）汴京、北地の産は色が黃白で枯れて脆く、一向に氣味がない。江東の産には三四種類あつて、一種は當歸に類し、皮が斑黑で肌が黃に、脂潤があり、氣味が濃烈だ。一種は色理が黃白で人參に似てゐるが細く短く、香も味もすべて微い。一種は草烏頭のやうで膚が赤く、堅く、二三の股に岐れ、食へば咽喉を強く刺戟し、破つて薑汁に漬けて擣いて服すれば甚だ膈を下し痰實を解すといふ。しかしいづれも眞の前胡ではない。現在最上のものは（一二）吳中の産である。又、（一三）壽春に生ずるものはいづれも柴胡に類して大きく、氣が芳烈で味も濃苦である。痰を療し氣を下すには他の各地の産に比して最も勝れてゐる。

斆曰く、凡そこれを用ゐる場合に野蒿根を誤り用ゐてはならぬ。如何にもよく前胡に似てゐるのであるが、ただ味が粗酸なものだ。若し誤つてこれを用ゐれば反胃を起して食物を受け付けなくなる。前胡ならば味が甘くして微し苦いものだ。

〔前　胡〕

時珍曰く、前胡には數種あるが、苗の高さは一二尺で、色は斜蒿に似て居り、葉が野菊のやうで細く瘦せ、嫩芽は食料にもなり、秋季に蛇牀子の花に類した紫白色の花を開き、その根は皮が黑く肉が白く香氣のあるものが眞物である。大抵北地の産が勝れたものとなつてゐる。故に方書には北前胡とさへ稱するのだ。

根　修治　斆曰く、修治するには、先づ刀で蒼黑色の皮并に髭土をよく刮り去つて細かに剉み、甜竹瀝に浸し潤して日光に當てて乾して用ゐる。

〔氣味〕【苦し、微寒にして毒なし】權曰く、甘く辛し、平なり。之才曰く、半夏が使となる。皂莢を惡み、藜蘆を畏る。

〔主治〕【痰滿の胸脇中痞、心腹結氣、風頭痛。(一四)痰を去り、氣を下し、傷寒の寒熱を治し、新陳代謝を盛にし、目を明かにし、精を益す】(別錄)【能く熱實、及び時氣の内外共に熱するを去る。單獨に一味を煮て服す】(甄權)【一切の氣を治し、癥結を破り、胃を開き、食物を落付け、五臟を通じ、霍亂轉筋、骨節煩悶、反胃嘔逆、氣喘欬嗽に主效があり、胎を安んじ、小兒一切の疳氣を治す】(大明)【肺熱を淸し、痰熱を化し、風の邪を散ず】(時珍)

〔發明〕時珍曰く、前胡は、味は甘辛、氣は微平、陽中の陰であり降であつて手、足の太陰、陽明の藥である。柴胡の純陽にして上升し、少陽、厥陰に入ると は同一でない。その功力は氣を下すに特長がある。故に能く痰熱、喘嗽、痞膈、嘔逆の諸疾を治するので、氣が下れば火が降り、同時に痰も降るといふ關係である。隨つて新陳代謝を盛にする效果もあり、痰氣に重要な藥である。陶弘景が『柴胡と同功だ』といふは正しくない。それは治療の對症は同一でも、その功力の及ぶ經路

(一四)大觀ニハ痰ノ下ニ實字アリ。

とその作用とが異つてゐる。

【附方】 舊一、【小兒の夜啼】前胡を擣き篩つて蜜で小豆大の丸にし、日毎に一丸づつ漸次五六丸までを熟水で服し、痊えるを度とする。(普濟方)

(一)防風 (本經上品)

和名 ばうふう
學名 Siler divaricatum, Benth. et Hook. f.
科名 繖形科(繖形科)

【釋名】 **銅芸**(本經) **回芸**(吳普) **茴草**(別錄) **屛風**(別錄) **蕳根**(別錄) **百枝**(別錄) **百蜚**(吳普) 時珍曰く、防は禦(ふせぐ)であつて、その功用が風を療する最要のものだから屛風と名けたのだ。つまり防風の隱語である。芸とか茴とか蕳とかいふは花の形狀が茴香のやう、氣が芸蒿、蕳蘭のやうだからだ。

【集解】 別錄に曰く、防風は(二)沙苑の川澤、及び(三)邯鄲、(四)琅琊、(五)上蔡に生ずる。二月、十月に根を採つて暴乾する。普曰く、正月に細く圓くして靑、黑、黃、白の葉を生じ、五月に黃色の花を開き、六月に黑色の實を結ぶ。
弘景曰く、郡、縣に沙苑なる名稱はない。今第一位のものは(六)彭城、(七)蘭陵に產

(一)牧野云フ、我邦デ昔カラ防風ト唱ヘ來ツタモノハはまばうふう一名八百屋ばうふう即チ Phellopterus littoralis, Benth. デ固ヨリ眞ノ防風デハナカツタ、濱ニ生エテ居ルカラ昔ハ之レヲはまおほねトモはまにがなトモはますかなトモ稱シタ、眞ノ防風ハ德川時代ニ支那カラ渡來シタモノデ、其時分ニ薬園デ栽培セラレタ、其傳ヘタ品ガ東京小石川植物園ニモ明治二十年前後マデ殘ツテ居タガ今ハ絕エテナイ、往時大和松山ノ森野藤助(號ハ賽郭)ガ幕命ニヨツテ之レヲ作ツテ居ツテ其レヲ藤助防風ト唱ヘタ。集解ノ時珍ノ說ノ中

する。即ち琅琊に近い地點である。(八)鬱州、(九)百市にもある。これに次ぐは(一〇)襄州(一一)義陽縣の管内に產するもので、これも用ゐ得るがただ實して脂潤があり、頭節が堅くて蚯蚓の頭の如きものが好いのである。

○恭曰く、今は(一二)齊州の龍山に產するものが最も善く、(一三)淄州、兗州、青州ものも佳い。葉は牡蒿、附子などの苗に似たものだ。沙苑なる地名は同州の南にあつて、ここからも防風が出る。しかし輕虛なもので東方の產地のものには及ばない。陶氏が沙苑と呼ぶ地名がないといつたのは誤だ。

○頌曰く、今は(一四)汴東、(一五)淮浙の州郡にいづれもある。莖、葉は倶に青綠色だが莖は色が深く葉は色が淡く、青蒿に似て短小だ。春季に初めて生えた嫩芽は紫紅色のもので、江東(一六)宋亳の地方では採つて副食の菜にして食ふ。舌觸りの極めて爽かなものである。五月細い白い花を開く。その花は中心に多數叢り聚つて大房になり、蒔蘿の花のやうだ。實は胡荽子に似て尖り、根は土黃色で蜀葵根に類似したものだ。二月、十月に採收する。關中に生ずるものは三月、六月に採收するが、輕虛で齊州產の良いものに及ばない。又、(一七)石防風と稱するものがある。(一八)河中府

ニ石防風ガアル、小野蘭山ハ之レヲやまにんじん一名白河ばうふうニ充テテ居ルガ、アレモヨイ加減ノ充テ方デアルト思フ。此やまにんじんハ Peucedanum deltoideum, Makino. ノ學名ヲ有スルモノデアルガ、時珍ノ原記文ハ極メテ簡單(本文ニ見エル樣ニ)デ、此やまにんじんデアルト云フ何ノ特徵モ表ハレテ居ナイ。

(三)沙苑ハ陶弘景ハ郡縣ニソノ名ナシトイヒ、蘇恭ハ同州ノ南ニ在リトイフ。唐以前ニハアマリ聞カザル地名ナリ。楊氏唐地理志圖ニハ今ノ陝西省大荔縣卽チ唐ノ同州治ノ南、洛河ト渭河トノ中間ニ沙

に產し、根は蒿根のやうで黃色だ。葉は青く花は白く、五月花を開き、六月根を採つて暴乾する、やはりこれも頭風、眼痛を療ずる。

時珍曰く、江淮に產するものは多くは石防風だ。山石の間に生ずるもので、二月嫩苗を採つて菜にすれば辛く甘く香しい。これを珊瑚菜と呼ぶ。その根は粗醜なものだ。子はやはり蒔けば生える。吳綬は『凡そ防風を用ゐるには黃色で潤へるものが佳い。白いものは沙條と名けるもので。藥用にならない』といつてある。

〔防　風〕

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】別錄に曰く、辛し、毒なし。叉頭を用ゐれば狂を發せしめ、叉尾を用ゐれば(二九)痼疾を發せしめる。普曰く、神農、黃帝、岐伯、桐君、雷公、扁鵲は甘し、毒なしといひ、李當之は小寒なりといふ。元素曰く、味は辛くして甘く、氣は溫である。氣味共に薄い、浮にして升る、陽である。手、

苑ナル地ヲ置ク。然レドモ別錄ノ沙苑ガ果シテ此ノ地ナリヤ否ハ斷ジ難シ。
(二)邯鄲ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。
(四)琅琊ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。
(五)上蔡ハ戰國楚ノ上蔡邑ノ地ニシテ秦ニ縣ヲ置ク。今ノ河南省汝陽道ノ地ニシテ上蔡縣今ナホ在リ。
(六)彭城ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。
(七)蘭陵ハ遠志ノ註ヲ見ヨ。
(八)鬱州ハ黃芩ノ註ヲ見ヨ。
(九)百市、未詳。今廣西省ニ百色縣アリ。此ニイフ百市ノ地ナリヤ否不明。參考ニ附ス。
(二〇)襄州ハ石部理石ノ註ヲ見ヨ。

足の太陽の經の本藥である。好古曰く、又、足の陽明、太陰の二經に行ぐる、肝經の氣分の藥である。杲曰く、防風は能く黄耆を制するものだが、黄耆は防風を得ればその功力が更に大いに發揮する。これは相畏れるものだが、同時に相使するものである。之才曰く、葱白と配合すれば能く全身に行り、澤瀉、藁本と配合すれば風を療じ、當歸、芍藥、陽起石、禹餘粮と配合すれば婦人の子臟の風を療ず。萆薢を畏れ、附子の毒を殺し、藜蘆、白斂、乾薑、芫花を惡む。

【主治】【大風、頭眩痛、惡風、風邪、目盲で物の見えぬもの、風が全身を行つて骨節の疼痛するもの。久しく服すれば身を輕くする】(本經)【煩滿脇痛、風が頭部、面部に去來し、四肢の攣急するもの、(二〇)字乳、金瘡の(二一)內痙】(別錄)【三十六般の風、男子一切の(二二)勞劣を治し、中を補し、神を益し、風赤眼に冷涙を止め、及び癱瘓には五臟、(二三)關脈を通利し、五勞、七傷の羸損、盜汗、心煩、體重には能く神を安じ、志を定め、氣脈を勻平にする】(大明)【上焦の風邪を治し、肺實を瀉し、頭目中の滯氣、經絡中の留濕を散じ、(二四)上部に血を見るに主效がある】(元素)【肝氣を搜る】(好古)

(一一)義陽縣ハ唐ノ申州義陽縣ナリ。當時ハ襄州ニ屬ス。今ノ河南省信陽縣ノ南ニ舊治アリ。
(一二)齊州ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。龍山、未攷。
(一三)淄州ハ石部雌黄ノ註ヲ見ヨ。
(一四)汴東ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(一五)淮浙ハ安徽、浙江地方ノ稱。
(一六)宋亳、一本ニ朱亳トアルハ宋亳ノ誤ナリ。宋ハ戰國宋ノ地、亳ハ宋ノ祖先殷ノ都セル亳ノ地ヲ指スト見ルヲ正シトス。此ニハ宋ノ都今ノ河南省商邱縣ヨリ殷ノ都今ノ安徽省亳縣ニ亙ル一帶ノ地ヲ指スナリ。
(一七)白井曰ク、獨逸人ザール氏ノ書ニ

葉　【主治】【中風で熱汗の出るもの】(別錄)　○頌曰く、江東には一種の防風があつて、その嫩苗は食物にもなるが(三五)風を動ずるものだといふ。この別錄の文の意味と矛盾するが、これは別の一種の物をいふのであらうか。

花　【主治】【四肢の拘急、步行不能、經脈の虛羸、骨節間の痛み、心腹痛】(甄權)

子　【主治】【風を療ずるに更に優れて居る。調理してこれを食ふ。】(蘇恭)

【發明】○元素曰く、防風は風を治するに通じて用ゐるもので、上半身の風邪には身を用ゐ、下半身の風邪には梢を用ゐる。治風、去濕の仙藥であつて、それは風は能く濕に勝つ關係である。しかし能く肺實を瀉すものではあるが、誤つて服すれば上焦の元氣を瀉せしめるやうなこともある。

○杲曰く、防風は身體の全部が盡く痛むものを治す。つまり卒伍、卑賤のものにも比すべきもので、導く所に隨つて何處にも運行してその功力が及ぶのである。乃ち風藥中の潤劑であつて、脾、胃を補する場合の如きはこの物の力で導く以外では藥效が意の如く行らない。凡そ脊痛、項强で頸が回らず、腰は折れさうに、項は拔け

Peucedanum terebinthaceum, Fisch. 和名かはらばうふうチ支那ニテ藥材ニ用ユルコト見ユ、一種白川防風ハ此ト近似ノモノナレバ、亦藥效ナキニ非ザル可シサレバ石防風ニ當ラズト雖モ、藥材トシテ用ユルニ足ルベシト思ハル。

(二八)河中府ハ石部石中黃子ノ註ヲ見ヨ。

(二九)瘋疾ハ久病ノコト。

(三〇)字乳ハ生產、子ヲ產ムコト。

(三一)金陵本亦內經ニ作ル內爛ノ意歟。

(三二)勞劣、神經衰弱ノ如キモノカ。

(三三)關ハ關節、脈ハ脈行。

(三四)上部ノ血トハ鼻衄、齒衄等ノコトナラン。

(二五)風ヲ動ストハ風ヲ治スルニ反スルノ意。

(二六)浮麥ハミナシムギ。

(二七)解顱ハ腦水腫、俗ニハチガヒラクヤマヒ。

さうに痛むものは手、足の太陽の證である。必ず防風を用ゐねばならぬ。また凡そ瘡の胸膈已上に在るものは、たとひ手、足太陽の證はないにしても、やはりこれを用ゐねばならぬ。それは能く結を散じて上部の風を去らんがためである。また身體が吊つてだるいものは風であつて、諸瘡に此の證が見えるときは、やはり防風を用ゐねばならぬ。錢仲陽の瀉黄散中に防風を倍にして用ゐたのは、やはり土中に於て木を瀉するが目的である。

附方　舊二、新九。

【自汗の止まぬもの】防風を蘆を去つて末にし、二錢づつを(二六)浮麥の煎湯で服す。朱氏集驗方では、防風を麩で炒り、猪皮の煎湯で服す。【睡眠中に盜汗するもの】防風二兩、芎藭一兩、人參半兩を末にし、三錢づつを就寢時に飲で服す。(易簡方)【風を消し氣を順にする】老人の大腸祕濇には、防風、枳殼を麩で炒つて各一兩、甘草半兩を末にし、毎食前に白湯で二錢を服す。(簡便方)【偏正頭風】防風、白芷等分を末にして煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを嚼んで茶清で飲下す。(普濟方)【破傷中風】牙關緊急するには、天南星、防風等分を末にし、毎服二三匙を童尿五升で四升に煎じて二回に分服すれば止まる。(經驗後方)【小兒の(二七)解顱】

防風、白及、柏子仁等分を末にして乳汁で調へて塗り、一日一回づつ換へる。（養生主論）【婦人の崩中】獨聖散—防風を蘆頭を去り赤く炙いて末にし、一錢づつを麪糊酒で調へて服し、更に麪糊酒を投じて服す。この藥は屢〻奏效の經驗を得たものだ。ある方では黑く炒つて蒲黃等分を加へる。（經驗方）【烏頭の毒を解す】附子、天雄の毒にも用ゐる。いづれも防風の煎汁を飮む。（千金方）【芫花の毒を解す】（同上）【野菌の毒を解す】（同上）【諸藥の毒を解す】一旦絶命して心臟の部分だけ溫暖なものは、諸藥を服して熱物を犯したためである。ただ防風一味を冷水に擂つて灌ぎ込む。（萬氏積善堂）

（一）獨活（本經上品）

和名　未詳
學名　Angelica grosseserrata, Maxim. (?)
科名　繖形科（繖形科）

【釋名】羌活（本經）羌靑（本經）獨搖草（別錄）護羌使者（本經）胡王使者（吳普）長生草　弘景曰く、ただ一本の莖が直上に伸び、風のために搖がない。それで獨活といふのである。別錄に曰く、この草は風が當つても搖がず、風無くして自

（一）牧野云フ、從來獨活チししうどニ充テアレドコレハ蓋シ中ッテ居ナイト思フ又 Angelica inaequalis. Maxim. 即チはなびぜりモ無論其品デハナイ、又羌活チ獨活ト別ツトキ其レチ Angelica sylvestris, L. ニ充ツル事モ尚ホ精査チ要スル問題デアル。木村（康）曰ク、日本市場ニテハ、ししうどノ老根チ獨活トシ、嫩根チ羌活トス、支那市場品ハ全ク別物ニシテ、獨活ト羌活モ著シキ差異アレドモ原植物ハ詳ナラズ。

ら動く。故に獨搖草と名ける。大明曰く、獨活なるものは羌活の母である。時珍曰く、獨活は(一)羌中から來るものを良しとする。故に羌活、胡王使者などの諸名があるのだ。これは一物中の二種類であつて、川芎と撫芎、白朮と蒼朮などの區別と意味は同じく、藥用としては微かの相異である。後世これを全然二種別箇のものと考へるは誤だ。

【集解】別錄に曰く、獨活は(三)雍州の川谷、或は(四)隴西、(五)南安に生ずる。二月、八月に根を採つて暴乾する。弘景曰く、右の諸州の郡、縣はいづれも羌中の地域である。羌活は形が細くして節多く、軟かで潤ひ、氣臭が極めて猛烈だ。(六)益州北部(七)西川に產するものは獨活であつて、色は微し白く、形は虛大で用途はやはり似てはゐるが、少し羌活には及ばない。至つて蛀がつき易いから密器に貯藏せねばならぬ。

頌曰く、獨活、羌活は今は(八)蜀、漢に產するものが佳い。春苗が生えて葉は青麻のやうだ。六月に叢つた花を開き。色は或は黃、或は紫だ。結實の時期に葉が黃になるは石上に挾まつて生じたもの、葉が青くなるは土脈中に生じたものである。本

(一)羌中ハ石部石膽羌道ノ註、消石西羌ノ註參照。

(三)雍州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(四)隴西ハ石部消石ノ註ヲ見ヨ。

(五)南安ハ郡名、後漢靈帝ノ時ニ置ク。淸ノ甘肅省鞏昌府ノ地ヲ統ブ。今ノ隴西縣ノ東北、渭水ノ北ニ故城アリ。

(六)益州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(七)西川ハ石部鹵石類消石、西川縣ノ註參照。

(八)蜀漢ハ石部玉類青琅玕蜀郡ノ註、及ビ石類理石漢中ノ註ヲ見ヨ。

〔羌　獨　活〕
——獨活は太くして節がまばらだ——

經には二物同一類だといひ、今一般には紫色で節の密なるものを羌活とし、黄色で塊をなすものを獨活としてゐるが、陶隱居は『獨活は色が微し白く、形は虚大で用途は羌活と似てゐる』といふ。現に蜀中になるほど大獨活といふがあるが、桔梗に類した大きいもので、氣味は一向に羌活と似て居らぬ。用ゐて見るに微寒であつて效力は少い。現に又、獨活と稱してやはり蜀中から來るものがある。羌活に類した微黄色の極めて大きいもので、採收時に一寸ほどに劈解して乾かすのだ。氣味はやはり芳烈で少し羌活に類する。又、槐葉の香氣のするものがあつて、これは現に都下で多く用ゐ、極めて效驗がある。思ふにこれが眞物なのだ。商人は或は羌活の大なるものを擇り出して獨活と稱してゐるが、それは甚だ當てにならない。しかし、大體この物には兩種類あるので、西蜀の

ものは黄色で蜜やうな香氣があり、隴西のものは紫色で、秦、隴地方ではこれを山前獨活と呼んでゐる。古方にはただ『獨活を用う』とあり、今方でも獨活を用ゐることになつてゐる。然るにまた羌活を用ゐるは謬だ。

○機曰く、本經に『獨活、一名羌活』とあつて、本來は二物でない。後世の者はその形や色や氣や味の不同を見て、故らに異論をなすのであるが、しかし物は多くの場合必ずしも齊一には行かないもので、一種の中にも自ら不同があるわけだ。仲景が少陰を治するに用ゐた獨活は必ず緊實したものとしてあり、東垣が太陽を治するに用ゐた羌活は必ず輕虛なるものとしてある。それは恰も黄芩に於ける、枯飄なものを特に片芩と名けて太陰を治するに用ゐ、條實したものを特に子芩と名けて陽明を治するに用ゐると同樣の意味である。泥んや古方だけは『獨活を用う』とあつて羌活とはないが、今方では兩者倶に用ゐられてゐるのだから、兩者それぞれ用ゐてよいものではないかと思はれる。しかしまたそこには誤謬があるか、なほ問題である。

○○時珍曰く、獨活、羌活は一類の二種で、中國の產を獨活といひ、西羌の產を羌活

といふことは蘇頌の所說で頗る明かだ。按ずるに、王貺の易簡方には『羌活は紫色で(九)蠶頭、鞭節のあるものを用うべきものだ。獨活なるものは極めて大なる羌活で、白い。(一〇)鬼眼のやうなものがある。通常は皆老宿(ヒネ)前胡を獨活としてゐるが謬つてゐる。近頃では江淮地方の山中に產する一種の土當歸で、長さ一尺許りあり、肉白く皮黑く、香氣は白芷の香氣のやうで甚だ高い。その地でやはり水白芷と稱するものを獨活に充てて用ゐ、解し散ずるにも或は用ゐてゐるが、その物の異なることを知らねばならぬ』とある。

根［修治］斅曰く、これを採收したならば細かに剉んで淫羊藿と拌ぜて二日間霑ほし、暴乾して藿を揀り去つて用ゐれば心煩を起す虞がない。時珍曰く、これは服食家の治法である。普通には皮を去り或は焙じて用ゐればよい。

［氣味］【苦く甘し、平にして毒なし】別錄に曰く、微溫なり。權曰く、苦く辛し。元素曰く、獨活は微溫で甘く苦く辛し、氣味俱に薄く、浮にして升る、陽である。足の少陰の行經、氣分の藥である。羌活は性溫で辛く苦し、氣味共に薄く、浮にして升る、陽である。手、足の太陽の行經、風の藥である。いづれも足の厥陰、

(九)蠶頭鞭節ハ地下莖ヲ形容スルノ語。
(一〇)鬼眼ハ地下莖ノ地上莖ノ印痕。

(一一)癇痓ハ癲癇。
(一二)疝瘕ハ肝臓病。
(一三)瘰痺ハ痲木ニ同ジ、寒熱疼痛ヲ感ゼザルヲ云フ。
(一四)伏梁ハ積ノサシコミ。

小陰の經の氣分に入る。之才曰く、豚實が使となる。弘景曰く、藥に豚實なるものはない。恐らくは蠡實のことであらう。

【主治】風寒に撃たれたもの、金瘡に痛を止める。奔豚、(一一)癇痓、婦人の(一二)疝瘕。久しく服すれば身體を輕くし、老衰を禦ぐ】(本經)【諸種の賊風、あらゆる節の痛風を療ずるには久、新を問はぬ】(別錄)【獨活は諸種の中風濕冷、奔喘逆氣、皮膚の甚だしく痒きもの、手、足の攣痛、勞損、風毒の齒痛を治す。羌活は賊風失音で言語不能のもの、甚だ痒くして手、足不遂のもの、口、顏面の喎斜、全身の(一三)瘰痺、血癩を治す】(甄權)【羌、獨活は一切の風、竝に氣の筋骨攣拳、骨節の酸疼、頭旋、目赤疼痛、五勞、七傷を治し、五臟、及び(一四)伏梁、水氣を利す】(大明)【風寒濕痺の酸痛、不仁、諸風の掉眩、頸の伸び難きを治す】(李杲)【腎間の風邪を去り、肝風を捜り、肝氣を瀉し、項强、腰脊痛を治す】(好古)【癰疽の敗血を散ず】(元素)

【發明】恭曰く、風を療ずるには獨活を用ゐるがよく、水を兼ねたるには羌活を用ゐるがよい。劉完素曰く、獨活は風に搖がぬもので風を治し、浮萍は水に沈まぬもので水を利す。これはその勝つところに因つて制壓の力を現はすのである。

張元素曰く、風は能く濕に勝つ。故に羌活は能く水濕を治するのである。獨活は細辛と共に用ゐれば少陰の頭痛、頭運、目眩を治す、これはこれ以外では除き得ぬものだ。羌活は川芎と共に用ゐれば太陽、少陰の頭痛を治し、關を透し節を利し、督脈で病となり脊が强ばつて厥するものを治す。

好古曰く、羌活なるものは足の太陽、厥陰、少陰の藥であつて、獨活と二種の區別はないのであるが、後世では羌活は氣が雄であり、獨活は氣が細なるところからして、雄なるものは足の太陽の風濕相搏つ頭痛、肢節痛、全身盡く痛むものを治して、これ以外では除き得ぬも、乃ち却亂反正の主たる君藥とし、細なるものは足の少陰の伏風で頭痛、兩足濕痺、動作不能のものを治して、これ以外では治し得ぬが、しかし太陽の證をば治し得ぬものとしてある。

時珍曰く、羌活、獨活はいづれも能く風を逐ひ、濕に勝ち、關を透し、節を利するので、ただ氣に剛、劣の相違があるだけだ。靈樞に『下より上るものは引いて之を去る』とあつて、この二味は苦く辛くして溫であり、味が薄くして陰中の陽だから、能く氣を引いて上升し、全身に行き渡つて風を散じ濕に勝つのである。按ず

るに、文系に「唐の劉師眞は兒が風を病んだ時、夢に神人から「ただ胡王使者を取つて酒に浸して服すれば直ちに癒える」との告げを得た。師眞はその胡王使者なるものの何物なるかを人人に訊ねたが、何人もその物を知るものはなかつた。ところがまた夢にその母が現はれて「胡王使者は羌活のことだ」と告げたので、それを求めて用ゐると兒の疾は遂に癒えた』といふことが書いてある。

嘉謨曰く、羌活は元來手、足の太陽、表裏の引經の藥だが、また足の少陰、厥陰に入るものだ。藥名は君藥の部に列してあるが、決して柔懦な主君の比ではなく、小として入らざるなく、大として通ぜざるなきものだ。故に能く肌表(一五)八風の邪を散じ、全身のあらゆる節の痛を利するのである。

附方　舊七、新七。【中風口噤】全身が冷えて意識明瞭ならぬには、獨活四兩を好き酒一升で半升に煎じて服す。(千金方)【中風の言語不能】獨活一兩を酒二升で一升に煎じ、大豆五合を音を發てるまで炒つてその藥酒を熱した中に投じ、蓋をして少時置いて三合を溫服する。なほ瘥えぬときは再服する(陳延之小品方)【熱風癱瘓】常に發作的に起るには、羌活二斤、(一六)構子一升を末にし、一日三回、方寸匕づつ

(一五)八風ハ痺風ノ總稱シビレイタムヤマヒ。

(一六)構子ハ楮柄子ノ一名ナリ。果部三十一卷ニ見ユ。

（一七）産腸ハ子宮。

（一八）風水浮腫ハ水腫ニ骨節疼痛ヲ兼ヌルモノ。

（一九）風牙ハ齒神經痛。

を酒で服す。（廣濟方）【産後の中風】發語が澁り、四肢拘急するには、羌活三兩を末にして五錢づつを酒、水各一盞で半量に煎じて服す。（小品方）【産後の風虚】獨活、白鮮皮各三兩、水三升を二升に煮取り、三回に分服する。酒を飲み得るものは酒を入れ共に煮て服す。（小品方）【産後の腹痛】羌活二兩を酒で煎じて服す。（必效方）【（一七）産腸脫出】方は上に同じ。（子母祕錄）【妊娠浮腫】羌活、蘿蔔子を共に香しく炒つてその羌活のみを末にし、二錢づつを溫酒で調へて服す。浮腫が一日のものは一服、二日のものは二服、三日のものは三服する。これは嘉興の簿張昌明の所傳である。（許學士本事方）【（一八）風水浮腫】方は上に同じ。【歷節風痛】獨活、羌活、松節等分を酒で煮て毎日空心に一盃を飲む。（外臺祕要）【（一九）風牙腫痛】肘後方では、獨活を酒で煮て熱して漱ぐ。○文潞公の藥準では、獨活、地黃各三兩を末にし、三錢づつを水一盞で煎じて滓と共に溫服し、就寢時に再服する。【喉閉、口噤】羌活三兩、牛蒡子二兩を水で煎じて一鍾に白礬少量を入れ、灌いで效を取る。（聖濟錄）【瞳睛が鼻まで垂れ落ちる病】瞳睛が突然垂れ落ちて鼻まで下り、黒角のやうになつて忍び難く寒痛し、或は時折大便に血が出て痛む。これは肝脹と名ける病である。羌活の煎

汁數盞を服すれば自から癒える。(夏子益奇疾方)【太陽頭痛】羌活、防風、(二〇)紅豆(こうづ)等分を末にして鼻に嗃(す)ふ。(玉機微義)

(一)土當歸(綱目)

和名　のだけ
學名　Peucedanum decursivum, Maxim.
科名　繖形科(繖形科)

集解

根　氣味【辛し、溫にして毒なし】

(二)主治【風を除き、血を和すには酒で煎じて服す。手足の(三)閃拗(せんえう)には荊芥(けいかい)、葱白(そうはく)と共に湯に煎じて淋(そそ)ぎ洗ふ】(時珍)　衞生易簡方に記載してある。

〔土　當　歸〕

(二〇)紅豆ハ赤小豆ノ一名ナリ、相思子ニモ紅豆ノ別名アレドモ此トハ別ナリ。

(一)牧野云フ、私ハ土當歸ハのだけデアルト考ヘル、從來ノ學者ハ之レヲうこぎ科ノうど即チ Aralia cordata, Thunb. ニ充テテヰルガ、私ハ之レニ雷同左袒スル事ハ出來ヌ。

(二)木村(康)曰ク、のだけノ根ハ配糖體ノダケニンヲ含有ス。文獻ハ有馬純三―化誌四八(昭、二)八八、四五七。

(三)閃拗ハ急速ニ手足ヲ屈折スルコト。

(一)都管草(宋圖經)

和名 未詳
學名 未詳
科名 繖形科(?) 繖形科(?)

【集解】 頌曰く、都管草は(二)宜州の田野に生ずる。根は羌活に似て頭が一歳に一節づつ長くなり、苗は高さ一尺ばかり、葉は土當歸に似て重臺がある。二月、八月に根を採つて陰乾する。(三)施州に生ずるものは蔓になる。これは香毬とも名けるもので、蔓の長さは一丈餘に達し色は赤い。秋に紅い實を結ぶ。一年四季を通じ何時でもある。その根、枝を採り(四)煎湯として風毒の瘡腫を淋洗する。

〔都管草〕

時珍曰く、按ずるに、范成大の桂海志に『廣西にこれを產する。一莖六葉のものだ』とある。

根 【氣味】 【苦く辛し、寒にして毒なし】 【主治】 【風腫、癰毒、赤疣には

(一)牧野云フ、集解ニ宜州ノ田野ニ生ズルト云フモノ何カ繖形科品ノモノト思フ之レヲはまうど即チAngelica kiusiana, Maxim. ニ充ツルハ中ツテヰナイト思フ此はまうどハタダ海邊地方ニ生ズルモノデ內地ニハ生ゼヌモノデアル、又集解中、施州ニ生ズル蔓様ノモノハ何物ダカ一向ニ判ラヌ。
(二)宜州は石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(三)施州ハ今ノ湖北省恩施縣ノ地ナリ。
(四)煎湯ノ二字大觀ニアリ。

醋で摩つて塗る。また咽喉の腫痛を治するには切片して含めば立ろに癒える】(蘇頌)

【蜈蚣、蛇の毒を解す】(時珍)

(一)升麻（別錄上品）

和名　さらしなしようま
學名　Cimicifuga foetida, L.
科名　うまのあしがた科（毛茛科）

釋名　**周麻**　時珍曰く、葉が麻に似て性が上升するものだからかく名けたのだ。按ずるに、張揖の廣雅、及び吳普本草には、いづれも『升麻、一名周升麻』とある。この周は或は今一般に川升麻と呼ぶと同樣の意味で(二)周の地方を指すものか。現に別錄に周麻とあるは文字の省略ではなくて脫誤である。

集解　別錄に曰く、升麻は(三)益州の山谷に生ずる。二月、八月に根を採つて日光で乾かす。弘景曰く、もとは(四)寧州に產するものが第一位で、形は細くして黑く、極めて堅く實したものだつたが、今は益州に產するものだけが好く、細く瘠せて皮が青綠色だ。雞骨升麻ともいふ。北方の州郡にもあるが、形が虛大で黃色だ。(五)建平にもあるが、やはり形が大きく味が薄く藥用に堪へない。世間ではこれを落

(一)牧野云フ、今姑ク從來ノ說ニ從フテ升麻ヲさらしなしようまトシテ置ク、又同屬ノ C. dahurica, Maxim. ニモ升麻ノ名ガアル、又ゆきのした科ノちだけさしノ一品ナル Astilbe chinensis, Franch. et Sav. ニモ同ジク升麻ノ名ヲ有スル、此樣ニ升麻ノ名ノ下ニハイロイロノ植物ガ含マレテアルト思フガ其レヲ今一一究明スル事ハ今日ノ吾吾ノ知識デハ不可能ノ事ニ屬スル、是レハ能ク能ク支那ノ植物ニ通曉シタ士デナケレバ之レヲ裁イテ行ク人ハナイト思フ。

(二)周トハ戰國ノ周ノ地方、即チ今ノ河南省洛陽ノ東四、黃

新婦の根だといふが、さうではない。その形こそ似てゐるが氣も色も異ふ。落新婦もやはり毒を解するもので、葉を取つて揉んで小兒の浴湯にすれば驚忤に主效がある。

藏器曰く、(六)落新婦は今一般に小升麻と呼ぶもので、功用は升麻と同じだが、やはり大小の相異がある。

〔升　麻〕

志曰く、升麻は今は(七)嵩高山に出るが、色は青く、功用は蜀のものに及ばない。

頌曰く、今は(八)蜀漢、陝西、(九)淮南の州郡にいづれもあるが、(一〇)蜀川のものが勝れてゐる。春苗が生えて高さ三尺ほどになり、葉は麻の葉に似てやはり青く、四月五月に粟の穗に似た白色の花を著け、六月以後に黑色の實を結ぶ。根は蒿根のやうで紫黑色で鬚が多い。

根　修治　斅曰く、採取したならば粗皮を刮り去り、黃精の自然汁に一夜間浸して暴乾し、剉み蒸して再び暴らして用ゐる。時珍曰く、今は一般にただ裏が白

河以南維水兩岸ノ地方ヲ指ス。

(三)益州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(四)寧州、同上。

(五)建平、同上。

(六)牧野云フ、落新婦ヲ小野蘭山ノ意見ニ從ヘバあはゆきさうデアル、あはゆきさうハとりあししよう即チゆきのした科ノAstilbe Thunbergii, Miq. ノ一品デアル。

(七)嵩高山ハ嵩山、河南省登封縣ニ在リ。

(八)蜀漢ハ今ノ四川省、及ビ湖北省ノ西部陝西省ノ南部ノ地ナリ。

(九)淮南ハ淮河以南揚子江以北ノ地。

(一〇)蜀川ハ今ノ四川省地方。

く外が黒く、緊まり實したものを取る。これを（一）鬼臉升麻と謂ひ、鬚、及び頭蘆を去つて剉んで用ゐる。

（二）**氣味**【甘く苦し、平にして微寒、毒なし】元素曰く、性は溫、味は辛微苦、氣味共に薄く、浮にして升る、陽である。足の陽明、太陰の引經の的確な藥であつて、葱白、白芷と配合すれば手の陽明、太陰にも入る。杲曰く、葱白を導いて手の陽明の風邪を散じ、石膏を導いて陽明の齒痛を止める。人參、黃芪はこの物で導かねば上行し能はぬものである。時珍曰く、升麻は柴胡と共にすれば生發の氣を導きて上行し、葛根と共にすれば能く陽明の汗を發す。

主治【あらゆる毒を解し、あらゆる老精物の殃鬼を殺し、瘟疫、瘴氣、邪氣、蠱毒を辟けて、それが口に入れば皆吐出する。中惡腹痛、時氣毒癘、頭痛寒熱、風腫諸毒、喉痛口瘡を治す。久しく服すれば夭死せず、身體を輕くし、天年を長くする】（本經）【魂を安んじ、魄を定める。鬼が附いて啼泣するもの、疳𧏾、遊風、腫毒】（大明）【小兒の驚癇、熱壅不通。癰腫、豌豆瘡を療ずるには水で煎じて、綿を沾して瘡上を拭ふ】（甄權）【陽明の頭痛を治し、脾胃を補し、皮膚の風邪を去り、肌肉

（一）牧野云フ、日本デ學者ガ鬼臉しようまト呼ンデヰルモノハ一ニおほばしようまト稱ヘ（Cimicifuga japonica, Spreng.）デアルガ、是レガ果シテ支那ノ鬼臉升麻ト同ジイカ否カ判然セヌ。

（二）木村（康）曰ク、升麻ノ一種 C. racemosa, Bort. ノ成分ハキミフギン、蔗糖、油、樹脂鞣酸ヲ含有ス。

（一三）齦齶ハハナザ。

の間の風熱を解し、肺痿の欬唾、膿血を療じ、よく浮汗を發す】（元素）【牙根の浮爛、惡臭、太陽の（一三）齦齶。瘡患者に對する聖藥である】（好古）【斑疹を消し、瘀血を行り、陽陷の眩運、胸脇の虛痛、久泄下痢、後重、遺濁、帶下、崩中、血淋、下血、陰痿、足寒を治す】（時珍）

【發明】元素曰く、脾、胃を補ふ藥は、これ以外には引用して成功するものがない。脾痺はこれ以外では除き得るものがない。この藥の應用には四種あつて、手、足の陽明の引經が一、陽氣を至陰の下から升すが二、至高の上部、及び皮膚の風邪を去るが三、陽明の頭痛を治するが四である。

杲曰く、升麻は陽明の風邪を發散し、胃中の清氣を升し、又、甘、溫の藥を導いて上升して衞氣の散ずるを補し、その表を實する。故に元氣不足にはこれを用ゐて陰中に於て陽を升す。又、帶脈の縮急を緩にする。これは胃虛傷冷で、陽氣を脾土に鬱遏するものだから升麻、葛根を用ゐてその火鬱を升散せしむべきわけなのである

好古曰く、升麻葛根湯といふは陽明發散の藥であるが、太陽の證の初期の場合に

これを服すると、その汗を發動して必ず陽明に影響し、反つてその害をなすものである。朱肱の活人書に『瘀血が裏に入つて吐血、衄血するには、犀角地黄湯を用ゐる。これ陽明の經の聖藥だ。もし犀角がなければ升麻を代用する』とあつて、犀角、升麻二物は性、味共に甚だ遠いものだが、何の根據に依つて代用するかといふに、蓋し升麻は能く地黄、及びその他の藥を導いて共に陽明に入るものだからである。

時珍曰く、升麻は陽明の淸氣を導いて上行し、柴胡は少陽の淸氣を導いて上行するものだ。これは生來弱質の者の元氣虛餒、及び勞役、饑飽、生物、冷物等で脾、胃を內傷した者に對する引經の最要藥であつて、升麻葛根湯なるものは陽明の風寒を發散する藥である。予（時珍）は陽氣鬱遏、及び元氣下陷の諸病、時行赤眼を治するに用ゐてその都度著しく明確な效驗を擧げてゐる。方は固執し拘泥するわけに行かないものだ。

ある患者は、元來酒を好む者で、冬の寒季に母の喪に遭ひ、哀哭の儀禮に勉めたために冷を受けて遂に（一四）寒中を病み、食物は薑、蒜なしでは一口も通らず、夏の酷暑にはまた多く水を飲み、また精神上にはある鬱憤を懷いてゐた。それ等の原因

（一四）寒中ハ寒邪ノ爲ニ發スルモノニシテ其證候ハ下文ニヨリ知ラル。

から右腰に一點の脹痛を發して右脇に牽引し、それが胸口まで上ると必ず横臥する外なく、發作すると、大便に裏急後重して頻りに便意のみ催し、小便は長くして數數あり、或は呑酸し、或は吐水し、或は瀉し、或は陽痿し、或は厥逆する。それが酒を飲めばしばらく止み、熱物を攝ればしばらく止むが、寒さに遭ひ、寒物を食ひ、或は勞役し、或は房事を行ひ、或は怒り、或は饑ゑると忽ちに發作して、一旦止むとそれ等種種の症狀は忘れたやうになり、恰も無病の人と變りがない。甚だしいときは一日に幾囘となく發作する。脾を溫め、濕に勝ち、滋補し、消導する諸藥を服ませれば必ず微しは止むが、やはりその後からまた發するのであつた。これに就いて予の考では、これは饑飽、勞逸で元氣を內傷し、淸陽が陷遏して上升不能となるために發つたものと思はれた。そこで升麻葛根湯に四君子湯を合せ、柴胡、蒼朮、黃芪を加へて煎服させ、服藥後に酒を一二盃飲んで藥を助けさせた。すると藥が腹に入ると淸氣の上行するを覺え、胸膈が爽快となり、手、足が和緩し、頭、目が精明となり、精神頓に明快になつて諸種の症狀は掃ふが如くに去り、發作の都度一服すれば直ちに止つて、まことに無比の神驗があつた。しかし、若しこの藥から升麻、葛

根の量を減ずるか、或は服後に酒を飲まないと確にその效力の發現が遲かつた。

概して人間は年齡五十以後になればその氣が消耗するものが多く、增進するものは少い。降るものが多く、升るものは少い。秋、冬の令が多く、春、夏の令は少いのである。若し患者の天禀が弱質で前記の諸證があるならば、いづれもこの藥を用ゐて應機の活手段を加へるがよいのである。素問に『陰精の奉ずる所その人壽く、陽精の降る所その人夭す』とあるが、その千古の明言の祕奧、機微を窺ひ得たものは、張潔古、李東垣の二人だけだ。この二人以外では參同契の悟眞篇の記述がその旨趣に合致するだけである。

又、升麻は能く痘毒を解す。しかしそれは初期發熱時の解毒に用ゐるのと、痘が已に發出して後に氣弱、或は泄瀉するものに少しは用ゐてよいだけのもので、升麻葛根湯としては斑が現れて以後は必ず用ゐてはならないものだ。それは元來この藥は解し散ずるものだからである。本草に、升麻を毒を解し蠱毒を吐する要藥とあるわけは、この物が陽明本經の藥であつて性がまた上升するものだからである。按ずるに、范石湖文集には『李燾は(一五)雷州の(一六)推官として司法事務を執つてゐた頃

(一五)雷州ハ石部霹靂礎ノ註ヲ見ヨ。
(一六)推官ハ裁判官。

治蠱の方を得た。それは、毒が上部に在るには升麻を用ゐて吐かせ、腹に在るには鬱金を用ゐて下す。或は右二物を合せて服すれば必ず吐くなり下すなりする。この方で甚だ多くの人命を救助した』とある。

附方　舊五、新八。【丹砂を服するに用ゐる法】石泉公王方慶の嶺南方に『南方では、養生治病には丹砂に過ぐるものなしとしてある。その方は、升麻末三兩と研錬した光明砂一兩を蜜で梧子大の丸にし、毎日食後に三丸を服す』とある。（蘇頌圖經本草）【豌豆斑瘡】近年、斑瘡が發して短時日間に頭部、面部から全身に蔓延する病がしきりに流行する。その瘡の狀態は火燒瘡のやうで頂部に白漿があり、潰れてはまた直ぐに生じ、治療を加へねば數日にして死亡し、癒えても黯色の瘢痕が消える迄に幾年かを要する。これは惡毒の氣から發するものだ。この病は晉の元帝の時に西北方から盛に流行して來たので虜瘡と稱へる。蜜で煎じて升麻を常時に食ひ、同時に水で升麻を煮て綿に沾して拭ひ洗ふ。（一七）（葛洪肘後方）【瘴を辟け目を明かにする】七物升麻丸――升麻、犀角、黄芩、朴硝、梔子、大黄各二兩、豉二升を微し熬り、共に末に搗いて蜜で梧子大の丸にし、四肢大熱し、大便通じ難きには三十丸を服し、

（一七）大觀ニ外臺祕要ニ作ル。

微し通じの付くを程度とする。四肢の少し熱するには只食後に二十丸を服す。これは瘴を辟けるのみでなく、甚だ能く目を明かにする。（王方慶嶺南方）【俄かに起つた腫毒】升麻を醋で磨つて頻りに塗る。（肘後）【喉痺痛】升麻片を含嚥し、或は半兩を煎服して吐く。（直指方）【胃熱の齒痛】升麻の煎湯を熱して漱ぎ、それを嚥む。解毒には或は生地黄を加へる。（直指方）【口舌の瘡】升麻一兩、黄連三分を末にして綿に裹んで含嚥する。（本事方）【熱痱瘙痒】升麻の煎湯を飲み、幷に洗ふ。（千金方）【小兒の尿血】蜀升麻五分を水五合で一合に煎じて服す。一歳の小兒は一日に一服。（姚和衆至寶方）【産後の惡血】出盡きずして月を超え、或は半年に亙るには、升麻三兩を清酒五升で二升に煮取つて半分づつ二回に服す。惡物を吐下して極めて良結果を得る。（千金翼方）【莨菪の毒を解す】升麻の煮汁を多く服す。（外臺祕要）【挑生蠱毒】幷に野葛の毒。升麻を多く煎じて頻りに飲む。（直指方）【射工、溪毒】升麻、烏翣を水で煎じて服し、その滓を塗る。（肘後方）

苦參（本經中品）

和名　くらら
學名　Sophora angustifolia, Sieb. et Zucc.
科名　まめ科（荳科）

【釋名】　苦蘵（本經）　苦骨（綱目）　地槐（別錄）　水槐（本經）　大槐（別錄）　驕槐（別錄）　野槐（綱目）　白莖（別錄。又、岑莖、綠白、陵郎、虎麻と名ける）時珍曰く、苦とは味から、參とは功力から、槐とは葉の形から名けたものである。苦蘵とは（一）菜部の苦蘵と同一名稱だが實物は異ふ。

〔苦參〕

【集解】　別錄に曰く、苦參は（二）汝南の山谷、及び田野に生ずる。三月、八月、十月に根を採つて曝乾する。弘景曰く、近道の諸處にある。葉は極めて槐葉に似て、花は黄色だ。子は莢になる。根は味が至つて惡る苦い。頌曰く、根は黄色で長さ五七寸ばかり、兩指に岐れてそれに粗、細三五本の莖が竝んで生ずる。苗は高

（一）菜部ニ苦蘵ナシ、濕草部ニ龍葵、一名苦菜、一名苦蘵、又敗醬、一名苦菜、一名苦蘵アリ、之ナ指スナラン。
（二）汝南ハ漢ノ汝南郡、今ノ河南省汝寧、陳州ノ二府、及ビ安徽省穎州府等ニ亙ル。郡治ナ平輿ニ置ク。今ノ河南省汝南縣東南ノ地ナリ。

さ三四尺ほどで、葉は小くして色青く、極めて槐葉に似て、春生じ冬凋む。花は黄白色で七月に小豆子ほどの實を結ぶ。(三)河北地方に生ずるものは花、子がない。五月、(四)六月、十月に根を採つて曝乾する。時珍曰く、七八月頃蘿蔔子のやうなさやを結び、そのさやの中に二三粒の子があつて小豆のやうに堅いものだ。

根【修治】斅曰く、根を採つて糯米の濃泔汁で一夜浸せば腥穢の氣はみな水面上へ浮き出るものだ。それを幾度も淘り出し、午前十時から午後五時まで蒸し晒して切つて用ゐる。

(五)【氣味】【苦し、寒にして毒なし】之才曰く、玄參が使となる。貝母、兎絲、漏蘆を惡み、藜蘆と反す。時珍曰く、汞を伏し、雌黄、焰硝を制す。

(六)【主治】【心腹結氣、癥瘕、積聚、黄疸、尿後に餘瀝あるもの。水を逐ひ、癰腫を除き、中を補し、目を明かにし、涙を止める】(本經)【肝、膽の氣を養ひ、五臟を安んじ、胃氣を平にし、食慾を進め、身體を輕くし、志を定め、精を益し、九竅を利し、伏熱、腸澼を除き、渴を止め、酒を醒し、小便の黄赤、惡瘡、下部の䘌を療ず】(別錄)【酒に漬けて飲めば、疥を治し、蟲を殺す】(弘景)【惡蟲、(七)脛酸を治

(三)河北ハ今ノ直隷省黄河以北ノ地ナリ。

(四)大觀ニハ六月ト十月トノ間ニ八月ノ二字アリ。

(五)木村(康一)曰ク、苦參根ハマトリン(アルカロイド)約二%ヲ含ミ、種子ハ脂肪油三%及ビ少量ノ揮發性アルカロイドシチヂンヲ含有ス。文獻ハ、長井長義、近藤平三郎―藥誌二六〇(明、三六)九九三。近藤平三郎、佐藤俊一―藥誌四七四(大、一〇)六五九。近藤平三郎、貴志二一郎、荒木忠郎―藥誌四七八(大、一〇)一〇四七。近藤平三郎、落合英二―藥誌五二二(大、一四)七〇一。

す】（蘇恭）【（八）熱毒風で皮肌煩躁し瘡を生ずるもの、赤癩で眉の脱つるものを治し、大熱、嗜眠を除き、腹中の冷痛、中惡腹痛を治す】（甄權）【疥蟲を殺す。炒つて性を存して（九）米飲で服すれば、腸風瀉血、幷に熱痢を治す】（一〇）（時珍）

（二）發　明　元素曰く、苦參は味苦く氣沈む。純陰であつて足の少陰、腎經の君藥である。腎の本經を治するに必用のものだ。よく濕を逐ふ。

頌曰く、古今の方に、風熱の瘡疹を治するに最も多く用ゐてある。

宗奭曰く、沈存中の筆談に『腰重く、久しい間坐するのみで歩行し得なかつたが、そのときある將校が「それは齒の病で數年に亙つて苦參を齒に揩つたために、その氣味が齒から入つて腎を傷めたから發つたものだ」といつた。その後太常少卿の舒昭亮も、やはり苦參を幾年間か齒に揩つたために腰を病んだことがあるが、爾後悉く苦參の使用を廢止すると、腰疾はすつかり癒えたといふ。これ等の事實はいづれも方書の記載にはないことだ』とある。

震亨曰く、苦參はよく峻烈に陰氣を補するものだ。それを用ゐたために腰重を起すといふは、氣が降つて升らぬためであつて、腎を傷める關係ではない。この物は

近藤平三郎、眞田德太郎—藥誌四九八（大、一〇）六四四。猪子森明—藥誌三三〇（明、四二）九四八。P. C. Plugge und A. Rauwerde: Arch. d. Pharm. 234 (1896) 619. M. Freuerde u. R. Gauff: Arch. d. Pharm. 256 (1919) 33.

（六）木村（康）曰ク、健胃ニハ一日量五—一五瓦。蛔蟲驅除煎劑一日量四ハ一〇〇。臺灣ニ於テハ毒蛇ノ咬傷ニ內用ス。牛馬ノ皮膚ノ寄生蟲驅除ニ全草ノ煎汁ヲ外用ス。

（七）脛酸ハ脛ノイタミ。

（八）熱毒ハ窒扶斯。

（九）米飲ハ米ヲ飯ニ作ル。

大風に著しい治功がある、風熱細疹の如きはいふまでもない。

時珍曰く、子、午は少陰の君火の對化である。故に苦參、黄蘗の苦、寒は皆よく腎を補ふものだ。蓋しその苦が濕を燥し、寒が熱を除く作用を取るのであつて、熱は風を生じ、濕は蟲を生ずるものだから、またよく風を治し蟲を殺すのである。しかしこれを用ゐて適當なのは腎水が弱くして相火が勝つものの場合だけであつて、火が衰へ、精が冷え、眞元が不足するもの、及び高齢者には用ゐられない。素問には『五味は胃に入れば各〻その喜び攻むる所に歸する。それが久しきに亙れば氣を増す。これは物の有機的關係の當然であつて、氣が増すことが更に久しきに亙れば夭死の因原となる』とあり、王冰の註に『肝に入つては溫となり、心に入つては熱となり、肺に入つては淸となり、腎に入つては寒となり、脾に入つては至陰となり、四氣を兼ねていづれもその味を增し、その氣を益して各〻その本臟の氣に從ふことになる。故に久しく黄連、苦參を服すれば反つて熱するのはその類であつて、氣が無限に增大すれば臟氣に偏勝が生じ、偏勝があれば臟に偏絶がある。隨つてその結果は頓死となるのである。このゆゑに藥の五味が具はらず四氣の備はらぬものは、

(一〇)大觀ニ時珍ヲ大明ニ作ル。

(一一)木村(康)曰ク、マトリンノ皮下注射ニヨル致死量ハ家兎ノ體重一瓩ニ付約〇・四瓦ナリ、其作用ハ最初大腦ノ痲痺、次デ痙攣中樞ノ興奮ニヨリ強度ノ痙攣ヲ發シ、遂ニ横隔膜並ニ呼吸筋運動神經末梢ノ痲痺ニヨル呼吸靜ニヨリ死ヲ致ス。シチジンハマトリンニ生理作用ニ於テ相似タリ。而シテソノ生理作用ハ稍ニコチンニ類ス。

文獻ハ石坂友太郎—東醫一七(明、三六)四九〇、四六七。杜聰明—臺醫誌二三七(大、一三)1。Dale and Laidlaw: J. Pharm. and exp. Ther. 3 (1912) 215.

(一二)左手陽明合谷ノ穴ニ灸スルヲ云フナラン。
(一三)史記ニハ出入無[illegible]ニ作ル。
(一四)結胸ハ脾胃虚、胸胃弱ノ爲ニ[illegible]ヌルモノヲ云フ。

久しく服すれば一旦勝を獲て效果を現はすけれども、久しきに渉れば必ず頓死の殃に遭ふものである』とある。ただ一般人は甚だ輕卒で、それ等の關係に周到な注意と理解が及ばないから困るのだ。張從正も、やはり『凡そ藥なるものは皆毒である。甘草や苦參と雖も毒にならぬと斷言されるものではない。久しく服すれば五味各〻その臟に歸して必ず偏勝、氣增の患がある。諸藥いづれも同樣だ。苟も醫學に從事する者は、必ずその藥に就てその類の關係に對する用意を的確にし、その效果を擧るやうにすべきであつて、飲食物の如きに至つてもやはり同樣だ』といつてある。

又按ずるに、史記に『太倉公淳于意が齊の大夫の齲齒を治したとき、(一二)左手の陽明の脈に灸し、苦參湯で日每に三升を用ゐて漱がせ、その風を(一三)出入せしめて五六日で平癒した』とあるは、やはり風氣濕熱を去り、蟲を殺すの關係に據つたものだ。

附方　舊十一、新十七。【熱病狂邪】水火の中へも飛び込み、人をも殺し兼ねぬほど狂ふには、苦參末を蜜で梧子大の丸にし、十丸づつを薄荷湯で服す。また末にして二錢を水で煎じて服するもよし。(千金方)【傷寒の(一四)結胸】流行病である。四五日

（一五）大觀ニ三ヲ二ニ作ル。

（一六）穀疸ハ一名黑疸、黃疸ノ一種食後眩運シテ遍體黃ヲ發スルモノニシテ、額上ハ黑色トナリ、大便モ黑色トナルモノ。

（一七）大觀ニハ中惡ヲ卒ニ作ル。

結胸し、滿痛し、壯熱するには、苦參一兩を醋（一五）三升で一升二合に煮取り、これを飲んで吐けば癒える。天行毒病は苦參と醋の藥以外では解せぬものだ。また溫かに寢具を覆ふて汗を取るがよし。（外臺祕要）【（一六）穀疸、食勞】頭が旋運し、心が怫鬱し、不安を覺え、黃を發する。これは空服に過ぎた時俄に過食したために胃氣が冲薰して起るのだ。苦參三兩、龍膽一合を末にして牛膽で梧子大の丸にし、一日三回、生大麥苗の汁で五丸を服す。（肘後方）【小兒の身熱】苦參の煎湯で浴するがよし。（外臺祕要）【毒熱足腫】脫けるほど痛むるは、苦參を酒で煮て足を漬ける。（姚僧垣集驗方）【夢遺、食慾減退】白色の苦參三兩、白朮五兩、牡蠣粉四兩を末にし、雄豬肚一頭分を洗淨して砂甑で煮爛し、それを石臼で搗き和ぜ、藥が乾けば汁を入れて小豆大にし、一日三回、四十丸づつを米湯で服す。久しく服すれば身體が肥り、食慾は進み、夢遺は立ろに止まる。（劉松石保壽堂方）【小腹の熱痛】顏色が青黑く、或は赤く、喘ぐ能はざるには、苦參一兩、醋一升半を八合に煎じて二回に分服する。（張傑子母祕錄）【（一七）中惡心痛】苦參三兩、苦酒一升半を八合に煮て二回に分服する。（肘後方）【飲食物の中毒】魚肉、菜等の毒には、上記の方を煎服して吐けば癒える。（梅師方）

（一八）大觀ニハ石上銀字アリ。

【血痢の止まぬもの】苦參を炒り焦して末にし、水で梧子大の丸にして十五丸づつを米飲で服す。（孫氏仁存堂方）【大腸脫肛】苦參、五倍子、陳壁土等分の煎湯で洗ひ、木賊末を傅ける。（醫方摘要）【妊婦の排尿困難】方は貝母の條を見よ。【產後の露風】四肢煩熱に苦しみ、頭痛するには、小柴胡を與へ、頭痛せぬには、苦參二兩、黃芩一兩、生地黃四兩、水八升を二升に煎じて數回に分服する。【齒縫の出血】苦參一兩、枯礬一錢を末にして毎日三回揩れば立ろに效驗がある。（普濟方）【齲齒風痛】方は發明の項を見よ。【鼻瘡膿臭】蟲があるものだ。苦參、枯礬一兩、生地黃汁三合、水二盞を三合に煎じて少しづつ滴らす。（普濟方）【肺熱で瘡を生じたるもの】全身に亙るには、苦參末を粟米飯で梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に米飲で服す。（御藥院方）【全身の風疹】痺痛して忍び難く、胸、頸、臍、腹、及び陰部の附近に及び、また涎痰もあつて夜間睡眠し得ぬには、苦參末一兩を、皂角二兩を水一升で揉み、濾し取つた汁を（一八）石器で熬膏したもので和して梧子大の丸にし、三十丸づつを食後に溫水で服すれば翌日癒える。（寇宗奭衍義）【大風癩疾】頌曰く、苦參五兩を切つて好き酒三斗で三十日間漬け、毎日三回、一合づつを服し、不斷常服して痺を覺えるやうにな

れば痊える。張子和の儒門事親では、苦參末二兩を用ゐ、豬肚に納れて縫合して煮熟し、取出して藥を取り去り、先づ一日絶食して翌朝新水一盞を飲んでからその豬肚を食ふ。吐いたならば再び食ひ、一二時經てから肉湯で無憂散五七錢を調へて服す。大、小の蟲一二萬ほどを出して效果がある。然る後に蛀の付かぬ皂角一斤を皮を去つて煮た汁に前の苦參末を入れて糊に調へ、何首烏末二兩、防風末一兩半、當歸末一兩、芍藥末五錢、人參末三錢を入れて梧子大の丸にし、一日三回、三五十丸づつを溫酒、或は茶で服し、外部を麻黃、苦參、荊芥を煎じた水で洗ふ。○聖濟總錄では、苦參丸——大風癩、及び熱毒風瘡、疥癬を治す。苦參を九月末に掘取つて皮を去つて曝乾し、粉にして一斤を取り、枳殼を麸で炒つて六兩を末にして蜜で丸にし、日中二回、夜間一回、溫酒で三十丸づつを服す。ある方では枳殼を去る。【腎臟風毒】及び肺の積熱で皮膚に疥癩を生じ、瘙痒時に黃水を出すもの、及び大風で手、足壞爛するもの、一切の風疾。苦參三十一兩、荊芥穗十六兩を末にして水糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを茶で服す。（和劑局方）【上、下の諸瘻】或は項にあり、或は下部にあるには、苦參五升を三四日間苦酒一斗に漬けて服す。反應を覺えるを

(一九)鼠瘻ハ瘰癧。
(二〇)漏瘡ハ穴洞ニナリ排泄物ヲ出ス瘡。

度とする。(肘後方)【(一九)鼠瘻惡瘡】苦參二斤、露蜂房二兩、麴二斤を二夜の間水二斗に漬けて滓を去り、黍米二升を入れて醸熟し、毎日三回、少しづつ飲む。(肘後方)【下部の(二〇)漏瘡】苦參の煎湯で日毎に洗ふ。(直指方)【瘰癧、結核】苦參四兩を牛膝汁で菉豆大の丸にし、二十丸づつ煖水で服す。(張文仲備急方)【湯火傷】苦參末を油で調へて傅ける。(衞生寶鑑)【赤白帶下】苦參二兩、牡蠣粉一兩五錢を末にし、雄豬肚一箇を水三盌で煮爛したものと泥に搗き和ぜて梧子大の丸にし、百丸づつを溫酒で服す。(陸氏積德堂方)

實　十月に採取する。　**氣味**　根に同じ。　**主治**　【久しく服すれば身を輕くし、老衰せず、目を明かにする。槐子を餌ふと同じ方法で餌へば效驗がある】(蘇恭)

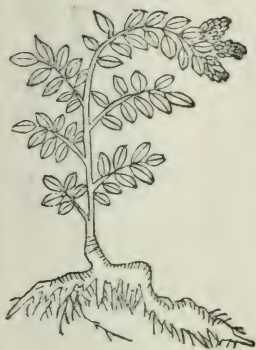
白鮮　鮮の音は仙(セン)である。

(本經中品)

和名　はくせん
學名　Dictamnus albus, L.
科名　ヘンルーダ科(芸香科)

釋名　白羶(弘景)　白羊鮮(弘景)　地羊鮮(圖經)　金雀兒椒(日華)　弘景曰く、俗に白羊鮮と呼ぶは氣臭が如何にも羊の羶氣に似てゐるからである。また白羶

ともいふ。時珍曰く、鮮とは羊の臭氣の意味である。この草は根の色が白く、羊のやうな羶氣があり、その子が纍纍として椒のやうなところから右の諸名稱で呼ばれるのだ。

【集解】別錄に曰く、白鮮皮は(一)上谷の川谷、及び(二)寃句に生ずる。四月、五月に根を採つて陰乾する。弘景曰く、近道の諸處にあるが蜀中に產するものが良い。恭曰く、その葉は茱萸に似て高さ一尺餘あり、根は皮が白く心が實し、花は紫白色だ。根は二月に採取するがよい。四月、五月に採つては虛してゐて惡い。頌曰く、今は(三)河中、(四)江寧府、(五)滁州、(六)潤州にいづれもある。苗の高さ一尺餘、莖は靑く、葉は稍や白く、槐のやうでもあり茱萸にも似てゐる。四月に淡紫色の小蜀葵の花に似た花を開く。根は小蔓靑に似て、皮は黃白色で心は實したものだ。山間の住民は嫩苗を採つて蔬菜にして食ふ。

〔白　鮮　皮〕

(一)上谷郡ハ秦ニ置ク、モト戰國ノ代ノ地ナリ。保定、易州、宣化、及ビ順天、河間ノ一部皆ソノ境ナリ、漢ニ郡治ヲ沮陽ニ置ク、即チ今ノ直隸省懷來縣ノ地ナリ。

(二)寃句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。

(三)河中府ハ石部石中黃子ノ註ヲ見ヨ。

(四)宋ノ江寧府ハ今ノ江蘇省江寧縣ニ治ス。

(五)滁州ハ人參ノ註ヲ見ヨ。

(六)潤州ハ薺苨ノ註ヲ見ヨ。

（七）濕痺ハ脚氣ノ一種疼痛アルモノ。

（八）時疫ハ腸窒扶斯。

（九）風痺ハ氣血凝滯手足拘攣スルヲ云フ。中風ノ一種熱アルヲ風トイヒ、熱ナキヲ痺ト云フ。

根皮 【氣味】【苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、鹹し。之才曰く、螵蛸、桔梗、伏苓、萆薢を惡む。

【主治】【頭風、黃疸、欬逆、淋瀝、婦人の陰中腫痛、（七）濕痺、死肌で屈伸し起居し歩行し能はぬもの】（本經）【四肢の不安、時行の腹中大熱で水を飲み、走り出で、或は大叫するもの。小兒の驚癎、婦人產後の餘痛を療ず】（別錄）【一切の熱毒風、惡風、風瘡、疥癬赤爛、眉髮脫脆、皮肌が急に壯熱して惡寒するものを治し、熱黃、酒黃、急黃、穀黃、勞黃を解す】（甄權）【關節を通じ、九竅、及び血脈を利し、小腸の水氣を通ずる。天行（八）時疾、頭痛眼疼。その花も同一功力である】（大明）【肺嗽を治す】（蘇頌）

【發明】時珍曰く、白鮮皮は氣が寒にして善く行り、味は苦く、性は燥である。足の太陰、陽明の經に於て濕熱を去る藥であつて、兼ねて手の太陰、陽明に入り、諸黃、（九）風痺の要藥である。一般の醫師がただ瘡科に用ゐるに止めてあるは見地が淺薄だ。

【附方】舊一、新一。【鼠瘻の已に破れたるもの】膿血の出るには、白鮮皮の煮汁一升を服す。鼠の子のやうなものを吐出する。（肘後方）【產後の中風】體力が虛して

他の藥を服し得ぬには、一物白鮮皮湯——新汲水三升で一升に煮て溫服する。（陳延之小品方）

(一)延胡索（宋開寶）

和名　えんごさく
學名　Corydalis bulbosa, DC. (?)
科名　けし科（罌粟科）

【釋名】玄胡索　好古曰く、本來の名は玄胡索だが、宋の眞宗の諱を避けて玄の字を延の字に書き改めたのである。

【集解】藏器曰く、延胡索は(二)奚國に生ずるもので、(三)安東を經て中國へ來る。時珍曰く、奚とは東北方蠻夷の稱である。今は(四)三茅山の西の上龍洞で栽培する。毎年(五)寒露の節後に栽ゑて(六)立春の節後に苗が生え、葉は竹葉のやうな形で三月頃長さ三寸になり、高い根が(七)芋卵のやうになつて叢生するのを

〔延胡索〕

(一)牧野云フ、延胡索ノ下ニハ數種ノ品種ガアルト思フ、やまえんごさく即チ Corydalis remota, Fisch. 并ニえぞえんごさく即チ C. ambigua, Cham. et Schlecht. 又ハおほばのえんごさく即チ C. Vernyi, Franch. et Sav. ナドノ種類ガソレデナイカト思フ、集解ノ文中ニ根ガ叢生スルトアルモノハ或ハじらうばうえんごさく即チ C. decumbens, Pers. ヲ指シタモノヂハナイカトモ思フ。木村(康)曰ク、朝鮮ニかうらいえんごさく(C. Nakaii, Ishidoya)アリ、朝鮮博物學會雜誌第六號（昭、三）ニ石戸谷勉氏ノ說アリ。

立夏の頃に掘り起すのである。

根 (八)【氣味】【辛し、溫にして毒なし】珣曰く、苦く甘し。杲曰く、甘く辛し、溫である。升るべく降るべく、陰中の陽である。好古曰く、苦く辛し、溫である。純陽で浮である。手、足の太陰の經に入る。

【主治】【血を破る。婦人の月經不調、腹中の結塊、崩中淋露、産後の諸血病、血運、(九)暴血衝上、損傷に因る下血には、酒で煮、或は酒に磨つて服す】(開寶)【風を除き、氣を治し、腰、膝を暖め、暴腰痛を止め、癥癖、撲損瘀血を破り、胎を落す】(大明)【心氣小腹痛を治するに神效がある】(好古)【氣を散じ、腎氣を治し、經絡を通ずる】(李珣)【血を活し、氣を利し、痛を止め、小便を利す】(時珍)

【發明】珣曰く、腎氣、及び産後の(一〇)惡露を破り、或は(一一)兒枕に主效がある。三稜、鼈甲、大黄と共に散にするが甚だ良く、蛀蚛のために末になつたものが就中良し。

時珍曰く、玄胡索は味は苦く微し辛し、氣は溫である。手、足の太陰、厥陰の四經に入り、能く血中の氣滯、氣中の血滯を行る。故に專ら身體上、下の諸痛を治す

(二) 奚國、奚トハ種族ノ名、モトノ東胡種ナリ。魏ニハ庫莫奚ト稱シ、隋、唐ニハ奚ト稱シテ今ノ熱河省ノ承德、灤平、豐寧、平泉等ノ諸地方ニ據ル。

(三) 安東、唐ニ安東都護府ヲ置ク、即チ今ノ朝鮮ノ地ニシテ平壤城ニ治ス。

(四) 三茅山ハ周末ノ道士茅濛ノ孫盈、固、裏三人兄弟ガ仙人トナリテ棲ミタル山、三茅君ノ山ナリ。即チ今ノ江蘇省勾容縣ノ茅山、一名句曲山、梁ノ陶弘景隱居ノ地ナリ。

(五) 寒露ハ十月初旬。

(六) 立春ハ二月初旬。

(七) 芋卵ハ芋ノ塊莖。

(八)木村(康)曰ク、やぶゑんごさくノ塊莖ニハプロトピン、プルボカプニン、テトラヒドロパルマチン及融點二二八―二三〇ノ非フェノール性アルカロイドヲ含有ス。

文獻ハ K. Makcshi: Arch. Pharm. 264 (1908) 401.

朝比奈泰彦、用瀬盛三―藥誌四六三大、九)七二六六。

長田捷二―藥誌五四七(昭、二)七一一。

(九)暴血衝上ハ血逆ニ同ジ。

(一〇)惡露ハ產後ノオリモノ。

(一一)兒枕痛ハ產後ノアトハラノイタムコト。

るにこれを用ゐ、的中の妙言ふべからざるものである。

荊穆王の妃胡氏が、蕎麥麪を食ひ且つ怒を發したことが原因で胃脘に病を生じたときは、心に當つて痛み忍び難く、醫師が吐、下、行氣、化滞の諸藥を用ゐても、すべて口に入れば直ちに吐くので奏功のすべがなく、大便は三日に亙つて通じなかつた。その際、雷公炮炙論に『心痛で死せんとするには速かに延胡を覓めよ』とあるを思ひ付いたので、玄胡索末三錢を温酒で調へて進めると、藥はそのまま腹に入つて、少頃すると大便が通じ、痛はそれで止んだのであつた。又、華老は年齡五十餘で、下痢腹痛を病んで、遂に垂死の狀態に陷り、已に棺の準備までしたのであつたが、予がこの藥三錢を用ゐて米飲で服ませると、痛みは十の五を減じ、漸次に健康が整調して平安になつた。按ずるに、方勺の泊宅編には『身體全部に亙つて耐へ難く痛む病の患者があつて、都下の醫師は、或は中風だといひ、或は中濕だといひ、或は脚氣だといひ、それぞれ藥を投じたが悉く效がなかつた。その時、周離亨が「これは氣血の凝滞から惹起したものだ」といつて、玄胡索、當歸、桂心等分を末にして三四錢を服ませ、また適量に隨ひ痛の止むを度として頻りに服ませると、痛は遂に

止んだのであつた。蓋し玄胡索はよく血を活し氣を化する第一位の藥である。その後待制趙霆が(二)導引の術を行つて適法を過つたために肢體が拘攣したときも、やはりこの方を用ゐて數服で癒えた』とある。

附方　舊三、新十二。【老人、小兒の欬嗽】玄胡索一兩、枯礬二錢半を末にし、二錢づつを軟かい餳一塊に和して含む。(仁存堂方)【衄血】玄胡索末を綿に裹んで耳を塞ぐ、鼻の左孔から出るには右耳を塞ぎ、右孔から出るには左耳を塞ぐ。(普濟方)【尿血】玄胡索一兩、朴硝七錢半を末にし、四錢づつを水で煎じて服す。(活人書)【小便不通】捻頭散――小兒の小便不通を治す。延胡索、川苦楝子等分を末にし、毎服半錢或は一錢を白湯に油數點を滴らして調へて服す。(錢仲陽小兒直訣)【膜外の氣疼】及び氣塊。延胡索を多少に限らず末にし、豬の脊肉一具を塊に切り、炙熟してその藥末を蘸けて頻りに食ふ。(勝金方)【熱厥心痛】或は發し、或は止み、久しく癒えずして身熱し足寒するには、玄胡索を皮を去り、金鈴子肉と等分を末にして二錢づつを溫酒、或は白湯で服す。(聖惠方)【下痢腹痛】方は發明の項を見よ。【婦人の血氣】腹中刺痛、月經期の不調には、玄胡索を皮を去つて醋を炒り、當歸を酒に浸し

(二)導引ハ一種體操術。

て炒つて各一兩、橘紅二兩を末にして酒で煮た米糊で梧子大の丸にし、一百丸づつを空心に艾醋湯で服す。（濟生方）【産後の諸病】凡そ産後に穢汚が盡きずして腹滿するもの、及び産後の血運で心臓の位置の硬きもの、或は寒熱禁ぜざるもの、或は心悶し、手、足煩熱し、氣力絶せんとする諸病には、いづれも延胡索を炒つて研り、酒で（一三）二錢を服すれば甚だ效がある。（聖惠方）【小兒の（一四）盤腸】氣痛するには、延胡索、茴香等分を炒つて研り、病兒の大、小を量つて空心に米飮で服ます。（衛生易簡方）【疝氣の危急】玄胡索を鹽で炒り、全蠍を毒を去つて生のままと等分を末にし、半錢づつを空心に鹽酒で服す。（直指方）【冷氣腰痛】玄胡索、當歸、桂心の三味。方は發明の項を見よ。【肢體の拘痛】方は上に同じ。【偏正頭痛】忍び難きには、玄胡索七箇、青黛二錢、牙皂二箇を皮を去り、以上を末にして水で和して杏仁大ほどの丸にし、一丸を水に溶化して患者の鼻へ灌ぎ込む。偏頭痛には左、右に隨つてそれぞれ左、右の孔に灌ぐ。かくて口に銅錢一箇を咬んで居れば盆に一箇ほど涎が出て癒える。（永類方）【車馬の墜落】筋骨痛の止まぬには、延胡索末二錢を豆淋酒で毎日二回づつ服す。（聖惠方）

（一三）大觀ニ二ヲ一ニ作ル。
（一四）盤腸ハ腹痛拘急スルヲ云フ。

(一)貝母（本經中品）

和名　あみがさゆり、ばいも
學名　Fritillaria verticillata, Willd. var. Thunbergii, Baker.
科名　ゆり科（百合科）

釋名　**莔**（爾雅）　音は萠（ホウ）である。**勤母**（別錄）　**苦菜**（別錄）　**苦花**（別錄）　**空草**（別錄）　**藥實**　弘景曰く、形が貝が寄り集つたやうだから貝母と名けたのだ。時珍曰く、詩經に『言にその莔を采る』とあるはこの物のことだ。一には蝱と書く。それは根の形狀が蝱のやうだからである。苦菜、藥實と呼ぶ名稱は野苦蕒、黃藥子の名稱と同一だ。

集解　別錄に曰く、貝母は(二)晉地に生ずる。十月に根を採つて暴乾する。恭曰く、その葉は大蒜に似たものだ。四月に蒜の熟する時採收するが良い。十月に採つては苗が枯れるので根もやはり佳くない。(三)潤州、(四)荊州、(五)襄州のものが最も佳い。江南の諸州にもある。

頌曰く、今は(六)河中、江陵府、郢、壽、隨、鄭、蔡、潤、滁の諸州にいづれもある。二月苗が生えて莖は細く青く、葉もやはり青く、蕎麥の葉に似て苗に隨つて出

(一)牧野云フ、支那デ貝母ト稱スル者ニハ二三種アルヤウデアル即チ Fritillaria Roylei, Hook. f. ヲモ貝母ト云ヒ、又川貝母トモ稱スル、又らん科ノ Coelogyne pogonioides, Rolfe. ヲモ貝母ト稱ヘル、あみがさゆりノ方ノ貝母ハ一ニ浙貝母ト呼バルル。植物名實圖考ニ圖シアル貝母ハ何カ、てんなんしやう科（天南星科）品ノ初生木ノ樣ニ見エルガ、其レガ何ンデアルカ能ク分ラヌ。

(二)晉地ハ水部井泉水ノ晉ノ註參照。

(三)潤州ハ薺苨ノ註ヲ見ヨ。

(四)荊州ハ石部石炭ノ楚ノ註ヲ見ヨ。

(五)襄州ハ石部理石

ノ註、及ビ貫衆ノ荊襄ノ註參照。
(六)河中ハ石中黄子河中府ノ註參照。
(七)括樓葉ノ貝母ノ圖紹興校正本草圖ニ出ヅ、其根ニ鱗莖ナシ。
(八)本草逢原、本草原始共ニ精ヲ睛ニ作ル。
(九)大觀ニ藍ヲ鹽ニ作ル。

る。七月碧綠色で豉子花のやうな形の花を開く。八月に根を採るのだが、その根には黄白色の瓣子があり、さながら貝子が寄り集つたやうなものだ。この物には數種類あつて、陸機の詩經の疏に『莔は貝母である。葉は(七)栝樓のやうで細く小さく、子は根下に芋子のやうに著き、色は正白だ。四方から連なり累つて附著してゐるが一一分解されてゐる』とあつて、現に近道に出るものが確かにこの種類だ。また郭璞の爾雅註には『白い花で葉は韭に似てゐる』とあるが、この種類のものは一向に見ることが稀である。

〔貝　母〕

○斅曰く、貝母の中に、單獨の顆の團塊になつてゐて兩片とならず皺の無いものがある。これは丹龍(八)精と號するもので藥用には入れない。誤つてこれを服すれば筋脈が永く收まらなくなるものだ。しかしただ黄精、小(九)藍汁を服すれ

ば立ろに解する。

根　修治　斅曰く、凡そこれを用ゐるには柳木灰中で黄に炮き、(一〇)擘き破つて内口鼻(一一)中にある米粒ほどの心一顆を去つてから糯米に拌ぜて鏊上で共に炒り、米が黄になるを待つて米を取り去つて用ゐる。

(一二)氣味　【辛し、平にして毒なし】別錄に曰く、苦し、微寒なり。恭曰く、味は甘く苦いもので辛くはない。之才曰く、厚朴、白微が使となる。桃花を惡み、秦艽、莽草、(一三)礜石を畏れ、烏頭と反す。

主治　【傷寒の煩熱、淋瀝、邪氣、(一四)疝瘕、喉痺、乳(一五)難、金瘡、(一六)風痙】(本經)【腹中の結實、心下の滿、(一七)洗洗たる惡風寒、目眩、項直、欬嗽、上氣を療じ、煩熱渇を止め、汗を出し、五臟を安じ、骨髓を利す】(別錄)【これを服すれば饑ゑず、穀食を斷ち得る】(弘景)【痰を消し、心、肺を潤ほす。末を砂糖に和し丸にして含めば嗽を止める。灰に燒いて油で調へて人畜の惡瘡に傅ければ瘡口を斂める】(大明)【胸脇の逆氣、時疾、黄疸に主效がある。研末して目に點ければ膚瞖を去る。七個を末にして酒で服すれば產難、及び胞衣不出を治す。連翹と共に服すれば項下

(一〇)大觀ニ擘ノ下ニ破ノ字アリ。
(一一)中字大觀ニ上ニ作ル。
(一二)木村(康)曰ク、貝母ノ鱗莖ハ結晶性アルカロイドフリチラリンヲ含有ス。
(一三)本草原始ニ礜ヲ礬ニ作ル、文獻ハ八木精一—京醫一〇(大、二)一七五。
(一四)疝瘕ハ肝臟病。
(一五)癰ノ誤、湯液本草ヲ見ヨ。
(一六)風痙一名子癇妊婦ノヒキツケ。
(一七)洗洗ハ皮毛凄滄惡寒ノ貌。

の瘤瘻疾に主效がある』（甄權）

【發明】承曰く、貝母は能く心胸鬱結の氣を散ずるものだから、詩に『言に其の蝱を采る』といつたので、詩の作者が志を得ない鬱情を寓したものだ。今それを用ゐ、心中の氣の不快にして愁鬱多きを治するに甚だ功があるといふは理由があることだ。

好古曰く、貝母なるものは肺經の氣分の藥であつて、仲景が寒實結胸で外に熱證なきものを治するに三物小陷胸湯を主とし、また丸、散にするもよしといふは、その內に貝母が入れてあるからである。成無己は『辛は散じ、苦は泄するものだ。桔梗、貝母の苦、辛を用ゐるは氣を下すがためである』といつてある。

機曰く、俗に、半夏には毒があるのでそれに代へて貝母を用ゐるといふが、そもそも貝母なるものは太陰、肺經の藥であり、半夏なるものは太陰、脾經、陽明、胃經の藥である。代用さるべき筈があらうか。虛勞、欬嗽、吐血、喀血、肺痿、肺癰、婦人の乳癰、癰疽、及び諸種の鬱證の場合ならば、半夏は禁忌だからいづれも貝母を嚮導藥として代用することもよいとして、脾、胃の濕熱で涎が化して痰となり、久

しくして火が生じ、痰火が上攻し、昏慣し、僵仆し、蹇濇するの諸證で、生死旦夕に在るものに至つてはいかで貝母を代用されようか。

○頌曰く、貝母は惡瘡を治するものだ。唐代の書に次のやうな記事がある。

『江左のある商人が、嘗て左膊上に人間の顏のやうな瘡が生じた。別段に苦いほどのものでもなかつたので、ある時商人が戯れにその口の部分へ酒を滴らすとその顏が赤くなつた。また物を當て見るとやはりよくそれを食ふ。そこで多く食はせると膊の筋肉が脹起し、食はせないと膊全體に痺れるのであつた。ある名醫の指圖で金石、草木の類の諸藥を一一試みると、何を食はせても一向平然たるものだつたが、貝母を食はせたとき忽ち眉を顰めて目を閉ぢたので、商人は面白がつて小さい葦の筒でその口を毀つて貝母を灌ぎ込んだ。すると數日にして瘡は痂になつて癒えて了つた。しかしその瘡が果して何病かは判らなかつた』

本經に『金瘡に主效がある』とあるが、これはその所謂金瘡の類のものかも知れぬ。

附方　新十七。「憂鬱不伸」胸膈の寬ならぬには、貝母を心を去つて薑汁で炒

つて研り、薑汁麪糊で丸にして七十丸づつを征士(一八)鎖甲の煎湯で服す。(集效方)【痰を化し氣を降す】欬を止め、鬱を解し、食物を消化し、脹れを除くに奇效がある。貝母を心を去つて一兩、薑制の厚朴半兩を蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつを白湯で服す。(筆峯方)【小兒の(一九)晬嗽】生後百日以内の嬰兒が欬嗽で痰が壅がるには、貝母五錢、半生半炙の甘草二錢を末にして砂糖で芡子大の丸にし、一丸づつを米飲に溶かして服ます。(全幼心鑑)【妊婦の欬嗽】貝母を心を去つて麩で黄に炒つて末にし、砂糖と拌ぜて芡子大の丸にし、一丸づつを含嚥すれば神效がある。(救急易方)【妊婦の尿難】飮食が平常と變りなきには、貝母、苦參、當歸各四兩を末にして蜜で小豆大の丸にし、三丸乃至十丸づつを飮で服す。(金匱要略)【乳汁の出ぬもの】二母散——貝母、知母、牡蠣粉等分を細末にし、豬蹄湯で二錢づつを調へて服す。これは祖傳の方だ。(王海藏湯液本草)【冷涙目昏】貝母一箇、胡椒七粒を末にして點ける。(儒門事親方)【目の弩肉】肘後では、貝母、眞丹等分を末にして日毎に點ける。○摘玄方では、貝母、丁香等分を末にして乳汁で調へて點ける。【吐血】貝母を炮いて研り、温漿水で二錢を服す。(聖惠方)【衄血】貝母を炮いて研末し、漿水で二錢を服

(一八)鎖甲ハ金鎖鐵甲ノ略兵士ノ軍裝。

(一九)晬嗽ハ生後百日以内ノ嬰兒ガ欬嗽デ痰ガツマル病。

し、少頃して再服する。(普濟方)【小兒の(二〇)鵞口】口全體が白く爛れるには、貝母を心を去り末にして半錢を、水五分、蜜少量で煎じて三沸し、一日四五回、繳淨して抹する。(聖惠方)【(二一)吹奶で痛むもの】貝母末を鼻中に吹き込めば大に效がある。(危氏得效方)【乳癰腫の初期】貝母末二錢を酒で服し、癰を他人に吮はせれば通じる。(仁齋直指方)【(二二)便癰腫痛】貝母、白芷等分を末にして酒で調へて服す。或は酒で煎じて服し、その滓を貼る。(永類鈐方)【紫白癜斑】貝母、南星等分を末にし、(二三)澡豆生薑汁をつけて塗擦する。○德生堂方では、貝母、乾薑等分を末にし、のやうにして室中で浴し擦つて汗を出すが妙である。○談埜翁方では、生薑でその斑を擦動し、母貝を醋で磨つて塗る。○聖惠方では、貝母、百部等分を末にして自然薑汁で調へて搽る。【蜘蛛の咬傷】咬まれた部分を縛つて他へ毒の行らぬやうにし、貝母末半兩を酒で服して醉へば少頃して酒は化して水となる。瘡口からその水が出盡きてから瘡口を塞いで置くが甚だ妙である。(仁齋直指方)【蛇、蠍の咬傷】方は上に同じ。

(二〇)鵝口ハシロシタ。

(二一)吹奶ハ乳房炎乳房神經痛、乳房膿腫等。

(二二)便癰ハ一名便毒和名ヨコネ。

(二三)澡豆ハ洗ヒ粉。

(一)山慈姑（宋嘉祐）

和名　さんじこ
學名　Coelogyne bulbodiscoides, Franch.
科名　らん科（蘭科）

[釋名]　金燈（拾遺）　鬼燈檠（綱目）　朱姑（綱目）　鹿蹄草（綱目）　無義草

時珍(一)曰く、根の形狀が水慈姑のやう、花の形狀が燈籠のやうで朱色だから右の諸名がある。段成式の酉陽雜俎に『金燈は花が葉と時を異にして相見えぬところから、世人はこれの生えるを惡み、無義草と呼ぶ』とある。又、試劍草といふ草にも鹿蹄草なる名稱があつて同名だ。その草は後の「草の五」の篇に記載する。

[集解]　藏器曰く、山慈姑は山中の濕地に生ずるもので、葉は車前のやう、根は慈姑のやうだ。大明曰く、(二)零陵地方にある團慈姑といふ一種も、根は小蒜のやうで治病上の主效が略ぼ同樣だ。

時珍曰く、山慈姑は諸處にあるものだ。冬季に水仙花の葉のやうな狹い葉が生え、その葉が二月中に(三)枯れてから箭簳のやうな高さ一尺ばかりの一本の莖端に白色の花を開く。また紅色、黃色のものもあり、上に黑點がある。多數の花が簇つて

(一)牧野云フ、北原植物ハ多分下ニ記入シタモノデアラウ又ゆり科ノあまな卽チ Tulipa edulis, Baker. ヲ從來之レニ充テ來ツテヰルガ今直チニ之レヲ全然否定スル譯ニモ行カヌ點モアルヤウニ思フ、植物名實圖考ニやまのいも科ノかしゆういもヲ山慈姑トシテアルガ之レハ無論眞物デハナイ。白井曰ク、佛人著支那安南藥材篇ニハ山慈姑ノ學名ニ Amaryllis lutes, L. ヲ充ツ、一說トシテ之ヲ揭グ。木村(康)曰ク、現在ノ市場品ハサレツプ根ニ似タル蘭科ノ根莖ナリ卽チ Cologyne ノ種ナラン。

(二)零陵、漢ニ零陵

郡ヲ置ク、今ノ廣西省全縣ノ西南七十八支里ニ郡治ノ故城零陵縣ノ古趾アリ。後漢ニ治ヲ今ノ湖南省零陵縣ノ北二支里ニ置キ、晉、宋、齊コレニ因ル。帝舜ヲ葬リタル舜陵ノ地ヲ古地名零陵ト稱ス。陵ハ今ノ湖南省寧遠縣ノ東南ニ在リ。
(二)本草藥言ニ枯ヲ抽ニ改ム從フベキガ如シ、然レバ一莖ヲ抽キト讀ミ意義大ニ通ズ。

一朶になり、絲の紐を結び合はせて作つたやうな可愛い形のものだ。三月に三稜のある子を結び、四月の初に苗が枯れる。その頭根を掘り取るのだが、その形狀は慈姑か小蒜のやうだ。時季が遲れると苗が腐つて所在が判らなくなる。根と苗は老鴉蒜に極めてよく似てゐるが、老鴉根には毛がなく、この慈姑は毛殼に包裹されてゐる點が異るだけだ。用ゐるには毛殼を取去る。

〔山慈姑〕

根【氣味】【甘く微し辛し、小毒あり】【主治】【癰腫、瘡瘻、瘰癧、結核等には醋で磨つて傅ける、また人の顏の皮を剝き換へ、皯䵴を除く】(藏器)【疔腫に主效があり、毒を攻め、皮を破り、諸毒、蠱毒、蛇蟲、狂犬の咬傷を解す】(時珍)

【附方】 新五。【粉滓面皯】山慈姑の根を夜塗つて朝洗ふ。(普濟方)【牙齦の腫痛】紅燈籠の枝と根の煎湯で漱ぎ吐く。(孫天仁集效方)【癰疽、疔腫】惡瘡、及び黃疸には、慈姑を根を連ね、蒼耳草と等分を搗き爛らし、好き酒一鍾で濾してその汁を溫

服する。或はこれを乾かして末にし三錢づつを酒で服す。(乾坤生意)【風痰癇疾】金燈花根の蒜に似たもの一箇を茶清で研つて泥のやうにし、日中茶で調へて時時に服し、そのまま日中に臥せば少頃して雞子大の物を吐出し、それ以後永く發らない。もし吐かぬときは熱茶で服す。(奇效良方)【萬病解毒丸】一名太乙紫金丹、一名玉樞丹――諸毒を解し、諸瘡を療じ、關節を利し、百病を治し、起死回生の功述べ盡し難い。凡そ平時の遠距離旅行、また戰爭や大衆を動かす場合には缺くべからざるものである。山慈姑を皮を去りよく洗ひ淨め焙じて二兩、川五倍子を洗ひ刮り焙じて二兩、千金子仁の白いものを研り紙で壓搾し油を去つて一兩、芽の紅い大戟を蘆を去り洗ひ焙じて一兩半、麝香三錢を用ゐ、端午、七夕、重陽の日、或は天德、月德、黃道の上吉日を撰び、豫め齋戒して服裝を改め、藥品の取扱ひに精心を凝らしてそれぞれ末にし、それを祭壇に供へて禮拜祈禱してから、薄絹の重ね篩で羅つてよく勻ぜ、糯米の濃飲で和して木臼で千杵搗き、一錢づつを一錠に作るのである。病甚しきには續けざまに服して一二回通じを付けてから、溫粥を啜つて補ふ。凡そ一切の飲食物、藥毒、蠱毒、瘴氣、河豚、土菌、死牛馬等の毒には、いづれも涼水で一錠

(四) 絞腸沙ハ乾霍亂。
(五) 鬼迷ハ鬼撃ノ類ニテ卒ニ吐血、衄血シ又ハ下血シテ煩悶スルモノチ云フナラン。
(六) 太陽ハ目尻ノ傍ノ經穴ノ名。

を磨つて服すれば或は吐き、或は下して直ちに癒える。癰疽發背、疔腫、楊梅等の一切惡瘡、風癬、赤遊、痔瘡には、いづれも涼水、或は酒で磨つて日毎に數回塗ればたちに消す。陰、陽二毒、傷寒狂亂、瘟疫、喉痺、喉風には、いづれも冷水に薄荷汁數匙を入れたものに溶化して服す。心氣痛、幷に諸氣には淡酒に溶化して服す。中風、中氣で口緊し、眼歪むもの、泄瀉、下痢、霍亂、(四)絞腸沙には薄荷湯で服す。縊死、溺死(五)鬼迷で心頭の温かなるには、冷水で磨つて灌ぐ。傳尸勞祭には、涼水に溶化して服す五癩、五癇、鬼邪、鬼胎、筋骨、攣痛には、いづれも暖酒で服す。年久しき日淺き瘧疾には、發作時に東流水で煎じた桃枝湯に溶かして服す。婦人の月經閉止には、紅花酒に溶して服す。小兒の驚風、五疳、五痢には、薄荷湯で服す。頭風、頭痛には、酒で研つて兩(六)太陽の上に貼る　種種の腹の鼓脹には、麥芽湯に溶かして服す。風蟲牙痛には、酒で磨つて塗り、また少量を呑む。打撲傷損には、松節を煎じた酒で服す。湯火傷、毒蛇、惡犬、一切の蟲傷には、いづれも冷水で磨つて塗り、同時に服す。(王璆百一選方)

葉【主治】【瘡腫には蜜を入れて擣いて瘡口に塗る。膿血が出るやうになれ

ば效がある】（愼微）【乳癰、便毒に塗るが就中妙である】（時珍）

［附方］　新一。【溪毒に中つて生じた瘡】朱姑葉を搗き爛らして塗る。冬期に生えた蒜の葉のやうなものを用ゐる。（外臺祕要）

花［主治］【小便の血淋、濇痛には地蘗花と共に陰乾して三錢づつを水で煎じて服す】（聖惠）

石蒜（宋圖經）

和名　ひがんばな、まんじゆしやげ
學名　Lycoris radiata, Herb.
科名　ひがんばな科（石蒜科）

［釋名］　**烏蒜**（綱目）**老鴉蒜**（救荒）**蒜頭草**（綱目）**婁婁酸**（綱目）**一枚箭**（綱目）**水麻**（圖經）時珍曰く、蒜とは根の形狀から名けたもの、箭とは莖の形狀から名けたものだ。

［集解］　頌曰く、水麻は(一)鼎州、(二)黔州に生じ、その根を石蒜と名ける。九月に採收する、或は金燈花の根も石蒜と名けるといふが此に類したものである。

時珍曰く、石蒜は諸處の下濕の地にある。古は烏蒜といひ、俗に老鴉蒜、一枝箭

(一) 鼎州ハ唐ノ朗州ノ地ナリ。宋ニ鼎州トナシ、後ニ常德府トナス。今ノ湖南省常德縣ソノ舊治ナリ。
(二) 黔州ハ黃連施、黔ノ註參照。

といふがそれである。春初に蒜の秧、及び山慈姑の葉のやうな葉で背に(三)劒脊があり、地上四邊に散り布いて生え、七月苗が枯れてから平地に長さ一尺ほどの一本の莖が箭簳のやうに抽き出てその莖の端に花を

〔石　蒜〕

開く。花は四五朶になり、色は紅く山丹花のやうな形で瓣が長く、蕊が黄で花絲が鬚のやうに長い。根の形は蒜のやうで皮の色は紫赤、肉は白色である。これは小毒あるものだ。救荒本草に『ゆがいて水に浸せば食へる』とあるが、それは救荒の場合に限ることだ。また一種類に、葉が大韮のやうで四五月に莖が抽き出で、小萱花のやうな黄白の花を開くものがある。これは(四)鐵色箭と呼び、效力はこれと同じ。この二物はいづれも莖が抽出で、花が開いて後に葉が生えるもので、花と葉と相見えないことは金燈と同様だ。

根　(五)氣味　【辛く甘し、溫にして小毒あり】　(六)主治　【腫毒に傅貼す

(三) 劒脊ハ一條ノ大筋ヲ云フ。

(四) 白井曰ク、鐵色箭ハ Lycoris aurea, Herb. 和名しやうきらんノコトナラン。

(五) 木村(康)曰ク、成分ハ鮮莖中ニ二種ノアルカロイドリコリン及セキサニンヲ含有ス。

(六) 木村(康)曰ク、リコリンハ内服或ハ皮下注射ニヨリテ動物ニ嘔吐ヲ發セシム其有效量ハ犬ノ體重一瓩ニツキ皮下注射一・五瓩内服〇・七瓩ニシテ、此ノ量ニ於テハ嘔吐流涎ノ他著シキ證候ヲ發セズ、局所作用モ認メズ、リコリンハ其藥理的作用エメチント同類ニ屬シエメチン、ツエフエリン、リコリン類ニ毒性ハ弱ク

る】（蘇頌）【疔瘡、惡核には水で煎服して汗を取り、また擣いて傅けるがよく、又溪毒に中つたものは酒で半升を煎服して吐くが良し】（時珍）

(七) 附方　新三。【便毒諸瘡】一枝箭を擣き爛らして塗れば消える。若しその毒が最も甚しいときは洗淨して生白酒で煎服し、微し汗を出せば癒える。（王永輔濟世方）【産腸脱下】老鴉蒜、即ち酸頭草一把を水三盌で一盌半に煎じ、滓を去つて熏洗すれば神效がある。（危氏得效方）【小兒の驚風】一聲大叫して死するものを老鴉驚と名ける。散麻で脇下、及び手の心、足の心を纏ひ括つて燈火で爆し、老鴉蒜を晒し乾し、車前子と等分を末にして水で調へて手の心に貼り。燈心に火を點けて手足の心、及び肩膊、眉の心、鼻の心を焠けば正氣が付く。（王日新小兒方）

水仙（會編）

和名　すゐせん
學名　Narcissus Tazetta, L. var. chinensis, M. Roem.
科名　ひがんばな科（石蒜科）

釋名　**金盞銀臺**　時珍曰く、この物は卑濕の場所が適し、必ず水がなければならぬものだから水仙と名けるのだ。金盞銀臺とは花の形容である。

催吐作用ハ強シ、リコリンハ解熱作用アリヂヒドロリコリンハアメーバ赤痢病ニ對シエメチンヨリモ強ク作用ス。

(七) 木村(康)曰ク、鱗莖ハ袪痰藥トシテ吐根ニ代用ス、毒性強キヲ以テ注意ヲ要ス、新藥セキサノールハ石蒜ノ製劑ニシテ袪痰藥ナリ。又メリヂンハ鹽酸ヂヒドロリコリン五%ノ水溶液ニシテアメーバ赤痢及肺ヂストマノ治療ニ皮下注射ニ用ウ。文獻ハ森島庫太―藥誌一六八(明二九)一三一。東醫九(明二八)五〇七。Arch. exp. path. Pharmakol 40 (1838) 221. 朝比奈泰彥、杉井善雄―藥誌三七七(大、

二)六三七。
近藤平三郎、富村邦好—藥誌五四五(昭、二)五四五。
江塚市—日新醫報一〇年(大、一〇)八號。
森島庫太—東京醫事二四〇二(大、一四)。
江塚市—千醫一三四(大、一〇)一七九。
刈米達夫、木村雄四郎—邦產藥植(昭、三)三〇三。

〔水仙〕

【集解】機曰く、水仙は花、葉が蒜に似て花の香が甚だ清い。九月初に肥えた土地へ栽ゑれば花が茂盛し、瘦地では花が著かぬ。五月初に根を採收して童尿に一夜浸し、晒乾して火のある煖かな處へ懸けて置く。舊い根を移さずに植ゑて置けば更に旺になるものだ。

時珍曰く、水仙は下濕の場所に叢生するもので、根は蒜、及び薤に似て長く、赤い外皮がそれを裹む。冬季に薤、及び蒜に似た葉が生え、春初に葱頭のやうに抽出る葉の端に花を開く。花は數朶になり、大さは簪の先ほどで形が酒盃のやうだ。尖つた五片が上に黄の心を承けて宛ら盞のやうなその姿は瑩かで風情があり、床しい清香がある。また一種、花が重瓣のものは花瓣が皺んで下が輕黄色、上が淡白色で盃の形にはなつてゐない。世間ではこれを珍重して眞の水仙だといつてゐるが、

蓋しさうではない。これは一物中の二種に過ぎないのだ。また花の紅いものもある。按ずるに、段成式の酉陽雜俎には『㮈祇といふものが(一)拂林國に產する。根の大さは鷄卵ほど、葉は長さは三四尺、蒜に似たもので、葉の叢中から莖條が抽き出てその端に花を開く。花は六出の紅白色で花の心は黄赤色だ。子は結ばない。冬生えて夏枯れる。その花から油を搾つて身體に塗れば風氣を去るといふ』とある。この說に據れば形狀は水仙と彷彿たるものだが、外國のことだから名稱も異ふのではあるまいか。

根　(二)[氣味]【苦く微し辛し、滑して寒なり、毒なし】土宿眞君曰く、これから取つた汁は汞を伏す。雄黃を煮れば火を拒ぐ。(三)[主治]【癰腫、及び魚骨哽】(時珍)

花　[氣味](缺)　[主治]【香油を作つて身體に塗り、理髮に用ゐれば風氣を去る。又、婦人の五心發熱を療ずるには、乾荷葉、赤芍藥と等分を末にして白湯で二錢づつを服すれば熱が自ら退く】(時珍)　記載は衞生易簡方にある。

(一)拂林國ハ隋唐ニ地中海、黒海ノ沿岸、希臘、土耳古ノ一帶、卽チ東羅馬帝國ヲ指シタル稱ナリ。

(二)木村(康)曰ク、水仙ニハリコリン及セキサニンヲ含有セリ、クチベニスヰセン及ラツパスヰセンニツキ報告セラルルナルチシンハリコリント同一物ナリト。文獻ハ朝比奈、杉井—藥誌三七七(大、一二)六三七。

(三)木村(康)曰ク、民間ニ一切ノ腫物ニ水仙ノ鱗莖ヲ摺リ用ウ、殊ニ乳房ノ腫痛ニ賞用ス。

(一)白　茅（本經中品）

和名　ちがや
學名　Imperata arundinacea, Cyr. var. Kœnigii, Benth.
科名　禾本科（禾本科）

【釋名】根を**茹根**と名ける。（本經）**蘭根**（本經）**地筋**（別錄）時珍曰く、茅は葉が矛のやうだから茅といひ、根が牽き連なるから茹といふので、易に『茅を抜けば連茹たり』とあるがそれである。數種あつて、夏花さくものを茅といひ、秋花さくものを菅といひ、二物は效用が相近くして名稱が異ふ。詩に『白華菅兮、白茅束兮』とあるはこれである。別錄には、茅と菅を二種に區別せずして茅根、一名地菅、一名地筋と謂つてあるが、有名未用の部にまた地筋、一名菅根を掲げてある。蓋しこの二物は、根の形狀がいづれも筋のやうだから通じて地筋といふは差支ないが、茅と菅とは混ずべきでない。そこに正して置く。

【集解】別錄に曰く、茅根は(二)楚地の山谷、田野に生ずる。六月に根を採る。弘景曰く、これは今の白茅菅のことだ。詩に『露彼菅茅』といふがこれである。その根は渣芹のやうで甜美である。

(一)本經ニ茅根ニ作ル。

(二)楚地ハ石部石炭ノ註ヲ見ヨ。

頌曰く、諸處にある。春芽が生え、地に布いて針のやうだから俗に茅針といふ。また噉めば小兒の健康に甚だ益するものだ。夏茸茸として白い花を開いて秋になつて枯れる。その根は至つて潔白なものだ。六月に採取する。又、菅といふものもあるがやはり茅の類だ。陸璣の草木疏に『菅は茅に似て滑かで毛がなく、根の下五寸の中に白粉がある。柔靭で繩に綯へるが、就中(三)漚したものが善い、まだ漚せぬものをば野菅と名ける』とある。藥としての功力は茅と同樣だ。

時珍曰く、茅に白茅、菅茅、黄茅、香茅、芭茅の數種あつて葉は皆相似てゐるが白茅は短く小さく、三四月に穗になつた白花を開き、細い實を結ぶ。根は甚だ長くして白く軟かく、筋のやうで節がある。味は甘い。俗に絲茅と呼んで苫にして物を蓋ふに用ゐ、また祭祀の(四)苞苴の用に供する。本經に茅根を用うとあるはこの物だ。根の乾いたものは夜視て光がある。故に腐れば螢に變ずるのだ。菅茅はただ山上に生え、白茅に似て長く、秋に入つて莖が抽き出で、穗になつた荻花のやうな花を開いて實を結ぶ。その實は尖つて黑く、長さ一分ばかり、衣類に粘り人を刺すものだ。根は短くして硬く細く、竹の根のやうで節がない。味は微し甘い。やはり藥

(三)漚ハ水ニ漬テ洒スコト。

(四)苞苴ハ苞裹ヲ云フ、神ニ供スルコモツツミ。

〔白茅〕

に入れるがその效力は白茅に及ばない。爾雅に所謂『白華は野菅なり』とあるはこの物だ。黄茅は菅茅に似て莖の上に葉を開き、莖の下に白粉があり、根の頭に黄毛がある。その根はやはり短く細く、硬くして節がない。秋深く菅のやうな穗になつた花を開く。繩に綯へるもので、古は黄菅と稱した。別錄に菅根を用うとあるはこの物だ。香茅は一名菁茅、一名瓊茅といひ、湖南、及び江淮地方に生ずる。三筋の脊があつて香氣の高いものだ。捆包用の蓆や酒を搾るものに作る。禹貢に所謂『荊州は苞匭、菁茅』とあるはこの物だ。芭茅は叢生し、葉が大きくして蒲のやう、長さ六七尺のもので二種ある、卽ち芒だ。後の芒の條に記載する。

茅根 〔氣味〕【甘し、寒にして毒なし】〔主治〕【勞傷虛羸に中を補し、氣を益す。瘀血、血閉の寒熱を除き、小便を利す】（本經）【五淋を下し、客熱の腸、胃に

在るを除き、渇を止め、筋を堅くする。婦人の崩中。久しく服すれば健康を利す】(別錄)【婦人の月經不順、血脈を通じ、淋瀝に主效がある】(大明)【吐、衄の諸血を止める。傷寒噦逆、肺熱喘急、水腫、黄疸。酒毒を解す】(時珍)

【發明】弘景曰く、茅根は服食斷穀に甚だ良し。一般醫方に用ゐるは稀で、煎汁で淋、及び崩中を療する位のものだ。時珍曰く、白茅根は甘くして能く伏熱を除き、小便を利す、故によく諸血、噦逆、喘急、消渇を止め、黄疸、水腫を治するには良い物だ。世人は輕微なるが故に忽にし、ただ苦寒の劑さへ用ゐればよいものと心得て、ために沖和の氣を傷るの結果を招いでゐる。この物に氣が付きさうなことはない。

【附方】舊二、新十二。【山中辟穀】凡そ俗界の多難を無人の境に避けるには、白茅根を取つて洗淨して咀嚼し、或は石上で晒し焦して末に搗き、水で方寸匕を服すれば穀食を廢しても饑ゑない。(肘後方)【溫病の(五)冷啘】熱甚だしくして水を飲み、ために俄かに冷啘するには、茅根を切り、枇杷葉を毛を拭ひ去つて香しく炙き、各半斤を水四升で二升に煎じ、滓を去つて少しづつ飲む。(龐安常傷寒卒病論)【溫病の熱

(五)冷啘ハ呃逆ニ同ジ。

噦】乃ち伏熱が胃に在つて胸満すれば氣が逆し、逆すれば噦する。或は大いに下して胃中が虚冷してもやはり噦を發する。茅根を切り、葛根を切り、各半斤を水三升で一升半に煎じ、一錢づつを温食で服すれば噦が止み熱が停む。（同上）【反胃上氣】食物が入ると直ぐ吐くには、茅根、芦根各二兩、水四升を二升に煮て頓服し、下せば良し。（聖濟總錄）【肺熱氣喘】生の茅根一握を㕮咀し、水二盞で一盞煎じて食後に温服する。甚きも三服で止む。これを如神湯と名ける。（聖惠方）【虚後の水腫】水を飲み過ぎ、小便の利せぬが原因のものには、白茅根一大把、小豆三升を水三升で煮乾かし、その茅を去つて豆を食へば水は小便に随つて下る。（肘後方）【五種の黄疸】黄疸、穀疸、酒疸、女疸、勞疸である。黄色の汗の出るは大いに汗の出たとき水に入つたために發るもので、身體が微し腫れて黄蘗汁のやうな汗が出るものだ。生茅根一把を細に切り、豬肉一斤と合せて羹にして食ふ。（肘後方）【酒の中毒】恐らくは五臟の爛れるものである。茅根の汁一升を飲む。（千金方）【小便熱淋】白茅根四（六）升を水一斗五升に煮取り、冷、暖適宜にして一日三回服す。（肘後方）【小便出血】茅根の煎湯を頻りに飲むが佳し。（談埜翁方）【勞傷の尿血】茅根、乾薑等分に蜜一匙を入れ水二

（六）升ハ斤ノ誤ナラン、金陵本亦升ニ作ル。

鍾で一鍾に煎じ、一日一回服す。【鼻衄】茅根末二錢を米泔水で服す。(聖惠方)【吐血】千金翼では、白茅根一握を水で煎じて服す。○婦人良方では、根を洗つて搗き、一日一合づつその汁を飲む。【竹、木の肉に入つたもの】白茅根を燒いて末にし、豬脂に和して塗る。風が入つて腫と成つたものにも良し。(肘後方)

茅針 生えたばかりの苗である。(拾遺)

主治 【水を下す】(別錄)【消渇を治し、よく血を破る】(甄權)【小腸を通じ、鼻衄、及び暴下血を治するには水で煎て服す。惡瘡、癰腫、軟癤の潰れぬには酒で煮て服す。茅針一本を煮れば一箇の孔、二本煮れば二箇の孔が明く。生で揉んで金瘡に傅ければ血を止める】(藏器)

氣味 【甘し、平にして毒なし】大明曰く、涼なり。

花

氣味 【甘し、温にして毒なし】

主治 【煎じて飲めば吐血、衄血、幷に塞鼻を止める。又、灸瘡の合はぬに傅け、刀、箭の金瘡を罯ひば血、幷に痛を止める】(大明)

屋上敗茅

氣味 【苦し、平にして毒なし】

主治 【突然の吐血には、剉んで三升の酒に浸して一升に煮て服す。醬汁に和して研つて斑瘡、及び蠶嚙瘡に傅

ける】(藏器)【屋根の四隅の茅は鼻洪に主效がある】(大明)

[發明] 時珍曰く、按ずるに、陳文中の小兒方に『痘瘡が潰爛してなかなか靨とならず乾かぬには、古屋根の爛茅を擇り取り、洗ひ焙じ乾かして末にして摻る』とある。蓋しその性が寒にし毒を解し、又、多年雨露霜雪の氣を受けてよく濕を燥する力を兼ねる點を取るのである。

[附方] 新三。【婦人の陰痒】屋根の爛茅、荊芥、牙皂等分を水で煎じて頻りに熏じ洗ふ。(摘玄方)【大便閉塞】服藥しても通ぜぬには、滄鹽三錢、屋簷の爛草節七箇を末にし、一錢づつを竹筒で肛內一寸の深さに吹き入るれば通じる。これを提金散と名ける。(聖濟方)【卒中五尸】その容體は、腹痛脹急、呼吸困難、上に心胸にさし込み、旁ら兩脇を攻め、或は凝塊が涌き出るやうに生じ、腰、脊に牽引する。これは身中の尸鬼が活躍して害を爲すのである。屋上四隅角の茅を取つて銅器に入れ、腹を赤帛三枚で覆うた上へその銅器を置き、中の茅を燒いて熱すれば痛に隨つて追ひ拂ひ、(七)蹠下が痒くなつて直ちに癒える。(肘後方)

(七)蹠ハ掌部アシクビ。

地筋（別錄有名未用）

和名　あかひげがや
學名　Heteropogon contortus, Beauv.
科名　禾本科（禾本科）

【釋名】菅根（別錄）。土筋（同）

【集解】別錄に曰く、地筋は(一)漢中に生ずる。根に毛がある。二月生え、四月白い實を結ぶ。三月三日に根を採る。弘景曰く、これは白茅のただ少し異るだけのものをいふのではないかと思はれる。藏器曰く、地筋は地黄のやうなもので根も葉もよく似て細く、毛が多く、平澤に生ずる。功用も地黄と同じ。李邕の方の中に用ゐてある。時珍曰く、これは黄菅(二)毛の根のことだ。功用は白茅根と同じ。詳細は白茅の條を見よ。陳藏品がいふ物は別の一種の植物で、菅の根ではない。

〔地筋菅茅〕

(一)漢中ハ石部理石ノ註ヲ見ヨ。
(二)毛恐クハ茅ノ誤寫。

【氣　味】【甘し、平にして毒なし】(別錄)【主　治】【氣を益し、渇を止め、熱の腹臍に在るを除き、筋を利す】(別錄)【根、苗、花共に功用は白茅と同じ】(時珍)

芒（拾　遺）

和　名　すすき、かや
學　名　Miscanthus sinensis, Anders.
科　名　禾本科(禾本科)

【校　正】拾遺の石芒、敗芒箔を併入せ入る。

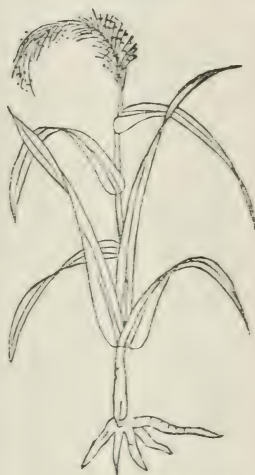
【釋　名】**杜榮**(爾雅)　**芭芒**(寰宇志)　**芭茅**　時珍曰く、芒の字は爾雅に䓾と書いてある。今は俗に之を芭茅といふ。(一)籬芭の材料になるからだ。

【集　解】藏器曰く、爾雅に『䓾は杜榮なり』とあり、郭璞の注に『この草は茅に似たもので、皮は繩や履き物になり、現に東方地方では多くこれを(二)箔にする』とある。又、石芒といふは高山に生ずるもので、芒のやうで節が短い。江西では折草と呼ぶ。六七月に荻のやうな穗が生える。

時珍曰く、芒に二種あつていづれも叢生する。葉はいづれも茅のやうで大きく、長さ四五尺あり、甚だ鋭利なもので、よく鋒刃のやうに人を傷け、七月長莖が抽出て

(一)籬芭ハカキネ。
(二)箔ハ敷物。

〔芒〕

蘆、葦の花のやうな穗になつた白花を開くものを芒といふ。五月短莖が抽出て芒のやうな花を開くものは石芒である。いづれも將に花が咲かんとする頃その(三)籜皮を剝いで繩や箔や草履などの諸物に作り、莖と穗は箒にも作る。

莖　【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【人畜が虎、狼等に傷けられて毒が內部へ入る虞あるには、莖を取り葛根を雜ぜて濃く煮た汁を服す。また生で取つた汁も服す】(藏器)【煮汁を服すれば血を散ず】(時珍)

敗芒箔　【主治】【產婦の血滿、腹脹、(四)血渴、惡露の盡きぬもの、月經閉止。好き血を止め、惡血を下す。鬼氣、疰痛、癥結を去るには酒で煮て服し、また燒いて末にして酒で服す。久しく年を經て煙の著いたものほど佳し】(藏器)

(三)籜皮ハ葉鞘ヲ云フ。

(四)血渴ハ諸出血ノ爲メ及產婦蓐中ニ渴スルモノ。

(一)龍膽（本經中品）

和名 しなりんだう（新稱）
學名 Gentiana scabra, Bunge.
科名 りんだう科（龍膽科）

【釋名】 **陵游** 志曰く、葉は龍葵のやう、味は膽のやうに苦い。それに因つた名稱だ。

【集解】 別錄に曰く、龍膽は(二)齊の胸の山谷、及び宛句に生ずる。二月、八月、十一月、十二月に根を採つて陰乾する。弘景曰く、今は近道に出るが吳興のものが勝れて居る。根の形狀は牛膝に似て味が甚だ苦い。頌曰く、(三)宿根は黃白色で下へ十餘條の根が抽き出で、牛膝のやうだが短い。直上に苗が生えて高さ一尺餘になり、四月に蒜の若芽のやうな葉が生え、莖は細く小竹枝のやうだ。七月に牽牛花のやうな花を開く。その花は風鈴のやうな姿

（龍膽）

(一)牧野云フ、我邦產ノりんだうハしなりんだうノ一變種デVar. Buergeri, Maxim. (G. Buergeri, Miq.) デアル。
(二)齊ノ胸、楊氏前漢圖ニ據レバ今ノ山東省青州ノ南ニ在ル臨胸ヲ當時ノ臨胸トナス。卽チ齊國ノ地ナリ。又同氏ハ今ノ山東省萊州ノ北ニ臨胸ヲ示シ、東平縣ノ南ニハ胸城ヲ示シ、今ノ江蘇省海州ノ地ヲ胸トナス。別錄ノ齊ノ胸ハ今ノ青州臨胸ノ胸山ヲ指スモノノ如シ。宛句ハ沙參ニ註アリ。
(三)宿根ハ多年生ノ根。

で色は青碧だ。冬季遲く子を結んで苗が枯れる。俗に草龍膽と呼んでゐる。又、(四)山龍膽といふがあつて、それは味が苦く濇く、葉は霜雪に遭つても凋まない。山間の住民はそれを四肢の疼痛を治するに用ゐる。これは同一類中の別種のものだ。採收に一定の時期はない。

根 [修治] 斅曰く、採收したならば陰乾して置く。使用する時には銅刀で鬚と上の頭(五)子を切り去り、細かに剉んで甘草湯に一夜浸し、漉出して暴乾して用ゐる。

(六)[氣味] 【苦く濇し、大寒にして毒なし】 斅曰く、空服にこれを食へば尿がい、しまりなく出る。之才曰く、貫衆、小豆が使となる。地黃、防葵を惡む。

(七)[主治] 【骨間の寒熱、驚癇、邪氣。絶傷を續ぎ、五臟を定め、蠱毒を殺す】(本經) 【胃中の伏熱、時氣溫熱、熱泄下痢を除き、腸中の小蟲を去り、肝、膽の氣を益し、(八)驚惕を止める。久しく服すれば智を益し、物を忘れず、身體を輕くし、老衰を防ぐ】(別錄) 【小兒の壯熱、骨熱、驚癇の心に入りたるもの、時疾の熱黃、癰腫、口乾を治す】(甄權) 【客忤、疳氣、熱狂。目を明かにし、煩を止め、瘡疥を治す】(大明)

(四)牧野云フ、從來山龍膽ヲはるりんだうニ充テアレド、是レハ其品デハナイト思フ、日本ニハ無イ、何カ別ノ種ニ屬スルモノデアル。

(五)大觀ニ子ヲ丫ニ作ル。

(六)木村(康)曰ク、邦產龍膽ノ新鮮ナル根ハ大約二%ノゲンチチピクリント四%以上ノゲンチアノーゼヲ含有ス。文獻ハ朝比奈泰彥、照山秀太郎―藥誌三八二(大、二)一一七五。朝比奈泰彥、依田四郞―藥誌三九(大、三)九一二。

(七)木村(康)曰ク、日本藥局ノ製劑ハ龍膽越幾斯、龍膽丁幾、複方蘆薈丁幾、健胃散、健胃錠等ナリ苦味性健胃藥トシテ用ヰラル。

（八）驚惕ハ驚悸ニ同ジ、神經性心悸、俗ニムナサワギ。

【目中の黄、及び睛赤、腫脹、瘀肉高起して忍び難く痛むを去る】（元素）【肝經の邪熱を退け、下焦濕熱の腫を除き、膀胱の火を瀉す】（李杲）【咽喉痛、風熱、盜汗を療す】（時珍）

【發明】元素曰く、龍膽は味苦く性寒で氣味共に厚い。沈であつて降る。陰である。足の厥陰、少陽の經の氣分の藥であつて、その應用に四種ある。下部の風濕を除くが一、また濕熱を除くが二、臍下から足に至る腫痛を除くが三、寒濕脚氣を除くが四である。下行する功力は防已と同じく。酒に浸して用ゐれば能く上行する。外行するには柴胡を主とし龍膽を使とする。眼中の疾を治するに必用の藥である。好古曰く、肝膽の氣を益して火を泄す。時珍曰く、相火が肝、膽に寄在するには瀉すべき理由はあるが補すべき理由はないものだ。故に龍膽が肝、膽の氣を益するは正にそのものが能く肝、膽の邪熱を瀉する結果である。しかし大苦、大寒のものだから過量に服しては胃中の生發の氣を傷め、反つて火邪を助ける結果となる恐れがある。やはり久しく黄連を服すれば反つて火化に從ふ結果となると同一關係だ。別錄に『久しく服すれば身を輕くする』とある說は恐らく信ずるに足らない。

附方　舊四、新六。【傷寒發狂】草龍膽を末にして雞子清を入れ、白蜜を溶かした涼水で二錢を服す。（傷寒蘊要）【四肢の疼痛】山龍膽根を細かに切り、生薑の自然汁に一夜浸してその性を去り、焙乾して搗いて末にし、一錢匕を水で煎じて溫服する。これは龍膽と同類別種の植物で、霜を經ても凋まぬものだ。（蘇頌圖經本草）【穀疸、勞疸】穀疸は食物から起るもの、勞疸は勞から起るものである。龍膽一兩、苦參三兩を末にして牛膽汁で和して梧子大の丸にし、一日三回、食前に麥飲で五丸づつを服し、なほ癒えぬときはやや量を增す。勞疸には龍膽一兩、梔子仁二十一箇を猪膽で和して丸にする。（删繁方）【一切の盜汗】婦人、小兒一切の盜汗。又、傷寒後の盜汗の止まぬを治す。龍膽草を研末し、一錢づつを猪膽汁三兩に溫酒少量を點入して調へて服す。（楊氏家藏方）【小兒の盜汗】身熱するには、龍膽草、防風各等分を末にして一錢づつを米飲で調へて服す。また丸にしても服し、また水で煎じても服す。（嬰童百問）【咽喉の熱痛】龍膽を水に擂つて服す。（集簡方）【暑行目澀】生龍膽の搗汁一合と黃連を浸した汁一匙とを和して點ける。（危氏得效方）【眼中の漏膿】龍膽草、當歸等分を末にして二錢づつを溫水で服す。（鴻飛集）【蛔蟲の心を攻むるもの】

刺痛し、清水を吐くには、龍膽一兩を頭を去つて剉み、水二盞で一盞に煮取り、一晝夜絶食して翌早朝に頓服する。(聖惠方)【突然の(九)尿血】止まぬには、龍膽(一〇)一虎口を水五升で二升半に煮取り、五回に分服する。(一一)(姚僧坦集驗方)

(一)細辛(本經上品)

和名　うすばさいしん
學名　Asarum Sieboldi, Miq.
科名　うまのすずくさ科(馬兜鈴科)

【釋名】小辛(本經)　少辛　頌曰く、(二)華州の眞細辛は根が細く味が極めて辛い。故に名づけて細辛といふのである。時珍曰く、小辛、少辛いづれも右と同意義だ。按ずるに、山海經に『(三)浮戲の山、少辛多し』とあり、管子に『(四)五沃の土に群藥生ず、少辛これなり』とある。

【集解】別錄に曰く、細辛は(五)華陰の山谷に生ずる。二月、八月に根を採つて陰乾する。弘景曰く、今用ゐる(六)東陽、(七)臨海のものは、形態は好いが、辛烈な點では華陰、(八)高麗のものに及ばない。これを用ゐるには其の頭の節を取り去る。當之曰く、細辛は葵のやうなもので赤黑く、一根一葉の相連なるものである。

(九)大觀ニ尿ヲ下ニ作ル。
(一〇)一虎口ハ一握。
(一一)大觀ニ外臺祕要ニ作ル。
(一)牧野云フ、植物名實圖考ニ圖セル細辛ハうすばさいしんデハナイ、支那デ細辛ト稱スルモノハ地方ニヨツテ其植物ガ異ツテヰルト思ハレル、今私ハ姑ラクうすばさいしんヲ其レニ充テテ置ク、コノ品ハ無論支那ニモアル、卽チ盛京省竝ニ湖北省ニ產シ、其土地デ細辛ト呼ンデヰル。
(二)華州ハ石部花乳石ノ註ヲ見ヨ。
(三)浮戲之山、未考。
(四)五沃土、未考。
(五)華陰ハ石部白石英ノ註ヲ見ヨ。
(六)東陽ハ石部禹餘

線ノ註ヲ見ヨ。
(七)臨海ハ石部石髓ノ註ヲ見ヨ。
(八)高麗ハ土部墨ノ註ヲ見ヨ。
(九)飯帚ハタハシ。
(一〇)江淮ハ安徽、江蘇地方。
(一一)襄漢ハ湖北省襄陽ヨリ陝西省漢中ニ至ル漢水流域ノ地ヲ指ス。

頌曰く、今は諸處にあるが、いづれも華陰のものの純眞なるには及ばない。根が細く、極めて辛いものだ。今世人は多く杜衡をこの物としてゐるが、杜衡根は(九)飯帚に似て密に入り亂れ、細くして長さ四五寸あり、微黄白色のもので、(一〇)江淮地方で馬蹄香と呼ぶものだ。誤用してはならない。

宗奭曰く、細辛は葉が葵のやうで色が赤黑い。形色がこれと異ふものならば杜衡である。杜衡は葉が馬蹄の跡のやうだから俗に馬蹄香ともいひ、蘆根は白前にも似て居り、また細辛にも似て居る。按ずるに、沈括の夢溪筆談に「細辛は華山に產するもので、極めて細くして直く、柔かで靱く、深紫色で味は極めて辛い。嚼めば習習として椒のやうだが椒よりも更に甚だしいものだ。本草に「細辛は水に漬けて直くする」とあるところから杜衡をその物に贋せる。東南地方で用ゐる細辛は皆杜衡だ。杜衡は黄白色の拳曲した脆いもので、乾けばかたまりになる。また馬蹄ともいふものだ。(一一)襄漢地方に又一種の細辛がある。極めて細くして直く、色が黄白だが、これは鬼督郵だ。やはり細辛ではない」とある。

時珍曰く、博物志に『杜衡は細辛を亂る』とあつて、古代から贋物があつたと見

える。沈氏の所說に甚だ詳かだ。

一體よく細辛に贋せるものは杜衡ばかりではないのだから、いづれも根、苗の色、味に就いて精細なる吟味が必要だ。葉が小葵に似て柔かく、莖が細く根が直く、色が紫で味の極めて辛いものならば細辛である。葉が馬蹄に似て莖が微し粗く、根が曲り色が黃白でやはり味の辛いものは杜衡である。一本の莖が直上に伸び、莖の端に葉が生えて傘のやうになり、根が細辛に似て微し粗く直く、黃白色で味が辛く、微し苦いものは鬼督郵である。鬼督郵に似て色の黑いものは及已である。葉が小桑に、根が細辛に似て微し粗く長く、色は黃で味が辛くして臊氣のあるものは徐長卿である。葉が柳に、根が細辛に似て粗く長く、黃白色で味の苦いものは白微である。白微に似て白く直く、味の甘いものは白前である。

〔細　　辛〕

根　【修治】〇斅曰く、凡そ細辛を使ふには頭丫を切つて棄て、瓜水に一夜浸して暴乾して用ゐる。二葉のものを揀り去るやうに注意せねばならぬ。これを服すれば害がある。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】〇普曰く、神農、黃帝、雷公、桐君は小溫なりといひ、岐伯は毒なしといひ、李當之は小寒なりといふ。〇權曰く、苦く辛し。〇之才曰く、曾青、棗根が使となる。當歸、芍藥、白芷、芎藭、牡丹、藁本、甘草と配合すればいづれ婦人の病を療じ、決明、鯉魚膽、青羊肝と配合すればいづれも目痛を療ず。黃芪、狼毒、山茱萸を惡み、生菜、狸肉を忌み、消石、滑石を畏れ、藜蘆と反す。

【主治】【欬逆上氣、頭痛腦動、あらゆる節の拘攣、風濕痺痛、死肌。久しく服すれば目を明かにし、九竅を利し、身體を輕くし、天年を延べる】(本經)【中を溫め、氣を下し、痰を破り、水道を利し、胸中の滯結を開き、喉痺を除く。齆鼻で香臭を聞かぬもの、風癇癲疾。乳結を下す。汗の出ぬもの、血の行らぬもの。五臟を安んじ、肝、膽を益し、精氣を通ず】(別錄)【膽氣を添へ、嗽を治し、皮風の濕痒、風

眼で涙の出るものを去り、齒痛、血閉、婦人の血瀝、腰痛を除く】(甄權)【これを含めば口臭を去る】(弘景)【肝燥を潤ほし、督脈の病で脊が强ばり厥するものを治す】(好古)【口舌に生じたる瘡、大便燥結を治し、目中の倒睫を起す】(時珍)

發明　宗奭曰く、頭部、面部の風痛を治するに缺くべからざるものである。

元素曰く、細辛は氣は溫、味は大辛、氣は味よりも厚い。陽であり升である。足の厥陰、少陰の血分に入り、手の少陰の引經の藥である。香味共に細いから少陰に入るので、獨活と相類す。獨活を使として用ゐれば少陰の頭痛を治すること神の如きものである。また諸陽の頭痛諸風を止めるには通じて用ゐる。味が辛くして熱だから少陰の經を溫めて水氣を散じ、それで內寒を去るのである。

成無已曰く、水が心下に停つて行らなければ腎氣が燥く。それには辛で潤ほすが宜い。細辛の辛は水氣を行らして燥を潤ほす。

杲曰く、膽氣の不足には細辛で補ふ。又、邪氣が裏から表に赴くものを治す。故に仲景は少陰の證に對して麻黃附子細辛湯を用ゐたのだ。

時珍曰く、氣の厚きものは能く發し熱する陽中の陽のであつて、辛、溫は能く散

ずる。故に諸種の風寒、風濕の頭痛、痰飮、胸中の滯氣、驚癇の者に適する。口瘡、喉痺、𧏾齒の諸病にこれを用ゐるのはその浮熱を散ずる功力を利用するのであつて、やはり火鬱にはこれを發するの意味である。辛は能く肺を泄する。故に風寒の欬嗽、上氣の者に適する。辛は能く肝を補す。故に膽氣不足、驚癇、眼目の諸病に適する。辛は能く燥を潤ほす。故に少陰、及び耳聾、便濇の者に適するのである。

○承曰く、細辛は華陰の產以外は眞物といはれない。若し單に末のみを用ゐるには（一二）一錢以上に過ぎてはならぬ。量が多ければ氣息が悶塞し、通じなくなつて死亡する。死んでも傷みの蹟がないものだ。近年（一三）開平の獄中で嘗てこれを用ゐたものである。心得て置くべきことだ。本來毒があるのではないが、ただ量の多寡を識らぬことが問題なのである。

【附方】　舊二、新六。【（一四）暗風卒倒】人事不省なるには、細辛末を鼻中に吹き入れる。（危氏得效方）【虛寒嘔噦】飮食物の通らぬには、細辛を葉を去つて半兩、丁香二錢半を末にし、一錢づつを柿蒂湯で服す。【小兒の客忤】言語不能なるには、細辛、桂心末等分を用ゐ、少量を口中に入れる。（外臺祕要）【小兒の口瘡】細辛末を醋で調へ

（一二）一大觀ニ七ニ作ル。
（一三）開平縣ハ今ノ廣東省肇慶府開平縣。
（一四）暗風ハ眩運。

て臍上に貼る。(衛生家寶方)【口舌に生じた瘡】細辛、黄連等分を末にし、摻つて漱涎すれば甚だ效がある。これを兼金散と名ける。ある方では、細辛、黄蘗を用ゐる。(三因方)【口(二五)瘡、𧏾齒】腫痛するには、細辛を煮た濃汁を熱して含み、冷えれば吐いて瘥やす。(聖惠方)【鼻中の息肉】細辛末を折折吹く。(聖惠方)【諸般の耳聾】細辛末を黄蠟で溶いて鼠屎大の丸にし、綿に一丸を裹んで塞げば一二回で癒える。怒氣を愼まねばならぬ。これを聰耳丸と名ける。(龔氏經驗方)

(一)杜衡(別錄中品)

和名　おほかんあふひ(新稱)
學名　Asarum maximum, Hemsl.
科名　うまのすゞくさ科(馬兜鈴科)

【釋名】杜葵(綱目)　馬蹄香(唐本)　土鹵(爾雅)　土細辛(綱目)　恭曰く、杜衡は葉が葵に似てその形か馬蹄に似てゐるから俗に馬蹄香と名けるのだ。頌曰く、爾雅に『杜、また土鹵と名ける』とある。けれども杜若も杜衡と名けるのだから、或は杜若をいうたのかも知れないが、郭璞の注には『葵に似てゐる』とあるのだから、それならば杜衡なわけである。

(二五)大觀ニ瘡ヲ臭ニ作ル。

(一)牧野云フ、我邦産ノかんあふひヲ從來杜衡ニ充テ來ツタケレド私ハ之レヲ否定スル、卽チ植物名實圖考ノ圖ヲ見テモ其レガ解カル、又我がかんあふひハ支那ニハ産セヌヤウデアル、Asarum maximum, Hemsl. ノ葉ハ圓イ心臟形ヲナシテヰルノデ支那デハ今モ馬蹄香ト稱シ藥

ニ用ヰテヰル。
木村(康)曰ク、本邦市販品中細辛ト稱スルモノニシテ、かんあふひノ乾根アリテ屢混同ス。
刈米達夫、木村雄四郎―邦產藥植(昭、三)ニ說アリ。
(二)槐ハ葵ノ誤ナラン。
(三)蒿ハ藁ノ誤ナラン。
(四)窠ハカブ。

【集解】別錄に曰く、杜衡は山谷に生ずる。三月三日に根を採り、丁寧に洗つて暴乾する。弘景曰く、根、葉はすべて細辛に似て、ただ氣が少し異ふだけだ。諸處にある。醫方の藥には殆ど用ゐないが、ただ道家で服食する。身體や衣類を香しくするものだ。

恭曰く、山の陰、水澤、下濕の地に生ずる。葉は(二)槐に似てその形は馬蹄の如く、根は細辛、白前などに似てゐる。今俗に及已をこれに代へるのは謬りだ。及已は莖が一本でその莖の端に四枚の葉があり、葉の間に白い花があつて一向芳氣はなく、毒があるもので服めば吐かす。ただ瘡疥を療ずるだけのものだ。杜衡と混同すべきものではない。

頌曰く、今は江淮地方にいづれもある。春初に舊根から苗が生え、葉は馬蹄の形狀に似て高さ二三寸になり、莖は麥(三)蒿のやうで粗く細く、(四)窠每に上に五枚乃至八九枚の葉があつて別に枝も蔓もない。又、莖、葉間の透き間の蘆頭の上から地に貼り付いて紫の花が出るが、その花は見えつ隱れになつてゐて暗に實を結ぶ。實は大さ豆ほどで窠の中に天仙子に似た碎けたやうに細かい子がある。苗、葉俱に

青く霜に遭へば枯れる。根は(五)窠になり、飯帚に似て密に入り亂れて細く、長さ四五寸あつて細辛よりも粗く、色は微黄白で味は辛い。江淮地方では俗に馬蹄香と呼ぶ。謹んで按ずるに、山海經に『(六)大帝の山に草あり、狀は葵の如く、その臭は蘼蕪の如し。名けて杜衡といふ。以て馬を走らすべく、之を食へば癭が已む』とあり、郭璞の注に『之を帶れば以て(七)馬を走らすべし』とある。或は馬がこれを食へば健かに走るのだともいふ。

〔杜衡〕

宗奭曰く、杜衡は根を用ゐる。細辛に似てただ根の色が白く、葉が馬蹄の跡のやうなものだ。商人は往往これを細辛の僞物にするが、この二物は並べて見れば直ちに眞僞が判る。況や細辛はただ華州の産のみが良いとなつてゐるのである。杜衡は色が黄で拳局して脆く、乾けばかたまりになることも細辛の條下に詳記した通りで

(五) 窠實ノ誤ナラン。

(六) 大帝之山ハ天帝之山ノ訛。西山經ニ文アリ。

(七) 本書ニ令人便馬ニ作ル。

ある。

時珍曰く、按ずるに、土宿本草に『杜細辛は葉が圓く、馬蹄のやうで紫背のものが良い。(八)江南、荊湖、川陝、閩廣の各州にいづれもある。自然汁を取つて用ゐれば硫、砒を伏し、汞を制し得るものだ』とある。

根　(九)[氣味]　【辛し、溫にして毒なし】[主治]　【風寒欬逆。湯にして浴すれば衣服、身體を香しくする】(別錄)　【氣奔喘促を止め、痰飮を消し、留血、項間の癭瘤疾を破る】(甄權)　【氣を下し、蟲を殺す】(時珍)

[發明]　時珍曰く、古方の吐藥に往往『杜衡を用ゐる』とあるそのものは杜衡ではなくて及已である。及已は細辛に似て毒があり、人を吐かせるものだ。昔の人は多く及已を杜衡に當て、杜衡を細辛に當てたために錯誤に陷つたのだ。杜衡ならば毒がないから吐かない。功力は細辛に及ばないが、しかしこれも能く風寒を散じ、氣を下し、痰を消し、水を行り、血を破るものである。

[附方]　新六。

【風寒頭痛】傷風、傷寒の頭痛、發熱を覺える初期には、馬蹄香を末にして一錢づつを熱酒で調へて服し、少頃して熱い茶一盌を飲んで催せば汗

(八)江南ハ長江以南ノ江蘇、浙江地方。荊ハ湖北。湖ハ湖南。川ハ四川。陝ハ陝西。閩ハ福建。廣ハ廣東、廣西地方ヲイフ。

(九)木村(康一)曰ク、邦産かんあふひニハ約一・四%ノ精油ヲ含有ス、ソノ主成分ハサフロールニシテ少量ノオイゲソールヲ含有ス。文献ハ朝比奈泰彦—藥誌三〇二(明、四〇)三六二。化誌二八(明、四〇)九二一。

が出て癒える。これを香汗散と名ける。（王英杏林摘要）【飲んだ水の停滯】大熱（一〇）行極、及び熱餅を食つて後冷水を飲み過ぎ、消化せずして胸に停滯して利せず、呼吸の喘息するには、杜衡三分、瓜帶二分、人參一分を末にして湯で一錢を服す。一日二回、吐くを度とする。（肘後方）【痰氣（一一）齁喘】馬蹄香を焙じて研り、二三錢づつ發作時に淡醋で調へて服す。少頃して痰涎を吐出するが效驗である。（普濟方）【（一二）噎食膈氣】馬蹄香四兩を末にして好き酒三升で熬膏し、一日三回、二匙づつを好き酒で調へて服す。（孫氏集效方）【吐血瘀聚】凡そ吐血後に心中が悶えなければ必ず止むが、若し煩躁し、悶亂し、刺痛するならば、瘀血がまだ胃に在るのだから吐かせねばならぬ。その方は飲だ水の停滯に用ゐるもと同じ。【喉閉腫痛】草藥金鎖匙、卽ち馬蹄草の根を搗いて井華水で調へて服す。卽效があるものだ。（救急方）

附錄 木細辛 藏器曰く、味苦し、溫にして毒がある。腹內結聚、癥瘕、大便不利、陳きを排し惡を去り、冷氣を破るに主效があるが、輕輕しく服してはならぬ。下痢して衰弱するものだ。（一三）終南山に生ずる。冬季にも凋まず、苗は大戟のやうで根が細辛に似てゐる。

（一〇）行極ハ極度ニ昇ルコトカ。

（一一）齁喘ハ哮喘、一名喘急、一名喘息。ノドノナルコト。

（一二）噎ハ食物咽ノ奥ニツカヘテ吐スルチ云フ、膈トハ食物胸ノ下ニツカヘテ吐スルチ云フ。

（一三）終南山ハ王孫ノ註ヲ見ヨ。

(一)及　已（別錄下品）

和名　ひとりしづか
學名　Chloranthus japonicus, Sieb.
科名　ちやらん科（金粟蘭科）

【釋名】 **獐耳細辛**　時珍曰く、及已なる名稱の意義は詳かでない。二月苗が生え、先に白花を開いてその後に葉三片を生ずる。葉の形狀は(二)獐の耳のやう。根は細辛のやうだから獐耳細辛といふのである。

【集解】 恭曰く、及已は山谷の陰の虛軟な土地に生ずる。その草は莖が一本で莖端の四枚の葉の間隙に白花を著ける。根は細辛に似て黑く、毒がある。今一般に杜衡に當てるのは誤つてゐる。二月に根を採つて日光で乾かす。

〔及　已〕

根　【氣味】 【苦し、平にして毒あり】 恭曰く、口に入れば吐血する。

(一)牧野云フ、從來ノ學者ハ及已ヲふたりしづか卽チ (Chloranthus japonicus, Sieb. ニ充テテヰルガ私ハ是レハひとりしづかデナケレバナラナイト斷定スル、釋名ノ條ニ二月ニ苗ヲ生ジ先ヅ白花ヲ開キ後チ方サニ葉ヲ生ズトアツテ能クひとりしづかタル事ヲ表ハシテ居ル、ふたりしづかハ先ヅ葉ガ出デ其レガ充分舒ビ展イタ後ニ花ガ出ヅル。

(二)獐ハ鹿屬似鹿而小無角、和名ノロ、一名ジヤカウジカ。

【主治】【諸種の惡瘡、疥痂、瘻蝕、及び牛馬の諸瘡】(別錄)【頭瘡、白禿、風瘙、皮膚の蟲痒には煎じた汁に浸し、幷に傅けるがよし】(大明)【蟲を殺す】(時珍)

【發明】弘景曰く、今一般に瘡疥の膏に合せるが、甚だ效驗がある。時珍曰く、今は一般に及已そのものを知らずして、往往それを杜衡に當て、杜衡をば細辛に當てるので杜衡とある諸方は多くは及已である。その區別は細辛、杜衡の二條を見よ。

【附方】新一。【頭瘡白禿】獐耳細辛は味が香しくいらつくものである。それを末にして(三)權木を煎じた油で調へて搽る。(活幼全書)

(一)鬼督郵(唐本草)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【釋名】獨搖草(唐本) 時珍曰く、この草は莖が一本でその端に葉が集り著き、風無くして自ら動く、故に鬼獨搖草といつたので、後世鬼督郵と訛つたのだ。それはこの草が專ら鬼病に主效があつて、宛も鬼を司る(二)督郵のやうだといふ意味にも附會したものである。古代には驛路の取締を督郵なる官吏があつて管掌したも

(三) 權、活幼全書ニ框ニ作ル。

(一) 牧野云フ、從來鬼督郵ヲきく科くるまばはぐま即チMacroclinidium ridi lulum, Makino. (M. verticillatum, Franch. et Sav.) ニ充テテヰレドモ是レハ中ツテヰナイ、ソシテ其眞品ハ今詳ク判明シテ居ナイ。

(二) 督郵ハ官吏ノ役

場ノ役人。

のだ。徐長卿、赤箭いづれも鬼病を治するところから、同樣に鬼督郵なる名稱があるが、名は同じくとも物は異ふ。

集解　恭曰く、鬼督郵は所在にある。生えれば必らず叢生するもので、苗はただ一本の莖の端が傘の狀をなして生える。根は牛膝のやうだが細く黑い。今一般に徐長卿をこれに代へるのは誤りだ。保昇曰く、莖は細い箭幹に似て高さは二尺以內、葉は莖の端に生えて傘のやうだ。花は黃白色で叢葉の中心から生える。根は橫に生えて鬚がない。二月、八月に根を採る。

〔鬼　督　郵〕

徐長卿、赤箭いづれも鬼督郵なる名稱はあるが、主治の功力は異ふから愼重に區別を要する。時珍曰く、鬼督郵は及已と同じ類で根も苗も似てゐるが、ただ根が細辛のやうで色の黑いものは及已、根が細辛のやうで黃白なものは鬼督郵である。

根　修治　斅曰く、凡そ採取したならば細かに剉み、生甘草水で一伏時煮て

（三）邪嗽ハ風邪ヨリ發スル咳嗽。
（四）鱢嗽ハ嗽息ニ魚腥ノ臭アルヲ云フ。

日光で乾して用ゐる。

〔氣味〕【辛く苦し、平にして毒なし】時珍曰く、小毒あり。〔主治〕【鬼疰、卒忤、中惡、心腹の邪氣、あらゆる精物の毒、溫瘧、疫疾。腰、脚を強くし、脊力を益す】（唐本）

〔發明〕時珍曰く、按ずるに、東晉の深師の方に『上氣欬嗽、（三）邪嗽、（四）鱢嗽、冷嗽を治する四滿丸に鬼督郵を用ゐ、蜈蚣、芫花、躑躅の諸毒藥と共に丸にする』とあるのだから、毒のあることは確だ。毒藥でなければ鬼疰邪惡の病は治し得ない。唐本に『毒なし』とあるが、蓋しさうではない。

徐長卿（本經上品）

和名　すずさいこ
學名　Pycnostelma Paniculatum, K. Schm.
科名　ががいも科（蘿藦科）

〔校生〕本書には吳氏本草に據つて石下長卿を併せ入る。

〔釋名〕**鬼督郵**（本經）　**別仙蹤**（蘇頌）　時珍曰く、徐長卿とは人の名である。この人が常に此の藥で邪病を治療したところから、一般にその人の名で呼ぶやうに

なつたのだ。名醫別錄には、有名未用の部にまた石下長卿なる一條を揭げて『一名徐長卿』とあり、陶弘景の註に『これは誤りだ。醫方には無用のもので一向に識る者もない』と記してある。しかし今二條に就いて比較考究して見るに、治病の功用は互に似てゐる。按ずるに、吳普本草にも『徐長卿、一名石下長卿』とある。同一植物なることは明かだ。ただ石の間に生ずるものが良いのである。前代には詳細な智識を缺いたためにかやうな差誤が生じたのである。

弘景曰く、鬼督郵なる名稱のものは甚だ多く、現に俗間で用ゐる徐長卿は根がさながら細辛のやうで少し短く扁扁たるだけのものだ。その氣もやはり似てゐる。現に狗脊散に鬼督郵を用ゐてあるも、その物の强悍にして腰、脚に宜いからだ。故にこの物は徐長卿であつて、鬼（一）箭でも赤箭でもないことがわかる。

【集解】別錄に曰く、徐長卿は（二）泰山の山谷、及び隴西に生ずる。三月に採取する。又曰く、石下長卿は（三）隴西の山谷、池澤に生ずる。三月に採取する。恭曰く、所在の川澤にある。葉は柳に似て兩葉相對し、光澤がある。根は細辛のやうで微し粗く長く、黃色で臊氣がある。今一般にこれを鬼督郵に代へてるのは誤だ。鬼

（一）箭恐クハ督ノ誤。
（二）泰山ハ山東省ノ泰山、雲母、遠志ノ註參照。
（三）隴西ハ隴山ノ西部ノ稱。甘肅省地方ヲ隴西ト稱ス。秦ニ隴西郡ヲ置キ、漢コレニ因ル。今ノ甘肅省蘭州ハソノ郡治ナリ。今甘肅省ニ隴山縣アリ。胡黃連秦隴ノ註參照。

督郵に就ては別に一條を掲げてある。

保昇曰く、下濕の地、川澤の內に生ずる。苗は小(四)桑に似て兩葉相對し、三月青い苗が生え、七月、八月に蘿藦子に似て小さい子を著け、九月苗が黃に

〔徐　長　卿〕

なり、十月凋む。ア月根を採つて日光で乾かす。頌曰く、今は(五)淄齊、(六)淮泗の地方いづれもある。三月、四月に採るもので別仙蹤といふ。時珍曰く、鬼督郵、及已は杜衡と擬へるが、功用も異ひ苗も異ふ。徐長卿を鬼督郵と擬へたものは苗は異ふが功用に同じだ。杜衡を細辛に擬へたものは根も苗も功用も皆彷彿たるもので、彌近いものだから大いに見擬へる。餘程注意を要するものだ。

根【修治】斅曰く、凡そこれを採取したならば粗く杵いて少量の蜜をむらなく拌ぜ、甆器に入れて三伏時の間蒸し、日光で乾して用ゐる。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】別錄に曰く、石下長卿は鹹し、平にして毒あり。普曰く、徐長卿、一名石下長卿。神農、雷公は辛しといふ。時珍曰く、鬼を

(四)桑一本ニ參ニ作ル。

(五)淄ハ淄州、石部雌黃ノ註、齊ハ齊州、石部滑石ノ註參照。

(六)淮泗ハ淮安、卽チ今ノ江蘇省山陽縣ヨリ泗州、卽チ今ノ安徽省泗縣ニ至ル一帶ノ地ヲ指ス。

（七）關格ハ小便スル能ハズシテ食物ヲ吐逆スルヲ云フ。

（八）注車注船ハクルマフネニ酔フコト。

治する薬は多く有毒だ。別錄の通りである。

［主治］【鬼物、あらゆる精物、蠱毒、疫疾、邪惡の氣、溫瘧。久しく服すれば强悍にして身體を輕くする】（本經）【氣を益し、天年を延べる。又曰く、石下長卿は鬼疰、精物、邪惡の氣に主效があり、あらゆる精物、蠱毒を殺す。老魅の輾轉して他に移り著くもの、逃げ走り聲を發てて泣くもの、悲傷し恍惚たるもの】（別錄）

［發明］時珍曰く、抱朴子に『上古に瘟疫を辟けたものに徐長卿散といふ效驗のある良薬があつたが、今一般人はこれを用ゐることを知らない』とある。

［附方］新二。【小便（七）關格】徐長卿湯――氣壅、關格不通、小便淋結、臍下の妨悶を治す。徐長卿を炙いて半兩、茅根三分、木通、冬葵子一兩、滑石二兩、檳榔一分、瞿麥穗半兩を、五錢づつ水で煎じて朴硝一錢を入れ、一日二回溫服する。（聖惠方）【（八）注車、注船】凡そ車船に乘つて煩悶し、頭痛し、吐き氣を催すには、徐長卿、石長生、車前子、車下李根皮各等分を搗き碎き、半合を四角の囊に入れて衣服に帶び、または頭上に置けばその患に罹らぬ。（肘後方）

(一)平原ハ戰國ノ趙ノ平原君ノ封邑。漢ニ郡ヲ置ク。今ノ山東省武定、濟南府ノ西部、北ハ樂陵ヨリ南ハ長淸ノ諸縣ニ及ブ。今ノ縣名亦漢ニ置ク。平原郡治ナリ。今ノ山東省濟南府ニ屬ス。
(二)舒州ハ蒺藜ノ註ヲ見ヨ。
(三)滁州ハ人參ノ註ヲ見ヨ。
(四)潤州ハ薺苨ノ註ヲ見ヨ。
(五)遼州ハ人參ノ註ヲ見ヨ。
(六)本草原始ニ柳ヲ桃ニ作ル、白井曰ク、フナバラサウノ葉ハ柿ノ葉ニ似テ柳葉又ハ桃葉ニ似ズ、花色モ紫黑色ニシテ紅色ニ非ズ。

白微【本經中品】

和名　ふなばらさう
學名　Cynanchum atratum, Bunge.
科名　かがいも科(蘿藦科)

釋名　**薇草**(別錄)　**白幕**(別錄)　**春草**(別錄)　**葞**　音は尾(ビ)である。**骨美**

時珍曰く、微は細と同義である。根が細く白い。按ずるに、爾雅に『葞は春草なり』とあつて、微と葞とは發音が相近いので白微をまた葞と音が轉じたのだ。別錄に葞を莽草の名としたのは誤である。

集解　別錄に曰く、白微は(一)平原の川谷に生ずる。三月三日に根を採つて陰乾する。弘景曰く、近道諸處にある。頌曰く、今は陝西の諸郡、及び(二)舒、(三)滁、(四)潤、(五)遼の諸州にもある。莖も葉も青く頗る(六)柳葉に類し、六七月紅花を開き、八月實を結ぶ。根は黃白

〔白　微〕

で牛膝に類するが短小だ。今は一般に八月採取する。

根【修治】斅曰く、凡そこれを採取したならば糯米泔汁で一夜浸して取り出し、髭を去つて槐砧上で細剉し、(七)午前十時から午後四時まで蒸して晒し乾して用ゐる。時珍曰く、後世ではただ酒で洗つて用ゐる。

【氣味】【苦く鹹し、平にして毒なし】別錄に曰く、大寒なり。之才曰く、黃芪、大黃、大戟、乾薑、大棗、乾漆、山茱萸を惡む。【主治】【突然の中風、身熱肢滿、恍惚として人事不省となるもの、狂惑邪氣、寒熱酸疼、溫瘧で(八)洗洗として一定時に發作するもの】(本經)【傷中、(九)淋露を療じ、水氣を下し、陰氣を利し、精を益す。久しく服すれば身體を利す】(別錄)【驚邪、風狂、痓病】(弘景)【百邪、鬼魅を治す】(甄權)【風溫で灼熱して多く眠るもの、及び熱淋、遺尿、金瘡出血】(時珍)

【發明】好古曰く、古方に多く婦人の病を治するに用ゐたのは、本草に傷中、淋露を療ずとあるからだ。

時珍曰く、白微は古代には多く用ゐたが、後世では知るものが稀だ。按ずるに、張仲景の婦人の産中の虛煩、嘔逆を治し、中を安んじ、氣を益する竹皮丸の方中に

(七)大觀ニ從巳至申トアリ、綱目ニハ從申至巳トアリ前書ニ從フベシ。

(八)洗洗寒ム氣ノスルコト。

(九)淋露ハ靈樞九宮八風篇ニ出ヅ、淋露ハ蓋シ滯下ノ類ナラン。

(一〇)血淋ハ小便ニ血ノ交ルヤマヒ。
(一一)熱淋ハ熱ノ爲ニ小便ノ多クデルヤマヒ。

白微を桂枝と共に一分、竹皮、石膏三分、甘草七分を用ゐ、棗肉で大丸にして一丸づつを飲に溶かして服すとし、『熱あるには白微を倍にする』とあつて、白微は性は寒、陽明の經の藥である。徐之才の藥對には『白微は大棗を惡む』とあるが、この方ではまた棗肉で丸にする。これは恐らく諸藥が寒、涼のもので脾、胃を傷める虞があるから用ゐたものであらう。朱肱活人書の風溫で發汗後も猶ほ身體が灼熱し、自汗して身體重く、多く眠れば鼻息が必ず鼾となり、發語困難のものを治する萎蕤湯の中にもやはりこれを用ゐ、孫眞人の千金方にも詔書發汗白微散といふがある。

附方　新五。【肺實鼻塞】香臭をかぎ得ぬには、白微、貝母、款冬花一兩、百部二兩を末にして一錢づつを米飲で服す。(普濟方)【婦人の遺尿】產前產後に拘らず、白微、芍藥各一兩を末にし、一日三回、酒で方寸匕づつを服す。(千金方)【(一〇)血淋、(一一)熱淋】方は同上。【婦人の血厥】平常何等の疾病もなくて突然死人のやうになり、身體は動かず、目は閉ぢ、口は噤み、或は微かに意識があつて眩冒し、時經てやうやく正氣付く病を血厥と名け、また鬱冒ともいふ。これは出汗過多で血が缺乏し、陽氣のみ上り氣が塞つて行らなくなるところから身體が死んだやうにな

るのであつて、氣が通過して血が還れば陰陽がまた通ずるから時經て漸やく正氣付くのである。就中婦人に多い。此の病證には白微湯を服するが適して居る。白微、當歸各一兩、人參半兩、甘草一錢半を用ゐ、五錢づつを水二盞で一盞に煎じて溫服する。（本事方）【金瘡出血】白微を末にして貼る。（儒門事親）

(一)白前（別錄中品）

和名　いよかづら
學名　Cynanchum japonicum, Hemsl.
科名　かがいも科（蘿藦科）

【釋名】石藍（唐本）嗽藥（同上）時珍曰く、名稱の意義は詳でない。

【集解】弘景曰く、白前は近道に產する。根は細辛に似て大きく、色白くして柔かでない、折れ易い。氣嗽の方に多く用ゐる。恭曰く、苗は高さ一尺ばかり、葉は柳に似て或は芫花のやうでもある。根は細辛より長く色は白い。洲渚、沙磧の上に生ずる。近道には生じない。俗に石藍、又は嗽藥と名ける。現に蔓生のものを用ゐてゐるが、これは味が苦い、眞物ではない。志曰く、根は白微、牛膝などに似たものだ。二月、八月に採つて陰乾して用ゐる。嘉謨曰く、牛膝に似て粗く長く、堅

(一) 牧野云フ、私ハ此白前ヲいよかづらニ充ツル事ニ就テハ多少ノ不安ガアルガ先ヅサウシテ置ク、植物名實圖考ニ出テヰル白前ハ醋ダ能ク我いよかづらニ似テヰル。

直で斷ち易いものは白前である。牛膝に似て小く短く、柔軟でよく曲がるものは白微である。近道にいづれもある。形と色は頗る同じだが右の相異點に注意すれば取り違ふことはない。

〔白　前〕

根　【修治】　斅曰く、凡そこれを用ゐるには、生甘草汁に一伏時浸して漉出して悉く頭鬚を去り、焙じ乾して貯へたものを用ゐる。

【氣味】　【甘し、微温にして毒なし】　權曰く、辛し。恭曰く、微寒なり。

【主治】　「胸脇の逆氣、欬嗽上氣、呼吸絶えんとするもの」(別錄)　【一切の氣、肺氣煩悶、賁豚腎氣に主效がある】(大明)　【氣を降し、痰を下す】(時珍)

【發明】　宗奭曰く、白前はよく肺氣を保定し、嗽を治するに多く用ゐる。温藥を佐使とするが尤も佳い。時珍曰く、白前は色白くして味微し辛く甘い。手の太陰の藥であつて、氣を降すに特長があり、肺氣が壅實して痰あるものに適する。しか

し虛して長く(一)喀氣するものには用ゐられない。張仲景の嗽して脈(二)浮なるを治する澤漆湯中にやはりこれを用ゐてある。その方は金匱要略に記載してあるが藥が多いからここには省略する。

［附方］　舊二、新一。【久嗽唾血】白前、桔梗、桑白皮三兩を炒り、甘草一兩を炙き、水六升で一升に煮て三回に分服する。豬肉、菘菜を忌む。(外臺)【久欬上氣】身體腫れ、氣短く、脹滿し、晝夜壁に倚る外臥することが出來ず、常に水雞のやうな聲を出すには白前湯を主として用ゐる。白前二兩、紫菀、半夏各三兩、大戟七合を水一斗に一夜漬けて三升に煮取り、(四)數回に分服する。羊肉、餳餹を食つてはならぬ。大いに佳いのだ。(深師方)【(五)呷呷の久患】欬嗽で呼吸毎に喉中に聲があり、眠り得ぬものである。白前を焙じ擣いて末にして二錢づつ溫酒で服す。(深師方)

草犀（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

［釋名］　時珍曰く、その解毒の功力が犀角のやうなところから草犀といふので

(一)喀ハ塞ノ義ナリ、氣息困難ノコトナラン。
(二)浮ハ沈ニ作ルヲ正トス。
(四)大觀ニ數ヲ三ニ作ル。
(五)呷呷ハ欬嗽每ニ氣管枝ニ聲アルヲ云フ。

ある。

【集解】藏器曰く、草犀は(一)衢、婺、(二)洪、(三)饒の地方に生ずる。苗の高さは二三尺、莖は一本で根は細辛のやうだ。水中に生ずるものを水犀と名ける。珣曰く、廣州記に『(四)嶺南、及び(五)海中に生ずるものだ。獨莖で葉が相對して生え、燈臺草のやう、根は細辛のやうだ』とある。

根　【氣味】【辛し、平にして毒なし】【主治】【一切の毒氣、虎狼、蟲虺の傷、溪毒、野蠱、惡刺等の毒を解す。いづれも燒き研つて服するがよし。瀕死の者も活きる】(李珣)【天行瘴瘧、寒熱欬嗽、痰壅飛尸、喉痺瘡腫、小兒の寒熱、丹毒、中惡、注忤、痢血等の病には煮汁を服す。嶺南、及び(六)睦州、婺州地方では、毒に中つた場合にこの物や千金藤を用ゐていづれも解す】(藏器)

(一)釵子股(海藥)

和名　未詳
學名　未詳
科名　らん科(?)　蘭科(?)

【校正】拾遺の金釵股を併せ入る。

(一)衢州、婺州ハ前胡ノ註ヲ見ヨ。
(二)洪州ハ隋唐宋ニ置ク。今ノ江西省南昌縣ソノ舊治ナリ。
(三)饒州ハ十部白瓷器ノ註ヲ見ヨ。
(四)嶺南ハ廣東廣西地方。
(五)海中ハ海外ノ國ヲ指ス。
(六)睦州ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。

(一)牧野云フ、從來此釵子股ヲ我ガばうらんニ充テテアレド是レハ正確デナイト想ハル、何カ其類ノモノデばうらんニ似タ別ノ品種、即チ

【釋名】**金釵股**　時珍曰く、石斛を金釵花と名ける。この草の形状が似てゐるから名けたのだ。

【集解】藏器曰く、金釵股は嶺南、及び南海の山谷に生ずる。根は細辛のやうで莖毎に三四十本の根がある。珣曰く、(二)忠州、(三)萬州に産するものがやはり佳い。草莖も功力が似てゐる。嶺南地方は毒が多いので、人民は毎戸これを貯へる。時珍曰く、按ずるに、嶺表錄に『(四)廣中は蠱毒が多く、その地方では草藥の金釵股でそれを治療するが、十中八九まで救はれる。その形状は石斛のやうなものだ』とある。又、忍冬藤も毒を解し、やはり金釵股なる名稱があつて同名で呼ばれてゐる。

根【氣味】【(五)苦し、平にして毒なし】【主治】【解毒。癰疽に神驗がある。水で煎じて服す】(李珣)【諸藥の毒を解するには煮汁を服す。また生で研つたものは更に力が烈しく、必ず大いに吐下する。若し腹中に毒物が無い場合には熱痰を吐去せしめる。瘧瘴天行、蠱毒喉痺に主效がある】(藏器)

Luisia Morsei, Rolfe.（廣西省産）カ或ハ L. teretifolia Gaud.（海南島産）カナドデハナカラウカ。サスレバ嶺南及ビ南海山谷ニ生ズト云フ文ニモ合致スル、ばうらんハ支那デハ四川省ニハ生ズルト云フ事ダガ南海方面ニハ無イラシイ。

(二) 忠州ハ唐ニ置ク、今ノ四川省忠縣ノ地ナリ。

(三) 萬州ハ石部水銀ノ註ヲ見ヨ。

(四) 廣中ハ廣東、廣西地方ノ意味。

(五) 本草拾遺ニハ辛ニ作ル。

(一)吉利草（綱　目）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【集解】時珍曰く、按ずるに、嵇含の南方草木狀に『この草は交、廣の地に生ずる。莖は金釵股のやうで形が石斛に類し、根は芎藭に類したものだ。呉の(二)黄武年間、(三)江夏の李俁が(四)合浦へ左遷されて毒に遭つたとき、その奴隷の吉利と呼ぶものが偶々この草を手に入れて、俁に服ませて遂に毒を解した。その後奴隷吉利は行方不明となつたが、俁はこの草で無數の人命を救濟した』とある。又、(五)高涼郡に良耀草なる草を產する。葉は麻黃のやう、花は白く牛李に似たもので、秋に子を結ぶ。その子は小栗のやうなもので、煨いて食へば吉利草に次ぐ解毒の功がある。この草は始めて梁耀といふ人が取つて用ゐたところから、その人の名で呼んだのだが、轉じて梁が良となつたものである。

根　【氣味】【苦し、平にして毒なし】【主治】【蠱毒を解すに極めて效驗がある】（時珍）

(一)牧野云フ、吉利草ハ支那ノ南部ノ交廣ニ生ズルモノデ形ガ石斛ニ類スルモノダト云フ、何カ蘭ノ一種カ今詳カデナイ。
(二)黄武ハ三國呉ノ孫權始テ帝位ニ即イテ稱シタル年號、元年ハ西暦二二九年ナリ。
(三)江夏ハ石部紫石英ノ註ヲ見ヨ。
(四)合浦ハ漢ノ郡名徐聞、即チ今ノ廣東省海康縣ニ治ス。後漢ニ合浦縣ニ徙ス。今ノ廣東省合浦縣ノ東北七十五支里ニ故城アリ。
(五)高涼郡ハ後魏ニ置キ、今ノ山西省ノ稷山、河津二縣ノ地ヲ管轄シ、高涼縣ニ治ス。縣ハ今ノ稷山縣ナリ。

(一)百兩金（宋圖經）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【集解】頌曰く、百兩金は、(二)戎州、(三)雲安軍に生ずる。苗は高さ二三尺、木のやうな幹がある。葉は茘枝に似て初生には表裏共に色が青いのだが、花、實を結んだ後は裏が紫で表が青くなり、冬を凌いで凋まない。初秋に青碧色の花を開き、大さ豆ほどの實を結ぶ。その實は生では青いが熟すれば赤くなる。根を採つて藥に入れるには搥いて心を去る。(四)河中府に産するものは、根が蔓菁のやうで色が赤く、莖は細く色が青い。四月に星宿花に似た小さな黄色の花を開く。五月根を採る。長さ一寸ほどのものだ。晒し乾して用ゐる。

根【氣味】【苦し、平にして毒なし】【主治】【壅熱の咽喉腫痛には一寸を含んで唾液を嚥む。又、風涎をも治す】（蘇頌）

(一)牧野云フ、從來之レヲやぶかうじ科ノからたちばなニ充テアレドモ穩當デナイ。
(二)戎州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。
(三)雲安軍ハ宋ニ置ク、今ノ四川省雲陽縣ハソノ舊治ナリ。
(四)河中府ハ石部石中黄子ノ註ヲ見ヨ。

(一)牧野云フ、從來之レチやぶかうじ科ノまんりやうニ充テテキレド是レハ穩カデナイ。

(二)太和山、即チ太和嶺。今ノ山西省馬邑縣ノ東南ニ在リ。句注山ノ支脈ナリ。

(一)硃砂根(綱目)

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

【集解】時珍曰く、硃砂根は深山中に生ずるもので、今はただ(二)太和山の住民が採るだけだ。苗は高さ一尺ばかり、葉は冬青の葉に似て背が甚だ赤く、夏季に繁茂する。根は大さ箸ほどで色赤く百兩金と彷彿たるものだ。

〔硃　砂　根〕

根【氣味】【苦し、涼にして毒なし】【主治】【咽喉腫痛には水、或は醋に磨つて嚥むが甚だ良し】(時珍)

辟虺雷(唐本草)

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

【釋名】辟蛇雷（綱目）時珍曰く、この物は蛇、虺を辟ける威力があるところから雷を以て名けたのだ。

【集解】恭曰く、辟虺雷は形狀が粗い塊の蒼朮のやうで、節の中に(一)眼がある。時珍曰く、今は(二)川中の(三)峩眉、(四)鶴鳴の諸山にいづれもある。根の形狀は大なる蒼朮のやうで拳ほどある。彼の地では(五)方物に充てる。苗の形狀に就ては實地にその地へ往つて生育狀態を見る外はない。

〔辟虺雷〕

根【氣味】【苦し、大寒にして毒なし】【主治】【あらゆる毒を解し、痰を消し、大熱頭痛を除き、瘟疫を辟ける】（唐本）【咽喉痛痺を治し、蛇、虺の毒を解す】（時珍）

錦地羅（綱目）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

(一) 眼トハ地上莖ノ枯レテ分離セル印痕ノコトナリ。
(二) 川中ハ四川地方ノ意味。
(三) 峩眉山ハ石部菩薩石ノ註ヲ見ヨ。
(四) 鶴鳴山ハ四川省崇慶縣ノ西北ニ在リ。道敎ノ敎祖張道陵ガ修道ノ山ナリ。
(五) 方物ハ方地ノ物産。

(一)慶遠ハ宋ニ府ヲ置ク。元ニ路ニ改メ明ニ府ニ復ス。今ノ廣西省宜山縣ハソノ舊治ナリ。
(二)鎮安府ハ今ノ廣西省天保縣ソノ舊治ナリ。
(三)歸順ハ今ノ廣西省靖西府ノ地ナリ。
(四)柳州ハ金部金、石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

集解 時珍曰く、錦地羅は廣西(一)慶遠の山巖の間に出るもので、(二)鎮安、(三)歸順、(四)柳州のいづれにもある。根は萆薢、及び栝樓根の形狀に似たもので、彼の地では頗る珍重して方物に充てる。

〔錦地羅〕

根 氣味 【微し苦し、平にして毒なし】

主治 【山嵐瘴毒、瘡毒、幷に諸種の中毒。根を研つて生酒で一錢匕を服すれば解す】(時珍)

紫金牛(宋圖經)

和名 やぶかうじ
學名 Ardisia jiponica, Blume.
科名 やぶかうじ科(紫金牛科)

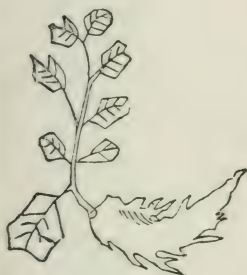
集解 頌曰く、福州に生ずる。葉は茶の葉のやうで上が綠色、下が紫色、實は圓く紅色で丹朱のやう、根は微紫色だ。八月根を採り心を去つて暴乾する。頗る巴戟に似たものだ。

氣味【辛し、平にして毒なし】

主治【時疾膈氣、風痰を去る】（蘇頌）

【毒を解し、血を破る】（時珍）

〔紫金牛〕

拳參（宋圖經）

和名　いぶきとらのを

學名　Polygonum Bistorta, L.

科名　たで科（蓼科）

〔拳參〕

集解　頌曰く、(一)淄州の田野に生ずる。葉は羊蹄のやう、根は海蝦に似て色が黒い。土地の者は五月にこれを採る。

(二)氣味（缺）　(三)主治【末にして腫氣を淋濼する】（蘇頌）

(一)淄州ハ石部代赭石ノ註ヲ見ヨ。

(二)木村(康)曰ク、根ノ一般成分ハ灰分四・三五%、タンニン酸一八・二五%、還元糖二・一三%、ゴム粘液質二・二三澱粉、樹脂、纖維素六六、七四。文獻ハ藥誌四七一(大、一〇)四四七。

(三)木村(康)曰ク、民間ニ於テ收斂藥トシテ止瀉ノ目的ニ內用ス、一日用量六瓦煎劑トス又口內ノ炎衝ニ含嗽劑トス（邦產藥用植物）。

(一)饒州ハ土部白瓷器ノ註ヲ見ヨ。

鐵線草（宋圖經）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

【集解】頌曰く、(一)饒州に生ずる。三月根を採つて陰乾する。時珍曰く、今俗に萹蓄を鐵線草と呼ぶが、蓋し名が同じだけである。

〔鐵線草〕

【氣味】【微し苦し、平にして毒なし】

【主治】【風を療じ、腫毒を消すに效がある】(蘇頌)

【附方】新一。【男女の諸風】産後の風に尤も妙である。鐵線草五錢、五加皮一兩、防風二錢を末にし、重さ一斤の烏骨雞を水で淹け殺し、毛と腸を去り、切つたその肉に右の藥を入れてむらなく切りまぜ、麻油少量を入れて黄色に炒り、患者に應ずる適量を計つて酒を用ゐて煮熟し、豫め排風藤の濃煎湯で頭か

ら身體を沐浴してから、その酒を飲み、その雞肉の料理を食ふ。粘汗を發出して直ちに癒える。豫め沐浴せずに食へば必ず(二)風丹を發出するがやはり癒える。(滑伯仁櫻寧心要)

金絲草（綱目）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【集解】時珍曰く、金絲草は(一)慶陽の山谷に出る。苗の形狀に就いては實地に生育狀態を見る外はない。

【氣味】【苦し、寒にして毒なし】【主治】【吐血、欬血、衄血、下血、血崩、瘴氣。諸種の藥毒を解す。癰疽、丁腫、惡瘡を療じ、血を涼し、熱を散ず】(時珍)

【附方】新三。【婦人の血崩】金絲草、海柏枝、砂仁、花椒、蠶退紙、舊錦灰等分を末にし、酒で煮て空心に服す。陳光述の所傳である。(談埜翁方)【癰疽、丁腫】一切の惡瘡。金絲草、忍冬藤、五葉藤、天蕎麥等分の煎湯を溫めて洗ふ。黑色なる腫には醋を加へる。○又、鐵箍散——金絲草灰二兩を醋に拌ぜて晒し乾し、貝母五

(一)慶陽ハ石部鹵石類消石ノ註ヲ見ヨ。

(二)風丹ハ水泡罹斯又水泡性丹毒ヲ云フ。

兩を心を去り、白芷二兩と共に末にし、涼水で調へて瘡上に貼る。香油で調へるもよし。或は龍骨少量を加へる。【天蛇頭毒】落蘇、卽ち金絲草、金銀花藤、五葉紫葛、天蕎麥等分を切り砕き、最上等の醋で濃煎して先づ熏じて後に洗ふ。（救急方）

本草綱目草部第十三卷　終

本草綱目草部

第十四卷

本草綱目草部目錄第十四卷

草の三　芳草類五十六種

右附方　舊八十一　新三百七十一

草の三　芳草類五十六種

(一)當歸（本經中品）

和名　たうき
學名　Angelica sinensis, Diels.
科名　繖形科（繖形科）

釋名　**乾歸**（本經）　**山蘄**（爾雅）　**白蘄**（爾雅）　**文無**（綱目）　頌曰く、按ずるに、爾雅に『薜は山蘄なり。又、薜は白蘄なり。——薜の音は百（ハク）、蘄は古の芹の字——』とあり、郭璞の註に『當歸である。芹に似て粗大なものだ』とある。

許愼の說文には『山中に生ずるものを薜、一名山蘄と名ける』とある。されば當歸は芹の類であつて、平地に在るものを芹と名け、山中に生ずる粗大なものを當歸と名けるのである。

宗奭曰く、現に川蜀地方で(二)皆畦を作つて種ゑて居るが、なかなか肥好で

〔當歸〕

(一) 牧野云フ、和産ノたうきハ Ligusticum acutilobum, Sieb. et Zucc. デアル、此者恐ラク支那ニハ産セズデハナイカト思フ。
白井曰ク、支那ニテ當歸ト呼ブ植物ノ一種ノミニ非ザルハ集解ニ馬尾當歸、蠶頭當歸ノ兩名ヲ擧グルニテモ知ラルルナリ。此中ノ一種ハ Angelica 一種ハ Ligusticum 屬ノモノト考ヘラル。尙ホ本邦産いぶきたうき、みやまたうきノ二種モ性狀相似タレバ當歸ノ別種トシテ藥用ニ供シテ佳ナラント思ハル。
(二) 大觀ニハ皆以ノ下ニ平地作ノ三字アリ。

（三）隴西ハ徐長卿ノ註ヲ見ヨ。
（四）四陽、未考。
（五）黑水ハ黃芪ノ註ヲ見ヨ。
（六）西川ハ淫羊藿ノ註ヲ見ヨ。
（七）歷陽ハ縣名、漢ニ置ク。晉以後郡治トナス。今ノ安徽省和縣ソノ治ナリ。歷陽山ハ縣治ノ西北六十支里ニ在リ。

脂が多い。平地と山中とを以て差等があるのではない。

時珍曰く、當歸は本來芹類ではない。特に花と葉が芹に似たところから芹なる名を呼んだまでだ。古人は、妻を娶るは胤を嗣ぐためとした、當歸は血を調へる婦人の要藥で、そこに夫を思ふ（歸嫁の歸に就く）の意味があるところから當歸なる名稱となつたのだ。恰も唐詩に『胡麻好種なれども人の種るなし、正に是れ歸る時又歸らず』とある歸の字と同一意味である。崔豹の古今注に『古人相贈るに芍藥を以てし、相招ぐに文無を以てす』とあるは、文無、一名當歸。芍藥、一名將離に取つたものだ。

承曰く、當歸は妊婦、產後の惡血上衝を活して咄嗟に效を擧げ、氣血昏亂にはこれを服すれば直ちに安定する。よく氣血をして各〻歸する所あらしめるものだ。恐らく當歸なる名稱はここから出たものに相違あるまい。

【集解】別錄に曰く、當歸は（三）隴西の川谷に生ずる。二月、八月に根を採つて陰乾する。弘景曰く、今は隴西、（四）四陽、（五）黑水の當歸が肉多く枝少く氣が香しい。これを馬尾當歸といふ。（六）西川北部の當歸は根枝が多くて細い。（七）歷陽に產するも

のは色が白く、氣、味薄くして比較にならぬ。草當歸と呼んでゐる。これはよくよく上記の當歸が缺乏した場合にだけ用ゐる。

恭曰く、今は(八)當州、(九)宕州、(一〇)翼州、(一一)松州に產するが、宕州のものが最も勝れてゐる。この物には二種あつて、一種は大葉芎藭に似たもので、馬尾當歸といふ。今一般に多く用ゐてゐるものだ。一種は細葉芎藭に似たもので、蠶頭當歸といふ。卽ち陶氏のいふ歷陽の產で役に立たないものだ。莖、葉いづれも芎藭よりも劣等である。

頌曰く、今は川蜀、陝西の諸郡、及び(一二)江寧府、(一三)滁州にいづれもあるが、蜀中のものが勝れてゐる。春苗が生え、綠葉で三枚の瓣がある。七八月に蒔蘿に似た淺紫色の花を開く。根は黑黃色だ。肉厚くして枯れぬものが勝れたものだ。

時珍曰く、今は陝、蜀、(一四)秦州、(一五)汶州の諸處の民家で多く栽培して賣り出してゐるが、秦州の當歸の頭が圓くて尾が多く、色が紫で氣が香しく、肥つて潤ふた馬尾歸といふものが他の地の產に比して最も勝れてゐる。頭が大きく尾が粗く、色白く堅くして枯れたものは鑱頭歸といふ。ただ發散の藥に入れ得るだけである。韓

(八)唐ノ當州ハ今ノ四川省松潘縣ノ西南黑水河ノ南畔ニ置ク。

(九)宕州ハ石部雄黃ノ註ヲ見ヨ。

(一〇)翼州、大觀ニ冀ニ作ルヲ正シトス。冀州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。

(一一)松州ハ今ノ四川省松潘縣ノ地ナリ。唐ニ州ヲ置ク。

(一二)江寧府、晉ニ縣ヲ置ク、ソノ故城ハ今ノ江寧縣ノ西南六十支里ニ在リ。隋ニ今ノ縣治ニ徙シ、唐以後コレニ因リ、宋ニ府ヲ置ク。

(一三)滁州ハ人參ノ註ヲ見ヨ。

(一四)秦州ハ石部石膽ノ註ヲ見ヨ。

(一五)汶州ハ今ノ四川省汶川縣ノ地ナリ。

忞は『川の産は力が剛くて善く攻め、秦の産は力が柔かで善く補す』といつたがその通りだ。

根【修治】斅曰く、凡そこれを用ゐるには、蘆頭を去つて酒で一夜浸して藥に入れる。頭と尾とでその效力に血を止めると血を破るとの異がある。血を破る目的には頭の一節の硬く實した部分を用ゐ、痛みを止め血を止める目的には尾を用ゐる。頭と尾と同時に服食するならば效果がない。用ゐぬがましだ。ただこの物は單獨に用ゐるが妙である。

元素曰く、頭は血を止め、尾は血を破り、身は血を和らげる。全部そのままを用ゐれば、一面には破り一面には止める。先づ水で土を洗淨し、上を治するには酒に浸し、外を治するには酒で洗ひ、或は火で乾かし日光で乾かして藥に入れる。杲曰く、頭は血を止めて上行し、身は血を養つて中を守り、梢は血を破つて下流し、全部そのままでは血を活かすが走らない。

時珍曰く、雷斅、張元素兩氏の所説は、頭、尾の功力、效果各異つてゐるが、凡そ植物の根は、身の半已上は氣脈が上行するもので天に法り、身の半已下は氣脈が

下行するもので地に法る。人間の身體は天地に法り象るものだから、上部を治するには頭を用うべく、中を治するには身を用うべく、下を治するには尾を用うべく、上、中、下を通じて治するには全體そのままを用うるが一定の法則であつて、張氏の說の方が優れてゐるとせねばならぬ。凡そこの物は、晒し乾して熱いうちに紙で甕を封じて置けば蛀が付かぬものだ。

〔一六〕**氣味** 【〔一七〕苦し、溫にして毒なし】 別錄に曰く、辛し、大溫なり。普曰く、神農、黃帝、桐君、扁鵲は甘し、毒なしといひ、岐伯、雷公は辛し、毒なしといひ、李當之は小溫なりといふ。杲曰く、甘く辛し、溫にして毒なし。氣厚く味薄く、升るべく降るべく、陽中の微陰であつて、手の少陰、足の太陰、厥陰の經の血分に入る。之才曰く、䕡茹、濕麪を惡み、菖蒲、海藻、牡蒙、生薑を畏れ、雄黃を制す。

〔一八〕**主治** 【欬逆上氣、溫瘧寒熱の洗洗として皮膚中に在るもの、婦人の漏下、不妊症、諸惡瘡瘍。金瘡には煮汁を飲む】(本經) 【中を溫め、痛を止め、客血內塞、中風痓で汗の出ぬもの、濕痺、中惡、客氣、虛冷を除き、五臟を補し、肌肉を生ず】(別錄) 【嘔逆、虛勞、寒熱、下痢、腹痛、齒痛、婦人の瀝血、腰痛、崩中を止め、

(一六)木村(康)曰ク、當歸ノ根ニハ精油約〇・三%ヲ含有スルコト酒井和太郎東醫三〇(大、五)一四九三ニ其說アリ。

(一七)苦、本經、大觀共ニ甘ニ作ル。

(一八)木村(康)曰ク、當歸精油ノ主要生理的作用ハ大腦ノ鎮靜延髓諸中樞ノ興奮並ニ麻痺等ナリ。近時獨逸ノメルクヨリ發賣スル通經、鎮靜ヲ目的トスル新藥オイメールハ本藥品ヲ原料トスル製劑ナリ。

(一九)大觀ニ此下ニ下腸胃冷ノ四字アリ。
(二〇)大觀ニ血ニ作ル。
(二一)痿癖ハ手足殊ニ脚ノ不自由ナル病。
(二二)衝脈帶脈俱ニ奇經八脈ニ屬ス。
(二三)大觀ニ一ヲ此ニ作ル。

(一九)諸種の不足を補す】(甄權) 一切の風、一切の(二〇)氣を治し、一切の勞を補し、惡血を破り、新血を養ふ。及び癥癖、腸胃冷】(大明)【頭痛、心腹諸痛を治し、腸胃、筋骨、皮膚を潤ほし、癰疽を治して膿を排し、痛みを止め、血を和し、血を補す】(時珍)【(二一)痿癖で臥することを嗜み、足下が熱して痛むもの、(二二)衝脈の病となり、氣逆裏急するもの、帶脈の病となり、腹痛し、腰が溶溶として水中に坐するやうに覺ゆるものに主效がある】(好古)

【發明】○權曰く、虛冷の患者にはこれを加へて用ゐる。○承曰く、世俗には多く血を治するだけのものと思つてゐるが、金匱、外臺、千金の諸方ではいづれも人體の不足を補ふに正確な效を奏するものとしてあつて、古方に、婦人產後の惡血上衝を治するにこれ以上的切なるものなしとして用ゐてある。凡そ氣血昏亂の者はこれを服すれば直ちに安定する。實に虛補の藥として產後には必備の要藥である。

○○宗奭曰く、藥性論の『婦人の諸不足を補ふ』の(二三)一說に當歸の效用を言ひ盡してある。

○○○成無己曰く、脈は血の府であつて、諸血は皆心に屬する。凡そ脈を通ずるものは

必ず先づ心を補つて血を益すものだ。故に張仲景が、手、足が厥寒し、脈が細く、絶命せんとする者に當歸の苦、溫を用ゐたのは心の血を助けるためである。

元素曰く、その效用に三種ある。一は心の經の本藥である。二は血を和げる。三は諸病の夜間に甚しきものを治す。凡そ血が病を受けたものには必ずこれを用ゐねばならぬ。血が壅して流れず、ために痛むには、當歸の甘溫で能く血を和げ、辛溫で能く內寒を散じ、苦溫でよく心を助け寒を散じ、氣血をして各〻歸するところあらしめるのである。

好古曰く、手の少陰に入ればそれで心が血を生ずる。足の大陰に入ればそれで脾が血を裹む。足の厥陰に入ればそれで肝が血を藏する。頭はよく血を破り、身はよく血を養ひ、尾はよく血を行るもので、全部そのままを用ゐて人參、黃芪と共にすれば氣を補して血を生じ、牽牛、大黃と共にすれば氣を行らして血を破り、桂、附、茱萸と共にすれば熱し、大黃、芒硝と共にすれば寒する。佐使それぞれ決定的の法則があるのだから、これを用ゐる者はよくそれを會得して居らねばならぬ。酒で蒸したものの頭痛を治するは、諸痛は皆火に屬するものだから血藥を以て主とするの

である。

○機曰く、頭痛を治するには酒で煮て澄んだものを服し、その浮にして上る功力を取る。心痛を治するには酒で末を調へて服し、その濁にして半ば沈み半ば浮く功力を取る。小便出血を治するには酒で煎じて服し、その下極に沈入する功力を取る。かやうに自から高低に應ずるそれぞれの關係があるのだ。王海藏は『當歸は血藥である。それが如何にして胸中欬逆の上氣を治し得るか』といつてあるが、按ずるに當歸はその味が辛にして散ずる。乃ち血中の氣の藥である。殊に欬逆上氣なるものは陰が虛して陽がその據處を失ふ狀態となるものだ。故に血藥を用ゐて陰を補へばそれで血が和して氣が降ることになるのである。

○○韓悆曰く、當歸の功力は血分の病を主とするもので、川の產は力が剛くして攻るによく、秦の產は力が柔かで補に適するものだ。凡そ本病に用ゐるには酒制にするがよく、痰あるには薑制にする。それは血を導いて源に歸するの理である。血虛には人參、石脂を佐とし、血熱には生地黃、條芩を佐とする。それは生化の源を絕たざるためである。また（二四）血積には配するに大黃を以てする。要するに血藥には

（二四）血積ハ子宮痙攣ノコト。

(二五)血虛ハ貧血症。

當歸を用ゐぬといふことは容されない。故に古方の四物湯は、これを君とし、芍藥を臣とし、地黃を佐とし、芎藭を使としたのである。

附方　舊八、新十九。【(二五)血虛發熱】當歸補血湯——肌熱、燥熱して渴に苦しみ、水を飲みたがり、目赤く、顏紅く、晝夜間斷なく苦しみ、その脈が洪、大で虛して重く、按診するに全く力無きものを治す。これは血虛の證候であつて、飢困勞役に因つて現はれる。病證は白虎の證そのままの現象だが、ただ脈が長く實して居らぬだけの相異である。この場合、もし誤つて白虎湯を服するならば直ちに死亡する。左の方を主とせねばならぬものだ。當歸の身を酒で洗つて二錢、綿黃芪を蜜で炙いて一兩を一服とし、水二錢で一鍾に煎じ、一日二回、空心に溫服する。(東垣蘭室祕藏)【失血眩運】凡そ胎を傷めて血を失ひ、產後に血を失ひ、崩中で血を失ひ、金瘡で血を失ひ、牙を拔いて血を失ふ等、一切の失血過多のために心煩し、眩運し、悶絕して人事不省なるには、當歸二兩、芎藭一兩を用ゐ、五錢づつを水七分、酒三分で七分に煎じ、一日二回熱服する。(婦人良方)【衄血の止まぬもの】當歸を焙じて研末し、一錢づつを米飮で調へて服す。(聖濟錄)【小便出血】當歸四兩を剉み、

酒三升で一升に煮て頓服する。（射後）【裂けるやうな頭痛】當歸二兩、酒一升を六合に煮て毎日二回服す。（外臺祕要方）【內虛目暗】氣を補し、血を養ふ。當歸を生で晒して六兩、附子を火で炮いて一兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にして三十丸づつを溫酒で服す。これを六一丸と名ける。（聖濟總錄）【心下の刺痛】當歸を末にして酒で方寸匕を服す。（二六）（必效方）【手臂の疼痛】當歸三兩を切り、酒に三日間浸して溫めて飮む。飮み盡したならば別に三兩を再び浸して用ゐ、差るを度とする。（事林廣記）【溫瘧の止まぬもの】當歸一兩を水で煎じて毎日一回飮む。（聖濟總錄）【久痢の止まぬもの】當歸二兩、呉茱萸一兩を共に香しく炒り、萸を取り去つて末にし、蜜で梧子大の丸にして三十丸づつを米飮で服す。これを勝金丸と名ける。（普濟方）【大便不通】當歸、白芷等分を末にして二錢づつを米湯で服す。（聖濟總錄）【婦人のあらゆる病】諸虛、不足のものには、當歸四兩、地黃二兩を末にして蜜で梧子大の丸にし、食前に米飮で十五丸づつを服す。（大醫支法存方）【月經逆行】口鼻から出るには、先づ京墨の磨汁を服してそれを止め、次に當歸尾、紅花各三錢を水一鍾半で八分に煎じて溫服する。それで經は順に通ずる。（簡便方）【處女の月經閉止】當歸尾、沒藥各一錢を末

（二六）大觀ニ外臺祕要ニ作ル。

にし、紅花を浸した酒で一日一回北を向いて服す。(普濟方)【婦人の血氣】臍下が氣脹し、月經が利せず、血氣が上攻して嘔き氣があり、睡眠し得ぬには、當歸四錢、乾漆を燒いて性を存して二錢を末にし、煉蜜で梧子大の丸にして十五丸づつを溫酒で服す。(永類方)【墮胎下血】止まぬには、當歸を焙じて一兩、葱白一握を用ゐ、五錢づつを酒一盞半で八分に煎じて溫服する。(聖濟總錄)【妊娠胎動】神妙佛手散――婦人の妊娠傷動、或は胎兒が腹中で死亡して血が下り、疼痛し、口噤して死せんとするには、之を服して探る。胎兒が死なぬものはそれで痛みが止り、已に死んだものは立ろに下る。これは徐玉が神驗の方である。當歸二兩、芎藭一兩を粗き末にし、三錢づつを水一盞で煎じ、音をたてて乾き付かんとするところへ酒一盞を投じ、再び煎じて一沸して溫服し、或は灌ぎ込み、人が五里(三十丁)歩行する程の時間を隔て再服する。三五服を過ぎずして效がある。(張文仲備急方)【難産の胎兒死亡】横産、逆産には、當歸三兩、芎藭一兩を末にし、先づ大黑豆を炒り焦して流水一盞、童尿一盞を入れて一盞に煎じたもので二回に分服する。なほ效なきときは再服する。(婦人良方)【逆産の産兒死亡】娩出せぬには、當歸末方寸匕を酒で服す。(子母祕錄)【産後の血

脹】腹痛が脇に引くには、當歸二錢、乾薑を炮いて五分を末にし、三錢づつを水一盞で八分に煎じ、鹽酢少量を入れて熱服する。（婦人良方）【産後の腹痛】絞るが如きには、當歸末五錢を白蜜一合、水二盞で一盞に煎じて二回に分服し、なほ效の現はれぬときは再服する。（婦人良方）【産後の自汗】壯熱し、氣短く、腰、脚が痛んで寢返りもならぬには、當歸三錢、黃芪、白芍藥を酒で炒つて各二錢、生薑五片、水一盞半を七分に煎じて溫服する。（和劑局方）【産後の中風】人事不省となり、口に涎沫を吐き、手、足が瘛瘲するには、當歸、荊芥穗等分を末にし、二錢づつを水一盞、酒少量、童尿少量で七分に煎じて灌ぐ。咽を下れば直ちに正氣が付いて神效がある。（聖惠方）【小兒の（二七）胎寒】晝夜間斷なくよく啼くものはそれがために癇になる。當歸末を小豆一粒ほど乳汁で晝夜三四回灌ぐ。（肘後方）【小兒の臍濕】早く治療せねば臍風となる。或は赤く腫れ、或は水の出るには、當歸末を傅ける。一方では、麝香少量を入れる。一方では、胡粉等分を用ゐる。これを試むるに最も效驗があつた。若し癒えて後尿が入つてまた發るにはやはり再び傅ければ癒える。（聖惠方）【湯火傷瘡】炎けて赤く潰爛せるには、この方を用ゐれば肌を生じ、熱を抜き、痛みを止める。

（二七）胎寒ハ小兒初生面青ク身冷エ口噤グモノヲ云フ。

當歸、黃蠟各一兩、麻油四兩を用ゐ、先づ當歸を油で煎じて黃に焦し、滓を去つて蠟を入れ、攪きまぜて膏にし、火毒を出してのして貼る。(和劑局方)【白黃色枯】舌が縮んで意識が恍惚となり、言語が亂れるものは死ぬ。當歸、白朮二兩を水で煎じ、生芐汁を入れ蜜を和して服す。(三十六黃方)

(一)芎藭 音は穹(キウ)窮(キウ)である。 (本經中品)

和名 せんきう
學名 Cnidium officinale, Makino.
科名 繖形科(繖形科)

釋名 胡藭(別錄) 川芎(綱目) 香果(別錄) 山鞠窮(綱目)

時珍曰く、芎の字はもと营と書いた。名稱の意義は詳かでない。或は、人の頭は(二)穹窿、窮高で天の象であり、この藥は上行して專ら頭腦の諸疾を治するものだから芎藭なる名稱があるのだともいふ。(三)胡、戎の產が佳品となつてゐるところから胡藭といふ。古人は、その根節の形狀が馬銜のやうなところから馬銜芎藭といつた。後世その形狀が雀腦のやうなところから雀腦芎といふ。(四)關中に產するものを京芎、または西芎と呼び、(五)蜀中に產するものを川芎と呼び、(六)天台に產するものを台芎と呼び、江南

(一)牧野云フ、植物名實圖考ニ圖スル芎藭ハせんきうデハナク、蓋シのだけナラント思フ即チ其狀能ク肖テ居ル。木村(康)曰ク、支那產市販ノ川芎ハ本邦培養ノ川芎ニ甚ダ似タリト雖モ構造等ヨリ見レバ異種ナリ。白井曰ク、支那產ノモノハみやませんきう、一名ちしまにんじんノ根ナラン。之ニモ川芎ノ漢名アリ。

(二)字彙ニ穹窿天勢、郭璞曰天形穹窿其色蒼蒼。

(三)胡戎ハ北方西方ノ外國。

(四)關中ハ涇羊雍ノ註ヲ見ヨ。

(五)蜀中ハ今ノ四川省地方。

(六)天台ハ天台山ナ

に産するものを撫芎と呼ぶはいづれも産地の地名に因んだ稱呼である。左傳に、『(七)楚人が(八)蕭人に、麥麴があるか。山鞠窮があるか。河魚の腹痛はどうするのだと訊ねた』といふことがあるが、これはその二物がいづれも濕を禦ぐものだから、その意味での問答なのである。丹溪朱氏が『(九)六鬱を治する越鞠丸は中に(一〇)越桃、鞠窮を用ゐる』といふはやはり右の意味で藥名を呼んだのだ。金光明經にはこれを闍莫迦といつてある。

集解　別錄に曰く、芎藭は葉を蘼蕪と名ける。(一一)武功の川谷、(一二)斜谷の西嶺に生ずる。三月、四月に根を採つて暴乾する。

普曰く、芎藭は或は(一三)胡の無桃山の陰、或は泰山に生ずる。葉は細く香しく、色は青黑くして文が赤い。藁本のやうだ。冬も夏も叢生し、五月に赤い花を開き、七月に黑い實を結び、その實の端には二枚の葉が附いてゐる。三月根を採る。根には節があつて馬銜のやうだ。

弘景曰く、武功、斜谷、西嶺は共に長安の附近である。今は歷陽にも產し、また諸處にもある。民家で多く栽培し、葉は蛇牀に似て香しく、節が大きく莖が細い。

中心トスル一帶今ノ浙江省台州ノ地ヲ指ス。

(七)楚人ハ春秋楚國ノ代表者。楚ハ當時ノ大國、郢即チ今ノ湖北省荊州ニ都ス。

(八)蕭人ハ春秋蕭國ノ代表者。蕭ハ當時ノ小國、蕭即チ今ノ江蘇省蕭縣ノ地ナリ。

(九)六鬱ハ氣鬱、濕鬱、熱鬱、痰鬱、血鬱、食鬱。

(一〇)越桃ハ巵子ノ一名。

(一一)武功ハ漢ノ縣名、今ノ陝西省郿縣ニ在リ。武功山縣ノ南ニ在リテ北太白山ニ連ル。

(一二)斜谷ハ今ノ陝西省終南山中ノ大溪谷ニシテ郿縣ノ西南ニ在リ。延長四百二十支里、西口ヲ褒トイ

ヒ、東ロヲ斜トイフ。三國時代ニ諸葛亮ガ魏ヲ攻ムルニ方リ陽ニ此ニ戰蹤ヲ擧ゲ、陰ニ郿ヨリ進出セルニ因ツテ有名ナリ。
（一三）胡無桃山、未考。

形狀は馬銜のやうだから馬銜芎藭といふ。蜀中にもあるが細い。

○恭曰く、今は秦州に產する。所謂歷陽の產といふは一向に用ゐない。所謂世間で栽培するものは形塊が大きく、重く實して脂が多い。山中で採收するものは瘦せて細

〔芎藭蘼蕪〕

く、味は苦く辛い。九月、十月に採收したものを佳しとする。三月、四月に採つたのでは虛で惡い。時期が適當でないからだ。

○頌曰く、關陝、川蜀、江東の山中に多くあるが、蜀、川の產が勝れてゐる。四五月に葉が生え、水芹、胡荾、蛇牀などに似て叢となるが、莖は細く、その葉はそれ等の植物よりも更に香が高い。江東や蜀の地方では葉を採つて飲を作る。七八月に碎けた白い花を開く、蛇牀子の花のやうだ。根は堅く瘦せて黃黑色である。關中に產するものは形塊が重く實してゐる。雀腦の如き形狀のものを雀腦芎といひ、これ

が最も效力がある。

時珍曰く、蜀地方は寒が少いので、農家で多く栽培して秋深くなつても莖、葉が萎れず、清明節後に舊根から苗が生える。根の枝を分けて土中に横に埋めると、その節節から根が生え、八月になるとその根の下方に芎藭を結ぶ。それを掘り取つて蒸し曝らして賣り出すのである。救荒本草には『葉は芹に似て微し細く窄く、丫叉がある。また白芷の葉のやうでやはり細く、胡荽の葉のやうだが微し壯だ。蛇牀の葉に似た一種もあるがやはり粗い。嫩葉はゆでて食へる』とある。

宗奭曰く、凡そこれを用ゐるには、川中に産する大塊のもので、裏が白色で油がなく、嚼んで見て微し辛く甘いものを佳しとする。他の種類は藥には入れず、ただ末にし湯に煎じて沐浴用にするだけだ。

根（一四）　氣味　【辛し、溫にして毒なし】普曰く、神農、黃帝、岐伯、雷公は辛し、毒なしといひ、扁鵲は酸し、毒なしといひ、李當之は生では溫、熟では寒だといふ。元素曰く、性は溫、味は辛く苦い。氣厚く味薄く、浮にして升る、陽である。少陽の本經の引經の藥で、手、足の厥陰の氣分に入る。之才曰く、白芷が使と

（一四）木村(康)曰ク、川芎精油中ノ成分ハクニヂユムラクトン、クニヂユム酸、セダノン酸等。而シテセダノン酸ハ大和及仙臺產中ニ含有セラルルモ、北海道產ニハ之ヲ有セズ。文獻ハ 酒井和太郎―東醫三〇(大、五)九三五、藥誌九三五(大、八)二四六。村山義溫―藥誌四七七(大、一〇)九五一。村山義溫、板垣武熹―藥誌四九三(大、一二)一四三。

なる。黄連を畏れ、雌黄を伏し、細辛と配合すれば金瘡を療じて痛みを止め、牡蠣と配合すれば頭風、吐逆を療ず。

(一五) **主治** 【中風が脳に入つた頭痛、寒痺の筋攣、緩急、金瘡、婦人の血閉、不妊症】(本經)【脳中の(一六)冷動、顔面の(一七)遊風去來、目から涙が出て涕唾多きもの、恍惚として醉へるが如きもの、諸寒冷氣、心腹堅痛、中惡、卒急の腫痛、脇風痛を除き、內寒に中を溫める】(別錄)【腰脚軟弱、半身不遂、胞衣不下】(甄權)【一切の風、一切の氣、一切の勞損、一切の血。五勞を補し、筋骨を壯にし、衆脈を調へ、癥結を破り、貧血に新血を養ふ。吐血、(一八)鼻血、尿血、腦癰、發背、瘰癧、癭贅、痔瘻、瘡疥に肉を長じ、膿を排し、瘀血を消す】(大明)【肝氣を搜り、肝血を補し、肝燥を潤ほし、(一九)風虛を補ふ】(好古)【濕を燥し、瀉痢を止め、氣を行らし、鬱を開く】(時珍)【蜜で和し大丸にして夜間に服すれば風痰を治するに殊效がある】(蘇頌)【齒根の出血にはこれを含めば多くは瘥える】(弘景)

發明 宗奭曰く、今は一般に最も多く使用されて、頭面風には缺くべからざるものである。けれども他の藥を佐とする必要のあるものだ。

(一五)木村(康)曰ク、酒井氏ノ動物實驗報告ニヨレバ川芎ノ主成分ハ中樞神經ノ麻痺毒ナリ。
(一六)經疏云フ、動宜シク痛ニ作ルベシ。
(一七)遊風ハ腫脹。
(一八)大ニ洪ニ作ル。
(一九)風虛ハ陰症ノ中風ナランカ。

○○元素曰く、川芎は頭、目に上行し、血海に下行するものだから、清神、及び四物湯にはいづれもこれを用ゐてある。よく肝經の風を散じ、少陽、厥陰の經の頭痛、及び血虛の頭痛を治する聖藥だ。その應用に四種ある。少陽の引經となるが一、諸經の頭痛が二、清陽の氣を助けるが三、濕氣の頭に在るを散ずるが四である。

○杲曰く、頭痛には必ず川芎を用ゐ、もしそれで癒えぬときは各引經の藥を加へる。それは太陽には羌活、陽明には白芷、少陽には柴胡、太陰には蒼朮、厥陰には吳茱萸、少陰には細辛を加へるのである。

○○震亨曰く、鬱が中焦に在るには撫芎を用ゐ、その氣を開提して升らしめる。氣が升れば血は自ら降るものだ。故に撫芎は諸鬱の總てを解し、直ちに三焦に達して陰、陽の氣、血を通ずるの使藥である。

○○時珍曰く、芎藭は血中の氣の藥であつて、肝が急を苦しむには辛は以て之を補するものだから血虛の者に適するのだ。辛は以て之を散ずるものだから氣鬱の者に適するのだ。左傳に、麥麴、鞠窮は濕を禦ぎ河魚腹疾を治すとあるが、予も濕瀉を治するに毎にこの二味を加へて響の聲に應ずるが如き效果を擧げてゐる。血痢で已に

通じて痛みの止まぬものは陰が缺少して氣が鬱するのである。藥中に芎を加へて佐とすれば氣が行り、血が調ひ、その痛は立ろに止む。これ等はいづれも醫の學術の妙旨であつて、完全に妙機を體得したものにして始めて語るべきところである。

宗奭曰く、沈括の筆談に『兄弟の子の一人が永い間芎藭を服してゐたが、醫師（二〇）鄭叔がそれを見て「芎藭は久しく服してはならない。多くは頓死することがあるものだ」といつた。ところがその後その若者は果して疾なくして死亡した。又、朝士張子通の妻は（二一）腦風を病んで非常に永く芎藭を服してゐたが、甚だ突然に死亡した。これ等はいづれも目のあたり實見した事柄だ』と書いてある。これはいづれもこの物を單獨に服したのであつて、久しきに亙つたために眞氣を走散したものである。もし他の藥を佐使とするか、または久服せずして病に的中したときにやめればかやうな禍はなかつたのだ。

虞摶曰く、骨蒸多汗のもの、及び氣弱の人は久しく服してはならぬ。その性は辛くして散ずるものだから、眞氣を走泄せしめて陰がますます虛するのである。

時珍曰く、五味は胃に入れば各〻その本臟に歸する。久しく服すれば氣を增して

（二〇）大觀ニ叔ノ下ニ熊ノ字アリ。
（二一）腦風ハ頭痛ニ齒痛ヲ兼ヌルモノ。

偏勝となり、必ず偏絶の現象を發すから頓死の患に罹るのだ。若し藥に五味を具ひ、四氣を備ひ、君臣佐使の配合が適當であるならば、決してかかる害に遭ふべき筈はないのである。芎藭の如きは肝經の藥である。若し單獨に服し、それが久きに亙るならば、その辛は喜んで肺に歸し、肺氣は偏勝となり、金から進んで木を賊し、肝は必ず邪を受ける。それが更に久きに亙れば偏絶する。死亡の外はない道理だ。故に醫者は飽くまで科學的に正確を心掛けねばならないのである。

附方　舊七、新十二。【生犀丸】宋の眞宗皇帝が高相國に賜はつた痰を去り目を淸くし食慾を增進する生犀丸——川芎の緊つて小さきもの十兩を粟米泔で(二二)二日浸し、その間泔を換へ、その川芎を切片して日光で乾して末にし、それを二回分に分け、一回分に麝、腦各一分、生犀半兩を入れ、重湯で煮て蜜で和して小彈子大の丸にし、茶、酒で一丸を嚼んで服す。痰には硃砂半兩を加へ、(二三)膈痰には牛黄一分、水飛した鐵粉一分を加へ、頭、目の(二四)昏きには細辛一分を加へ、口、眼の喎斜するには炮いた天南星一分を加へる。(御藥院方)【氣虛の頭痛】眞川芎藭を末にし、臘茶で二錢を調へて服す。甚だ速效のあるもので、曾てある婦人の産後の頭痛

(二二)大觀ニ三ニ作ル。
(二三)大觀ニ隔痰ニ作ル。
(二四)大觀ニ昏下ニ眩字アリ。

が一服で癒えた。(集簡方)【氣厥の頭痛】婦人の氣盛の頭痛、及び產後の頭痛には、川芎藭、天台烏藥等分を末にし、二錢づつを葱茶で調へて服す。○御藥院方では、白朮を加へて水で煎じて服す。【風熱頭痛】川芎藭一錢、茶葉二錢を水一鍾で五分に煎じて食前に熱服する。(簡便方)【頭風化痰】川芎を洗ひ切り晒し乾かして末にし、煉蜜で小彈子大の丸にして時に拘はらず一丸を嚼んで茶(二五)淸で服す。(經驗後方)【偏頭風痛】京芎を細かに剉み、酒に浸して日每に飮む。(斗門方)【風熱上衝】頭、目が眩運し、或は胸中の利せぬには、川芎、槐子各一兩を末にし、三錢づつを茶淸で調へて服す。胸中不利には水で煎じて服す。(張潔古保命集)【首風旋運】及び偏、正頭疼で汗多きもの、惡風、胸膈痰飮には、川芎藭一斤、天麻四兩を末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを嚼んで茶淸で服す。(劉河間宣明方)【失血眩運】方は當歸の條を見よ。【一切の心痛】大芎一箇を末にして燒酒で服す。一箇は一年間の心痛を止め、二箇は二年間の心痛を止める。(孫氏集效方)【驗胎法】經水不行が三箇月に亙つたとき妊娠か否かを驗する法。川芎を生で末にし、空心に煎艾湯で一匙を服す。腹中が微動すれば妊娠であり、動かなければ妊娠ではない。(靈苑方)【胎氣の損動】躓仆、

(二五)大觀ニ酒ニ作ル。

或は打撲、又は重きものを持ち擧げたために胎を損じた胎中不安、或は胎兒死亡の場合には、芎藭を末にして酒で方寸匕を服し、少頃の間に一二服すれば立ろにその胎兒を出す。(二六)(千金方)【崩中下血】晝夜止まぬには、千金方では、芎藭一兩を淸酒一大盞で五分に煎じて徐徐に飮む。○聖惠では、生地黃汁一合を加へて共に煎じる。【酒癖の脇脹】時にまた嘔吐し、腹に水のやうな音のするには、川芎藭、三稜を炮いて各一兩を末にし、二錢づつを葱白湯で服す。(聖濟總錄)【小兒の腦熱】目を閉ぢたがり、或は太陽が痛み、或は目の赤腫するには、川芎藭、薄荷、朴硝各二錢を末にして少量を鼻中に吹く。(全幼心鑑)【齒の腐つた口臭】水で芎藭を煮て含む。(二七)(廣濟方)【牙齒の疼痛】大川芎藭一箇を舊糟中に一箇月間納れて取り出し、細辛を入れて共に研末して牙に揩る。(本事方)【諸瘡腫痛】撫芎を煆き研つて輕粉を入れ、麻油で調へて塗る。(普濟方)【産後の乳懸】婦人産後に兩乳房が忽ち長くなり、腸のやうに細く垂れて小肚を過ぎ、痛み忍び難きものは須臾にして死亡するの危險がある。これは乳懸といふものだ。芎藭、當歸各一斤を用ゐ、その半斤を散に剉んで瓦石器の中に入れ、水で濃く煎じて多少に拘らず頻りに服す。かくて殘り一斤半をば塊に剉

(二六)大觀ニ千上ニ續字アリ。

(二七)大觀ニ續千金方トアリ。

み、患者の卓子の下で烟に焼いて口鼻からその烟を吸はす。その一劑を用ゐ盡してなほ癒えぬときは再び同量の一劑を用ゐ、同時に萆麻子一粒をその頂心に貼る。（夏子益奇疾方）

蘼蕪（本經上品）

和名　せんきゅう
學名　Cnidium officinale, Makino.
科名　繖形科（繖形科）

【釋名】 **薇蕪**（本經） **蘄茝**（爾雅） **江蘺**（別錄） 頌曰く、蘄茝は芹茝の古字である。時珍曰く、蘼蕪、あるひは薇蕪と書く。その莖、葉が靡弱で繁蕪するものだからかく名けたのだ。當歸の別名は蘄、白芷の別名は蘺であつて、この物は葉が當歸に、香が白芷に似たところから蘄茝、江蘺の名稱を呼ばれたのだ。王逸が『蘺草は江中に生ずる。故に江蘺といふ』といふは此の草のことだ。その他下文を見よ。

【集解】 別錄に曰く、芎藭の葉を蘼蕪と名ける。又曰く、蘼蕪、一名江蘺は芎藭の苗である。(一)雍州の川澤、及び(二)寃句に生ずる。四月、五月に葉を採つて暴乾する。弘景曰く、今は(三)歷陽の諸處に產し、農家で多く栽培する。葉が蛇床に似て

(一)雍州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。
(二)寃句ハ沙參ノ註ヲ見ヨ。
(三)歷陽ハ當歸ノ註ヲ見ヨ。

香しい。文人はこれを物の譬に引くが、醫方の藥に用ゐることは稀である。

恭曰く、このものに二種ある。一種は芹葉に似たもの、一種は蛇牀に似たものだ、香氣はみな似たもので、功用もやはり異らない。

時珍曰く、別錄に『蘼蕪、一名江蘺は芎藭の苗である』とあるが、司馬相如の子虛賦には『芎藭、菖蒲、江蘺、蘼蕪』といひ、上林賦には『被するに江蘺を以てし。糅ふるに蘼蕪を以てす』といふ。一物で無いやうに見ゆるは何故かとの疑問も起るが、蓋し嫩苗のまだ根を結ばぬうちは蘼蕪、既に根を結んで後が芎藭、大葉で芹に似たものが江蘺、細葉で蛇牀に似たものが蘼蕪と別けて見れば自からはつきりする。淮南子に『人物の高下を僞るのは芎藭を藁本と擬ひ、蛇牀を蘼蕪と擬ふやうなものだ』といふも、やはり細葉の者を指さしていつたものである。廣志には『蘼蕪は香草だ。衣類に入れて置くがよい』とあり、管子には『五沃の土に蘼蕪生ず』とあり、郭璞の贊に『蘼蕪は香草にして、之を亂る蛇牀も、その貴を損はず、自から烈しくして以て芳し』とある。又、海中の苦䔯も江蘺と名けるがただ同名といふだけだ。

氣味【辛し、溫にして毒なし】主治【欬逆。驚氣を定め、邪惡を辟け、蠱毒、鬼疰を除き、三蟲を去る。久しく服すれば神に通ず】(本經)【身中の(四)老風、頭中の久風、風眩に主效がある】(別錄)【飲にして用ゐれば泄瀉を止める】(蘇頌)

花 主治【(五)面脂の材料に入れる】(時珍)

(一)蛇牀(本經上品)

和名 じやしやう
學名 Cnidium Monniori, Cuss.
科名 繖形科(繖形科)

釋名 蛇粟(本經) 蛇米(本經) 虺牀(爾雅) 馬牀(廣雅) 墻蘼(別錄。また思益、繩毒、棗棘と名ける) 時珍曰く、蛇、虺が好んでその下にゐてその子を食ふ。故に蛇、虺、蛇粟などの諸名をつけたのだ。葉が蘼蕪に似てゐるところから墻蘼ともいふ。爾雅には『盱は虺牀なり』とある。

集解 別錄に曰く、蛇牀は(二)臨淄の川谷、及び田野に生ずる。五月實を採つて陰乾する。弘景曰く、田野、村落に甚だ多い。花、葉はさながら蘼蕪に似たものだ。保昇曰く、葉は小葉の芎藭に似て花が白い。子は黍粒ほどで黄白色だ。下濕の

(四)老風ハ風濕ノ類ナラン。久風ハ頭痛ノ類ナラン。

(五)面脂ハ化粧藥。

(一)牧野云フ、蛇牀ノ學名ヲ一ニSelinum Monnieri, L. ト稱スル、我邦ノ本草學者從來蛇牀ヲはまぜりニ充テシモ中ツテ居ナイ、はまぜりハ學名 Cnidium japonicum, Miq. 一名 Selinum japonicum, Fr. et Sav. デアル。同屬デハアレドモ別ノ種デアル、蛇牀ハ我邦ニハ産セヌ。

(二)臨淄ハ漢ノ縣名、今ノ山東省ニ在リ。

地に生ずる。所在にあるが、揚州、襄州のものを良しとする。頌曰く、三月苗を生じて高さ二三尺になり、葉は青く碎けて叢を作す。蒿枝に似た枝毎に上に百餘の花頭が一窠に結び集つた樣は馬芹の類に似てゐる。四五月にその花が開き、白色で傘狀をしてゐる。子

〔蛇牀〕

は黃褐色で大さ黍米ほどの至つて輕虛なものだ。時珍曰く、花は碎けた米のやうに叢がり著き、子は兩片が合成して蒔蘿の子のやうで細かく、やはり細かい稜もある。凡そ花、實の蛇牀に似たものは當歸、芎藭、水芹、藁本、胡蘿蔔などである。

子　修治　斅曰く、凡そこれを使ふには、濃き藍汁、竝に百部草根の自然汁と共に(三)一伏時の間浸して漉出して日光で乾し、更に生地黃汁を拌ぜて午前(四)十時から午後十時まで蒸し、取出して日光で乾して用ゐる。大明曰く、凡そこれを服食するには、皮殼を揉み去つて仁を取り、微し炒つて毒を殺せば辣くなくなる。湯に

(三)大觀ニハ三ニ作ル。
(四)大觀ニ從午至亥ニ作ル即正午十二時ヨリ午後十時マデナリ。

(五)瘖痛ハ痲木シテ寒熱疼痛ヲ知ラザルヲ云フ。
(六)大觀ニハ疼ニ作ル。
(七)縮メルトハ時間ヲ永ク保ツコト。

して洗滌するには生で用ゐる。

【氣味】【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、辛く甘し、毒なし。權曰く、小毒あり。之才曰く、牡丹、貝母、巴豆を惡み、硫黃を伏す。

【主治】【男子の陰痿、濕癢。婦人の陰中腫痛。痺風を除き、關節を利す。癲癇、惡瘡。久しく服すれば身體を輕くし、顏色を好くする】(本經)【中を溫め、氣を下し、婦人の子臟を熱せしめ、男子の陰を强くする。久しく服すれば子を儲けしめる】(別錄)【男子、婦人の虛濕痺、毒風(五)瘖痛を治し、男子の腰(六)痛を去る。男子の陰を浴すれば風冷を去つて大いに陽事を益する】(甄權)【男子の陽氣を暖め、婦人の陰氣を助け、腰、胯の酸疼、四肢の頑痺を治し、小便を(七)縮め、陰汗、濕癬、齒痛、赤白帶下、小兒の驚癇、撲損の瘀血を去る。湯に煎じて大風の身癢を浴す】(大明)

【發明】斅曰く、この藥は人をして陽氣盛數ならしめるので、鬼考と呼ばれる。

時珍曰く、蛇牀なるものは右腎、命門、少陽、三焦の氣分の藥である。神農がこれを上品に列したのは、獨り男子を補助するばかりでなく、よく婦人にも益するところがあるからだ。世人はこの物を捨てて殊更に外國や遠隔の地に補藥を求めてゐる

が、目を賤んで耳を貴ぶとはそれをいふのではあるまいか。

附方　舊四、新十一。【陽事不起】蛇牀子、五味子、兎絲子等分を末にして蜜で梧子大の丸にし、一日三回、三十丸づつを温酒で服す。（千金方）【赤白帶下】月經の催さぬには、蛇牀子、枯白礬等分を末にし、醋麪糊で彈子大の丸にして胭脂を衣にかけ、綿に裹んで一日一回膣內へ挿入する。甚しく熱するときは再び換る。（儒門事親方）【子宮寒冷】温中坐藥蛇牀子散――蛇牀子仁を末にし、白粉少量を入れ、和勻して棗大にし、綿で裹んで挿入すれば自然に温まる。（金匱玉函方）【婦人の陰癢】蛇牀子一兩、白礬二錢の煎湯で頻りに洗ふ。（集簡方）【產後の陰脫】絹に蛇牀子を包んで蒸熱して熨す。また別法では、蛇牀子五兩、烏梅十四箇を水で煎じて一日五六回洗ふ。（千金方）【婦人の陰痛】方は上に同じ。【男子の陰腫】脹痛するには、蛇牀子末を雞子黄で調へて傅ける。（永類方）【大腸脫肛】蛇牀子、甘草各一兩を末にし、一日三回、一錢づつを白湯で服し、同時に蛇牀末を傅ける。（經驗方）【痔瘡の腫痛】忍び難きには、蛇牀子の煎湯で薰洗する。（簡便方）【小兒の癬瘡】蛇牀子を杵いて末にし、豬脂に和して塗る。（千金方）【小兒の甜瘡】頭、顏、耳の邊と連つて水が流れ、

極めて痒くして久しく癒えぬには、蛇牀子一兩、輕粉三錢を細末にし、油で調へて塗る。(普濟方)【耳内の濕瘡】蛇牀子、黄連各一錢、輕粉一字を末にして吹く。(全幼心鑑)【風蟲牙痛】千金方では、蛇牀子、燭燼を共に研つて塗る。○集簡方では、蛇牀子を湯に煎じ、熱して數回漱げば立ろに止まる。【冬季の喉痺】腫痛して藥を飲込めぬには、蛇牀子を瓶中に入れて烟に燒き、口に瓶の口を含んでその烟を吸ふ。その痰は自から出る。(聖惠方)

(一)藁本（本經中品）

和名　かうほん
學名　Ligusticum sinense, Oliv.
科名　繖形科（繖形科）

【釋名】藁茇（綱目）鬼卿（本經）鬼新（本經）微莖（別錄）恭曰く、根の上部と苗の下部が禾藁に似てゐるから藁本と名けたものだ。本とは根の意味である。時珍曰く、古代には香料に用ゐて藁本香と呼んだものだ。山海經には藁茇と名けてある。

【集解】別錄に曰く、藁本は(二)崇山の山谷に生ずる。正月、二月に根を採つて

(一) 牧野云フ、我邦ノ本草學者從來藁本ヲかさもち即チNothosmyrnium japonicum, Miq. ニ充ツレドモ今之レニ從ハズ。

(二) 崇山ハ今ノ湖南省大庸縣ノ西南ニ在リ。

暴乾し、三十日で仕上がる。弘景曰く、一般に用ゐるは芎藭の根鬚で、その形も香氣も相類してゐるが、桐君の藥對には芎藭の苗は藁本に似たといひ、その花と實とは同じでなく、産地も異ふといつてある。今は(三)東山に別に藁本なるものがあつて、形も香氣も甚だ相似たものだが、ただそれは長大なものだ。

恭曰く、藁本は莖、葉、根、味に少し芎藭と區別がある。今は(四)宕州に産するものが佳い。

頌曰く、今は西川、河東の州郡、及び兗州、杭州にいづれもある。葉は白芷香に似て、また芎藭に似てゐるが、ただ芎藭は水芹に似て大きく、藁本は葉が細いのである。五月に白い花を開き、七八月に子を結ぶ。根の色は紫だ。

〔藁本〕

時珍曰く、江南の深山中には皆ある。根は芎藭に似て輕虛だ。味は辣くて飲には作れない。

(三)東山ハ今ノ浙江省上虞縣ノ西南四十五支里ニ在リ。

(四)宕州ハ石部雄黃ノ註ヲ見ヨ。

(五)疝瘕ハ腰腹ノ疼痛。
(六)嚲曳ハ手足ノ不遂。
(七)粉刺ハニキビ。
(八)內塞ハ內攻。

根【氣味】【辛し、温にして毒なし】別錄に曰く、微寒なり。權曰く、微温なり。元素曰く、氣は温、味は苦く大いに辛し、毒はない。氣厚く味薄く、升であり陽である。是の太陽の本經の藥である。之才曰く、藺茹を惡み、青葙子を畏る。

【主治】【婦人の(五)疝瘕、陰中の寒腫痛、腹中の急。風頭痛を除き、肌膚を長じ、顏色を好くする】(本經)【霧露の潤澤を辟け、風邪の(六)嚲曳、金瘡を療ず。沐藥、面脂を作るによし】(別錄)【一百六十種の惡風、鬼疰流入、腰の痛冷を治し、よく小便を化し、血を通じ、頭風、野皰を去る】(甄權)【皮膚の疵皯、酒皶、(七)粉刺、癇疾を治す】(大明)【太陽の頭痛で頂端の痛むもの、大寒が腦を犯して痛みが齒、頰に連なるものを治す】(元素)【頭部、面部、身體、皮膚の風濕】(李杲)【督脈の病となつて脊が强ばり厥するもの】(好古)【癰疽に排膿し、(八)內塞するを治す】(時珍)

【發明】元素曰く、藁本は太陽の經の風の藥である。その氣は雄壯であつて、寒氣が本經に鬱する頭痛に必用の藥である。頭の頂端の痛みはこれ以外に除き得るものがない。木香と共に用ゐれば霧露の淸邪が上焦に中つたものを治す。白芷と共に面脂にして用ゐれば風を治するは固より、また濕を治す。やはりその類に從ふの

道理である。

時珍曰く、邵氏の聞見錄に『夏英公が泄を病んだ時、太醫は虚に對する治療を施したが效がなかつた。その時霍翁が、これは風が胃に客するのだといつて藁本湯を飲ませると、それで止んだ』とある。蓋し藁本は能く風濕を去るからである。

附方　新三。【大實心痛】已に利藥を用ゐたものにこれを用ゐればその毒を徹する。藁本半兩、蒼朮一兩を二服とし、水二鍾で一鍾に煎じて溫服する（活法機要）【頭屑を乾洗する】藁本、白芷等分を末にし、夜摻擦して朝梳れば垢が自から取れる。（便民圖纂）【小兒の疥癬】藁本の煎湯で浴し、幷にその兒の著る衣類を洗濯する。（保幼大全）

實　主治　【風邪の四肢に流入せるもの】（別錄）

附錄　徐黃（別錄）　有名未用に曰く、味辛し、平にして毒なし。心腹の積瘕に主效があり、莖は惡瘡に主效がある。澤中に生ずるもので、莖が太く葉が細い。香は藁本のやうだ。

蜘蛛香（綱目）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

【集解】時珍曰く、蜘蛛香は蜀西の(一)茂州、松潘の山中に產する。草の根だ。黑色で粗い鬚があり、形狀は蜘蛛のやう、また藁本、芎藭のやうだ。氣味は芳しい。彼の地方ではやはり珍重してゐる。或は猫が好んで食ふものだといふ。

〔蜘蛛香〕（時珍）

根　【氣味】【辛し、溫にして毒なし】

【主治】【瘟疫、中惡、邪精、鬼氣、尸疰を辟ける】

(二)白芷（本經中品）

和名　はなうど
學名　Heracleum lanatum, Michx.
科名　繖形科（繖形科）

【釋名】白茝　音は止(シ)また昌海の切(サイ)と發音する。芳香（本經）澤芬

(一)茂州ハ今ノ四川省茂縣ノ地、松潘ハ松潘縣ノ地ナリ。

(二)牧野云フ、白芷ヲAngelica anomala, Pall. ニ充ツルハ穩ナラズト思フ、私ハ今愚見ヲ以テ之レヲはなうどトシタ。

（別錄）　苻蘺（別錄）　**虈**　許驕の切（キョウ）と發音する。**莞**　音は官（クワン）である。葉の名は（二）**蒚麻**　音は力（リヨク）である。**葯**　音は約（ヤク）である。時珍曰く、徐鍇は『初めて生じた根幹を芷となす』といつてある。白芷の意義はこれに據つたのだ。王安石の字說には『茝香は以て鼻を養ふべく、また體を養ふべきものだから、その意味で茝の字は𦣞に從つたのだ。𦣞の音は怡（イ）意味は養である』といつてある。許愼の說文には『晉では虈といひ、齊では茝といひ、楚では蘺といふ』とある。また葯ともいふ。下澤に生ずるもので、芬芳が蘭と德を同うするところから、文人は蘭茝といつて嘆美の言葉とし、本草にも芳香、澤芬の名稱がある。古代にはこれを香白芷といつたさうだ。

〔集解〕　別錄に曰く、白芷は河東の川谷、下澤に生ずる。二月、八月に根を採つて暴乾する。弘景曰く、今は諸處にあるが東方の地に甚だ多い。葉は香に合はせ得る。

頌曰く、所在にあるが吳の地方が就中多い。根の長さ一尺餘、粗細一定せず、色は白い。枝は幹の地上五寸以上のところに生える。春葉が生えて婆娑として相對し、

（二）大觀蒚麻ノ二字ナク、蒚ノ一字アリテ音歷ニ作ル。

紫色で廣さ三指ばかりある。花は白くして微黄色だ。伏の節に入つて後子を結び、立秋の節後に苗が枯れる。二月、八月に採つて暴す。黄色で澤のあるものが佳い。

斅曰く、凡そこれを採る場合に四本の條が一處に生えたものを採つて用ゐてはならぬ。それは喪公藤といふものだ。また馬蘭の根と誤り用ゐてはならぬ。

〔香　芷　白〕

根【修治】斅曰く、採取したならば土皮を刮り去つて細かに剉み、黄精片等分と共に一伏時蒸し、(三)曬乾して黄精を去つて用ゐる。時珍曰く、今は一般に根を採つて洗ひ刮り、一寸位に截つて石灰とよく拌ぜ、晒して取收めて置く。それは蛀が付き易きを防ぐのと、色を白くして置くためである。藥には微し焙じて入れる。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】元素曰く、氣は溫、味は苦くして大いに辛

(三)字書ニ曬ハ所賣切音晒、曬ナリトアリ、日ニサラスコト。

い。氣味共に輕くして陽である。手の陽明の引經の本藥であつて、升麻と共に用ゐれば手、足の陽明の經を通じ行らす。また手の太陰の經にも入る。之才曰く、當歸が使となる。旋覆花を惡み、雄黃、硫黃を制す。

(四)【主治】【婦人の漏下赤白、血閉、陰腫、寒熱頭風が目を侵して涙の出るもの。肌膚を長じ、顏色を潤澤にする。面脂を作るによし】(本經)【風邪久(五)渴、吐嘔、兩脅(六)滿、頭眩、目癢を療ず。膏藥に作るによし】(別錄)【目赤胬肉を治し、面皯、疵瘢を去り、(七)胎漏滑落を補し、宿血を破り、新血を補ふ。乳癰、發背、瘰癧、腸風、痔瘻、瘡痍、疥癬。痛を止め、膿を排す】(大明)【能く膿を蝕し、心腹の血刺痛、婦人の瀝血、腰痛、血崩を止める】(甄權)【手の陽明の頭痛、中風寒熱、及び肺經の風熱、頭部、面部、皮膚の風痺燥癢を解利す】(元素)【(八)鼻淵、鼻衄、齒痛、眉稜骨痛、大腸風祕、小便失血、婦人の血風眩運、飜胃吐食を治し、砒毒を解す。蛇傷、刀箭の金瘡】(時珍)

【發明】杲曰く、白芷は風の治療に通じて用ゐる。その氣は芳香でよく九竅を通じ、表汗には缺くべからざるものである。劉完素曰く、正陽明の頭痛、熱厥頭痛

(四)木村(康)曰ク、はなうどノ根ニハアンゲリカ酸類似ノ酸並ニ一種ノ弱キ痙攣毒アンゲリコトキンヲ含ム。文獻ハ村山長之助―藥誌一五二(明、二七)九五二。酒井和太郎―東醫三一(大、六)藥誌四五五(大、八)二四八。

(五)本草經疏ニ渴宜作瀉トアリ。

(六)大觀ニ滿ノ下ニ風痛ノ二字アリ。

(七)胎漏ハ妊娠中血ノ大ニ下ルヲ云フ。

(八)鼻淵ハ鼻蓄膿症。

（九）都梁ハ縣名、漢ノ侯國、故城ハ今ノ湖南省武岡縣ノ東北ニ在リ。

を治するにこれを加へて用ゐる。好古曰く、辛夷、細辛と共に用ゐて鼻病を治し、內托散に入れて用ゐれば肌肉を長ずるを見れば陽明に入ることが認められる。

時珍曰く、白芷は色は白く味は辛くして手の陽明の庚金に行り、性は溫で氣に厚くして足の陽明の戊土に行り、芳香は上に達して手の太陰、肺の經に入る。肺は庚に對しては弟の地位、戊に對しては子の地位に在るものだ。故に白芷の主たる病は右の三經の範圍を出でないのであつて、頭、目、眉、齒の諸病の如きは三種の風熱である。漏帶、癰疽の諸病の如きは三經の濕熱である。風熱をば辛で散じ、濕熱をば溫で除く、これが陽明の主たる藥たる所以なのだ。かかる關係から、またよく血病、胎病を治し、膿を排し、肌を生じ、痛を止めるのである。按ずるに、王璆の百一選方に『王定國が風頭痛を病んだとき、（九）都梁へ往つて明醫楊介の治療を請ふと、介はこれが治療に藥三丸を續服させ、それで病は卽時に癒えたので、懇にその處方を求めると、それは香白芷一味を用ゐ、洗ひ晒して末にして煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを嚼んで茶淸、或は荊芥湯に溶かして服するのであつた。そこで都梁丸と命名した。その藥は、頭風眩運、婦人の產前、產後、傷風頭痛、血風頭痛を治して

いづれも效がある』と記載してある。戴原禮の要訣にも『頭痛に熱を挾み、項に（一〇）磊塊を生じたるにはこれを服するが甚だよし』とある。又、臞仙の神隱書には白芷を植ゑればよく蛇を辟けるとあつて、これは夷堅志所載の蝮蛇傷を治する方から來たものだが、やはり性の畏る所を以て制するわけである。しかし本草には一向その事には言及してなかつた。

宗奭曰く、藥性論には『白芷はよく膿を蝕す』とあつて、今は一般に滯下、腸に敗膿があつて絶えず淋露し、腥穢殊に甚しく、遂に臍腹冷痛を起すものの治療に用ゐてゐるが、これ等の痛はいづれも敗膿血に因するものだから、この物を用ゐて膿を排するのである。方は白芷一兩、單葉の紅蜀葵根二兩、白芍藥、白枯礬各半兩を末にし、蠟で化して梧子大の丸にし、空心、及び食前に米飲で十丸、或は十五丸を服し、膿の盡くるを俟つて他の藥で補ふ。

附方　舊一、新三十三。

【一切の傷寒】神白散——又、聖僧散と名ける。時行一切の傷寒を治するには、陰陽、輕重、老少、男女、姙婦を問はずいづれもこれを服するがよし。白芷一兩、生甘草半兩、薑三片、葱白三寸、棗一箇、豉五十粒を水二

（一〇）磊ハ石ノ多キ貌塊ハ土塊。

碗で煎じて服し汗を取る。發汗せぬときは再服する。發病後十餘日に及んでなほ汗を出さぬときは皆これを服するがよい。この藥は患者の運命を豫知し得るもので、もし煎じる際に藥が黑色を呈し、或は誤つて覆せばその病は癒え難い。もし煎じて黃色になれば必ず癒えるものだ。故に煎じるには誠心誠意を要し、婦人、雞、犬に見られることを忌む。(衞生家寶方)【一切の風邪】方は上に同じ。【風寒流涕】香白芷一兩、荊芥穗一錢を末にし、二錢づつを蠟茶で點て服す。(百一選方)【小兒の流涕】これは風寒である。白芷末、葱白を擣いて小豆大の丸にし、二十丸づつを茶で服し、同時に白芷末を薑汁で調へて太陽の穴に塗り、熱い葱粥を食つて汗を取る。(聖惠方)【小兒の身熱】白芷を煮た湯で浴し、汗を取つて風に當らぬやうにする。(子母祕錄)【頭部、面部の諸風】香白芷を切つて蘿蔔汁に浸み透らせ、日光で乾して末にし、二錢づつを白湯で服し　或は鼻に𪖙ぐ。(直指方)【偏正頭風】あらゆる藥で治癒せぬものにも一服にてよし。天下第一の方である。香白芷を炒つて二兩五錢、川芎を炒り、甘草を炒り、川烏頭を半生半熟にして各一兩を末にし、一錢づつを細茶薄荷湯で調へて服す。(談埜翁試效方)【頭風眩運】都梁丸——發明の項を見よ。【眉稜骨痛】

風熱と痰とに屬する。白芷、片芩を酒で炒つて等分を末にし、二錢づつを茶淸で調へて服す。（丹溪纂要）【風熱牙痛】香白芷一錢、硃砂五分を末にして蜜で芡子大の丸にし、頻りに牙に擦る。これは（一）濠州の田舍の婦人が人を治療した方だが、（二）廬州の郭醫は『他藥に比して非常に勝れたものだ』といつた。或は白芷、吳茱萸等分を水に浸して漱涎する。（醫林集要）【一切の眼疾】白芷、雄黃を末にし、煉蜜で龍眼大の丸にして硃砂を衣にかけ、一日二回、一丸づつを食後に茶で服す。これを還睛丸と名ける。（普濟方）【口齒の氣臭】百一選方では、香白芷七錢を末にして食後に井水で一錢を服す。○濟生方では、白芷、川芎等分を末にし、蜜で芡子大の丸にして日每に噙む。【盜汗の止まぬもの】太平白芷一兩、辰砂半兩を末にして二錢づつを溫酒で服す。屢效驗を得た。（朱氏集驗方）【（三）血風反胃】香白芷一兩を切片して瓦で黃に炒つて末にし、豬肉七片を七回沸湯に漬けてその末を蘸けて食ふ。一日一回。（婦人良方）【脚氣腫痛】白芷、芥子等分を末にし、薑汁で和して塗るが效がある。（醫方摘要）【婦人の白帶】白芷四兩を石灰半斤で三晝夜漬けて灰を去り、切片して炒つて研末し、一日二回、二錢づつを酒で服す。（醫學集成）【婦人の難產】白芷五錢を水で

（一）濠州ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。
（二）廬州ハ唐ニ置ク。今ノ安徽省合肥縣ハソノ舊治ナリ。
（三）血風ハ經水逆上シテ陸運ヲ發スルモノ。

煎じて服す。(唐瑤經驗)【産前、産後】烏金散(うきんさん)——産前、産後の虚損、月經不順、崩漏、及び横産、逆産を治す。白芷、百草霜等分を末にし、沸湯に童尿と醋とを入れて調へて二錢を服す。丹溪は滑石を加へて芎歸湯で調へた。(普濟方、【大便風祕】香白芷を炒つて末にし、二錢づつを米飲に蜜少量を入れたもので續けざまに二服する。(十便良方)【小便の氣淋】結澀(けつじふ)して通ぜぬには、白芷を醋に浸して焙じ乾て二兩を末にし、木通、甘草を煎じた酒で調へて一錢づつ續けざまに二服する。(普濟方)【鼻衄(びぢく)の止まぬもの】その出た血で白芷末を調へて鼻の山根に塗れば立ろに止まる。(簡便方)【小便出血】白芷、當歸等分を末にして米飲で二錢づつを服す。(經驗方)【腸風下血】香白芷を末にして二錢づつを米飲で服すれば神效がある。(余居士選奇方)【痔瘻出血】方は上に同じ。幷に湯に煎じて熏じ洗ふ。(直指方)【痔瘡腫痛】豫め皂角(さうかく)の烟で痔を熏じて後、鵞膽汁(がたんじふ)で白芷末を調へて塗れば直ちに消す。(醫方摘要)【腫毒熱痛】醋で白芷末を調へて傅ける(衛生易簡方)【乳癰の初期】白芷、貝母各二錢を末にして温酒で服す。(祕傳外科方)【疔瘡(ちやうさう)の初期】白芷一錢、生薑一兩を酒一盞に擂(す)り、温服して汗を取れば直ちに散ずる。これは陳指揮(ちんしき)の方である。(袖珍方)【癰疽赤腫】白芷、大黄等

（一四）臨川ハ今ノ江西省臨川縣ノ地ナリ。

（一五）揩揩ハ用力ノ貌。

分を末にして米飲で二錢を服す。（經驗方）【小兒の丹瘤】遊走して腹に入れば必らず死亡する。發したとき急に截風散を用ゐてこれを截ち、白芷、寒水石を末にして生葱汁で調へて塗る。（全幼心鑑）【刀、箭の傷瘡】香白芷を嚼み爛らして塗る。（集簡方）【砒石の毒を解す】白芷末二錢を井水で服す。（事林廣記）【諸骨哽咽】白芷、半夏等分を末にして一錢を水で服すれば直ちに嘔出する。（普濟方）【毒蛇の螫傷】（一四）臨川のある者は蝮に咬まれてその場に昏死し、咬まれた片臂が股のやうに太くなつて、少頃すると全身の皮膚が黄黑色に脹れ上つた。その時ある道人が新汲水で香白芷末一斤を調へて灌ぎ込むと、臍中が（一五）揩揩然として口から黄色の水を吐出し、その腥穢傍人をして嘔逆させるほどだつたが、しばらくして脹れが消縮し、もとのやうに回復した。麥門冬湯で調へれば更に妙だといふことである。同時に更に末を搽るがよし。又、徑山寺の僧が蛇に咬まれて片脚全體が潰爛し、あらゆる藥を用ゐても癒えなかつたが、ある行脚僧が新水で數〻その腐敗した患部を洗淨し、白筋が見えるまでに拭き乾かして白芷末に膽礬、麝香少量を入れて摻つた。するとそこから惡水が涌出して、日毎にそれを繰返すと一个月で平復した。（洪邁夷堅志）

葉 主治 【浴湯にして用ゐれば尸蟲を去る】(別錄)【丹毒、癮疹、風瘙を浴する】(時珍)

附方 新一。【小兒の身熱】白芷の苗、苦參等分を漿水で煎じ、鹽少量を入れて洗ふ。(衞生總微論)

(一)芍藥

芍の音は杓(シヤク)又音は勺(セキ)である。 (本經中品)

和名 しやくやく
學名 Paeonia albiflora, Pall.
科名 うまのあしがた科(毛茛科)

釋名 將離(綱目) 犁食(別錄) 白木(別錄) 餘容(別錄) 鋌(別錄) 白きものは**金芍藥**と名ける。(圖經) 赤きものは**木芍藥**と名ける。時珍曰く、芍藥は婥約といふ意味だ。婥約とは美好の形容で、この草は花の姿態が婥約たるものだからこの形容詞を名としたのだ。羅願の爾雅翼に『食の毒を制することと勺より良きはない。故に藥の文字を名に用ゐたのだ』とあつて意味はやはり通じる。詩の鄭風には『伊れ其れ相謔れ、之を贈るに芍藥を以てす』とあり、韓詩外傳には『勺藥は離草なり』とあり、董子には『勺藥、一名將離』とある。故に將に別れんとすると

(一)牧野云フ、芍藥ハ我日本ニハ野生ハナイ、やましやくやくナドハ全ク別種ニ屬スル。

きにこれを贈つたものだ。俗にその花の非常に瓣の多いものを小牡丹と呼ぶ。赤いものは木芍藥と呼び、牡丹の名稱と同じである。

集解　別錄に曰く、芍藥は(一)中岳の川谷、及び丘陵に生ずる。二月、八月に根を採つて暴乾する。弘景曰く、今は(三)白山、蔣山、(四)茅山の產が最も好く、白くして長さ一尺ばかりある。餘處にもあるが多くは赤い。赤いものは少し利す。志曰く、この物には赤、白の兩種ありて、その花にもやはり赤、白の二色ある。

頌曰く、今は諸處にあるが淮南のものが勝れてゐる。春紅い芽が生えて叢生し、莖の上に三枝五葉があつて、葉は牡丹に似て狹く長い。高さは一二尺、花は初夏に開いて紅、白、紫の數種があり、子は牡丹の子に似て小さい。秋季に根を採る。崔豹の古今注に「芍藥に草芍藥、木芍藥の二種あつて、木のものは花が大きく色が深い」とある。俗に牡丹と呼ぶは誤りだ。安期生の服鍊法には『芍藥のうち、金芍藥は色白くして脂多く、木芍藥は色紫で瘦せて脈が多い』とある。

承曰く、本經に『芍藥は丘陵に生ず』とあるが、今は一般に多くは人家で種植したものを用ゐる。その花、葉を肥大ならしむるために必ず肥料を加へ、毎年八九月

(一)中岳、即チ嵩山。五色石脂嵩高山ノ註參照。
(三)白山、蔣山ハ朮ノ註ヲ見ヨ。
(四)茅山ハ延胡索三茅山ノ註ヲ見ヨ。

に根を取り、それを分削し藥に賣出して利益を擧げてゐる。現に淮南、(五)眞陽に就中多いがそれは根が肥大だが香味は佳くなく、藥に入れて效果が少い。

〔芍藥〕

○時珍曰く、既往には、洛陽の牡丹、揚州の芍藥といつて、天下に冠たるものとしてあつたが、今も藥用にはやはり揚州のものを多く採用する。十月芽が生えて春まで成長し、三月花を開く。その種類には凡そ三十餘種あつて、千葉、單葉、(六)樓子などの變種がある。藥用には單葉のものの根がよく、氣味も完全で厚い。根の赤、白は花の色に隨ふものだ。

根 (七)【修治】 ○斅曰く、凡そこれを採取したならば、竹刀で皮、幷に頭土を刮り去つて細に剉み、蜜水を拌ぜて午前十時から午後二時まで蒸して晒乾して用ゐる。

(五) 眞陽ハ今ノ河南省正陽縣ノ地ナリ。

(六) 樓ハやぐらざき一名だんざき。

(七) 木村(康)曰ク、本邦調製法ニヨリ白芍、赤芍、眞芍、家芍藥等アリ、眞芍、白芍ノ如キハ褐色ノ根皮ヲ除去セルモノナリ。

時珍曰く、今は一般に多く生で用ゐ、ただ中寒を避けるに酒で炒り、婦人の血藥に入れるに醋で炒るだけである。

〔八〕【氣　味】【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、酸し、微寒にして小毒あり。普曰く、神農は苦しといひ、桐君は甘し、毒なしといひ、岐伯は鹹しといひ、雷公は酸しといひ、李當之は小寒なりといふ。元素曰く、性は寒、味は酸、氣厚く味薄く、升つて微し降る。陽中の陰である。杲曰く、白芍藥は酸し、平にして小毒あり。升るべく降るべく、陰である。好古曰く、味は酸くして苦い。氣薄く味厚く、陰であり降であり、手、足の太陰の行經の藥である。肝、脾の血分に入る。之才曰く、〔九〕須丸が使となる。石斛、芒硝を惡み、消石、鼈甲、小薊を畏れ、藜蘆と反す。禹錫曰く、別本には須丸を雷丸と書いてある。時珍曰く、白朮と共に用ゐれば脾を補し、芎藭と共に用ゐれば肝を瀉し、人參と共に用ゐれば氣を補し、當歸と共に用ゐれば血を補し、酒で炒れば陰を補し、甘草と共に用ゐれば腹痛を止め、黃連と共に用ゐれば瀉痢を止め、防風と共に用ゐれば痘疹を發し、薑、棗と共に用ゐれば經を溫め濕を散ず。

（八）木村（康）曰ク、成分ハ安息香酸ヲ含ミ鹽基性物質ハ無シ。文獻ハ朝比奈泰彥、奥野政造―藥誌三〇九（明、四〇）一二三七。

（九）須丸ハ赭石ノ一名。

（一〇）血痺ハ風邪ニ犯サレ皮膚微風ニ吹カルルヤウニ感ズルヤマヒ。

（一一）擁氣ハ痞滿ヲ云フ。

（一二）陽維ハ奇經八脈ノ一。

（一三）大觀ニハ志ニ作ル。

【主治】 『邪氣、腹痛、（一〇）血痺を除き、堅積を破り、寒熱疝瘕には痛を止め、小便を利し、氣を益す』（本經）『血脈を通じて順にし、中を緩にし、惡血を散じ、賊血を逐ひ、水氣を去り、膀胱、大小腸を利し、癰腫を消す。時行寒熱、中惡、腹痛、腰痛』（別錄）『臟腑の（一一）擁氣を治し、五臟を强くし、腎氣を補ひ、時疾の骨熱、婦人の血閉不通を治し、よく膿を蝕す』（甄權）『婦人一切の病、產前、產後の諸疾。風を治し、勞を補し、熱を退け、煩を除き、氣を益す。驚狂、頭痛。目赤に目を明かにする。腹風瀉血、痔瘻、發背、瘡疥』（大明）『肝を瀉し、脾、肺を安んじ、胃氣を收め、瀉痢を止め、腠理を固くし、血脈を和し、陰氣を收め、逆氣を斂める』（元素）『中氣を理し、脾虛中滿、心下痞、脇下痛、善く噫して肺の急促するもの、腹逆喘欬、太陽の鼽衄、目濇、肝血不足、（一二）陽維の病で寒熱に苦しむもの、帶脈の病で腹の痛滿に苦しむもの、腰が溶溶として水中に坐するが如きものを治す』（好古）『下痢、腹痛後重を止める』（時珍）

【發明】 （一三）恭曰く、赤いものは小便を利して氣を下し、白いものは痛みを止めて血を散ず。大明曰く、赤いものは氣を補ひ、白いものは血を補ふ。弘景曰く、赤

いものは少し利す。一般醫方で、痛を止めるに用ゐて當歸に劣らぬ效力がある。

(一四)白いものは道家でも服食し、また石を煮るに用ゐる。

成無已曰く、白きは補し、赤きは散ずる。味の酸は收し、甘は緩にするものだ。故に酸、甘相合して用ゐるので、陰血を補し、氣を通じ、肺燥を除くのである。又曰く、芍藥の酸は津液を斂めて營血を益し、陰氣を收めて邪熱を泄す。

元素曰く、白きは補し、赤きは散ずるもので、肝を瀉し、脾、胃を補するには、酒に浸して經を行らし中部に止まる。腹痛には、薑と共に用ゐて經を溫め、濕を散じ、塞を通じ、腹中の痛、胃氣の不通を利す。白芍は脾の經に入つて中焦を補するもので、下利には必ず用ゐねばならぬ藥である。蓋し瀉利は皆太陰の病だからこの物が缺くべからざるわけなのだ。炙甘草を佐として配合すれば腹中痛を治す。夏季には少し黃芩を加へ、惡寒には桂を加へる。これは仲景の神方だ。この藥の功用には大體に於て六種あつて、脾經を安んずるが一、腹痛を治するが二、胃氣を收めるが三、瀉痢を止めるが四、血脈を和するが五、腠理を固くするが六である。

(一四)大觀ニ白者ノ二字ナシ。

（一五）氣大觀ニ血ニ作ル。

宗奭曰く、芍藥は必ず單葉紅花のものを用ゐるが佳いのであるが、（一五）氣の虛寒の患者には禁物だ。古人も芍藥を減じて中寒を避けよといつてある。誠に忽にならぬことだ。

震亨曰く、芍藥は脾火を瀉すものだが、性味が酸寒だから冬季には必ず酒で炒つて用ゐる。凡そ腹痛は多くは血脉の凝濇に因るものだから、やはり必ず酒で炒つて用ゐるのだが、それもただよく血虛の腹痛を治するだけで、その他にはいづれも治效がない。それはその酸寒は收斂するだけで温、散の功力がないためである。下痢腹痛には必ず炒つて用ゐ、後重のものには炒らずして用ゐる。産後には用ゐてはならない。それはこの物の酸寒は生發の氣を伐ふものだからであつて、已むを得ぬときにはやはり酒で炒つて用ゐる。

時珍曰く、白芍藥は脾を益してよく土の中に於て木を瀉し、赤芍藥は邪を散じてよく血中の滯を行るものである。日華子が『赤は氣を補し、白は血を治す』といふが、それは審詳を缺いてゐる。産後には肝血が已に虛して更に瀉すべからざるものだから、禁ずるものに酸寒の藥が多いのであつて、獨り芍藥に限つて特別に避ける

（二六）湯液本草ニハ諸濕ヲ停メテ津液ヲ益ストアリ。

といふわけではない。このゆゑに蘇頌は『張仲景が傷寒を治するに多く芍藥を用ゐるは、そのものの功が寒熱に主效を有して小便を利するからだ』といひ、李杲は『ある人は、古人は酸濇を以て收するものとしてあるに、本經に小便を利すといつてあるは何故かといふに、それは、芍藥は能く陰を益し、濕を滋くして（二六）津液を停むるものだから小便が自ら出るのであつて、通利の功に因るものではない』といひ、更に又『中を緩にするとあるは何故かといふに、それは、肝を損じたものに對してその中を緩にするので、卽ち血を調へるのだ』といつてある。かかる次第で四物湯には芍藥を用ゐたのだ。概して酸濇なるものは收斂、停濕の劑だから、手、足の太陰の經を主とするものなのであつて、收斂なる作用の本質はまたよく血海を治し、飽くまで人體の下部に及び、後に厥陰の經に達するものである。白なる色は方位に配するれば西に在るものだから補であり、赤なる色は南に在るものだから瀉である。

附方　舊六、新十。【服食法】頌曰く、安期生の芍藥を錬り服する法に『芍藥には二種あつて、病を治療するには金芍藥の色白く脂肉多きものを用ゐる。木芍藥と呼ぶ一種は色が紫で瘦せて脈が多い。採る場合に誤り取らぬやうに注意せねばな

（一七）風毒ハ瘰状膿瘍皮膚膿瘍ナイソ。
（一八）夾絹袋ハ裏付ノ袋ナラン。
（一九）大觀ニ方ノ上ニ後字アリ。
（二〇）鄂渚ハ今ノ湖北省武昌縣ノ西ノ江中ニ在リ。

らぬ。凡その金芍藥を採つたならば、洗浄して皮を去り、東流水で煮て百沸して陰乾し、そのまま三日間置いてまた木甑に入れて蒸し、上を淨い黄土で覆ふて一晝夜間それを熟し、取り出して陰乾し、擣いて末にし、一日三回、麥飲或は酒で三錢七づつを服す。滿三百日繼續すれば高嶺に登渉し、穀食を絶つて饑ゑない』とある。（圖經本草）【腹中の虚痛】白芍藥三錢、炙甘草一錢、夏季には黄芩五分を加へ、惡寒には肉桂一錢を加へ、冬季の大寒には更に桂一錢を加へ、水二盞で一盞半に煎じて温服する。（潔古用藥法象）【（一七）風毒骨痛】風毒の體中に在るには、芍藥二分、虎骨一兩を炙いて末にし、（一八）夾絹袋に入れて五日間酒三升に漬け、一日三回、三合づつを服す。（一九）（經驗方）【脚氣腫痛】白芍藥六兩、甘草一兩を末にし、白湯に點て服す。（事林廣記）【消渇引飮】白芍藥、甘草等分を末にし、一日三回、一錢づつを水で煎じて服す。（二〇）鄂渚の辛祐之は九年間この病を患ひ、服藥すれば止んでもまた發つたが、蘇朴がこの方を授けて服ませると七日にして頓に癒えた。古人の方には殆んど窺ひ知り難い微妙なものがある。平易なもののやうでも忽にしてはならない。（陳日華經驗方）【小便五淋】赤芍藥一兩、檳榔一箇を麪で裹んで煨いて末にし、一

錢づつを水一盞で七分に煎じて空心に服す。(博濟方)【衄血の止まらぬもの】赤芍藥を末にして水で二錢七を服す。(事林廣記)【衄血、喀血】白芍藥一兩、犀角末(二一)二錢半を末にし、新水で一錢七を服す。血の止まるを度とする。(古今錄驗)【崩中下血】小腹痛甚しきには、芍藥一兩を黃色に炒り、柏葉六兩を微し炒り、二兩づつを水一升で六合に煎じ、酒五合を入れて再び七合に煎じ、空心に二回に分服す。また末にして酒で二錢を服するもよし。(聖惠方)【經水の止まらぬもの】白芍藥、香附子、熟艾葉各一錢半を水で煎じて服す。(熊氏補遺)【血崩帶下】赤芍藥、香附子等分を末にし、一日二回、三錢づつを鹽一捻りと水一盞で七分に煎じて溫服すれば十服で效果がある。これは如神散とも名ける良方である。【赤白帶下】歲月深く瘥えぬには、白芍藥三兩、乾薑半兩を剉んで黃色に炒り、搗いて末にし、一日二回、空心に米飮で二錢七づつを服す。廣濟方ではただ芍藥を黑く炒り、研末して酒で服す。(貞元廣利方)【金瘡出血】白芍藥一兩を黃に熬つて末にし、酒或は米飮で二錢を服して漸次に量を加へ、同時に末を瘡上に傅ける。止痛に良好の效驗がある。(廣利方)【痘瘡の脹痛】白芍藥を末にして酒で半錢を服す。(痘疹方)【(二二)木舌腫滿】口が塞がれば死ぬ。紅

(二一)大觀ニ一分ニ作ル。

(二二)木舌ハ舌ハ腫レテ口ニ滿ツルモノ。

芍藥、甘草を煎じた水で熱くして漱ぐ。（聖濟總錄）【魚骨哽咽】白芍藥を細に嚼んで汁を嚥む。（事林廣記）

(一)牡丹（本經中品）

和名 ぼたん
學名 Paeonia suffruticosa. Andr.
科名 うまのあしがた科（毛茛科）

【釋名】鼠姑（本經） 鹿韭（本經） 百兩金（唐本） 木芍藥（綱目） 花王 時珍曰く、牡丹は色の丹なるを以て上とする。子は結ぶのであるが、新苗は根から生える。故にこれを牡（チス）丹（紅色）といふのである。唐時代に木芍藥と呼んだのは、その花が芍藥に、舊幹が木に似てゐるからである。あらゆる花の種類中で牡丹が第一、芍藥が第二となつてゐるところから、世に牡丹を花王、芍藥を花相といふ。歐陽修の花譜には凡そ三十餘種を記載してあるが、その名稱は、或は土地に因み、或は人物に因み、或は色彩に因り、或は奇異なる事跡等に因つてそれぞれ列擧されてある。詳細は同書に就いて見るがよい。

【集解】別錄に曰く、牡丹は(二)巴郡の山谷、及び漢中に生ずる。二月、八月根

(一) 牧野云フ、牡丹ノ一ノ學名トシテ Paeonia Moutan, Sims. ハ能ク人ニ知ラレタモノデアル。普通ニ培養セラレテ居レドモ支那ノ西北部地方ニハ野生ガアル。

(二) 巴郡ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。漢中ハ

を採りて陰乾する。弘景曰く、今は東方の諸地方にもある。色の赤きを好しとする。
恭曰く、漢中、(三)剣南に生ずる。苗は(四)羊桃に似て夏白い花を開く、秋圓く綠の實を結び、その實は冬に赤色になる。冬を凌いで凋まない。根は芍藥に似て肉が白く皮が丹い。その地では百兩金と呼ぶ。(五)長安で吳牡丹と呼ぶものがその眞物である。今俗間で用ゐるものはこれとは異ひ、別の臊氣のあるものだ。
(六)頌曰く、今は(七)合州に產するものが佳く、和州、宣州のものも良い。白いものは補し、赤いものは利す。
大明曰く、ここにいふ物は牡丹花の根のことだ。巴蜀、(八)渝、合州のものが上等品だ。(九)海鹽のものは次位にある。
頌曰く、現に(一〇)丹、延、青、越、滁、和州の山中にいづれもあるが、但し花に黃、紫、紅、白の數種がある。これは山牡丹であらう。莖梗は枯燥して黑、白色だ。二月に梗の上部に苗葉が生え、三月花を開く。その花、葉は人家に種植するものとよく似てゐるが、ただ花が五六瓣に過ぎないものだ。五月に黑色で雞頭子大の子を結び、根は黃白色で長さ五七寸、筆管ほどの太さである。近世一般に珍重して、變

石部礬石ノ註ヲ見ヨ。
(三) 劍南ハ唐ノ十道ノ一、今ノ四川省劍閣以南、大江以北、及ビ甘肅省嶓冢山以南ノ地ナリ。
(四) 羊桃第十八巻蔓草類ニ見ユ。
(五) 長安ハ水部溫湯ノ註ヲ見ヨ。
(六) 大觀ニ炳ニ作ル
(七) 合州ハ今ノ四川省合川縣ノ地ナリ。和州ハ石部玉頂馬腦ノ註、宣州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(八) 渝州ハ隋ニ置キ宋ニ恭州ニ改メ、後ニ重慶府トナス。今ノ四川省巴縣ノ治ナリ。
(九) 海鹽ハ縣名、漢ニ置ク。明清皆浙江省嘉興府ニ屬シ、今ハ浙江省錢塘道ニ屬ス。

（一〇）丹州ハ茈胡ノ註、延州ハ土部墨ノ鄜延ノ註、青州ハ水部井泉水ノ註、越州ハ石部蛇黃ノ註、滁州ハ人參ノ註ヲ見ヨ。

（一一）褒斜ハ芎藭ノ斜谷ノ註參照。

り種を作るために秋、冬期間に肥土に移植して培ふので、春になると花が盛んに咲き、種種雜多に變つた花が咲く。しかしそのために根の性は甚だしく本來の純眞を失ひ、藥の中には用ゐられぬ程極端に力がなくなる。

〔牡　丹〕

○○宗奭曰く、牡丹の花にはやはり緋なるものも深碧なるものもあるが、藥に入れるには山中に生ずる單葉で紅花のものが佳い。商人は或は枝梗の皮をこれに充てるが、甚だしい謬りだ。

○○時珍曰く、牡丹を藥に入れるには紅、白の單瓣のものに限る。所謂千葉の特異な種類は皆人工的に作るので、氣、味が純眞でないから用ゐられない。花譜に『丹州、延州以西、及び（一一）褒、斜の地方に最多く、その邊に荊棘が生えてゐると同じやうだ。少しも珍らしくない。その地方ではそれを採つて薪にしてゐる。根は藥に入れて尤

(二二)木村康一曰ク、成分ハ龍腦糖體(ぺおのーると葡萄糖トヨリ成ル)安息香酸ぶいとすてりん等ヲ含ム、生藥ニ於テハぺおのーる游離シテ皮ノ内面ニ大ナル結晶トナリ析出セルモノヲ見ルコトアリ。文獻ハ Martin u. Yogi: Arch. pharm. 213(1878) 335. 長井長義—藥誌七七(明、一七)二八八、同八一、(明、二二)四九五。田成直純—藥誌一一七(明、二四)一〇七七(明、二五)二二〇、(一二)Peron: Journ. Pharm. chim. 7 (1911) 235.

(二三)桐君ノ二字恐クハ衍。

も妙效のあるものだ』と記載してある。凡そ牡丹花を栽培するに、根の下へ白斂末を入れると蟲を辟ける。穴の中へ硫黃を少し入れると蠹を殺す。烏賊骨をその樹に刺せば必ず枯れる。これはこれ等の物と性質上に關係があるからだ。やはり心得て置くべきことである。

根皮【修治】斅曰く、凡そ根を採取したならば、日光で乾かして銅刀で劈いて骨を去り、大豆ほどの大さに剉んで酒と細かに拌ぜ、午前十時から午後二時まで蒸して(二二)日光で乾かして用ゐる。

【氣味】【辛し、寒にして毒なし】別錄に曰く、苦し、微寒なり。普曰く、神農、岐伯は辛しといひ、雷公、(二三)桐君は苦し、毒なしといひ、桐君は苦し、毒ありといふ。好古曰く、氣は寒、味は苦辛、陰中の微陽で手の厥陰、足の少陰の經に入る。之才曰く、貝母、大黃、兎絲子を畏る。大明曰く、蒜、胡荽を忌み、砒を伏す。

【主治】【寒熱中風、瘛瘲、驚癇、邪氣。癥堅、瘀血の腸、胃に留舍するを除き、五臟を安んじ、癰瘡を療ず】(本經)【時氣の頭痛、客熱、五勞、勞氣の頭腰痛、風

（一四）湯液、蒙筌共ニ胞ノ字ナシ。

噤、癩疾を除く】（別錄）【久しく服すれば身體を輕くし、壽命を益す】（吳普）【冷氣を治し、諸痛を散ず。婦人の經脈不通、血瀝、腰痛】（甄權）【關腠、血脈を通じ、膿を排し、撲損の瘀血を消し、筋骨を續き、風痺を除き、胎を治し、胞を下す。産後一切の冷熱血氣】（大明）【神志不足、汗無き骨蒸、衄血、吐血を治す】（元素）【血を和し、血を生じ、血を涼し、血中の伏火を治し、煩熱を除く】（時珍）

發明　元素曰く、牡丹は天地の精、あらゆる花の首位である。葉は陽で生を發し、花は陰で實を成す。丹は赤色、火の色である。故によく陰の（一四）胞中の火を瀉すのであつて、四物湯に之を加へれば婦人の骨蒸を治す。又曰く、牡丹皮は手の厥陰、足の少陰に入るものだから無汗の骨蒸を治し、地骨皮は足の少陰、手の少陰に入るものだから有汗の骨蒸を治す。神の不足は手の少陰、志の不足は足の少陰である。故に仲景の腎氣丸はこれを用ゐて神志不足を治するのである。又、この藥はよく腸、胃の積血、及び吐血、衄血を治するに必用のものである。故に犀角地黄湯にこれを用ゐるのだ。

杲曰く、心虛、腸、胃積熱で心火が甚しく熾んに、心氣不足のものには牡丹皮を

君藥として用ゐる。

時珍曰く、牡丹皮は手、足の少陰、厥陰の四經血分の伏火を治す。蓋し伏火、卽ち陰火であり、陰火、卽ち相火であつて、古方ではただこの意味で相火を治した。故に仲景の腎氣丸にこれを用ゐてある。後世では專ら黃蘗のみが相火を治するものと考へて、牡丹の功の更に勝れたことを知つてゐない。これは千載の祕奧であつて、世間が一向氣の付かぬことであるが、今ここに公開する。赤花のものは利し、白花のものは補することも、やはり世間で會得したものは稀だが、心得て置くべきことである。

附方　舊三、新三。【癩疝偏墜】氣脹して動けぬには、牡丹皮、防風等分を末にして酒で二錢を服すれば甚だ效がある。（千金方）【婦人の惡血】上部、面部に攻聚して怒り勝ちなるには、牡丹皮半兩、乾漆を烟が盡きるまで燒いて半兩を水二鍾で一鍾に煎じて服す。（諸證辨疑）【傷損瘀血】牡丹皮二兩、虻蟲二十一箇を熬り、共に搗いて末にし、每朝溫酒で方寸匕を服すれば血は水に化して下るものである。（貞元廣利方）【金瘡內漏】牡丹皮を末にし、指で三撮を水で服すれば立ろに尿から血を排出

（一五）丹水ハ秦ノ縣、故城ハ今ノ河南省淅川縣ノ西、丹水ノ陽ニ在リ。

する。（千金方）【下部に生じた瘡】已に口が付いて洞になりたるには、牡丹末を一日三回方寸匕づつ湯で服す。（肘後方）【蠱毒を解す】牡丹根を擣いて末にし、一日三回一錢匕づつを服す。（外臺祕要）

附錄 **鼠姑** 別錄に曰く、味苦し、平にして毒なし。欬逆上氣、寒熱鼠瘻、惡瘡邪氣に主效がある。一名を蠘といひ、（一五）丹水に生ずる。弘景曰く、今は一般に識られぬものだ。牡丹も一名鼠姑といひ、鼠婦も一名鼠姑といふ。いづれが正しいのか判らない。

木香（本經上品）

和名 もくかう
學名 Inula racemosa, Hook. fil.
科名 きく科（菊科）

釋名 **蜜香**（別錄）**青木香**（弘景）**五木香**（圖經）**南木香**（綱目）時珍曰く、木香は草類であつて、蜜のやうな香氣があるところから本來は蜜香といつたのだが、沈香の中にも蜜香があるので、これをば遂に訛つて木香といふやうになつたのだ。昔はこれを青木香といつたが、後世では馬兜鈴の根を青木香と呼び、これをば南木

香、廣木香と呼んで區別する。今は一般にまた一種の（一）薔薇をも木香と呼ぶので、いよいよいづれが眞のものかが紛はしくなつて了つた。三洞珠嚢には『五香とは青木香のことだ。一株五根、一莖五枝。一枝五葉で葉間にまた五節があるところから（二）五木香と名ける。これを焼けばよく上は（三）九天に徹する』とある。古方に瘡疽を治する五香連翹湯があつて、その中に青木香を用うとあり、古樂府に『（四）氍毹毾㲪五木香』とある。いづれもこれを指すのである。蘇頌が『修養書に「正月一日に五木（五）香を取つて湯にして浴すれば、人をして老年になつても鬚髮を黑からしむ」といひ、徐鍇の註に「道家では青木香を五木ともいひ、多くはそれを浴湯にする」とある』と引證したのはこの物だ。金光明經にはこれを矩琵佗香といつてある。

【集解】別錄に曰く、木香は（六）永昌の山谷に生ずる。弘景曰く、これは青木香のことだ。今は永昌からは一向送つて來ない。皆外國から船で輸入され、（七）大秦に産するものだといはれてゐる。現にすべて香に合せてゐるもので、藥には使用しない。

恭曰く、この物には二種あつて、（八）崑崙から來るものは佳品といひ得るが、（九）西

（一）牧野云フ、薔薇類ノ木香ハ我日本ニハ野生ナク支那ノ原産ハ Rosa Banksiae, R. Br. ノ學名ヲ有シ、我邦デハもくかうばらト呼ンデ居ル蔓性ノばらデ、花ニ白色ノモノト黄色ノモノトガアル。
（二）本草原始ニ五木香ニ作ル。
（三）九天ハ中央及四正、四隅ヲ九天ト曰フ、一説ニ九重ノ天ヲ日フ。
（四）氍毹毾㲪ハ皆毛織ノ屬ニシテ、胡地ノ産物ナリ。
（五）大觀ニ香ヲ煮ニ作ル、然レバ五木ヲ取テ湯ニ煮テ以テ浴スト譯スベキナリ。
（六）永昌ハ金部銀ノ註ヲ見ヨ。
（七）大秦ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。

（八）崑崙ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。
（九）西湖、大觀ニハ西胡ニ作ル、從フベシ。西胡トハ今ノ甘肅以西、異種族ノ據ル地方ヲ指ス。

湖から來るものは善くない。葉は羊蹄に似て長く大きく、花は菊花のやうで黃黑の實を結ぶ。所在にもあるものだ。功用の範圍は極めて廣いもので、陶氏が藥には使用せぬといふは誤りだ。

（廣州木香）

○權曰く、南州異物志に『青木香は天竺に產するものだ。この草の根は形狀が甘草のやうだ』とある。

○頌曰く、今はただ廣州から船舶で來るだけで、他に產する所はない。根窠は如何にも茄子に似たもので、葉は羊蹄に似て長く大きく、また山藥のやうで根が太く、紫の花を開くものもある。時季に拘はらず根芽を採つて藥にする。形が枯骨のやうで味が苦く、牙齒に粘るものを良しとする。江淮地方にもこの種のものがあつて土青木香と名けるが、藥用には堪へない。蜀本草に、孟昶の苑囿中にも嘗てこれが植ゑてあつたといひ『苗の高さ三四尺、葉の長さ八九寸、皺が

あり、軟かで毛があり、黄色の花を開く』とあるが、恐らくはやはり（一〇）土木香の種類であらう。

○斅曰く、この香は盧蔓で根條が左巻きに巻いてあるものだ。採取して二十九日經てば朽骨のやうに硬くなる。盧頭に丁蓋があつて子の色の青いものならば木香としての神品だ。

○○宗奭曰く、嘗て（一一）岷州から（一二）塞外へ出たとき、青木香を取つて（一三）西洛へ持歸つた。葉は牛蒡のやうだが狹く長く、莖は高さ二三尺、花は黄色でさながら金錢のやうであつた。その根が卽ちその香で、生で嚼んで見ると苦い。香は非常に氣を行らすものであつた。

○承曰く、木香は今は皆外國から來る、陶氏の說が正しいのである。蘇頌の圖經に載せた廣州のものといふは木の類だ。また（一四）滁、鬼、（一五）海州のものとして載せたのは馬兜鈴の根だ。冷熱を治療するに一向相似たところがない。皆誤つて繪いたものだ。

○○時珍曰く、木香は南番の諸國にいづれもある。大明一統志に『葉は絲瓜に類した

（一〇）牧野云フ、此ニ土木香ノ種ト記セル植物ハ其形狀ノ記載ヨリ考ヘテ是レおほぐるま卽チ Inula Helenium, L. デアラウト思フ、小野蘭山ノ說可ナリト斷ズル。
木村康一曰ク、おほぐるまノ根莖及根ハイヌリンヲ含有シ、其含量ハ秋期大ニシテ四四％ニ至ル、其苦味質精油一乃至二％ヲ含有ス、精油ハ殆ンド全ク腦分ヨリナリ、其主成分ハアラントラクトンニシテ其他アラントール、イソアラントラクトン、アラントール酸等ヲ含有ス。

（一一）岷州ハ西魏ニ置ク、清ニ甘肅省鞏昌府ニ屬シ、今ハ縣トシテ甘肅省蘭山道ニ

ものて、冬季に根を採つて晒乾する』とある。

根 修治 時珍曰く、凡そ氣を理する藥に入れるにはただ生で用ゐる。火氣に當ててはならぬ。また大腸を實するには麪で煨熟して用ゐるがよい。

氣味 【辛し、溫にして毒なし】元素曰く、溫は熱、味は辛く苦し、氣味共に厚く、沈にして降る、陰である。杲曰く、苦く甘く辛し、微溫であつて降る。陰である。好古曰く、辛く苦し、熱である。味は氣よりも厚い。陰中の陽である。

主治 【邪氣。毒疫、溫氣を辟け、志を強くし、淋露に主效がある。久しく服すれば夢に魘はれなくなる】(本經)【消毒。鬼精の物を殺す。溫瘧、蠱毒、氣劣、氣の不足、肌中の偏寒。引藥の精である】(別錄)【心腹一切の氣、膀胱の冷痛、嘔逆、反胃、霍亂、泄瀉、痢疾を治し、脾を健にし、食物を消化し、胎を安らかにする】(大明)【(一六)九種の心痛、積年の冷氣、痃癖、癥塊、脹痛、壅氣、上衝、煩悶、羸劣、婦人の血氣、刺心痛の忍び難きものには末を酒で服す】(甄權)【滯氣を散じ、諸氣を調へ、胃氣を和し、肺氣を泄す】(元素)【肝經の氣を行らす。煨熟したものは大腸を實する】(震亨)【衝脈の病となり逆氣、裏急するものを治し、(一七)脬滲、小便祕に主效

屬ス。

(一二)塞外トハ國境外ノ邊域ノ意ナリ。

(一三)西洛トハ洛陽ヲ指ス、宋ニハ汴ニ都シタルヲ以テ舊都洛陽ヲ西洛ト稱シ、西都ノ意ヲ表シタルナリ。

(一四)滁鬼ノ鬼ハ州ノ誤。滁州ハ人參ノ註ヲ見ヨ。

(一五)海州、大觀ニ梅州トアリ、海州ヲ正トス、海州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。

(一六)九種ノ心痛ハ蟲痛、蛀痛、風痛、悸痛、食痛、飲痛、冷痛、熱痛、氣痛。

(一七)脬滲ハ小便祕ノ別名ナラン。

がある】(好古)

【發明】　弘景曰く、青木香は、大秦國では毒腫を療ずるに用ゐ、惡氣を消するに效驗があるといふ。今はただ蛀蟲を制する丸に用ゐる。常に煮汁で沐浴するが大いに佳し。

宗奭曰く、木香は專ら胸、腹間に滯塞する冷氣を一時に泄し拂ふもので、他のものはこれに次ぐ。橘皮、肉豆蔻、生薑を佐使とするが非常に佳く、效果が尤も速かである。

元素曰く、木香は肺中の滯氣を除くもので、中、下二焦の氣の結滯、及び運動不能の者を治する場合には檳榔を使として用ゐるものだ。

震亨曰く、氣を調へるに木香を用ゐるは、その味が辛で氣がよく上升するからである。氣が鬱して達せざるものには宜いが、陰火が衝上するものには反つて火邪を助くる結果となるものだ。黃蘗、知母を用ゐ、少し木香を佐として用ゐるがよいのである。

好古曰く、本草に『氣劣、氣の不足に主效がある』といふは補である。『壅氣を通

じ、一切の氣を導く』といふは破である。胎を安らかにし、脾、胃を健にするは補であり、痃癖、癥塊を除くは破である。此の如く功用に區別があるのだが、潔古張氏はただ氣を調へることのみ言つて補に就いては言つてゐない。

○機曰く、補藥に佐として用ゐれば補し、泄藥に君として用ゐれば泄する。

○時珍曰く、木香は三焦の氣分の藥であつて、よく諸氣を升降する。諸氣の膹鬱は皆肺に屬するものだから、上焦の氣滯にこれを用ゐるは金鬱すれば泄すの道理である。中氣の運らぬは皆脾に屬するものだから。中焦の氣滯にこのものの適するは脾、胃は芳香を喜ぶものだからである。大腸が氣滯すれば後重し、膀胱の氣が化せねば癃淋し、肝氣が鬱すれば痛みを生ずるものだから、下焦の氣滯にこの物の適するのは塞がるをば通ずるの道理である。

○權曰く、隋書に『樊子蓋は(一八)武威の太守であつたが、帝が(一九)吐谷渾の地へ入られた時、子蓋は彼の地は瘴氣が多い土地だから青木香を獻じ、それで霧露の邪を禦がれるやうに進言した』とある。

○頌曰く、續傳信方に『張仲景青木香丸は陽衰、諸不足に主效がある。崑崙青木香

(一八)武威ハ石部石蘄ノ註ヲ見ヨ。

(一九)吐谷渾ハ今ノ青海省ノ西、伏俟城ニ據リタル一國ニシテ東西三千支里、南北千餘支里ノ一國。今ノ青海省及ビ四川省松潘縣等皆ソノ故地ナリ。

六路訶子皮各二十兩を擣き篩ひ、糖で和して梧子大の丸にし、一日二回、空腹にして三十丸づつを酒で飲下せばその效尤も速だ』とある。鄭駙馬は砂糖を去つて白蜜を用ゐ、羚羊角十二兩を加へた。藥の用方は古方と異ふ。而るに仲景と加へ稱するは何を根據にしたものか判らない。

附方　舊二、新十九。【中氣で意識不明のもの】目を閉ぢ、語を發せず、中風の如き症狀には、南木香を末にし、冬瓜子の煎湯で三錢を灌ぎ下す、痰の盛なるには竹瀝薑汁を加へる。(濟生方)【氣脹で食事に懶きもの】靑木香丸——發明の項を見よ。熱するには牛乳で服し、冷えるには酒で服す。(聖惠方)【心氣刺痛】靑木香一兩、皂角を炙いて一兩を末にし、糊で梧桐子大の丸にし、五十丸づつを湯で服するが甚だ效がある。(攝生方)【一切の走注】氣痛の和がぬには、廣木香を溫水に磨つた濃汁に熱酒を入れ調へて服す。(簡便方)【(二〇)內釣腹痛】木香、乳香、沒藥各五分を水で煎じて服す。(阮氏小兒方)【小腸疝氣】靑木香四兩、酒三升で煮て每日三回づつ飮む。(孫天仁集效方)【氣滯腰痛】靑木香、乳香各二錢を酒に浸し、飯の上でよく蒸して酒で調へて服す。(聖惠方)【突然耳の聾せるもの】崑崙の眞靑木香一兩を切つて一夜苦

(二〇)內釣ハ小兒ノ疝氣。

酒に浸し、胡麻油一合を入れて微火で煎じ、三回煎じ三回冷してから綿で濾して滓を去り、一日三四回滴らす。癒るを以て度とする。(外臺祕要)【耳中の痛み】葱黄の端を鵞脂で濡らして木香末をつけ、深く耳中へ納れる。(聖濟錄)【霍亂轉筋】腹の痛むには、木香末一錢を木瓜汁一盞に熱酒を入れて調へて服す。(聖濟總錄)【一切の下痢】男子、婦人、小兒に拘らず、木香の方圓一寸のもの一塊、黄連半兩の二味を水半升で共に煎じ乾かし、黄連を取り去つて薄く切り、その木香を焙じ乾かして末にし、分けて三服にして第一服は橘皮湯で服し、第二服は陳米飲で服し、第三服は甘草湯で服す。これは李景純の所傳であつて、ある婦人が久痢で將に死せんとするとき、夢に觀音から此の方を授かつて服し、それで癒えたといふ。(孫兆祕寶方)【香連丸】方は黄連の條下にある。【腸風下血】木香、黄連等分を末にし、肥豬の大腸に入れて兩端を括り、飽くまで煮爛らして藥を取り去り、その腸を食ふ。或はその藥と共に搗いて丸にして服す。(劉松石保壽堂方)【小便の渾濁】渾濁して精液の如くなるには、木香、沒藥、當歸、等分を末にし、刺棘心の自然汁で和して梧子大の丸にし、毎食前に鹽湯で三十丸を服す。(普濟方)【小兒の陰腫】小兒が陽明の經の風熱で濕氣が相搏ち、

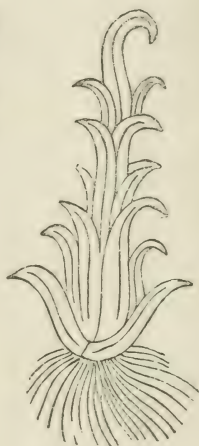
陰莖が何事もなきに腫れ、或は痛み縮むは、この一經を寛にするがよし、自から癒える。廣木香、枳殼を麸で炒つて二錢半、炙甘草二錢を水で煎じて服す。(曾氏小兒方)【小兒の天行病】壯熱し頭痛するには、木香六分、白檀香三分を末にし、清水で和して服し、温水で調へ顖頂上に塗つて瘥效を取る。(聖惠方)【天行發斑】赤黑色なるには、青木香(二一)一兩、水二升を一升に煮て服す。(二二)(外臺祕要)【一切の癰疽】瘡瘻、(二三)瘡瘻、惡瘡の下疰、臁瘡が潰れて後に外部が風寒に傷み、腐敗惡汁が出て斂まらぬには、いづれもこの方が主效がある。木香、黃連、檳榔等分を末にして酒で調へ、頻りに塗つて效を取る。(和劑局方)【惡蛇虺の咬傷】青木香を多少に拘らず煎じて服す。その效は筆舌も及ばない。(袖珍方)【腋臭、陰濕】凡そ腋下、陰部の濕臭で或は瘡となるには、青木香を好き醋に浸して腋下、陰部に挾み、末にして傅ける。(外臺祕要)【牙齒の疼痛】青木香末に麝香少量を入れて牙に揩り鹽湯で漱ぐ。(聖濟錄)

(一)甘松香(宋開寶)

和名　かんしやうかう
學名　Nardostachys Jatamansi, DC.
科名　をみなへし科(敗醬科)

(二一) 大觀ニ二ニ作ル。
(二二) 大觀ニ傷寒類要ニ作ル。
(二三) 瘡瘻ハ下瘡瘻。
(一) 牧野云フ、支那ニテハ雲南ニ産シ又印度ニテハヒマラヤ地方ニ生ズル。

【釋名】 **苦彌哆** 哆の音は扯(シ)である。時珍曰く、(二)川西(せんせい)の松州に產するもので、その味が甘いからかく名けたのだ。金光明經には苦彌哆(くみし)といつてある。

【集解】 志曰く、廣志に『甘松は(三)姑臧(こぞう)、涼州の諸山に產し、細葉で蔓を引いて叢生(そうせい)する。諸種の香料に合はせ、また衣服を薰ずるによし』とある。頌曰く、今は(四)黔(けん)、蜀(しよく)の州郡、及び遂州(わうしう)にもある。山野に叢生するもので、葉は細くして茅草(ばうさう)の如く、根は極めて密に繁茂する。八月に採收する。湯にして浴すれば身體を香しくなる。

(甘松香)

根(五)【氣味】【甘し、溫にして毒なし】好古曰く、平なり。【主治】【惡氣、突然の心腹痛滿。氣を下す】(開寶)【黑皮䵟䵳(こくひかんそう)、風疳(ふうかん)、齒䘌(しちく)、(六)野雞痔(やけいぢ)、白芷(びやくし)、附子(ぶし)と共に用ゐるがよし】(蕭器)【元氣を理し、氣鬱を去る】(好古)【脚氣で膝の浮腫するには湯に煎じて淋洗する】(時珍)

(二) 川西ノ松州ハ今ノ四川松潘縣ノ地ナリ。
(三) 姑臧ハ萎蕤ノ註 涼州ハ石部雄黃ノ註ヲ見ヨ。
(四) 黔蜀、黔ハ黔州、石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。蜀ハ今ノ四川省。遂州ハ人參ノ註ヲ見ヨ。
(五) 木村(康)曰ク、成分ハ精油一—二%ヲ含有ス。文獻ハ、米國藥局法二〇版一五〇六。
(六) 痔疾、一名野雞病。

【發明】時珍曰く、甘松は香氣が芳しく、能く脾の鬱を開くものだ。少量を脾、胃の藥中に加へると甚だ脾氣を醒す。杜寶の拾遺錄に『壽禪師は醫術に妙を得た人で、五香飲なるものを作り、更に別の藥を加へて渴を止め、兼ねて補益の效を擧げることに最も妙であつた。五香飲とは、一は沈香飲、二は丁香飲、三は檀香飲、四は澤蘭飲、五は甘松飲である』とある。

【附方】新四。【勞瘵に施す熏法】甘松六兩、玄參一斤を末にして毎日焚く。（奇效方）【（七）風疳の蟲齒】肉を蝕し齒が盡きて全部無くなるには、甘松、膩粉各二錢半、蘆薈半兩、猪腎一對を切り炙いて末にし、夜間口を漱いでから貼る。涎を吐出するものだ（聖濟總錄）【腎虚の齒痛】甘松、硫黃等分を末にし、湯に漬けて漱ぐが神效がある。（經效濟世方）【面䵟（八）風瘡】香附子、甘松各四兩、黑牽牛、半斤を末にしそれで日毎に顏を洗ふ。（婦人良方）

（一）山柰（綱目）

和名　ばんがしゆつ
學名　Kaempferia rotunda, L.
科名　しやうが科（蘘科）

（七）風疳ハ腸及腸間膜腺ノ壅塞及結核。

（八）風瘡ハ猩紅熱及假性痲疹。

（一）牧野云フ、草木圖説卷ノ一ニ圖ガアル、印度、馬來、臺灣ニ分布スル。

釋名　**山辣**（綱目）　**三柰**　時珍曰く、山柰は俗に訛つて三奈といひ、また訛つて三賴ともいふ。いづれも地方音だ。或は本來の名稱は山辣であつて、南方では舌音で發音する山を三にし、辣を賴といふやうに發音するところから誤謬を來したのだといふ。これは穩當な說である。

集解　時珍曰く、山柰は廣中に生じ、人家で栽培する。根、葉はいづれも生薑のやうで樟木の香氣があり、その地では薑を食ふやうにその根を食ふ。切斷して暴乾すれば皮が赤黃色に、肉が白色になる。古代に廉薑といつたのは恐らくこの物の類であらう。段成式の酉陽雜俎には柰祇といふものが拂林國に産する。長さ三四尺、根の太さは鴨の卵ほど、葉は蒜に似てゐる。多くの葉の中央から甚だ長い條が抽き出て、その莖に六出で紅白色の花が咲く。花心は黃赤色、子は結ばない。その草は冬生じて夏枯れる。花を採取して油を搾つて

（山柰）

身體に塗れば風氣を去る』とある。按ずるに、此の說の物は頗る山柰に似たものだ。故に此に附記して置く。

根　氣味　【辛し、溫にして毒なし】　主治　【中を暖め、瘴癘、惡氣を辟け、心服の冷氣痛、寒濕霍亂、風蟲牙痛を治す。諸種の香に入れて用ゐる】（時珍）

附方　新六。【一切の牙痛】三柰子一錢を麪で包んで煨熟し、麝香一字を入れて末にし、左右その痛む方の鼻の中から一字を嗅ぎ入れ、口に溫水を含んで漱ぎ去るが神效がある。これを海上一字散と名ける。（普濟方）【風蟲牙痛】仁存方では、山柰を末にし、紙の上へ鋪いて捲いて筒に作り、火を點け吹き消し、熱に乘じて藥に和して鼻中へ吹き込めば痛は止まる。○攝生方では、肥皂一箇を穰を去り、山柰、甘松各三分と花椒、食鹽を多少に拘らずそれに滿て詰め、麪で包み紅く煆いて取出し、研つて日每に牙を擦り漱ぎ去る。【顏面の雀斑】三柰子、鷹糞、密佗僧、蓖麻子等分を研勻して乳汁で調へ、夜塗つて朝洗ひ落す。【頭を醒ましフケを去る】三柰、甘松香、零陵香一錢、樟腦二分、滑石半兩を末にし、夜擦りつけて朝篦り去る。（水雲錄）【心腹冷痛】三柰、丁香、當歸、甘草等分を末にし、醋糊で梧子大の丸にして

（一）嶺南ハ甘草ノ註ヲ見ヨ。
（二）劍南ハ牡丹ノ註ヲ見ヨ。
（三）贏ハ螺贏ト熟スル字デ、日本ノばいトイノ貝ト見レバ宜シイ。
（四）虀ハツケモノ。

三十丸づつを酒で服す。（集簡方）

廉薑（拾遺）

和名 未詳
學名 未詳
科名 しやうが科（蘘科）

釋名 薑彙（綱目） 蔟葰 音は族綏（ゾクスヰ）である。

集解 弘景曰く、杜若の苗が廉薑のやうだ。藏器曰く、廉薑は薑に似たもので、（一）嶺南に生ずる（二）劍南では人が多くこれを食ふ。時珍曰く、按ずるに、異物志には『沙石中に生ずるもので、薑に似て大さ（三）贏ほどのものだ。氣は猛烈で臭に近い。南方の民家ではこれを（四）虀にして食ふ。その調理法は、陳い皮を黒梅、及び鹽汁で漬ければ出來上るのだ』とある。又、鄭樵は『廉薑は山薑に似て根の大なるものだ』といつてある。

（廉 薑）

氣味 【辛し、熱にして毒なし】 主治 【胃中の冷で水を吐き食物の落ち付かぬもの】（藏器）【中を溫め、氣を下し、食物を消化し、智を益す】（時珍）

(一)杜若（本經上品）

和名　あをのくまたけらん
學名　Alpinia chinensis, Rosc.
科名　しやうが科（蘘科）

【校正】圖經の外類の山薑を併せ入る。

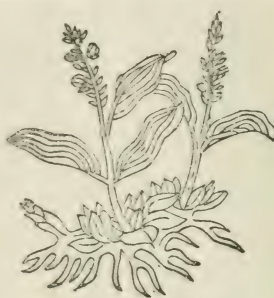
【釋名】杜衡（本經）杜蓮（別錄）若芝（別錄）楚衡（廣雅）獏子薑　獏は音爪（ソウ）である（藥性論）山薑（別錄）一名白蓮、一名白芩）頌曰く、この草は一名杜衡といふが、草部中品のうちにも杜衡の一條を掲げられて、爾雅の所謂土鹵をいつてある。杜若は廣雅に所謂楚衡のことだ。その種類は自から別なのだが、古人は多く相雜へて引用し、九歌には『芳洲に采る杜若』といひ、離騷には『杜衡と芳芷と雜る』といひ、王逸の輩も皆その區別を知らずしてただ香草といつてあるだけだ。ためにこの二種の名稱は混淆して了つた。古方には用ゐたものもあるが今は一般に用ゐることが稀なので、これに關する智識を有するものは稀である。

【集解】別錄に曰く、杜若は(二)武陵の川澤、及び宛句に生ずる。二月、八月根を採つて曝乾する。弘景曰く、今は諸處にある。葉は薑に似て文理があり、根は高

(一) 牧野云フ、我邦ニテ杜若ヲかきつばた（あやめ科）ニ充テシハ大ナル誤デアツタ。又之レヲやぶめうが（つゆくさ科）ニ充テタノモ固ヨリ中ツテ居ナイ、又はなめうが即チ Alpinia japonica, Miq. トスルモ穩當デハナイ。

(二) 武陵ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

莨菪に似て細く、味は辛くして香ばしい。また非常によく旋(三)葍の根に似て殆ど見誤るほどだが、葉が少し異ふ。楚辭に『山中の人、芳はしき杜若』とあるはこの植物のことだ。

（杜若）

恭曰く、今は江、湖地方に多くある。陰地に生ずるもので、苗は廉薑に、根は高良薑に似てゐるが、全く辛味が少い。陶氏の旋(四)葍の根に似たものといふは卽ち眞の杜若である。

保昇曰く、苗は山薑に似て花は黄に子は赤い。その子は棘子ほどの大さで中は豆蔲に似てゐる。今は嶺南、(五)硤州に産するものが甚だ好い。

范子計然に『杜衡、杜若は南郡、漢中に出づ、大なる者が大いに善し』とある。

頌曰く、(六)衡州の一種の山薑は莖、葉が薑のやうで紫の花を開き、子は結ばない。八月根を採つて藥に入れる。

時珍曰く、杜若なるものは世間には識る者がない。現に(七)楚地の山中にたま

(三) 大觀ニ復ニ作ル。

(四) 大觀ニ復ニ作ル。

(五) 硤ハ峽ノ誤。峽州ハ石部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。

(六) 衡州ハ知母ノ懐衞ノ註參照。

(七) 楚地トハ楚ノ地方。石部石腦油ノ楚ノ註參照。

たまあるが、この山間の住民もやはり夏薑と呼んでゐる。根は薑に似て味はやはり辛い。甄權が豆蔻の註の所謂獐子薑、蘇頌が圖經の外類の中に所謂山薑としたものがいづれもこの植物なのである。或人はまた太いのが高夏薑、細いのを杜若だともいふ。唐の時代には峽州から貢納したものである。

【修治】 斅曰く、凡てこれを用ゐるには、誤つて鴨跖草の根を用ゐてはならぬ。眞によく似たものではあるが、味と效とは同じくないのである。凡そこの根を採取したならば、刀で黄赤の皮を刮り去つて細かに剉み、三重の絹袋を用ゐて陰乾する。病に用ゐるに當つては蜜に一夜浸して漉出して用ゐる。

根 【氣味】 【辛し、微温にして毒なし】 之才曰く、辛夷、細辛と配合すれば好結果を得る。柴胡、前胡を惡む。(八)蘇頌曰く、山薑は辛し、平にして小毒あり。

【主治】 【胸脇下の逆氣。中を温む。風が(九)腦戸に入つて頭が腫痛し、涕涙の出るもの。久しく服すれば精を益し、目を明かにし、身體を輕くし、物を忘れなくする】(本經) 【眩倒して目の(一〇)睆睆たるものを治し、痛を止め、口の臭氣を除く】(別錄) 【山薑は皮間の風熱を去る。ゆでて湯に作つて用ゐるがよし。又、暴冷、及び胃

(八) 或ハ『柴胡、前胡、蘇ヲ惡ム。頌曰ク』ト讀ムベキカ。
(九) 腦戸ハ後頭ノ穴名。
(一〇) 睆ハ不明ノ貌。

中の逆冷、霍亂腹痛に主效がある】(蘇頌)

【發明】時珍曰く、杜若は神農が上品の部に列した藥で、足の少陰、太陽の諸證を治する要藥なのだが、世人がこれを用ゐることを知らぬのは遺憾なことである。

(一)山薑(藥性)

和名 さんきやう
學名 Alpinia officinarum, Hance. (?)
科名 しやうが科(蘘科)

【釋名】美草 弘景曰く、東方地方では山薑といひ、南方地方では美草と呼ぶ。

時珍曰く、杜若の山薑と呼ばれるものとは名稱は同じけれども實際の物は異つてゐる。

【集解】權曰く、山薑は根、及び苗いづれも薑のやうで大きく、樟木の臭氣がある。南方の地方民はこれを食ふ。また猴子薑なるものがあつて、それは黄色で緊り、ゑら辛く、血氣を破る力は殊に此の薑よりも強い。

頌曰く、山薑は(二)九眞、(三)交趾に產し、今は(四)閩、廣にいづれもある。劉恂の嶺表錄異に「莖も葉も薑の通りだが根は食へない。また豆蔻と花が似てゐるが微し小

(一) 牧野云フ、我邦ノ學者從來山薑ヲはなめうがニ充ツレドモ穩カデナイ、植物名實圖考ニハ之レニめうがノ圖ガ配シテアルガ之レモ多分正鵠ヲ得ヌモノデハアルマイト思フ。

(二) 九眞ハ漢ノ郡名後ニ交州ニ屬ス。今ノ安南ノ河內以南、順化以北、淸華、又安等ノ地方ナリ。

(三) 交趾ハ漢ノ郡名今ノ安南北部ノ東京地方ナリ。

(四) 閩廣ハ今ノ福建廣東兩省地方ヲイフ

さいだけで。花は葉の間から生じて穗となり、麥粒のやうである。若芽は紅い。南方の地方民はその芽のまだ大きく開かぬうちに取り、含胎花と稱して鹽水に漬け甜糟の中へ入れて置く、それが冬を越すと琥珀のやうな色になつて、辛く香ばしく、愛すべき風味になる。鱠にはこれに越したものはない。また鹽で殺して暴乾し、それを煎湯にして服すれば冷氣を除くに

（山薑）

極めて佳い』とある。

時珍曰く、山薑は南方に生ずるもので、葉は薑に似て花が赤く、甚だ辛い。子は草豆蔻に似て根は杜若や高良薑のやうだ。現に世間ではその子を草豆蔻の贋物にするが、氣の甚だ猛烈なものだ。

根　氣味　【辛し、熱にして毒なし】　主治　【腹中の冷痛には煮て服するが甚だ效がある。丸、散にして服すれば穀食を辟け、饑を止める】（弘景）【惡氣を去り、中を溫める。中惡霍亂、心腹の冷痛に對する功用は薑の如きものである】（五）（甄權）

（五）大觀ニ藏器ニ作ル。

花及び子 〔氣味〕【辛し、溫にして毒なし】〔主治〕【中を調へ、氣を下し、冷氣の痛みを作すを破り、霍亂を止め、食物を消化し、酒毒を殺す】（大明）

高良薑（別錄中品）

和名 かうりやうきやう
學名 Alpinia Galanga, Willd.
科名 しやうが科（薑科）

〔校正〕 開寶本草の紅豆蔻を併せ入る。

〔釋名〕 蠻薑（綱目） 子を紅豆蔻と名ける。時珍曰く、陶隱居は『此の薑は始めて產したところが(一)高良郡だつたからこの名稱があるのだ』といつてある。按ずるに、高良なる地は當今の(二)高州であつて、漢では高涼縣といはれ、吳の時に縣が郡に改められたのである。その地は山が高くて淸く涼いからその地名を呼ばれたのだといふから、高良は高涼と書くが正しいやうである。

〔集解〕 (三)時珍曰く、高良郡に產する。二月、三月に根を採る。形態と氣とは杜若とよく似て葉は山薑のやうである。

恭曰く、嶺南に產するものは形が大きくして虛軟である。江左に生ずるものは細

(一) 高良郡ハ時珍說ニ明ナリ。但シ後魏ニモ高涼郡アリテ、今ノ山西省ノ稷山、河津二縣ヲ管轄シタレドモ此ニイフ高良即チ高涼郡ニハ非ズ。

(二) 高州ハ唐ニ置ク。今ノ廣東省茂名縣ノ東北四十支里ニ在リ。明ニ府トナス今ノ茂名縣ソノ舊治ナリ。

(三) 時珍當ニ弘景ニ作ルベシ。

く緊り、味は甚だ辛くない。が兩者共實際は一種のものである。今世人が細いものを杜若、大なるいものを高良薑とするは誤りだ。

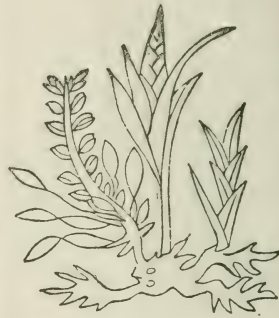
○頌曰く、今は嶺南の諸州、及び黔、蜀のいづれにもある。(四)内郡にもあるけれども藥用には役に立たぬ。この草は春生え、莖、葉は薑の苗のやうで大きく、高さ一二尺ほどあり、花は紅紫色で山薑の花のやうだ。

○珣曰く、紅豆蔻は南海諸地方の谷に生ずる高良薑の子である。その苗は蘆の如くその葉は薑の如く、花は穗になる。嫩葉は卷いて生え、微し紅色を帶びてゐる。嫩いものに鹽を入れて置けば纍纍と朶をなして散落しない。木槿花で染めてその色を深くして置くがよい。醉を醒し酒毒を解するにはこれがあれば他に何物をも要せぬものだ。

○時珍曰く、按ずるに、范成大の桂海虞衡志に『紅豆蔻花は叢生するもので、葉は碧蘆のやうに痩せ、春の末にその花が開く、開き初めには一本の幹が抽き出で、大なる(五)籜に包まれてゐて、その籜を折り開けて見ると花があるのだ。その花は一本の穗で數十の蕊があり、鮮妍たる淡紅色で桃、杏の花の色のやうだ。その蕊は重

(四) 内郡トハ近畿諸郡ノ意カ。

(五) 籜ハ總苞。

（六）火齊ハ琉璃ヲ云フ、鸞枝ハ枝ノ先ニ鈴ノ附クモノ。

いために葡萄のやうに下垂してゐる。また（六）火齊の瓔珞や剪彩の鸞枝を見るやうだ。その蕊毎に兩瓣の心があつて相竝ぶので、世人はこれを連理に比し擬へる』とある。その子もやはり草豆蔻に似たものだ。

（高良薑）
——紅豆蔻——

修治 時珍曰く、高良薑、紅豆蔻いづれも炒つてから藥に入れるがよし。また薑を呉茱萸、東壁土と共に炒つて藥に入れるものもある。

根

氣味 【辛し、大溫にして毒なし】志曰く、辛く苦し、大熱にして毒なし。張元素曰く、辛し、熱である。純陽にして浮である。足の太陰、陽明の經に入る。

主治 【暴冷、胃中の冷逆、霍亂腹痛】（別錄）【氣を下し、聲を益し、顏色を好くする。煮て飲服すれば痢を止める】（藏器）風を治し、氣を破り、腹內の久冷、

(七) 大觀ニ中惡ニ作ル、中惡ハ瓦斯中毒ノ類。

(八) 本草洞玄ニハ洪武中ニ作ル。

氣痛を治し、風冷痺弱を去る】(甄權)【轉筋、瀉痢、反胃。酒毒を解し、宿食を消す】(大明)【その塊を含んで唾液を嚥めば突然(七)惡心して清水を嘔くものを治し、次第に癒える。口の臭きものは草豆蔻と共に末にして煎じて飲む】(蘇頌)【脾、胃を健かにし、噎膈を寛にし、冷癖を破り、瘴瘧を除く】(時珍)

【發明】楊士瀛曰く、噫逆、胃寒のものには高良薑が要藥である。人參、茯苓を佐とすれば胃を溫め、胃中の風邪を解し散ずる功力を發揮する。

時珍曰く、孫思邈の千金方に『心、脾の冷痛には高良薑を細かに剉み、微し炒つて末にし、米飲で一錢を服すれば立ろに止む』とあり。

(八)太祖高皇帝御製の周顚仙碑の文にもその效驗が記載されてある。また穢跡佛に心口痛を治する方といふがあつて、『凡そ男の心口の一部分の痛むは胃脘に滯があるか、或は蟲があるためだ。多くは怒、及び寒を受けたことが原因で起るもので、遂には身命を隕すものである。俗に心氣痛と言ふは誤だ。高良薑を酒で七回洗つて焙じ研り、香附子を醋で七回洗つて焙じ研り、それぞれ紛らはぬやうに印を付けて貯へ、病が寒のために起つたときはその薑末二錢、附末一錢を用ゐ、怒が原因で起つ

たときは附末二錢、薑末一錢を用ゐ、寒と怒とが同時に原因となつたものには各一錢半を用ゐ、いづれも米飲に生薑汁一匙、鹽一捻りを加へ入れたもので服すれば立ろに止む』とある。韓飛霞の醫通書にもやはりその功力を推稱してある。

附方　舊三、新八。【霍亂吐利】高良薑を火で炙つて香しく焦し、五兩づつを酒一升で煮て三回沸して頓服する。腹痛(九)中惡もこれで治癒する。(外臺)【霍亂腹痛】高良薑一兩を剉み、水三大盞で二盞半に煎じ、滓を去つて粳米一合を入れて粥を煮て食へば止む。(聖惠方)【霍亂の甚しき嘔吐】吐して止まぬには、高良薑を生で剉んで二錢、大棗一箇を水で煎じて冷服すれば立ろに落付く。これを冰壺湯と名ける。(普濟方)【脚氣で吐きけあるもの】蘇恭曰く、凡そ脚氣の患者は毎朝充分に食事を攝り、午後には少し食ひ、夕刻後は食はぬやうにし、若し空腹であれば豉粥を食ふがよい。若しそれで(一〇)覺が消せず、霍亂を起すではないかと思はれるときは、高良薑一兩を水三升で一升に煮取り、全部を頓服し盡せばそれで病が消する。もし急の場合で高良薑が無かつたときは、代りに(一一)母薑一兩を用ゐ、清酒で煎じて服す。高良薑には及ばぬけれどもやはり甚だ效驗のあるものだ。【心脾冷痛】高良薑丸——

(九) 大觀ニ氣ニ作ル
(一〇) 大觀ニ眩ニ作ル
(一一) 母薑ハ老薑ヲ云フ。

高良薑四兩を切片して四分に分け、一兩は陳廩米半合と共に黄に炒つてその米を去り、一兩は陳壁土半兩と共に黄に炒つて土を去り、一兩は巴豆三十四箇と共に黄に炒つて豆を去り、一兩は斑蝥三十四箇と共に黄に炒つて蝥を去り、呉茱萸一兩を一夜酒に浸したものとその薑と共に再び炒つてそれを末にし、先に呉茱萸を浸した酒で作つた糊で梧子大の丸にし、空心にして薑湯で五十丸づつを服す。○永類鈐方では、高良薑三錢、五靈脂六錢を末にし、三錢づつを醋湯で調へて服す。【脾を養ひ胃を溫める】冷を去り、痰を消し、胸を寛にし、氣を下し、大いに心・脾の疼き、及び一切の物に傷みたるを治す。高良薑、乾薑等分を炮き硏つて末にし、麪糊で梧子大の丸にし毎食後に十五丸づつを橘皮湯で服す。妊婦は服してはならぬ。（和劑局方）【脾虛寒瘧】寒多く熱少く、食思なきには、高良薑を麻油で炒り、乾薑を炮き、各一兩を末にして五錢づつを猪膽汁で調へて膏にし、發作の時に臨んで熱酒で調へて服す。膽汁で和して丸にし、四十丸づつを酒で服するもよし。呉幵內翰が政和丁酉の年（二）全椒縣にゐた折、毎歲非常に瘧が流行したが、この方で救はれた者が百を以て計ふる程であつた。張大亨はこの病が甚しくなつて退官せねばならぬ程だつた

（二）全椒縣ハ漢ニ置キ、東晉ニ廢シ、隋ニ復タ置ク。今ハ安徽省淮泗道ニ屬ス。

（一三）漠ハ末ニ同ジ。

が、これを服して癒えた。概して寒が膽に發したものには、猪膽でこの二種の薑の力を導けば膽に入り、寒を去つて脾、胃を燥するものである。一寒一熱、陰陽相制して效力を發揮するわけなのだ。ある方では、ただこの二薑を半生半炮にして各半兩、穿山甲を炮いて三錢を（一三）漠にし、二錢づつを豬腎を煮た酒で服す。（朱氏集驗方）

【妊婦の瘧疾】先に傷寒に罹り、それが變じて瘧となつたものには、高良薑三錢を剉んで豬膽汁に一夜浸し、東壁土と共に炒り黑めてその土を去り、肥棗肉十五箇と共に焙じて末にし、三錢づつを水一盞で煎じ、發作せんとする時熱服すれば神效がある。（永類鈐方）【劇しき赤眼痛】管で良薑末を鼻に吹き込んで嚏を出す。鼻から血を出すこともあるがそれで痛は散ずる。（談埜翁試驗方）【風牙腫痛】高良薑二寸、全蠍を焙じて一箇を末にし、それを摻つて涎を吐き、鹽湯で口を漱ぐ。これは樂清丐なるものの所傳であつて、鮑季明がこの病のときこれを用ゐて果して效があつた。（王璆百一選方）【頭痛に鼻に嗃ぐ】高良薑を生で研つて頻りに鼻に嗃ぐ。（普濟方）

紅豆蔻（開寶）【氣味】【辛し、溫にして毒なし】權曰く、苦く辛し、多く食へば舌が荒れ、食思がなくなる。時珍曰く、辛く熱であつて陽であり浮である。手、

足の太陰の經に入る。生生編に『最も能く火を動じ、目を傷め、鼻血を出すものだ故に食料にしてはならぬ』とある。

【主治】『腸虛の水瀉、心腹の(二四)絞痛、霍亂で酸水を嘔吐するもの。酒毒を解す』(藏器)『冷氣腹痛。瘴霧の毒氣を消し、宿食を去り、腹腸を溫める。吐瀉、痢疾』(甄權)『噎膈、反胃、虛瘧、寒脹を治し、濕を燥し、寒を散ず』(時珍)

【發明】時珍曰く、紅豆蔻は李東垣が脾、胃の藥の中に常に用ゐた。これもその辛、熱と芳香で脾を刺戟し、肺を溫め、寒を散じ、濕を燥し、食物を消化するの效力を利用しただけである。若し脾、肺に素から伏火があつたものには絕對に用ゐてはならぬ。

【附方】新一。【風寒牙痛】紅豆蔻を末にし、その痛の左右に隨つて少量を鼻中に嗜ぎ、竝に牙に摻つて涎を取る。或は麝香を加へる。(衞生家寶方)

(一)豆蔻（別錄上品）

和名　さうづく
學名　Alpinia globosa, Horan.
科名　しやうが科（蘘科）

(二四) 大觀ニ攪ニ作ル

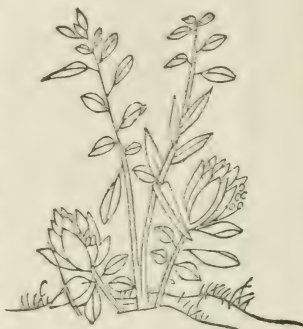
(一) 牧野云フ、G. A. Stuart 氏ノ言フ所ニ據レバ本草綱目デハ草果(Amomum medium, Lour.)ト草豆蔻(Alpinia globosa, Horan.)トガ混説セラレテ居ルトノ事デアル。

果部から此に移し入る。

【校正】

【釋名】草豆蔲（開寶） 漏蔲（異物志） 草果（鄭樵通志） 宗奭曰く、豆蔲とは草豆蔲のことだ。肉豆蔲に對して草豆蔲といつたのである。これを果として食しては味が和せぬものであるが、前代の人がこれを果部に編入したのは何の意味であつたか判らない。花は性熱である。鹽漬にして京師へ送つて來るが、味は微し苦く、甚だ美味なものでない。乾けば淡紫色となり、よく酒毒を消するものだから、それ等の點から果の類と考へたものであらう。

（草　豆　蔲）
――山　薑　花――

時珍曰く、按ずるに、楊雄の方言に『凡そ物の盛にして多きものの形容を蔲といふ』とある。豆蔲なる名稱も或は此の意味を取つたもので、豆といつたのは此の物の形態を形容したものであらう。南方異物志に漏蔲と書いてあるが、蓋し南方の人は正しからぬ發音をそのまま字に書いてゐる。この物は今は專ら果として食されては

居らぬのだが、やはり茶菓子などにも入れる。なほ草果なる名稱があるわけだ。金光明經の第三十二品には、香藥とし、蘇乞迷羅細と謂つてある。

【集解】別錄に曰く、豆蔻は南海に生ずる。

恭曰く、苗は山薑に似て花は黃白色だ。苗も根も子も杜若に似てゐる。

頌曰く、草豆蔻は、今は嶺南地方にいづれもある。苗は蘆に、葉は山薑、杜若などの植物に、根は高良薑に似てゐる。二月花を開いて穗になり、その房が莖の下に生え、嫩葉に卷かれて生える。初めは芙蓉の花のやうに微紅色で、穗の頭は色が(二)深く、その卷いた葉が追追(三)廣がるに隨つて花が次第に現はれ、色も漸次に淡くなる。また黃白色のものもある。南方人は多くその花を採つて果子にして食ふが、就中嫩なものが珍重される。またその穗のままを鹽漬にして貯へると、纍纍たる朶になつて散り落ちない。又、木槿花にこれを浸すのは色を紅くするためである。結實は龍眼子のやうで銳いが皮に鱗甲はない。皮の中の子は(四)石榴瓣のやうだ。夏季に熟した時これを採つて暴乾する。根と苗には微し樟木の香があり、根、莖、子いづれも辛くして香しい。

(二) 大觀ニ深ノ下ニ紅字アリ。
(三) 大觀ニ廣ヲ展ニ作ル。
(四) 石榴瓣ハ柘榴ノ果ノナカゴ。

〇珣曰く、豆蔻は交趾に生ずる。その根は益智に似て皮殼が少し厚く、核は石榴のやうで辛く香しい。葉は芄蘭のやうで小さい。三月その葉を採つて細く破り、陰乾して用ゐる。味は苦に近くして甘味がある。

〇〇時珍曰く、草豆蔻と草果とは同一植物ではあるが微かに不同がある。現に(五)建寧に産する豆蔻は大さ龍眼ほどで形が微し長く、その皮は黄白色で薄く、稜瓣がある。その仁の大さは縮砂仁ほどで辛く香しく、氣は和かである。(六)滇、廣に産する草果は長大で訶子の如く、その皮は黒くして厚く、稜が密である。その子は粗くして辛く臭く、その臭は宛も斑蝥の臭氣のやうだ。彼の地では皆平常これを茶菓子や食料に用ゐ、廣地方では生の豆蔻を取り、梅汁鹽を入れて漬け、紅くして暴乾し、それを紅鹽草果と呼んで酒に添へて出す。その初めて生じた小さきものをば鸚哥舌と呼んでゐる。元朝の頃は皇室の供御に皆この草果を添へたものだといふ。南方地方ではまた一種の火楊梅なるものを草豆蔻の僞物にするが、その形は(七)园くして粗い。氣味は辛猛で和かでない。世間でも多くこれを用ゐ、或は山薑の實だなどといつてゐるが、識別に注意を要する。

(五) 建寧ハ宋ニ置キタル府名、明ニハ福建省ニ屬ス。今ノ福建省建甌縣ハソノ舊治ナリ。
(六) 滇廣ハ金部銀ノ間斷以下ノ註ヲ見ヨ。
(七) 字書ニ园ハ音官、刓圜也トアリ。

修治　斅曰く、凡そこれを用ゐるには蔕を(八)用ゐ、向裏子を弁せて後皮を取つて茱萸と共に鏊の上で緩に炒り、茱萸が微黄黒になつた時茱萸を去り、草豆蔻の皮、及び子を取つて杵いて用ゐる。時珍曰く、今は一般にただ麪で裹んで灰火で煨熟し、皮を去つて用ゐる。

仁　氣味　【辛し、温にして濇し、毒なし】好古曰く、大いに辛く熱であつて陽であり浮である。足の太陰、陽明の經に入る。

主治　【中を温める。心腹痛、嘔吐。口の臭氣を去る】(別錄)【氣を下し、霍亂を止める。一切の冷氣。酒毒を消す】(九)(開寶)【中を調へ、胃を補し、脾を健にし、食物を消化し、心と胃とに客寒する痛を去る】(李杲)【瘴癘、寒瘧、傷暑の吐下、洩痢、噎膈、反胃、痞滿、吐酸、痰飲、積聚、婦人の惡阻、帶下を治し、寒を除き、濕を燥し、氣を破り、魚肉の毒を殺し、丹砂を制す】(時珍)

發明　弘景曰く、豆蔻は辛烈にして甚だ香しく、常食となし得るものだ。五和(一〇)糁中に入れてあるものは人の健康に宜し、五和とは豆蔻、廉薑、枸櫞、甘焦、麃目である。

(八) 用字大觀ニ去字ニ作ル。

(九) 大觀ニ恭ニ作ル

(一〇) 糁ハ米粒即食饌ヲ指ス。五和ハ五種ノ調味料。

宗奭曰く、草豆蔻は氣味極めて辛く微し香しく、性は溫であつて冷氣を調散することの甚だ速かなものだ。虛弱で飮食を攝り得ぬものに適する。木瓜、烏梅、縮砂、益智、麴蘖、甘草、生薑と共に用ゐるのである。

杲曰く、風寒の客邪が胃口の上に在り、心に當つて疼きを覺ゆるものには、煨熟して用ゐるがよい。

震亨曰く、草豆蔻は性溫である。よく滯氣を散じ膈上の痰を消するものだから、もし明かに身體に寒邪を受け、また寒なる物を食し、ために胃脘に疼を覺え、溫散した方がよいと感ずるものに對してこれを用ゐれば、鼓の撥に應じて響くが如き效がある。或はまた濕痰の鬱結で病となつたものにもやはり效がある。しかし熱鬱のものならば用ゐてはならない。恐らく溫を積んで熱を成すものだから、これには必ず卮子の劑を用ゐるのである。

時珍曰く、豆蔻を治病に用ゐるはその辛、熱にして浮し散し、能く太陰、陽明に入つて寒を除き、濕を燥し、鬱を開き、食物を消化する力を應用するに在る。南方は地が低く、山嵐烟瘴の惡氣があるので酸、鹹のものを飮食し、脾、胃に常に寒濕

鬱滯の病が多い。故に食料に必ずこれを添へるといふことは大いにその宜しきを得たものだ。けれどもこれを過食しては、やはり脾熱を助け、肺を傷め、目を損ずる。或は、知母と共に用ゐれば瘴瘧寒熱を治すといふことだが、それはその物の一陰一陽で自から偏勝の害を無くする關係である。蓋し草果は太陰の獨勝の寒を治し、知母は陽明の獨勝の火を治するものである。

附方　舊一、新九。【心腹脹滿】呼吸短かきには、草豆蔻一兩を皮を去つて末にし、木香、生薑湯で調へて半錢を服す。（千金方）【胃弱の嘔逆】食物を攝り得ぬには、草豆蔻仁二箇、高良薑半兩を水一盞で煮て汁を取り、その汁に生薑汁半合を入れ、白麪を和して（一）撥刀に作り、羊肉の（二）臛汁で煮熟して空心に食ふ。（普濟）【霍亂煩渇】草豆蔻、黄連各一錢半、烏豆五十粒、生薑三片を水で煎じて服す。（聖濟總錄）【虚瘧自汗】自汗止まざるには、草果一箇を麪で裹んで煨熟し、麪と共にそのまま研り、平胃散二錢を入れて水で煎じて服す。（經效濟世方）【氣虚瘴瘧】熱少くして寒多きもの、或は單に寒のみで熱なきもの、或は虛熱して寒なきものには、草果仁、熟附子等分を水一盞、薑七片、棗一箇と共に半盞に煎じて服す。これを果附湯と名

（一）撥刀ハまがりもちノ類。
（二）臛汁ハ羹汁。

ける。(濟生方)【脾寒瘧疾】寒多くして熱少きもの、或は單に寒のみで熱なきもの、或は大便が溏し小便が多く、食事不能のものには、草果仁、熟附子各二錢半、生薑七片、棗肉二箇を水三盞で一盞に煎じて溫服する。(醫方大成)【脾、腎の不足】草果仁一兩を舶來の茴香一兩と共に香しく炒り、茴は去つて用ゐず、吳茱萸を湯に七回漬け、それを破故紙一兩と共に香しく炒り、破故紙は去つて用ゐず、胡盧巴一兩を山茱萸一兩と共に香しく炒り、茱萸は去つて用ゐず、その草果仁、吳茱萸、胡盧巴三味を糝にして酒糊で梧子大の丸にし、六十丸づつを鹽湯で服す。(百一選方)【赤白帶下】皮附きの草果一箇、乳香一小塊を麪に裹み、黃色に煨き焦して麪のまま研細し、一日二回、二錢づつを米飮で服す。(衛生易簡方)【口を香しくし臭を辟ける】豆蔻、細辛を末にして含む。(肘後方)【脾痛脹滿】草果仁二箇を酒で煎じて服す。(直指方)

花　氣味　【辛し、熱にして毒なし】　主治　【氣を下し、嘔逆を止め、霍亂を除き、中を調へ、胃氣を補ひ、酒毒を消す】(大明)

(一)白豆蔻（宋開寶）

和名　びやくづく、又、しろづく
學名　Amomum Cardamomum, L.
科名　しやうが科（薑科）

釋名　多骨

集解　藏器曰く、白豆蔻は(二)伽古羅國に產するもので、多骨と呼ぶ。その草の形は芭蕉のやう、葉は杜若に似て長さ八九尺、滑かな光澤があり、冬も夏も凋まない。花は淺黄色で子は朶を作し、葡萄のやうだ。初めて出たときは微青だが熟すれば變じて白くなる。七月に採收する。

頌曰く、今は(三)廣州、(四)宜州にもあるが、外國から舶來する佳品には及ばない。

時珍曰く、白豆蔻は子が圓くて大きく、白牽牛の子のやうで殼は白く厚く、仁は縮砂仁のやうだ。藥に入れるには皮を去つて炒つて用ゐる。

仁

氣味　【辛し、大溫にして毒なし】好古曰く、大いに辛し、熱である。味薄く氣厚く、輕淸にして升る。陽であり浮である。手の太陰の經に入る。

主治　【積冷氣。吐逆、反胃を止め、穀物を消化し、氣を下す】（開寶）【肺中

(一) 牧野云フ、Amomum Cardamomum, L. ハ Elettaria Cardamomum, White et Maton ト同ジデアル。
(二) 伽古羅國、未詳。或ハ伽毘羅ノ寫誤カ。
(三) 廣州ハ土部伏龍肝ノ註ヲ見ヨ。
(四) 宜州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

（白　豆　蔻）

の滯氣を散じ、膈を寛にし、食慾を進め、白睛翳膜を去る】（李杲）【肺氣を補ひ、脾、胃を益し、元氣を理し、脫氣を收める】（好古）【噎膈を治し、瘧疾寒熱を除き、酒毒を解す】（時珍）

發明　頌曰く、古方の胃冷で物を食へば吐きけを生じ、また嘔吐するを治する六物湯には、いづれも白豆蔻を用ゐてある。概して胃の冷を主とするものとして適當なものだ。

恭曰く、白豆蔻は氣味共に薄い。その應用に五種ある。專ら肺の經の本藥に入れるが一、胸中の滯氣を散するが二、寒に感じた腹痛を去るが三、脾、胃を溫暖にするが四、赤目の暴發を治し、太陽の經の目內大眥の紅筋を去るに少量を用ゐるが五である。

時珍曰く、按ずるに、楊士瀛は『白豆蔻は脾虛の瘧疾、嘔吐、寒熱を治し、よく

物を消化し、積滯を磨消し、三焦に流行し、營衛が一轉して諸證自から平安となる』といつてある。

【附方】 舊一、新四。【胃冷惡心】凡そ物を食すれば吐かんとするには、白豆蔻子三箇を細かに擣いて好き酒一盞で溫服し、幷に飮で數回服するがよし。(張文仲備急方)【突然の惡心】多く白豆蔻子を嚼むが最もよし。(肘後方)【小兒の吐乳】胃寒である。白豆蔻仁十四箇、縮砂仁十四箇、生甘草二錢、炙甘草二錢を末にし、常に兒の口中に摻り入れる。(危氏得效方)【脾虛反胃】白豆蔻、縮砂仁各二兩、丁香一兩、陳廩米一升を黃土で炒り焦して土を去り、細研して薑汁で和して梧子大の丸にし、百丸づつを薑湯で服す これを太倉丸と名ける。(濟生方)【産後の呃逆】白豆蔻、丁香各半兩を研細して桃仁湯で一錢を服し、少頃して再服する。(乾坤生意)

(一)縮砂蔤 (宋開寶)

和名 しゆくしや
學名 Amomum xanthoides Wall.
科名 しやうが科(蘘科)

【釋名】 時珍曰く、名義の意義は判然せぬが、藕下の白(二)蒻を蔤といふから密

(一) 牧野云フ、本植物ノ學名ヲ Amomum villosum, Lour. トシタモノモアル。又我邦ニテ德川末葉時代ニ綿載セシ花草ニしゆくしやト稱スルモノガアルガ、是レハ Hedychium coronarium, Koenig. var chrysoleum, Bak ト稱スルモノデアル本當ノしゆくしやト間違フ故ニ私ハ之レヲはなしゆくしやト稱シタ。
(二) 蒻ハ芽萌。

（一）安東道、延胡索ニ安東ノ註アリ。然レドモ此ニイフ安東道ト符合セザルガ如シ、ナホ考フベシ。

藏の意味を取つたものであらう。此の物は實が根の下にあり、仁が殼内に藏されてあるからその密の意味を取つたのかも知れぬ。

集解　珣曰く、縮砂蔤は西海、及び西戎、波斯の諸國に產するもので、多くは（一）安東道を經て來る。

（縮砂蔤）

志曰く、南方の諸地に生ずるもので、苗は廉薑に似て子の形は白豆蔻の如く、その皮は緊つて厚く、黄赤色の皺がある。八月に採收する。

頌曰く、今は嶺南の山澤の間だけにある。苗、莖は高良薑に似て高さ三四尺、葉の長さは八九寸、廣さ半寸位。三月、四月に花が根の下に開き、五六月に實がなる。その實は五七十箇が一穗となり、形は益智に似て圓く、皮が緊つて厚く、皺があり、栗紋があつて外部に細いとげがあり、黄赤色だ。その皮の間に細かい子が四十餘粒ほどづつ一團となつて八ッに隔た

つてゐる。その子粒は大黍米ほどの大さで、外が微黑色で內が白く、香しくして白豆蔻仁に似てゐる。七月、八月に採收する。辛く香しいものであつて、食味を調へ、また蜜で煎じ糖を纏へて用ゐるがよい。

仁（四）氣味　【辛し、溫にして澁る、毒なし】權曰く、辛く苦し。藏器曰く、酸し。珣曰く、辛く鹹し、平なり。訶子、豆蔻、白蕪荑、鼈甲と配合すれば好結果を得る。好古曰く、辛にして溫、陽であり浮である。手、足の太陰、陽明、太陽、足の少陰の七經に入る。白檀香、豆蔻を使として用ゐれば肺に入る。人參、益智を使として用ゐれば脾に入る。黃蘗、伏苓を使として用ゐれば腎に入る。赤白石脂を使として用ゐれば大、小腸に入るものである。

主治　【虛勞の冷瀉、宿食の不消化、赤、白洩痢、腹中の虛痛。氣を下す】（開寶）【冷氣（五）痛に主效があり、休息氣痢、勞損を止め、水、穀を消化し、（六）肝腎を溫暖にする】（甄權）【上氣、欬嗽、奔豚、鬼疰、驚癇、邪氣】（藏器）【一切の氣、霍亂轉筋。よく酒の香味を出す】（大明）【中を和し、氣を行らし、痛を止め、胎を安らかにする】（楊士瀛）【脾、胃の氣の結滯して散ぜぬを治す】（元素）【肺を補ひ、脾を醒

（四）木村（康）曰ク、下山氏生藥學ニヨレバ、縮砂ハ實驗ニ徵スルニ少量ノ揮發油及龍腦ヲ含有スト。

（五）大觀ニ痛上腹字アリ。

（六）大觀ニ脾胃ニ作ル。

まし、胃を養ひ、腎を益し、元氣を理し、滯氣を通じ、寒飲脹痞、噎膈嘔吐を散じ、婦人の崩中を止め、咽喉、口齒の浮熱を除き、銅鐵骨哽を溶かす】（時珍）

【發明】 時珍曰く、按ずるに、韓悉の醫通に『腎は燥を惡むもので、これを潤ほすには辛を用ゐる。縮砂仁の辛を用ゐれば腎の燥を潤ほすものだ』とあり、又『縮砂は土に屬するものであつて、主として脾を醒し、胃を調へ、諸藥を導いて丹田に落付き宿る。香はしくしてよく薫じ竄り、五臟それぞれの機能を徹底し調和するの氣を和合し、宛も天地が土に據つてその機能發揮の徹底と調和とを實現するやうなものである』といつてある。故に補腎の藥に用ゐるには地黃と共に九回蒸して用ゐるのであつて、それは下部に徹底する意味を取るわけだ。また骨を溶し、草木を食ふに用ゐる藥、及び方士が（七）三黃を錬るにいづれもこれを用ゐるが、縮砂蔤なるものの性が何に依つてよくそれ等の物を制するのであるか判らない。

【附方】 舊二、新十四。【冷滑下痢】下痢が止らずして虛羸するには、縮砂仁を熬つて末にし、薄く切つた羊子肝に摻つて瓦の上で焙じ乾かして末にし、乾薑末等分を入れて飯で梧子大の丸にし、一日二回、四十丸づつを白湯で服す。○又別方では

（七）三黃ハ硫黃、雄黃、黃丹。

縮砂仁を炮いて附子、乾薑、厚朴、陳橘皮と等分を末にし、飯で梧子大の丸にし、一日二回、毎服(八)四十丸づつを米飲で服す。(いづれも藥性論)【大便瀉血】三代相傳のものだ、縮砂仁を末にし、二錢づつを米飲で熱服し、癒るを度とする。(十便良方)【小兒の脱肛】縮砂を皮を去つて末にし、豬腰子一片を切り開いて內側に擦り、縛り合せて煮熟し、その病兒に食はせて次に白礬丸を服ます。しかし氣逆し腫喘するものは治癒せない。(保幼大全)【全身の腫滿】陰部まで赤く腫れたるには、縮砂仁、(九)土狗一箇を用ゐ、等分を研り和して老酒で服す。(直指方)【痰氣の膈脹】砂仁を擣き碎いて蘿蔔汁を浸み透らせ、焙じ乾かして末にし、一二錢づつを食事と時間を隔て沸湯で服す。(簡便方)【上氣欬逆】砂仁を洗淨して炒つて研り、皮附きの生薑と等分を擣き爛らし、食事と時間を隔て熱酒に泡けて服す。(簡便方)【子癇昏冒】縮砂を皮共に黑く炒り、熱酒で調へて二錢を服す。酒を飲めぬものは米飲で服す。この方は胎を安んじ、痛を止めるにいづれも效があるもので、一一述べ盡せない。(温隱居方)【妊娠胎動】偶然何物かに打ち觸れ、或は跌き倒れて損傷し、ために胎中が不安となり、痛み忍び難きには、縮砂を熨斗の內に入れて炒熱し、皮を去り仁を取つて擣き碎き、

(八) 大觀ニ五ニ作ル
(九) 螻蛄一名土狗。

二錢づつを熱酒で調へて服す。須臾にして腹中の胎兒が動き、(二〇)極めて熱するを覺え、それで胎は安全になる。神效ある藥である。(孫尙藥方)【婦人の血崩】新しき縮砂仁を新しい瓦で焙じて硏末し、米飮で三錢を服す。(婦人良方)【熱攤咽痛】縮砂の殼を末にし、水で一錢を服す。(戴原禮方)【牙齒の疼痛】縮砂を常に嚼むがよし。(直指方)【口吻に生じた瘡】縮砂の殼を煆き研つて擦れば癒える。これは蔡醫博の祕方である。(黎居士簡易方)【魚骨の咽に入りたるとき】縮砂、甘草等分を末にして綿で裹み、含んで汁を嚥めば痰に隨つて出るものである。(王璆百一選方)【誤つて諸物を呑みたるとき】金、銀、銅錢等の溶けぬものを呑んだときは、縮砂の濃煎湯を飮めば直ちに下る。(危氏得效方)【一切の毒を食つたとき】縮砂仁末一二錢を水で服す。(事林廣記)

(二)益智子（宋開寶）

和名　やくち
學名　Amomum amarum (F. P. Smith)
科名　しやうが科(蘘科)

釋名　時珍曰く、脾は智を主るものだ。この物はよく脾、胃を益するところからの名稱である。龍眼が益智と呼ばれると同一の意味だ。按ずるに、蘇東坡の書

(二〇)本草原始ニ極ナ處ニ作ル。

(二)牧野云フ、此植物ノ學名ヲAmomum arboreum, Lour. トセシモノガアル。

に『海南に益智を產する。花も實も長い穗で三節に分れてゐるが、その上、中、下の三節に現はれる結實狀態の早、中、晩で穀作の豐凶がトへる。大豐作のときは三節悉く實り、大凶作のときは全部が實らない。しかし三節全部が熟するといふは稀有のことだ。この物は藥にしては只水を治するだけで、智を益す功力はない。益智なる名稱はやはりその歲の豐凶を知るところから命けられたものではあるまいかと思ふ』とある。これまた一說だが、話は少し穿鑿に近いやうだ。

【集解】藏器曰く、益智は（二）崑崙國、及び交趾に產するものだが、今は嶺南の州郡にも往往ある。顧微の廣州記には『その葉は蘘荷に似て長さ一丈餘あり、その根の上に高さ八九寸の小枝はあるが華蕚はない。莖は竹箭のやうに心から一枝が出て、枝上に十箇の子が叢生する。子の大さは小棗ほどのもので、その中の核は黑く皮は白い。核の小さいものが佳いのである。之を含めば涎穢を取る。或は四つに破つて核を取り去り、その外皮を蜜で煮て粽にして食ふ。味は辛い。晉の盧循が劉裕に贈つた益智粽といふはこれである

（三）恭曰く、益智子は連翹子の頭のまだ開かないものに似たものだ。苗、葉、花、

（二）崑崙國ハ石部玉ノ崑崙ノ註參照。

（三）恭當ニ頌ニ作ルベシ。

根は豆蔻と異らない。ただ子が小さいだけである。

時珍曰く、按ずるに、嵇含の南方草木狀に『益智は二月花が開いて實が連つて著き、五六月に熟する。その子は兩端が筆の先のやうに尖り、長さ七八分のものだ。五味中に雜へて酒の下物にすれば香ばしいものである。また鹽を用ゐて

（益　智　子）

曝らし、粽にして食ふもよし』とある。これに據つて觀れば、華はないといふ顧微の說は誤りだ。今は形が棗の核のやう、皮、及び仁がいづれも草豆蔻に似たものを益智子といつてゐる。

仁 〔氣味〕【辛く、溫にして毒なし】〔主治〕【遺精、虛漏、小便餘瀝。氣を益し、神を安んじ、不足を補ひ、三焦を利し、諸氣を調へる。夜間小便多きには二十四箇を取つて碎き、鹽を入れて共に煎じて服すれば奇驗がある】（藏器）【客寒が胃を犯したるを治し、中を和し、氣を益し、また人の唾多きを治す】（李杲）【脾、胃

を益し、元氣を理し、腎虚の滑瀝を補す】（好古）【冷氣腹痛、及び心氣不足、夢洩、赤濁、熱で心系を傷めた吐血、血崩の諸證】（時珍）

【發明】劉完素曰く、益智は辛し、熱である。能く鬱結を開發し、氣をして宣通せしめる。

王好古曰く、益智は本と脾の藥であつて、主として君、相の二火に作用する。集香丸の中に在つては肺に入り、四君子湯の中に在つては脾に入り、大鳳髓丹の中に在つては腎に入る。右の三臟は互に子母の相關に在るものだから、補藥の中にこれを兼ね用うべきものであるが、多く服してはならない。

時珍曰く、益智は大いに辛し。陽を行らし陰を退ける藥であつて、三焦、命門の氣弱のものに適する。按ずるに、楊士瀛の直指方に『心は脾の母であつて、食が進めばただ脾を和すのみに止まらず、火がよく土を生ずるものだから、心藥を脾、胃の藥の中に入れて、やがて相共にその功を發揮せしむべきものである。故に古人が食を進める藥の中に多く益智を用ゐたのは、土中に火を益する目的なのだ』といつてある。又按ずるに、洪邁の夷堅志には左の記事がある。『(四)秀川の進士の陸迎は

(四) 秀川ハ秀州ノ誤カ。秀州ハ五代ノ吳越ニ置ク。今ノ浙江省ノ舊嘉興府、江蘇省ノ舊松江府等ノ地方ニシテ華亭縣ニ治ス。

（五）雷州ハ石部霹靂礁ノ註ヲ見ヨ。

突然吐血して止まず、氣が壓まり、驚き顫ひ、狂躁し、目が据り、深夜に及んで戸外へ飛出さうとするのであつた。かかる容體が二晩續いたので、手を盡して醫藥の治療を加へたが、なかなかそれが瘳えなかつた。ところがある夜夢に觀音が現はれて、一の藥方を授け「ただ一料を服むがよし、永く病根が除けるであらう」といつた。夢が覺めてから、その記憶に在る方で藥を合せて服したところ、病は果して瘥えたのであつた。その方は、益智子仁一兩、生硃砂二錢、青橘皮五錢、麝香一錢を碾つて細末にし、一錢づつを空心に燈心湯で服すといふのであつた』とある。

附方　新八。【小便頻數】脬氣の不足である。（五）雷州の益智子を鹽で炒つて鹽を去り、天台の烏藥と等分を末にし、酒で煮た山藥粉で作つた糊で梧子大の丸にし、七十丸づつを空心に鹽湯で服す。これを縮泉丸と名ける。（朱氏集驗方）【心虚の尿滑】及び赤、白の二濁には　益智子仁、白伏苓、白朮等分を末にし、三錢づつを白湯で調へて服す。【白濁腹滿】男女に拘はらず、益智仁を鹽水に浸して炒り、厚朴を薑汁で炒つて等分を薑三片、棗一箇を共に煎じた水で服す。（永類鈐方）【小便赤濁】益智子仁、伏神各二兩、遠志、甘草を水で煮て各半斤を末にし、酒糊で梧子大の丸に

し、空心に薑湯で五十丸を服す。【腹脹で突然瀉するもの】日夜止まず、諸藥の效なきは氣脱である。益智子仁二兩を濃く煎じて飲めば立ろに癒える。（危氏得效方）【婦人の崩中】益智子を炒つて細かに碾り、一錢を米飲に鹽を入れて服す。（產寶）【口を香くし、臭を辟ける】益智子仁一兩、甘草二錢を粉に碾つて舐める。（經驗良方）【漏胎下血】益智仁半兩、縮砂仁一兩を末にし、一日二回、三錢づつを空心に白湯で服す。（胡氏濟陰方）

(一)蓽茇（宋開寶）

和名　ひはつ
學名　Piper longum, L.
科名　こせう科（胡椒科）

【釋名】蓽撥　時珍曰く、蓽撥とあるは蓽茇と書くが正しいのであつて、(二)南方草木狀に記載されてある外國語だ。陳藏器の本草には畢勃とあり、(三)扶南傳には蓽逼撥と書き、大明會典には畢䔥と書き、段成式の酉陽雜俎には『(四)摩伽陀國では蓽撥梨と呼び、(五)拂菻國では阿梨訶(六)陀と呼ぶ』といつてある。

【集解】恭曰く、蓽撥は(七)波斯國に生ずる。叢生するもので、莖、葉は蒟醬に

(一) 牧野云フ、琉球ニ栽エ居ルモノニ同地デひはつト呼ブモノガアルガ、是レハ眞ノ蓽茇デハナク同屬中ノ Piper Hancei, Maxim. デアル。私ハ嘗テ之レニひはつもどきノ和名ヲ命ジタ。

(二) 南方草木狀ハ晉ノ嵆含ノ著ハス支那最古ノ草木譜ニシテ嶺南地方ノ植物ヲ記載ス、晉ノ惠帝ノ時ノ人。

(三) 扶南ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(四) 摩伽陀國ハ當時印度恒河沿流ノ一國。笈多王朝東遷シテコレニ據ル。

(五) 拂菻國、菻ハ本書ニハ林ニ作ル。水

似てゐる。その子は緊つて細かい。味は蒟醤よりも辛烈だ。胡人が携へて來るが、それは食味に入れて用ゐるのだ。

藏器曰く、根を畢勃蔆といふ。柴胡に似て黒く硬い。

頌曰く、今は嶺南地方に(八)特にある。多く竹林中に生えるもので、正月苗が芽生えて叢になり、高さ三四尺になる。その莖は箸ほどで葉は青く、葉の形は圓くして(九)蕺菜のやう、濶さ二三寸あつて桑のやう、表面は光つて厚い。三月花を開き、その花の表に白色がある。七月子を結び、その子は小指ほどの太さで長さ二寸ほどあり、青黑色で(一〇)椹子のやうだが、それよりも長い。九月に採收して(一一)晒曝して乾す。南方人はその辛く香ばしいのを賞美し、或は葉を取つて生で食ふ。また船舶で輸入されるものもあるが、それは更に辛く香しい。

(華　茇)

時珍曰く、段成式は『(一二)靑州の防風子は華茇に擬へる』といつてあるが、蓋しそ

仙ノ註參照。

(六)陀ハ本書ニ哋ニ作ル。

(七)波斯國ハ土部伏龍肝ノ註ヲ見ヨ。

(八)特、大觀ニ皆ニ作ル。

(九)蕺菜ハドクダミ。

(一〇)椹子ハクハノミ。

(一一)晒、大觀ニ灰殺シテトアリ。

(一二)靑州ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。

れは違ふ。華茇の氣味は殆んど胡椒そのままで、その形長は一二寸のものだ。防風子は圓く胡荾子のやうなもので、大さも同じくはない。

修治　斅曰く、凡そこれを用ゐるには梃（クキ）を去つてその頭を用ゐる。まづ醋に一夜浸して焙じ乾かし、刀で皮や（一三）栗子を刮り去り、淨かにしてから用ゐれば服しても肺を傷めるとか、上氣するとかいふ虞はない。

氣味　【辛し、大溫にして毒なし】時珍曰く、氣は熱、味は辛し、陽でありて浮であつて、手、足の陽明の經に入る。けれども辛、熱は耗散せしめる働があつて、よく脾、肺の火を動ずるものだから、多く用ゐれば目昏を起すことがある。食料にするなどは就中宜しくない。

主治　【中を溫め、氣を下し、腰、脚を補し、腥氣を殺し、食物を消化し、胃冷、陰疝（一四）癖を除く】（藏器）【霍亂、冷氣心痛、血氣】（大明）【水瀉、虛痢、嘔逆、醋心、産後の洩痢には、阿魏と和合して用ゐるがよく、訶子、人參、桂心、乾薑と配合すれば、臟腑の虛冷、腸鳴を治するに神效がある】（李珣）【頭痛、鼻淵、牙痛を治す】（時珍）

（一三）栗子ハ不成熟ノ種子ノコトナラン。

（一四）癖ノ上ニ大觀ニハ痃ノ字アリ。

【發明】 宗奭曰く、華茇は腸、胃に走るもので、冷氣嘔吐、心腹滿痛の者には宜いが、多く服すれば眞氣を走泄し、腸虛、下重を發すものである。

頌曰く、按ずるに、唐太宗實錄に『貞觀年間に、太宗が氣痢を病まれて久しく痊ず、名醫の藥を服したが反應がなかつたので、特に詔があつて一般人から藥方を募集された。その時ある宿衞の士が、黃牛の乳で華茇を煎じて用ゐる方を上申したので、帝はそれを服用されて效があつた』と書いてある。劉禹錫もその事を記述して『その後も屢〻虛冷の患者に用ゐて必ず效があつた』といつてある。

時珍曰く、牛乳で煎じることは獸部の牛乳の條下に詳記してある。華茇が頭痛、鼻淵、牙痛の要藥として效があるのは、その辛、熱がよく陽明の經に入り、浮熱を散ずる點に在るのである。

【附方】 舊三、新八。【冷痰惡心】華茇一兩を末にし、食前に米湯で半錢を服す。(聖惠方)【暴泄身冷】自汗し、甚しきは嘔吐を催ほし、小便が淸み、脈の微弱なるを治するに用うべき已寒丸——華茇、肉桂各二錢半、高良薑、乾薑各三錢半を末にして糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを薑湯で服す。(和劑局方)【胃冷口酸】口から淸

水を流し、心下から臍に連なつて痛むには、華茇半兩、厚朴を薑汁に浸して炙いて一兩、以上を末にして熟した鯽魚肉に入れて研り合せ、綠豆大の丸にして二十丸づつを米飮で服す。立ろに效がある。（余居士選奇方）【痃氣が塊となつたるもの】腹に在つて散ぜぬには、華茇一兩、大黃一兩をいづれも生で末にし、麝香少量を入れて煉蜜で梧子大の丸にし、三十丸づつを冷酒で服す。（永類鈐方）【婦人の血氣】痛みを覺え、また不定時に下血し、月經不順なるには、華茇を鹽で炒り、蒲黃を炒り、等分を末にして煉蜜で梧子大の丸にし、每日空心に溫酒で三十丸を服す。二回服すれば止まる。これを二神丸と名ける。（陳氏方）【偏頭風痛】華茇を末にし、患者をして口に溫水を含ませ、その頭痛の左右に隨つて痛む方の鼻孔からその末一字を吸はせれば效がある。（經驗（一五）良方）【鼻に淸涕を流すもの】華茇末を吹くが效がある。（衞生易簡方）【風蟲牙痛】華茇末を牙に揩り、蒼耳を煎じた湯で涎を漱ぎ去る。○本草權度では、華茇末、木鼈子肉を研つて膏に和し、物に展べて鼻に嗅ぐ。○聖濟總錄では、華茇、胡椒等分を末にし、蠟に化して麻子大の丸にし、一丸づつで孔中を塞ぐ。

蓽（一六）茇沒　［氣味］【辛し、溫にして毒なし】　［主治］【五勞、七傷、冷氣嘔

（一五）良、大觀ニ後ニ作ル。

（一六）蓽、大觀ニ撥ニ作ル。

逆、心腹脹滿、食物の不消化、陰汗、寒疝の(一七)核腫、婦人の內冷で子無きもの。腰腎の冷を治し、血氣を除く】(藏器)

(一)蒟醬　蒟の音は矩(ク)である。（唐本草）

和名　きんま
學名　Piper Betle, L.
科名　こせう科(胡椒科)

[釋名] 蒟子(廣志)土蓽茇(食療)苗を扶留、土蔓藤と名ける。時珍曰く、按ずるに、嵇含は『蒟子は食物を調理するに用うるものだから醬と謂ふので、蓽茇の類だ』といつてある。やはり食し得るといふところから、孟詵は食療中に編入して土蓽茇といつてある。その蔓葉は扶留藤と名け、また扶櫓とも書き、浮留とも書くが、その意義は判らない。蔞と書いたのは留の字の訛りだ。

[集解] 恭曰く、蒟醬は巴蜀の地方に生ずるもので、蜀都賦に所謂『味を(二)番禺に流す』といふそのものだ。蔓生で、葉は王瓜に似て厚く大きく、光澤がある。味は辛く香しく、實は桑椹に似て皮が黑く肉が白い。西戎からも折折將來するが、それは細で辛烈だ。交州、(三)愛州地方の民家で多く栽培するが、蔓生でその子は長

(一七) 核腫ハ睾丸ノ脹大スルコト。

(一) 牧野云フ、我邦所產ノふうとうかづら即チ Piper Futokadsura, Sieb. ヲきんまト誤認スルモノガアツタが、是レハ同屬デハアレドモ全然別物デアル。

(二) 番禺ハ秦ニ縣ヲ置ク。番山、禺山ヲ以テ名ク。今ハ廣東省粵海道ニ屬ス。南珠江ニ臨ミ、支那南部ノ中樞、沿海五港ノ一ナリ。

(三) 愛州ハ漢ノ九眞郡ノ地ニシテ、梁ニ州ヲ置ク。今ハ佛領東京ニ屬ス。

く大い。苗を浮留藤と呼び、葉を取つて檳榔と合せて食ふが、味が辛くて香しい』

頌曰く、今は(四)夔州、嶺南にいづれもある。昔、漢の武帝が(五)南越を歸順せしむべく唐蒙を特派して旨を諭させたとき、越王は蒙を饗應した料理の中に蒟醬を入れて、これは番禺の城下に産するものだといふことを說明した。蒙が歸京して復命の際その美味であつたことをも奏上したので、武帝は大いにその話に惹き入れられ、遂に(六)牂牁、(七)越嶲地方の征服、開拓を志したといふことである。劉淵林は蜀都賦に注して『蒟醬は木に緣つて生ずるもので、その子は桑椹の如く、熟すれば正青色となり、長さ二三寸ある。蜜、及び鹽で漬けて置いて食ふ。味は辛くして香しい』といひ、蘇恭の說と大同小異であるが、しかし淵林のいふものは蜀の產、蘇恭のいふのは海南地方のものだ。現今では華茇のみが重要視されて蒟醬は問題にされぬところから、これを使用するものも鮮くなつた。

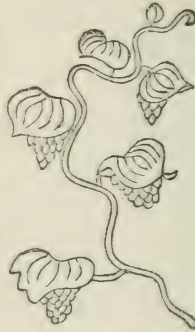
李珣曰く、廣州記には『波斯國に產する。實の形狀が桑椹のやうで紫褐色なものが貴重なのだ。黑いものは老(八)根であつて役に立たない』といつてある。けれども近頃のものは多くは黑色で、褐色のものは見ることが稀だ。黔中にもあつて、形狀

(四) 夔州ハ黄連ノ荊夔ノ註參照。
(五) 南越ハ石部玉類珊瑚ノ註ヲ見ヨ。
(六) 牂牁ハ漢ニ郡ヲ置キ、今ノ貴州遵義府以南、思南、石阡等ノ地ヲ轄シ、治ヲ且蘭ニ置ク。且蘭即チ今ノ平越縣ナリ。
(七) 越嶲ハ石部玉類寶石ノ註ヲ見ヨ。
(八) 大觀ニ根ノ字ナシ。

(九)滇南トハ今ノ雲南省地方。卽チ雲南省城南ノ滇池、一名滇南澤ニ因リ、ソノ地方ヲ滇南ト呼ブ。
(一〇)川南トハ四川省南部ノ地ヲ指ス。
(一一)渝州ハ牡丹ノ註。瀘州ハ白芷ノ註ヲ見ヨ。
(一二)威州ハ元ニ置キ明ニ縣ニ改ム。今ハ直隸省大名道ニ屬ス。茂州ハ石部不灰木ノ註、施州ハ都管草ノ註ヲ見ヨ。
(一三)易ハ本書ニ爲ニ作ル。

や滋味はやはり同樣だ。

時珍曰く、蒟醬は今は兩廣、(九)滇南、及び(一〇)川南、(一一)渝、瀘、(一二)威、茂、施の諸州にいづれもある。苗を蔞葉といふ。蔓生のもので、樹にからまつて伸び、根の太さは筯ほどである。彼の地方では、檳榔を食ふ時にこの葉、及び蚌灰少量を同時に嚼む。かくすれば瘴癘を辟け、胸中の惡氣を去るといふことである。諺に『檳榔、浮留は憂を忘れる』といふはそれから出たもので、その花實、卽ち蒟子である。按ずるに、稽含の草木狀に『蒟醬、卽ち蓽茇であつて、外國に生ずるものは大きくして紫だ。これを蓽茇といふ。番禺に生ずるものは小さくして青い。これを蒟子といふ。本草に蒟子を蔞子と(一三)易へてあるは誤りで、蔞子は一名扶留といひ、その草の形狀は全く異るものだ』といつてある。けれども予の考察するところでは、蒟子は蔓生であり、蓽茇は草生であつて類を同じうするものだ。同一物ではないが、その花實の氣味、功用の點は同一であ

（蒟醬——蔞葉）

る。嵇氏はこの二物を同一物として、蒟子は扶留ではないといつてゐるが、それは扶留なるものが一種に限るものでないといふことを知らぬのである。劉欣期の交州記には『扶留に三種ある。一は穫留といひ、その根が香美である。一は扶留といひ、その藤の味はやはり辛い。一は南扶留といひ、その葉は青く味は辛い』といつてある。これはその一種ならざるをいつたものだ。當今蜀地方では蔞葉だけを取つて酒麴に作るが香美だといふことである。

[修治] 斆曰く、凡そこれを用ゐるには、採收して刀で上粗皮を刮つて細かに擣き、五(一四)錢に對して生薑自然汁五兩の割合に入れて拌ぜ、一日間蒸して曝乾して用ゐる。

根葉子 [氣味]【辛し、溫にして毒なし】時珍曰く、氣は熱、味は辛であつて、陽であり浮である。[主治]【氣を下し、中を溫め、(一五)痰を破る】(唐本)【欬逆上氣、心腹蟲痛、胃弱虛瀉、霍亂吐逆。酒食の味を(一六)解す】(李珣)【結氣を散し、心腹冷(一七)氣を治し、穀物を消化する】(孟詵)【癉癘を解し、胸中惡邪の氣を去り、脾を溫め、熱を燥がす】(時珍)

(一四)大觀ニ錢ヲ兩ニ作ル。
(一五)大觀ニ痰ノ下ニ積ノ字アリ。
(一六)解ストハ調和スルコトナラン。
(一七)氣及治大觀本草ニ據ル。

附方 新一 【牙疼】蒟醤、細辛各半兩、大皂莢五挺を子を去つてその孔へ青鹽を入れて燒いて性を存し、以上を共に研末して頻りに摻り、涎を吐く。(御藥院方)

(二)肉豆蔻（宋開寶）

和名 にくづく、又、ししづく
學名 Myristica fragrans, Houtt.
科名 にくづく科(肉豆蔻科)

釋名 肉果(綱目) 迦拘勒 宗奭曰く、肉豆蔻とは草豆蔻に對する名稱であつて、殼を棄て去つて肉のみを用ゐるものである。その肉が油色のものが佳品だ。白く枯れて瘦虛なるものは劣等品である。時珍曰く、花、實いづれも豆蔻に似てゐるが核がないものだから命けた名稱である。

集解 藏器曰く、肉豆蔻は胡國に生ずるもので、胡地では迦拘勒と名ける。大舶で輸入するから有るのだが、中國には無いものだ。その形は圓く小さく、皮は紫で薄く緊まり、中の肉はいら辛い。珣曰く、崑崙、及び大秦國に生ずる。頌曰く、今は嶺南地方の人家でも栽培する。春苗を生じ、夏莖が抽き出で、花を開き實を結ぶ。その實は豆蔻に似たものだ。六月、七月に採收する。時珍曰く、肉豆蔻は花、

(一)牧野云フ、「モルッカ」島ニ產スル常綠樹デ、其漿果ハ果皮兩裂シ中ニ大ナル一種子ガアツテ、ソレニ赤色ノ假種皮ガ纒フテ居ル。此種子ナ Nutmeg ト稱スル。

及び實の狀態は草豆蔻に似てゐるが皮、肉の顆の點に異があつて、顆の外面に皺紋があり、內面に檳榔の紋のやうな斑(二)纈紋がある。甚だ蛀の生じ易いものだが、烘いて密封して置けばやや長持ちする。

(肉　豆　蔻)

實　[修治]　斅曰く、凡そこれを用ゐるには、糯米粉に熱湯を入れて攪拌ぜたもので豆蔻を裹み、煻灰火中で(三)煨熟し、その粉を去つて用ゐるのである。(四)鐵に觸れ犯してはならぬ。

[氣味]　【辛し、溫にして毒なし】權曰く、苦く辛し。好古曰く、手、足の陽明の經に入る。

[主治]　【中を溫め、食物を消化し、洩を止め、積冷の心腹脹痛、霍亂中惡、鬼氣冷疰、嘔沫冷氣、小兒の(五)乳霍を治す】(開寶)【中を調へ、氣を下し、胃を開き、酒毒を解し、皮外(六)絡下の氣を消す】(大明)【宿食、痰飲を治し、小兒の吐逆で乳を

(二) 纈ハ結ノ意デ、シボリノ如キ隆起紋ガアルヲ云フ。
(三) 煨ハ大觀ニ炮トアリ。
(四) 鐵ハ大觀ニ銅ニ作ル。
(五) 乳霍ハ傷乳、霍亂ノ省略。
(六) 絡下ノ氣ハ經絡下ノ邪氣ヲ云フ。

飮下せずして腹痛するを止める】(甄權)【心腹蟲痛、脾胃虛、冷氣、併に冷熱虛洩、赤白痢に主效がある。研末して粥、飮にして服す】(李珣)【脾、胃を暖め、大腸を固くする】(時珍)

(七)**發明**　大明曰く、肉豆蔻は中を調へ、氣を下し、皮外絡下の氣を消す。味が珍奇で功力が更に顯著である。宗奭曰く、やはり善く氣を下すが、多く服すれば氣を泄す。中を得ればその氣を和平にする。

震亨曰く、これは金と土とに屬するものであつて、丸にして用ゐれば中を溫め、脾を補ふ。日華子大明はその氣を下すことを特に稱してゐるが、それは脾が補の作用を受けて善くその機能を完全に發揮するから氣が自から下るのであつて、陳皮、香附のやうに甚だ速かに泄するものではない。寇宗奭はその事實を詳かに知らなかつたために、服してはならぬといふやうなことをいつてゐる。

機曰く、痢疾に用ゐれば腸を澁らす。(八)傷乳泄瀉の要藥である。

時珍曰く、(九)土は煖を愛して芳香を喜ぶものだから、肉豆蔻の辛、溫は脾、胃を理して吐利を治するのである。

(七) 木村(康)曰ク、肉豆蔻ヲ蒸溜スレバ揮發油卽揮發肉豆蔻油大約八%ヲ得、其成分ハピネン、デペンテン、ミリスチコール、ミリスチチンナリ。肉豆蔻ヲ溫壓スレバ揮發油ヲ混有スル脂肪大約二八%ヲ得、之ヲ肉豆蔻脂又ハ肉豆蔻酪ト稱シ香味料ニ用フ、又肉豆蔻ノ子衣ヲ肉豆蔻花(Macis)ト云ヒ、藥用、香味料及肉豆蔻花油ノ原料トス。

(八) 傷乳ハ乳ノ飮ミ過ギ。

(九) 土ハ脾胃ヲ指ス。

【附方】舊一、新六。【暖胃除痰】食慾を進め、食物を消化するには、肉豆蔻二箇、半夏を薑汁で炒つて五錢、木香二錢半を末にして蒸餅で芥子大の丸にし、每食後に津液で五丸乃至十丸を服す。(普濟方)【霍亂吐利】肉豆蔻を末にして薑湯で一錢を服す。(普濟方)【久瀉の止まぬもの】肉豆蔻を煨いて一兩、木香二錢半を末にして棗肉で和して丸にし、米飮で四五十丸を服す。○又ある方では、肉豆蔻を煨いて一兩、熟附子七錢を末にして糊で丸にし、米飮で四五十丸を服す。○又ある方では、肉豆蔻を煨き、粟殼を炙つて等分を末にし、醋糊で丸にして米飮で四五十丸を服す。(いづれも百一選方)【老人の虛瀉】肉豆蔻三錢を麪で裹んで煨熟し、麪を去つて研り、乳香一兩と末にして陳米粉糊で梧子大の丸にし、五七十丸づつを米飮で服す。これは常州の侯教授が所傳の方である。(瑞竹堂方)【小兒の泄瀉】肉豆蔻五錢、乳香二錢半、生薑五片を共に黑色に炒つて薑を去り、研つて膏にして取り收め、綠豆大の丸に團めて每に病兒の大、小に應じて米飮で服す。(全幼心鑑)【脾泄氣痢】豆蔻一顆を醋で調へた麪に裹んで黃に煨き焦して麪共に研末し、(一〇)欓子を炒つて研末したもの一兩と和し、また別に陳廩米を炒り焦して末にしたものとよく和して二錢づつを煎じた

(一〇)欓子　一名食茱萸。

飮を用ゐて前の二味の藥三錢を調へ、朝夕一服づつ服すれば瘥える。(續傳信方) 【冷痢腹痛】物を食へぬには、肉豆蔻一兩を皮を去り、醋で和した麪で裹んで煨いて末に擣き、一錢づつを粥、飮で調へて服す。(聖惠方)

(一)補骨脂(宋開寳)

和名 おらんだびゆ
學名 Psoralea corylifolia, L.
科名 まめ科(荳科)

【釋名】 破故紙(開寳) 婆固脂(藥性論) 胡韮子(日華) 時珍曰く、補骨脂とはその功力を表した名である。胡人がこれを婆固脂と呼ぶを俗に訛つて破故紙といつたのだ。胡韮子とはその子の形狀が似てゐるからいふので、胡地の韮子といふ意味ではない。

【集解】 志曰く、補骨脂は嶺南の諸州、及び波斯國に生ずる、頌曰く、今は嶺外の山坂の地に多くある。四川、合州にもまたあるが、いづれも外國の舶來品の優るに及ばない。この植物は莖の高さ三四尺、葉は小さくして薄荷に似てゐる。花は微紫色だ。實は麻子のやうで圓く扁たくして黑い。九月に採收する。大明曰く、

(一) 牧野云フ、草木圖說卷ノ十四ニ其圖ガアル、我日本ニハ野生ハナク、今日デハ餘リ作ツテ居ルノモ見ナイ、印度、波斯亞、亞拉比亞邊ノ原產デアルガ、今日デハ支那ノ四川省邊デモアルトイフ事デアル。

徐表の南州記に『これは胡韮子だ』とある。南方諸外國の產は色が赤く、廣南地方の產は色が綠である。藥に入れるには微し炒つて用ゐる。

子　修治　斅曰く、性は燥である。每にこれを用ゐるには酒に一夜浸して漉出し、東流水に三晝夜浸してから、午前十時から午後四時まで蒸して日光で乾して用ゐる。ある法では、鹽と共に炒つてから曝乾して用ゐる。

氣味　【辛し、大溫にして毒なし】權曰く、苦く辛し。珣曰く、甘草を惡む。時珍曰く、芸薹、及び諸血を忌む。胡桃、胡麻と配合すれば良好の效果を擧げる。

主治　【五勞、七傷、風虛冷、骨髓の傷敗、腎冷の精流、及び婦人の血氣、墮胎】(開寶)【男子の腰疼、膝冷、囊濕。諸冷、痺頑を逐ひ、小便を止め、腹中冷を(一)利す】(甄權)【陽事を盛にし、耳、目を明にする】(大明)【腎泄を治し、命門を通じ、丹田を煖め、精神を斂める】(時珍)

發明　頌曰く、破故紙は今世間で多く胡桃と合せて服するが、この法は唐の鄭相國から出たものだ。相國の自叙に『予が南海の節度使となつたのは七十有五の年であつたが、任地越地方は卑濕のところで、ために身體の內外を傷め、種種の病氣

(一) 利字大觀ニ據リ補入ス。

が俱發して陽氣が衰絕し、乳石などの補藥あらゆるものを服したが、すべてその應驗が見えなかつた。ところが元和七年に（三）訶陵國の貿易商李摩訶なるものが、予の病狀を聞いてこの方と共にこの藥を傳へてくれた。予も初は疑問にして服まなかつたが、摩訶が頓首九拜して懇請するので、不承不承に服んで見ると、七八日經つとその反應が現はれて來た。爾來常に服してゐるが、その功力は誠に不思議なものである。同じく元和十年の二月には無事節度の任期を勤めて郡から京師へ歸つて來たわけだ。その方を錄して傳へて置く。破故紙十兩を淨擇し皮を取り去つて洗ひ、曝し擣いて細かに篩ひ、胡桃穰二十兩を湯に浸し、皮を去り細かに研いて泥の如くにして（四）卽ち前末を入れ、好き蜜で和し飴餹のやうにして瓷器に盛つて取收め、朝、晝この藥一匙を煖酒二合で調へて服し、飯を食つて壓へる。若し酒を飲めぬ人ならば煖水で調へて用ゐる。久しきに亙つて服すれば天年を延べ、

（補　骨　脂）

（三）訶陵國、卽チ印度ノ古地カリンガヲ指ス。

（四）大觀ニ據リ補入ス。

（五）脂、大觀ニ鴟ニ作ル。

（六）心包ノ火ハ心臓ノ熱。

（七）元陽ハ陽氣ノ根元。

氣力を益し、精神を爽快にし、目を明かにし、筋骨を補添する。但だ芸薹、羊血を禁ずる外、何物をも忌まない。この物は元來外國から商船で輸入されるもので、中華には産せぬものだ。外國人は補骨（五）脂と呼ぶのを、訛つて破故紙といふやうになつたのだ」とある。王紹顏は續傳信方にその事實を頗る詳細に記載してあるから、ここにそれを錄して置く。

時珍曰く、この方はまた丸にして温酒で服してもよい。按ずるに、白飛霞の方外奇方には『破故紙は火に屬し、神明を收斂し、よく（六）心包の火と命門の火とを相通ぜしむるものである。故に（七）元陽を堅固にし、骨髓を充實し、濇の作用で脱を治するのだ。胡桃は木に屬し、燥を潤ほし、血を養ふ。血は陰に屬して燥を惡むものである。故に油でこれを潤ほすのだ。破故紙の佐とすれば木、火相生の妙を發揮するのである。故に諺に「破故紙に胡桃がなければ水母に鰕の無いやうなものだ」といふ』とある。又、破故紙は甘草を惡むものだ。然るに瑞竹堂方の青娥丸中には甘草を加へてあつて、矛盾のやうではあるが、それは甘草はよくあらゆる藥を調和するもので、惡むものに對しても甘草としては惡まぬといふわけではあるまいか。又、學士許叔微の

本事方には『孫眞人は腎を補ふは脾を補ふに若かずといつて居るが、予は脾を補ふは腎を補ふに若かずと思ふ。腎氣が虚弱であれば陽氣が衰劣となり、脾、胃を熏蒸する能力がなくなる。脾、胃の氣が寒すれば胸膈を痞塞させ、飲食が進まず、(八)運化を遲くし、或は腹脇虚脹し、或は嘔吐痰涎し、或は腹鳴泄瀉せしめるのだ。譬へば鼎や釜の中の物は火力がなければ終日經つても煮え熟するわけがない。いかで能く消化しやう道理があらう。それと同樣である』といつてある。濟生方の二神丸は脾、胃の虛寒泄瀉を治するもので、破故紙の補腎藥と、肉豆蔻の補脾藥とを用ゐてあつて、この二藥はいづれも補を兼ねるものではあるが、しかし斡旋の力を缺いてゐるところから、往往木香を加へ、その氣を順にして斡旋せしむべきものとなつてゐる。倉庫は空であつてこそよく物を容れ得るものだから。それでその倉庫を空らにするやうなものである。これは屢〻實驗してその效果を認めるところだ。十分心得べきことである。

附方　舊二、新十三。【補骨脂丸】(九)下元が虛敗して脚、手が沈重し、夜間多く盜汗するを治す。この症狀は性慾を放縱にするが原因で起るもので、この藥はそれ

(八)運化トハ榮養長育ノ作用。

(九)下元ハ身體中下部ノ氣力ヲ云フ、又陰部ヲ指ス。

に對して筋骨を壯にし、元氣を益すものである。補骨脂四兩を香しく炒り、兎絲子四兩を酒で蒸し、胡桃肉一兩を皮を去り、乳香、沒藥、沈香を各〻研つて二錢半を煉蜜で梧子大の丸にし、二三十丸づつを空心に鹽湯、溫酒いづれもその好む方のもので服す。日毎に一服づつ夏至から冬至まで繼續して服藥を止める。これは唐の宣宗の頃、張壽太尉が廣州の長官在任當時に南番人から傳授した方だ。太尉の詩に、『三年持レ節向二邊隅一、人信方知藥力殊、奪二得春光一來在レ手、春娥休レ笑二白髭鬚一』といふ一首がある。（和劑方）【男女の虛勞】男子、婦人の五勞、七傷、下元の久冷、一切の風病の四肢疼痛。顏色の老衰を防ぎ、氣力を壯にし、髭鬚を黑くする。補骨脂一斤を酒に一夜浸して晒し乾し、烏油麻一升と共に炒つて麻子が音をたてなくなつたとき麻子を篩ひ去り、補骨脂を取つて末にし、醋で煮た麪糊で梧子大の丸にし、二三十丸づつを空心に溫酒、鹽のいづれでも任意のもので服す。（經驗〔一〇〕方）【腎虛腰痛】經驗方では、破故紙一兩を炒つて末にし、溫酒で三〔一一〕錢を服するが神妙である。或は木香一錢を加へる。〇和劑局方では、青娥丸——腎氣虛弱に風冷が乘じ、或は血、氣相搏つて腰が折れるやうに痛み、伏仰の自由ならぬもの、或は勞役のために

（一〇）大觀ニ方ノ上ニ後ノ字アリ。
（一一）大觀ニ錢ノ下ニ匕字アリ。

（一二）藥ノ上ニ酒ヲ滿ヘルコト一指幅ノ高サヲ云フ。

腎を傷め、或は痺濕の腰痛、或は墜落の撲傷、或は風寒が客搏し、或は氣滯して散ぜぬ等の原因で腰痛を起し、腰の部分に重い物が墜ち壓するやうに痛むを治す。破故紙を酒に浸して炒つて一斤、杜仲を皮を去り薑汁に浸して炒つて一斤、胡桃肉を皮を去つて二十箇を末にし、蒜を擣いた膏一兩に和して梧子大の丸にし、毎に空心にして溫酒で二十丸を服す。婦人は淡醋湯で服す。常に服すれば筋骨を壯にし、血脈を活し、髭鬚を黑くし、顏色を益す。【妊娠腰痛】通氣散——破故紙二兩を香しく炒つて末にし、先づ胡桃肉半箇を嚼み、空心に溫酒で此の藥二錢を調へて服するが神妙である。（婦人良方）【定心、補腎】養血返精丸——破故紙を炒つて二兩、白伏苓一兩を末にし、沒藥五錢を無灰酒で（一二）高さ一指に浸して煮溶かしたものでその末を和し、梧子大の丸にして三十丸づつを白湯で服す。昔、ある人がこれを服して老年に達しても衰へなかつたといふが、蓋し故紙は腎を補し、伏苓は心を補し、沒藥は血を養ふものだから、腎、心、血の三者が强壯である以上、身體も隨つて安らかなわけである。（朱氏集驗方）【精氣の固からぬもの】破故紙、青鹽等分を共に炒つて末にし、二錢づつを米飮で服す。（三因方）【小便度なきもの】腎氣虛寒である。破故紙十

兩を酒で蒸し、茴香十兩を鹽で炒つて末にし、酒糊で梧子大の丸にして百丸づつを鹽酒で服す。或は米粉と共に猪腎にまぶして煨いて食ふ。（普濟方）【小兒の遺尿】膀胱の冷であつて、夜は陰に屬するものだから小便に節度を失ふのだ。破故紙を炒つて末にし、毎夜熱湯で五分を服す。（嬰童百問）【玉莖不痿】精が滑して歇まず、折折鍼で刺すやうに痛み、泄した粘液を捏て見て脆いもの、これは腎漏といふ病である。破故紙、韭子各一兩を末にし、一日三回、三錢づつを水二盞で六分に煎じて服し、癒えれば止める。（夏子益奇疾方）【脾、腎虚瀉】二神丸——破故紙を炒つて半斤、肉豆蔻を生で四兩を末にし、肥棗（二三）肉を研つた膏で和して梧子大の丸にし、毎に空心に米飮で五七十丸を服す。○本事方では木香二兩を加へて三神丸と名けてある。【水瀉久痢】破故紙を炒つて一兩、粟殼を炙いて四兩を末にし、煉蜜で彈子大の丸にして一丸づつを薑、棗と共に水で煎じた湯で服す。（百一選方）【久しきに亙る牙痛】腎虚である。補骨脂二兩、青鹽半兩を炒り、研つて擦る。（御藥院方）【風蟲牙痛】上へ頭腦に連つて痛むには、補骨脂を炒つて半兩、乳香二錢半を末にして擦り、或は丸にして孔を塞ぐ。日毎に用ゐれば效がある。（傳信適用方）【墜落打撲の腰痛】瘀血

(二三)金陵本肉ヲ丸ニ作ル誤ナリ。

の凝滯である。破故紙を炒り、茴香を炒り、辣桂と等分を末にし、熱酒で二錢づつを服す。故紙は腰痛に血を行らす主效があるのだ。（直指方）

(一)薑黃（唐本草）

和名　きやうわう
學名　Curcuma aromatica, Salisb.
科名　しやうが科（蘘科）

【釋名】 蒁　音は述（ジユツ）である。寶鼎香（綱目）

【集解】 恭曰く、薑黃は根、葉すべて鬱金に似たもので、その花は春根から生え、苗と共に出て夏に入ると花が爛れる。子は結ばない。根には黃、青、白の三種がある。これを作る方法は鬱金と同樣である。西戎の地方ではこれを(二)蒁といふ。辛味が少くして苦が多く、この點も鬱金と同樣だが、ただ花の生え方が異ふだけである。

藏器曰く、薑黃の眞なるものは種ゑてから三年以上を經過した老薑のことで、その老薑になればよく花がさく。その花は根の際に在るもので、宛ら蘘荷のやうだ。根節は堅硬で氣味は辛辣である。薑を種ゑるところに有るのだが、しかしこの物は

(一) 牧野云フ、薑黃ハ葉ニ先ダツテ花ナ葉外ニ出スニヨリ鬱金ト異ナリ。又葉裏ニ細毛アルコトモ鬱金ト同ジデハナイ、集解ニ其花春ニ根ヨリ生ズトアル。

(二) 大觀ニ蒁下ニ藥字アリ。

なかなか得難いものだ。西番から來るものに鬱金、蒁藥と相似たもので、蘇恭の所說のやうなものがあるが、それは蒁藥であつて薑黃ではない。又、薑黃とは蒁のこと、鬱金とは胡地の蒁のことだともいふが、それでは薑黃、蒁、鬱金の三物は別種のものでないことになる。遞ひに通用する名で總稱して蒁といふならば、その功用も形狀も當然異なるべき筈はないのであるが、今現に鬱金は味が苦く、寒であり、色は赤く、主たる功用は馬の熱病だ。薑黃は味が辛く、溫であり、色は黃である。蒁は味が苦く、色は青い。三物同一ではないのだ。その功用もそれぞれ區別がある。

○大明曰く、海南に生ずるものは蓬莪蒁、江南に生ずるものは薑黃である。

○頌曰く、薑黃は現に江廣、蜀川に多くある。葉は青綠色で、長さ一二尺ばかり、廣さ三四寸、斜文がある。紅蕉葉のやうだが小さい。花は紅白色で中秋になると漸次に凋む。春の末にその花が先づ出て次に葉が生える。實は結ばない。根は色が黃で曲りくねり、生薑に類してゐるが圓くて節がある。八月に根を採り、切片して暴乾する。蜀地方ではこれで氣脹、及び產後の敗血が心を攻むるを治療してゐるが、甚だ效驗がある。蠻地の者はこれを生で噉り、『邪を除き惡を避ける』といつて

(薑黄)

ゐる。按ずるに、鬱金、薑黄、蒁薬の三物は相近いものだ。蘇恭は、その三物の相異點を明にし得ずして一物としたが、陳藏器は色と味とから三物を區別し、また『薑黄は三年の老薑から生ずるものだ』と斷定した。近年は(三)汴都で多く薑を栽培するので、往往薑黄が生じたといつて賣つてゐる。乃ちこれは老薑なのだ。市人は買つてこれを噉み『氣を治するに最良だ』といつてゐる。大方の中にも時にこれを用ゐる。又、廉薑なるものがあつて、やはりその類のものではあるが、しかし自ら一種獨立の植物だ。

時珍曰く、近頃では扁たくて乾薑の如きものを片子薑黄といひ、圓くて蟬の腹のやうな形のものを蟬肚鬱金といふ。いづれも水に浸して染色用に供し得る。蒁は形が鬱金に似てはゐるが色が黄でない。

根 (四)氣味 【辛く苦し、大寒にして毒なし】藏器曰く、辛味が少く、苦味が

(三) 汴都、即チ宋ノ國都、今ノ河南省開封ノ地ナリ。

(四) 木村(康)曰ク、薑黄ハ平均揮發油一%ヲ含ム。其有成分ナルクルクミンハ鮮黄赤色ヲ有シ、其含有量ハ〇・三三%ニ過ギズ、酒精及ビエーテルニハ輙ク溶解シ、其クロロフオルム及ビエーテル溶液ハ美麗ナル螢石彩ヲ呈ス。(生薬學)

多い。性は熱であつて冷ではない、大寒なりといふは誤りだ。

【主　治】【心腹の結積、(五)疰忤。氣を下し、血を破り、風熱を除き、癰腫を消す。功力は鬱金より烈しい】(唐本)【癥瘕、血塊を治し、月經を通じ、撲損の瘀血を治し、暴風痛、冷氣を止め、食物を落付かす】(大明)【邪を祛り、惡を辟け、氣脹、産後の敗血が心を攻るを治す】(蘇(六)頌)【(七)風痺臂痛を治す】(時珍)

【發　明】時珍曰く、薑黃、鬱金、蒁藥の三物は形狀も功用も皆相近いが、ただ鬱金は心に入り、血を治するもの、薑黃は更に兼ねて脾に入り、兼ねて氣を治し、蒁藥は肝に入り、兼ねて氣中の血を治するものだ。かやうに同じからざる點を有つてゐる。古方の五痺湯には片子薑黃を用ゐて風寒、濕氣の手臂痛を治す。戴原禮の要訣には『片子薑黃は能く手臂に入つて痛を治す』とある。そのものが兼ねて血中の氣を理することを認め得るわけだ。

【附　方】　舊二、新二。【耐へ難き心痛】薑黃一兩、(八)桂三兩を末にし、醋湯で一錢を服す。(經驗(九)方)【胎寒腹痛】甚しく啼いて乳を吐き、大便の色が青く、(一〇)驚搐の如き狀態で冷汁を出すには、薑黃一錢、沒藥、沒香、乳香二錢を末にして蜜で芡子

(五)疰忤ハニハカニ物ニ驚キ心痛スルヤマヒ。
(六)頌ハ大觀ニ從ツテ改ルモノ。
(七)風痺ハ中風ノ一種。
(八)大觀ニ桂下ニ穣ノ字アリ。
(九)大觀ニ方ノ上ニ後字アリ。
(一〇)驚搐ハヒキツケ。

大の丸にし、一丸づつを釣藤の煎湯に溶かして服す。（和濟方）【產後の血痛】塊があるものには、薑黃、桂心等分を末にし、酒で方寸匕を服すれば血が盡く下つて癒える。（昝殷產寶）【瘡癬の生じた初期】薑黃末を摻るが妙である。（千金翼）

（一）鬱金（唐本草）

和名　うこん
學名　Curcuma longa, L.
科名　しやうが科（蘘荷科）

【釋名】馬蒁　震亨曰く、鬱金は香がなく、性は輕揚で能く酒氣を高き遠き部分まで達せしむる作用がある。古人はこれを用ゐて鬱遏して升る能はざるものを治したものだ。恐らくこれに因つて命名したものであらう。

時珍曰く、酒に鬱鬯を和すといひ、昔の人はこれは（二）大秦國に產するもので鬱金花の香だといつてゐるが、しかし鄭樵の通志には『これは鬱金のことだが、大秦云云といふは、（三）三代の頃はまだ中國との交通がなかつたのだから、その大秦國の草があるわけはなかつたから』とある　羅願の爾雅翼にも『これはこの草の根を酒に和して金のやうに黃色にすることだ。それ故に之を黃流といふ』とある。その說はいづ

（一）牧野云フ、鬱金ノ花ハ秋ニナツテ葉心カラ出ヅル、故ニ此種ハ Curcuma 屬中ノ Mesantha 區ニ屬シ薑黃ノ Exantha 區ニ屬スルニ反スル。
木村（康）曰ク、支那市場ニ現ハルル鬱金ハ薑黃ト稱スルモノトハ全ク別物ニシテ外觀類白灰黃色ニシテ節ナク、紡錘形ニシテ且ツ前者ニ比シ甚ダ小形ナリ。
（二）大秦國、即チ東羅馬帝國ノ地ヲ指ス。鄭樵ハ三代ニ交通ナシト斷ズレドモ大秦國ノ稱ナシトイフヲ正シトスベク、必シモ交通サヘナカリシモノト斷ズルハ危險ナル速斷ニハ非ザルカ。

れも通ずる。この草は根の形狀は皆莪蒁に似たもので、馬の病を醫するに用ゐるから馬蒁と名けたのだ。

【集解】恭曰く、鬱金は蜀地、及び西戎に生ずる。苗は薑黄に似て、花は白く質は紅い。晩秋に莖心から發生するが、實はなく、根は黄赤色だ。（四）四畔の子根を取り皮を去つて火で乾し、馬の藥として用ゐれば血を破つて補する效果があるところから、胡人はこれを馬蒁といふ。嶺南のものは小（五）豆に似た實があるが、噉ふには堪へない。

頌曰く、今は廣南、江西の州郡にもあるが、蜀中のものの佳良なるには及ばない。四月の初に（六）薑に似た苗が生えることは蘇恭の說の通りである。

宗奭曰く、鬱金は香しいものではない。今一般に婦人の衣服を染めるに用ゐる。その染色は最も鮮明だが、日光に耐へぬものだ。（七）微かに鬱金の香氣がある。

時珍曰く、鬱金に二種あつて、鬱金香といふは花を用ゐるものだ。別に一條を揭げてある。ここにいふ鬱金は根を用ゐるものだ。苗は薑の如く、根の大さは指頭ほどで、長いものは一寸ばかりになる。形體は圓く、横の紋があつて蟬の腹のやうな

（三）三代ハ夏、商、周。
（四）四畔ハ塊莖ノ周圍ヲ云フ。
（五）大觀ニ豆下ニ蔻ノ字アリ。
（六）大觀ニ薑下ニ黄字アリ。
（七）大觀ニ微字上ニ染成衣則ノ四字アリ。

有様だ。外部が黄で内部は赤い。一般にこれを水に浸して染料として用ゐる。やはり微かに香氣もある。

根【氣味】【辛く苦し、寒にして毒なし】元素曰く、氣、味俱に厚い、純陰である。獨孤滔曰く、このものの灰は(八)砂子を凝結せしめ得るものだ。

(鬱金)

【主治】【(九)血積に氣を下す。肌を生じ、血を止め、惡血を破る。血淋、尿血、金瘡】(唐本)【單獨に用ゐれば婦人の宿血氣の心痛を治す。冷氣結聚には温醋で摋擦して之を傳ける。また(一〇)馬脹をも治す】(甄權)【心を涼す】(元素)【陽毒が胃に入つて下血し、頻りに痛むを治す】(李杲)【血氣の心腹痛、産後の敗血が衝心して死せんとし、失心顛狂するもの、蠱毒を治す】(時珍)

【發明】震亨曰く、鬱金は火と土とに屬し、又、水の性があり、その性は輕揚

(八)砂子ヲ結ブトハ水銀ヲカタメルコト。

(九)血積ハ子宮癥瘕。

(一〇)大觀ニハ亦啖馬藥用治脹痛ノ八字アリ。

(二)血腥詳ナラズ咯血ノコトナルカ。

であつて上行する。吐血、衄血、唾血、(二)血腥、及び經脈の逆行を治するには、いづれも鬱金末に韮汁、薑汁、童尿を加へて共に服するがよい。その血は自から清くなる。痰中に血を帶るものには、竹瀝を加へる。又、鼻血の上行するには、鬱金、韮汁を四物湯に加へて服す。

時珍曰く、鬱金は心、及び包絡に入つて血病を治するものだ。經驗方では、失心顚狂を治するに、眞鬱金七兩、明礬三兩の末を用ゐ、薄糊で梧子大の丸にして五十丸づつを白湯で服す。ある婦人の十年の長き顚狂患者が、ある異人にこの方を授かり、初服で心胸の間にあつた何物かが脱去し、精神が非常に爽かになり、再服で正氣が恢復した。この病は驚駭と憂悶とで痰血が心竅に絡聚するために發つたもので、鬱金は心に入つて惡血を去り、明礬は頑痰を化するものだから、この效果があつたのだ。龐安常の傷寒論には『斑豆瘡で始めて白泡が發し、それが忽ち搐して腹に入り、漸次に紫黑色となつて膿がなく、晝夜叫喚狂亂して苦しむには、鬱金一箇、甘草二錢半を水半盌で煮乾かし、甘草を去つて鬱金を片切し、焙じ研つて末にし、眞腦子を炒つて半錢を入れ、その藥一錢づつを新汲水に生豬血五七滴入れたもので

調へて服す。二服以上用ゐる必要はない。甚しき者は毒氣が癰などのやうに手、足の心から出て瘥える。右の容體は五死一生の證候といふものだ』とある。又、范石湖文集には『嶺南に挑生鬼なるものがある。人體に害を加へるので、人民は飲食物中に禁厭の法力を加へて鬼の力を退治する。この鬼につかれると、食つた魚肉が人の腹中で生き返つて樣樣の害を爲し、その人が死ねば更に陰にその一家の者について害をする。これにつかれると、初めは胸、腹に痛みを覺え、次の日は刺すやうに激痛し、それが十日經つと腹中で生返へるといふのである。そこで凡そ胸膈に痛を覺えるときには、直ちに升麻、或は膽礬を用ゐて吐かせ、若し膈下の痛みが急するときは、米湯で鬱金末二錢を調へて服すれば直ちに惡物を瀉出する。或は升麻、鬱金を合せて服すれば吐かぬときは下すものだ。李巽巖侍郎が雷州の(一二)推官に任ぜられて訟獄を司つてゐた折に、この方を得て人命を活かしたことが甚だ多い』と書いてある。

附方　舊三、新十。【失心顚狂】方は發明の項を見よ。【痘毒の心に入つたもの】方は發明の項を見よ。【(一三)厥心氣痛】忍び難きには、鬱金、附子、乾薑等分を

(一二)推官ハ司理ト同ジ裁判官。

(一三)厥ハ急卒ニ結滯障害スルコト。

末にし、醋糊で梧子大の丸にして硃砂を衣にかけ、三十丸づつを男子は酒で、婦人は醋で服す。(奇效方)【產後の心痛】血氣が上衝して死せんとするには、鬱金を燒いて性を存して末にし、二錢を米醋一口に呷れるほどの量で調へて灌げば甦る。(袖珍方)【自汗の止まぬもの】鬱金末を調へて就寢時に乳の上へ塗る。(集簡方)【衄血、吐血】鬱金を末にし、井水で二錢を服す。甚しきものは再服する。(黎居士易簡方)【陽毒下血】熱氣が胃に入つて忍び難く痛むには、鬱金の大なるもの五箇、牛黃を皂莢子一箇ほど、これを散にして醋漿水一盞づつで共に煎じ、三沸して溫服する。(孫用和祕寶方)【尿血の收まらぬもの】鬱金末一兩、葱白一握を水一盞で三合に煎じ、一日三回溫服する。(經驗方)【風痰の壅滯】鬱金一分、藜蘆十分を末にし、一字づつを溫漿水で調へて服し、同時に漿一盞で口漱ぎ、物を食つてこれを壓する(經驗方)【挑生蠱毒】方は發明の項を見よ。【砒霜の中毒】鬱金末二錢に蜜少量を入れて冷水で調へて服す。(事林廣記)【痔瘡腫痛】鬱金末を水で調へて塗れば消する。(醫方摘要)【耳中の痛み】鬱金末一錢を水で調へて耳中に入れ、急に傾けて取り出す。(聖濟總錄)

蓬莪茂

茂の音は述（ジユツ）である。（宋開寶）

和名　ほうがじゆつ、又、がじゆつ
學名　Kaempferia pandulata. Roxb.
科名　しやうが科（蘘科）

釋名 蒁藥

集解 ○志曰く、蓬莪茂は西戎、及び廣南の諸州に生ずる。葉は蘘荷に、子は（一）乾椹に似たもので、茂は根の下に並んで生え、一箇は好き性、一箇は惡き性を有ち、惡き性のものは有毒だ。（二）西の地方ではこれを取ると先づ羊に放つて與へ、羊が食はぬものは棄る。

○藏器曰く、一は蓬莪と名け色の黑いものである。二は蒁と名け黃色のものである。三は波殺と名け味甘くして大毒がある。

○大明曰く、これは南部地方の蘠蕒の根であつて、海南に生ずるものを蓬莪

（蓬莪茂）

（一）乾椹ハ乾キタル桑實。
（二）大觀ニハ西字下ニ戎ノ字アリ。

茂と名けるのである。

頌曰く、今は江、浙地方にも或は有る。田野の中に在るもので、三月苗を生じ、莖は錢ほどの太さで高さ二三尺、葉は青白色で長さ一二尺、廣さ五寸前後、頗る蘘荷に類してゐる。五月花が開く、その花は穗になり、黃色で頭は微し紫色だ。根は生薑のやうだが、茂はその根の下に附き、雞、鴨の卵のやうで大小一定せぬ。九月採收して粗皮を削り去り、蒸熟し暴乾して用ゐる。

根　修治　斆曰く、凡そこれを用ゐるには、砂盆の中で醋で磨り、全部を磨り盡してから火に近く置いて焙り乾かし、更らに之を篩つて用ゐる。頌曰く、この物は極めて堅硬で擣き碎けないものだが、用ゐる時に熱灰火の中で煨き、中まで熱し透らせて熱い間に擣けば粉のやうに碎ける　時珍曰く、今世間では多く醋で炒り、或は煮熟して藥に入れる　それは血分に引入する功力を利用するのだ。

氣味　【苦く辛し、溫にして毒なし】大明曰く、酒、醋と配合すれば良好の效果を擧げる。

主治　【心腹痛、中惡、疰忤、鬼氣、霍亂、冷氣で酸水を吐くもの。解毒。飲

(一) 大觀ニ結積ノ二字ナシ。

食物の不消化には酒で研つて服す。又、婦人の血氣、(一)結積、男子の奔豚を療ず】(開寶)【痃癖冷氣を破るには酒、醋で磨つて服す】(甄權)【一切の氣を治し、胃を開き、食物を消化し、月經を通じ、瘀血を消し、撲損痛、下血、及び內損の惡血を止める】(大明)【肝經の聚血を通ずる】(好古)

【發明】 頌曰く、蓬莪茂は古方には用ゐられなかつた。今は醫家が積聚、諸氣を治する最要藥として荊三稜と共に用ゐるが、結果がよい。婦人藥中にも多く使用する。

好古曰く、蓬莪茂は色黑く、氣中の血を破るものである。氣藥に入れると諸香の氣を發せしめる。泄瀉ではあるが、またよく氣を益するのだ。故に孫尚藥は呼吸短かくして續かぬものを治するに用ゐ、また大小七香丸、集香丸、諸種の湯藥、散藥に多くこれを用ゐる。また肝經の血分の藥である。

時珍曰く、鬱金は心に入つて專ら血分の病を治し、薑黃は脾に入つて兼ねて血中の氣を治し、蒁は肝に入つて氣中の血を治す。やや同じからぬ點が認められる。按ずるに、王執中の資生經に「執中は久しく心、脾疼を患ひ、醒脾藥を服すれば反つ

て服るのであつたが、耆域方所載の方で、蓬莪茂を麪で裹んで炮熟し、碎いて末にし、水と酒・醋とで煎服したところ立ろに癒えた』とある。蓋しこの藥は能く氣中の血を破るものである。

【附方】　舊二、新七。【一切の冷氣】心を搶き、切痛が發して死せんとするは、久しく心腹痛を患ふものの時に發する現象で、左の方を用ゐれば根絶する。蓬莪茂二兩を醋で煮、木香一兩を煨き、末にして半錢づつを淡醋湯で服す。(衞生家寶方)【小腸の(四)臟氣】不意に忍び難く痛むものである。蓬莪茂を研末し、空心に葱酒で一錢を服す。(楊子建護命方)【婦人の血氣】(五)遊走して痛を發し、また腰痛するには、蓬莪茂、乾漆二兩を末にし、酒で二錢を服す。腰痛には核桃酒で服す。(普濟方)【小兒の盤腸】內に釣つて痛むには、莪茂半兩を、阿魏一錢を化した水に一晝夜浸して焙じ研り、一字づつを紫蘇湯で服す。(保幼大全)【小兒の氣痛】蓬莪茂を炮き(六)熟して末にし、熱酒で一大錢を服す。(十全博救方)【上氣喘急】蓬莪茂五錢を酒一盞半で八分に煎じて服す。(保生方)【氣短くして接續せぬもの】正元散――氣の接續せぬものを治し、兼ねて滑泄、及び小便頻數を治す。王丞相がこれを服して效驗を得た。蓬莪茂一兩、金

(四) 臟氣ハ臟毒カ、臟毒ハ卽腸出血。
(五) 遊走ハ痛ガ移動スルコト。
(六) 大觀ニ熱ヲ熱ニ作ル。

鎖子を核を去つて一兩を末にし、蓬砂一錢を入れて煉つて研細し、二錢づつを溫酒、或は鹽湯で空心に服す。(孫用和秘寶方)【初生兒の吐乳】吐いて止まぬには、蓬莪茂少量、鹽を綠豆一箇ほどの量を乳一合で煎じ、三五沸して滓を去り、牛黃を粟二粒ほど入れて服するが甚だ效がある。(保幼大全)【渾身の(七)燎泡】方は荊三稜の條を見よ。

(一)荊三稜(宋開寶)

和名 うきやがら
學名 Scirpus maritimus, L.
科名 かやつりぐさ科(莎草科)

【校正】開寶の草三稜を併せ入る。

【釋名】京三稜(開寶)草三稜(開寶)雞爪三稜(開寶)黑三稜(圖經)石三稜

頌曰く、三稜とはその草に三稜があるからで、(二)荊楚の地方に生ずるので、その地名を以て荊三稜と呼んだのだ。開寶本草に京と書いてあるのは誤だ。又、草三稜なる一條項を獨立に掲げて『卽ち雞爪三稜である。蜀地に生じ、二月、八月に採收する』とあるが、その實際は一類のものである。形態に依つて名けたに過ぎない。故にここに併せ掲げる。

(七)燎泡ハ大水泡疹。

(一)牧野云フ、荊三稜モ亦みくりノ名ガアルガサレバSparganium屬ノみくりト同名異物デアル、此Sparganiumノみくりノ中おほみくり(S. macrocarpum, Makino.)ト稱スルモノニハ其地下莖塊圓形ヲナス、支那デ三稜ト稱スルモノノ中ニハコンナモノモ多分ザウ唱ヘラレテ居ル場合モアラウト思フ。

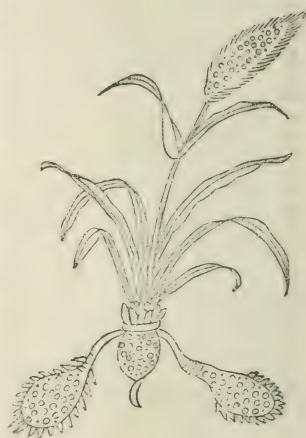
(二)木村(康)曰ク、荊三稜ニハ一般ニうきやがら・充ツルモノナレドモ、商品ニハうきやがらノ根莖トハ

異種ノ構造ヲ有スルモノヲ見ル、未ダ原植物ヲ詳ニセズ。
(二)荊楚ハ石部石炭ノ楚ノ註參照。
(三)荊襄ハ貫衆ノ註ヲ見ヨ。

【集解】藏器曰く、三稜は總てをいへば三四種ある。京三稜は黄色で體が重く、形狀は鯽魚のやうで小さい。又、黑三稜といふがある。それは形狀が烏梅のやうで稍大きく、體が輕くして鬚があり、相連つて蔓延し、漆のやうな色である。蜀地方で織つて器にし、一名萋と呼ぶものがこの物だ。治病の功用はいづれも同一である。

頌曰く、京三稜は舊本にはそのものの産地を記載してないが、今は荊襄、江淮、濟南、河陝の地方にいづれもある。多くは淺い水の近傍や陂澤に生ずるもので、春苗が生え、葉は莎草に似て極めて長く、高さは三四尺ある。又、茭蒲葉に似て三稜があり、五六月に莖が抽き出て高さ四五尺、太さは人の指ほど、削つたやうな三稜になつてゐて、莖の端に花を開く、その花の大體は莎草のやうで大きく、黄紫色である。苗の下部が魁で、その成る初めには附子の大さほどの塊になり、或は扁なものもある。その旁に横に貫く根が一本あつて數箇の魁を連ね、その魁上にも苗が生える。その魁は皆扁長で小鯽魚の如く、體の重いものだ。これが三稜である。又、その根の末端の將に盡んとするところに附いた一魁の、まだ苗を芽ぐまぬ小さい圓い烏梅のやうなものは黑三稜である。又、根の端が鉤のやうに曲つて爪のやうなも

のは雞爪三稜である。いづれも皮が黒く肌が白く、至つて輕いものである。或は苗が生えずにただ細根を生ずるものを雞爪三稜といひ、又、細根を生ぜぬものを黒三稜といひ、大小一定せず、その色が黒く、皮を去れば

（京三稜）

白いものだともいふ。以上の三種のものは本來は同一種だが、ただその力に剛柔の差があり、それぞれその適當なるところに應用するのであつて、名稱の相異はその形態に因つて別れたものである。烏頭と烏喙、雲母と雲(四)苗などと同樣本來兩種のものでない。今世間には何等の識別もなく烏芘、香附子をこのものと思つてゐる向もある。又、(五)河中府に石三稜なるものがある。これは根が黄白色で形は釵股の如く、葉は綠色で蒲のやう、苗の高さ一尺ほどのものだ。この(六)葉上にも三稜がある。四月花を開く、その花は白色で(七)蓼漢花のやうだ。五月根を採る。これも積氣

(四) 苗大觀ニ華ニ作ル。
(五) 河中府ハ石晶石中藥子ノ註ヲ見ヨ。
(六) 葉上ノ二字大觀ニヨツテ補入ス。
(七) 大觀ニ紅蓼ニ作ル。

を消するものである。今一般に用ゐる三稜は皆（八）淮南の紅蒲の根である。（九）秦州にも三稜と稱するものが就中多くあるが、これは體が至つて堅く重いもので、魚の形に彫刻してある。その葉は扁形で莖が圓く、毫も三稜になつてゐない。何を根據に三稜なる名を命けたものか判らない。名醫大家と稱する人達でもやはりそれを謬と思はず、一般にそれが慣習となつて了つてゐる。根を用ゐるものはその苗の如何なるものかを識らず、またその藥を採る者は何の功用のあるものかを考究せず、需要者も供給者も共に實際を失つてゐるのだから、その謬なるや否やを知りやう筈もないわけだ。しかし、今玆にいふ三稜は皆（一〇）二本の根が旁に引き延びるもので、直下に延びる根ではなく、その形の大體が多くは鯽魚のやうなものをいふのである。

時珍曰く、三稜は多くは荒廢した池の堤や濕地に生え、春期に叢生するものだ。夏、秋に高い莖が抽き出で、莖の端にまた數枚の葉が生え、六七枚の花を開く。花は皆細碎で穗になり、黄紫色でその中に細かい子がある。その葉、莖、花、實共に三稜があつて、いづれも香附の苗、葉、花、實と一樣であるが、ただ三稜そのものは長大なだけの相違である。その莖は滑かで光があり、三稜で椶の葉柄のやうであ

（八）淮南ハ赤箭天麻ノ淮南路ノ註參照。
（九）秦州ハ石部水銀ノ註ヲ見ヨ。
（一〇）二字大觀ニヨル。

（二）白穰ハ髓實。

る。その莖の中には（二）白穰があつて、これを剖いて物を織ると柔靱で藤のやうだ。呂忱の字林に『䔧草は水中に生ずるもので、その根は器物のへりを取るによい』とあるが、それはこの草の莖のことで根ではない。抱朴子に『䔧根は鱓に化す』といつ

（石　三　稜）

てあるが、これもやはりこの草のことで、その根に黄黑の鬚が多く、その鬚皮を削り取れば形が鯽のやうな形になるからである。本來根が鯽に似てゐるわけではない。

根　修治　元素曰く、藥に入れ用ゐるには炮き熟して用うべきものだ。時珍曰く、積を消するには醋に一日浸して炒つて用ゐ、或は煮熟し焙乾して藥に入れるが良いのである。

氣味　【苦し、平にして毒なし】藏器曰く、甘し、平にして溫である。大明曰く、甘く濇い、涼である。元素曰く、苦く甘し、毒なし。陰中の陽であつて、よく眞氣を瀉するものだ。眞氣の虛するものには用ゐられない。

【主治】【老癖癥瘕、積聚結塊、産後の惡血、血結。月經を通じ、胎を墮し、痛を止め、氣を利す】(開寶)【氣脹を治し、積氣を破り、撲損の瘀血を消す。婦人の血脈不調、心腹痛、産後の腹痛、血運】(大明)【心膈痛、飲食物の不消化】(元素)【肝經の積血を通じ、瘡癧の堅硬なるを治す】(好古)【乳汁を下す】(時珍)

【發明】好古曰く、三稜は色白く、金に屬し、血中の氣を破る。肝經の血分の藥である。三稜、莪茂が積塊や瘡の硬きものを治するのは、堅いものを削ると同じ關係である。

志曰く、俗間の傳説に、昔、ある人が(一三)癥癖を患つて死んだ時、遺言に依り、その腹を切開して病塊を取り出した。それは石のやうに硬く乾いて五色の文理のあるものだつたので、大いに不思議なものとして、削つて刀の柄に仕立て上げた。その後、たまたまその刀で三稜を刈つたところ、柄は忽ちに溶けて水になつた。そこでこの藥が癥癖の治療に有效だといふことが判つたのだといふ話がある。

時珍曰く、三稜は能く氣を破り結を散ずるものだから、諸病を治する功力は香附に近いのであるが、その力が鋭いので久しく服するわけに行かない。按ずるに、戴

(一三)癥癖ハ腹中ニ結塊ヲ生ズルヲ云フ。

(一三)大觀ニ根ヲ草ニ作ル。
(一四)大觀ニ三ヲ一ニ作ル。
(一五)大觀ニ外臺祕要ニ作ル。

原禮の證治要訣に『ある癥癖腹脹の患者に三稜、莪茂を酒で煨き煎じて服せると、一箇の魚のやうな黒物を下して癒えた』とある。

附方　書三、新五。【癥瘕鼓脹】三稜煎――三稜の(一三)根を切つて一石を水五石で(一四)三石に煮て滓を去り、更にそれを三斗に煎じ、その汁を鍋に入れ重湯で稠糖のやうに煎じて密器に取收め、一日二回、毎朝一匕づつ服す。(一五)(千金翼方)【痃癖氣塊】草三稜、荊三稜、石三稜、青橘皮、陳橘皮、木香各半兩、肉豆蔲、檳榔各一兩、硇砂二錢を末にして糊で梧子大の丸にし、薑湯で三十丸づつを服す。(奇效方)【痃癖の痿えぬもの】脇下が石の如く硬きには、京三稜一兩を炮き、川大黄一兩を末にし、醋で熬膏して毎日空心に生薑、橘皮湯で一匙を服し、利下するを度とする。(聖惠方)【小兒の氣癖】三稜の煮汁で羹、粥を作り、毎日その母親に食はせ、同時に棗ほどの量をその病兒に與へて食はせる。初生百日以後十歳以内の小兒には、癇熱、痃癖等を問はず、その病を理する祕妙の藥である。その大效は一一枚擧に遑ない。(子母祕錄)【痞氣胸滿】口乾き、肌瘦せ、食減じ、時に壯熱するには、石三稜、京三稜、雞爪三稜をいづれも炮き、蓬莪茂三箇、檳榔一箇、青橘皮五十片を醋に浸して

白を去り、陳倉米一合を醋に浸して淘り、巴豆五十箇を皮を去つてその青橘皮、陳倉米と共に炒り乾してから豆を去り、嚢の諸藥と共に末にし、糊で綠豆大の丸にし、一日一回、米飲で三丸づつを服す。（聖濟總錄）【反胃惡心】藥も食物も通らぬには、京三稜を炮いて一兩半、丁香三分を末にし、一錢づつを沸湯に點てて服す。（聖濟總錄）【乳汁不下】京三稜三箇を水二盌で一盌に煎じ、その汁で乳を洗ふ。乳汁の出るを度とする。極めて妙である。（外臺祕要）【全身の燎炮】棠梨のやうな形にふき出てその箇箇に水を出し、一片の石のやうな指甲大のものがあつてその泡を出せばまた生じ、一一抽き取れば全身の肌膚や肉を抽き盡さねばならぬ。かやうになれば容易に治すべからざるものである。荊三稜、蓬莪茂各五兩を末にして三服に分け、酒で調へて續服すれば癒える。（危氏得效方）

莎草香附子　（別錄中品）

和名　はますげ
學名　Cyperus rotundus, L.
科名　かやつりぐさ科（莎草科）

【釋名】雀頭香（唐本）　草附子（圖經）　水香稜（圖經）　水巴戟（圖經）　水莎（圖

經） 侯莎（爾雅） 莎結（圖經） 夫須（別錄） 續根草（圖經） 地藾根（綱目） 地毛（廣雅） 時珍曰く、別錄にはただ莎草とあるだけで苗を用ゐるとも根を用ゐるともいつてない。後世では皆香附子といふ名でその根を用ゐてゐるのだが、莎草なる名のあることは知つてゐない。その草は笠や雨衣（ミノ）を作るによく、跡にして沾はぬものだ。故にその文字は草冠に沙の字を書くのであつて、また蓑の字にも書く、それは雨衣に作つて綾（ヒモ）を垂れた形狀が、親の喪中の者が著る衰（サイ）衣の形狀に似てゐるところから、草冠に衰の字を書いたのだ。爾雅に『薃（音は浩「カウ」である）は侯莎なり、其の實（ミ）は（一）緹（音はテイ）なりとある』がこれである。又『（二）薹は夫須なり』とあるもそれだ。薹とは笠のことで、賤夫の用ゐるものの名である。その根は互に連續して附いて生ずる、香に合はせ得るものだから香附子といふ。上古にはこれを雀頭香と

（莎草香附子）

（一）爾雅ニ媞ニ作ル。
（二）薹、爾雅ニハ臺ニ作ル。

いつた。按ずるに、江表傳に『魏の文帝は使を吳に遣して雀頭香を求めた』とあるはこの草のことだ。その葉は三稜や巴戟に似て下濕の地に生ずるものだから、水三稜、水巴戟などの名がある。世間俗に雷公頭と呼んでゐる。金光明經には。(三)月萃哆といひ、記事珠には抱靈居士といつてある。

集解　別錄に曰く、莎草は田野に生ずる。二月、八月に採取する。弘景曰く、醫方の藥には一向用ゐないが、古人の作つた詩に多くこの名を使つてある。けれどもこれを識る者はない。鼠(四)莎なるものもあるが、治病上の功用はこの物とは異ふ。

恭曰く、この草の根を香附子、一名雀頭香といふ。所在にあるもので、莖、葉すべて三稜に似てゐる。香を合和するにこれを用ゐる。

頌曰く、今は諸處にある。苗、葉は薤のやうで瘦せ、根は筯頭位の太さのものだ。謹んで按ずるに、唐の玄宗の天寶單方圖に載せた水香稜なるものが、功力、形狀ともにこの物と相類する。單方圖には『水香稜はもと(五)博平郡の池澤中に生じ、苗を香稜と名け、根を莎結と名け、また草附子とも名ける。河南、及び淮南では下濕の土地に生えたものを水莎と名け、隴西ではこれを地藾根といひ、蜀郡では續根

(三) 本書ニ目萃哆ニ作ル。

(四) 大觀ニ莎ヲ蓑ニ作ル。

(五) 博平郡ハ唐ニ置キ金ニ廢ス。今ノ山東省聊城縣ニ治ス。博平縣ハ漢ニ置キ今ナホ縣名ヲ稱ス。今ハ山東省東臨道ニ屬ス。

（六）涪都ハ今ノ四川省涪陵縣。

（七）皸ハアガギレ、皸皮ワレメノアルカハ、此皸字大觀ニハ皹ニ作ル。

（八）劍脊稜トハ刀劍ノシノギノ如キ中肋アルヲ云フ。

草と名け、また水巴戟とも名ける』とある。今は（六）涪都に最も豐富に生じ、三稜草と名けて莖を用ゐて鞋履を作る。所在いづれにもあるもので、苗、及び花、根を採つて瘵病の藥に用ゐる。

宗奭曰く、香附子は今一般に多く用ゐてゐる。莎草の根に生ずるものではあるが、その根にはこの物があるものもあり無いものもある。薄い（七）皸皮があつて紫黑色だ。毛が多くはない。皮を刮り去れば色が白いものだ。根そのものがこの藥物だと思ふのは誤りである。

時珍曰く、莎の葉は老韮葉のやうで硬く、光澤があり、（八）劍脊稜がある。五六月中に一本の莖が抽き出て、その莖には三稜があり、中は空である。莖の端にまた數枚の葉が出る。花の色は青くして黍のやうな穗になり、その中に細子がある。根には鬚があつて、その鬚の下に子を一二箇結ぶ。それが次次と延びて生ずるので、その子の上には細い黑毛があり、大なるものは羊棗ほどあつて、兩頭が尖つてゐる。採取して焚火の焰に爨し、毛を燒き去つて暴乾して賣り出すものが、乃ち近來常に用ゐられてゐる要藥そのものだ。然るに陶氏はこれを識らず、諸種の本草の註にも

このことが詳說されてない。これに就いて思ふのであるが、古と今とではかやうに藥物にも興廢變遷があつて、同じものそのままに何時の時代にも永續して用ゐられるとは限らないのである。されば本草の諸藥も、現在にはよくそのものが識られて居らぬからといつて、それを廢棄して採用せぬといふは宜しくないことだ。安んぞ知らん、他日それがこの香附のやうに要藥と認められる時が來ぬものとは限らぬのである。

根　修治　斅曰く、凡そこれを採取したならば、陰乾して石臼の中に入れて搗く。絕對に鐵器に觸れてはならぬ。時珍曰く、凡そこれを採るには苗のまま採つて暴乾し、火で苗と毛を燎き去り、服用するに臨んで水で洗ひ淨め、石上で磨つて皮を去り、童尿を浸透して晒し搗いて用ゐる。或は生で、或は炒り、或は酒、醋、鹽水に浸す。それ等諸種の方法は、それを用ゐんとするそれぞれの處方に從ふべきものだから、詳細は下項に揭げる。又、稻草でこれを煮れば苦味がなくなる。

(九)氣味　【甘し、微寒にして毒なし】　宗奭曰く、苦し。頌曰く、天寶單方には『辛し、微寒にして毒なし、性は濇る』とある。元素曰く、甘く苦し、微寒なり。

(九) 木村(康)曰ク、香附子ハ〇・七％内外ノ精油ヲ含有シ、ソノ主成分ハ一種ノセスキテルペン第三級アルコホル及少量ノ炭化水素等ナリ。文獻 B. S. Rao, P. B. Panicker and T. T. Sudborough; J. Indian Inst Sci; 8. A(1925),39. 藥誌五二七(大、一五)七四。

氣は味よりも厚い。陽中の陰であつて、血中の氣の藥である。時珍曰く、辛く微し苦く甘し、平である。足の厥陰、手の少陽の藥であつて、能く兼ねて十二經、八脈の氣分に行る。童尿、醋、芎藭、蒼朮と配合すれば良好の成績を擧げる。

主治 【胸中の熱を除き、皮毛を充たす。久しく服すれば人をして氣を益し、鬚眉を長ぜしめる】（別錄）【心腹中の客熱が膀胱の邊から脇下に連つて(一〇)氣が妨げ、平常憂鬱で心忪、少氣のものを治す】（蘇頌）【一切の氣、霍亂吐瀉で腹痛するもの、腎氣、膀胱の冷氣を治す】（李杲）【時氣寒疫を散じ、三焦を利し、(一一)六鬱を解し、飲食物の積聚、痰飲、痞滿、胕腫、腹脹、脚氣を消し、心腹、肢體、頭、目、齒、耳の諸痛、癰疽、瘡瘍、吐血、下血、尿血、婦人の崩漏、帶下、月經不順、產前、產後のあらゆる病を止める】（時珍）

苗、及び花 主治 【男子の心、肺中の虛風、及び客熱で(一二)膀胱から脅下に連つて折折氣妨があり、皮膚が瘙痒し、(一三)癮疹し、飲食が少く、日毎に漸次に瘦せ衰へ、平常憂鬱で心忪、少氣する等の病證には、いづれも苗、花二十餘斤を採つて細かに剉み、水二石五斗で一石五斗に煮取つて桶の中に入れ、身體を淺し浴して汗

(一〇)大觀ニ氣上ニ肺ノ字アリ。
(一一)六鬱ハ氣鬱、濕鬱、熱鬱、痰鬱、血鬱、食鬱、是ナリ。
(一二)大觀ニ脅下ニ間ノ字アリ。
(一三)癮疹ハ細カキフキデモノ。

を出す。五六回試みればその癮疹が止まる。四季を通じて常に用ゐれば永く癮疹風を除く】（天寶單方圖）【煎飲にして用ゐれば氣鬱を散じ、胸膈を利し、痰熱を降す】（時珍）

【發明】好古曰く、香附は膀胱、兩脇の氣妨、心忪少氣を治す。これは能く氣を益すものであつて血中の氣の藥である。本草には崩漏を治することに言及してないが、方中に用ゐて崩漏を治す。これはよく氣を益して血を止めるものだからである。又、よく瘀血を驅逐し去るか、それは陳きものを排出する力があるからであつて、宛も巴豆が大便不通を治し、また泄瀉を止めると同一意味である。又曰く、香附は陽中の陰であり、血中の氣の藥であつて、凡そ氣鬱血氣には必ずこれを用ゐる。黑く炒つたものは能く血を止め、崩漏を治するもので、これは婦人病の仙藥であるが、多く服すればやはり能く氣を走らすものだ。

震亨曰く、香附は童尿に浸して用ゐるがよいのであつて、よく總ての諸鬱を解するものである。凡そ血氣には必用の藥であつて、氣分の全部に行き渡つて血を生ずる。これは正に陰が生ずれば陽長ずるの關係に在るのである。本草にはこの物の補に關する說はないが、しかし方家では老人に益ありといふ、やはりその間に補なる

意味が含まれゐるわけだ。蓋し行るといふ作用の中には補なる作用が含まれるので、天の天たる所以は、健にして不斷の力あるものであり、それが健なる力の運行が息まざるものが無窮の生生となつて現はれる原理なのである。この物も行き渡る卽ち行の中に補がある點が同じやうな關係に在るわけなのだ。今は香の中にもやはり用ゐる。

時珍曰く、香附の氣は平であつて寒ではない。香しくしてよく物にしみこもる。その味は辛が多くして能く散じ、微し苦くして能く降り、微し甘くして能く和す。乃ち足の厥陰の肝、手の少陽の三焦の氣分の主藥であつて、兼ねて十二經の氣分に通ずる。生のものは胸膈に上行して外は皮膚に達し、熟せるものは下に肝、腎に走つて外は腰、足に徹し、黑く炒つたものは血を止め、童尿に浸して炒つたものは血分に入つて虛を補し、鹽水に浸して炒つたものは血分に入つて燥を潤ほし、青鹽で炒つたものは腎氣を補し、酒に浸して炒つたものは經絡に行り、醋に浸して炒つたものは積聚を消し、薑汁で沙つたものは痰飮を化し、參、朮と配合すれば氣を補し、歸、芐と配合すれば血を補し、木香と配合すれば滯を流し、中を和し、檀香と配合

すれば氣を理し、脾を醒し、沈香と配合すれば諸氣を升降し、芎藭、蒼朮と配合すれば總て諸鬱を解し、卮子、黄連と配合すれば能く火熱を降し、伏神と配合すれば交〻心、腎を濟ひ、茴香、破故紙と配合すれば氣を引いて元に歸し、厚朴、半夏と配合すれば壅を決し、脹を消し、紫蘇、葱白と配合すれば邪氣を解散し、三稜、莪茂と配合すれば積塊を消磨し、艾葉と配合すれば血氣を治し、子宮を暖める。乃ち氣病の總司、婦人科の主帥である。飛霞子韓丞は『香附は能く新陳代謝を盛ならしめるものである。故に諸書に皆氣を盛すといふのであるが、俗に耗氣の說なるものがあつて、婦人にはよいが男子にはよくないといふものがあるが、それは誤だ。蓋し婦人は血を以て事を用ゐるので、それに氣が行れば疾がないのである。老人は精が枯れ血が閉ぢてただ氣のみで活力を維持するのだが、小兒は氣が月に日に充實するから形體が日に日に固くなるのであつて、大凡そ病に罹れば氣が滯つて餒へ弱る。故にそれに對し香附は氣分に於て君藥となる。世間ではその理を知るものが稀だ。參、芪を臣とし、甘草を佐として用ゐれば虛怯を治する效力が甚だ速かなものである。予が道士としての生活中、百病を治する黄鶴丹、婦人を治する靑囊丸を少しづつ

所持してゐて、病者に遇ふ毎に適宜に引藥を用ゐて試るに、やや效驗があつたので、世人は頻にその藥を慾しがるが、用ゐた人達は法外にある意義を酌んでもらひたい。黃鶴丹は銖衣翁が黃鶴樓にゐた頃授けられた方だからかく名けたので。その方は、香附一斤、黃連半斤を用ゐ、洗ひ晒して末にし、水糊で梧子大の丸にし、例へば外感の病には葱薑湯で服し、內傷には米飲で服し、氣病には木香湯で服し、血病には酒で服し、痰病には薑湯で服し、火病には白湯で服す。その他それぞれ類推して適當なものを用ゐる。靑囊丸は邵應節眞人が母の病を禱つて感應し、方士から授けられたものであつて、その方は、香附を少し炒つて一斤、烏藥を少し炮いて五兩三錢を末にし、水醋で煮た麪糊で丸にし、それぞれの病證に隨つて引藥を用ゐ、頭痛には茶で服し、痰氣には薑湯で服す。血病には酒で服するが妙である』といつてある。

【附方】 舊一、新四十七。【服食法】頌曰く、唐の玄宗の天寶單方圖に『水香稜は根を莎結と名け、また草附子と名ける——これ等の說は已に前に揭げた——その味は辛く、微寒にして毒なし。凡そ男子の心中に客熱があり、膀胱の邊から脇下に連

つて氣妨し、平常憂鬱で晴やかならず、心忪、少氣するには、根を二大升取つて（一四）擣き、香ばしく熬つて生絹の袋に入れ、無灰淸酒三斗の中に浸して貯へる。春の三月以後は一日浸せば服し得るやうになり、冬の十月以後は七日浸して暖かき場所へ置けば佳くなる。一晝夜に三四回、一盞づつ空腹に溫めて飮み、常にその酒氣を繼續し、反應を覺ゆるを度とする。若し酒を飮めぬ患者ならば、根十兩に桂心五兩、蕪荑三兩を加へ和して散に搗き、蜜で丸に和して一千杵擣いてから梧子大の丸にし、一日二回、每に空腹にして酒、及び薑蜜の湯、飮、汁等で二十丸づつを服し、漸次（一五）二十丸まで增加し、瘥えるを以て度とする。【交感丹】凡そ人が中年にして精耗し神衰へるは、蓋し心血が缺乏して火が下降せず、腎氣が疲憊して水が上升せぬためであつて、心と腎との關係が隔絕し、營衞が調和せず、上には驚き易くなつて現はれ、中には痞塞して飮食物が落付かず、下には虛冷遺精となつて現はれるのである。これに對して愚昧なる醫師は、徒らに下部の機關に對してのみ激烈なる補劑を用ゐることだけを心得てゐるが、それではただ水を生じ陰を滋することが出來ぬのみならず、反つてその患者を衰耗憔悴させて了ふ。しかしこの方さへ半年間服して

（一四）大觀ニ擣チ切ニ作ル。

（一五）二字大觀ニ三ニ作ル。

一切の(一六)暖藥を屏ぞけ、性慾の行使を絕ち、然る後に(一七)祕固泝流の術を常に行へば、述べ盡すべからざる效果が充分に顯はれる。兪通奉は、年五十一の時鐵甕城の申先生に遇つてこの方を授り、これを服用して老て猶ほ少年の如く、八十五に達して世を辭したのであつた。此の機會にこの方を一般に公開することとする、願くはいづれもこれに依つて最長の壽命に達せられんことを囑望に堪へない。香附子一斤を新水に一夜浸し、石上で毛を擦り去つて黃に炒り、伏神を(一八)皮木を去つて四兩と末にして煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを夜の明放れんとする時刻に細かに嚼んで降氣湯で服する。降氣湯とは、香附子を上記の法の如く修治して半兩、伏神二兩、炙甘草一兩半を末にして沸湯に點てたものをいふ。それで前の藥を服するのである。(薩謙齋瑞竹堂經驗方)【一品丸】氣熱が上攻して頭、目が昏眩するものを治し、また偏、正頭痛を治す。大香附子を皮を去り、水で一時煮て搗き晒し、焙じて研末して煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを水一盞で八分に煎じて服す。婦人は醋湯で煎じる。(奇效良方)【諸氣を升降する】一切の氣病、痞脹、喘噦、噫酸、煩悶、虛痛、走注を治す。常に服すれば胃を開き、痰を消し、壅を散じ、食思を進める。朝早く

(一六)暖藥ハ補藥。
(一七)祕固泝流ハ下剤ヲ與フルコト。
(一八)皮木トハ茯神ノ中心ニアル松根ト茯苓ノ外皮トヲ云フ。

旅立つ時、登山の際には就中これを服するがよい。邪を去り、瘴を辟ける。香附子を炒つて四百兩、沈香十八兩、縮砂仁四十八兩、炙甘草百二十兩を末にし、一錢づつを鹽少量を入れた白湯に點てて服す。（和劑局方）【一切の氣疾】心、腹の脹滿、噎塞、噫氣、呑酸、痰逆、嘔惡、及び宿醉の解せぬものには、香附子一斤、縮砂仁八兩、甘草を炙いて四兩を末にし、白湯に鹽を入れたもので點てて服す。粗き末にして煎服するもよし。これを快氣湯と名ける。（和劑局方）【調中快氣】心腹刺痛には、小烏沈湯――香附子を毛を擦つて去り焙じて二十兩、烏藥十兩、甘草を炒つて一兩を末にし、二錢づつを鹽湯で隨時に點てて服す。（和劑局方）【心、脾の氣痛】白飛霞の方外奇方では、凡そ（一九）胸膛の軟い一部分の痛むは、多くは氣、及び寒が原因で起る。或はために一命を損することがある。また母から子に遺傳することもある。これを俗に心氣痛と考へてゐるが、それは誤りだ。これは胃脘に滯があるので、これにはただ獨步散を服すれば治すること甚だ妙である。香附を米醋に浸して略ぼ炒つて末にし、高良薑を酒で七回洗つて略ぼ炒つて末にし、共に各別に封じて取り收め、寒が原因のものには薑二錢、附一錢、氣が原因のものには附二錢、薑一錢、氣と寒とが

（一九）膛ハ音湯肥エタル貌。

（二〇）元臟ハ腎臟。

（二一）金陵本子ト共ニ作ル、艾恐クハ皮ノ誤。

（二二）研字金陵本ニ據ル。

同時に原因となつたものには各等分の割合で和勻し、熱米湯に薑汁一匙、鹽一捻りを入れて調へ服すれば立ろに止まり、七八回を過ぎずして根絶する。○王璆の百一方には『內翰吳幵の夫人は心痛で死せんとしたが、この方を服して癒えた』とある。○類編には『梁混は心、脾痛で數年癒えず、穢跡佛に願を掛けて夢にこの方を傳授され、一服で癒えた。因つてこれを神授一匕散と名けた』とある。【心腹諸痛】艾附丸——男女の心氣痛、腹痛、小腹痛、血氣痛の忍ぶべからざるを治す。香附子三兩、蘄艾葉半兩を共に醋湯で煮熟し、艾を去り香附を炒つて末にし、米醋糊で梧子大の丸にして五十丸づつを白湯で服す。（集簡方）【停痰、宿飮】風氣が上攻して胸膈不利なるには、香附、皂莢を水に浸し、半夏と各一兩、白礬末半兩を薑汁麪糊で梧子大の丸にし、三四十丸づつを隨時に薑湯で服す。（仁存方）【（二〇）元臟腹冷】また胃を開く。香附子を炒つて末にし、二錢づつを薑、鹽と共に煎じて服す。（普濟方）【酒腫、虛腫】香附（二一）子を皮を去り、米醋で煮乾し焙じて（二二）研末し、米醋糊で丸にして服す。久しくして敗水が小便と共に排出して神效がある。（經驗方）【氣虛の浮腫】香附子一斤を童尿に三日浸して焙じ、末にして糊で丸にし、一日二回、四五十丸づつ

を米飲で服す。（丹溪心法）【老人、小兒の痃癖】往來疼痛するには、香附、南星等分を末にし、薑汁糊で梧子大の丸にして二三十丸づつを薑湯で服す。（聖惠）【㿗疝の脹痛】及び（二三）小腸氣には、香附末二錢を海藻一錢を煎じた酒で調へて空心に服し、并に海藻を食ふ。（瀕湖集簡方）【腰痛に牙に指る】香附子五兩を生薑二兩から取つた自然汁に一夜浸し、黃に炒つて末にし、青鹽二錢を入れて數回牙に擦れば痛が止まる。（乾坤生意）【（二四）血氣刺痛】香附子を炒つて一兩、荔枝核を燒いて性を存して五錢を末にし、二錢づつを米飲で調へて服す。（婦人良方）【婦人の諸病】瑞竹堂方の四制香附丸——既婚、未婚婦人の月經不順に諸病を兼るを治す。大香附子を毛を擦り去つて一斤を四分し、四兩を醇酒に浸し、四兩を鹽水に浸し、四兩を童尿に浸し、各〻春は三日、秋は五日、夏は一日、冬は七日置き、淘つて洗ひ淨めて晒乾し、搗き爛らし微し焙じて末にし、醋で煮た粫糊で梧子大の丸にし、七十丸づつを酒で服す。瘦せた人には澤蘭、赤茯苓末二兩を加へ、氣虛には（二五）四君子料を加へ、血虛には（二六）四物料を加へる。○法生堂方の煮附濟陰丸——婦人の月經不順で久くして癥瘕となりたるもの、一切の風氣を治す。香附子一斤を四分し、童尿、鹽水、酒、醋で各四兩

（二三）小腸氣ハ疝氣。

（二四）血氣ハ血疹即疝氣ノコトナラン。

（二五）四君子ハ人參、白朮、茯苓、甘草。

（二六）四物ハ當歸、川芎、芍藥、熟地黃。

(二七)心怔乏力ハ胸サワギシテ氣力ナキモノ

づつを三日間浸し、艾葉一斤を漿水に浸し、醋糊で和して餅にして晒乾し、晩蠶砂半斤を炒り、茯苓四兩を酒に浸し、當歸四兩を酒に浸し、各焙じて末にし、これを醋糊で梧子大の丸にし、一日二回、七十丸づつを米飲で服す。○醋附丸――婦人、處女一切の月經不順、血氣刺痛、腹脇膨脹、(二七)心怔乏力、顔色痿黄、頭運惡心、崩漏滯下、便血、癥瘕、積聚、及び婦人の數ば墮胎する等、氣の升降せざるに因する病を治するにはこの方を服するが尤も妙である。香附子を米醋に半日浸し、砂鍋で煮乾して搗き、焙じて石臼で末にし、醋糊で丸にして醋湯で服す。○濟生方の艾附丸――主治同上。香附子一斤、熟艾四兩を醋で煮、當歸を酒に浸して二兩を末にし、上記の如く丸にして服す。【婦人の氣盛】血が衰へ、變じて諸症を生じ、頭運、腹滿するにいづれも主效を有する抑氣散――香附子四兩を炒り、茯苓、甘草を炙いて各一兩、橘紅二兩を末にして二錢づつを沸湯で服す。(濟生方)【下血、血崩】血の山崩の如きもの、或は五色漏帶には、いづれも常にこれを服するがよし。血を溢くし、氣を調へる。乃ち婦人の仙藥である。香附子を毛を去つて炒り焦して末にし、極熱酒で二錢を服すれば立ろに癒える。昏迷甚しきには三錢を米飲で服す。稜灰を

加へるもよし。（許學士本事方）【赤白帶下】及び血崩の止まらぬものには、香附子、赤芍藥等分を末にし、鹽一捻りを入れた水二盞で一盞に煎じ、食前に溫服する。（聖惠方）【安胎順氣】鐵罩散——香附子を炒つて末にし、濃く煎じた紫蘇湯で二錢を服す。一には砂仁を加へる。（中藏經）【妊娠惡阻】胎氣不安で氣が升降せず、酸水を嘔吐して起坐に不便を覺え、飮食の進まぬものに二香散——香附子二兩、藿香葉、甘草各二錢を末にし、二錢づつを沸湯に鹽を入れて調へて服す。（聖惠方）【臨產順胎】妊娠九个月、十个月目にこの方を服すれば決して驚恐を起さぬ福胎飮——香附子四兩縮砂仁を炒つて三兩、甘草を炙いて一兩を末にし、二錢づつを米飮で服す。（朱氏集驗方）【產後の狂言】血運、煩渴して止まぬには、生薑、香附子を毛を去つて末にし、二錢づつを薑、棗を水で煎じたもので服す。（同上）【氣鬱吐血】丹溪の方では、童尿で香附子末二錢を調へて服す。○澹寮方では、吐血の止まぬを治するに、莎草根一兩、白茯苓半兩を末にし、二錢づつを陳粟米飮で服す。【肺破咯血】一日二回、香附末一錢を米飮で服す。（百一選方）【尿血】香附子、新地楡等分を各〻煎湯にし、先づ香附湯を三五呷して後地楡湯を服し、全部飮み盡してもなほ效の現はれぬときは再

服する（指迷方）【血淋】忍び難く痛むには、香附子、陳皮、赤伏苓等分を水で煎じて服す（十便良方）【諸般の下血】香附を童尿に一日浸して搗き砕き、米醋をふり拌ぜて焙じて末にし、二錢づつを米飮で服す。〇直指方では、香附を醋、酒各半づつで煮熟し、焙じて研末し、黄秫米糊で梧子大の丸にし、一日二回、米飮で四十丸づつを服す。〇戴原禮は『只だ香附子末二錢に百草霜、麝香各少量を入れて共に服するがその效尤も速かだ』といつてある。【老人、小兒の脱肛】香附子、荊芥穗等分を末にし、一匙づつを水一大盞で煎じ、十數回沸騰させて淋ぎ洗ふ。（三因方）【偏、正頭風】香附子を炒つて一斤、烏頭を炒つて一兩、甘草二兩を末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを嚼んで葱茶で服す。（本事方）【氣鬱頭痛】澹寮方では、香附子を炒つて四兩、川芎藭二兩を末にし、二錢づつを臘茶清で調へて常服する。病根を除き目を明かにする。〇華佗中藏經では、甘草一兩、石膏二錢半を加へる。【頭痛、睛痛】方は妊娠惡阻に同じ。【婦人の頭痛】香附子末を一日三五回、三錢づつ茶で服す。（婦人良方）【肝虚の睛痛】冷淚が出て（二八）羞明するには、補肝散――香附子一兩、夏枯草半兩を末にし、一錢づつを茶清で服す。（簡易方）【突然の耳の聾閉】香附

（二八）羞明ハ特ニ[illegible]トモ云フ、眼病性[illegible]

子を瓦で炒つて研末し、蘿蔔子煎湯で朝、夜各二錢を服す。鐵器を忌む（衛生易簡方）【聤耳で汁の出るもの】香附子末を綿の捻りで送り込む。蔡邦度知府が常に用ゐて效があつた（經驗良方）【諸般の牙痛】香附、艾葉の煎湯で漱ぎ、香附末を擦つて涎を去る（普濟方）【牙を牢くし、風を去る】氣を益し、髭を黑くし、牙疼、（三九）牙宣を治するもので、これは鐵甕先生の妙方である。香附子を炒つて性を存して三兩、青鹽、生薑各半兩を末にして日毎に擦る。（濟生方）【累年の消渴】莎草根一兩、白伏苓半兩を末にし、一日二回、三錢づつを陳粟米飲で服す。【癰疽、瘡瘍】曾孚先は『凡そ癰疽、瘡瘍は皆氣滯、血凝のために起る。諸種の香藥を服して氣を導き血を通ずるがよい』といつてある。常器之は『凡そ氣血は香を聞けば行り、臭を聞けば逆する。瘡瘍は皆氣が滯し、血が凝聚するために起るものだから、最も忌むものは臭穢不潔である。これに觸れば必ず引蔓するものだ』といつてある。陳正節公は『大凡そ疽疾は多くは怒氣に因つて惹起するものだ。ただ香附子の藥を服して食を進め、氣を寬にするが大いに有效だ』これには獨勝散を用ゐる。香附子を毛を去つて生薑汁に一夜漬け、焙じ乾し碾つて細末にし、時に拘らず白湯で二錢を服す。もし瘡が

（三九）牙宣ハ齦肉腫脹即ハグキノハレモノ。

初期の場合には此の方を茶に代へて飲む。瘡が潰れて後もこれを服するがよい。或は只だ局方の小烏沈湯に少し甘草を用ゐる。癒えて後も半年ほど服すれば甚だよい。（陳自明外科精要）【蜈蚣の咬傷】香附を嚼んで塗れば立ろに效がある。（袖珍方）

瑞香（綱目）

和名　ちんちやうげ
學名　Daphne odora, Thunb.
科名　ちんちやうげ科（瑞香科）

（瑞　香）

【集解】時珍曰く、南方の州郡の山中にある。枝と幹は婆娑たるもので、條が柔かく葉が厚い。四季を通じて青く茂り、冬、春の交に花が簇り咲く。花は長さ三四分で丁香の形狀のやうだ。色は黄、白、紫の三種ある。格古論に『瑞香は高いものは三四尺ある。枇杷葉の如きもの、楊梅葉の如きもの、柯葉の如きもの、毬子の如きもの、攣枝の如

きものの數種あつて、攣枝の如きものだけは花が紫で香が烈しい。枇杷葉の如きものは子を結ぶ」とある。このものは始めは（一）廬山に產したもので、宋時代には民家で栽培し、始めて其名が世に著れた。攣枝のものは節が攣曲して斷ち折れたやうな形狀だ。その根は綿のやうに軟かで香しい。

根（三）【氣味】【甘く鹹し、毒なし】【主治】【（二）急喉風には白花のものを水に研つて灌ぐ】（時珍）この說は醫學集成に記載されてある。

茉莉（綱目）

和名　まうりんくわ
學名　Jasminum Sambac, Ait.
科名　もくせい科（木犀科）

【釋名】柰花　時珍曰く、嵇含の草木狀には末利と書き、洛陽名園記には抹厲と書き、佛經には抹利と書き、王龜齡集には沒利と書き、洪邁の集には末麗と書いてある。蓋し末利といふは元來外國語であつて、これが正しいといふ文字はない、その人人の隨意に音を當てて書いただけのことである。また韋君はこれを狎客と呼び、裴叔敏は遠客と呼んだ。楊愼の丹鉛錄には『晉書に「都人柰花を簪す」とある

（一）廬山ハ石部菩薩石匡廬山ノ註ヲ見ヨ
（二）急喉風ハ扁桃腺炎。
（三）木村（康）曰ク、現今洋方家ノ用ウル生藥ニ白瑞香皮ト稱スルモノアリ、是ハ和名せいやうおにしばり（Daphne Mezereum, L.）ノ樹皮ニシテ、古來歐洲ニ於テ藥用ニ供スルモノナリ。

（一）滇、廣ハ雲南、廣西地方。

は卽ち今の末利の花だ』といつてある。

集解　時珍曰く、末利はもと波斯に產したもので、それを南海地方へ移植したのだ。今は（一）滇、廣の民家で栽培してゐる。その性は寒を畏れるもので、中華の土地には適しない。莖は弱く、枝が繁り、葉は綠で圓く尖り、初夏に重瓣で蕊のない小さい白花を開く。秋の末頃に花が止まり、實は結ばない。花が多瓣に成つてゐるものもあり、紅色なるもの、蔓生のものもあり、その花は皆夜開くもので、芬香愛すべきものである。婦人はそれを線で貫いて首飾にし、或は面脂に

（末莉）

合はせたりする。茶を薫ずるにもよい。或は蒸して液を取り、薔薇水の代用にもする。又、末利に似て瓣が大きく、その香氣の清絕なものがある。それは狗牙、または雪瓣と名くるもので、海南地方にある。素馨、指甲などいふも皆この物の類だか

ら、左に附錄する。

附錄　(一)**素馨**　時珍曰く、素馨もやはり西域から移植したもので、耶悉茗花といふ　卽ち酉陽雜俎に記載してある野悉蜜花がそれだ。枝、幹がたをやかで葉は末利に似て小さく、その花は細く瘦せた四瓣で黃、白の二色がある。花を採り油を搾つて頭髮に用ゐれば甚だ香滑だ。

(二)**指甲花**　黃、白の二色ある。夏季に木犀に似た香氣の花を開く、指甲を染めるに鳳仙花よりもよい。

花　(三)氣味　【辛し、熱にして毒なし】　主治　【油に蒸し液を取つて面脂を作り、頭髮に用ゐれば髮を長くし、燥を潤ほし、肌を香しくする。また茗湯にも入れる】(時珍)

根　氣味　【熱にして毒あり】　主治　【一寸ほど酒で磨つて服すれば一日間昏迷狀態に在つて醒める。二寸用ゐれば二日、三寸用ゐれば三日で醒める。凡そ跌き仆れて骨節を損したものや、脫臼などの接骨に此の物を用ゐれば痛を覺えない】(汪機)

(一) 素馨
(和名)そけい
(學名) Jasminum grandiflorum, L.
(科名)もくせい科（木犀科）

(二) 指甲花
(和名)しかふくわ
(學名) Lawsonia inermis, L.
(科名)みそはぎ科（千屈菜科）
又きつねのまご科ノPeristrophe tinctoria, Nees. ニモ指甲花ノ名ガアル、我邦ノ學者ハまもつこくヲ指甲花ニ充テシハ誤リニアツタ、

(三) 木村(康一)曰ク、まつりくわノ花ヲ石油エーテルニテ浸出スレバ香脂○・○八%ヲ得、香脂ハ精油及蠟ヲ含有ス。精油ノ主成分ハ醋酸、醋

實、及ビ安息香酸ノリナロールエステル、醋酸ベンチル、アントラニル酸メチル、インドール、鎖狀セスキテルペン、セスキテルペンアルコホル等ナリ。又蠟ハ $C_{23}H_{58}$、$C_{30}H_{62}O$、H_{66} 等ノパラフィンヲ主成分トス。臺灣ニテハ花ヲ茶ノ賦香料トシ、比律賓人ハ花ノ黄汁ヲ髮ノ結髮ニ用キ、印度人ハ花環ヲ裝飾トス。

(一) 牧野云フ、人或ハ Tulipa ノ屬トシ或ハ Crocus ノ屬トナスコトアルモ、共ニ穩當ナラ[illegible]、今ノ所此鬱金香ハ全ク未詳ニ屬スル品デアル。

(二) 大觀ニハ十下ニ二ノ字アリ。

[一] 鬱金香（宋開寳）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【校正】禹錫曰く、陳氏は『鬱なるものは本來草の英だから本部に附記すべきものではない』といつてある。今移して此に入れる。

【釋名】鬱香（御覽） 紅藍花（綱目） 紫述香（綱目） 草麝香 茶矩摩（佛書）

頌曰く、許愼の說文解字に『鬱は芳草也。[二]十葉を貫となし、百二十貫を築いて以て之を煮る。鬱鬯は百草の[三]英なり、合して酒を釀し以て神を降す。乃ち遠方の鬱人の貢する所なるが故に之を鬱と謂ふ。鬱は今の[四]鬱林郡なり』とある。時珍曰く、漢時代の鬱林郡は卽ち現在の廣西、貴州、潯、柳、邕、賓諸州の地方である。一統志にただ『柳州の[五]羅城縣に鬱金香を出す』とあるが卽ちこの物だ。金光明經には茶矩摩香とある。ここに言ふものは鬱金の花の香で、鬱金は現今用ゐてゐる鬱金の根と稱呼は同一だが、そのものの實體は異つてゐる。唐愼微の本草に、彼の根の

鬱金の條下にこれを入れたのは誤だ。趙古則の六書本義には、鬯の字は米を器に入れて匕で扱ふの有樣を象徴したもので、鬱の字は臼に從ふ。缶を捧げて几の上に置き、鬯に彡を著けたのはそれに從事する人が五體を儀服で飾つた意味を表象したものだ。俗には鬱と書くとある。これで見ると、花を取り、それを築いて酒を作るの意味となるのであつて、この名稱の鬱は產地の名から發生したものではなく、寧ろその土地の名がこの草に因つて起つたものなのだ。

集解　藏器曰く、鬱金香は大秦國に生ずる。二月、三月に紅藍のやうな形狀の花を開く。四月、五月に花を採ると香しい。

時珍曰く、按ずるに、鄭玄は『鬱草は蘭に似たり』といひ、楊孚の南州異物志には『鬱金は(六)罽賓國に產する。彼の國の人民はこれを種ゑて先づその花を佛に供し、數日にしてそれが萎んでから後にこれを取る。色は正黄で芙蓉花に裹まれた嫩蓮とよく似てゐる。酒に香を付け得るものだ』とある。又、唐書には『太宗の時、(七)伽毘國から鬱金香を獻じた。葉は麥門冬に似て九月花を開く、その狀は芙蓉に似て紫碧色だ。香は數十步に聞える。花はさいても實らぬので、種ゑんとするにはそ

(三) 説文ニハ百草ノ華ナリトアリ。
(四) 鬱林郡ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。
(五) 羅城縣ハ宋ニ置ク。故城ハ今ノ廣西省羅城縣ノ北ニ在リ。明ニ復タ置キ今ノ地ニ治シ、柳州府ニ屬ス。
(六) 罽賓國ハ漢ノ西域ノ國名。今ノ克什米爾一帶ノ地ナリ。
(七) 伽毘國即チ伽毘羅國ハ印度ノ一古國名。摩掲陀國ノ北ニ在リ。

（鬱 金 香）

の根を取る』とある。二說皆同じだが、ただ花の色が同じくない。種類も或は一物ではないであらう。古樂府に『中に鬱金、蘇合香あり』とあるはこの鬱金のことである。晉の左貴嬪の作った鬱金頌には『伊に奇草あり、名けて鬱金と曰ふ。越こに殊域よりし、その珍來り尋ぬ。芳香酷烈、目を悦しめ心を怡ばしむ。明德惟れ馨し、淑人是れ欽しむ』とある。

【氣味】【苦し、溫にして毒なし】藏器曰く、平なり。【主治】【蟲(八)野の諸毒、心腹間の惡氣、鬼疰、(九)鵶鶻等の一切の臭氣を治す。諸種の香藥に入れて用ゐる】（藏器）

(一)茅 香（宋開寶）

和名 かうすゐがや
學名 Cymbopogon Nardus, Rendl.
科名 禾本科（禾本科）

(八) 野ハ大觀ニ點トアリ。
(九) 鵶鶻ハ臭氣ノ種類。
(一) 牧野云フ、かうすゐがやハ俗ニ (Citronella grass) ト稱シ、[illegible]アッテ

【校正】宋圖經の香麻を併せ入る。

【釋名】暍尸羅（金光明經）香麻　時珍曰く、蘇頌の圖經に香麻の一條を重複して掲げ、福州に產するもので、湯に煎じて風を浴するに甚だ良しといつてあるは此の香茅のことである。閩地方では茅を麻といふやうに呼ぶからさうなつたのである。今茲には一條に併入した。

【集解】志曰く、茅香は（二）劍南道の諸州に生ずる。その莖、葉は黑褐色、花は白色だ。白茅香ではない。

頌曰く、今は陝西、河東、（三）汴東の州郡にもあり、遂、澤州からは貢物として納める。三月大麥に似た苗が生え、五月白い花を開く。また黃花のものもあり、實を結ぶものもあり、實の無いものもある。いづれも正月、二月に根を採り、五月に花を採り、八月に苗を採る。

宗奭曰く、茅香根は茅のやうだが但し明潔で長い。浴湯にするによく、藁本と共に用ゐるが尤も佳い。これは印香の中に入れ、香附子と合せて用ゐる。

時珍曰く、（四）茅香には凡そ二種あつて、このものはその中の一種の香茅だ。白茅

れもんがや即チLemon-grassト共ニ元來ハ印度ノ原產デアル。我邦ノ學者從來茅香ヲかうばうト訓ヂHierochloe borealis, Roem. et Schult. ニ充テシハ誤リデアツタ。

(二) 劍南道ノ諸州トハ、益、綿、始、梓、遂、普、資、簡、陵、邛、雅、眉、嘉、榮、瀘、戎、茂、維、嶲、黎、龍、文、扶、松、翼、當ノ二十六州ナリ。

(三) 汴大觀ニ京ニ作ル。汴東ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

(四) 牧野云フ、茅香ニ二種アルトイフモノ其一種ハ或ハれもんがや即チCymbopogon citratus, Stapf. ヲ指シタモノカト思フ。

香なるものはまた別種のもので、南番に産する一種の香草だ。唐愼微(たうしんび)の本草ではこの相違點を知らずして白茅花、及び白茅香の諸註を茅香の條下に引用してあるが、それ等の註說はそれぞれの條下に別けて記すことにした。

(茅香)

花(五) 氣味 【苦し、溫にして毒なし】 主治 【中惡に胃を溫め、嘔吐を止め、心腹の冷痛を療ず】(開寶)

附方 新一。 【冷勞の久病】 茅香花、艾葉(がいえふ)四兩を燒いて性を存して研末し、粟米飯で梧子大の丸にし、初めには蛇牀子湯で二十丸を服し、漸次三十丸まで增加する。微し吐くが妨げない。後に棗湯(さうたう)を服す。それで立ろに效がある。(聖濟總錄)

苗、葉 主治 【浴湯にして用ゐれば邪氣を辟け、身體を香しくする】(開寶)

(五) 木村(康)曰ク、れもんがや臺灣產ノ成分ハ葉ニハ精油〇・三〇%内外ヲ有ス、其主成分ハシトラール六四%ミルセン二〇%ナリ。文獻ハ高澤貞次郎―工化一六(大、二)五四一。篠崎英之助―工化、一六(大、二)五五〇。賀田立二―工化、一六(大、二)九四二。加福均三―工化一九(大、五)四〇三・二〇(大、六)八二五。

又曰ク、臺灣產かうすいがやノ葉ニハ精油約〇・五%ヲ含有ス、本油ノ三成分ハシトロネノール四〇%、及ビゲラニオール、シトロネロール等ニシテ、遊離アルコール含量ハ油ノ約三七%、其エステルハ約一一%ナリ。文獻ハ加福均三―藥研五(大、五)二五。

白茅香（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

集解　藏器曰く、白茅香は安南に生ずる。茅の根の如きもので、道家では浴湯にする。珣曰く、廣志には『廣南の山谷に生ず。諸名香を合すに甚だ珍奇なもので、尤も勝れたものは舶來するものだ』とある。時珍曰く、この物は南海の白茅香であつて、やはり今の排香などの類である。近道の白茅や北部地方の茅香花ではない。

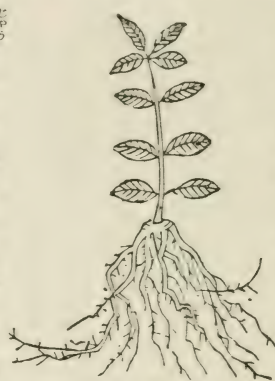
（白　茅　香）

根　氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【惡氣。身體を香くする。湯に煮て服すれば腹內(一)冷を治す】（藏器）【小兒の歪身の瘡疱には桃葉と合せ湯に煎じて浴する】（李珣）

(一) 大觀ニハ冷下ニ痛ノ字アリ。

(一)排草香（綱目）

和名　やつしろさう(?)
學名　Lysimachia sikokiana, Miq.(?)
科名　さくらさう科(櫻草科)(?)

集解　時珍曰く、排草香は交趾に產するもので、今は嶺南にも栽培するところがある。草の根で、色は白く、形狀は細柳の根のやうだ。世間では多くこれを僞物に雜ぜる。案ずるに、范大成の桂海志に『排草香は形狀が白茅香のやうで、芬香の烈しいことは麝香のやうだ。世間では此の物をも香に合せるが、諸香の內でこの物の香に及ぶものはない』とある。又、麝香木なるものがある。それは(二)占城に產する老朽樹の節の心で、香氣は頗る麝に類してゐる。

(排草香)

根

氣味　【辛し、溫にして毒なし】

主治　【臭を辟け、邪惡の氣を去る】(時珍)

(一) 牧野云フ、排草香ノ眞物ハ今遽カニ明ラメ難イガ、或ハ我やつしろさう(Lysimachia sikokiana, Miq.)ト同種デハナイカト想像スル、ソシテ從來ノヤウニ、之レヲかはみどりニ充ツル說ニハ左袒シ難イ、右ノやつしろさう即チ Lysimachia sikokiana, Miq. ハ L. Foenumgraecum, Hance. 並ニ L. sinuelans. Hemsl. ト同種デアル。

(二) 占城ハ石部水精ノ註ヲ見ヨ。

附錄　(三)**瓶香**、珣曰く、案ずるに、陳藏器は『南海の山谷に生ずる草のやうな形狀のもので、その味は寒にして毒なく、鬼魅、邪精、天行時氣に主效がある。いづれも之れを燒くのだ』といつてある。水で煮て水腫浮氣を洗ひ、土蠶、芥子と共に湯に煎じて(四)風瘙を浴するも甚だ效がある。

(五)**耕香**　藏器曰く、(六)烏許國に生ずるもので、莖に細葉を生ずる。味は辛く、溫にして毒なし、鬼氣を主り、中を調へ、臭を去る。

時珍曰く、右の二香は皆草の形狀のものである。恐らくこれも排草の類のものであらう。故にここに附錄する。

(一)迷迭香（拾遺）

和名　まんろさう、又、まんねんろう
學名　Rosmarinus officinalis, L.
科名　脣形科(脣形科)

集解　藏器曰く、廣志には『西海に產す』とあり、魏略には『大秦國に產す』とある。時珍曰く、魏の文帝の時西域から皇城の庭園へ移植し、帝と帝の弟曹植等とがそれぞれ賦を作つた。その大體は、その草は幹長く莖柔かく、枝細く根弱く、

(三)瓶香　未詳。
(四)風瘙ハ感冒カラ來ル瘙。
(五)耕香　未詳。
(六)烏許國、大觀ニ烏滸ニ作ル。昔烏滸蠻ノ居所ナリ。今ノ廣西省橫縣ノ東八十支里ニ烏滸山アリ。
(一)牧野云フ、迷迭香ヲまんねんろうトスル說ハ蓋シ正シイ事ト思ヒ、從來ノ說ニ從ヒ此ニサウシテ置イタ。

花繁くして實を結び、嚴霜にも凋まず。收采して(二)幽殺し、枝、葉を摘去り、袋に入れて之れを佩ぶれば、芳香甚だ烈しいといふのであつて、今の排香の香氣と同じである。

（迷迭香）

(三)【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【惡氣。衣服を香ばしくする。これを燒けば鬼を去る】(藏器) 珣曰く、性は平である、溫ではない。羌活と合はせ丸にして燒けば蚊、蚋を辟ける。

藒車香（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【集解】藏器曰く、廣志には『藒車香は(一)徐州に生ずる。高さ數尺、黃葉、白花だ』とあり。爾雅には『藒車は乞輿なり』とあり、郭璞は『香草なり』といつてある。珣曰く、海南の山谷に生ずる。齊民要術に『凡そ諸樹木の蟲蛀のつくものは

(二) 幽殺ハ陰乾ノ意カ。

(三) 木村(康)曰ク、迷迭香葉ハ水ト共ニ蒸溜スレバ揮發油、迷迭香油大約一%ヲ得、迷迭香油ハ主トシテテルペンヨリ成ル、其他チネオール竝ニ左旋性及右旋性ノ樟腦及龍腦ヲ傍有ス。應用迷迭香油ハ蒸溜劑トシテ只外用ニ供セラルルノミ。而シテ又迷迭香油ヲ疥癬ニ應用スルコトアリ。(生藥學)

(一) 徐州ハ古ノ九州ノ一ナリ。今ハ江蘇省徐州府、及ビ邳縣、山東省兗州府、安徽省宿縣、泗縣皆ソノ地ナリ。故城ハ今ノ山東省鄒城縣西南ニ

此の香を煎じ冷して淋げば辟ける』とある。時珍曰く、楚詞に『蒥夷と藒車とを畦にす』とあるから、往昔の世にも嘗てこれを栽培したもので、今の蘭香、零陵と相類するものであらう。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】珣曰く、微寒なり。

【主治】【鬼氣。臭、及び(二)蟲魚、蛀蠹を去る】(藏器)【霍亂を治し、惡氣を辟け、衣服を薰ずるによし】(珣)

(一)艾納香 (宋開寶)

和名 がいなふかう
學名 Blumea balsamifera, DC.
科名 きく科(菊科)

【集解】志曰く、廣志に『艾納は西國に產し、細艾に似たものだ』とある。又、松樹皮上の綠衣で艾納と名けるものがあつて、諸香を和してこれを燒けば、その烟が凝聚し、青白になつて散ぜぬものであるが、これと同物ではない。禹錫曰く、按ずるに、古樂府に『行胡何方從り、列國何を持て來るや。氍(二)毹、毾㲪、五木香、迷迭、艾納(三)及び都梁』といふがある。その艾納がこれである。

在リ。三國魏ニ治ナ彭城ニ徙シ、歷代ソノ地ナ徐州トナス。

(二) 蟲魚ハ衣魚俗ニシミト云フ。

(一) 牧野云フ、松樹皮上ノ綠衣デ艾納トナルケルトアルモノハ多分何カ多少綠色ナ帶ビタ地衣カ或ハ蘚類カ苔類ヲ指シタモノデアラウト思フガソレガ何デアルカハ固ヨリ判ラナイ。我國ノ學者之ヲ松ノぜにごけト稱スレドモ何トイフ種ヲ指シタモノカ判然シナイ。白井曰ク、まつのぜにごけニ就キ三好學博士ノ考定ヲ乞ヒタ

ルニ、小石川植物園ニ於テ實物ヲ檢査シ、本草綱目啓蒙ノ所說ヲモ參考シ Parmelia praetervisa Muell. N. G. 種ノ或ル forma ヲ指スモノナルベシトノコトナリ。

(二) 大觀ニ毬ヲ毬ニ作ル。毬毬ヲ顛倒ス。

(三) 大觀與ニ作ル。

[氣味] 【甘し、溫、平にして毒なし】

[主治] 【惡氣。蟲を殺す。腹冷洩痢に主效がある】(志) 【傷寒五洩、心腹注氣、腸鳴を止め、寸白を下す。これを燒けば瘟疫を辟ける。蜂窠に合はせて脚氣を浴するが良し】(珣) 【癬を治し、蛇を辟ける】(藏器)

兜納香 (海藥)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

[集解] 珣曰く、案ずるに、廣志に『西海(一)剽國の諸山に產する』とあり、魏略に『大秦國に產する草類だ』とある。

[氣味] 【辛し、平にして毒なし】 藏器曰く、甘し、溫なり。

[主治] 【中を溫め、暴冷を除く】(藏器) 【惡瘡、腫瘻。痛を止め、肌を生ずる。また膏に入れて燒けば遠近の惡氣を辟ける。これを帶びて夜行すれば、膽を壯にし、神を安んずる。茅香、柳枝と共に湯に煎じて小兒を浴すれば成長を助ける】(李珣)

(一) 剽國、卽チ新唐書ノ驃國。新唐書ニ、『古朱波國也。自號突羅朱闍婆。在永昌南二千里、東陸眞臘、西接東天竺、西南墮和羅、南屬海、北南詔。地長三千里、廣五千里』トアリ。丁謙氏ノ攷證ニ據レバ、卽チ緬甸ナリトイフ。

線　香（綱　目）

和名　せんかう（一の製品である）
英譯名　Joss-sticks.

【集解】時珍曰く、今一般に行はれる合香の法は甚だ多いのであるが、線香だけは瘡科の藥に入れるものだ。その使用する材料の加減は一定せぬが、概ね白芷、芎藭、獨活、甘松、三柰、丁香、藿香、藁本、高良薑、角茴香、連喬、大黄、黄芩、柏木、兜婁香末の類を用ゐるものが多い。それを末にして楡皮の粉末で作つた糊で和劑し、唧筩の型に入れて線香にする。線の如き條である。また種種の物の形、又は字形に作り固め、鐵、銅の絲に懸けて爇くものもある。それは龍挂香と呼ぶ。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【諸種の瘡癬を熏ずる】（時珍）

【附方】新一。【楊梅毒瘡】龍挂香、孩兒茶、皂角子各一錢、銀硃二錢を末にし紙に卷き込んで撚りにし、點燈を桶の中へ置いてそれを燒き、鼻からその烟を吸ふ。一日三回、三日で止めて解毒藥を内服すれば瘡が乾く。（集簡方）

藿香（宋嘉祐）

和名　かはみどり
學名　Lophanthus rugosus, Fisch.
科名　脣形科（脣形科）

【校正】承曰く、これは草部に入るべきものである。

【釋名】**兜婁婆香**　時珍曰く、豆葉を藿といふ。その葉が似てゐるから名けたものだ。楞嚴經に『壇前で兜婁婆香を水で煎じて洗浴する』とあるはこの物で、法華經にはこれを多摩羅跋香といひ、金光明經にはこれを鉢怛羅香といふ。いづれも兜婁の二字の梵語發音だ。涅槃經にはまたこれを迦算香といふ。

【集解】禹錫曰く、按ずるに、廣志に『藿香は海邊の國に產し、(一)莖は都梁の如く葉は水蘇に似て、衣服の中に著て置くによい』とあり、稽含の南方草木狀には『交阯、(二)九眞、(三)武平、(四)興古の諸國に產し、その地の吏民自らこれを栽培する。(五)叢生するも

（藿香）

(一) 大觀ニハ形トアリ。
(二) 九眞ハ山薔ノ註ヲ見ヨ。
(三) 武平、後漢ニ置キタル縣名ニ武平アリ。隋ニ改メテ鹿邑トナス。故城ハ今ノ河南省鹿邑縣ニ在リ。然レドモ此ニイフ武平ニハ非ザルベシ。未詳。
(四) 興古、未詳。
(五) 大觀ニハ榛ニ作ル。

ので、五六月に採つて日光で乾かせば甚だ芬芳なものだ』とある。

○頌曰く、藿香は嶺南に多く、民家でも多く栽培する。二月苗が生え、莖梗が甚だ密生して叢となる。葉は桑に似て小さく薄い。六月、七月に採り、黄色になるを待つて取り收める。金樓子や兪益期の牋にいづれも『(六)扶南國の者の話に據ると、五香は共に同一の木の各部分で、その根は旃檀、節は沈香、花は雞舌、葉は藿香、膠は薫陸といふさうだ。故に本草には五香を同一條中に掲げたもので、その根據は此に在つたのだ』といつてあるが、現に南方諸地の藿香を見るに、それは草類であつて嵇含の所說と正に合致する。范曄の合香方には『零、藿は虛燥なもので、古人はそれで(七)薫香を合はせた』ともある。これで見れば扶南人の話といふは、全く根據なき如何はしい妄說のやうだ。

○○時珍曰く、藿香は莖が四角で節があり、中が虛ろだ。葉は微し茄葉に似てゐる。潔古、東垣はその葉のみを用ゐて枝梗は用ゐなかつた。今一般には枝梗も併用することになつてゐるが、それは葉だけでは多く僞物があるからのことである。唐史に『(八)頓遜國に藿香を產する。枝を地に插めば葉が生える。都(九)艮の如きものだ』と

(六) 扶南國ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(七) 大觀ニ據リテ薫字ヲ加フ。
(八) 頓遜國、未詳。
(九) 金陵本梁ニ作ル。

あるがこの物だ。劉欣期の交州記には『藿香は蘇合香に似てゐる』とあるはその香氣が似てゐることで、その形狀のことをいふのではない。

枝葉 〔氣　味〕【辛し、微溫にして毒なし】元素曰く、辛く甘し。又曰く、甘く苦し。氣厚く味薄く、浮にして升る。陽である。杲曰く、升るべく降るべく、陽であつて手、足の太陰の經に入る。

〔主　治〕【風水毒腫。惡氣を去り、霍亂、心腹痛を止める】(別錄)【脾、胃、吐逆の要藥である】(蘇頌)【胃の氣を助け、胃口を開き、飮食を進める】(元素)【中を溫め、氣を快くする。肺虛で寒あり上焦の壅熱するもの。酒を飮んで口の臭さには湯に煎じて漱ぐ】(好古)

〔發　明〕杲曰く、芳香の氣は脾、胃を助けるものだ。故に藿香は能く嘔逆を止め、飮食を進めるのである。好古曰く、手、足の太陰の藥だから、順氣烏藥散に入れて用ゐれば肺を補し、黃芪四君子湯に入れて用ゐれば脾を補する。

〔附　方〕新六。【諸氣を升降す】藿香一兩、香附を炒つて五兩を末にし、一錢づつを白湯に點てて服す。(經效濟世方)【霍亂吐瀉】垂死のものもこれを服すれば回生

する。藿香葉、陳皮各半兩を水二盞で一盞に煎じて溫服する。（百一選方）【暑季の吐瀉】滑石を炒つて二兩、藿香二錢半、丁香五分を末にし、一二錢づつを淅米泔で調へて服す。（禹講師經驗方）【胎氣不安】氣が升降せず、酸水を嘔吐するには、香附、藿香、甘草二錢を末にし、二錢づつを鹽少量を入れた沸湯で調へて服す。（聖惠）【口を香しくし臭を去る】藿香を洗淨して湯に煎じ、時時に噙漱する。（摘玄方）【（一〇）冷露猪爛】藿香葉、細茶等分を灰に燒き、油で調へ葉の表へ塗つて貼る。（應驗方）

（一）薰　草（別錄中品）　零陵香（宋開寶）

和　名　かみめばうき
學　名　Ocimum sanctum, L.
科　名　脣形科（脣形科）

【釋　名】薰草（別錄）　香草（開寶）　燕草（綱目）　黃零草（玉冊）　時珍曰く、古代には香草を燒いて神を降したといふところから薰といひ蕙といふのであつて、薰は熏（クスベ、ノボル）であり、蕙は和（ヤハラグ）である。漢書に『薰は香が有るために自から其身を燒く』とあるはこれである。或は『古代には祓除の式に此の草で熏じたからこれを薰と謂ふのだ』ともいふ。これでも意味は通じる。范成大の虞衡

（一〇）路岐ハイノゴ、冷露ハ熱ノナキイノゴノコトカ。

（一）牧野云フ、植物名實圖考ノ圖說ニ據テ今之レチ Ocimum sanctum, L. ト決定シ、同時ニ之レチ O. Basilicum, L. ト同定スル事ニ反對スル。

志には『零陵は今の(三)永州の地だ。この香は産しない。ただ融州、宜州等には甚だ多く、その地方民はこれで席薦を編む。性の煖かなもので、人體には宜しいものだ』とあるが、謹んで按ずるに、零陵の舊時の所轄廳は今の(三)全州に在つたのである。全は湘水の水源地で、この香が多く生ずる。今世間で廣零陵香と呼ぶものが乃ち眞の薫草である。永州、(四)道州、(五)武岡州などは皆零陵管轄下の屬地だつたのだ。今は(六)鎭江、(七)丹陽などで栽培し、刈り取つて酒を灑いで修治して賣出してゐる。芬香の更に烈しいものだ。これを蘭草と同じく香草と呼ぶ。楚辭に、既に『滋蘭之九畹』又は『樹蕙之百畝』などといつてあるのだから、古代にも此を栽培してゐたものである。張揖の廣雅には『鹵は薫なり、その葉を蕙といふ』とある。而して黄山谷は『一幹數花のものを蕙となす』といつてあるが、それは蘭草、蕙草の智識がないために、强ひて蘭花の中で區別しやうと試みたものである。鄭樵が手を入れた本草に『蘭、卽ち蕙、蕙、卽ち零陵香』といふもやはり臆見だ。一向明確

(蕙草零陵香)

(三) 永州ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。

(三) 全州ハ今ノ廣西省全縣ノ地ナリ。

(四) 道州ハ石部水銀ノ註ヲ見ヨ。

(五) 武岡州ハ今ノ湖南省寶慶府武岡縣ノ地ナリ。

(六) 鎭江ハ府名、宋ニ置ク。今ノ江蘇省丹徒縣ハソノ舊治ナリ。

(七) 丹陽ハ金部赤銅ノ註ヲ見ヨ。

な說明になつて居らぬ。但し、蘭草、蕙草なるものは一類の中の二種たるに過ぎぬのである。

〔集解〕 別錄に曰く、薰草、一名蕙草は下濕の地に生ずる。三月に採つて陰乾する。(八)脫節のものが良い。又曰く、蕙實は(九)魯山の平澤に生ずる。

弘景曰く、桐君の藥錄に『薰草の葉は麻の如く、兩兩相對す』といひ、山海經には『(一〇)浮山に草あり、麻葉にして方莖、赤華にして黑實、氣は蘼蕪の如し。名けて薰草といふ。以て癘を已む可し』とある。今俗に皆これを燕草と呼び、形狀が茅のやうで香しいものを薰草とするが、この一般民家で栽培してゐるものは眞物ではない。文學者達は多く蕙といふ文字を用ゐるが、一體その草は何者であるかといふことには智識がない。ただその名を尙んでその實に迷ふといふはかかる類のことである。

藏器曰く、薰草、卽ち是れ零陵香であつて、薰とは蕙草の根のことである。

志曰く、零陵香は零陵の山谷に生ずる。葉は羅勒のやうなものだ。南越志に『その地の人民は燕草と名け、また薰草と名ける』とある。卽ち香草である。山海經に

(八) 脫節トハ葉バカリニテ莖ノ混ラヌモノノコト。

(九) 魯山、漢ニ魯陽縣アリ、卽チ今ノ河南省汝州ノ魯山縣ナリ。魯山トハ北周ニ改稱シタルモノナリ。然レドモモト漢時ニ魯山ナル山名アリテ、ソノ陽ニ魯陽縣ヲ置キタルモノナルベシ。

(一〇) 浮山、畢氏ノ考證ニ據レバ、コノ山ハ今ノ陝西省臨潼縣ノ南ニ在ルベシトイフ。

薫草とあるが卽ち此の物だ。

頌曰く、零陵香は今は湖、廣の諸州にいづれもある。多く下濕の地に生ずるもので、葉は麻の如く兩兩相對し、莖は四角である。常に七月中旬を以て花を開く。至つて香しい。古代にいつた薫草はこのものである。嶺南地方では皆窰竈を作つて火炭で焙乾する。かくて黄色にしたものが佳いのである。江淮にもその地に自然に生ずるものがあつて、これも香に作り得るが、湖、嶺のもののやうに枯槁にして香の甚だ芬薫なるには及ばない。古方ではただ薫草を用ゐて零陵香を用ゐないが、今の合香家や面脂、又は瘡瘡の洗澡用にする諸法にはいづれもこれを用ゐ、都下の商店でも甚だ多く賣つてゐる。

時珍曰く、今はただ呉の地方で栽培し製造して賣るものが廣く行き渡つてゐる

薫草 【氣味】 【甘し、平にして毒なし】 權曰く、苦し、毒なし、珣曰く、辛し、溫にして毒なし。多く服してはならぬ。氣喘を起すものだ。玉冊に曰く、三黄、硃砂を伏す。

【主治】 【目を明にし、涙を止め、洩精を療じ、臭惡の氣を去る。傷寒、頭痛、

上氣、腰痛】（別錄）【單用すれば鼻中の息肉、（二一）鼻齆を治す】（甄權）【零陵香は、惡氣、心腹痛滿に主效があり、氣を下し、身體を香しくする。諸香に和して湯、丸にして用ゐる。酒と配合すれば良好の結果を得る】（開寶）【風の邪の衝心、虛勞（二二）疳䘌に主效がある。升麻、細辛と共に煎じて飮むが牙齒の腫痛を治するに善し】（李珣）【血氣腹脹を治するには莖、葉を酒で煎じて服す】（大明）【婦人の髮を飾るにこれを油に浸して用ゐる。これ以上に香しいものはない】（宗奭）

【發明】時珍曰く、薰草は芳馨なる氣と辛、散の作用が上部に達するものだから、心腹惡氣、齒痛、鼻塞にいづれもこれを用ゐる。脾、胃は芳香を喜ぶ。芳香は以て鼻を養ふとはこのことだ。多く服すれば喘を起すのは、能く眞氣を耗散するからである。

【附方】新十。【傷寒下痢】薰草湯。——薰草、當歸各二兩、黃連四兩を水六升で二升に煮取り、一日三回に服す。（范汪方）【傷寒狐惑】肛を食ふものである。薰草、黃連各四兩を㕮咀し、白酸漿一斗に一夜漬けて二升に煮取り、三回に分服する。（小品方）【頭風旋運】痰逆、惡心、食思鈍きには、眞零陵香、藿香葉、莎草根を炒つて

（二一）鼻齆ハ鼻蛇トモ云フ鼻タケノ延長セルモノ。
（二二）疳䘌ハ䘌蝕ノ略ムシクヒバノコト。

等分を末にし、一日三回、二錢づつを茶で服す。（本事方）【小兒の鼻塞】頭熱である。薰草一兩半、羊髓三兩を銚に入れて慢火で熬膏し、滓を去つて一日三四回背上を摩擦する。（聖惠方）【頭風白屑】零陵香、白芷等分を水で煎じた汁に鷄子白を入れて攪きまぜ、數十回傅ければ終身生じない。（聖惠方）【牙齒の疼痛】零陵香の梗と葉を水で煎じて含漱する。（普濟方）【風牙、疳牙】零陵香を洗つて炙り、華茇を炒つて等分を末にして摻る。（普濟方）【夢遺失精】薰草湯——薰草、人參、白朮、白芍藥、生地黃各二兩、伏神、桂心、甘草を炙り各二兩、大棗十二箇と水八升で三升に煮取り、二回に分服する。（外臺祕要）【婦人の斷產】零陵香を末にし、酒で二錢づつを服して一兩まで用ゐ盡せば一年の間妊娠を絕つ。蓋し血が香を聞けば散ずるのである。（醫林集要）【五色諸痢】返魂丹——零陵香草を根を去つて鹽、酒に半月浸して炒り乾し、一兩毎に廣木香一錢半を入れて末にし、裏急腹痛には、冷水で一錢半を服し、三四回通じてから、熱米湯で一錢半を服すれば痢が止まる。只だ忌むものは生梨の一味である。（集簡方）

薰實　別錄有名未用）　藏器曰く、卽ち蘭蕙の蕙である。五月に採收する。辛く香

しい。

〔氣味〕【辛し、平にして毒なし】〔主治〕【目を明かにし、中を補ふ】（別錄）

根　莖中涕〔主治〕【傷寒寒熱の出汗、中風、面腫、消渴、熱中。水を逐ふ】（別錄）【五痔脫肛に蟲あるものに主效がある】（時珍）千金方に掲げてある。

蘭草（本經上品）

和名　ふぢばかま
學名　Eupatrium stoechadosmum, Hance.
科名　きく科（菊科）

〔釋名〕蕳　音は閑（カン）である。**水香**（本經）**香水蘭**（開寶）**女蘭**（綱目）**香草**（綱目）**燕尾香**（開寶）**大澤蘭**（炮炙論）**蘭澤草**（弘景）**煎澤草**（唐本）**省頭草**（綱目）**都梁香**（李當之）**孩兒菊**（綱目）**千金草**　志曰く、葉が馬蘭に似てゐるから蘭草と名けたのだ。その葉に岐があるので俗に燕尾香と呼び、當時世間で水で煮て浴して風邪を⑴療ずるところから、また香水蘭と名けたのである。

藏器曰く、蘭草は澤畔に生じ、婦人が油に和して頭髮に澤を出すために用ゐるところから蘭澤といふ。盛弘之の荊州記に『都梁のある山の下に淺く淸い川があつて

⑴ 療字大觀本草ニ據リ補入。

(一)武岡州ハ前條ニ註アリ。
(二)臨淮ハ西漢ニ郡ヲ置キ、今ノ安徽省盱眙縣ノ西北ニ治ス。
(三)鄭ハ石部[illegible]生[illegible]石梁州ノ註參照。

その中に蘭草が生える。それで都梁香と名けたのだ』とある。

時珍曰く、都梁は現今の(一)武岡州の地である。又、(二)臨淮の盱眙縣にも都梁山といふがあつて、ここに產する香蘭は乃ち香草だ。能く不祥を辟ける。陸機の詩の疏に『(三)鄭地方の習俗として、三月に男女が水際で蕳を手に持つて自から祓ひをする。蓋し蘭は闌(サヘギル)

(蘭草)

であり、蕳は閑(フセグ)であつて、その文字の意義と習俗の目的とは合致するわけだ』とある。淮南子には『男子が蘭を種ゑると美にして芳しくない。やはり蘭は女子が種ゑねばならぬものだ』とある。女蘭なる名は或は此れに因んだものか、その葉が菊に似たもので、女子、小兒が喜んでこれを佩びる。女蘭、孩兒菊などの名は或はまたここから出たものらしくもある。唐瑤の經驗方には『江南地方の民家では、これを栽培して夏季に採り、頭髮の中へ入れて置くと髮が粘らなくなる。それで省頭草と名ける』とある、この說は煎澤草とある名の意義と合致する。古代の人は蘭、

蕙をいづれも香草と稱し、零陵香草、都梁香草といふやうに呼んだのだが、後世のものがそれを省略して、そのいづれをも香草と呼ぶやうになつたのだ。近世では、蘭花の智識はあるが蘭草に關する智識はない。ただ虛谷方回が考訂して『蘭草、卽ち今の千金草である。俗に孩兒菊と名けるものだ』と斷言してゐる。この說が信憑すべきだ。正誤は下項に詳記する。

【集解】別錄に曰く、蘭草は太吳の池澤に生ずる。四月、五月に採收する。弘景曰く、藥方にも、一般俗間にも、いづれも用ゐることを識らない。太吳とは(五)吳國のことだ。太伯が居た所といふので太吳といつたのであらう。現に(六)東門にある煎澤草を蘭香と名けるが、或はこの物らしい。李當之は『これは今一般に栽培する都梁香草のことだ』といつてあるが、澤蘭もやはり都梁香と名ける。

恭曰く、蘭は卽ち蘭澤香(七)草である。莖は圓く蕚は紫で八月白い花を開く。俗に蘭香と名け、煮て洗浴するものだ。溪澗や川の邊りに生ずる。世間でも多くこれを庭園などの飾に種ゑる。陶弘景が擧げた煎澤草、都梁香なるものがこれだが、しかし的確に斷言はし兼ねたのだ。

(五) 太吳ハ十部廿綱ノ吳ノ註參照。

(六) 東門大觀ニ東間ニ作ル。東間トハ東都地方ノ意ナルベシ

(七) 草大觀ニ花ニ作リ。

保昇曰く、下濕の地に生ずる。葉は澤蘭に似て尖つて長く、岐がある。花は紅白色で香しい。

藏器曰く、蘭草、澤蘭二物同名だ。陶弘景はその識別がつかず、蘇恭も無定見な別け方をしてゐるが、蘭草は澤畔に生じ、葉に光潤があり、根が少し紫だ。五月、六月に採つて陰乾する。卽ち都梁香そのものである。澤蘭は葉が尖つて微し毛があり、光潤がなく、莖が四角で節が紫だ。初め採つたときは微し辛く、乾しても辛いものである。蘇恭が八月白い花を開くといふそのものは卽ち澤蘭である。それを蘭草の註として記すは甚だ誤つたことだ。

時珍曰く、蘭草、澤蘭は一類中の二種で、共に水の邊りの下濕の場所に生じ、二月舊根から苗を生じて叢となり、莖は紫、枝は白、節は赤、葉は綠であつて、葉が節に對向つて生じ、細齒のあるものだ。但し、莖が圓く節が長く、葉が光つて岐のあるものは蘭草である。莖が微かに四角で節が短く、葉に毛のあるものは澤蘭である。嫩葉のうちはいづれも挼んで佩びたりする。八九月以後漸く老い、高きものは三四尺になり、雞蘇のやうな穗になつた花を開き、その花は紅白色で中に細子があ

る。雷斅炮炙論の所謂大澤蘭は卽ち蘭草、小澤蘭は卽ち澤蘭である。禮記に『蘭茝を佩帨す』といひ、楚辭に『秋蘭を紉として以て佩と爲す』といひ、西京雜記に『漢の時、池苑に蘭を種ゑて神を降した。或は粉に雜へて衣服や書籍の中に入れて置けば蠹を辟ける』とあるものは皆この二蘭をいふのである。今吳の地方では、これを栽培して香草と呼び、夏季に刈取つて酒、油を灑いで修治し、引纏め束ねて頭澤や佩帶とするために賣つてゐる。これは別錄に產地を太吳と書いてある記述と正に符合する。從來の諸家はこの二蘭が一物の二種であることを知らずして、ただ功用に氣と血との別があるところから、一定の見解がなくなつたのだが、就中、寇氏、朱氏の說が最も甚しい。故に次項にそれを考正して置く。或は人家で蒔き種ゑるものが蘭草、野生のものが澤蘭だともいふが、それでも通じる。

〔正誤〕寇宗奭曰く、蘭草に就ては、諸家の說に異同があつて的確な斷定は下し兼ねる。定論はない。現に（八）江陵、（九）鼎州、澧州では山谷の間に頗るあるが、山の外側や平田にはなく。多くは陰地、幽谷に生じ、葉は麥門冬のやうで濶く、且つ靭長で一二尺になり、四季を通じて靑い。花は黃綠色で中間の瓣に細かい紫點がある。

（八）江陵、澧州ハ石部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。
（九）鼎州ハ石部太一餘糧ノ註ヲ見ヨ。

春芳しいものは春蘭で色深く、秋芳しいものは秋蘭で色が淡い。その花の開いた時は滿室盡く香しく、他の花の香とは又別なものだ。

朱霞亭曰く、蘭の葉は金、水の氣を禀けて火の性を含むものらしい。一般にはその花の香の珍貴なことを知つてゐるが、その葉が藥方に用ゐて功力のあることを知らない。蓋しその葉は能く久積陳鬱の氣を散ずるに甚だ有力なものだ。卽ち現に一般人が坐右に栽ゑて置くものがそれである。

時珍曰く、二氏の所說のものは近世の所謂蘭花であつて、古の蘭草そのものではない。蘭には數種あつて、蘭草、澤蘭は水の邊りに生じ、山蘭は卽ち蘭草の山中に生じたものである。(一〇)蘭花も山中に生ずるが右の三蘭とは迥かに別なもので、近き地方に生ずる蘭花は葉が麥門冬のやうで春花が咲き、福建に生ずるものは葉が菅茅のやうで秋花が咲く。黃山谷の所謂「一幹一花を

(蘭花)

(一〇)牧野云フ、蘭花ハ春蘭ト秋蘭トヲ云フノデ共ニらん科ノCymbidium 屬ニ屬シ、春蘭ハ我邦ノほくろニ似タ品デアル秋蘭ハ蕙デ今日一莖九花ナドハ之レニ屬スル。

蘭といひ、一幹數花を薫といふ』といふは、蓋し蕙草、蘭草の實物を識らぬために、遂に蘭花に對して牽强の種別說を出したのだ。蘭草と澤蘭とは類を同うするものなのである。故に陸機は『蘭は澤蘭に似てただ廣く、節が長い』といひ、離騷には『その綠葉、紫莖、素枝は紉とすべく、佩とすべく、(一)籍とすべく、膏とすべく、浴すべし』とあり、鄭詩には『士女蘭を秉る』とあり、應劭の風俗通には『尙書が事を奏するには、香を懷にし蘭を握る』とあり、禮記には『諸侯は薰を贄とし、大夫は蘭を贄とす』とあり、漢書には『蘭は香しきを以て自ら燒く』とある。そもそもかの蘭花なるものは、葉はあるが枝はない。これを賞玩するといふだけにはよいが、紉にし、佩にし、籍にし、浴にし、秉るものとし、握るものとし、膏にし、焚くといふことの出來やう道理はない。故に朱子の離騷辯證に『古の香草は必ず花・葉俱に香しく、濕を燥して變らないものであつたから、刈つて佩にし得たのであつて、今の蘭、蕙はただ花が香しいだけで葉には香氣がない。質は弱くて萎み易いものだ。刈つて佩にし得るやうなことはない。これは確かに古人の指すその物でないことは甚だ明かだ。古の蘭といふは澤蘭に似たもので、蕙といふは卽ち今の零陵香のこと

(一)籍ハ敷物。

（一三）九畹ハ蘭草ヲ指ス、楚辭ニ滋蘭ノ九畹トアルニヨル。

である。當今の茅に似て花に兩種あるものは何時の頃からそれと誤られたものか判らない』といつてある。熊太古の冀越集には『世俗にいふ蘭は深山窮谷に生ずるもので、決して往古の時代の水澤の蘭そのものではない』といつてある。陳遯齋の遯齋閑覽には『楚騷の蘭に就いて、或は都梁香だといひ、或は澤蘭だといひ、或は猗蘭だといふが、澤蘭なりとするが正當なのである。今世間で種ゑる麥門冬のやうなものは幽蘭と名けるものだ。眞の蘭ではない』といつてある。故に陳止齋は盗蘭說なる一文を作つて之を譏つた。方虛谷は訂蘭說を作つて、『古の蘭草は今の千金草、俗にいふ孩兒菊であつて、今の所謂蘭はその葉が茅のやうで嫩かだ。その根を土續斷と名ける。花が馥郁たるところから蘭なる名を呼ばれたのだ』といつてある。楊升菴は『世に蒲、萱の如きものを蘭といふが、（一三）九畹もあられもない名を久しく受けてゐたものだ』といつてある。又、吳草廬の書いた蘭說には、甚だ詳細に說いて次の如く言つてある。『蘭は醫經では上品の藥とされ、枝があり莖がある草で、種植するものである。今の所謂蘭には枝もなければ莖もない。黃山谷が言ひ出したために、世間は遂に謬つて離騷の蘭がそれだといひ、寇氏の本草にも、俗說に惑ふて反

つて舊說を疑つたのは誤である。そもそも醫學の典籍なるものは、事實に基く應用の學問であつて、さやうなる誤があつてはならぬ筈のものである。今の蘭なるものに、果して水を利し、蠱を殺し、痰癖を除くの功力があるか何うか。この草は閩の地方で盛んに栽培される。朱子は閩の人だ。その土地に產するものを識らずして、反つてかやうな解說論辯をされる筈はない。世俗では今猶ほ蘭でないものを指して蘭だと思つてゐる。何たる頑迷無理解なことであらう』といふのである。かやうなことだ。醫家が蘭草を用ゐるには、毫もそこに疑惑を挾むべき餘地はない。諸學者達は明確に解說されてある。これを觀ても寇、朱二氏の誤は言ふまでもない。

葉【修治】澤蘭の條を見よ。【氣味】【辛し、平にして毒なし】杲曰く、甘し、寒なり。

【主治】【水道を利し、蠱毒を殺し、不祥を辟ける。久しく服すれば氣を益し、身體を輕くし、老衰せず、神明に通ずる】(本經)【胸中の痰癖を除く】(別錄)【血を生じ、氣を調へ、營を養ふ】(雷斅)【その氣淸香にして津を生じ、渴を止め、肌肉を潤し、消渴、(一三)膽癉を治す】(李杲)【水で煮て風病を浴する】(馬志)【癰腫を消し、月經

(一三)膽癉ハ口ノ苦キヤマヒ。

を調へる。水で煎じて用ゐれば牛、馬の毒を解す』(時珍)『惡氣に主效がある、香澤があつて、膏にし髮に塗るによし』(藏器)

〔發明〕時珍曰く、按ずるに、素問に『五味が口に入れば脾、胃に藏つて以てその精氣を行らし、津液をして脾に在らしめる。人の口に甘く感ずるのはその味の肥美なるものの刺戟に發するのである。その氣が上溢すれば轉じて消渇となる。これを治するには蘭を以て陳氣を除く』とあり。王冰の註に『辛は能く發散するものだからだ』とある。李東垣が消渇を治し、津液を生ずるに蘭葉を用ゐたのは、蓋しここに根據を置いたものだ。詳細は澤蘭の條を見よ。又、この草を油に浸して髮に塗れば風垢を去り、香潤ならしめる。史記に所謂『羅襦の襟が解けて微かに香澤を聞く』とあるはこのことだ。崔寔の四時月令にある頭髮用の香油を作る法には『清油を用ゐて蘭香、藿香、雞古香、苜蓿葉の四種を浸して新綿で裹み、胡麻油を豬脂に和したものに浸して銅鍋で沸し、少量の青蒿を投じ、綿幕で鍋の片口から瓶へ瀉ぎ移して取收めて用ゐる』とある。

〔附方〕新一。『牛、馬肉の中毒』死亡することがある。省頭草を根と葉の付い

たまま水で煎じて服すれば直ちに消す。（唐瑤經驗方）

(一)澤　蘭（本經中品）

和名　さはひよどり
學名　Eupatorium Lindleyanum, DC.
科名　きく科（菊科）

［校　正］　嘉祐の地笋を併せ入る。

［釋　名］　**水香**（吳普）　**都梁香**（弘景）　**虎蘭**（本經）　**虎蒲**（別錄）　**龍棗**（本經）　**孩兒菊**（綱目）　**風藥**（綱目）　根を**地笋**と名ける（嘉祐）　弘景曰く、澤の邊りに生ずるから澤蘭と名けるので、また都梁香とも名ける。時珍曰く、この草もやはり(二)香澤に作り得る。ただ澤邊に生ずるといふだけを指した名稱ではない。(三)齊安地方では風藥と呼び、吳普本草では一名水香といひ、陶氏はまた都梁と名けるともいふ。今俗にこれをも通じて孩兒菊と呼ぶところは、そのものが蘭草と一物中の二種であることを誠によく證してゐる。その根は食し得るところから地笋といふ。

［集　解］　別錄に曰く、澤蘭は(四)汝南の諸處の大澤の邊りに生ずる。三月三日に採つて陰乾する。普曰く、低地の川の邊りに生ずる。葉は蘭のやうで、二月苗が生

(一) 牧野云フ、澤蘭ハ此本ノ記載ニ基ヅケバひよどりばなデハナクテ、さはひよどりニ充テナクテハナラヌモノデアル。

(二) 香澤ハ髪油ノコト。

(三) 齊安ハ唐書ニ『黄州齊安郡』トアリ、齊安故城ハ今ノ湖北省黄岡縣ノ西北百二十支里ニ在リトイフ。

(四) 汝南ハ漢ノ郡名。今ノ河南省ノ汝寧、陳州ノ二府、及ビ安徽省ノ穎州府等ソノ地ニシテ、平與、即チ今ノ河南省汝南縣ノ東南ニ舊治アリ。

え、節が赤く、四枚の葉が支節に相對して生える。弘景曰く、今は諸處にあつて、多くは下濕の地に生ずる。葉は微かに香ばしく、油に煎じ、また浴湯にするによい。人家で多く種ゑてあるが、葉が少し異ふ。今山中に甚だ似た一種があるが、莖が四角で葉が小さく强く、甚だ香しくはない。澤蘭といふ以上は山中のものは違ふのであるが、しかし藥方家ではやはり採つて用ゐる。

（澤蘭）

恭曰く、澤蘭は、莖は四角、節は紫、葉は蘭草に似たものだが(五)甚だ香しくはない。今都下で用ゐるものがそれである。陶氏のいふものは蘭草のことだ。莖が圓く、蕚が紫で花の白いものだ。決して澤蘭ではない。

頌曰く、今は(六)荊、徐、隨、(七)壽、蜀、梧の諸州、河中府のいづれにもある。根は紫黑色で栗根のやうだ。二月に苗が生えて高さ二三尺になり、莖幹は青紫色で四稜となり、葉は相對して生じ、薄荷の如く微かに香しい。七月花を開く、その花は

(五) 甚字大觀ニナシ

(六) 荊州ハ黄連ノ註ヲ見ヨ。徐州ハ蘹車香ノ註ヲ見ヨ。隨州ハ丹參ノ註ヲ見ヨ。

(七) 壽州ハ唐ニ置ク今ノ安徽省淮泗道ノ壽縣ナリ。蜀ハ四川省ノ地、梧ハ廣西省梧州ノ地ナリ。

紫を帶びた白色で莖に通じて紫だ。花も薄荷の花のやうである。三月に苗を採つて陰乾する。荊、湖、嶺南地方の人家で多く栽培する。壽州に產するものは花、子がない。これは蘭草と大抵相類するものだが、ただ蘭草は水の邊りに生じ、葉に光潤があり、根が少し紫で、五六月が盛りのものだ。而るに澤蘭は水澤の中、及び下濕の地に生じ、葉は尖つて微し毛があり、光潤でなく、莖が四角で節が紫だ。七月、八月に初めて採る。微し辛い點が異ふ。

斅曰く、凡そこれを用ゐるには雌雄を見別けねばならぬ。大澤蘭は莖、葉が皆圓く、根が青黃だ。能く血を生じ、氣を調へ、榮と合するものだ。小澤蘭はそれとは迥かに別で、葉の表面に斑があり、根の頭が尖つてゐる。能く血を破り、久積を通ずるものだ。

宗奭曰く、澤蘭は土から出た部分は枝梗が分れ、葉が皆菊のやうで、ただ尖つて長いのが特徴である。吳普が『葉は蘭に似てゐる』といふは誤だ。今の蘭は葉が麥門冬のやうなもので、一向似たところがない。

時珍曰く、吳普の所說のものが眞の澤蘭なのだ。雷斅の所說の大澤蘭は卽ち蘭草

で、小澤が卽ちこの澤蘭である。寇宗奭の所說の澤蘭は正しいが、吳普の說を破らうといふのはいけない。一體寇氏は蘭花を蘭草とする誤認を根據としてゐるからだ。詳細は蘭草の正誤の項を見よ。

葉「修治」斅曰く、凡そ大、小澤蘭を用ゐるには、細かに剉んで絹袋に入れ、屋根の南側の角へ懸けて乾して用ゐる。

「氣味」【苦し、微溫にして毒なし】別錄に曰く、甘し。普曰く、神農、黃帝、岐伯、桐君は酸し、毒なしといひ、李當之は小溫なりといふ。權曰く、苦く辛し。之才曰く、防已が使となる。

「主治」【金瘡、癰腫、瘡膿】(本經)【產後。金瘡の內塞】(別錄)【產後の腹痛、屢ば出產して血氣が衰へたもの、冷から勞となつて瘦羸するもの、婦人の血瀝腰痛】(甄權)【產前、產後のあらゆる病。九竅を通じ、關節を利し、血氣を養ひ、宿血を破り、癥瘕を消し、小腸を通じ、肌肉を長じ、撲損の瘀血を消し、鼻血、吐血、頭風、目痛、婦人の勞瘦、男子の面黃を治す】(大明)

「發明」頌曰く、澤蘭は婦人の方中に最も適切なもので、古人は婦人の病を治

するに澤蘭丸を用ゐた場合が甚だ多い。

時珍曰く、蘭草、澤蘭は氣が香くして溫、味が辛にして散、陰中の陽であつて足の太陰、厥陰の經の藥である。脾は芳香を喜び、肝は辛散が宜く、脾の氣が舒びれば三焦が通利して正氣が調和し、肝の鬱が散ずれば營衞がよく行つて病邪が解する。蘭草は氣道に走るものだから、能く水道を利し、痰癖を除き、蠱を殺し、惡を辟け、而も消渴の良藥となる。澤蘭は血分に走るものだから、能く水腫を治し、癰毒に塗り、瘀血を破り、癥瘕を消し、而も婦人の要藥となるのである。この物はかやうに一類のものではあるが、功用はやや異ふ。宛も赤、白の伏苓、芍藥に補と瀉との相異があると同樣だ。雷斅が『雌は氣を調へ、血を生じ、雄は血を破り、積を通ずる』といふは、正にこの二蘭の主治に合致し、大澤蘭が蘭草であることの最も憑るべき根據であつて、血が氣に生ずるから、氣を調へ、血を生ずといつたのだ。又、荀子に『澤、芷は以て鼻を養ふ』とある。その意味は、澤蘭、白芷の氣が芳香で肺に通ずるといふことである。

附　方　舊一、新四。

【產後の水腫】血虛の浮腫である。澤蘭、防已等分を末に

し、二錢づつを醋湯で服す。(張文仲備急方)【小兒の蓐瘡】澤蘭の心を嚼んで封ずるが良し。(子母祕錄)【瘡腫の初期】澤蘭を擣いて封ずるが良し。(集簡方)【損傷瘀腫】方は上に同じ。【產後の陰翻】產後に陰部が燥熱して遂に(八)翻花と成りたるには、澤蘭四兩を湯に煎じて二三回熏洗し、再び枯礬を入れて煎じて洗へば平安になる。(集簡方)

地筍(宋嘉祐) 氣味 【甘く辛し、溫にして毒なし】 主治 【九竅を利し、血脈を通じ、膿を排し、血を治す】(藏器)【(九)鼻洪、吐血、產後の心腹痛を止める。產婦は蔬菜として食ふが佳し】(大明)

子 主治 【婦人の(一〇)三十六疾】千金方の承澤丸の中に用ゐてある。

(一)馬蘭(日華)

和名 よめな
學名 Aster indicus L.
科名 きく科(菊科)

釋名 **紫菊** 時珍曰く、葉は蘭に似て大きく、花は菊に似て紫だからかく名けたので、俗に物の大なるものを稱して『馬何某』と呼ぶ。

(八) 花瓣ノ如クハヂケワレルコト。

(九) 鼻洪ハ鼻衄。

(一〇)三十六疾ハ病源候論ニ出ヅ。

(一) 牧野云フ、本書ノ原文ヲ按ジテ此馬蘭ヲよめなト斷ズル又植物名實圖考ノ圖モ亦之レヲ證スル、從來我邦ノ學者之レヲこんぎくニ充テシハ穩當デハナイ。

【集解】藏器曰く、馬蘭は澤の邊りに生ずる。澤蘭のやうで氣が臭い。楚辭には惡草として惡人に喩へ、北方の人は此のものの花を見て紫菊と呼んでゐる。それはその花が單瓣で菊花に似て紫だからだ。又、山蘭といふ山の側面に生ずるものがある。それは劉寄奴に似て葉に椏がなく、對して生じない。花心は微し黄赤だ。これも大いに血を破るもので、いづれも用ゐ得る。

時珍曰く、馬蘭は湖澤、卑濕の土地に甚だ多い。二月苗が生え、莖赤く、根白く葉は長くして刻齒があり、その形狀は澤蘭に似てただ香しくないだけである。南方の地方では多くこれを採り、水をかけて晒し乾して蔬菜にし、また(一)饅餡に作る。夏に入つて高さ二三尺になり、紫の花を開き、花が終つてから細い子をもつ。楚辭に馬蘭なる草名は出て居らぬが、陳氏がこれを指して惡草としてあるは何を根據としたものだらう。

根葉【氣味】【辛し、平にして毒なし】【主治】【宿血を破り、新血を養ひ、鼻衄、吐血を止め、金瘡を合せ、血痢を斷ち、酒疸、及び諸菌の毒、蠱毒を解す。生で擣いて蛇咬に塗る】(大明)【諸瘧、及び腹中の急痛、痔瘡に主效がある】(時珍)

(一)饅餡ハ饅頭ノ餡。

發明 時珍曰く、馬蘭は辛し、平であつて、能く陽明の血分に入るものだ。故に血を治する功力は澤蘭と同じである。近來世間では痔漏の治療に用ゐて效があるといふことだ。その用法は、春、夏は生のものを取り、秋、冬は乾いたものを取り、鹽や醋を用ゐずただの白水で煮て食ひ、幷にその汁を飲む。或は酒で煮て焙じて研り、糊で丸にして米飲で日毎に服し、先の煎じた水に鹽少量を入れて日毎に熏洗するのだといふ。醫學集成には『痔を治するには、馬蘭の根を擣いて傅け、一時間ほどして肉の平になるを看て直ちに取り去る。取去ることがやや遲れると肉が反つて出る恐れがある』とある。

（馬蘭）

附方 新六。【諸瘧の寒熱】脚の赤い馬蘭の擣汁に水少量を入れ、發作の日の早朝に服す。或は沙糖を入れるもよし。（聖濟總錄）【絞腸沙痛】馬蘭の根、葉を細か

に嚼んで汁を嚥めば立ろに平安になる。(壽域神方)【打傷出血】竹節草、卽ち馬蘭を旱蓮草、松香、皂子葉、卽ち柜子葉(冬は皮を用ゐる)と共に末にして刀口に入れる。(摘玄方)【喉痺口緊】地白根、卽ち馬蘭の根、或は葉の擣汁に米醋少量を入れて鼻孔中に滴らし、或は喉中に灌いで痰を取れば自ら開く。(孫一松試效方)【水腫尿澀】馬蘭菜(三)一虎口、黑豆、小麥各一撮、酒、水各一鍾を一鍾に煎じ、食前に溫服すれば尿を通じて四五日で癒える。(楊起簡便方)【(四)纏蛇丹毒】馬蘭丹草を醋に擂つて搽る。(濟急方)

附錄　**麻伯**(別錄)　有名未用に曰く、味酸し、毒なし。氣を益し、汗を出す主效ある。一名君莒、一名衍草、一名道止、一名自死といひ、平陵に生ずる。蘭のやうで黑く厚く、(五)白莖が裹まれ、實は赤く黑い。九月に根を採取する。

相烏　又曰く、味苦し、陰痿に主效がある。一名烏葵といひ、蘭香のやうで莖は赤い。山の陽に生ずる。五月十五日に採つて陰乾する。

天雄草　又曰く、味甘し、溫にして毒なし。氣を益し、陰痿に主效がある。山澤の中に生じ、形狀は蘭のやうなものである。實は大豆のやうで赤色だ。

(三) 一虎口ハ一握チ云フ。
(四) 纏腰火丹一名火帶瘡卽帶狀匐行疹。
(五) 白裹莖ノ三字中裹恐クハ衍。

益妳草（拾遺） 藏器曰く、味苦し、平にして毒なし。五痔、脱肛に主效があり。血を止めるには香しく炙き酒に浸して服す。(六)永嘉（えうが）の山谷に生ずるもので、葉は澤蘭の如くして莖が赤く、高さ二三尺のものである。

(一)香薷

音ハ柔（ジュウ）である。（別錄中品）

和名 無し
學名 Mosla sp.
科名 脣形科

【校正】 菜部より此に移し入る。

【釋名】 香菜（食療） 香茸（同上） 香菜（千金） 蜜蜂草（綱目） 時珍曰く、薷の字は本來葇（じゅ）と書くので、玉篇に『葇菜は蘇の類なり』とあるがそれである。その氣が香しく、その葉が柔かだからかく名けたのだ。草の初めて生えた形を茸（じょう）といふ。孟詵の食療に香戎と書いてあるは正しくない。俗に蜜蜂草と呼ぶはその花房の形容である。

【集解】 弘景曰く、民家にそれぞれあるもので、蔬菜にして生で食ふ。十月中に取つて乾す。頌曰く、所在到る處に栽培されてあるが、北方にはやや少い。白蘇

(六) 永嘉ハ晉ニ郡ヲ置キ、今ノ浙江省永嘉縣ニ治ス。

(一) 牧野云フ、香薷ハ Mosla 屬ノ一種デ稍我がいぬかうじニ似タ所ガアレドモ全ク別種デ、我日本ニハ産セヌモノニ屬スル、支那ニハ學名ヲ有スル此屬ノモノ數種ガアル、或ハ其内ノ一乎今遽カニ明カニシガタイ、又香薷ハなぎなたかうじゆデハナイ。

に似て葉が更に細い。(三)壽春、及び(二)新安にいづれもある。彼の地方には又、石香葇なる一種がある。石上に生ずるもので、莖、葉が更に細く、色は黄で辛く、香氣はいよいよ甚しい。これを用ゐるが就中佳いのである。呉の地方ではこれを茵蔯として用ゐてゐる。

宗奭曰く、香薷は山野の間に生ずるもので、荆、湖、南北の二州に皆ある。(四)汴洛では畑を作つてこれを栽培し、暑季にはやはり蔬菜にする。葉は茵蔯のやうだ。花は紫で毛茸があり、邊に連つて穗を成し、凡そ四五十房が一穗となり、荆芥穗のやうだ。一種特別の香氣を有する。

時珍曰く、香薷には野生のものと栽培するものとあつて、(五)中州地方では三月これを種ゑ、香菜と稱して蔬菜の料にする。丹溪朱氏はただ大葉のものを良しとして採用したが、細葉のものは香の烈しさが更に甚しいので、今世間では多くこれを用ゐてゐる。これは方莖、尖葉で刻缺があり、頗る黄荆葉に似てゐるが小さい。九月紫の花を開いて穗に成る。細子、細葉で、高さ僅に數寸、葉が(六)落帚葉の如きものは石香薷である。

(三) 壽春ハ戰國楚ノ邑。今ノ安徽省壽縣ノ地ナリ。漢ニ縣ヲ置キ、歷代コレニ因ル。

(二) 新安ハ水部温場ノ註ヲ見ヨ。

(四) 汴洛ハ河南省ノ北部、洛陽、開封地方ヲイフ。

(五) 中州ハ北周ニ置キ、今ノ河南省新安縣ニ治ス。俗ニ河南省ヲ中州トイフ。

(六) 落帚ハ地膚ノ一名和名ハハウキギ。

【修治】斅曰く、凡そこれを採收したならば、根を去り葉を留めて剉んで暴乾する。火氣に觸れしめてはならない。十兩まで服するものは生涯白山桃を食つてはならぬ。時珍曰く、八九月花が開いて穂が著いた時採收し、陰乾して用ゐる。

(七)【氣味】【辛し、微溫にして毒なし】

【主治】【霍亂の腹痛、吐下。水腫を散ず】(別錄)【熱風を去る。俄かに轉筋するものは煮汁半升を頓服すれば直ちに止まる。末にして水で服すれば鼻衄を止める】(孟詵)【氣を下し、煩熱を除き、嘔逆冷氣を療ず】(大明)【夏季に茶代りに煮て飲めば熱痛に罹らぬ。中を調へ、胃を溫める。汁を含んで口を漱げば臭氣を去る】(汪穎)【脚氣の寒熱に主效がある】(時珍)

(香薷)

【發明】弘景曰く、霍亂に煮て飲めば瘥えぬものはない。煎にして用ゐれば水腫を除くに尤も良し。頌曰く、霍亂轉筋には單にこのもの一味を煮て服す。若し四

(七) 木村(康)曰ク、なぎなたかうじゆノ成分ハ全草一%内外ノ精油ヲ含ミ、其精油ノ主成分ハエルショルチアケトンナリ傍ラセキステルペンノ類ヲ含有ス。
文献 朝比奈泰彦、村山義温—薬誌三九〇(大、二)八八五・三九八(大、四)二六一。朝比奈泰彦、柴田文一郎—薬誌四一五(大、五)七八一。朝比奈泰彦、刈米達夫—薬誌四三一(大、七)一。朝比奈泰彦、柴田智—薬誌四八五(大、一一)五六五。朝比奈泰彦—Acta, Phytochium, Vol. II. No. I.

肢煩し冷汗が出て渇するには、蓼子を加へて共に煮て服す。震亨曰く、香薷は金と水とに屬するもので、上に徹し下に徹する功力があり、暑を解し、小便を利す。又、水を治するに甚だ捷效を擧げるは大葉のものの濃煎である。丸にして服すれば肺がその力を得て淸化し、熱が自ら降る。

時珍曰く、一般の醫師は暑病を治するに香薷飮を最上藥とする。しかし暑に因り涼味の快きに乘じて冷きものを飮み、ために陽氣が陰邪に遏げられて遂に頭痛、發熱、惡寒、煩躁、口渇を病み、或は吐し、或は瀉し、或は霍亂するものには、この藥を用ゐて陽氣を越發し、水を散じ、脾を和するを適當とするが、飮食の不節制、勞役、長期の喪の勤め等で暑に傷み、大熱、大渇し、雨の如くに汗泄し、煩躁し、喘促し、或は瀉し、或は吐するものの場合は、勞倦內傷の病證である。必ず東垣の淸暑益氣湯、人參白虎湯の類を用ゐて、それで火を瀉し、元を益すことが適正な方法である。この場合に若し香薷の藥を用ゐるならば、二重に其の表を虛せしめて、その上に更に又之を濟ふに熱を以てする事態となる。蓋し香薷なるものは、夏季の解表の藥として冬季に麻黃を用ゐる如きものである。特に氣虛の患者は多服しては

（八）拒格ハ吐逆スルコト。

（九）風水病ハ身體ノ浮腫スルヤマヒ、腎臟炎ノゴトキモノ。

ならない。然るに今一般人はその理論を知らずして、暑で元氣を傷めたものには有病と無病とに拘はらず、一概に茶代りにこれを用ゐ、それで十分暑を辟け得るものと心得てゐる。眞に癡前に夢を說くといふものだ。且つその物の藥性は溫である、熱飲すべきものではない、反つて吐逆を惹起す。飲用するならばただ冷服すべきものでそれでこそ（八）拒格の患もなく、その水を治する功果にも奇效を奏し得るのである。ある人の妻が、腰以下が胕腫し、面部までも赤腫し、喘急して死せんとし、橫臥不能となり、大便が溏泄し、小便が短少となり、服藥しても奏效しなかつた時、時珍が診ると、その脈は沈にして大であつた。思ふに沈なるは主として水であり、大なるは主として虛である。これは病後に風を冒したために發したもので、（九）風水と名くるものであつたから、千金神祕湯に麻黃を加へて一服進めると、喘が十の五まで定まり、再び胃苓湯で深師の薷朮丸を服ませると、二日にして小便が長くなり、腫は十の七まで退き、調節治理を加へること數日にして全く安益を得たのであつた。古人の方を見るに、いづれも至玄なる妙理が含まれてゐる。入神の明識がなければ理解が出來ないことで、用ゐる人の技量如何に據ることだ。

【附方】　舊四、新六。　【一切の傷暑】和劑局方の香薷飲——暑季に濕處に臥して風に當り、或は生物、冷物を節度なく食したために、眞と邪とが撞著錯綜して吐利を惹起し、或は發熱、頭痛、體痛し、或は心腹痛、或は轉筋、或は(一〇)乾嘔、或は四肢逆冷、或は煩悶して死せんとするものには、いづれもこの藥を主として用ゐる。香薷一斤、厚朴を薑汁で炙き、白扁豆を微し炒つて各半斤を剉んで散にし、五錢づつを水二盞、酒半盞で一盞に煎じ、水中に沈めて冷し、續けざまに二服を進むれば立ろに效がある。活人書では、扁豆を去り、黄連四兩を入れ、薑汁で共に黄色に炒つて用ゐる。【水病洪腫】胡洽居士の香薷煎——乾香薷五十斤を剉んで釜に入れ、水に(一一)三寸深さに漬け、煮て氣力を都て盡さしめ、滓を去つて澄し。(一二)微火で丸にし得る程に煎じて梧子大の丸にし、一服に五丸づつを日每に三服し、日每に漸次增加して小便の利するに至れば癒える。(蘇頌圖經本草)【全身の水腫】深師の薷朮丸——暴水、風水、氣水で全身悉く腫れたるにはこれを服す。小便が利するやうになれば效があつたのだ。香薷葉一斤を水一斗で熬つて極端に爛らし、滓を去つて再び熬膏し、白朮末二兩を加へ和して梧子大の丸にし、日中五回夜間一服、十丸づつを米飮

(一〇)乾嘔ハ噦逆シテ物ナキヲ云フ。
(一一)三寸大觀本草ニ一寸ニ作ル。
(一二)大觀ニ微ヲ嚴ニ作ル。

で服す。（外臺祕要）【四季の傷寒】不正の氣には、水香薷を末にして熱酒で一二錢を調へて服し、汗を取る。（衞生易簡方）【心煩脇痛】胸に連つて痛み、死せんとするには、香薷の搗汁一二升を服す。（肘後）【鼻衄】香薷の研末一錢を水で服す。（聖濟總錄）【舌上の出血】孔を鑽り開けたやうなるには、香薷の煎汁一升を一日三回服す。（肘後方）【口中の臭氣】香薷一把の煎汁を含む。（千金方）【小兒の生髮の遲きもの】陳香薷二兩を水一盞で三分に煎じた汁に猪脂半兩を入れ、和匀して日毎に塗る。（永類鈐方）【白禿慘痛】上記の方に胡粉を入れて和して塗る。（子母祕錄）

(一)石香葇（宋開寶）

和名 無し
學名 Mosla sp.
科名 脣形科

【釋名】石蘇

【集解】志曰く、石香葇は蜀郡の(二)陵、(三)榮、資、簡州、及び南方の諸處に生ずる。山巖の石縫中に生ずるもので、二月、八月に採取する。苗、莖、花、實俱に用ゐ得る　宗奭曰く、諸處にあるものだが、ただ山中の水に臨んだ崖に或は生えるこ

(一)牧野云フ、Mosla屬ノ一種ト思ヘドモ何トイフ種カ未詳デアル。
(二)陵州ハ石部鹵石類光明鹽ノ註ヲ見ヨ。
(三)唐ノ榮州ハ今ノ四川省嘉定府ノ榮縣ノ地ナリ。資州ハ石部石太黄ノ註ヲ見ヨ。簡州ハ石部扁青ノ註ヲ見ヨ。

とのあるもので、必ずしも巖石縫とは限らない。九月、十月でも尙ほ花がある。時珍曰く、香薷、石香薷は一物であるが、ただ生ずる場所に依つて名が變るのだ。平地に生ずるものは葉が大きく、崖や石に

（石香薷）

生ずるものは葉が細い。いづれも通じ用ゐて差閊ない。

【氣　味】【辛く香しい、溫にして毒なし】【主　治】【中を調へ、胃を溫め、霍亂吐瀉、心腹脹滿、(三)腹痛腸鳴を止める】(開寶)【功力は香薷に比して更に勝る】(蕭炳)【硫黃を制す】(時珍)

(一)爵　牀（本經中品）

和名　きつねのまご
學名　Justicia procumbens, L.
科名　きつねのまご科(爵牀科)

【釋　名】爵麻(吳普)　香蘇(別錄)　赤眼老母草(唐本)　時珍曰く、爵牀なる名稱の意味は解し得ぬが、吳氏の本草に爵麻と書いてあるものは甚だよくその物の質の內容と相通ずる。

(三) 大觀ニ腹上ニ臍字アリ。

(一) 牧野云フ、從來ハ本品ヲいぬかうじニ充ツレドモ、今植物名實圖考ニ據ツテ之レヲきつねのまごトシタ。

【集解】別錄に曰く、爵牀は漢中の川谷、及び田野に生ずる。恭曰く、この草は平澤、(一)熟田に近き道旁に生ずる。香薷に似て葉は長く大きく、或は荏のやうで且つ細い。俗に赤眼老母草と名ける。時珍曰く、原野に甚だ多い。方莖、對節で大葉の香薷と一樣であるが、ただ香薷は揉めば氣が香しく、爵牀は揉んでも香しくなく、微し臭いのが相違點である。

(爵牀)

莖葉　【氣味】【鹹し、寒にして毒なし】時珍曰く、微し辛し。【主治】【腰脊痛で床を支へる事が出來ず、俛仰の困難なるもの。熱を除くには浴湯にして用ゐるがよし】(本經)【血脹を療し、氣を下す。杖瘡を治するには搗汁を塗れば立ろに瘥える】(蘇恭)

(二)赤車使者(唐本草)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

(一)熟田ハ耕作ニ用ヰル田。

(二)牧野云フ、我邦ノ學者從來之レヲうはばみさう一名みづな即チ Elatostemma umbellatum, Bl. var. involucratum, Makino. ニ充テアレドモ中ッテ居ナイ。

釋名　小錦枝（炮炙論）

集解　恭曰く、赤車使者は、苗は香菜、蘭香に似て、葉、莖は赤く、根は紫赤色だ。八月、九月に根を採つて日光で乾かす。保昇曰く、荊州、襄州に生じ、根は紫で（二）蒨根のやうだ。二月、八月に採取する。時珍曰く、この物は爵牀と相類するものだが、根の色の紫赤色なるが相違點である。

（赤車使者）

根　修治　斅曰く、此の草の原名は小錦枝である。凡そ用ゐるには、いづれも粗く搗いて七歳の童兒の尿を拌ぜて蒸し、晒乾して藥に入れる。

氣味　【辛く苦し、溫にして毒あり】權曰く、小毒あり。

主治　【風冷、邪疰、蠱毒、癥瘕、五臟の積氣】（蘇恭）【惡風冷氣を治す。これを服すれば肌皮を悅澤にし、顏色を好くする】（甄權）

發明　頌曰く、古方に大風、風痺を治する赤車使者酒といふがあるが、今は一般に用ゐるものも稀であり、そのものの智識あるものも少い。時珍曰く、上古の

（二）蒨根の和名あかね。

時代には、瘟疫邪氣を辟けるものとして赤車使者丸といふがあつた。この藥は怪しいものではない、苟も手に入れようとして尋ね求めれば必ず手に入るものだが、ただ古代と現代では名稱の變つてゐる場合があるといふだけだ。

(一)假蘇（本經中品）

和名　めばうき
學名　Ocimum basilicum, L.
科名　唇形科

【校正】菜部より移して此に入る。

【釋名】薑芥（別錄）　荊芥（吳普）　鼠蓂（本經）　弘景曰く、假蘇は方藥には一向用ゐない。恭曰く、これは菜類中の荊芥だ。發音が薑芥と訛つただけである。先には草部に揭げられてあつたのだが、今はこれを菜部に編錄する。士良曰く、荊芥は本草では假蘇と呼ぶが、假蘇はまた別の一物であつて、葉が銳く、多くは野生のもので、香氣が蘇に似たところから蘇と呼ぶのである。頌曰く、晉宮の陳巽は江左地方では、假蘇、荊芥を事實兩種各別のものと謂つてゐる。蘇恭は本草に一名薑芥とあるところから、荊と薑とを發音の訛とし、この物を荊芥としてあるが、誤り

(一)牧野云フ、我邦従來ノ學者之レヲ荊芥トシ一種ノ草ヲ之レニ充テ之レヲありたさうト呼ンダ、ソレハ即チNepeta japonica, Maxim.ノ學名ヲ有スルモノデアル。サレドコレハ中ヲ得テ居ナイ、我邦ハ確信ヲ以テ今之レヲめばうきニ充ツル事ヲ敢テシタ。

葉は落蘗に似て細い。蜀では生で噉む』とある。普その人は東漢末の人で、別錄編纂の頃とまだ甚だ遠からざる時の人である。その言說も謬はない筈だ。故に唐時代の人蘇恭はその說を祖述したのである。陳士良、蘇頌はこれを兩種の物としての疑を發してゐるが、しかしやはり臆說であつて、蘇といひ、薑といひ、芥といふも、いづれもその物の氣味が辛く香しく、蘇のやうでもあり、薑のやうでもあり、芥のやうでもあるからである。

【集解】 別錄に曰く、假蘇は漢中の川澤に生ずる。頌曰く、今は諸處にある。葉は落蘗に似て細く、初生には香しく辛く、食し得るものだ。世間では採つて生菜にする。古方では稀に用ゐたが、近世の醫家は要藥としていづれも花、實の穗になつたものを採り、曝乾して藥に入れる。又、胡荊芥といひ、俗に新羅荊芥と呼ぶものもあり、又、石荊芥といふ山石の間に生ずるものもある。體、性は相近く、藥に入れての功用はやはり同一だ。

時珍曰く、荊芥は元來野生のものだが、現今では世間で多く用ゐるために遂に多

く栽培するやうになつたのである。二月に子を蒔けば苗が生える。炒つて食へば辛く香しい。莖は四角、葉は細く（二）獨帚葉に似て狹く小さくして淡黄綠色だ。八月小さい花を開く。花は穗になつた房で、房は紫蘇のやうで房の內に葶藶子のやうな黄赤色の細子がある。穗のまま採收して用ゐる。

（假蘇　荊芥）

【正誤】藏器曰く、張鼎の食療本草に『荊芥、一名拆蕒』とあるは誤だ。拆蕒にはその條項を別に草部に揭げてある。時珍曰く、汪機の本草會編に『假蘇は白蘇だ』とあるも誤である。白蘇なるものは荏であつて、後の條項に揭げてある。

莖穗【氣味】【辛し、溫にして毒なし】詵曰く、菜にして久しく食へば渴疾を動じ、人の五臟の神を熏ずる。（）驢肉、無鱗魚と反す。後の發明の條に詳記する。

【主治】【寒熱鼠瘻、瘰癧、生瘡、結聚せる氣を破り、瘀血を下し、濕痺を除く】

（二）獨帚ハ地膚ノ一名。

(本經) 【邪を去り、勞渴、冷風を除く。汗を出すには煮汁を服す。擣き爛らし醋に和して丁腫、腫毒に傅ける】(藏器) 【單用すれば惡風、賊風で口、顏の喎斜するもの、全身(三)𤸷痺し、心虛して物事を忘るるものを治し、力を益し、精を添へ、邪毒の氣を辟け、血脈を通利し、五臟の不足の氣を傳送し、脾、胃を助ける】(甄權) 【血勞、風氣の壅滿で背脊が疼痛し虛汗するを治し、男子の脚氣で筋骨が煩疼するもの、及び陰陽毒、傷寒の頭痛、頭旋、目眩、手、足の筋急を理す】(士良) 【五臟を利し、食物を消化し、氣を下し、酒を醒す。菜にすれば生、熟いづれも食料となり、また茶に煎じて飲み得る。豉汁で煎じて服すれば暴傷寒を治し、能く發汗する】(日華) 【婦人の血風、及び瘡疥を治する肝要な藥である】(蘇頌) 【產後の中風で身體の强直するには、研末して酒で服す】(孟詵) 【風熱を散じ、頭目を淸くし、咽喉を利し、瘡腫を消し、項强、目中の黑花、及び生瘡、陰癩、吐血、衄血、下血、血痢、崩中、痔漏を治す】(時珍)

發明　元素曰く、荊芥は辛く苦し、氣味倶に薄く、浮にして升る。陽である。

好古曰く、肝經の氣分の藥であつて、能く肝氣を捜る。

(三) 𤸷痺ハ麻木ニ同ジ。

時珍曰く、荊芥は足の厥陰の經の氣分の藥であつて、その功力は、風邪を祛り、瘀血を散じ、結氣を破り、瘡毒を消するに特長がある。蓋し厥陰は風、木であつて、血を主つて相火を之に寄托するものだ。故に風病、血病、瘡病の主要藥である。この物が風を治することに就ては、賈丞相は再生丹なりと稱贊し、許學士は神聖の功ありといひ、戴院使は産後の要藥だと證明を與へ、蕭存敬は一捻金と呼び、陳無擇は隱語で擧卿古拜散といつたのである。何等かの根據なくしてかやうに盛なる贊辭を加へられる筈はあるまい。按ずるに、唐韻には、荊の字の發音は擧卿の切、芥字の發音は古拜の切とある。無擇の命名は、二字の發音の反切で隱語にし、その方を祕したものである。

又曰く、荊芥は魚蟹、河豚と反するものだといふ。その説は本草、醫方にはいづれも言及してないが、稗官小說には往往記載されてある。按ずるに、李廷飛の延壽書には『凡そ一切の無鱗魚を食へば荊芥を忌む。(四)黄鱨魚を食つた後に之を食へば吐血する。しかし地漿でこれを解することが出來る。蟹と共に食へば風を動ずる』といつてある。又、蔡絛の鐵山叢話には『予が(五)嶺嶠にゐた折、黄顙魚を食つてか

(四) 黄鱨魚ハ黄顙魚ノ一名、本書四十四巻ニ出ヅ。

(五) 嶺嶠トハ嶺南地方ノ山谷地ヲイフ。

ら、薑芥の禁を犯して立ろに死んだものを目撃した。怖ろしいこと鉤吻よりも甚しいものだ』とある。洪邁の夷堅志には『呉人の魏幾道は(六)黄顙魚の羮を食つてから、荊芥を取つて茶に和して飲むと、少頃すると足に痒さを感じ、やがて上つて心、肺に徹し、狂ひ走り、足の皮が裂けるやうに覺えたので、急に藥を服して二日の後漸く解した』とある。陶九成の輟耕錄には『凡そ河豚を食つたときは荊芥の藥を服してはならぬ。大いに反するものであつて、予が江陰にゐた折のこと、ある儒者がこのために命を喪つたのを實見した』とある。葦航の細談には『凡そ荊芥の風藥を服するには、魚食を忌む』とある。楊誠齋は『嘗てある人が立ろに死亡したものを實見した』といふ。時珍按ずるに、荊芥なるものは日常無雜作に用ゐる藥であるが、その相反すること此の如きものである。故に此にこれを詳錄して警戒とする。又、按ずるに、物類相感志には『河豚は三五回荊芥と共に水を換へて煮て食へば毒がなくなる』といつてある。その說の前記の諸書と異るは如何なるわけであらうか。しかし、一般に生命を大切にするものは前說を守つて警戒する方が安全である。

附　方　舊四、新二十七。

【頭風の項強】八月に荊芥穗を採つて枕に作り、また床

(六)黄顙魚、畔田氏ノ水族志ニハギギニ充ツ。

注 角弓ハ角ヲ以テ張ツタ弓。

の下に鋪き、立春の日に之れを取去る。（千金方）【風熱頭痛】荊芥穗、石膏等分を末にし、二錢づつを茶で調へて服す（永類鈐方）【風熱牙痛】荊芥根、烏桕根、葱根等分を湯に煎じて頻りに含漱する。【小兒の驚癇】一百二十種の同病には、荊芥穗二兩、白礬を半生半枯にして一兩を末にし、糊で黍米大の丸にして硃砂を衣にかけ、一日二回二十丸づつを薑湯で服す（醫學集成）【一切の偏風】口、眼の喎斜するには、青荊芥一斤、青薄荷一斤を、共に砂盆に入れ研り爛して生絹で絞り、その汁を瓷器に入れて煎膏し、漉して滓を取り、それを三分して二分を日に乾して末にし、殘の膏でその末を和して梧子大の丸にし、三十丸づつを白湯で服す。朝、夕各一服する。風を動ずる食物を忌む。（經驗方）【中風口噤】荊芥穗を末にして酒で二錢を服すれば立ろに癒える。これを荊芥散と名ける。賈似道の言に『この方は曾公の談錄に出てゐるもので、度度用ゐて甚だ效驗があつたといふ。その子の順なる者が中風口噤を病み、已に危篤に陷つた時も、これを服して立ろに癒えた。眞に再生丹である』といつてある。【產後の中風】華佗の愈風散――婦人產後の中風口噤、手、足の瘛瘲で角弓の如く反り返るもの、或は產後の血運で人事不省となり、四肢強直し、或は

（八）心眼倒築し、吐瀉して死せんとするを治す。荊芥穗子を微し焙じて末にし、三錢づつを豆淋酒で調へて服す。或は童尿で服す。口噤には齒を引開けて灌ぐ。（九）斷噤には鼻中に灌ぎ入れる。その效神の如きものだ。一般に産後甚だ眩すれば汗が出る。そのために腠理が疎くなるから風に中り易いのだ。時珍曰く、この方は諸書にその妙效を稱揚されてあるもので、姚僧坦の集驗方には『酒で服するを如聖散と名け、藥が口に入れば立ろにその應驗を待つべきものだ』といひ、陳氏の方には、擧卿古拜散と名け、蕭存敬の方には、古老錢の煎湯で服するを一捻金と名け、王貺の指迷方には、當歸等分を加へ水で煎じて服すといひ、許叔微の本事方には『此の藥はまことに奇效神聖の功あるものだ。ある婦人は産後に久しく睡り、醒めたとき昏昏として醉ゑるが如く、人事不省の狀態に陷つた。その時、醫師が此の藥、及び交加散を用ゐて「これを服めば後に睡るであらう。そして左手で頭を搔く筈だ」といつたが、果してこれを服するとその通りのことをした』とあり、咎殷の産寶方には『この病は多くは怒氣で肝を傷め、或は憂氣が內鬱し、或は産蓐の上に坐して風を受けて發るものである。急に此の藥を服するがよい』とあり。戴原禮の證治要訣には、

（八）心眼倒築、心臟ガ劇シク鼓動シ目球ガ上向スルコトカ。
（九）斷ハ齒根ノ肉即ハグキ。

獨行散と名け、賈似道の悦生隨抄には、再生丹と呼んである。【産後の迷悶】怒氣に因つて發熱し、迷悶する者に用ゐる獨行散——荊芥穗を新瓦で半炒半生にして末にし、童尿で一二錢を服す。角弓の如く反り返るには豆淋酒で服す。或は剉んで散にし、童尿で煎じて服するが極めて妙である。蓋し荊芥なるものは産後の要藥であるが、角弓の如く反り返るものは婦人の急切なる症候であつて、この病證は十の一二が助かるだけだ。(戴原禮要訣)【産後の血運】心を擣き、目を廻し、舌が縮み、死せんとするものである。乾荊芥穗を擣き篩つて末にし、二錢七づつを童尿一酒盞で調勻して熱服すれば立ろに效がある。口噤するには齒を引き開け、口閉するには鼻から灌ぎ込む。いづれも效がある。近世の名醫はこれを用ゐて效を擧げぬといふことはなかつた。(圖經本草)【産後の血眩】風虚、精神昏冒には、荊芥穗一兩三錢、桃仁五錢を皮尖を去つて炒つて末にし、水で三錢を服す。喘するときは杏仁を皮尖を去つて炒り、甘草を炒つて各三錢を加へる。(保命集)【産後の下痢】大荊芥穗四五本を盞内で燒いて性を存し——油、火に觸れぬやうにする——麝香少量を入れて沸湯少量で此の藥を調へて服するがよし。微なるものだが、よく大病を癒すものだから

忽せにしてはならぬ（蕭師方）【産後の鼻衄】荊芥を焙じて研末し、童尿で二錢を服す。これは海上の方である。（婦人良方）【九竅の出血】荊芥を酒で煎じ口をつづけて服す（直指方）【口鼻の出血】涌泉の如くに出血するは酒色過度が原因である。荊芥を焼いて研り、陳皮湯で二錢を服す。二服を過ぎずして治す。【吐血の止まぬもの】經驗方では、荊芥を根のまま洗つて搗き、その汁半盞を服す。乾いた穗を末にするもよし。○聖惠方では、荊芥穗を末にし、生地黄汁で調へて二錢を服す。【尿血】荊芥、縮砂等分を末にし、一日三回、糯米飲で三錢づつを服す。（集簡）【崩中の止まらぬもの】荊芥穗を麻油で點けた燈火の上で焼き焦して末にし、二錢づつを童尿で服す。これは夏太君娘娘の方である（婦人良方）【痔漏腫痛】荊芥を煮た湯で日毎に洗ふ。（簡便方）【大便下血】經驗方では、荊芥を炒つて末にし、二錢づつを米飲で服す。婦人は酒で服するもよし。また麪に拌ぜて餛飩にして食ふ。○簡便方では、荊芥二兩、槐花一兩を共に紫に炒つて末にし、三錢づつを淸茶で服す。【小兒の脫肛】荊芥、皂角等分を煎じた湯で洗ひ、鐵漿を上に塗る。子宮脫出もこれで治癒する。（經驗方）【陰囊腫痛】荊芥穗を瓦で焙じて散にし、酒で二錢を服すれば直ちに腫が

(一〇)武進縣ハ晉ニ置ク。今ノ湖南省常德縣ナリ。

(一一)大觀ニ二升トアリ。

(一二)纏脚瘡ハ帯狀匍行疹。

退く。(壽域神方) 【小兒の臍腫】荊芥の煎湯で洗淨し、煨いた葱を薄く刮つて火毒を出して貼れば消する。(海上方) 【瘰癧潰爛】癧瘡が牽いて胸前から兩腋に至つて茄子ほどの塊となるもの、或は牽いて兩肩上に至つて四五年治療不能のもの、いづれもこれで治癒すること神の如き效がある。(一〇)武進縣の朱守仁の傳に『その頸や頭の囘らぬものも此の藥を用ゐること數日にして減じ、瘡の爛破するやうなものにもよし』とある。荊芥根の下一段を剪り碎いて煎沸した湯で溫洗し、良久して爛破した處が紫黑色に見えたとき、鍼で一刺し刺して血を去つて再び洗ふ。三四回で爛破が癒ると、樟腦、雄黃等分を末にして麻油で調へ、その上に掃いて水を出し、次の日再び洗ひ再び掃き、癒るを以て度とする。(活法機要) 【丁腫諸毒】荊芥一握を切つて水五升で(一一)一升に煮取り、二回に分けて冷服する。(藥性論) 【一切の瘡疥】荊芥末を地黃の自然汁の熬膏で和して梧子大の丸にし、三十五丸づつを茶、酒隨意のもので服す。(普濟方) 【脚椏の濕爛】荊芥葉を搗いて傅ける。(簡便方) 【(一二)纏脚瘡】荊芥の燒灰を葱汁で調へて傅ける。豫め甘草湯で洗ふ。(摘玄方) 【小兒の風寒】煩熱して痰があり、人事不省なるには、荊芥穗半兩を焙じ、麝香、片腦各一字を末にし、半錢

づつを茶で服す。大人の場合でも治療する。（普濟方）【頭、目の諸疾】一切の眼疾、血勞、風氣の頭痛、頭旋、目眩には、荊芥穗を末にして三錢づつを酒で服す。（龍樹論）【癃閉不通】小腹急痛するには久新を問はず、荊芥、大黃を末にし、等分を溫水で三錢を服す。小便不通には大黃を半減し、大便不通には荊芥を半減する。これを倒換散と名ける。（普濟方）

薄荷（唐本草）

和名　はくか
學名　Mentha arvensis, L.
科名　脣形科

校正　菜部より此に移し入る。

釋名　**菝蔄**　青は跋活（バックワツ）である。**蕃荷菜**　蕃は音鄱（ハン）である。**呉菝蔄**（食性）**南薄荷**（衍義）**金錢薄荷**　時珍曰く、薄荷とは俗稱であつて、陳士良の食性本草には菝蔄と書き、楊雄の甘泉賦には茇括と書き、呂忱の字林には茇苦と書いてあるのだから、薄荷の訛稱なることが判る。孫思邈の千金方に蕃荷と書いてあるもまた地方音の訛である。今一般に藥用としては多く蘇州のものを勝れ

(一) 木村(康)曰ク、薄荷ハ本邦及支那ニ於テ古來醫藥及民間藥トシテ慣用セリ、英國ニテハ一六九六年始メテ薄荷アルコトヲ知リ一七七二年ニ至リ英國藥局方ニ之ヲ收載セリ、而シテ薄荷水ハ獨逸ニ於テハ一七七七年以來藥用ニ入レタリ、薄荷トハ培植セル唇形科ノ植物 Mentha 屬諸種ノ通稱ニシテ他ノ植物ニ認メザル所ノ特異ノ香氣ヲ有スルモノナリ、獨逸其他歐洲諸國ノ藥局方ニテハ其ノ原植物ヲ M. Piperita, L. トナセリ、而シテ日本藥局方ニ揭ゲル薄荷葉ハ莖ヲ去リタル葉ナリ、本邦ニテハ薄荷葉ヲ採ルノ目的ヲ以テ主ニ北海道、米澤、新

たものとする。故に陳士良は胡菝蔺と區別するために呉菝蔺といつたのだ。宗奭曰く、世にこれを南薄荷と稱するは、龍腦薄荷なる一種と區別せんがためである。機曰く、小兒の方に多く金錢薄荷を用ゐる。それはその葉が小さく圓く頗る錢の形に似てゐるからで、金銀と書くは誤である。

(二)集解 頌曰く、薄荷は諸處にある。莖、葉は荏に似て尖つて長く、冬を經ても根が枯死せぬ。夏、秋に莖、葉を採つて曝乾する。古方には用ゐることが稀で、或は薤と與に(三)韲にして食つたものだが、近世では風寒を治する要藥となつてゐるところから、民家で多く栽培する。又、此の物に相類するもので胡薄荷といふものがあるが、味の少し甘い點が異ふのである。これは江、浙地方に生ずるもので、彼の地では多く茶にして飲み、俗に新羅薄荷と稱してゐる。汴洛近傍の佛教寺院にも或は一二植ゑてある。天寶單方に所謂連錢草とあるがこれだ。

(薄荷)

又、石薄荷といふものが江南地方の山石の間に生ずる。葉は微し小さく、冬に至つて紫色になるものだ。別に功力があるといふことを聞かない。

恭曰く、薄荷は人家で栽培する。やはり生で食へるものだ。一種の蔓生のものも功用は相似たるものだ。

時珍曰く、薄荷は一般に多く栽培する。二月に舊根から生える苗を清明節の前後に分ける。莖は四角で赤く、その葉は相對して生え、生えた當時の形は長くして頭が圓いが、長ずるに及んで尖るのである。吳、越、川、湖の地方では多くこれを茶の代りにする。蘇州で栽培するものは莖が小さくて氣が芳しい。江西のものは稍粗く、川蜀のものは更に粗い。藥に入れるには蘇州のものが勝れてゐる。物類相感志には『凡そ薄荷を採收するには、一夜置きに糞水を澆いで雨後に悉く刈取れば性が涼であるが、然らざれば涼でない』とある。野生のものも莖、葉の氣味は都て相似たものだ。

莖葉　【氣味】【辛し、溫にして毒なし】　思邈曰く、苦く辛し、平なり。元素曰く、辛し、涼なり。斅曰く、莖の性は燥である。甄權曰く、薤と共に虀にして

潟、山陽道地方、千葉縣下ニ多ク培植ス、而シテ本品ハ赤ジクニシテ野生ノアヂジクハ劣等ナリトス。

(二) 虀ハツケモノ。

(三) 木村(康)曰ク、(成分)陰乾セル薄荷葉ハ之ヲ水ト共ニ蒸溜スルトキハ大約一%ノ揮發油(薄荷油)ヲ得、薄荷油ハ薄荷腦(一)メントールニシテ精油中ノメントールハ七〇乃至九〇%ヲ算スレドモ收得量ハ五〇%ヲ普通トス)メントーン、メンテノン、左旋リモーネン、ヘキセノールフエニル、醋酸エステル、エチルアミルチトン等ヲ含有ス。文獻 Ber. von Schimmel (1910, Okt. 75.)。藥誌三百六(明、

四四、八九四。村山義溫、藥誌三二(明、四四)一〇三七。藥誌三三四(明、四三)一四一。H. Walbaum: J. pr. Chem. [ii] 三(1917)二四五。藥誌四四一(大、七)九四九。Ber. von Schimmel. 1912, April. 藥誌三六四(大、一)六一一。熊野喜之助—工化、一八(大、四)四一、三三(大、八)二五五、二九六。木村雄吉郎—工化、七(明三七)一二九七。

白・木村(秦)曰ク、本草ノ水蘇ト薄荷ト共ニ薄荷ニシテ、薄荷油ノ原料ニ供シ、其精油ヲ得、コレヨリ薄荷腦(局方メントール)ハ其精製セルモノナリ)ヲ製ス、日本藥局方ノ薄荷油(オレウムメンテー)ハ薄荷腦ヲ採取セシ…

食ふによいものだが、病の瘥えたばかりのものは食つてはならぬ。虛汗して止まぬものだ。瘦弱の人が久しく食へば消渴の病を萠させる。

(三) 主治 【賊風、傷寒に汗を發す。惡氣、心腹脹滿、霍亂、宿食不消化、下氣。煮汁を服すれば汗を發し、大いに勞乏を解す。やはり生で食へる】(唐本) 【莖にして久しく食へば腎氣を抑け、邪毒を辟け、勞氣を除き、口氣を香潔ならしめる。煎湯で漆瘡を洗ふ】(思邈) 【關節を通利し。毒汗を發し。憤氣を去り、血を破り、痢を止める】(甄權) 【陰、陽毒、傷寒頭痛を療ず。四季これを食ふがよし】(士良) 【中風失音を治し、痰を吐す】(日華) 【傷風、頭腦風に主效があり、關格を通ずる。また小兒の風涎の要藥である】(蘇頌) 【杵汁を服すれば心臓の風熱を去る】(孟詵) 【頭、目を淸くし、風熱を除く】(李杲) 【咽喉、口齒の諸病を利し、瘰癧、瘡疥、風瘙、癮疹を治す。擣汁で含漱すれば(舌)舌胎語澀を去る。葉を挼んで鼻を塞げば衄血を止める。蜂螫、蛇傷に塗る】(時珍)

發明 元素曰く、薄荷は辛し、涼である。氣味共に薄く、浮にして升る、陽である。故に能く頭頂、及び皮膚の風熱を去る。士良曰く、薄荷は能く諸藥を導い

發油ナリ、薄荷腦ハ矯味藥ニ矯臭ノ目的ニ用ヰラレ、又薄荷油ト共ニ菓子、齒磨等ノ製造ニ多量ニ消費セラル。日本產薄荷油ハメントール含有量多キテ長所トスルモ稍苦味ヲ有シ、芳香亦歐米薄荷油ニ劣ル故ニ日本產薄荷油ハ主トシテメントール製造原料ニ用ヰ、菓子用ノ薄荷油ハ歐米產ヲ用ウ、就中英國ミッチャム地方產ノモノハ Mitcham Oil ト稱シ、芳香佳良ナルヲ以テ珍重セラル（邦產藥用植物）

(五) 舌胎ハ舌ノアレルコト。

(六) 茵草ハ卽莽草。

て營衛に入る　故に能く風寒を發散する。宗奭曰く、小兒の驚狂、壯熱にはこれを用ゐて藥を導く。又、骨蒸熱勞を治するには、汁で衆藥と共に熬膏にして用ゐる。猫が薄荷を食へば醉ふものだ。それは物の相感の現象である。好古曰く、薄荷は手、足の厥陰の氣分の藥であつて、能く肝氣を搜り、また肺盛有餘の肩背痛、及び風寒で汗の出るものに主效がある。

時珍曰く、薄荷は手の太陰、足の厥陰に入る。辛は能く發散し、涼は能く淸利し、風を消し、熱を散ずるに專らなるものだ。故に、頭痛、頭風、眼目、咽喉、口齒の諸病、小兒の驚熱、及び瘰癧、瘡疥の要藥である。戴原禮氏が、猫咬を治するにその汁を塗つて效があつたといふは、蓋しその相制する關係を應用したものだ。陸農師は『薄荷は猫の酒である。犬は虎の酒である。桑椹は鳩の酒である。(六)茵草は魚の酒である』といつてある。昝殷の食醫心鏡には『薄荷煎を豉湯、煖酒と和して飲み、茶に煎じ、また生で食ふ。いづれも宜し、菜として人體に益あるものだ』といつてある。

附方　舊二、新八。【上を淸くし痰を化す】咽、膈を利し、風熱を治す。薄荷末

（七）眼弦ハ眼瞼。

を煉蜜で芡子大の丸にし、一丸づつ噙む。白沙糖に和するもよし。（簡便單方）【風氣瘙痒】大薄荷、蟬脫等分を末にし、一錢づつを溫酒で調へて服す。（永類鈐方）【舌胎語蹇】薄荷の自然汁に白蜜、薑汁を和して擦る。（醫學集成）【（七）眼弦の赤爛】薄荷を生薑汁に一夜浸して晒乾して末にし、一錢づつを沸湯に泡けて洗ふ。（明目經驗方）【瘰癧結核】破れたものにも破れぬものにも、新薄荷二斤の汁を取り、皂莢一挺を水に浸し皮を去つて搗いた汁と共に銀、石器の中に入れて熬膏し、連翹末半兩、連白の靑皮、陳皮、黑牽牛の半生半炒のもの各一兩、皂莢仁一兩半を入れ、共に搗き和して梧子大の丸にし、三十丸づつを連翹の煎湯で服す（濟生方）【衄血不止】薄荷汁を滴す。或は乾けるものを水で煮て綿に裹んで鼻を塞ぐ。（許學士本事方）【血痢の止まぬに】薄荷葉の煎湯を常服する。（普濟）【耳に水の入りたるとき】薄荷汁を滴し入るれば立ろに效がある（外臺祕要）【蜂蠆の螫傷】薄荷葉を挼んで貼る（同上）【火毒の瘡】火傷で火氣が內に入り、兩股に瘡を生じて汁水の淋漓たるには、薄荷の煎汁を頻りに塗れば立ろに愈える。（張杲醫說）

(一)積雪草（本經中品）

和名　未詳
學名　Hydrocotyle spp.
科名　繖形科

【釋名】胡薄荷（天寶方）　地錢草（唐本）　連錢草（圖經）　海蘇

弘景曰く、積雪草は方藥には用ゐない。想ふにこの草は、性の寒、涼なるところからこの名稱が起つたものだらう。恭曰く、此の草は、葉が圓くて錢のやうだ。故に荊楚地方では地錢草といふ。徐儀の藥草圖には連錢草と名けてある。その他の說明は下文を見よ。

【集解】別錄に曰く、積雪草は荊州の川谷に生ずる。恭曰く、この草は、葉は圓く大さ錢ほど、莖は細くして勁く、溪間の側に蔓生する。生ずる處がやはり稀だ。頌曰く、今は諸處にある。八九月に苗葉を採つて陰乾して用ゐる。段成式の酉陽雜俎に『地錢は葉は圓く莖細く、地上に蔓延する。一には積雪草といひ、一には連錢草といふ』とある。謹んで按ずるに、天寶單行方には『連錢草は(二)咸陽の下濕の地に生じ、また(三)臨淄郡、(四)濟陽郡の池澤中に生ずる。甚だ香しいものだ。俗間では或は葉は圓くして薄荷に似たもので、江東、吳越、(五)丹陽郡に極めて多く、彼の

(一) 牧野云フ、積雪草ハちどめぐさ屬即チHydrocotyle所屬ノモノデハアレド其種名ハ今遽カニ明ラメ難イ、ソシテ必ズシモタダ一種ノミニ限定シタ名デハナイヤウデアル。

(二) 咸陽ハ秦孝公始テ此ニ都ス。今ノ陝西省長安縣東ニアリ渭城、即チ故城ナリ。

(三) 臨淄郡ハ今ノ山東省膠東道ノ地ナリ。

(四) 濟陽郡ハ晉ニ置ク、漢ノ濟陰郡ノ地ナリ。遼志ノ濟陰郡ノ註參照。

(五) 丹陽郡ハ金部赤銅ノ註ヲ見ヨ。

地では常に生菜に充てて食ふといふ。河北の(六)柳城郡では盡く海蘇と呼ぶ。好く水の近くに生ずるもので、冬を經ても枯死せぬ。咸陽、洛陽にもやはりある。或は胡薄荷と名け、所在いづれにもあるものだ。單に此の一味を服すれば婦人の小腹痛を療ずる』とある。

宗奭曰く、積雪草は南方に多く、陰濕の地に生ずる。必ずしも荊楚のみとは限らない。形は水荇のやうだが小さく、表面が光潔で微し尖つた點が異ふ。

（積　雪　草）

葉は一葉づつ生える。今一般にこれを連錢草といふは、蓋しその姿の形容だ。

時珍曰く、按ずるに、蘇恭は薄荷の註に『一種蔓生のものも功用は相似たものだ』といひ、蘇頌の圖經には(七)『胡薄荷は薄荷と相類するがただ味が少し甘く、江、浙の地方に生ずるもので、彼の地方では多く茶飲に作り、俗に新羅薄荷と呼ぶ。天寶方に用ゐてある連錢草はそれだ』といふ。この二說に據れば積雪草、卽ち胡薄荷で、薄荷の蔓生のものといふことになる。又、臞仙の庚辛玉冊には『地錢は陰草である。

(六) 柳城郡ハ今ノ熱河省凌源縣ノ地ナリ。

(七) 牧野云フ、此ニイフ胡薄荷ハ小野蘭山ノ所謂ツボクサニ、之ハ今ノ唇形科ノかきどほし、卽チGlechoma hederacea L. (Nepeta Glechoma Benth.) ナラウト思フ。

荊楚、江淮、閩浙の地方に多い。宮院、寺廟の石疊の間に生えてゐる。葉は錢に似て圓く、地上に蔓延する。香は細辛の如きものだ。花の開いたのは見たことがない』といつてある。

莖葉 (八) 【氣味】 【苦し、寒にして毒なし】 大明曰く、苦く辛し。頌曰く、甘し、平にして毒なし。時珍曰く、汁を取つて用ゐれば草砂を結晶し、硫黄を伏す。

(九) 【主治】 【大熱、惡瘡、癰疽が浸淫して飛び飛びに赤くなり、皮膚も赤くなつて身熱するもの】(本經) 【擣いて熱腫、丹毒に傅ける】(蘇恭) 【暴熱、小兒の寒熱、腹內の熱結に主效がある。擣汁を服す】(藏器) 【單用すれば瘰癧、鼠瘻、寒熱の時節來往を治す】(甄權) 【鹽で揉んで腫毒、并に風瘮、疥癬に貼る】(日華) 【胡猿閙は風氣壅併して胸膈を攻むるに、湯にして飲めば立ろに效がある】(士良) 【汁に研つて暴赤眼に點けるが良し】(時珍)

【附方】 舊二、新二。 【熱毒癰腫】 秋後に連錢草を採收して陰乾し、末にして水で調へて傅ける。生で搗いてもよし(寇氏衍義) 【婦人の小腹痛】 頌曰く、天寶單行方に『婦人が忽ち小腹中に痛みを感じ、月經の初潮に腰中の切痛を覺え、脊の邊に連

(八) 木村(康)曰ク、かきどうしノ葉ハ精油約〇、〇三%單寧及苦味質等ヲ含有ス。

(九) 木村(康)曰ク、俗ニ小兒ノ癇ヲ治ストテフ、故ニ癇取草ノ名アリ、歐洲ニテモ強壯劑トシテ民間ニ賞用セラレ、又感冒及ビ喀血ニ和胸劑トシテ煎劑ヲ用ウ。

（一〇）朝、大凡二日ニ作す。
（一一）朝、大凡二日ニ作す。

つて刀錐で刺されたやうに忍び難く痛むをば、多くの醫師は判斷が付かずして、鬼疰と考ひ、妄に諸藥を服ませるが、終に何等の效もなく、更にその病を重らすものである。よく前記の經過、容體を審察するに、これは左の藥を用ゐるが適當のものである。その藥は積雪草を夏五月、正に花の開いた時に採つて曝乾し、搗き篩つて幓にし、二方寸七づつを好き醋二小合に和してよく攪き拌ぜ、早朝空腹にして頓服する。毎（一〇）朝一服、反應を感ずるを度とする。婦人の陰冷の場合には、前の藥五兩に桃仁二百箇を皮尖を去つて加へ、熬り搗いて散にし、蜜で梧子大の丸にして毎（一一）朝空腹に飲、及び酒で三十丸を服す。一日二回、癒るを以て度とする。麻子、蕎麥を忌む。（圖經本草方）【男女の血病】九仙驅紅散――諸血を嘔吐するもの、及び便血、婦人の崩中を治する神效がある。積雪草五錢、當歸を酒で洗ひ、卮子仁を酒で炒り、蒲黄を炒り、黄連を炒り、條黄芩を酒で炒り、生地黄を酒で洗ひ、陳槐花を炒つて各一錢を用ゐる、上部の病には藕節一錢五分を加へ、下部の病には地楡一錢五分を加へて水二鍾で一鍾に煎じて服す。神效がある　此の方はこれを得て甚だ祕密にしたものである。この草は本草に記載されてある主治と同じくないので、そこに如何な

る理論關係があるものか解し得ない。（董炳集驗方）【牙痛に耳を塞ぐ】連錢草、卽ち積雪草を水溝の汚泥に和して共に搗き爛らし、痛む方の左右に隨つて耳內を塞ぐ。（摘玄方）

蘇（一）（別錄中品）

和名　しそ
學名　Perilla ocimoides, L. var. crispa, Benth.
科名　唇形科

校正　菜部より此に移し入る。

釋名　紫蘇（食療）　赤蘇（肘後方）　桂荏　時珍曰く、蘇の字は穌に從ふ。音は酥（ソ速烏の切）で舒暢（ノブル）の意味である。蘇は性が舒暢で、氣を行らし、血を和するものだから蘇といふのだ。紫蘇とは白蘇と區別するための稱呼である。蘇なる植物は荏の類だが、味は更に辛く、桂のやうだ。故に爾雅には之を桂荏と謂ふ。

集解　弘景曰く、蘇は葉の裏が紫色で氣が甚だ香しい。裏が紫でなく香しくなくして荏に似たものは野蘇と名ける、藥用に堪へない。

頌曰く、蘇とは紫蘇のことだ。諸處にある。兩面の皆紫なものが佳い。夏は莖、

（一）牧野云フ、しそニハ種種ノ園藝的變種種品ガアル事ハ世人ノ知レル如キデアル、ちりめんじそ、あをじそ、かためんじそ等ガソレデアル。えごま（荏）トハ最モ近緣ノ品デ、此兩品ノ間ニハ時時間種ガ出現スル。

葉を採り、秋は子を採る。水蘇、魚蘇、山魚蘇の數種あるが、いづれも荏類である。それぞれ別に條章を掲げる。

時珍曰く、紫蘇、白蘇はいづれも二三月に種を下し、或は舊い子の地に在つたものから自から生える。莖は四角、葉は圓くして尖があり、四圍に鋸齒がある。肥地のものは表裏共に紫だが、瘠地のものは表面が青く裏面が紫だ 表裏共に皆白いものは白蘇、乃ち荏である。紫蘇は嫩葉を採つて蔬菜に和して食ひ、或は鹽、及び（一）梅滷で菹にして食へば甚だ香しい。夏（二）日には熱湯にして飲む。五六月に根のまま採り、火でその根を煨つて陰乾すれば久しく經つても葉が落ちない。八月細かい紫の花を開く 穗になり房になつて荊芥穗のやうだ。九月の半に枯れるとき子を採收する。子は細かい芥子のやうだが、色が黄赤だ。また荏油のやうな油を取り得る 務本新書には『凡そ地界の畔や通路の傍には蘇を植ゑるがよい。六畜の入るを遮るものだ。子を採り油を取つて燈火に點ずれば甚だ明るい。或はその油を

（紫蘇）

（一）梅滷ハ梅酢。
（二）金陵本ニ日ヲ月ニ作ル。

熬めて器物に塗るもよい』とある。丹房鑑源には『蘇子油は能く五金、八石を柔かにする』とある。沙州記には『(四)乞弗虜の地方では、五穀を種ゑずしてただ蘇子のみを食ふ』とある。故に王禎は『蘇には遮護の功あり、又、燈油の用あり、闕く可からざるものだ』といつたのである。今は一種の(五)花紫蘇なるものがある。その葉は細齒、密紐で剪つたやうな形のものだ。香も色も、莖も子も紫蘇と異はぬ。一般に回回蘇と稱してゐる。

斅曰く、薄荷は根、莖が眞に紫蘇に似てゐるが、ただ葉が異ふだけである。薄荷の莖は燥であるが紫蘇の莖は和である。藥に入れるには、刀で青薄皮を刮り去つて剉んで用ゐる。

莖　葉(六) **氣　味**　【辛し、溫にして毒なし】李廷飛曰く、鯉魚と共に食つてはならぬ。毒瘡を生ずるものだ。

主　治　【氣を下し、寒中を除く。その子が尤も良し】(別錄)　【寒熱を除き、一切の冷氣を治す】(孟詵)　【中を補し、氣を益し、心腹脹滿を治し、霍亂轉筋を止め、胃を開き、食物を落付け、脚氣を止め、大、小腸を通ずる】(日華)　【心の經を通じ、

(四) 乞弗虜トハモト鮮卑族ニシテ、隴山以西ニ住ミ、晋ノ時ニ西秦國ヲ建ツ。

(五) 花紫蘇ハ和名ちりめんじそ。

(六) 木村(康)曰ク、全草ハ精油約〇・五%ヲ含有ス、精油ノ主成分ハペリラアルデヒードヲ有シ、本植物特有ノ芳香ノ因ヲナス。文献 吉本衛三ー藥誌三四七(明、四四)1。F,W Semler und B, Zaar, :Ber.44(1911)52.

(七) 木村康一曰ク、紫蘇油ハ葉中ノ精香料トス、吉川氏ニヨレバ紫蘇油ハ強キ防腐力ヲ有シ例ヘバ其二〇瓦ハ醤油一石ヲ完全ニ防腐スト云フ。ペリラアルドキシムハ砂糖ノ二〇〇〇倍ニ相當スル甘味ヲ有シ、又防腐力ヲ有ス。(文獻 吉川滿治、富澤壽次郎：工化二三、大、九、三四三；藥學雜誌、四六、一月號。)

脾、胃を益す。煮て飲むが最もよし。橘皮と相宜きものである】(蘇頌)【肌を解し、表を發し、風寒を散じ、氣を行らし、中を寛にし、痰を消し、肺を利し、血を和し、中を溫め、痛を止め、喘を定め、胎を安にし、魚蟹の毒を解し、蛇、犬の咬傷を治す】(時珍)【葉を生で食ひ、羹にして食へば一切の魚肉の毒を殺す】(甄權)

(七) 發明　頌曰く、風毒を宣通する場合には單に莖のみを用ゐ、節は取去るが尤も宜し。

時珍曰く、紫蘇は近世の重要な藥である。その味は辛くして氣分に入り、その色は紫で血分に入る。故に橘皮、砂仁と共に用ゐれば、氣を行らし、胎を安んずる。藿香、烏藥と共に用ゐれば、中を溫め、痛を止める。香附、麻黃と共に用ゐれば、汗を發し、肌を解す。芎藭、當歸と共に用ゐれば、血を和し、血を散ず。木瓜、厚朴と共に用ゐれば、濕を散じ、暑を解し、霍亂、脚氣を治す。桔梗、枳殼と共に用ゐれば、膈を利し、腸を寛にする。杏仁、萊菔子と共に用ゐれば、痰を消し、喘を定める。

權曰く、宋の仁宗皇帝が翰林院に命じて湯、飲の次位を定められたとき、紫蘇の

熟水を第一として奏上してゐる。それはこの物が能く胸膈の浮氣を下すからであらうが、蓋し久しく服すれば眞氣を泄すといふことは知らなかつたのだ。

宗奭曰く、紫蘇は、氣は香しく、味は微し辛く甘し。能く散ずるものである。今一般に朝夕紫蘇湯を飮むが、甚だ益なきことだ。醫家で『芳草は豪貴の疾を致す』といふその一はこれである。脾、胃の寒する人ならば多くは滑泄を起す。世人は往往それに氣が付かない。

【正　誤】頌曰く、蘇は雞瘕に主效のあるものだ。本經には記されてないが、南齊の褚澄は、李道念が（八）白瀹雞子を食つて瘕を發したとき、蘇を煮て服ませると雞雛を吐出して癒えたといふ。

時珍曰く、按ずるに、南齊書に褚澄が用ゐたとあるものは蒜であつて蘇ではない。蓋し蒜と蘇と二字の形が似てゐるところから、謄錄の際に誤つたのだ。蘇氏の考證は正確を得ない。蒜の條下に詳記する。

【附　方】舊二、新十三。【感寒上氣】蘇葉三兩、橘皮四兩を酒四升で一升半に煮取り、二回に分服する。（肘後方）【傷寒氣喘】喘して止まぬには、赤蘇一把を水三升

（八）白瀹雞子ハ半熟ノユデタマゴ。

（九）啘ハ呃逆即シヤクリ。

（一〇）大甖ニ甕ニ作ル。

（一一）風狗ハ狂犬。

で一升に煮取つて少しづつ飲む。（肘後）【勞復、食復】死せんとするには、蘇葉の煮汁二升を飲む。また生薑、豆豉を入れ、共に煮て飲むもよし。（肘後）【卒（九）啘の止まぬもの】香蘇を濃く煮て三升を頓服するがよし。（千金）【霍亂脹滿】吐下し得ぬには、生蘇の擣汁を飲むが佳し。乾蘇の汁もよし。（肘後方）【諸種の失血病】紫蘇を多少を限らず（一〇）大甖中に入れて水で煎じ、蒸發せしめ滓を去つて熬膏し、炒熟した赤豆末を和して梧子大の丸にし、酒で三五十丸づつを常服する。（斗門方）【金瘡出血】出血止まぬには、嫩き紫蘇葉 桑葉を共に擣いて貼る。（永類鈐方）【顚倒、打撲の傷損】紫蘇を擣いて傅ければ自ら瘡口が合する。（談埜翁試驗方）【傷損出血】止まぬには陳紫蘇葉をその流出た血にひたし、揉み爛らして傅ける。血は膿とならず、且つ瘢えて後瘢の殘らぬこと甚だ妙である。（永類鈐方）【（一一）風狗の咬傷】紫蘇葉を嚼んで傅ける。（千金方）【蛇虺の咬傷】紫蘇葉を擣いて飲む。（千金方）【蟹の中毒】紫蘇の煮汁二升を飲む。（金匱要略）【飛絲の目に入りたるとき】舌の上に泡を出し、紫蘇葉を嚼み爛らして白湯で嚥む。（危氏得效方）【乳癰腫痛】紫蘇の煎湯を頻りに服し、幷に搗いて封ずる。（海上仙方）【欬逆短氣】紫蘇の莖、葉二錢、人參一錢を水一鍾で煎じて服

す。(普濟)

子 【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【氣を下し、寒を除き、中を溫める】(別錄)【上氣欬逆、冷氣、及び腰、脚中の濕氣、風結氣を治す。汁に研り粥に煮て長く食すれば身體を肥白にし香しくする】(甄權)【中を調へ、五臟を益し、霍亂、嘔吐、反胃を止め、虛勞を補し、身體を肥健にし、大小便を利し、癥結を破り、五膈を消し、痰を消し、嗽を止め、心、肺を潤ほす】(日華)【肺氣喘急を治す】(宗奭)【風を治し、氣を順にし、膈を利し、腸を寛にし、魚蟹の毒を解す】(時珍)

【發明】弘景曰く、蘇子は氣を下す。橘皮と相宜し。時珍曰く、蘇は子と葉と功力は同じであつて、風氣を發散するには葉を用ゐるがよく、上、下を淸利するには子を用ゐるが宜い。

【附方】舊三、新六。【順氣利腸】紫蘇子、麻子仁等分を研り爛らし、水で濾して汁を取り、米と共に粥に煮て食ふ。(濟生方)【治風順氣】腸を利し、中を寛にする。紫蘇子一升を微し炒つて杵き、生絹の袋に盛つて淸酒三斗の中に三晝夜浸して少しづつ飲む。(聖惠)【一切の冷氣】紫蘇子、高良薑、橘皮等分を蜜で梧子大の丸にし、

十丸づつを空心に酒で服す。(藥性論)【風濕脚氣】方は上と同じ。【風寒濕痺】四肢攣急し、脚が腫れて地を踐み得ぬには、紫蘇子二兩を杵き碎き水(二)三升、研つて汁を取り、その汁で粳米二合を粥に煮て葱、椒、薑、豉を和して食ふ。(聖惠方)【消渴變水】これを服すれば水は小便に從つて排出する。紫蘇子を炒つて三兩、蘿蔔子を炒つて三兩を末にし、一日三回、二錢づつを桑根白皮の煎湯で服す。(聖濟總錄)【夢中失精】蘇子一升を熬り杵いて研末し、一日二回、方寸匕づつを酒で服す。(外臺秘要)【蟹の中毒】紫蘇子の煮汁を飲む。(金匱要略)【上氣欬逆】紫蘇を水に入れて研つた濾汁で粳米の粥を煮て食ふ。(簡便方)

荏(一)(別錄上品)

和名 えごま
學名 *Perilla ocymoides*, L.
科名 唇形科

【校正】菜部より此に移し入る。

【釋名】**白蘇** 音は魚(ギヨ)である。弘景曰く、この物が蘇に似てゐるから、その文字が禾邊を除いただけにしてあるさ、その故だ

(一)白井曰ク、金陵本以下重刻ヤ目錄ニ荏アッテ其ノ說ヲ缺ス、此條ハ日本稻生若水ノ增補スル所ニ係ル。

(二)大觀ニ二ニ作ル。

（三）所謂江東地方ヲ指ス。

［集解］　弘景曰く、荏は形狀が蘇のやうなもので、丈が高く大きく、白色で香氣は甚しくない。九月に採つて陰乾する。その子を研り、米に雜へて糜にして食へば甚だ美味で、氣を下し、補益の效がある。（三）東部地方ではこれを䓯と呼び、その子から油を搾つて日光で煎じ、現に帛に塗り、又は漆に和して用ゐてゐる。重油といつて服食斷穀の法にも用ゐる。

○恭曰く、荏の葉は一般に常に生で食ふ。しかしもとより蘇には及ばない。

○藏器曰く、江東では荏子を用ゐて油を作り、北部地方では大麻を用ゐて油を作る。この二種の油はいづれも物に塗る油に適したものだ。漆に和して用ゐるのは、荏を入れると強くなるからである。

○炳曰く、又、大荏といふものがある。形狀は野荏に似て丈高く、葉は小荏より倍ほど大きい。これは食用にはならないもので、一般に子を採つて大麻子でするやうに絹帛に塗る油の原料とする。小荏なるものは、その子の熟せんとするとき、一般にその角を採つて食ふ。甚だ香美なものだ。大荏の葉は食はれない。

○頌曰く、白蘇は莖が四角で葉が圓く、紫色ではないがやはり甚だ香しい。實もや

はり薬に入れる。魚蘇は茵蔯に似たもので、葉が大くして香しい。呉地方ではこれで魚を煮る。一名魚舒といひ、山石の間に生ずるものを山魚蘇といふ。休息痢、大、小便の頻數なるに效があり、乾して末にして米飮で調へて服するが效がある。

（荏）

詵曰く、蒸熟して烈日に乾せば口を開くものだ。それを舂いて中の米を取て食へばやはり代用食糧となる。

葉 氣味 【溫なり】(孟詵) 主治 【中を調へ、臭氣を去る】(別錄) 【擣いて蟲咬、及び男子の陰腫に傅ける】(藏器) 【生で擣き、醋に和して男子の陰腫を封じ、婦人は綿で裹んで膣内に納れ、三四回易へる】(孟詵) 【氣を調へ、心、肺を潤し、肌膚を長じ、顏色を益し、宿食を消し、上氣、欬嗽を止め、狐臭を去る。蛇咬に傅ける】(大明)

子(三) 氣味 【辛し、溫にして毒なし】詵曰く、多く食へば心悶を發し、少けれ

(三) 木村(康)曰く、

種子ハ約四〇%ノ脂肪油(荏油)ヲ含有ス、本油ハ主トシテオレイン酸、リノレイン酸等ノ不飽和脂肪酸ノグリセリードヨリ成リ、少量ノパルミチン酸ヲ混入ス、荏油ノ沃度數ハ二〇〇内外ニシテ從來知ラレタル植物油中最沃度價高キモノノ一ナリ荏油ハ極メテ乾燥性強ク、油紙、雨傘等ノ製造ニ用ヰラル。

文獻

木村惠吉郎—工化、七(明、三七)一二。(邦産藥植)

ば氣を破る。【主治】【咳逆。氣を下し、中を溫め、體を補す】(別錄)【嗽を止め、中を補し、精髓を塡充する】(大明)【生で食へば渴を止め、肺を潤ほす】(孟詵)

【發明】(原闕)

【附方】舊一。【男子の陰腫】上記の主治の項を見よ。【蛇虺の毒】荏の葉を杵き爛して猪脂で和し、薄くして咬傷の上に傳ける(梅師方)

水蘇(本經中品)

和名　いぬごま
學名　Stachys aspera, Michx. var
科名　脣形科

【校正】菜部より此に移し入る。

【釋名】**雞蘇**(吳普)**香蘇**(肘後)**龍腦薄荷**(日用)**芥葅**　音は祖(ソ)である。**芥苴**(いづれも別錄)時珍曰く、この草は蘇に似て好んで水の近傍に生ずるから水蘇と名ける。葉は辛く香しく、雞を煮るによいものだ。故に龍腦、香蘇、雞蘇の諸名がある。芥葅、芥苴は芥蘇と書くが正しく、これは一名稱を誤つて二稱に錄したに過ぎない。また味が芥のやうに辛いからの名でもある。宋の惠民和劑局方に龍腦

薄荷なるものがあり、專ら血病を治療するもので、元の吳瑞の日用本草に『謂ふに水蘇のことだ』とあるは必ず根據がある。周憲王の救荒本草には『薄荷、卽ち雞蘇は、（一）東平の龍腦岡に生ずるものを貝しとする。故に名けたものだ』とある。陳嘉謨の本草蒙筌には『薄荷を蘇州府の學校に種ゑて龍腦と名けた』とある。名稱の由來が俱に同じからぬのは怪しい。

（水蘇）——雞蘇——

集解　別錄に曰く、水蘇は（二）九眞の池澤に生ずる。七月に採收する。弘景曰く、方藥には用ゐぬものだ。一向判らない。九眞といへば遼遠な處で、やはり往つて實物を見るわけにも行かぬ。

時珍曰く、この蘇は低地の澤や川の附近に生ずる。苗は旋復に似て兩葉相對して生じ、大いに香ばしい。靑、齊、河間の地方では水蘇と名け、江左では薺薴と名け、（三）吳會では雞蘇といふ。陶氏が更に菜部に雞蘇なる一箇條を揭げてあるは誤だ。

（一）東平ハ漢ノ東平國、晉ニ郡トナシ、北齊ニ廢ス。宋ニ再ビ置キ、元ニ路ニ改メ、明ニ州トナス。今ノ山東省東平縣ナリ。

（二）九眞ハ、山[illegible]ノ誤ト見ユ。

（三）吳會ノ會ハ大觀ニ[illegible]ニ作ル、人名ト見ル[illegible]。[illegible]會稽、[illegible]漢ニ吳ト會稽トノ二郡ニ分ツ、因テ此ノ[illegible]

保昇曰く、葉は白薇に似て兩葉相對して生じ、花は節の間に生じて紫白色だ。味は辛くして香しい。六月莖、葉を採つて日光で乾かす。

頌曰く、水蘇は諸處にあつて、川岸やその附近に生ずる。南方地方では多くこれを菜に作る。江北には甚だ多いが食ふものとはしない。又、江左地方では雞蘇、水蘇は兩種のものだと謂つてゐる。陳藏器が謂ふ薺薴は自から別の一種のもので水蘇ではない。水蘇は葉に鴈齒があり、氣は香しくして辛く、薺薴は葉の表に稍長い毛があり、氣は臭い。又、茵蔯の註に『江南で用ゐる茵蔯は、莖、葉が都て家茵蔯に似て大きく、高さ三四尺あり、氣は極めて芬香で味が甘く辛い。俗に龍腦薄荷と名ける』とある。

宗奭曰く、水蘇は氣味が紫蘇と異つて辛くして和かでない。しかし形狀は蘇そのまゝだが表が紫でなく、また周圍の(一)槎牙が鴈齒のやうなだけである。

瑞曰く、水蘇、卽ち雞蘇は俗に龍腦薄荷と呼ぶ。

時珍曰く、水蘇、薺薴は一類の二種である。水蘇は氣が香しく、薺薴は氣が臭いだけの相違だ。水蘇は三月苗が生え、莖が四角で中が虛になり、葉は蘇葉に似てや

地ヲ吳會ト稱シ、俗ニ江蘇省吳縣城ノ地ヲ指スナリ。

(一) 槎牙ハ鋸齒ノコトナラン。

や長く、歯が密で表面が皺み、色は青く、節に對して生える。氣は甚だ烈しく辛い。六七月に蓼の穗のやうな水紅色の穗になつた花を開く。舊根からも自から生える。肥沃の地に生えたものは苗の高さ四五尺になる。

莖　葉　【氣　味】【辛し、微溫にして毒なし】【主　治】【氣を下し、穀を(五)殺し、飮食を(六)除き、口臭を辟け、邪毒を去り、惡氣を辟ける。久しく服すれば神明に通じ、身體を輕くし、老衰を防ぐ】(本經)【吐血、衄血、血崩に主效がある】(別錄)【肺痿、血痢、崩中、帶下を治す】(日華)【諸氣疾、及び脚腫に主效がある】(蘇頌)【酒に釀し、(七)淸酒、及び酒で煮た汁を常に服すれば頭風目眩を治す。また產後の中風で惡心の止まざるにこれを服するがいよいよ妙である】(孟詵)【生菜にして食へば胃間の酸水を除く】(藏器)

【發　明】　時珍曰く、雞蘇の功用は、血を理し、氣を下し、肺を淸くし、惡を辟け、穀物を消化する點に專なるものだ。故に太平和劑局方に、吐血、衄血、唾血、咳血、下血、血淋、口臭、口苦、口甜、喉腥、邪熱の諸病を治するに龍腦薄荷丸なるものがある。その方の藥は多いから此には錄せぬが、血病を治するに用ゐて確に

(五)殺シハ消化ノ意。

(六)除モ亦消化ノ意ナラン。

(七)大觀ニ淸ニ作ル。

殊效がある。

附方　舊六、新九。【漏血で死せんとするもの】雞蘇の煮汁一升を服す。（梅師方）【吐血、下血】雞蘇の莖、葉の煎汁を飲む。（梅師方）【吐血咳嗽】龍腦薄荷を焙じて研末し、米飲で一錢を服して效を取る。【衄血の止まぬもの】梅師方では、雞蘇五合、香豉二合を共に擣き、棗核ほどの大さにして鼻孔中に納れれば直ちに止まる。（聖惠方では、雞蘇二兩、防風一兩を末にし、二錢づつを溫水で服し、葉で鼻を塞ぐ。）普濟方では、龍腦薄荷、生地黃等分を末にして冷水で服す。【腦熱（一八）鼻淵】肺壅で涕多きものである。雞蘇葉、麥門冬、川芎藭、桑白皮を炒り、黃耆を炙き、甘草を炙き、生地黃を焙じて等分を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、四十丸づつを人參湯で服す。（聖濟總錄）【風熱頭痛】熱が上焦に結し、ために風氣痰厥の頭痛を惹起すのである。水蘇葉五兩、皂莢を炙き皮子を去つて三兩、芫花を醋で炒り焦して一兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、二十丸づつを食後に荊芥湯で服す。（聖惠方）【耳の俄かに聾閉せるもの】雞蘇葉を生で搗き、綿に裹んで塞ぐ。（孟詵食療）【髮を沐して香しくする】雞蘇の煮汁、或は灰に燒いて取つた淋汁で髮を洗ふ。（普濟）【頭の

（一八）鼻[illegible]

いふが、按ずるに、水蘇は葉に鴈齒があつて氣が香しく辛く、薺薴は葉が稍や長くして表に毛があり、氣は臭い。これもやはり生菜になるものだ。時珍曰く、薺薴は諸處の平地にある。葉は野蘇に似て稍や長く、毛があつて氣が臭い。山間の住民はこれを食ふが、味は甚だ佳くない。

莖葉　〔氣味〕【辛し。溫にして毒なし】〔主治〕【冷氣洩痢。生で食へば(四)胸間の酸水を除く。挼み碎いて(五)蟻瘻に傅ける】(藏器)

〔附錄〕(六)**石薺薴**　藏器曰く、味辛し、溫にして毒なし。風冷氣、瘡疥の瘙痒、痔瘻の下血に主效がある。煮汁を服する。山石の間に生ずるもので、葉は細く、花は紫で高さは一二尺ある。山間の住民がこれを用ゐる。

本草綱目草部第十四卷　終

九(大、九)三八九。古川清治、富澤善次郎—工化、二二(大、八)三八二。

(三) 木村(康)曰ク、本植物ハチモールノ一原料トシ、又石鹸香料ニ應用スベシ。

(四) 大觀ニ胸ヲ胃ニ作ル。

(五) 蟻瘻ハ一種小贅物ニテ多クハ頸項ニ發ス。

(六) 石薺薴
(和名)いぬかうじゆ
(學名)Mosla punctata, Maxim.
(科名)唇形科(唇形科)

昭和五年三月十一日印刷
昭和五年三月十五日發行

頭註國譯本草綱目（第四冊）

非賣品

監修者　白井光太郎

翻譯者　鈴木眞海
東京市日本橋區通三丁目八番地

發行者　和田利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者　木村諭吉
東京市日本橋區通三丁目八番地

刊行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一六一七

東京・日東印刷株式會社・印行